インフィニット・ストラトス-もう一人の織斑-

You・K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インフィニット・ストラトス ―もう一人の織斑―

【Ｎコード】
Ｎ０６９２Ｕ

【作者名】
Ｙｏｕ・Ｋ

【あらすじ】
織斑姉弟にはもう一人弟がいた。
彼もまたＩＳが起動できてしまった。
彼はこの世界をどう生きるのか。

ｉｆストーリーが書きたくなった作者の妄想です。
自分に文才がないことを改めて思い知らされました。小説としての形をなしていないので、それを加味した上で読んでください。

ちなみに原作を皆さんの創作でしか読んでいないため、台詞、設定等はある程度創造します。というかほとんどかな？

オリ主や一夏達に極力学園生活を味わわせます。
なので途中からただのラブコメにするかも…。
好きなんですそうゆうの。

現在前半部分修正作業中。ゆっくりやってます。

第1話（前書き）

今回は織斑姉弟との出会いです。

第1話

とある日の夕暮れ。

一人の少年？が道端で泣いていた。

彼には行く当てなどどこにもない。

ひとりぼっちだった。

誰も声をかけることもなく、通り過ぎていくだけだった。

ただただ泣いている。そんな彼に声をかけてくるひとつの影があった。

「ねぇ、きみどうしたの？なんでないてるの？」

そんな声に彼は顔をあげて答えた。

「ぼく、かえるおうちがないの。ひとりぼっちなんだ…」

消え入りそうな声で呟く。

「それならおれんちにきなよ。おなかすいたんじゃない？」

他意は全く感じられない。優しさしかない言い方だった。

「…いいの？」

優しい誘いに涙ながらに答えた。

「いいよ。いっしょにごはんたべよう？」

少年はスッと手を差し出した。

「ほんとうにいいの？」

彼は手を出しながらもまだ戸惑っている。

「いいからおいで？」

少年は彼の手を取り立たせる。

笑顔で言ってくれた声に、彼は泣き止んだ。

二人は手を繋ぎながら歩き始めた。

「ねぇ、きみのなまえは？」

少年が尋ねる。

「ぼくは、ぼくのなまえはみはる。きみは？」

つまりながらも、彼は答えた。

「おれはいちか、おりむらいちかだ。よろしくな、みはる」

その笑顔に彼は、ようやく心を許すことができた。

彼の名前は美晴。字からすれば女の子の名前。

容姿もパッと見は黒髪がきれいな女の子。しかし彼は男の子。

助けてくれた少年の名前は一夏。

彼ら二人の名前は後々、世界中に知れ渡る。

世界初の男のＩＳ操縦者として。

二人の出会いから数分。場所は織斑家。

「ただいまぁ、ちふゆねぇ」

ドアを空け大きな声で帰宅を告げる。

「おかえり一夏。おい、その後ろの女の子はどうした。まさかお前その歳で彼女を家に…」

姉と思われる女性が一夏に訪ねた。

「ちがうよちふゆねぇ。このこがかえるいえがないっていうから。それで…」

説明する声は尻すぼみになる。
多少、自分がもしかしたらいけない事をしたのではないかと不安になっていた。

「連れてきたと」

呆れながら女性は話を繋ぐ。

「…うん。…ねぇいいでしょ、かえるいえがないっていうからこのうちでいっしょに…」

一夏はすがり付き、美晴のために必死で頼み込んでいる。

「まぁ待て、一夏。この娘から話をちゃんと聞いてみないと。…さて君の名前は？」

そんな一夏を遮り、彼女は美晴に尋ねる。

「……」

その真剣な表情に美晴は声がでない。
怒られるのでは、どこかに連れていかれてしまうのではと、不安になってしまった。

「だいじょうぶだよ、ちふゆねぇはすっごくやさしいから、ね？」

一夏は美晴を励ます。

「みはる…です」

その一夏の言葉を信じ、美晴は絞り出すように声を出す。

「そうか、みはるちゃんか」

彼女は彼を女の子と認識したようだ。

「あの！その、ぼくおとこのこです。だから…」

そんな彼女に慌てながらも自分が男であると主張する。

「なっ！…そうか、男の子か。では、ちゃんは止めるか。」

驚かれたが、一応理解はしてくれたようだ。

「それではみはる。本当に帰る家がないのか？」

「…はい…」

力なく答える。

「お父さんやお母さんはどうした？」

当然の質問である。

このぐらいの歳の子。親が心配して探していても不思議ではない。

何らかの事情で家を失ったとしても、家族はいるかもしれない。

「どこにいってしまったかわかりません」

彼は悲しい事実を告げる。

「ふむ…。どうしたものかな」

腕を組み対応をどうするべきか悩んでいる。

「ねぇいいでしょ、ちふゆねぇ。いっしょにくらしても」

そんな彼女に食らいつく一夏。

「しかしだな、一夏」

諭そうとするが…。

「だめ？ちふゆねぇ」

一夏は子供の武器、涙で迫る。

「やっぱりだめですか？」

美晴も泣きそうな顔で懇願する。

ようやく見つけられたかもしれない自分を見てくれる人。今それを失いたくないのだ。

「あぁもう。二人して潤んだ目でわたしをみつめるな。そんな目をされたら仕方無くなってしまうではないか。」

ついに屈してしまう彼女。

「それじゃあ！」

一夏は笑顔を浮かべる。

「いいだろう。みはる、今日から君は私たちの家族だ。私は一夏の姉の千冬だ」

千冬は美晴に笑顔で話しかける。

「あ、ありがとうございます。ち、ちふゆおねぇちゃん？」

もじもじしながら、美晴は新しい家族の名前を呼ぶ。

「あぁ、かわいい…」

その様子に何かを刺激されたのか、千冬は美晴を抱き締める。

「あ、あの…」

美晴は突然の事態に戸惑う。

「すまなかった。つい…な。許せ」

千冬は顔を赤くし抱擁を解いた。

「いえ、あの、…もういっかいしてもらってもいいですか？」

かわいいお願いにすぐさま飛び付く。

「よし」

再び、今度は少し強く抱き締めた。

「ありがとうございます。……ぐすっ」

美晴は泣き出してしまった。

「どうしたみはる、苦しかったか？」

その様子に千冬は焦った。

さすがに子供には強すぎたのだろうか。

「…ぐすっ、いえ、あったかいなぁっておもって…」

思っても見ない答えを返された。

その涙からは家族に飢えていることが伝わってきた。

「遠慮するなよ、これから私達は家族なんだからな」

自分達に似た境遇の彼に、優しい声をかける。

彼女達姉弟もまた両親がいない。亡くしたのだ。

それから千冬は一夏を一人で育てていた。

「…ありがとう。…いちか」

千冬に感謝し、一夏を呼ぶ。

「うん？なんだ？」

首をかしげる一夏。

「これからよろしくね？」

涙と笑顔が混じった顔で言う。

「あぁよろしくな、みはる」

満面の笑みで一夏は答える。

こうしてとある日の夕暮れ、織斑姉弟にもう一人の家族ができた。

第2話（前書き）

第2話です。
これから会話に漢字入れていきます。
ちなみに原作をまともに読んだわけではありません。台詞、設定に齟齬が出ます。
今回箒が少しだけ出てきます。

第2話

「さて二人とも、明日も学校があるだろ。早く寝ろ」
今は夜の１０時。小学生には遅い時間であるため、千冬お姉ちゃんが寝るよう促す。

「「はぁい」」
声を合わせ返事をする、仲の良い兄弟。僕達はベッドへと向かう。
どこをどうしたのかわからないが、僕は学校に通うことができていた。
聞いたのは、千冬お姉ちゃんのお友達が何とかしてくれたらしいけど。
ってかしていいのか？あのお友達、なんか危ないんだよな。僕にスカートはかせようとするし。

さて一夏のおかげで僕はずいぶんと早くクラスに馴染むことができた。
篠ノ之箒ちゃんという女の子も友達になってくれた。

本当に千冬お姉ちゃんや一夏には助けられた。
…ありがとう。
おやすみ。

「美晴！置いてくぞ！」

翌朝、ランドセルを背負った一夏に急かされる。

「待ってよ一夏！」

僕も準備を整え、玄関を出る。

転校初日はみんなに物すごく驚かれた。……男だって言っただけなのに。

千冬お姉ちゃんはもう学校に行っている。

だから鍵はしっかりかけて…と。よし。…いってきます。

“僕の家”に挨拶し走り出す。

今は帰り道。

「一夏、今日も道場にいくの？」

一夏は現在篠ノ之剣道場で剣道を習っている。

「あぁ。箒と練習すると強くなれる気がするんだ」
箒ちゃんとは師範の娘であり、一夏のライバルである。
「そう。じゃ今日も僕は見学で」
と、僕はつれない答えをする。
「美晴も剣道やれよ。面白いぞ？」
一夏としては僕にもやってほしいらしい。
「ヤだよ、剣道って痛いもん。あの竹刀でパシってやられるの嫌い」
と、いつも断ってる。
「しょうがないなぁ」
一夏も半ば諦めているのだ。
「ほら一夏、着いたよ。早く着替えないと箒ちゃんが怒るよ？」
そうこうしている内に道場に到着。
ちなみに箒ちゃんは遅刻にうるさい。

「そうだな。じゃ着替えてくるから美晴は先に道場に入っててな！」
一夏は走って着替えに向かう。僕も見学が許されている。

「いってらっしゃ～い」
手を振り、僕はゆっくりと中に向かう。

練習後。
一夏と箒ちゃんは一緒に顔を洗っている。
時々箒ちゃんは一夏の方をじっと見ていたりする。
やっぱり箒ちゃんは一夏のこと好きなんだろうな。
一夏はまったく気づいてないみたいだけど。

「どう二人とも。今日の練習、充実してた？」
「おう、箒と練習するとすっげぇ楽しい」
一夏は笑顔で答える。
「わ、私もだ…」

箒ちゃんは顔が真っ赤だ。

おぉ？珍しく箒ちゃんが素直になった。いつもは「もっと真剣にやれ」とか「まぁまぁだな」とか言ってたのに。

そのまま告白しちゃえばいいのに。

「と、ところで美晴はやっぱり剣道やらないのか？」

箒ちゃんが聞いてくる。

「ん～パス。僕はどっちかと言うと本読んでる方が落ち着くし」

いつもこう言い逃げる。

「そうか。中々上手そうだと思うのだが…」

残念がる箒ちゃん。でもヤなものはヤ。

「でも美晴は避けるのは上手いんだぜ。見てろよぉ」

というと一夏は竹刀を振り回す。

「それ」　「うわ」

「そりゃ」　「なんと」

何だかんだですべて避ける。

「な、上手いだろ？」

「勿体ない。これだけ避けるのが上手ければ絶対強くなれるのに」

箒ちゃんは残念がる。

「いいの、僕はこのままで。強くなんかならなくても」

つーんと顔を背ける。

「ふーむ。勿体ない」

いつまでも残念がる。

「あ、一夏。そろそろ帰らないと夕ごはん作れなくなっちゃうよ」

空を見れば夕暮れ時。日が傾き始めている。

「そうだな、そろそろ帰るか。じゃな箒。また明日」

「あぁまた明日な。二人とも」
帰る僕達を箒ちゃんは暖かい目で見送る。

「さぁて今日は何を作るか」
家に着いた僕達は夕食の準備に取りかかる。
一夏はエプロン装着中。

「うーん、僕はお魚が食べたいかなぁ。昨日お肉だったし」
僕手洗い中。

「そうだな、今日は金目の煮付けにするか」

「やったね。一夏の美味しいんだよねぇ」
蛇口を閉めた。

「美晴も手伝うんだぞ」

エプロンを着け終わったようだ。

「はーい。じゃ僕は金目捌くから、一夏は味の決めての煮汁ね」

「ほいよー」

包丁自体は、僕が上手い。しかし味付けの細かいところは一夏の方が上だ。

「ただいま」

千冬お姉ちゃんが帰ってきたみたい。

「「おかえり千冬お姉ちゃん（姉）」」

「お、今日は魚か」

制服を脱ぎながら千冬お姉ちゃんがキッチンに入ってきた。

「うん、金目の煮付けだよ〜」

「千冬姉、先に風呂入ってきて」

一夏は、脱ぎ捨てられた制服を拾い、風呂へと促す。

「わかった」

「美晴、捌き終わったらタオルと着替え持ってって」

「了解で～す」

魚を手際よく捌きながら、答える。

食卓にて。

「ふむ、今日も良くできているな。二人は本当に料理が上手いな」

「「いぇーい」」

褒められた僕達はハイタッチを交わす。

「あ、お浸しは僕がつくったんだよ？」

僕が作った品を食べてもらいたいから、千冬お姉ちゃんへ食べるよう促す。

「これも良くできているな、すごいな。いいお嫁さんになれるぞ、美晴」

僕を褒める千冬お姉ちゃんだけど…。

「お～む～こ～さ～ん～」

お嫁さんと言う言葉に僕は引っ掛かった。

「あぁすまなかった。ついだ、つい」

わざとではないことを強調する千冬お姉ちゃん。

「僕は男の子なんですからね！」

プリプリと怒っている。

（その怒り方が女の子みたいなんだよ）

一夏は聞こえない大きさで呟く。

「なんか言った？一夏」

その小さな呟きを僕は聞き逃さなかった。

「い、いやなにも？」

必死に取り繕う一夏。

「そう？ならいいけど」

もし僕についての悪口を言ってたら承知しないところだ。

（（地獄耳か））

食後

「「「ズズーッ。ふぅ」」」

「やっぱりご飯のあとはお茶だよね。これぞ日本人」

「まぁ安いやつだけどな」

余計な一言を言う一夏。

「仕方ないだろ。新聞配達だけでは稼げないのだ」

ムスッと、そんな表情でいう千冬お姉ちゃん。

家族3人、なんとかやっていける程度。高いお茶なんか買えないんだ。

「別にそんなつもりじゃ…」

少しシュンとする一夏。

「まぁ一夏も悪気があったわけじゃないんだし、許してあげてよ」

と、かばうように言う。

「まぁ美晴がそう言うなら」

許したようだ。

（美晴にはすごく甘いよなぁ、千冬姉）

「何か言ったか？一夏」

千冬お姉ちゃんもまた地獄耳なのか。

「い、いえ何も。それより美晴、俺達も風呂に入ろうぜ」

逃げるように、風呂場へと向かう。

「そうだね、眠くなっちゃう前に入っちゃおうか」

「「じゃ、いってきます」」

支度を済ませ、風呂場へと向かう。

「あまりはしゃいでのぼせるなよ、二人とも」

よくあることなので、千冬お姉ちゃんは注意を促す。

「「は～い」」

果たして聞いているのか？と思う千冬お姉ちゃん。

お風呂場にて。

「美晴、髪長くて洗うのめんどくさくないのか？」

僕の髪を見て、浴槽から一夏が尋ねる。

「うーん、面倒だけど気に入ってるし…」
僕の髪の毛は背中中程まではある。
泡を流し終えた僕は浴槽へと入る。

「まぁ短くしてもきっと女の子に間違われるだろうなぁ、美晴なら」

「じゃ同い年の女の子とお風呂に入ってる一夏は変態さんだね」
からかう一夏に痛烈な一言を返す。

「んな！？」

「冗談だよ冗談」
人呼んで小悪魔といったところかな。

「この～」
その時浴室のドアが開いた。

「そろそろあがれ。のぼせるぞ」

長湯になると感じた千冬お姉ちゃんが見に来たのだ。

「「は～い」」

僕達は風呂から上がりパジャマへと着替える。
そして寝室へと向かう。

「おやすみ一夏」

「あぁ、おやすみ」

こうしてまた一日が過ぎていくのであった。

第2話（後書き）

いかがでしたでしょうか。

千冬さんとの年齢差は考えないでください。矛盾しちゃいますから。

第3話（前書き）

えぇと。
オリ主の容姿を決めようかと。
えむえむっ！て知ってますか？
あれの結野嵐子を浮かべていただいて、髪は背中中程の黒。目はブラウン。胸は無いですよ？今後を含めて。
現在身長は１４０センチぐらいのイメージです。
声は女の子っぽいのを想像してください。
では第３話。今回は小５の二人です。

第3話

こんにちは。美晴です。

僕達兄弟は小学5年生になりました。クラス替えもありましたが、また一夏と同じクラスのようです。

4年生の終わり、箒ちゃんがいきなり引っ越してしまいました。あのときは本当に驚きました。だって前日までそんな様子が全くなかったんですから。

みんなポカーンでしたよ。ホントに。

一夏もかなり寂しがっていました。

「最高の練習相手だったのに…」とか少しだけずれているような寂しがり方ですけど。

箒ちゃんごめんね、中々この鈍感は気づきそうにないみたい。いつか自分ではっきり伝えてもらえるかな。

多分そうしないと無理だよ、一夏には。

また会えるといいなぁ、元気かなぁ箒ちゃん。

「今日から一緒に皆さんとお勉強するお友だちを紹介します」

担任の先生がまるで低学年に話すように言う。

ん？転校生？ふーん。仲良くなれるといいなぁ。

「…凰鈴音です。中国出身です。よろしくおねがいします…」

小さめの声でしゃべりだす。

中国の人か…。だからファンリンインさんって読むのか。

面倒だから鈴ちゃんでいいかなぁ。

あとで一夏誘って話しかけてみよう。

「なんだー変な読み方ー」

「中国人かよー」

「ニィハオって言えよー」

男子にはたまにこんなことを言うグループがいるものである。

「やめろよお前ら！転校生いじめんな！」

正義感溢れる一夏はこういうことを許せない性格だ。

「そうだ！それが男のすることか！」

僕もキレた。さんざん自分も女の子みたいだといじめられてきたため、こういうのは絶対許せない。

僕達の気迫に男子達は反論できなかった。

最初の休み時間。

「凰、俺は織斑一夏だ。これからよろしくな」

「僕は織斑美晴です。よろしくね」

僕達は凰さんに話しかけた。

「……凰鈴音よ。…よろしく」

警戒しているらしい。

「うん。これから鈴ちゃんって呼んでもいいかな？」

持ち前の明るさで接する僕。

「…いいけど」

嫌ではなさそうだが、快諾とはいかない声。

「よかった！よろしくね鈴ちゃん！」

「よろしくな！鈴！」

そんなのお構いなしで、話を進めていく。

「…よろしくね一夏。…美晴。ところであの…さっきはありがとう」

「いいってことよ。それに俺ああいうやつ嫌いなんだ」

「僕も」

僕はちょっと不機嫌そうに答える。

「そういえば何で美晴は女の子なのに僕って言ってるの？」

鈴ちゃんは無意識ながら僕の地雷を踏んだ。

「あぁ実はな…」

「僕は男の子なの！た、確かに見た目は女の子っぽいのは認める…。近所の人も一夏の妹だって勘違いしてたし…。で、でも僕はちゃん

とした男の子なんだよ！」

かなりの勢いでまくし立てる。

「わ、わかったわよ。そんなに全力で言わなくても…」

鈴ちゃんも少し引いている。

「大事なことなの！」

僕にとっては極めて重要なポイントだ。男と呼ばれるために、僕なりに頑張ってるんだ。

「ごめんな、鈴。こいつ結構気にしてるんだよ。それでも女の子にしか見えないけどな」

僕を指差しながら半笑いで言う一夏。

「いーちーかー」

明らかに怒ってますという顔をする。

「わっ、よせ、ただの冗談だから、なっ」

毎回言っていれば通じなくなるもんだよ。

「今日は許さないぞー！」

「よせって！」

一夏は教室から逃げ出した。

「逃がすかー！」

逃がしてなるものか。今日という今日は！

「なんか騒がしいけど、友達か。…仲良くできるかな…」

それから数ヵ月の間、鈴ちゃんはクラスに馴染めずにいた。

それでも常に話しかけてる僕達には、笑顔を見せるようになっていた。

常に名前で呼ぶようにまで、ほぐれてきた。

ある日のやり取り。

「笑えば可愛いじゃんか、鈴」

「か、可愛い？あたしが？何言ってるのよ一夏！」

顔を赤くしてうろたえる鈴ちゃん。

「いや、本音だがな」

「なんなのよ全く！」

といいながら、まんざらでもないような顔だね。

「もう、一夏。女の子にそういうこと無意識で言っちゃダメだよ」

僕も割り込む。

（こういうことすごい自然に言うんだよなぁ。それでいて無意識だから手に負えない）

天然の一言で片付けられない男、織斑一夏。

ある日の放課後。

「さぁ鈴ちゃん帰ろっか？」

いつも一緒に帰っている僕達。
鈴ちゃんは教科書をランドセルに詰めている。

「さっさとしろよ鈴」

そんな鈴ちゃんをぶっきらぼうな言い方で急かす一夏。

「もっと優しくしてあげないと。一夏は雑だよ？」

無意識だからこそ、なのだろう。

「これが俺の地だからな」

開き直る一夏。

「用意できたわよ！」

「じゃ帰ろっか！」

3人は学校をあとにする。

家への帰り道。

「ねぇ一夏。もう道場行かないの？」

一夏は、箒ちゃんの引っ越し以降剣道をやめた。

「あぁ、箒がいないと面白くないからな」

「…そう」

僕も一夏も顔が暗くなった。

「あっ！今日のご飯の買い物忘れちゃった！」

今思い出したよ。

「えぇ！？今日は美晴の担当だろ！？」

買い物は当番制。今日は僕の番だ。

「…ごめん」

「はぁ、どうしようかなぁ」

途方にくれる一夏。

「ねっ、ねぇ」

「「ん、何？」」

鈴ちゃんの声に、僕達は振り向く。

「わ、私のうち中華料理屋なんだけど、うちで食べていかない？」

「んー。たまにはお店でっていうのもいいか。美晴はどうだ？」

「今から買い物行くのも面倒だからそれでいいよ！」

「「お世話になります」」

僕達は鈴ちゃんの提案を受け入れた。

「はい！それじゃあ、うちはこっちよ。ついてきて」

「「は～い」」

鈴ちゃんが先頭となり、一行は鈴ちゃんのお家へ。

鈴ちゃんの家。

「「お邪魔しまーす」」

「いらっしゃーい」

店主である鈴ちゃんのお父さんの声が響く。

「ただいま！お父さんお母さん！」

「おかえり鈴。…あらお友達？」

「織斑一夏です」

「織斑美晴です」

僕達は元気よく挨拶をする。

「一夏くんに美晴ちゃんね！鈴と仲良くしてあげてね？」

「「はい。もう仲良いです」」

「…あと、おばさん。僕男の子です…」

いつも通りの事だけどさ。

「そうなの？とっても可愛らしい女の子だと思ったんだけれど…。ごめんなさいね？」

気を使ってくれる鈴ちゃんのお母さん。

「いいです。もう慣れてますから…」

と言いつつ、へこむ僕。

「さて、美晴お前は何食べる？俺は酢豚にしようかな」

メニュー表を見ながら、頼む料理を選ぶ。

結構お手頃な値段のものばかり。

「じゃ僕は麻婆豆腐で」

注文を鈴ちゃんのお父さんに通す。

「あいよ！ちょっと待っとけな！」

威勢のいい声と共に、鍋を振る音が聞こえる。

「なぁ鈴は料理するのか？」

「私は…食べるのが好きだから…」

やってもお手伝い程度だろう。

「そっか。でもいつか食べてみたいなぁ鈴の作ったやつ」

「！！…わかったわ！頑張ってみる！上手になったら毎日食べてくれる？」

「ああ。期待してるぜ！」

笑顔で言う一夏。

（まーた余計なことを無意識で言うんだから…。一夏は…）

「はい、お待たせしましたー」

鈴ちゃんのお母さんが料理を運んできた。

「本格的だな。さすがにお店だな」

「うん。自分達で作るとここまできれいにはね…」

僕達も家で作りはするが、やはりプロのものには及ばない。

「それじゃ…」

「「いただきます」」

「なかなか旨いなこれ」

「一夏。こっちもいけるよ？」

「ちょっとくれ」

「いいよ？」

時々料理を交換しながら、箸はとても進んだ。

「「ごちそうさまでした」」

完食。

「おいしかった？」

「おう。鈴のお父さん上手いな」

「うん。また来ようね一夏」

「それじゃ帰るか。鈴また明日な」

「また明日ね～」

「うん。気をつけて帰るのよ一夏、美晴」

「「は～い」」

僕達は鈴ちゃんの店をあとにした。

帰り道。

「ねぇ一夏？」

「なんだ美晴？」

「千冬お姉ちゃんの分どうしようか」

「うーん。有り合わせでいいだろ」

常に在庫はあることはある。

「千冬姉も顔はいいんだから家事さえ覚えれば彼氏もできるだろうに…」

「まぁ時間がかかりそうだよね。幸せになってほしいんだけど…」

遠くを見つめる僕達。

「それまでは俺達が支えような！って言っても千冬姉には俺達が迷惑かけっぱなしだけどな」

「そうだね。でも頑張ろうよ一夏！」

「ああ！」

並んで歩く二人を夕日が照らしていた。少しだけ大人な決意をした兄弟だった。

第3話（後書き）

どうでしたか？
箒とのエピソードが前回と合わせても短いですけど。

いつか振り返る日が来るかも？

第４話（前書き）

今回２人は中１になりました。
美晴の背はあまり伸びてません。
五反田君登場します。

ゲームしまくりの彼らです。

第4話

こんにちは、美晴です。

あれから早いもので2年が過ぎました。
僕らは中学生です。制服にはまだまだ慣れてません。ネクタイ絞めるのちょっとだけ苦手です。
ちなみに最初届いた制服は僕のだけ女子用でした。
…うぅ、スカートなんてはけるか！すぐに取り替えてもらいました。
一夏や鈴ちゃんは笑ってたけど…。

新しく出来た五反田弾君って友達も、例によって例のごとく見事なリアクションで驚いてくれたし…。
改めて言います。
僕は男の子です！娘じゃありません！
お願い…信じて…。

さて、今僕と一夏、鈴ちゃんは弾君の家に来ています。

弾くんの家も定食屋さんなので、結構遅くまで遊んでもご飯にありつけます。鈴ちゃんは途中で帰しちゃうけど。女の子が遅くまでって言うのはねぇ。おじさんやおばさんに迷惑かけられないし。

今みんなでゲームをやっています。大体4人でできるやつが主です。
大分前だけど流行った対戦系のやつとか。あと鈴ちゃんがいないと

きには野球ゲームとか。地味に僕強いんですよ。一夏よりは。

「あぁ！鈴そのハメ技無し！」

一夏は鈴ちゃんにハメられていて、どんどんダメージがたまる。

「問答無用よ！勝てば良いのよ！一夏！」

「そうだよ一夏？」

僕は微笑む。

「美晴も弾のことハメまくりじゃないか！」

弾君もボコボコにされている。

「単純に技量の差だよ。ハメてなんかな～いよぉ～」

僕はしらばっくれる。

「やめろぉ！ドリルキックばっかり～！」

「何のことかな～」

弾君は場外へと叩き落とされる。

しばらくして。

「ま、負けた。お前らタッグ禁止！強すぎなんだよ！」

一夏が文句を言っている。

「そうだそうだ！」

弾君も乗っかる。

「チームワークがいいだけだよ。ねぇ？鈴ちゃん」

僕は鈴ちゃんへ話を振る。

「そうよ。一夏達よりチームワークがいいだけよ。人聞きの悪い」

鈴ちゃんもまた悪びれる様子はない。

「あぁもう止めだ止め。これはまた今度やろう」

「一夏！今度までに特訓しておこうな！」

「このままやられっぱなしじゃ気が済まないからな」

一夏達は今のままでは勝てないと判断し、次回に懸けるようだ。

「どうせまた負けるよ？僕と鈴ちゃん強いもん？」

「「ねぇ！」」

2人同時に首をかしげる。

「息あってるなお前ら」

「強さの秘訣よ」

一夏の言葉に鈴ちゃんが答える。

「「ねぇ！」」

また同時に首をかしげる。

「まぁいいや。次はこれな」
弾君が次のゲームを準備する。
「野球？でもそれだと鈴が…」
「いいわ。そろそろ遅いし、私帰るわ」
鈴ちゃんは帰り支度を始める。
「そう？じゃ一夏送ってあげてよ」
僕は鈴ちゃんを送るよう一夏に言う。
「えぇ？何で俺が？それに飯も食ってないし」
不満なようだね。
「一夏は夜、女の子を一人で帰らせるつもりなの？千冬お姉ちゃんが聞いたら怒るかもよ？」
僕ははったりを聞かせる。
「むぅ」

しかし怒りそうなのは確かなので、一夏は悩む。

「それにご飯なら僕が弾君のおじいちゃんに頼んで持ち帰れるようにしてもらうから。ね？」

僕は条件を提示する。

「わかったよ。よし、鈴帰るぞ？」

どうやら承服したようだ。

「う、うん」

「鈴ちゃん頑張ってね」

モジモジする鈴ちゃんに僕が声をかける。

「ありがと。美晴」

鈴ちゃんはウインクし、感謝の意を表す。

「ん？何がだ？」

一夏は相変わらず気付かない。

「一夏はいいの」

そんな一夏にあきれた僕は言う。

「？まぁいいか。ほら行くぞ鈴」

「待ってよ一夏」

二人は部屋を出ていった。

「ふぅ」

一息つく僕。

「美晴も大変だな。一夏や鈴に気ぃ使って」

弾君も鈴ちゃんの気持ちには気付いている。

「まぁ一夏は超鈍感だからね。少しでも何かしないと…」

「そうだな。あの鈍感は天然記念物級だな」

鈍感に振り回される苦労も分け合っている。

「ほんと。疲れるよ。おっ、カーブ狙い撃ちぃ！」

打球はスタンド一直線。

「なにぃ？！なぜ読まれたんだ？！」

弾君は驚く。

「配球が甘いよ、弾君。弾君は3球以上ストレート続けないからね。読みやすいよ」

何の事はない。弾君の配球には癖があるのだ。

「くそ～っ。こっちでもかなわないのか～」

弾君は悔しさを露にする。

「まぁ弾君も前よりは手強いよ？」

軽くあしらう。

「上から目線か。こんちくしょう」

相当悔しかったらしい。しかし意識はもう弾君には向けていない。

（鈴ちゃんうまくやったかなぁ）

織斑家。

「えぇ？！ただそのまま帰ったの？！」

帰宅した僕に衝撃の報告。

「あぁ。」

さも当然のように一夏は言う。

「鈴ちゃんと話したりした？」

僕は不安なことを質問する。

「まぁ少しな」

しかしこんな返事しか一夏はしない。

「はぁ。こりゃ鈴ちゃんも大変そうだなぁ」

友人の行く末を心配する僕。

「だから何が？」

でも何も分かってない一夏。

「もういいよ。疲れたから」

さすがに嫌になってきている。

「で、飯は？」

「焼き魚とその他もろもろ。ご飯自分でよそってね」

ぶっきらぼうに答える。

「なに怒ってるんだ？」

「べつにぃ」

不機嫌なのが顔に出てるのかな。

「まぁいいか。いただきます」

「いただきます」

鈴ちゃんも何とかしないといけないのかなぁ。押しきる前に自分から引いちゃう癖あるからなぁ。

「はぁ…」

人の面倒を見てばっかりな僕は、気苦労が耐えないのだ。

「？」

原因は目の前にいるんだけど。

ある中学1年の日のことでした。

第４話（後書き）

いかがでしたか？

４人対戦の例のやつは、大乱闘…です。

美晴はしばらくはヒロイン達を見守る側で行きます。

第5話（前書き）

えー、第5話です。

改編した結果、誘拐話を書くことができるようになりました。

まぁ適当に書いてたのが、いけないんですけどね。

今回は美晴くんが、変なスキルも含め、強いです。

それではどうぞ。

第5話

こんにちは、美晴です。

僕と一夏は今ドイツに来ています。二人だけで旅行？いえ、今回は違います。

千冬お姉ちゃんがＩＳの世界大会『モンド・グロッソ』に出場していて、決勝戦の開催国がドイツなんです。
優勝者には、ブリュンヒルデという称号が与えられるそうです。第１回優勝者である千冬お姉ちゃんにとって連覇がかかった大事な大事な試合です。
僕達は家族と言うことで招待されて来ました。

決勝は午前中から。
戦闘したりなんやかやで、優勝が決まるらしい。あんまり知らないんだ、ごめんね？

「一夏！起きて！いつまで寝てんのさ！決勝始まるよ！早く会場に行かないと！」

「う～ん、もうちょっと～」

一夏はホテルのベッドでぐずってる。確かに昨日着いたばっかりだから、時差ボケなのはわかるけど。
でも僕はちゃんと起きられたんだから。

「ほら一夏！」

僕は一夏の掛け布団を無理矢理剥ぐ。こうでもしなきゃ起きないよ。

「うぁん。ひでぇなぁ」

体を丸める一夏。

「とっとと顔洗ってきなさい！」

「ふぁ～い」

やっとか。ふらふらしてるじゃんか。そんなんでちゃんと決勝見られるの？

今僕達は会場に向かっています。まだ一夏は眠そうだけど。でもそろそろ行かないと間に合わないんだよ。

「何だ？」

僕達の前に急ブレーキを掛け、黒い車が止まった。

ん？なんだあの人達こっちに向かって…。
なんかやばい！

「一夏！逃げよう！」
僕は一夏の手を引っ張り走り出す。

「何だいきなり！」
一夏はまだよく分かってないみたい。

「僕にもよくわかんないけど後ろ見てみなよ！」
一夏が後ろを振り返る。

「何だあの黒ずくめの！」

「だからわかんないって言ったじゃん！とにかくヤバそうなのはわかったから、逃げないと！」
逃げ道を探す。路地を利用してなんとかまけないか？
くっ。町並みが整ってるから細い路地が無いじゃないか！もっと入り組んでてよ！これだから歴史あるところは！

ヤバい、向こうからも来た。
袋のネズミってやつか？

「お前ら何が目的だ！」

時間稼ぎのために黒ずくめの連中に質問する。

「……」

答えないよな、そりゃ。

黒ずくめは一夏に狙いを定め、取り囲む。

「やめろ！一夏に手を出すな！」

あぁ！一夏が気絶させられた！何とかしな…いと…。

……うーん。はっ、どこだここは。僕も気絶させられたのか。

そうだ！一夏は！

隣に居たのか。まだ気絶してる。

「一夏！おい一夏起きろ！」

「うーん。はっ！ここは？」

僕の声でようやく意識を取り戻した。

「わからないよ。ここがどこなのか、あいつらが何なのか。手足も縛られてるし、身動きの取りようがないよ」

「誘拐されたんだな、俺達」

「まぁそうなんだろうねっと…」

「何してるんだ美晴？」

「ん？縄抜け」

いろんなジャンルの本読んでたけど、サバイバルってやっぱ役に立つなぁ。

「お前いつの間にそんな技…」

という一夏をよそに、縄抜け完了。一夏のもほどいて…。
やつらがこっちに来た！気付かれたらヤバい。

（一夏、まだ気絶してるふりをして！）

（ＯＫ！）

「どうだ織斑千冬は？」

「はいっ。決勝は辞退。不戦敗扱いになりました」

「よし。これで目的は達成だ。こいつらを殺せば終わりだ」

「千冬お姉ちゃんの連覇を阻止するのが目的か！くそっ。卑怯な手を！」

僕はそのやり口に我慢できず、声を荒らげる。

「起きていたのか！うるさい、ガキがっ！」

大人しくやられるもんか！

「一夏これ持って！」
僕は近くにあった鉄パイプを一本一夏に渡す。
僕も鉄パイプを装備。
「やれんのか美晴？」
「まぁ見てなって」
僕は敵の一人に向かって突っ込む。
殴りかかってきたが、反射神経がものをいってか、紙一重で避ける。
そのまま…。
「胴ー！」
胴へと鉄パイプを打ち込む。まず一人！
「美晴すげえじゃんか！」
と、一夏も敵を切り払っていく。

「まぁ門前の小僧ってやつだよ！ただ見学してた訳じゃないよっと！」

次は、袈裟を避けられた。でも！

「秘剣！燕返し！」

相手を切り上げる。一度言ってみたかったんだよね。これで二人目！

「調子に乗るな小僧共！」

さすがに我慢ならないのか、何人かが拳銃を取り出す。

銃口が…。殺されるのか。せめて一夏だけでもなんとかしてあげたいけど…。この状況じゃ。

ごめん…。

ズゴーンッ。

部屋が揺れた。

銃声じゃない？何の音だ？

「一夏！美晴！無事か！」

「「千冬お姉ちゃん（姉）」」

そこにはＩＳに乗った千冬お姉ちゃんがいた。

「怪我はないな！」

「「うんっ」」

「何よりだ。さて、貴様ら。私の大事な弟達をよくも酷い目に遭わせてくれたな。死ぬ覚悟はできてるな！」

それからの千冬お姉ちゃんはすごかった。何人もの相手に華麗に立ち回り、全員を沈黙させた。

相手もＩＳを出してくるが、さすがにブリュンヒルデ。一切かすらせない。

圧勝だ。

「一夏！美晴！」

千冬お姉ちゃんがＩＳを解除して僕らを抱き締める。お姉ちゃんも涙目だ。

「千冬姉、…決勝は？」

一夏も涙声で訪ねる。

「そんなものどうでもいい。棄権してきた」

やつらが言ってたのは本当だったようだ。

「ご…ごめんね？ひっく…僕達のせいで…」

僕の涙腺も決壊寸前。

「何を言うか。家族すら守れないものに世界最強を名乗る資格はない…。今はとにかくお前達が無事だった。只それだけでいい」

その優しい笑顔に、僕達の涙のダムは決壊した。

「「うわーん…。ごめんねごめんね！」」

「いいんだ、いいんだ」

優しく僕達の頭を撫でてくれる千冬お姉ちゃん。

このとき僕は、大事な人を守る強さが欲しい。“守る”強さが。

そう強く思った。

後から聞いた話だけど、首謀者は不明。手掛かりになりそうなものも特にはなかったそうだ。

千冬お姉ちゃんが僕達の居場所がわかったのは、ドイツの軍が情報をくれたからだそうだ。

その見返りとして、千冬お姉ちゃんは1年半ほど、ドイツ軍にて教官を務めることになった。

第5話（後書き）

“守る”。これが大事です。

美晴くんはこれからは、なにかを守るときに驚異的な強さを発揮します。

原作では、一夏の役割ですけど。

あと今回から第3者視点のナレーション方式を採用しません。

私の脳内では、ずーっとキートン山田さんが読んでるんです。

何か嫌なので、基本美晴に担当させます。

○○ＳＩＤＥとかも検討します。

第6話（前書き）

えー前話では美晴の名前が美春になっていました。すぐに直しました。
すみません。

さて今回美晴達は、3年生。進路に悩みます。

第6話

こんにちは、美晴です。

あの事件からしばらくたって、今は中学3年生になりました。だからといってあまり変わったことは…。
あるんですけどね。

2年の終わり、鈴ちゃんが中国に帰っちゃいました。何があったかはよく聞いてないんですけどね。

寂しくなります。良い子だったんですけどね。
一夏も寂しがってました。
箒ちゃんといい、鈴ちゃんといい、出会いがあれば別れがあるとはいえ、寂しさになれることはできません。

さて今年は3年生ですから、そろそろ進路について考えようかと。
就職かな。お金稼いで千冬お姉ちゃんに楽させてあげたいし。

夜。織斑家。
千冬お姉ちゃんが家にいます。
つい最近ドイツから帰ってきました。
今は仕事に通っています。忙しいのかわからないけど、泊まりの日が結構多いです。

「お前ら進路はどうするつもりだ？」

3年生ということもあって、さすがに心配みたいだね。

「美晴と一緒に考えたんだけど、このまま就職しようかなぁって」

「うん。いつまでも千冬お姉ちゃんに迷惑かけたくないし」

一夏も就職に賛成してくれたんだ。だから二人で同じところにって思ってる。

ダンッ！

テーブルの上のコップが倒れそうになるぐらい強く叩かれた。

「馬鹿者ぉ！何が迷惑か！高校へ行け！これは命令だ！」

千冬お姉ちゃんは強い口調で怒ってきた。

「「で、でも…」」

僕達は気迫に押されてどもってしまう。

「ふぅ。すまない。」

一つ息を吐き、怖い顔から普段の顔へ。

「しかしな。私達は家族だ。姉弟だ。迷惑だからと、そんな理由でお前達の将来を閉ざしたくはない。まかせろ。2人分の学費ぐらい私がなんとかしてやる。とにかく高校へ行け！」

ありがとう。
とにかくありがとう。
これ以外の言葉が見つけられないや。

「「千冬お姉ちゃん（姉）」」

「「…うわ～ん」」

僕達は抱きついて思わず泣いていた。泣いてばっかりだな、最近。

「よしよし。…ただししっかり勉強するんだ。浪人は許さん」

千冬お姉ちゃんは僕たちを撫でながら、かつしっかりと釘を刺してくる。

「僕は大丈夫」

自信はある。

「俺は約束できな…」

一夏は成績悪いからなぁ。授業中に寝てばっかりだから。

「しろ！」

ほら怒られた。

「はい…」

こうして僕らは高校へ行くことになりました。

ある日の昼休み。

「なぁ」

弾君が話しかけてきた。

「なぁに弾君」

「お前ら進路どうするの？」

「あぁそのことか。俺達は藍越にしようかと」

一夏が答えてくれた。

「なんで？」

「うん。もともと就職しようかって考えてたんだけど、千冬お姉ちゃんが高校へ行けって。だからせめて就職率の高い藍越にって、一夏と決めたんだ」

「受かるのか？」

「僕はA判定」

「俺はD判定…」

そうなの？もう少し良いもんだと思ってたのに。これは特訓させないとダメかな？

「そっか…。一夏、頑張れよ！」

一夏の肩をつかみながら弾君が言う。

「おう！」

返事だけはいいね。

「いざとなったら僕が勉強教えるから！」

腕が鳴るよ～。

「えぇ～？」

一夏は不満なの？

「なんだよ一夏」

弾君も不思議がってるじゃないか。

「だって美晴の教え方超スパルタなんだもん。怒るし。叩くし。飯抜きとか言うし。しまいにはイスに縛り付けてまで…」

「一夏が理解しようとしないからでしょ！」

やり過ぎとか思わないでね、みなさん。一夏はすぐベッドに逃げ込むんだよ。

「でもなぁ…」

「まぁなんだ。とにかく頑張れよ、お前ら」
励ましてくれるんだね、サンキュ弾君。

「おう！」

「うん！」

そして受験当日…。

「ねぇ一夏？本当にこっちであってるの？」
今建物の中を走っています。

「大丈夫だ。俺の勘がそう告げている」

「勘なのぉ？」

正直に言います。試験会場がわかりません。なんか直前に変更になったから、下見に行ったときと全然違う場所でやることになりまして…。
ただいま迷子です。

「ほらっ！それっぽい場所についたぞ！」

「ぽいって…。不安だなぁ」

確かに受付とは張ってあるけど。

ガチャ。

「あのぉ…」

ドアを開けて中を確認する。

「受験の子？ちょっと準備があるからそこで待っててくれるかしら」

試験官みたいな人が背中を向けたまま出ていってしまった。

「はぁ」

「ねぇやっぱり間違ってたんじゃない？なんかこの部屋暗いし…」
普通試験会場って、明るくて机が並んでて、受験生でごった返してて。そんなじゃないのかな。
「でも待っててって言われたんだし、合ってんじゃねぇの？」
「楽観的だねぇ一夏は…」
「まぁこれが俺の持ち味だからな！」
「胸張って言うことかなぁ…」
「…おい美晴。あそこ見てみろよ！」
部屋の真ん中を一夏が指差してる。
「ん～何？」
一夏の指先をよく見てみると…。
「あっ！あれって…」

「ＩＳ…？だよな…」

「たぶんそうだね。千冬お姉ちゃんが乗ってたのに似てる…」

「よし。誰もいないし触ってみようぜ？」

「えぇ？怒られない？」

「大丈夫だって！誰もいないし！」

「そういう問題なのかなぁ…」

でも滅多に触れないしな。いいか。

「よっ」

「よしっ」

手を付けてみる。

ブン…。

何の音かな？

「ねぇ一夏？」

「何だ？」

「なんか変な感じしない？」

違和感がさっきから。

「お前もか。なんかこういっぱい頭の中になんか入ってくるような…」

一夏もそうみたい。

「これの動かし方とかそんな感じ？」

「あぁ…」

「ん？」

「うわぁっ！」

光に取り込まれるような感覚が僕たちを襲う。

「美晴…」

「一夏…」

「どうしよう」

「動かせちゃった…」

顔を見合わせる僕達は、ＩＳに乗っています。

バン！
ドアが開いたらしい…。

「何やってるのあなた達！勝手に…」

女性が怒ってる。

「あれ？あなた男？な、何でＩＳが起動してるの？」

男がＩＳを動かす。それはおかしなこと。
ＩＳは女性にしか動かせない。

だから今の世界は女尊男卑だ。それがまかりとおっている。
ＩＳは女性にしか動かせない。
…はずだった。今日この時までは。

「正確にはあなた…達ですけどね」
それはさておき、僕も男であることを指摘しないと。
「えぇ？あなたも男なの？そんな女の子みたいな顔で？」
「そっちに驚かないでくださいよぉ…。泣きたくなっちゃいますぅ…」
彼女は驚くポイントが間違ってる！
「とにかく降りなさい！」
といわれてもねぇ。
「「降り方を教えてください」」
知らないんだよ、何せ今日が初めてなんだから。

「仕方ないわね。ほら！」

僕達は手伝ってもらいながら、ＩＳから降りる。

その日僕たちは世界で初の男性ＩＳ操縦者になった。

あのぉ、なぜ僕だけお姫さまだっこなのでしょうか…。

第６話（後書き）

美晴達は、起動させてしまいましたね。

ＩＳは専用機でないと、いつの間に装着、ということは無いみたいですが、不思議さを持たせるためにそうしました。

第7話（前書き）

美晴達が入学試験に挑みます。

初めての戦闘シーンです。上手く描けないです。

ミハちゃん（作者はこれからこう呼びます）はどんな結果でしょうか？

一夏は原作通りです。

第7話

こんにちは、美晴です。

あの日から僕たちは、マスコミに追い回され、各国の変な人たちに追い回され、挙げ句、ＩＳ学園に入学が決まり、教員に“拉致”され…、今はアリーナと呼ばれる場所にいます。
どうやら今回は入学試験との事です。
っていっても何をすればいいのか。

「「ふぅ…」」

どうやら一夏も疲れているみたいです。

「よぉ二人とも。元気を出せ」

ん？なんか千冬お姉ちゃんみたいな声が…。
ゆっくり後ろを振り返る。

「？どうした、美晴、一夏？」

「ほ、ホントに千冬お姉ちゃんだ」

「何を言ってるんだよ、美晴。千冬姉はＯＬって聞いて…」

でも居るんだよ目の前に。

「おわっ！ホントに千冬姉だ！」

一夏もすごく驚いてる。

「「何でここに」」

ハモっちゃった。

「ん？私はここの教員だからな」

さも当然のように、言い放つ千冬お姉ちゃん。

「「そんなの聞いてないよ（ぞ）」」

「まぁ言ってなかったからな」

それでいいのか、ホントに。

「ところでお前らにはこれから試験を受けてもらう」

試験か…。ダメならどうなるんだろ。

「あの…、どんな試験なの？」

「あぁ、ＩＳに乗って試験官と模擬戦をしてもらう」

「「えぇっ！」」

「そんなこといきなり言われても…」

「そうだぜ、俺たちはあのときしかＩＳに触ってないんだぞ？」

模擬戦なんて勝てないよ。

「まぁ別に成果そのものは期待しない。そもそもするだけ無駄だ」

「「それはそれで…」」

ちょっとは暖かいお言葉を…。

「とにかく、とっとと試験を受けてこい！」

「仕方ない…。行こう一夏」

「そうだな。とにかく早く終わらせちまおう」

僕らは諦めて歩き出す。

「試験については担当の先生によく聞くんだぞ！」

後ろから千冬お姉ちゃんが大声で注意してくる。

「「はい…」」

子供じゃないんだから。

アリーナにて。

「それではまずこのＩＳスーツに着替えてきてください。着替えは更衣室で行ってください。あちらの奥にありますから」

「「はい」」

担当の先生からスーツを受けとり、更衣室へと向かう。

更衣室にて。

「まったく驚いたよなぁ、千冬姉がここの先生だったなんて」

一夏が話しかけてくる。

「そうだね。何も聞いてなかったからね」

「なんかこのスーツぴったりしてるな」

ウエットスーツみたいな感じだ。

「ねぇ一夏？」

「なんだ？」

「なんで一夏と僕のスーツ形が違うんだろう…」

何だか僕のは一夏と形が違う。

「あれか？ひょっとして女物渡されたんじゃ…」

「うぅ…。毎回毎回こんな目に…」

まさかの（なのだろうか最近自分でも何だか…）事態に涙が溢れそう。

「うぅ…。せんせーい！！」

「…はいなんでしょう」

外から声を出す先生。

「何で入ってこないんだ？」

「着替えてるのが男の子だからじゃないかな。それよりも！」

僕にとってそれは二の次。とにかく…。

「先生！男物のＩＳスーツをください！僕は男の子なんです！」

僕は先生の目の前で、事実を告げる。

「えぇ！そうなんですか？すみません、つい女の子だとばっかり…」

ペコペコと先生は頭を下げて謝ってくる。

「扱いそのものには慣れてきてますけど…。これはひどいですよぉ。ぐすん」

「…可愛い…」

ん？

「じゃなかった。すみません、すぐ持ってきます。待っててください」

早めでお願いします。

「美晴は大変だな」

「驚かれるのは慣れてきたけど、服はせめて…」

「それよりも泣くなよ」

「一夏も味わえばいいんだ、まったく」

不公平だ。

「ごめんなさい、お待たせしました。これです」

「ありがとうございます」

「それでは着替え終わったら教えてください」

「「はい」」

ということで今僕たちはＩＳに乗っています。

「よし二人とも乗り込んだな。それでは試験開始だ。先に一夏からな」

「よっし」

「頑張ってねぇ、一夏」

学園の訓練機に乗って一夏はカタパルトから発進した。

あ、落ちた。

あ、大丈夫みたい。

さて試験はどんなのだろう。

ちなみに一夏が乗っているのは打鉄。
国産のＩＳで、近接戦闘向きらしい。

僕はラファール・リヴァイヴ。
フランス産のＩＳで全距離対応らしい。
まぁ羽がついてるから選んだだけだけど。

さて試験はっと。

あ、いきなり試験官が突っ込んだ。

あ、一夏避けた。

ゴンッ…。

鈍い音がしたなぁ。どうやら試験官は止まれずに壁に突っ込んだみたい。
これで終わりか。一夏、楽そうでいいなぁ。

「おかえり、一夏。なんか早く終わったね」

「なんかこれでいいのかなって気もするよ」

「とにかく動かせるかどうかを見るだけだからな。これでいいだろう」

「そんなもんなのか？」

じゃ僕も楽かな。

「とにかく次は美晴だ。行ってこい」

「はい。…あっ、千冬お姉ちゃん。飛ぶ時ってどうすればいいの？」

よくわかんないなぁ、まだ。

「飛べと思えば飛ぶ」

「そんなテキト～な…」

これ以上は無駄かな。

「まぁいいや。いってきます」

「おう。頑張れよ美晴」

カタパルトに足を置く。

なんか掛け声ないかなぁ。

どっかで見たあのアニメ真似ようかな。

「織斑美晴、ラファール、行きます！」

カタパルトによって射出され、空中へ。

「わわっ！飛べと思えって言われても安定しないなぁ！」

「よっ、こいしょ」

思念を強くする。

「ふう、安定した」

―それでは試験を始めます―

試験官の人、優しくしてくれるといいなぁ…って！何で！何で僕の時は撃ってくるのさぁ！

「わっ、ちょっと、待って、くださいよ、初めて、なんですか、らぁ！」

ジグサグに回避をする僕。
やりづらいとか言ってられない！

管制室。

「あいつは泣きながらほぼ全弾避けているな」

「美晴、回避だけは生身でも天才的なんだよ。まさかここで活きるとはなぁ」

「あいつは強くなりそうだな」

「う〜ん、どうかな。美晴攻撃するってことしないからなぁ」

「確かに先程から避けてばかりで攻撃しないな」

「もう、やめ、て、くだ、さい、よぉ」

回避に専念するしかないでしょ。Gもそれなりに感じる。

「埒が明かん。仕方ない」

「美晴。攻撃を仕掛けろ。これは命令だ」

千冬お姉ちゃんがマイクで命令してくる。

「そんな、こと、いわれ、てもぉ」

「体当たりでもなんでもいい！とにかく攻撃しろ！」

横暴だ。こんなの。一夏は何もしてないじゃないか。

「体、当たり、って…。なにか、武器、無い、のぉ？」

データを呼び出す。

う～ん。あ、ライフルって書いてある。まぁいいやこれで。

「よっと」

僕はライフルを呼び出す。

傷つけるのって好きじゃないんだけどなぁ。…平和主義なのに。

まぁ千冬お姉ちゃんに嫌われるのも嫌だし、やるしかないか。

「いきますよぉ！」
ばらまけば当たるか？
…なかなか当たらない。反動があるから難しいなぁ。
でも…。ゲームと同じ感覚で…。
今だっ！
バシュッ！
「あ、当たった？」
よーし、この調子で！とにかく早く終わらせたいから！
「何だか急に当て始めたな美晴は」
「美晴、ゲームかなんかだと思い込んでるんじゃないかな？千冬姉は知らないだろうけど、あいつかなりゲーム上手いんだよ。シューティング好きだし」
「妙な技術が役立つのだな。侮れん」

―シールドエネルギーエンプティ。勝者、受験生―

ふっ、ふぅ。やっと終わった。

「よくやった、美晴。降りてこい」

マイクの向こうの声は柔らかい。

「疲れたよ～」

僕はデッキに着陸する。

「すげぇじゃんか美晴。試験官倒して」

一夏が駆け寄ってくる。

「一夏だって倒したじゃん」

「まぁそうだけど。美晴の方がすげぇぞ」

「ははっ。いきなり撃たれてホントに焦ったよ。なんとかなったけど」

乾いた笑いしか出ない。

「なぁ、途中でライフル当てるようになったのってやっぱり、ゲームだと思ってか？」

よく気付いたね一夏。

「でなきゃ、あんなの精神的にきついよ」

「そんなので勝てるなんて美晴、お前はすごいな」

千冬お姉ちゃん。
褒めてるのかな、これ。

「ありがとう。でも千冬お姉ちゃんに嫌われたくないから頑張ったんだよ？」

「嫌うものか。まぁ、なんだ、その、よくやった。えらいな」

千冬お姉ちゃんに頭を撫で撫でされる。

「えへへ～。うれし～な～」

「あの、織斑先生？」

後ろからさっきの先生が声をかけてきた。

「あっ、あぁ。すまない。それでは織斑一夏、織斑美晴。2人は晴れて入学だ。明日の入学式にはこの制服で…」

「…千冬お姉ちゃん？」

ちょっといいですかね？

「なんだ、美晴？」

「これ、どっからどう見てもスカートなんですけど…」

渡された制服を指差す。

「あっ、すまない。つい、な」

「千冬お姉ちゃんまで僕の事…」

身内にまでやられたらもう…。

「な、泣くな。悪かったから、謝るから、なっ？」

結構慌ててる。武器になるかな。

「むぅ…」

（あの織斑先生がタジタジ…。珍しい。まぁ可愛いですしね。美晴ちゃん）

「むっ、先生今美晴ちゃんって言いました？」

「いっ、いえ。美晴君ですよ？」

（何で聞こえたのかな）

こうして織斑兄弟は、ＩＳ学園入学を果たした。

第7話（後書き）

ミハちゃん、勝たせました。
対戦相手は、山田先生ではない方です。

とうとう身内である千冬さんまで、ミハちゃんに女装をさせようと…。

ちなみに今のミハちゃん。
身長１５０．５ｃｍ。体重は３５キロ程と言うことで。

無駄毛はないです。つるっつるっ。

次回は初日の朝を描きます。

第8話（前書き）

遅くなりました、第8話です。

今回から何話かミハちゃん達の入学初日を描きます。

状況が分かりやすくなるよう書きを増やしてみました。
まだ読みにくいかもしれませんが、これが作者の限界です。

ではどうぞ。

第8話

こんにちは、美晴です。
ん、おはようかな？今、朝だし。
まあいいや。
とにもかくにも、僕達は今日からＩＳ学園に入学することになりました。

「一夏、遅いよ？」

今はバス停に向かって走っています。

「仕方ないだろ、昨日のせいで、疲れてたんだから」

寝癖のある一夏が言い訳をする。

「それにしてもギリギリまで寝過ぎだよ？今日が初登校なんだから、少し余裕持ってかないと遅れるかも知れないんだから」

たぶんこのままだと、ギリギリの時間になりそうだな。

「だから謝ってるだろ。それよりバス来たぞ！」

「あっホントだ」

駅に向かうバスに乗り込む僕達。

ＩＳ学園は、ＩＳ操縦者や整備士などを育成するため設立された学校だそうです。なんかどこの国からも中立で、世界中から生徒が集められるらしいんです。

ここからはモノレールで…。

また変な人が来ないようになのか島に建てられていて、入る手段は海からか、今僕達が乗っているモノレールぐらいらしいんです。

だから乗り換えをミスすることはないだろうけど、乗りそびれると言うことは非常に不味いことになってしまうわけで…。

なのに僕の隣に居るこのバカ（おっと、汚い言葉）は、初日から寝坊して。結局ギリギリの電車に乗ることになっちゃったんです。先が思いやられるよ…。

学園内の講堂。

「……というわけで君たちは当学園の生徒として……」

何とか間に合いました。

今は講堂で入学式が行われています。
どこであっても、こういう校長とかの挨拶って長いもんですね。
もう３０分ぐらいしゃべってるんじゃない？あの人。夏なら何人か倒れてもおかしくないな。

「ふぁあ」

隣に居るバカ（もういいやしばらくこれでも）はとうとうあくびをし始めています。
まぁ確かに眠くなってくるぐらい長いけど…。

学園１階掲示板前。
クラス分けが発表されてる。

「一夏よかったね。同じクラスみたいだよ？」

「あぁ、今回は本当によかったと心から思う。この環境でバラバラは…。たぶん俺自殺しかねない」

と、一夏は首をくくる真似をする。

「物騒なことを…」

「まぁ行くとするか、教室へ！」

「そうだね」

僕達は自分達の教室へと向かう。

1年1組はどこかなぁっと。

「ここみたいだね一夏」

「席はどうしたらいいんだ？」

「よく見ると机に名前が張ってあるから、それぞれそこに座るんじゃないかな？」

「げっ。俺ど真ん中の一番前かよ。普通『お』なら教室の端だろ。何で真ん中に…」

「目ぇ付けられてるんじゃない？寝ないように」

千冬お姉ちゃんが情報流したのかな？

「先生の警戒をかいくぐって寝るのが幸せなのに…」

肩を落とす一夏。

そんなに寝たいんだ…。

「いいじゃない。これがチャンスだと思って、しっかり勉強しなさい」

ポン、と一夏の肩を叩く。

「くそぉ…」

「あっ、先生来たみたいだよ？早く席について」

「はぁ…」

一夏はトボトボと席へと向かってる。

僕は一夏のすぐ後ろの席です。

ということで、先生が学園の紹介を始めています。全寮制になっているそうです。僕達はしばらく自宅からしいけど。
それにしても…。
どうみても同年代の女の子みたい…。胸以外は…。
すごいの一言に尽きる。先生はそんな母性の持ち主のようです。

「先生の名前は山田真耶です。これから1年間、よろしくおねがいしますね、みなさん」

「「「……」」」

今この状況はしーんという表現が一番似合うのかな？
あ、先生涙目になってきてる。なんかかわいそうだから…。

「はい。よろしくお願いします、先生！」
僕は元気に声をかける。
こんなんでいいか。
「よ、よろしくお願いしますね！」

目に見えて元気を取り戻した山田先生。……単純な人だ。

「それでは自己紹介を出席番号順でお願いします」

立ち直った先生が、自己紹介を促す。

「私は相川…」

僕は『お』だからちょっと先かな。

「次。織斑一夏くん」

「…？…織斑君？」

ん？一夏どうしたんだ？

「織斑君！」

（呼んでるよ一夏！）

ツンと背中をつつく。

「わっ！なんだ？」

意識飛んでたのね。

「あ、えと、大きな声出しちゃってごめんね？もしかして怒ってる？あの、今自己紹介をしてもらってて…。次は織斑君なんだけど、してもらってもいいかな？やっぱりだめかな？」

うるうるした目であたふたする山田先生。

（先生泣かせちゃダメだよ一夏！）

「い、いえ。怒ってないです。します。しますから、そんな泣かないでください…」

一夏も慌ててる。

「ほ、ホント？よかったぁ。それじゃあお願いします！」

「えと、織斑一夏です…」

ん？それだけ？女子の目線も集中してるのに？

「…以上です」

ガタタッ。
あ、みんなこけた。どっかのお笑い芸人並みにきれいにいった。どっかの養成所出てるんじゃないかな、みんな。

スパーン。
一夏は後ろから来た千冬お姉ちゃんに出席簿で叩かれてる。

「痛っ。誰だよ一体…げっ、関羽？」

スパーン！

「誰が美髯公か！」

連チャンで叩かれる一夏。

「そうだよ。生活から言うと、張飛だよ」

酒飲みだし、ぐうたらだし、手がすぐ出るし。

パシン。
あれ？僕のは音が軽い？

「お前も余計なことを言うな」

「さ、差別すんなよ千冬姉！音が明らかに違…」

ガツンッ！

「ここでは織斑先生と呼べ」

今度は拳骨。

（一夏の頭から煙が…。どんだけのエネルギーがあの拳に…）

誰も逆らうまい、この状況を見た以上は。

「お前は自己紹介も満足に出来んのか。まったく。織斑美晴、次はお前だ」

「はい。えと、僕は織斑美晴です。趣味は読書とゲームです。よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げる。

「僕っ娘かぁ。可愛いよねぇ」

「萌え要素押さえてるよね」

ん？
なんか勘違いされてるのかな？
制服は男子用にしてもらったけど…。

「あの、みなさん勘違いされてるようですけど、僕は一夏の弟で、男の子ですっ！」

堂々と宣言。だって僕男だもん。

「キ……」

キ？

「「「キャーッ！！」」」

うわっ何だ、この拡声器使ってませんかみたいな大声は？

（一夏気絶してるし）

「ワイルドな一夏くんと一緒にカワイイ系の弟くんまで！」

「地球に生まれてよかったー！！」

世界陸上か！

「お母さんありがとう！今年は誕生日ちゃんと祝ってあげる！」
それはちゃんと毎年してあげようよ…。

「後ろから襲えばたぶん…」
あの人危ない…。

「織斑先生の弟かぁ。ＩＳが動かせるの関係あるのかなぁ」
うーん。一夏はそうなのかもしれないけど、僕はどうなのかな。血という点ではねぇ。

「静かにせんか！」
しーん。
すごいな千冬お姉ちゃん。

「まったく…。すまなかったな、山田先生。バカどもの相手をさせてしまって。」

「いえ。副担任として当然ですから。織斑先生、会議の方は？」

「あぁ、終わったよ。大丈夫だ」

お姉ちゃんは教壇へ向かって歩いていく。

「さて、諸君。私が担任の織斑千冬だ。私の仕事はお前達新人を1年でまともな操縦者に育てることだ。いいかお前達。私の言葉はよく聞き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。逆らってもいいが、私の言うことは聞け！いいな！」

独裁者みたい…。

「「「キャーッ！！」」」

またか。

「本物よ！本物の千冬さんよ！」

「私ファンなんです！北九州から来たんです！」

遠路はるばるご苦労様です。

「私を叱って！罵って！」

プレイなのか？本気か？

「そして付け上がらないように躾して！」
やっぱり危ないな、あの人…。

「うるさいわ！」
しーん。
千冬お姉ちゃんの怒鳴り声で、教室は水を打ったように静かになる。

「まったく毎年毎年私のクラスにはバカしか集まらんのか。それともあれか？意図的に集められてるとでも？」
額に手を当てて首を振っている。
たぶん後者が当たりかな。

「まぁいい。諸君にはＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。また実習にて基本動作を半月で体に染み込ませろ。いいな。よければ返事しろ。よくなくても返事しろ。私の言うことには返事しろ。わかったか！」
…軍隊みたい。

「「「イェッサー」」」
みんなまで…。

はぁ…。

ＨＲが終わるとすぐ授業。１限も無駄にする気はないらしい。

授業で気をまぎらわそう。

第8話（後書き）

まだ1限目も終了してません。

初日はこの話を含め4話連続になる予定です。

次回は幼馴染みのあの娘が出る予定です。

第9話（前書き）

今回ミハちゃん達はあの幼馴染みに再会します。

その後の授業風景も合わせてどうぞ。

第9話

こんにちは、美晴です。

今は1限が終わったところです。

「どう？一夏。やってけそう？」

ぐてっとしてる一夏に聞いてみる。

「視線にさえ耐えれば何とか…な」

しぼんでるよ、声。

「僕も一部に恐怖を感じてるよ…」

実際、明らかにヤバイ目線と呼吸音が向けられている。

「「はぁ…」」

この先を考えた僕達はうなだれる。

「ちょっといいか？」

「「ん？」」
突然横から声がかけられた。その方向に振り向く僕達。
「あの…だな…」
どっかで見た顔だな。あ、もしかして…。
「「箒（ちゃん）？」」
箒ちゃんもこの学園に…。今まで気づかなかった。
「ここではなんだし…。屋上に…」
場所を変えようとする箒ちゃん。
「いいぞ。行こう」
一夏は立ち上がるが…。
「僕は後でいいよ。二人でいってらっしゃい」
見た感じ、話したい相手は一夏のようだ。
ここで邪魔するような真似はしない。気持ちを知っているから。

「そうか？じゃ、いくぞ箒」

「あっ、あぁ」

二人は教室を出て、屋上へと向かう。

いってらっしゃーい。

…で終わらせるわけ無いよ。こっそり後をつけて…。

屋上。

僕は二人から見えないようにドアに隠れてます。

二人は向かい合っている。

「……」

「……」

何にも喋らないね。まぁ久しぶりだしね。

「……」

「……」

早くしないと休み時間終わっちゃうよ？15分しかないんだから。

「あー、何だその。久しぶりだな、箒。でもすぐ箒だってわかったよ」

「な、何でだ？」

「まぁ髪型も変わってないし。それに忘れるわけ無いだろ。俺の…」

俺の？

「幼馴染みなんだからな！」

やっぱりそんなものか。

箒ちゃんもぬか喜びか。

「リボンも俺があげたやつだな」

「あぁ、これか…。私にとっては大事だからな」

リボンか。

そういえば昔小学生の時、リボンをつけてきた箒ちゃんが男女っていじめられてたんだよな。そのいじめ相手を一夏が殴り飛ばしたんだっけ。
で、もう着けないって言う箒ちゃんに、お前は似合う。だから着けろって言って一夏が買ってあげたんだ。

「……」

「……」

再び訪れた沈黙。

「…それにしても箒。剣道で全国優勝したんだってな？」

沈黙に耐えかねた一夏が話を振った。

「何でそれを！」

顔真っ赤じゃん。

「いやぁ、新聞で見たから」

「なぜ新聞なんか読んでる！」

テンパってるからって無茶言うなぁ、箒ちゃん。まぁ僕が受験勉強のために無理矢理読ませてたんだけど。

「美晴に読まされてたんだよ。そしたら箒の名前を見つけてな。思わず嬉しくなったよ」

「そうか…。嬉しかったのか…」

胸の前でくるくると指をこねる箒ちゃん。

「とにかくこれから3年間か。よろしくな箒！」

「あっ！あぁ！」

「じゃそろそろ予鈴がなるし戻るか」

「そうだな」

ん？こっちに来た。そうだね、そろそろ休み時間終わるしね。じゃ一夏をやり過ごして…。

屋上への階段の踊り場。

「箒ちゃん！」

トン、と肩を叩く。

「み、美晴！見てたのか？」

そんな僕に箒ちゃんはバツの悪そうな顔をして答える。

「まぁね。それより箒ちゃん。恥ずかしいのもわかるけど、ちゃんと話さないとあの鈍感一夏に気持ち伝わらないよ？」

「いつから気づいていた！？」

おお、おお。見るからに慌ててる。

「小学生の時から」

「たまに一夏のことジーッと見てたでしょ。僕はさすがにわかるよ」

バレバレなんだよね。一夏は気づかないけど。

「一夏には言うなよ！」

「そんな真似はしないよ。見守るだけにするから。だから頑張ってね、箒ちゃん！」

応援しますよ。影ながら。

さて、今は2限の授業中です。

ＩＳについての基礎知識について、山田先生が講義しています。

ＩＳは元々は人類の宇宙進出を想定して作られたマルチフォームドスーツだったんだけど、当初は一笑に付されていた。

ある日、白騎士事件が発生。日本上空に大量のミサイルが向かっていた。

何者かにハッキングされ、勝手に飛んでいったらしい。

それを一機のＩＳが殲滅。

それを境に兵器として注目され、軍事バランスを根底から覆すようなものだったから、各国は飛行パワードスーツとして兵器に転用。

開発者である篠ノ之博士はそれをよしとせず、４６７個の時点でコアの開発を拒否。行方をくらました。今でも、技術が欲しい各国によって狙われている。

それ以降ＩＳの取り扱いに関する条約が制定されて、今ではスポーツ的なものになっている。

とはいえ、国にしてみれば自国の技術、また兵力をアピールする絶好の物。こぞって最新型を開発している。

最新は第3世代らしい。

今までＩＳを動かせるのは女性だけだった。
だから法律は女性優遇だし、世間も女性が優位にたつ風潮になった。
乗らない女性も高慢な態度を取ってたりする。
そんな常識をぶち壊してしまったのが僕達。

ＩＳは兵器だから、基礎理論から、細かい取り扱いの規約まですごい量を学ばなければならない。あの入学前にもらった参考書軽く１０００ページはあったよなぁ。読書が趣味だったから何とかなったけど。
さて一夏はどうかな？

あれ、死んでる？

「…さて、ここまでで質問がある人はいますか？」

誰も答えないか。
そりゃそうだよね。みんな予習ぐらいしてるよね。

ん？手を挙げたよ？
えぇ、もちろん前のバカですよ。

「じゃあ織斑一夏君！」

「えーっと。正直に言っていいですか？」

「どうぞどうぞ。なんでも答えますよ？」

生徒からの質問にルンルンしている山田先生。

「全部わかりません」

……は？

「えぇっ！全部ですか？今までの全部？」

当然のリアクションです。

「はい…」

「美晴君はどうですか？」

まぁ急に入学が決まったから僕も似たようなものだと疑うよな。

「僕は大丈夫です」

でも一夏のご期待には添えません。

「何でだよ？」

いや、だって…。

「参考書読み込んだし」

「そんなのあったか？」

「一緒にもらったじゃないか。あのスッゴい分厚い本！」

あまりのバカさ加減にさすがに声が強くなる。

「あぁあれか！」

ポンと手を叩く。

「思い出した？」

「資源ゴミの日に捨てちゃった」

「どあほう！」

ずがーん。

千冬お姉ちゃん登場。

そして出席簿アタック炸裂！
でも平面で叩いた音じゃないよね、今の。

「必読と書いてあっただろう、馬鹿者が！」

「いってー。しゃあないだろ？枕にして寝ちゃったらよだれで汚しちまって…」

ごすっ。

「あうっ！」

今角でいった。角で。

「って～」

「枕にしただと！ふざけるな！それと教師に向かってなんという口の聞き方だ。再発行してやるから後で取りに来い！返事は！」

「…はい」

自業自得だね、一夏。
まぁ一緒に行ってあげるか。

「織斑美晴。お前は来るな。こいつに反省させるためだからな」

心読めるんですか？

「まぁ一夏には反省して欲しいですから、そうします」

これは三途の川コースかな。頑張れ、一夏。

第9話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ＩＳの説明については調べましたが、少しずれがあるかもしれません。

矛盾が生じないよう気を付けます。

次回はあのお嬢様登場。

第１０話（前書き）

イギリスのお嬢様登場。

騒動の種は増えていきます。

第１０話

こんにちは、美晴です。
今２限目が終わりました。
一夏の頭痛も治まったようです。
次の授業の予習でもしておこうかな。

「美晴、何してんの？」
一夏が机を覗き込んでくる。

「次の授業の予習を軽く」
次は千冬お姉ちゃんの授業だし。
わからないなんて言ったら僕も大変なことになる。

「真面目だなぁ、お前」

「一夏が不真面目なんだよ、僕は普通」
たぶん僕が正しい。

「ちょっとよろしくて？」

また突然の声が。

「んあ？」

「はい？」

僕も変な返事になっちゃった。

「まぁなんですの！その気の抜けたお返事は！この私に話しかけてもらうだけでも光栄なことですのに！その自覚はありまして？」

「って言われてもねぇ」

「あぁ。俺達お前の事知らないからなぁ」

自己紹介は途中で終わっちゃったし。

「まぁっ！ご存知無いと！イギリス代表候補生にして、オルコット家当主のこのセシリア・オルコットを？」

胸に手を当ててわざとらしく胸を張ってる。

「あぁ」

「ごめんね？」

「あっ、で美晴。代表候補生って何？」

あらっ？

ガタタンッ。

あ、みんなこけた。うーん、やっぱりみんな新喜劇見てるんじゃ…。

オルコットさんは何とか踏ん張ってるけど。

「…あのねぇ一夏。代表候補生っていうのはＩＳの国家代表の候補生なの。専用機が与えられる、いわばエリートだよ」

アホらしいけど、優しく説明しないと。優しく。

「そうですわ！私はエリートなのですわ！って聞いてますの？」

「専用機ってすごいのか？」

割り込むオルコットさんを無視する一夏。にしても…。

「はぁ。そこまでバカなんだね一夏は。…ＩＳはコアで動いてるのは知ってるよね」

「まぁさっきので何とか」

少しは聞いてたのか。

「そのコアは世界に４６７個しか無いんだ。篠ノ之博士が作るのをやめちゃったからね。それを世界中で分けあってるんだ。だから専用機として個人にＩＳが与えられるってのはホントにすごいことなんだよ？わかった？」

「おう、わかったぞ。オルコットはエリートなんだな！」

まばゆいばかりの笑顔を向ける。

バカにしてるな、これは。

「バカにしてますの？いえ、してますわね」

さすがにわかるよね。

「大体入試トップにして入学試験で唯一教官を倒した輝かしい成績の私を知らないなんて、無知にもほどがありますわ」

教官を倒した？それなら…。

「俺も教官倒したぞ」

「僕も」

「私だけだと聞いていましたが?!」

スッゴい驚いてる。

「たぶん女子ではってオチじゃないかな」

バンッ!

僕の机叩くなよ。

「納得が行きませんわ!こんな何の知識の無い人と同じような扱いを…。お連れの女性はそれなりのようですけど」

ムカッ。

「僕は男です!自己紹介聞いて無かったんですか?」

一夏はバカなのは認める。でも僕まで間違えないで欲しい。

「…！…そうでしたわね。失念していましたわ。申し訳ありません」
素直に謝るんだね。許す。
キーンコーンカーンコーン。
「この続きは後でしますわ！逃げるなんて考えないことですわね！」
オルコットさんは自分の席へと帰っていく。結局予習できなかった。
「何なんだ一体？」
「平和な生活というわけにはいかないみたいだね」
「だな」
シュッ。
ドアが開いた…って事は…。
「いつまで立っている！さっさと席につけ！」
きびきびとした態度で席に戻る生徒達。
相変わらず千冬お姉ちゃんの統率力はすさまじいな。ブートキャンプか？ここ。

「えー。授業を始める前に、お前達に話がある。2週間後に行われる、クラス代表対抗戦に出場するクラス代表を決めようと思う。クラス代表には生徒会の会議などに参加してもらうこともある。クラス長と考えてもらって差し支えない。任期は1年だ。自薦他薦は問わない。誰か居ないか？」

めんどくさっ。

「はいはいはーい！私は織斑一夏君がいいとおもいまーす」

「私もそう思いまーす」

そうだ、やれやれ～。

「ま、待てよ。俺か？別に俺じゃなくてもいいだろ？」

慌ててみんなの推薦を取り消そうとしている。

「辞退は認めんぞ織斑一夏」

「えぇっ？…じゃっ俺は美晴を推薦する！」

振り返り僕を指差す。

「僕を道連れにする気？ひどいよ一夏ぁ！」

巻き込まれたぁ。

「お前の辞退も認めんぞ」

「そんなぁ…」

バンッ！

「私が立候補致します。大体納得いきませんわ！こんな選出！男がクラス代表だなんて、そんな屈辱を1年も私に味わえと言うんですの！」

オルコットさんが立ち上がり、不満を口にする。

にしても随分な言い様だね。

「クラス代表というならイギリス代表候補生にして、入試成績トップの私がなるべきですわ！男の操縦者が居ると言うから来てみれば、全然絞まりもない。私からすればこんな文化的に遅れた極東の国に来ること自体不愉快極まりないですわ！」

「だったら帰ればいいだろ！」

一夏がキレた。僕も我慢できないな。

「極東なんて言い方、世界は自分達中心って考えのイギリス人らしいや。それにイギリスだって大した自慢無いでしょ」

「そうだな。飯も不味いし」

「首都はいつも曇りだし」

「観光名所なんてビッグ・ベンぐらいだろ」

「わ、私の祖国をバカにしましたわね？」

オルコットさんの眉がピクピクしてる。

「そっちが先にしてきたんでしょ？」

「我慢なりませんわ！あなた達に決闘を申しこみますわ！」

ほう、良い度胸ですね。

「いいですよ。受けてたちましょう」

「俺も受けてたつ。ハンデはどうするよ、オルコット！」

「あら、もう怖じ気づきましたの？」

「いや、俺達がどれだけつければいいかなって」

そうそう。

「やだぁ、一夏くん本気で言ってるの？」

「男が強かったのって大分前の話だよ？」

「オルコットさんは代表候補生なんだよ？勝てる訳無いじゃん」

キャハハッ。

みんな笑ってるよ。気に入らないなぁ。こういう差別的な笑い。

「それは男がＩＳに乗れなかったから成り立ってた理論でしょ。今みんなの目の前にはＩＳに乗れる男が２人居るんだよ？どうなるかなんて誰にもわからないんじゃない？」

怒気を含んだ僕の言葉にみんな押し黙る。

「それぐらいにしておけ！お前達！…クラス代表決定戦は一週間後の放課後に行う。ハンデはなし！それでいいな！」

「私は異論はありませんわ！」

「俺もだ！」

「僕も！」

「よし。これでこの件は終いにする。授業を始めるぞ！教科書を開け！」

ということで僕達は決闘することになりました。
今思えばちょっと早まったかな。僕は平和主義なんだけど…。

第１０話（後書き）

意外と感情が制御できないミハちゃん。

決闘に向かって努力していきます。

次回は、やっと一日目が終わるのかな？

第１１話（前書き）

ようやく一日目が終わります。

第１１話

こんにちは、美晴です。

今はお昼なので食堂に来ています。さすがに世界中から生徒が来ているＩＳ学園。あらゆる国の料理があるみたい。

あっちは宗教上、食べられないものがある人のメニュー表か。なんかすごいな。しかも政府からの援助のおかげで、学園関係者は無料なんだって。

何にしようかなぁ。

「一夏は何にする？」

「こう沢山あると迷うよな。無難に日替わり定食（和）でいいかな」

「僕もそれでいいや」

おばさんに食券を渡して…。

出てきた定食は肉じゃがと焼魚と、ご飯、味噌汁、漬け物といかにも和って感じのでした。

「席空いてるかなぁ」

広い食堂だが、生徒でごった返している。

「うーん。あっちに箒が居るぞ！相席頼もう！」

「それが良さそうだね。知らない人とは食べ辛いや」

辛いというか危ないというか…。

「箒ここいいか？」

「別に私専用というわけではない。好きに座ればいいだろう」

ぶっきらぼうに言う箒ちゃん。素直じゃないなぁ。でも顔には嬉しいって書いてあるんだよ。

「ごめんね、お邪魔します」

僕達は席につく。真ん中一夏で、箒ちゃんと僕が両サイド。

「それじゃ」

手を合わせて…。

「「いただきます」」

「おいしいね。これが無料か。いいねこの食堂」

「そうだな。ありがたいな」
一夏は口に含んだまましゃべる。

「食べながらしゃべるな一夏。汚いだろ」
箒ちゃんに注意されてる。

「おっ、すまんすまん」

「まったく…」

怒っているのか腕を組んでいる。

「ところで箒。お願いがあるんだけど」

「何だ？」

一夏の突然のお願いに、めんどくさそうに返事をしている。

「放課後に俺達にＩＳについて教えてくれないか？」
よく知らないんだから当然、誰かに教わりたいよね。

「断る」

一蹴ですか。

「そんなこと言わないでさぁ、頼むよ」

再度お願い。手を合わせて結構必死。

「断る」

どうやらとりつく島もないようだ。

「どうしようか美晴」

「うーん」

僕も不安なんだよね。

「ねぇ！」

また誰かに話しかけられる。今日は多いなぁ。
ん？誰だ？リボンの色が違うから上級生かな？
ちなみに赤が1年、緑が2年、青が3年。ローテーションらしい。
僕達はネクタイですよ？

「君でしょ？織斑一夏君って。どう？もしよかったら私がＩＳについて教えてあげるけど？」

渡りに船か。

「助かります、先輩。じゃ…」

頼みます。と言おうとした一夏だが…。

「一夏には私が教えることになっています！」

箒ちゃんが先輩に食って掛かった。

「いいのか？」

聞き返す一夏。まぁ驚くよね。

「別に教えないと言った覚えはない」

断るってしっかり言ってたけどね。

「でもあなた一年生でしょ？私の方がちゃんと教えられると思うけど」

引かないなこの先輩も。ただ言ってることは一理ある。1年生同士では充分な知識が無いからだろう。

「私は篠ノ之束の妹です！なので大丈夫です！」

箒ちゃんの切り札登場！確かあの人のこと嫌ってたはずだけど…。それでも、一夏と一緒って魅力の方が上回ったのか。

「！！…そう。ならいいわ。一夏くん。気が変わったら教えてね？」

篠ノ之束。その名前を聞いた以上、もう何も言えない。天才の妹なのだから、たぶんこの娘もって思ったんだろう。

先輩は去っていった。

あれ？今の会話僕の存在無視されてた？いいか。

「放課後剣道場に来い。稽古をつけてやる」

稽古…ね。

「稽古よりもＩＳを…」

「いいから来い！」

「はい…」

反論の余地なく決定。

僕どうしようかな。剣道は嫌だし。自主練でもしよう。訓練機借りられるかな…。

放課後

「ではこれでＨＲを終わります。織斑君達はこちらへ」

呼び出しか？何だろ。

「えーっと。今日から2人も学園の寮で生活してもらいます」

「「えっ！」」

「確か、今は部屋がないから最低1週間は自宅から、と聞いていま

したが？」
一夏が丁寧に聞く。いつもみたく言うと叩かれるって学習したんだ。偉いぞ一夏。

「確かにそう説明されたよね」
な、と一夏がこっちを見てきたので、僕も肯定する。

「それが…。２人は特別だからすぐさま寮に入れろと、政府からお達しが…」
申し訳なさそうに言う先生。

「あぁ、なるほど」

「何がなるほどなんだ？」
頷いた僕に疑問を持ったのか、一夏が尋ねてくる。

「僕達は世界初の男性ＩＳ操縦者なんだよ？家に帰るまでにマスコミに囲まれるのか、どっかの国に拉致されるのか。大体そんな所じゃないかな」
実際今までさんざんそんな目に遭ってきた。拉致はまだ無いけど。

「そうか。俺達のためでもあるのか。…でも荷物は？何も持ってきてないですよ？」

まさか今日からだとは思ってなかったから、何も持ってきてない…。

「それは…」

「安心しろ。私が持ってきておいたぞ。携帯の充電機と着替えがあればいいだろ」

堂々と言い放つ千冬お姉ちゃん。

「「……」」

何て質素な生活をさせられるのか。

「織斑先生。僕のゲームや本は？」

僕にとってかなり大事なアイテム達。

「ゲームなど学園生活には要らん。本は購買で買え」

ひどい。潤いは必要なのに。…今度の休みにでも取りに行こう。

「それでは2人の部屋の鍵を…」

ジャラッジャラとポケットから部屋番号が書かれた鍵が二つ出される。

「「一緒じゃないんですか？」」

「あいにく、すぐには用意できませんので…。片方は相部屋、片方は空き部屋の鍵です」

相部屋イコール女子と一緒。

「僕空き部屋がいい！」

「俺だって！」

ゆずらないか。なら公平に。

「じゃんけんで決めよう！」

「よし。絶対負けないからな」

にひ。一夏は必ず最初チョキを出すんだよ。
勝ったね。

「「じゃ～んけ～んぽん」」

僕グー。一夏チョキ。

「それじゃあ僕が一人部屋ね」

山田先生から鍵を受け取る。

「くそぉー」

「あ、伝え忘れるところでした。お2人は大浴場が使えませんので、部屋に備え付けのシャワーを使ってください」

「何でですか？」

「一夏は同い年の女の子とおんなじお風呂に入りたいの？変態さんだなぁ」

「は、入りたくなんかないぞ！」

ブンブンと首と手を振り否定する一夏。

「えぇっ！一夏君は女の子と一緒に入りたくないんですか？まさか一夏君は…」

危ない想像に走り始める山田先生。

「違いますよ先生！」

一夏は頑張って否定する。

疲れるなぁこの人。
僕は助かったけど。
たぶん入ったら僕の方が襲われそうだ。あの人がいたら…。後ろからなのか？やっぱり。何か寒気してきた。

「あっ織斑先生！」

職員室に行こうとする千冬お姉ちゃんを呼び止める。
危うく忘れるところだった。

「何だ織斑美晴」

「あの、自主練がしたいので訓練機とアリーナの使用許可をいただきたいのですが」

「わかった。申請書類に記入してもらう必要がある。これから私達は会議だから…。そうだな、2時間ほど後に職員室に来い。一夏はどうすると言っている」

「篠ノ之さんに稽古をつけてもらうことになってます」

「……稽古か。まぁいい。あいつにあのバカを鍛えてもらうとするか。ではまた後でな」

「はい」

それにしても2時間か。何して過ごそうかなぁ。一夏の稽古でも見てるか。

今僕達は剣道場にいます。目の前にはボロボロな一夏。

「立て、一夏。その程度で終わる貴様ではないだろう」

箒ちゃんは竹刀の先を一夏の顎へと向ける。

「待ってくれよ箒。剣道は久しぶりなんだから」

「何？一夏。中学3年間部活は何をしていた？」

驚いているようだ。知らないよね、僕達と中学は別だったから。

「帰宅部。ちなみに皆勤賞！」

親指を立てる一夏。

毎日みんなで遊んでたもんね。でも帰宅部に皆勤賞ってあるのかな？

「そんなのが自慢になるか！そこに直れ！徹底的に鍛え直してやる！」

キレたみたい。

一夏が剣道止めたのは箒ちゃんが居なくなったからなんだけどねぇ。

言わなくてもいっか。

ん！そろそろ時間か。職員室行って来よ。巻き添えを食いたくないから気づかれないように…。抜き足差し足忍び足…。

「織斑先生いらっしゃいますか？」

職員室に入り、千冬お姉ちゃんの机を探す。

「こっちだ」

手をあげて僕を呼ぶ。
あ、居た。他誰もいないんだ。

「で、どうすればいいんです？」

「この書類に必要事項を記入してもらう。ちなみに期限は１８時までだ」

パサッ。
書類が目の前に出される。

「１５枚はありますよこれ。今１７時半ですから、１枚あたり２分でやれと？」

「私が手伝ってやるから、美晴」

笑顔で言う千冬お姉ちゃん。

「あれ？今、美晴って」

いつもは織斑って付けるのに。

「今職員室には2人だけだし構わんだろう。今ぐらい姉弟でいさせてくれ」

「千冬お姉ちゃん！」

ギュッ。

僕は嬉しくて抱きつく。ここ最近は忙しくてあまり一緒に居られなかったからな。

「おい、美晴！嬉しいのは山々だが、早くしなければ時間が…」

「そうだったね。早くやっちゃおう」

もう5分使っちゃった。

……。作業中…。

「ふぅ終わった」

「これで明日から使用可能になる。しっかり励めよ？」

ポン、と頭に手をおいてくる。

「うん！」

もうちょっと甘えてよう。

キーンコーンカーンコーン。
１８時のチャイムが鳴る。

「それでは部屋に行くといい。私は寮長だから、フロアの端に部屋がある。何かあるときは遠慮なく来い」

そうなんだ。だから帰ってこない時があったのか。

「できるだけ迷惑かけないようにするよ。じゃっ」

職員室を後にし、寮へと向かい歩いていく。寮は校舎とは別棟。歩いて５分くらいか。

寮内

僕は１０２６号室か。

ん？

「一夏は隣なの？」

ドアを開けようとしている一夏と再会する。なんか疲れてる顔。

「あぁ、そうらしい。いいなぁ空き部屋」

「一夏は負けたんだから」

同情はするけど譲らないよ。

「諦めるよ…。またあとで一緒に飯食おうぜ」

「そうだね」

一夏と別れ部屋へと入る。

これが僕の部屋か。結構広いじゃん。ベッドはシングルが２つか。

いつか誰か来るのかな？

ドタン。バタン。

何か隣うるさいなぁ。何やってるんだろう。

「一夏！貴様と言うやつは…！」

「よせ箒。誤解だ。とにかく木刀を下ろせ。よせってー」

あぁ相部屋の相手は箒ちゃんなんだ。どっちにもメリットあるんじゃない？

まぁ仲良くやりなよ２人とも。

一夏だ。

今俺はヤバすぎる状況に立たされている。

部屋に入った瞬間に、シャワー室から箒が出てきた。バスタオル１枚で。

で、いきなり木刀を振り回されて、止めようともう１本の木刀を取ったら、何か先にぶら下がってた。

ブラジャー？しかも白。

「一夏！貴様というやつは！しばらく見ない間に破廉恥な奴に…！私が修正してくれる！そこに直れ！」

「よせ箒。誤解だ。とにかく木刀を下ろせ。よせってー」

俺が悪いのかな、これって。

第１１話（後書き）

学年別のリボンの色については、作者の高校在学時の色分けを用いました。

これからも、ミハちゃんに甘い千冬さんを入れていこうと思います。

第１２話（前書き）

今回は、決闘のために準備する様子をお送りします。

あっさり目です。

第１２話

こんにちは、美晴です。

今は２日目の放課後です。

昨日夕食前に一夏達の部屋に行ったら、ドアが穴だらけになっていました。パッと見テロリストに襲撃されたんじゃないか、って思わせる状態でした。

話によると、千冬お姉ちゃんが最終的に介入して、２人ともにドアの弁償をさせられたらしいです。

結構な値段しそうだな、あのドア。

それはさておき、今日から僕は訓練機を使って自主練します。

何ができるって訳じゃないですけど、せめて回避運動ぐらいはマスターしたいなって。

アリーナ内。

あまり人がいないな。今日は少ない方だからって監督の先生は言ってたけど。

さてと始めるかな。

訓練機は入試の時にも使ったラファール。
一回使ったんだし、そのままの方がいいかなって。
僕は飛翔し、まずは直線的に飛んでみる。その後はジグサグに飛んで行く。
うーん、まだ反応速度や停止時間にムラが出るなぁ。
視界はセンサーのお陰で３６０度見渡せるようになっている。かえって気持ち悪い。
この違和感も早く無くさないと。

初日だから飛ばしすぎるのもなんだし、密度を濃いめにして時間は短めで切り上げよう。

ギュンッ。
ピタッ。
ふぅ。加速、停止も上手くなった気がする。これで飛行自体は問題なくなってきたな。
次は武装を確認して…。
アサルトライフルとショットガンと、マシンガンと近接ブレードか。
遠中近のいろんな状況に対応できるようにしてあるんだなぁ。
シューティング好きだから、射撃メインにしよう。
ライフルを…。

武装も呼び出しさえすればすぐ手元に来るんだ。改めてすごい科学力だなと思う。まぁ本当は頭で思っただけで出てくるらしい。初心者だから良いでしょ。

さて、先生に的を出してもらって。
まずは静止状態で何発か。
ガウンッ　ガウンッ…。

八割命中か。まぁまぁかな。あのゾンビゲームじゃ死んでるかも。

次は飛びながら。
なかなか当たらない。
んー。やっぱり動きながらは狙いが外れやすいなぁ。
自分が動くゲームなかったもんなぁ。頑張ろう。

ガウンッ…。

「ふぅ」

始めてから1時間半ぐらいか。
よし。今日はこれで終わり。
シャワー浴びてご飯食べよう。

「美晴。練習終わったのか？」

僕が部屋に戻ると、箒ちゃんと一夏も練習を終えたようで、部屋に入ろうとしていた。

「箒ちゃん。うん。なかなか楽しかったよ」

「そうか」

「ところで後ろで白くなってるのって…」

箒ちゃんに引きずられていた、かつては人であっただろう物体を見る。

「あぁ。一夏だ」

「厳しめにいったんだねぇ」

燃え尽きたよ…、とか言ってそうだな。

「こいつは前と比べると、腕も体力も格段に落ちているからな。ISに乗る以前の問題だ」

でも日本一が相手なら誰だって敵わないかと…。とは言えないから…。

「そう。でもたまには、ゆっくり話したら？そのままいい雰囲気になるかもしれないし」

せっかく二人きりなんだから少しは利用したら良いのに。

「そうはしたいのだが…。こいつを見ているとなかなか怒りが押さえられなくて…」

まぁ久しぶりに会った思い人がこの体たらくではねぇ。箒ちゃんの中ではカッコいいやつになってる、とか期待してたんだろうねぇ。

「まぁ6年ぶりだからね。まずはゆっくりでいいんじゃない？」

「できる自信が…。いや、私はやるぞ！」

そうそう、その意気。焦ったって良いことはほとんど無いから。

さて、そろそろ一夏を起こすか。

「おーい、一夏！」

ペチペチと頬を叩いてみる。

「やめて、もう勘弁して！ちゃんとやるから！お願いします箒様！」
一夏は必死に顔をガードしてる。何をやったんだ？箒ちゃん。
「大丈夫だよ一夏。ここは道場じゃないよ？」
「美晴！…そうか。生きて帰ってこれたのか…」
安堵の表情を浮かべている。
どんな仕打ちを受けたんだ。
箒ちゃん。僕から目をそらさないでよ。

翌朝。
今は朝のＳＨＲです。
…千冬お姉ちゃん、いつも山田先生に任せてるよね、ＨＲ。
まぁ山田先生が生き生きしてるから、これでいいのかも知れないけど。
「…以上で朝のＳＨＲは終わりです」
山田先生が出席簿を閉じる。

「1限目は私の授業だ。遅刻、忘れ物は一切許さんからな。いいな！」

千冬お姉ちゃんは相変わらずな言い方。

「「イエッサー」」

そして軍隊式の敬礼と返事。

何か違和感を感じなくなってきたよ。慣れって恐ろしいな。

「それと織斑一夏、織斑美晴。お前達に伝達事項がある」

「「なんでしょう？」」

また呼び出しか？僕は心当たりが特には…

「お前達に専用機が配備されることになった」

「「えっ！」」

専用機？僕達に？

「なるだけ急がせてはいるが、受領は試合当日になりそうだ。ぶっつけ本番でやってもらう事になる。それは覚悟しておけ」

「「はい」」

「以上だ」

先生達は職員室に行くため、教室を出ていく。

すると教室内はザワザワし始めた。

「1年のこの時期に専用機？」

「やっぱり違うわね。千冬さんの弟は…」

「あなた達も専用機持ちになりましたのね。これで条件は対等ですわね。これで心置きなく、叩きのめして差し上げられますわ！」

ザワザワの中から現在一番めんどくさい人が僕達の前に出てきて言い放つ。

「「はぁ…」」

そんな返事しかできない。

「でもなんで俺達に専用機なんて…」

「モルモットみたいなものだからね。世界で初めてＩＳを動かした男達。専用機ならどうなるか、実験してみたいんじゃない？」

あながちこの予想は間違って無いんじゃないかと思う。研究者なら誰でも、初めてのケースに興奮するものだろう。

「モルモットか…。まぁこれでオルコットと対等だから良しとするか」

ハンデがうんぬんってうるさかったもんねあの人。

「それよりもどんなのが来るのかワクワクするよ」

「それは確かにあるな。かっこいいのが良いな、俺は」

「僕は射撃ができればいいや」

遠距離からドーンって。

放課後。

「なぁ美晴。俺もお前の練習にまぜてくれないか？」

一夏もＩＳを使った練習がしたいみたい。

「僕は構わないんだけど…。ほら、後ろに…」

「何かすごい気を当てられてる…。やっぱり箒か！」

何かすごいオーラを放っている箒ちゃん。背後に龍が見えるよ。

「一夏は今日も道場だ！ほら行くぞ！」

一夏の襟をつかんで引きずっていく。

「俺もＩＳ使って練習したいー！」

「うるさい！お前はそれ以前の問題だと言っただろう！とにかく行くぞ！」

「助けてー美晴ぅ！」

触らぬ神に祟りなし。
いってらっしゃい、一夏。
骨は拾うかもしれないよ。
気が向いたら。

第１２話（後書き）

次回は決闘をお送りします。

戦闘描くの苦手なんだよね。

第１３話（前書き）

すみません、投稿が遅れました。

今回は、セシリアとの決闘の日です。

第１３話

こんにちは、美晴です。

やってきました決闘の日。

でもまだ僕達の専用機が届かないんです。オルコットさん、腕を組んでもう空中で待ってるけど…。アリーナもずっと借りられるわけじゃないって、千冬お姉ちゃんイライラしてる…。

「なぁ俺の気のせいかな？」

「気のせいだろ」

「何が？」

一夏の質問を受け付けない箒ちゃんと、よくわからないので聞き返す僕。

「俺この１週間全くＩＳについて教わってない気が…」

「仕方あるまい！私もお前も専用機がないのだ！」

「だったら美晴のように訓練機なり、最悪座学で知識だけでも教えてくれればよかったのに…」

一夏の言う通りだ。何でだろ。

「お前はまず基礎体力がないから、そこからだと思って！」

うーん、苦しい。

「でもＩＳはパワードスーツだぞ？」

「そ、それは…」

あ、言い負かされた。

「実はお前もよく知らないんじゃ…」

「一夏君！美晴君！」

山田先生が走ってきた。

ナイスタイミング。息すごい上がってる。

「山田先生、とにかく落ち着いてください。深呼吸しましょう。はい、吸ってー」

一夏が呼吸を整えるよう言う。

「はー…」

大きく息を吸う山田先生。

「はい止めて！」

十数秒経過…。

あれ？吐かせないの？

「……ぶはっ。はーはー。死んじゃいますよ！」

耐えきれず息を吹き出す山田先生。

さすがに苦しいよね。

「一夏、先生で遊んじゃダメだよ」

「一夏君、先生で遊んでたんですか？ひどいですぅ…」

涙目になっている山田先生。

「おふざけはそれぐらいにしておけ。それで山田先生。来たのか？」

千冬お姉ちゃんが報告を待っている。

「はい、来ました！お２人の専用機が！」

山田先生の案内で、僕達のＩＳへと向かう。

おぉ。白とトリコロールが並んでる…。

「白い方の名前は白式。一夏くんの専用機です。トリコロールの方は美晴くんのです」

「名前はなんですか？」

僕のＩＳの名前は言ってくれない先生。

「えぇと…」

一枚の紙を取り出すが、千冬お姉ちゃんが取り上げる。

「名前は自分でつけてねミハちゃん！ウサギさんよりと書いてあるぞ。…あのバカめが」

あぁ、あの人らしいよ、この文面は。

「あと、一緒にこれも添えられていました」
山田先生が1つの箱を渡してきた。
中身を確認する。
これは…。ウサミミとメイド服…。あのバカウサギめ、余計なことをー。
絶対着ないぞ。
（えぇー？）
何だ今の声！どこから？
幻聴か…。疲れてるのかな、僕。
「で、名前はどうするんだ。早く決めろ」
あのウサミミと一緒にこれに似たのが出てくるアニメ見てたなぁ。
だからデザインが近いんだ？
「…シュッツェン、なんかどうでしょう」
あれと同じ名前よりは僕の決意をつけたかった。

「ドイツ語で守る…ですか」
知ってるんですか。さすがです、山田先生。
「お前のＩＳだからな。好きにすると良い」
千冬お姉ちゃんはこの意味を察したのかな？
「じゃシュッツェンにします！」
僕はこのシュッツェンで大切な人を守るんだ。
「では２人とも。ルールを聞け。今回は勝ち抜き形式だ。シールドエネルギーがなくなったら負けだ」
つまり最後に勝った人が代表か。
「オルコット。お前は連戦になるかもしれんがいいな？」
確かにもうスタンバイしてるオルコットさんは勝てば連戦になる。
「かまいませんわ！むしろ、連勝で叩き潰すだけですわ！」
親指を下に向けるオルコットさん。

その仕草、レディがやるやつじゃないよ？

「だそうだ。どちらが先にいくのだ？」

「俺から行くよ」

「じゃ僕が後だね」

覚悟かあるみたいだね。一夏に譲るか。

「時間がない。装着しろ。体を預ける感覚で良い。フォーマットとフィッティングはＩＳが勝手にやってくれる。試合中には終わるだろう」

「ＯＫ！」

「それでは一夏。カタパルトでスタンバイしろ」

「了解。行ってくるぜ！」

カタパルトへと歩いていく一夏。

「一夏！」

箒ちゃんが呼び止める。

「ん？何だ箒」

「勝ってこい！」

「おぅ！まかせろ！」

良いやり取りだね。

…白式のカタパルト接続を確認。全システムオンライン。白式発進してください…

「白式、出るぞ！」

一夏は決闘の舞台へと飛び立っていった。

一夏だ。

今目の前には決闘の相手、セシリア・オルコットがいる。

「あら、ちゃんと来たんですのね。遅いからてっきり尻尾を巻いて逃げてしまったのかと思いましたわ？」

腰に手を当てて挑発してくるオルコット。

「待たせて悪かったな。ゴタゴタしてたんでな」

「だがお詫びに全力でお前を叩きのめしてやるよ！」

そんなオルコットに俺も挑発し返す。

「叩きのめされるのはあなたの方ですわ！」

乗ってきたな。

―試合を開始してください―

「それじゃ始めるか！」

「ええ！」

試合開始と同時にオルコットがレーザーを撃ってきた。

「いきなりかよ！」

「試合は始まってますのよ！いきなりも何もなくてよ！」

確かにそうだが。

「くそっ」

こっちの武器は何が…。

近接ブレード一本…。だけ？何だそれ！

「やるしかないか！」

俺はブレードを装備する。

「近接ブレード？あなた何を考えてますの？中距離射撃型の私相手に接近戦なんて！」やっぱり驚くよな。俺も驚いてるんだよ！

「あいにくこれしかないんだよ、この機体には！」

「なんて適当な機体なんですの？」

まぁ束姉の作ったやつだからな、偏るのは仕方ねぇ。

「いいですわ！完封して差し上げますわ！」
オルコットはガンガンレーザーを撃ってくる。今は避けるしかないか！
右、次は左へ。

「くっ。ちょこまかと」
焦れてきたか？

美晴です。
今僕と先生達は管制室のモニターで一夏の試合を見ています。

「すごいですね織斑先生。一夏君、これが2度目の起動ですよね？とてもそうは見えませんよ」
モニターを見ながら感心する山田先生。

「私の弟だからな、当然だ」
そんな山田先生に誇らしげに言う千冬お姉ちゃん。

「弟さんが大好きなんですね」

山田先生はふふっ、と微笑みながら言う。

「からかってるのか山田先生！」

「い、いえそんなことは…」

「ふん！」

千冬お姉ちゃんがからかう山田先生を一喝し、僕達は再びモニターへと意識を戻す。

美晴達のやり取りなんて俺は知らん！今はただ避けることしかできないぞ！

「よく私の攻撃にここまで耐えましたわね！こんな方は初めてですわ？いいでしょう、本気を出して差し上げましょう！いきなさい、ブルーティアーズ！」

「わっなんだこれ！いろんな方向から！」

同時に多方向からレーザーが襲ってくる。

「さぁ踊りなさい！セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でるワルツで！」

管制室

「山田先生、あれはなんですか？」

突然オルコットさんの攻撃方法が変わった。多角的な攻撃だ。

「あぁ美晴君。あれはですね、イギリスの第３世代に試験的に搭載されている兵器で、通称ＢＴ兵器って呼ばれています。操縦者の意思で動かして、オールレンジで攻撃を仕掛けることができるんですよ？今はまだ実験段階なので、あれが本来の性能というわけではありません」

山田先生が分かりやすく説明してくれた。

「イメージ・インターフェイスが搭載された、第３世代だからこその運用方法だな」

千冬お姉ちゃんの補足が入る。

「へぇ～。厄介ですね、あれは」
他方向からのオールレンジか。
一夏はどうするんだろ。

くそっ。ブレードなんだから接近しないと、まともに攻撃すらできないじゃないか。
不利なんていうもんじゃないぜ。エネルギーも半分近く削られちまった。
でもさっきから、一瞬攻撃が止むことが何回か…。なんでだ？
よく相手を見ろ、箒が教えてくれたことじゃないか！

……！
そうか、あの兵器はオルコットの意思によって動かしている！だけど、同時にいくつも処理できないから、ライフルを撃つときだけ攻撃が止むんだ！
それさえわかれば！

「先程から何をぶつぶつと！さっさと墜ちなさい！」
俺なら相手の意識の死角から攻撃する。

ってことは…。

「ここだっ！」

一機破壊！

「次はここっ！」

二機目！

「っ！気付きましたのね！ブルーティアーズの弱点に！」

やっぱりそうなのか。

「あぁ。さてここからは俺のターンだ。行くぜ！」

ライフルを避けつつビットを破壊。そのまま突っ込む。この戦法でケリをつける！

管制室

「あいつは油断しているな」

モニターに映し出された一夏を見て千冬お姉ちゃんが呟く。

「なぜですか？」

千冬お姉ちゃんの指摘に、山田先生が尋ねる。

「一夏の左手がしきりに動いてるでしょ？あれは一夏がやらかしちゃう時の前触れなんですよ」

握ったり開いたりしている。いつもの癖だ。

「確かに動いてますね。さすがに兄弟の癖はよくわかってるんですね」

「うりゃあぁぁ！」

「かかりましたわね！」

余裕の笑みを浮かべるオルコット。

「何っ！」

「ブルーティアーズは４機だけではなくてよ！いきなさい！」

「ミサイル型！」

距離をとらなきゃ！

…っ！追尾してきた！

ドカーン…。

「機体に救われたな、あのバカめ…」

「これで私の勝ち…」

「！」

…フォーマットとフィッティングが完了しました。確認ボタンを押してください…

俺は無傷で立っていた。どうやらシールドエネルギーも全快したようだ。

「まさか今ファーストシフト！あなた今まで初期設定で戦っていたと言いますの！」

ファーストシフト？

「何だかよくわからないけど、一気に決めるぜ！武器は…雪片弐型…。ははっ！最高の武器だ！いいだろう、千冬姉の名に恥じないフィナーレにしてやるぜ！」

「何を言ってますの！墜ちなさい！」

当たるかよ！反応が今までと桁違いだ。思った通りに動いてくれる。これなら！

―零落白夜発動―

「これで終わりだー！」

一気に距離を詰め雪片弐型を振りかぶる。

「キャアアアッ」

悲鳴をあげるオルコット。悪いな、俺の勝ちだ！

ビーッ。
終了を告げるブザーが聞こえる。
―織斑一夏。シールドエネルギーエンプティ。勝者、セシリア・オルコット―

「へ？何で？」

訳がわからないまま空中に漂っていた。

第１３話（後書き）

私、熱中症にかかりまして、数日まともに動けませんでした。

みなさんも気を付けてください。

ポカリは偉大です！

第１４話（前書き）

４日ぶりですか。遅くなりました。

今回は、一夏戦後です。

第１４話

よう、みんな。一夏だ。

さっき俺は勝利を確信しオルコットを攻撃したはずなんだが…。

―勝者、セシリア・オルコット―

「へ、何で？」

何もしてないし、されてないのに。

オルコットを見てみる。

落ちていく？

まさかあいつ気絶してるのか？さすがにこの高さじゃまずい！

「一夏！オルコットさんを助けて！」

美晴が通信で叫んでる。

「もちろんだ！」

ブースターをふかし、オルコットに追い付く。

そのまま抱き上げる形で墜落を防ぐ。

「…ん、…あ、あの？」

オルコットが意識を取り戻したようだ。

「お、目が覚めたか」

「私どうしたのでしょうか？」

「気絶していきなり落ちてったんだ。焦ったぜ」

「私を助けたんですの？何故？私あなた達にひどいことを言いましたのに…」

何故って…。

「確かにそうだけど、目の前で落ちていくやつをそのままにはしておけないだろ。それに日本には、昨日の敵は今日の友って言葉がある。戦闘が終わった以上、俺たちは敵じゃない、友だ」

ちょっと笑顔になってるかな、俺。

「あ、ありがとうございます…。あの、…そろそろ下ろしていただけます？この格好は恥ずかしいのですが…」

言うなればお姫さまだっこの状態か。

「お、悪い悪い。じゃ戻るか」

オルコットを地面に下ろす。

顔を赤らめているな。熱か？

こんにちは、美晴です。

今僕達は寮へと帰っているところです。

「お前は私に勝ってくると言っていたが？」

今箒ちゃんと僕で一夏をいじっています。

「仕方ないだろ、雪片にあんな能力があるなんて知らなかったんだから」

千冬お姉ちゃんの説明によると、一夏の白式のワンオフアビリティー、ＩＳと同調したときに発動する特殊能力みたいなものらしいんだけど、雪片弐型には零落白夜という相手のシールドを無効化し、操縦者保護のために搭載された絶対防御を強制的に発動させ、一気に相手のシールドエネルギーを削る能力があるらしい。

ただ、自身のシールドエネルギーをその発動に回すため、考えて使わないといけない諸刃の剣のようだ。
千冬お姉ちゃんがかつて使っていたＩＳと同じ能力らしい。

「えぇと、千冬姉の名に恥じないフィナーレにしてやるぜ！だっけ」
あのときの一夏を真似してみる。

「うっ」

「これで終わりだーとか言ってたな」
箒ちゃんも真似をする。

「頼むぅ、これ以上いじらないでぇ。思い出しただけでも恥ずかしいんだからぁ」
懇願してくる一夏。まぁそろそろいいか。

あのあと、オルコットさんは医務室に運ばれました。
で、戦闘継続は大事をとって止めた方がいいとの診断で、２回戦は僕の不戦勝ということになりました。
ってことは僕がクラス代表なのでしょうか？憂鬱だ。

みなさんごきげんよう。セシリア・オルコットですわ。
シャワーを浴びていますので覗かないでくださいね？

それにしても、あの目。
今まで私が見てきたどんな男性よりも強くて優しかった。
私の出会った男性なんてみなさん卑屈でしたのに。
父もそうでしたわ。最初は多少威厳があったのに、母が会社の経営を建て直してからは母のご機嫌伺いばかり。お婿さんだからというのもあったのでしょうか。
以前の威厳なんて微塵も感じられなくなりましたわ。母もそんな父を嫌っているようでしたし。
なのに…。
二人一緒に列車事故に遭って死んでしまうなんて。
何故死ぬときだけ一緒なんですの？
あんなに嫌ってたはずなのに、何故一緒なんですの？
私がそのあとどれだけ辛い思いをしたか。
遺産を狙うものから家を守るために、必死で勉強して、ＩＳの代表候補生にまでなってしまいましたわ。
その間にあった男性はみなさん父と同じく私のご機嫌伺いばかり。
やはり男性はこんなものなのか、と絶望しましたわ。

でもあの方は違った。私をあそこまで追い詰めたあの目、あの力。
そして、…お、お姫さまだっこをして笑顔で友達だと…。

あの方を知りたい…。もっと近くで見ていたい…。
なんでしょうこの気持ちは。

まず謝ることから始めましょうか。

散々一夏をいじり倒したあと部屋に帰り、ベッドに寝転んでいた。
思い出すと笑っちゃう…。

コンコン。
ん？誰だろ。

「はーい、今開けます」
ドアをゆっくり開ける。

「オルコットさん…」

「セシリアで結構ですわ。美晴さん。少しお時間よろしいでしょうか」
言い方が柔らかくなってる。それに美晴さんって。何かあったか？

「じゃ中にどうぞ」
中へと案内し、隣の空いているベッドへと座ってもらう。

「で、なんでしょう」
ちょっと語気は強め。
「あの…、失礼を申し上げたことを謝らせていただきたくて」
謝る？ますます変だ。
「どういった心境の変化で？」
「私、今までは男性を見下していました。でも今日一夏さんと戦って、そんな方ばかりではないと気づかされました。だからお詫びがしたくて…」
もしかして一夏に惚れたのか？
それにしても詫びてくる相手をむげに返すのもなぁ。
「いいでしょう、セシリアさん。これからは友達です」
手を差し出す。
「よろしくお願いしますわ」

僕達は握手する。

「ところで何か別件もありそうだけど」

まだ何かありそうな顔をしている。

「その事なのですが…」

ふむ。ふむ。

「それはいい案だ！今すぐ先生に申請しよう！」

「でしょう？」

僕達は一緒に職員室へと向かう。

翌朝

おはようございます、朝のＳＨＲ中です。

「では１年１組のクラス代表は織斑一夏くんに決定です！あ、１並

びで語呂がいいですね！」

「おめでとう！」

パチパチ。

拍手で祝福されている一夏。

「ちょっと待ってください、先生！確か昨日の試合では俺は最下位の扱いのはずですが！美晴が代表になったんじゃないんですか？」

気付かれたか。

「それは…」

言いづらそうな山田先生。

「私が説明いたしますわ！」

「オルコット…」

「セシリアで結構ですわ。一夏さん」

「？」

一夏も態度の変化に戸惑ってる。

「まず先日の非礼をお詫びいたしますわ。浅慮でした、申し訳ありませんでした」

「あぁいいよもう。俺も悪かった」

二人とも頭を下げる。

「では本題を。実は昨日美晴さんとクラス代表を一夏さんにしてはどうかと相談しまして」

「なんで？」

「じゃそれは僕から。昨日一夏はＩＳに乗ったのが２回目なのに、あれだけの戦いをして見せた。だから実戦を積めばもっと強くなれるんじゃないかって思ってね」

「それなら美晴だって…」

納得しないか…。

「僕は練習してたけど、一夏はぶっつけだったでしょ？だから、より戦って強くなってほしいんだ！」

ともっともらしく言ってみる。

「でも辞退は認めないって千冬姉は…」

「織斑先生だ。…まぁいい。確かに美晴の言う通りだ。お前は練習すら満足にできていない。そこにいる奴のお陰か」

と箒ちゃんを見る千冬お姉ちゃん。

あ、目そらした。

「それにお前は最下位だ。勝者の意見を聞け」

「…わかったよ。で、美晴。本当の理由は？」

気づかれてたか。

「だってめんどくさいじゃないか」

「この～それが理由か～！」

「つかまるもんか～」

追いかける一夏と逃げる僕。

「静かにしろ！」

スパパーン。

うぅ僕まで。

「クラス代表は織斑一夏に決定。以降異議は認めん。良いな！」

「…はい」

肩を落としてる。頑張れ。僕が押し付けたんだけどね。

第１４話（後書き）

健康的な生活リズムにシフトしてから、時間が足りなくなりました。

がんばりますが、ペースは遅くなります。

設定

シュッツェン

搭乗者
織斑美晴

待機状態は右腕のブレスレット。

外見はフリーダムガンダムに近い。
厳密に言えば別物。

武装もフリーダムのものが中心だが、一部他のガンダムからもヒントを得ている。

頭部バルカン砲２門

他のＩＳと違い、ヘルメット型の頭部のため設置できた近距離用実弾兵器。発射体勢を取る必要が無いため、奇襲に有効。

レール砲２門

腰に左右で２門設置されている。発射時のみ前方に展開。

ビームサーベル2本

繋ぎ合わせることで両端にビーム刃を形成させ、複雑な太刀筋で攻撃可能。

ビームライフル兼用ビームセイバー

普段はライフルとして使うが、奇襲用として刃を形成可能になっている。

しかしビームセイバーはビームサーベルより出力が劣る。

腕部グレネードランチャー

両腕に二発ずつ装備。短距離なら追尾が効くため誘導ミサイル的な使い方も可能。

背部ビーム砲2門

一撃必殺のシュッツェンの最強武装。しかし一回の使用で3分の2エネルギーを消費するため、普段はまず使わない。

装甲は薄く機動力重視。

注意点

零落白夜にはビームは無効化される。鍔迫り合いは可能だが、ビー

ム射撃兵器は通用しない。そのため実弾兵器か、サーベルで攻めるしかない。

ＰＳ装甲ではなく、核エンジンでもない。いくらなんでもパワーバランスがおかしくなるので。
まぁビームの時点ですごいのですが。

セカンドシフト後

ラファールの稼働データを元にし、武器が追加。エネルギー効率もアップ。

ビームマシンガン

ライフルとは違い、中威力のビーム弾を連射。ばらまきにより、敵の動きを封じる。

ハイマット・モード

シュッツェンのワンオフ・アビリティー。背部の羽が開き、複雑な高速機動が可能。
最高速度は紅椿の最高値とほぼ同格。
連続使用可能時間は約三分。

第１５話（前書き）

今回はそんなに面白くありません。

普段からですけど。

第１５話

こんにちは、美晴です。
お昼休みです。
食堂で４人でご飯を食べています。

「一夏さんの練習は私が致しますわ！」

「いいや、一夏は私が教える。私は一夏に頼まれているのだ！」

「あなたはＩＳ適正Ｃランク、私はＡランク。どちらがよりふさわしいかおわかりでしょう？」

「適正など関係ない！」

さっきからずうっとこの調子。
ご飯は静かに食べましょう。

「「どっちがいいのだ？（んですの？）一夏（さん）」」

「えぇ？俺が選ぶのか？」

「「当然だ（ですわ）！」」

はぁめんどくさい。

早くしちゃえよ一夏。

「仲良く二人一緒って選択肢は？」

別案を提示する一夏。

「ない！」

「ございませんわ！」

プイッと顔を背ける二人。

「食事は効率よくとれ！それとも何か？あえて私の授業に遅刻したいのか？」

食堂に来ていた千冬お姉ちゃんが生徒に注意しながら、不気味な笑みを浮かべる。

それを聞いた全員が食事をかき込み、食堂をあとにする。

アリーナ
今はアリーナ内の更衣室で着替えてます。僕達はここでしか着替えようがありません。
教室じゃいたたまれません。
さて午前中にクラス代表が一夏に決まりましたが、午後からはついにＩＳの実習が始まりました。

「着替え終わったか美晴？」

「うん」

「これはちゃんとしてて良かったな」

「さすがに自前まで女物なんてオチはないよ」

僕と一夏のＩＳスーツは束さん特製らしい。競泳用水着の短いやつみたいなの。お腹を出したくなんかないって思ってたら、希望通りのものが届けられた。監視されてるのか？

「まぁな。よしいくぞ！」

僕達は実習へと向かう。

アリーナ内
全員で整列し、千冬お姉ちゃんの説明を聞いている。女子のＩＳスーツは結構刺激が強い。ぴったりしてるから体のラインがかなり強調されてる。僕だって男の子だし、それなりに意識してしまう。前だけ向いていよう。

「それではまず専用機持ちに、実演でもしてもらうか。オルコット、織斑一夏、織斑美晴。前へ出ろ」

僕達は前へ出る。

「ではまずＩＳを展開しろ」

「いくよシュッツェン」

僕達はＩＳを展開する。

「美晴君の綺麗…」

誰かの声が聞こえる。そうかな？

「よし、次は武装を展開しろ」

セシリアさんはスターライトｍｋ?を展開。僕はビームライフル。
一夏は少し遅れて雪片を出す。

「遅いぞ織斑一夏。０．５秒で展開できるようにしろ」

「…はい」

「それとオルコット。その姿勢はなんとかならないのか」
スターライトの銃口は僕の方へ向いている。

「これは私のイメージのために必要なことで…」

「貴様のイメージのためで美晴を誤射したら殺すぞ。直せ。…いいな！」

「…はい」

気にしてくれるのは嬉しいけど、なんか雰囲気が重くなった。

「続いて近接武器だ。白式には武装がひとつしかないからな、お前はいい」

一夏は免除された。というより出しようがないもんね。
僕はビームサーベルを展開。
セシリアさんは…
「くっ、なかなか」
苦労してるな。
「もうっ！インターセプター！」
名前を呼んで展開するのは初歩らしいからホントに苦手なんだ…。
「何秒かかっている！」
「でも接近戦なんてしませんもの！」
「ほぅ？この前懐に飛び込まれ気絶したのはどこのどいつだ？」
「うっ」
だから反論したって敵わないんだからやめればいいのに。

「次は飛行の実演をしてもらう。飛べ」

「「「はいっ」」」

さすがにセシリアさんはなれてるな。すぐに飛び立った。じゃ僕も…。

「中々ではないですか、美晴さん」

「まぁ訓練機使って練習してたから」

一夏は遅いなぁ。

「何をしている！白式が一番スペックが高いんだぞ！」

千冬お姉ちゃんの怒鳴り声のあと、一夏がよろよろしながら飛んでくる。

「千冬姉はああ言うけど、まだイメージが掴めないんだよ。えぇと前方に角錐があるイメージだっけか？」

「確かに教科書にはそうかいてあるね。でも」

「あくまでも教科書の話ですから。ご自分の感覚を見つけることが一番ですわ」

セシリアさんが付け加えてアドバイスする。
僕だって訓練している内に感覚がつかめたんだから。

「大体何で飛べるのかわからないし」

「それはですね、反重力や物理の話なので…」

「僕と座学で5時間ぐらい勉強すればわかるかもね？」

「…いい。美晴と5時間は無理だ…」

「なんでぇ？」

なんてことを話していると…。

「いつまで話しているのだ。早く降りてこい」

と通信が入る。センサーを使ってみてみると、箒ちゃんが山田先生からインカムを奪って話しているみたいだ。山田先生は慌ててる。
箒ちゃん、そろそろやめないと横から修羅が近づいているよ？

スパーン
殴られてる。容赦なしか。

「お前達次は降下訓練だ。地表１０センチで止まれ」

「誰から先にいくの？」

「では私から失礼します」

セシリアさんが先にいくようだ。

ギュンッ
どんどん小さくなっていく。歓声が聞こえてくる。どうやら上手くいったようだな。

「じゃ次は僕がいくよ、一夏」

「おう」

一気に加速し５メートルほど手前で逆噴射。

「１１センチか。惜しいな。あと一瞬だけ耐えれば上手くいくだろう」

「はいっ」

さて最後は一夏か。

加速性能は抜群なんだね。あっという間に地表に迫って…。

ん？そのまま？

ドガーン

見事に地面に人型の穴が空いた。マンガでしか見たことなかったよ、こんなの。

「まったく…。あのバカは…」

額に手を当てて天を仰ぐ千冬お姉ちゃん。

「大丈夫ですか一夏さん！」

「なんとかな」

セシリアさんが一夏に駆け寄り抱きおこす。

「ＩＳに乗っていて怪我をするはずがなかろう」

と言いつつ心配そうな表情を隠す箒ちゃん。

「それでも心配するのがお友達としての優しさではなくて？」

「なんだと！」

またギャアギャアと。

「うるさいわ！織斑一夏。その穴はお前一人で埋めておけ！」

「えっ！一人でこれを？」

一夏が驚いた声をあげる。

「私も！」

セシリアさん…。

「織斑先生、私にもさせてください」

箒ちゃんまで…。

「ならん！」

まぁそうだよね。

「授業はここまでだ。解散！」

散らばっていく生徒達。

「美晴！せめてお前だけでも！」

一夏がお願いしてくるが…。

「やだ。千冬お姉ちゃんに怒られたくないもん」

「そんなぁ…」

うなだれている一夏を尻目に僕は更衣室へと歩いていく。

第15話（後書き）

はぁ…。

シャルやラウラが出てくるまで長い…。

第１６話（前書き）

今回はパーティです！

第１６話

今は夜なのでこんばんは、美晴です。
僕は部屋で休んでいます。
あれから一夏は本当に一人で穴を埋めたようです。

コンコン
「はーい」
ガチャッ

「セシリアさん」
そこにはセシリアさんがいた。

「すみません突然に…」

「いえ、それで今回はどういったご用件で？」

「あの…、クラスのみなさんがパーティを開くと言うことで、一夏さんと美晴さんを呼んできて欲しいと…。ですが一夏さんが出てきてくださらないのです…」

困った表情を浮かべるセシリアさん。

「そう。じゃ僕も一緒に行こう」

「助かります」

一夏の部屋へ向かう。

コンコン

「いーちかー」

…反応無し。

なら。

コンコンコンコンコンコンコンコンコン…。

バンッ

「うるさい！」

乱暴にドアを開ける一夏。

「なんだ居たんじゃん」

「疲れてんだよ。…ところでなんだ二人揃って…」

確かに疲れた表情をしている。

「なんかパーティをやるから一夏と僕を連れてこいって言われたんだって。で一夏が出てこないって相談に来たから」

「パーティ？なんの？」

「さぁ？それは知らないけど…。セシリアさんは？」

「私もただ頼まれただけですので…」

なんだそりゃ？

「まぁいいや。一夏行くよ！」

「わーったよ！だから引っ張るな！」

部屋から引きずり出しセシリアさんに身柄を預ける。

僕は後ろからついていく。

「セシリア！何を！」

一夏が驚いた声をあげる。

「何って、男性は女性をエスコートするものでしてよ？」

とか言いながら、一夏の右腕に抱きつき、歩いている。

「一夏！お前はいったい何を！」

箒ちゃんが来た。今まで準備手伝ってたのか？

「いや、セシリアが…」

「一夏さんにエスコートして頂いてるのですわ？」

「ここは日本だ！エスコートなどと！」

「なら篠ノ之さんはお一人で行かれれば良いでしょう？」

「なっ！…ならば私はこちらを」

「箒まで！」

ついに誘惑に負け、箒ちゃんは一夏の左腕に抱きつき、一夏は両手

に花の状態になる。
モテる男は大変だね。
「なっ、なぁ」
「「なんだ（ですの）？」」
「その…、歩きづらいんだが…」
腕振らないと人間って歩きにくいもんね。
「不満か？」
「不満なんですの？」
二人同時に見つめられた一夏は…。
「いえ、何でもないです」
屈した。
寮内の食堂

さてようやく食堂に着きました。一角でクラスのみんなが待っている。

あ、横断幕がかかってる。なになに？

「「いっちークラス代表おめでとうパーティ？」」

一夏と一緒に読んじゃった。

「書いたのってやっぱり…」

僕はある人に視線を向ける。

「そう～私だよ～？ミー君」

やっぱりのほほんさんか。ホントは布仏本音さんというのだが、彼女はいつものほほんとしているから僕と一夏はのほほんさんと呼んでいる。あだ名をつけるのが好きらしく、一夏はいっちー。僕はミー君。…猫の名前みたい。

「さあさあ主役は真ん中に！」

一夏と僕とオルコットさんは、中心に押し込まれる。

「それではいっちーの代表決定を祝って…」

カンパーイ

のほほんさんの音頭でパーティが始まる。頑張ってねとか、なんやかや言われて取り囲まれる一夏。

「人気だな一夏」

不機嫌そうに言う箒ちゃん。まぁ二人きりが一番なのはわかるけど…。

「箒にはそう見えるのか？むしろ助けろよ」

もみくちゃにされている。

「はいはーい！新聞部でーす！この度クラス代表になった織斑一夏君と、美晴君とオルコットさんに突撃取材で～す！」

また騒がしい人が出てきた。

「黛薫子（まゆずみ）と言います。よろしくね！では早速！」

人の懐に入るのが上手いなぁ。

「で、一夏君抱負を聞かせてくれるかな？」

「えーと、頑張ります…」

それだけ？いつもそうだね一夏。

「うーん、まぁいいや。適当にこっちで、倒せるものなら倒してみろとか足しとくよ」

それって捏造では…。記者の魂は？

「んじゃ次。美晴君。スカート履く気はない？」

「あるわけないでしょ？というか僕のは質問が変じゃないですか！」

「冗談よ、冗談」

絶対わざとだ。

「んじゃちゃんとしたのを。なんで一夏君に代表を譲ったの？」

ちゃんとしてる。

「一夏はまともに練習すらしてませんでしたから、クラス代表として経験を積んで強くなって欲しいかなと」

「ふむふむ。本音は？」

「ははっ、わかりますか。クラス代表は面倒だからです」

「まぁ確かにね。ただ闘うだけならいいけど、会議とか面倒なのよね。これは捏造の必要が無さそうね」

元々するなよ。

「次、オルコットさん」

「なんでもどうぞ？」

「一夏君にお姫さまだっこされた感想は？」

おぉ突撃取材だ。

「っ！……それは…その…」

指をこね言い澱むセシリアさん。

「時間ないからいいや。…思わず惚れるぐらい気持ち良かった…と」

「そんなことはっ…でも…」

あながち捏造じゃないからね。これ。

「じゃ最後に三人の写真を撮るからね。うーん、真ん中に一夏君で両サイドに美晴君とオルコットさんで。手はそうだね、真ん中で三人とも重ね合ってくれるかな？」

「「「はい」」」

「じゃいくよ～！」

パシャ

その瞬間、クラスのみんながファインダーに入っていた。

「なんでみなさんまで！」

「いいじゃんオルコットさん、一夏君の手握ってるんだから！」

「それに篠ノ之さん！」

箒ちゃんは一夏の隣をゲットしていた。

「ずるいですわよ！」

「なら私も一夏の手を握ればいいのか？」

「そうではなくて！」

「ねぇ、俺の意思は無視なの？」

一夏は一人寂しそうだ。

はぁ、やっぱり疲れるなぁ。そろそろ眠くなってきた。ふぁあ…。

同時刻

一人の少女が学園内をさまよっていた。

「何よこの学園、めちゃくちゃ広いじゃないのよ。えぇと…」

少女は手元の紙を見る。

「総合受付へ行けって…。だからどこにあるのよそれ！」

３０分後

「や、やっと見つけた。すみませーん」

「はいはい」

受付の女性が出てくる。

「あぁ、転入生の子ね？あなたは２組ね」

受付の女性はテキパキと事務作業をこなしていく。

「あの！織斑一夏って何組ですか！」

一夏を気にする少女。

「あぁうわさのあの子ね。１組よ。クラス代表になったそうよ」

書類を片付けながら答える女性。

「2組のクラス代表って決まってますか？」

「確か決まってたと…。聞いてどうするの？」

「ちょっと譲ってもらおうと思って！」

ニヤニヤと笑みを浮かべる少女。

「待ってなさいよ！一夏！」

兄弟の騒動の種はまた一つ増えたようだ。

第１６話（後書き）

これからミハちゃんの黒い思考を少し出していく予定です。

いつまでも良い子ではつまらないですから。

ノック連発がその予兆。

第１７話（前書き）

あの転校生がやって来ます。

あと、ある意味ミハちゃん最強です。

第17話

おはようございます、美晴です。

教室はある話題で騒然としています。

「2組に転校生が来るんだって！」

今頃になってだなんて。

「何でも中国の代表候補生らしいよ？」

へぇー。中国といえば鈴ちゃん元気かなぁ。

「今ごろ候補生が来るなんて、私の実力を危ぶんでかしら？」

セシリアさんが僕達に近寄って言ってくる。

それはどうだろう。

「とにかく今度のクラス対抗戦、一夏君には勝ってもらわないと！」

「そうよ！学食のスイーツ半年食べ放題がかかってるんだから！」

それ本当？

「一夏！僕も一夏が勝てるように全力で鍛えてあげるよ！」

実は僕も学食のケーキはお気に入りなんだ。

「おっ、おう。お手柔らかにな？」

いや全力で。

「大丈夫よ美晴君！専用機持ちはこの１組と４組だけだから！」

よしっケーキゲット！

「その情報古いよ！」

その言葉にクラス中の視線が集まる。声の主はドアに寄りかかり、腕と足を組んでキメていた。

「中国代表候補生凰鈴音！２組のクラス代表よ！私も専用機持ち。１組に宣戦布告に来たわ！」

「鈴ちゃん！」

まさか噂をしたから現れたのか？

「鈴…」

「久しぶりね一夏、美晴！」

「お前それ似合わないぞ？」

ズルッと滑る鈴ちゃん。挨拶よりそれが先か？

「まったく…。せっかくかっこよく再会しようと台詞考えたのに！」

ご苦労様です。

「それより鈴ちゃん？」

「何よ美晴」

「そろそろそこ、どかないと…」

あ、遅かった。

「何なのよ！」

「邪魔だ！」

スパーン

相変わらず良い音。

「いったぁ！なにす…」

後ろを振り返り、何も言えなくなってしまう鈴ちゃん。そう、彼女の背後には天敵が立っていた。昔から苦手だったよね。

「ち…千冬さん？」

スパン

素早く振り抜かれた2発目。

「織斑先生だ。そこに居ると邪魔だ。とっとと2組に帰れ！」

「うぅ…。一夏、美晴！後で一緒にご飯食べようね！逃げんじゃないわよ！」

頭を抑えつつ、鈴ちゃんは2組へと帰っていく。

そっかー、鈴ちゃんか。誰応援しようか？

箒ちゃん、鈴ちゃん、オルコットさん。
中立でいいや。誰かに加担すると、あとが大変そうだ。

お昼休み
今は食堂に来ています。
「遅いわよ！あんた達！」
ラーメンを持ったままど真ん中に立っている鈴ちゃん。
「遅いって…。鈴ちゃんが先走っただけじゃないか」
「それに迎えに来るなり何なりすれば良かったじゃないか」
僕達の連続攻撃が襲う。
「うっ」
「「それにラーメン延びるよ（ぞ）？」
「う、うっさいわね！あんた達も早くもらってきなさいよ！」

「「はいはい」」

僕達も久しぶりにラーメンを選び、３人で席に着く。

「それにしても元気してたか？鈴」

「えぇ、すこぶるね」

「中国の代表候補生だなんていつの間になったの？」

「うん、中国に帰ったらやること無くなっちゃって、暇だからＩＳの勉強始めたら何か選ばれてた」

ラーメンをすすりながら事も無げに言う鈴ちゃん。

「そんなんでなれるんだから、才能に恵まれてるんだな」

「まぁね。何でもそつなくこなす鈴ちゃんなのよ！」

確かにやらせたら何でも上手かったよね。

「それにしてもビックリしたわよ？ＩＳに乗れる男が出てきたって

ニュース映像見たら、あんた達なんだもん」
テーブルに両肘をつき、アゴを手の上に置いている。
「それには俺達が一番ビックリした」
「うんうん」
「高校の受験会場がわからなくて、適当に目の前にあった部屋に入ったんだ」
一夏が当時の状況を説明し出す。
「そうしたら、真ん中にＩＳが置いてあって、試しに触ってみたら」
僕も続けて説明する。
「動いちゃったって訳？」
「「そう」」
深く頷く僕たち。

「何か大変だったのは伝わってくるわね」

「「大変でした」」

バンッ
テーブルが四本の手で叩かれた。

「「ちょっといいか（よろしくて）？」」

箒ちゃんとセシリアさんだ。

「さっきから随分と仲良さそうに話していたが」

「誰なんですのこの方？」

二人ともちょっと殺気が出てる。

「もしかして…」

「どちらかと付き合ってるとか…」

聞きづらいこと聞くね。

「べ、別に一夏とはまだ付き合ってなんか…」

鈴ちゃんも慌てたのか含みを持たせる言い回し。また、二人の敵確定。

「そうだぞ！鈴はただの幼馴染みだ！」

一夏のバカ。

「「幼馴染み…」」

箒ちゃんとセシリアさんはほっとした表情。一方…。

「ただの幼馴染み…」

沈んだ表情の鈴ちゃん。何だこの空気。でっかい爆弾落としてくれたな、一夏は。

「しかしこんな幼馴染み、私は知らないぞ！」

箒ちゃんが聞いてくる。

「無理もないよ。箒ちゃんが引っ越したあと、入れ替わりみたいな形で転校してきたんだ」

できるだけ爆弾魔には喋らせたくない。

「俺達にすれば箒がファースト幼馴染み。鈴がセカンド幼馴染みと言ったところだ」

ほら変なこと言う。ファースト、セカンドなんて言い方、また波紋を呼ぶよ？

「そうか、私が最初か…」

受け入れたよ…。

「別に過ごした時間なら私の方が長いわよ！」

こっちはダメか。

「それなら私の方が！」

引き下がらないな。

「一夏達はいつもアタシの家でご飯食べてたのよ？」

また爆弾か。

「「どういう事だ（ですの）？」」
君も加わるの？セシリアさん。
「鈴の家が中華料理屋でよく食いに行ってただけだよ」
「中華料理屋…」
「お店なら当然ですわね」
一夏によりアドバンテージゼロにされた鈴ちゃん。
確かによく食べにいったよね。…あ！
「ねぇ鈴ちゃん。おじさん達は元気？」
「多分元気だと思う…」
はっきりしないな。何かあったかな？
「それより一夏。アタシがＩＳ教えてあげようか」
これ以上触れられたくないんだろうな。

「一夏には私が教えることになっている！」

「私の方があなたより教え方が上手くってよ！」

バンッ

「大体あんた誰よ！」

立ち上がりセシリアさんに言う鈴ちゃん。

「鈴ちゃん！そんな言い方ダメ！」

感情的になってしまったのは考慮しますが、さすがに注意します。

「ごめん。で、誰なのあなた」

「ご存知無いんですの？イギリス代表候補生セシリア・オルコットを！」

いつも通りな言い方。

「悪いけどあたし他の国に興味ないから。で、どうすんのよ一夏」

「私だよな！」

「私ですよね！」

「あたしだよね！」

それぞれ一夏に迫る。

「美晴ぅ！」

助けを求めてくる一夏。

「まぁ仲良く全員で教えれば良いじゃない」

多少は妥協しあわないと。

「納得できん！」

「できませんわ！」

「できない！」

うぅ、全員に否定された…。

「そ、そんなにみんなで言わなくてもぉ…。僕はみんなに仲良くしてほしかったのにぃ」

なんか涙が…。

「わっ、やばい。泣くな美晴！」

一夏。

「ごめん！あたし達が悪かったから！」

鈴ちゃん。

「すまない！だから泣くな！」

箒ちゃん。

セシリアさん以外全員が慌てる。

「…わかった」

「美晴さんを泣かしたらなにか起きますの？」

「セシリアは知らないよな。美晴が泣くと…」

「鬼が来るのよ」

「鬼？」

「千冬さんだ」

次々に説明していくみんな。

「今まで何回か、泣かせてしまったことがあるんだが…」

「千冬さんが来て…」

「全力でボコボコにされるのよ！」

「そんなまさか？」

セシリアさんが驚く。

「「「事実だ（よ）」」」

「美晴が泣いている気がしたが、誰か泣かしたか？」
千冬お姉ちゃんが食堂に入ってくる。
「「「来た！」」」
「本当に…」
セシリアさんが驚いている。
千冬お姉ちゃんがこっちへやって来た。
「美晴を泣かせてないだろうな！」
「「「いいえ！」」」
「本当か？美晴」
顔を覗き込みながら、頭を撫でてくれる千冬お姉ちゃん。
「大丈夫。泣いてないから」

「そうか。ならいいが。…泣かせたらどうなるかお前達ならわかっているな！」

「「「はいっ！」」」

直立不動な三人。

「ならばいい。美晴。泣かされたらすぐにお姉ちゃんに言え。その相手を殺してやる」

「わかった！ありがとう千冬お姉ちゃん！」

千冬お姉ちゃんは背中を向け、手を振りながら帰っていく。

「ある意味、最強なのですね。美晴さんは…」

「「「そう」」」

「ん？何の話？」

「そして自覚がないのが恐ろしさを増すんだ…」

何を言ってるんだろう一夏は？

「私も気を付けますわ…」

「それが良いわよ…」

「まだ死にたくないならな…」

あ、そろそろ昼休みが終わる。早く食べちゃおう。

第17話（後書き）

術　織斑千冬召喚。

たぶん世界最強ですね。

第１８話

こんにちは、美晴です。

今はアリーナです。

結局みんなで教えることになりました。

箒ちゃんは打鉄に乗っています。

鈴ちゃんはＨＲが長いのか、まだ来てません。

「さて、始めようか一夏」

「おう。よろしくな」

「まず手順を説明するね。僕が長距離射撃、セシリアさんがブルーティアーズでオールレンジ射撃、箒ちゃんが接近して格闘。一夏はとにかくそれを避ける。以上！」

「はい、美晴先生」

手をあげて質問する一夏。

「はい、なんでしょう一夏君」

「人はこれをイジメと呼ぶ気がします」

「気のせいです」

「…俺に死ねと」

「死なない程度に加減します。僕のケーキのために頑張ってください」

「あのなぁ！」

「まぁまぁ。白式の零落白夜は一撃必殺。でもシールドエネルギーを消費しないと発動できない以上、使いどころを見極めて、それまで温存出来るようにならないと。鈴ちゃんに勝てないよ？」

「わかったよ。じゃ頼むよ」

「よし、箒ちゃん、セシリアさん。よろしくね」

「あぁ！」

「はい！」

「始め！」

合図と共に一夏が飛び立つ。
セシリアさんがブルーティアーズを展開し、一夏を追い回す。避けたところに僕がビームライフルで狙撃する。再び避ける一夏。そこには箒ちゃんが待っている。

「もらった！」

「くそっ」
ガァン

鍔迫り合いをする二人。

「今ですわ！」

そこへブルーティアーズからレーザーが放たれ、二人が距離を取る。

「甘い！」

そして回避を先読みした僕がレール砲を撃つ。

「ぐあっ！」

ついに被弾。

「当たっちゃダメ！回避して！」

「結構厳しいぞこれ！」

泣き言を言う一夏。

「それでも避け続けるんだ！もう一度！」

「鬼ぃ！」

しばらく経過。

「はぁはぁはぁ。疲れたぁ！」

大の字で寝転がっている一夏。

「まぁ今日はこのぐらいで終わりにするか。じゃ二人とも明日もよろしくね！」

「「もちろん（ですわ）」」

「じゃ僕たちは先に帰るから。風邪引かないようにね」

一夏を置いて僕たちは部屋へ帰る。

鈴ちゃん来なかったな。

「ところで美晴さん。さっきの武器なのですが…」

「あぁ、あれはね…」

一夏だ。

命からがら、更衣室へとたどり着いた。

「はぁ、きつかったぁ」

「お疲れ一夏！」

鈴が出てきた！

「鈴！ここ男子用だぞ！」

「別にいいじゃない。今あんたしか居ないんだし」

「まぁそうだけど…」

「それより、はいコレ！」

タオルとスポーツドリンクを渡してくれた。

「サンキュ。でも冷たい方が良かったなぁ」

渡されたドリンクは温め。

「冷たいドリンクで体温を急激に下げない方が体にいいのよ」

「美晴みたいなこと言うのな」

「ちゃんと勉強しただけよ…一夏のために」

「ん？」

後半聞き取れなかった。

「何でもないわよ！ところで一夏。…あの、さ。あたしがいなくなって寂しかった？」

「あぁ、まぁ遊ぶ友達が減ったのは寂しかったな」

「そうじゃなくて！」

なに怒ってるんだ？

「あ！」

「何？」

「弾とかには連絡したのか？あいつらお前が帰ってきたって聞いたら喜ぶぞ？」

「期待したあたしがバカだったわ…」

「わりぃ、鈴。そろそろ戻らないと箒に起こられるわ」

「箒ってあの子？何で怒られるの？」

「あいつと同室なんだ。シャワーの時間にうるさくて。でも幼馴染みで助かったよ。他の人なら落ち着かなかっただろうな」

「幼馴染みならいいのね！」

ダッ

鈴は走って出ていった。

「何なんだ一体？」

一夏の部屋

めんどくさいことになった。鈴がこの部屋に住むって、ボストンバッグ持って乗り込んできた。

「幼馴染みならいいんでしょ！私がこの部屋に一緒に住むからあんた部屋変わって！」

「何を言うか！そんなことできるわけないだろう！」

「いいからとにかく変わりなさいよ！」

収拾つかないな、これは。仕方ない。

「落ち着け二人とも。この部屋割りは最終的に千冬姉が決めたんだ。千冬姉の決定事項を覆せるとでも思ってるのか？」

「「……」」

よし！解決。

「わかったわよ。部屋については諦めるわ。ところで一夏。あたしとの約束覚えてる？」

約束？あれかな？

「料理が上手くなったら酢豚を毎日…」

「そうそう！」

「おごってくれるってやつだろ？」

鈴がこけてる。なんか違ったか？

「…最っ低！女の子との約束覚えて無いなんて！いいわ！覚悟してなさい！今度のクラス対抗戦でボコボコにして無理矢理にでも思い出させてあげるわ！」

と言いながら、鈴は部屋を飛び出していった。何だったんだ？

美晴の部屋

もう、一夏の部屋はうるさいなぁ。

コンコン

「はーい」

ガチャッ

「鈴ちゃん」

今にも泣きそうな顔。

「どうしたの一体？」

「美晴ぅ…」

「ふむ。事情はわかった。僕としては予想通りだ」

「何がよ？」

「僕としてはあの時点、つまり鈴ちゃんが約束を取り付けた時点で、一夏が意味を正しく理解してないって気付いてたんだ。一夏だからね。遅かれ早かれこんなことになるんじゃないかって、予想してたんだよ」

「何でちゃんと教えとかないのよ！」

とは言え…。

「他人の恋に介入するつもりはなかったし、回りくどい言い方をした鈴ちゃんもいけないと思うよ？相手はあの一夏なんだから」

「うぅ…」

言い負かされて、下を向く鈴ちゃん。

「大事なのは鈴ちゃんがこれからどうするかだよ？このまま諦めるつもりはないでしょ？」

「ない！」

強い意思が宿った目をしてる。

「じゃ行動しないと。箒ちゃんやセシリアさんも一夏のことが好きみたいだし、待ってるだけじゃ一夏は振り向いてくれないよ？」

「…そうね。よし！これからガンガンいくわよ！覚悟しなさい、一夏！」

立ち上がり、拳を強く握りしめている。

「そうそう、その意気だよ鈴ちゃん。でも焦っちゃダメだよ？戦いでも恋でも焦りはいいことをもたらさないからね」

恋は駆け引きって言うし。

「試しにしばらくの間、一夏を無視してみれば？」

「え、なんで？」

「会うたびに無視されると、自分が何かしたのか考えるし、見て欲しいからより近付こうとしてくるはずだよ」

「なるほど！やっぱり美晴に相談してよかった！なんかスッキリした！」

「それはよかった。じゃそろそろ遅いし、部屋に帰りな？」

ドアを開け優しく言う。

「おやすみ、美晴」

「おやすみ」

ふぅ。なんて言ったはいいものの、かえって一夏が大変になる様にしちゃったのかな？

まぁいいや。元々一夏が蒔いた種だし。

さて、寝よう。

第１９話（前書き）

えぇと、クラス対抗戦までです。

戦闘シーンは拙いので短めにしてあります。というか浮かびません。

第１９話

みんな元気にしてる？凰鈴音よ！

昨日美晴に言われた通り、一夏を無視することにしたわ。

「おう、鈴。おはよう！」

ぷい。

「おい、鈴。怒ってるのか？」

「……」

「鈴！」

無視してあたしは教室へと入っていく。

「鈴…」

なんか心苦しいわね。でもいつもよりは一夏は話しかけてきたわね。

上手くいってるのかも。

昼休み
今は食堂。

「鈴！一緒に飯食おうぜ！」

無視。

「やっぱ怒ってんだろ？昨日のことが原因なら謝るから！」

くっ、そろそろあたしの心が限界よ。でも…。

無視してあたしはクラスメイトと食事をする。

「なんだってんだよ…」

一夏が落ち込んでる。さすがにやりすぎかしら…。

「一夏さん！凰さんはほっといて私と食べましょう！」

オルコットが一夏を誘ってる。

「悪い、今日は一人で食べるわ…」

「一夏さん…」

放課後
あたしはさっさとクラスを出て、寮へと向かう。

「待てよ！鈴！」

…無視。あたしは廊下を走る。

「俺がしたことが悪いなら直すから、教えてくれよ！お前とケンカなんかしたくないんだ！」

一夏も走って追いかけてくる。これ以上はやっぱ無理！

「…ごめん。あたしだって一夏とケンカしたいわけじゃないのよ…。ただ…、あんたにあたしの事を意識してもらいたかっただけ…」

恥ずかしい！何言ってるのよあたし。

「…そうか。確かに今日一日お前の事を考えてた…。そうか、怒ってるわけじゃないんだな？」

一夏があたしを気にしてた…。作戦成功？

「じゃ、もう無視はしないな？」

「しないわよ。…ごめんね一夏」

仲直りの握手。今自然に手が握れてる！

「で、約束って…」

一夏が話を変えてくる。

「それは自分で考えなさい！どうしてもわからなかったら、今度の試合、あたしに勝ったら教えてあげるわ！」

ここだけは譲れない！

「仲直りしたじゃないか！」

「それとこれとは別よ！」

「よし、わかった！絶対鈴に勝ってやる！」

一夏は強く言う。

「少しは考えなさいよ！」

まったく。自分で考えて気付いてほしいのに…。

クラス対抗戦当日
アリーナ控え室

よう、一夏だ！

ついに来た！対抗戦の日が！この日までの練習を思い出すだけで涙が出てくるぜ…。

あれから来る日も来る日も、練習という名のリンチを美晴達に浴びせられつづけた。
美晴は、「立て！貴様はその程度なのか！」とか千冬姉の真似してたし。マジで死ぬかと思った。

「すごい数の観客が来てるね。どう、一夏。緊張してる？」

美晴が俺に聞いてきた。

「してねぇ。美晴達との練習を思えば、こっちはたぶん天国だ」

「へぇ、あっちは地獄だったんだ？いっそのこと送ってあげれば良かったかな？本物の方へ…」

美晴は黒い笑みを浮かべてる。

「やめてくれ！美晴、最近思考が黒いぞ！」

「冗談だってば！」

そうは思えない表情だった…。

「お！対戦表が出てきたぞ！」

「第1試合で鈴ちゃんと一夏じゃん」

「都合いいぜ。勝って約束がなんなのか教えてもらうか！」

「結局わからなかったんだね…」

美晴が何か言ってるけど…。そろそろ時間か！

「いってくる！美晴！」

「いってらっしゃい、一夏」

アリーナ内

俺と鈴は所定の位置について、相対している。

「一夏！約束の意味わかった？」

「考えまくったけどわかんねぇ。だから勝って教えてもらうぞ？」

「ふん！あたしに勝てるもんならね！」

…試合を開始してください…

「いくぜっ！」

「かかってきなさい！」

俺は雪片で攻撃。鈴は2本の青竜刀で迎え撃つ。

ガァン
鍔迫り合いの状態になるが、どうやらパワーは鈴の方が上みたいだ。
これ以上は耐えきれない！

「くそっ！」

仕方なく距離を取る。

「くらえっ！」

鈴が双天牙月を俺に向かって投擲してくる。

「当たるかよっ！それに武器投げてどうするんだよ！」

攻撃は外れたから鈴は今、丸腰。
攻撃しようと距離を詰めるが、鈴の手にはさっき投げたはずの双天牙月があった。

「なんで！」

急ブレーキで鈴の攻撃をかわす。

「いつでも自分の意思で呼び戻せんのよ！」

ずりいぞ！

「このまま押しきらせてもらうわよ！」

鈴が青竜刀を連結させてバトンのように回転させながら高速で迫ってくる。

ギンッ　ガンッ　キンッ

何合か切り結ぶが、遠心力によって威力が増幅された横薙ぎ。何とか食い止めるのが限界だ。

それにさっきより攻撃パターンが複雑化してる！

「ダメだ！このままじゃ埒が明かない！」

受けるんじゃダメだ。パワーで押しきられる。鈴のやつ、スピードそのものは遅いが、間合いの詰め方がうまい。初速だけならセシリアより上だ。俺と同じ近接格闘型か！

「せいっ」

鈴が切りかかってくるが、今度は受け止めない。

瞬間的に後方へ回避し、空振りの隙をつき、間合いを詰めながら空きの鈴へ攻撃する。後の先を取る！

「はぁっ！」

鈴の左腕に雪片が当たる！

「このままっ！」

攻撃をくらい、体制が崩れたところへ連撃を食らわせる！

右腕、脚部、そして突き！

「やらせるかぁ！」

耐えかねた鈴が振りかぶってくるが、鈴の左へ回避しそのまま後ろを取り攻撃。鈴は追い付けていない。

「やられたまんまで！」

後ろ向きのまま薙いでくるが、これも加速で回避しカウンターを仕掛ける。

「くそっ。機動力が違いすぎるわ！」

今度は鈴が距離をとってくる。少しこちらが有利か。

「ぐっ」

…バリア貫通。シールドエネルギー残量４６０…

「何だ今の衝撃は！」

突然２回の衝撃が俺を襲ってきた。

射撃か？でも砲身も砲弾もまったく見えなかったぞ！

管制室

いつものように僕は、千冬お姉ちゃんと山田先生と戦況を見ている。

「山田先生、今一夏に何が起こったんですか？」

「では機体の説明からしましょうか。凰さんの機体は中国の第３世代ＩＳ（シェンロン）甲龍です。近距離格闘型でスピードが犠牲になっていますが、パワーがすごいです。特徴的なのは２つのアンロックユニットであるスパイクアーマーです。あの中に、今凰さんが放った兵器が隠されています」

「その兵器とは？」

「その名を龍砲といいます。空間を圧縮し、砲弾として放ちます。実弾兵器ではないので、砲弾を見ることは不可能です。また砲身自

体も不可視になっています。情報によると射角の制限もないようですね」

「そんなのどうやって対抗すれば…」

「回避し続けるのが一番かと…」

「そんな…」

勝ちようがない相手じゃないか。

「美晴、山田先生はあの機体をどう分類した」

千冬お姉ちゃんが質問してくる。どうって…。

「近距離格闘型と…」

「そうだ。あくまでも格闘がメインで射撃はサブだ。凰もさほど射撃を練習していないようだ」

「そこをつけば！」

「あぁ、なんとかなるかもしれん」
どうする、一夏…。

「ほらほら！さっきの勢いはどうしたのよ！」
連射してくる鈴。

「弾が見えないなんてどうすれば…」
とにかく避けるしかない。加速して、とにかく飛び回る。

「えぇい！ちょこまかと！」
さっきより狙いの付け方が甘くなってきた。

「後ろとった！」

「甘い！」

ドンッ　ドンッ
ギリギリ外れて、アリーナの地面に着弾する。

後ろにも撃てるのか！

「どう？驚いたでしょ！」

「あぁ驚いたよ！油断ならないじゃないか！」

回避運動を続ける。さっきから見ていたが、連射はしても、そこまで速射できるわけでは無さそうだ。なら狙うのは…

ドンッ

外れて俺の右の地面に着弾する。

「今だっ！」

俺は一気に加速して鈴に斬りかかる。

「瞬間加速（イグニッションブースト）？！」

鈴が驚いている。理論はよくはわからないが、あのリンチから生き延びるために使えるようになっていた。

「決まれぇぇ！」

直線的な加速からの勢いを利用して雪片を振りかぶる！

ドゴォーン

その瞬間俺達の間に１本の閃光が走った。

「あぶねっ！」

何とか避けることができた。

「鈴！大丈夫か！」

「…平気よ」

少しビックリしているのか、声が弱い。

「それにしても…」

俺は閃光の来た先を見る。

そこには全身装甲のＩＳが浮かんでいた。

第２０話（前書き）

無人機戦です。あっさり終わります。

第２０話

美晴です。挨拶はあと！

今、メッチャクチャやばいことになっています。一夏と鈴ちゃんの試合が決まるのかというところに、突然の乱入者。全身装甲のＩＳが浮かんでいた。

「お、織斑先生！今のは！」

山田先生はすごく慌てている。

「あぁ、アリーナのシールドを突き破るほどの威力の光学兵器による攻撃だ。…山田先生！当事件の警戒レベルをＤに指定！すぐさま生徒および来賓を避難させろ！」

「は、はい！」

慌てながらも素早い対応で、アリーナから人を退避させる。

「一夏君！凰さん！今すぐそこから逃げてください！あとは教師部隊がなんとかしますから！」

一夏達にも退避を呼び掛ける山田先生。

「…ダメです先生。俺達アイツにロックされています」
返ってきた一夏からの情報でより混乱が増す。
「織斑先生！私に救援に行かせてください！」
セシリアさんが通信で呼び掛けてくる。
「オルコット、残念ながらそれは不可能だ。現在アリーナの遮断レベルは４。入ることも出ることも不可能だ。今３年生にクラッキングをさせているが、いつ終わるかはわからん」
「そんな…」
何もできないのか、僕達には。…いや、ある！
「織斑先生、僕のシュッツェンの装備ならなんとかなるかもしれません」
「本当か！」
「ええ。シュッツェンの背部ビーム砲の威力ならアリーナのシールドを破壊できそうです。ただ…」

「ただ…なんだ？」

「一撃で、全エネルギーの3分の2を消費するために、そのあとの戦闘においては全力を出せません。ですので後詰めを用意しておいてください」

「わかった。頼んだぞ！美晴！」

「いってきます！千冬お姉ちゃん！」

僕は管制室を飛び出し、シュッツェンを緊急展開させる。ISスーツを来てない分、若干だがエネルギーが減っているが影響は大したこと無い。

「いっけぇ！」

背部ビーム砲を放ち、シールドを破壊する。

「よし！」

僕はアリーナへと入っていく。

「一夏！鈴ちゃん！お待たせ！」

「「美晴！」」

「3人であいつをぶっ倒すよ！」

「「よっしゃ！」」

僕たちは散開しながら作戦を立てる。

「僕はアリーナのシールドを破壊するのにエネルギーを使っちゃったから、もう大威力の攻撃はできない。最後は一夏の零落白夜で決める！だから、連携攻撃で隙を作ったところで、トドメを刺して！」

「「了解！」」

まず牽制とばかりに、鈴ちゃんが龍砲を放つ。

それを少し体を動かすだけで、完璧に避ける敵のＩＳ。

「何で避けられるのよ！弾丸は見えないはずなのに！」

「まともに当てようなんて考えない方がいい！」

「危ない！避けろ美晴！」
僕のすぐ横を粒子が通過していく。あれに当たったら、さすがにひとたまりも無い。

「サンキュー一夏！」

「集中しろよお前ら！」
一夏に喝を入れられる。

「悪い！」
その間、敵の攻撃はなかった。

管制室
「あ、危なかったですね今のは！」

「コーヒーでも飲んで落ち着け山田先生」
と言いながら織斑先生が取ったのは…。

「先生それお塩ですよ？」

「なぜここに塩が？」

「結局２人の弟さんが心配なんですね？」

「君が飲むといい」

コーヒーが差し出される。

ゴクッ

「やっぱりしょっぱいですぅ」

「ふん！」

今度は長い腕を振り、フックみたいな攻撃をしてくる。

「なんつうリーチだ」

毒づく一夏。

「今度はこっちの番だ！」
僕はビームライフルを撃ちながら、左腕のグレネードも放つ。
しかしそれも驚異的な加速と身のこなしで回避される。
「一夏。鈴ちゃん。あいつなんか変じゃない？」
「何が？」
一夏が聞いてくる。
「さっきから、僕達が話してるときは攻撃してこないし、人間が乗っているとは思えない回避だし」
「無人機ってこと？そんなことあり得ない！」
鈴ちゃんが予測をするが、自ら否定する。
「でも、無人機なら遠慮無くいけるってこった！」
一夏が言う。

「それじゃ仕掛けるよ！」
僕はビームライフルを放ち、鈴ちゃんの前へ敵を誘導する。
「今だ！鈴ちゃん！」
「任せときなさいっ！」
龍砲を放つ鈴ちゃん。
しかしまたも避けられる。でも…！
「もらったぁ！」
回避先には一夏が待っていた。零落白夜を発動させ、大上段から振り下ろす。
敵は、モロにくらい地面へと叩きつけられる。
「仕止めたか？」
「どうだろう、見てみないと」
僕達は近寄ろうとする。しかし突然警報音がなった。

…敵機再起動を確認…

やばい。このままじゃやられる！

ビーッ　ドウンッ

刹那、僕達の前をレーザーが通過し、敵を貫く。

「セシリアさん！」

「狙撃は私の得意分野でしてよ？」

今の一撃で完全にトドメを刺されたのか、敵は沈黙した。

「よかったぁ…」

疲れたからなのか安心したからなのか、僕は意識を手放してしまう。

「「美晴！」」

駆け寄って来る二人を確認したところで、僕の記憶は途切れた。

保健室
どこだここは…。保健室か。そういえばあの後倒れたんだっけか？
隣から声が聞こえる。
「美晴大丈夫かなぁ？」
「大丈夫だ。あいつは強いんだ」
一夏と鈴ちゃんだ。
「結局俺達の試合、引き分けになっちゃったな」
「まぁ勝敗の決めようがないじゃない」
「そうだな。なぁ鈴。この前おじさんの事聞いたら、たぶん元気って言ってたけどあれ何でだ？」
「…うちの両親離婚したのよ」
「あんなに仲良さそうだったのにか？」

「うん。2年の終わりにね、離婚するって言われて、私はお母さんに着いていったのよ。でもあくまでも、お母さん達が喧嘩してただけで、あたしはお父さんは嫌いじゃなかった。でもそれ以来、お父さんには連絡も取ってないの」

「そうか…」

「家族って難しいよね。ちょっとしたきっかけであんなに仲が良かったのがバラバラになっちゃうんだから」

残念だね、あんなにみんなで笑顔だった家族なのに。

「…そうだな。ところで鈴。俺なりに考えたんだが、あの約束の意味ってさ…」

「い、いいの！あのままで合ってるわよ！」

えぇ？何でそこで引くの？

「そうか。俺はてっきり、私の味噌汁を…的なものだと考えたんだが…」

一夏にしては珍しく当たってたのに。

「違うわよ。まぁいいや、一夏。今度あたしの酢豚食べてね？」

「おう、楽しみにしてるよ」

もういいや、これ以上進展無さそうだし起きよう。

「あの～人が寝てる間になに横でいちゃこいてくれてるのかな？」

「美晴！お前起きてたのか！」

「べ、べ、別にいちゃこいてなんか！」

「そう。その割には酢豚食べさせる約束してたじゃない？」

「そ、それは…」

「り、鈴！美晴起きたし千冬姉呼んでこようぜ！」

「そ、そうね！心配してたし！」

そうして二人は部屋を出ていく。逃げたな。

にしてもあの無人機は一体？

ガラッ

「美晴、目が覚めたようだな」

「千冬お姉ちゃん！」

「まったく…。あまり無茶をして私に心配をかけんでくれ」

少し寂しげな顔をしている千冬お姉ちゃん。

「ごめんね？」

「まぁいい。怪我もないようだしな」

頭を優しく撫でてくれる。

「ところで千冬お姉ちゃん。あの無人機だけど…」

少し真剣な表情で尋ねる。

「あぁ、最後の一撃で、コアは機能を停止していた。今は、学園の地下にある」

「コアは、登録されていたやつ？」

「いや、未登録だった」

「４６８個目か。何を考えてるんだろうね」

「さぁ…な」

そろそろ日が沈むみたいだ。

「織斑美晴！」

織斑がついてるから大事な話だ。

「はいっ」

「後半の話は本来、一生徒にして良い話ではない。だから聞かなかったことにしろ。いいな！」

「はい！」

「では、落ち着き次第部屋に戻るように」

そう言って千冬お姉ちゃんは保健室を出ていく。

そろそろ戻ろうかな。

第２０話（後書き）

この先、会話主体で書いていきますので、読みにくくなるかもしれません。みなさんの好きなように想像してください。

小説としての体をなさなくなりますが。

第２１話（前書き）

今回は一時帰宅です。

第２１話

おはようございます、美晴です。

週末の今日は、外出届を出して久しぶりに家に帰ってきました。

ようやくゲームができる！

「ただいまぁ」

一夏。

「おかえりぃ」

一夏の横で返事をする僕。

「「…ぷっ」」

「「アハハハハ」」

変なやり取りに二人とも笑い出してしまう。

「何笑ってんの？あんた達」

鈴ちゃんが後ろから声を掛けてくる。久しぶりで家の中が汚れてるだろうから、助っ人を頼みました。掃除が得意だと本人が言っていたので。

「いや、誰も居ないのに、無理矢理なやり取りだなって思って」

「よくわかんないわね。それよりいつまであたしを玄関先に立たせて置く気よ！」

「ごめんごめん。いらっしゃい鈴ちゃん」

僕はスリッパを出して、鈴ちゃんを中へ案内する。

「前と全然変わってないわね」

「まぁ配置換えはしなかったね」

「それより結構ほこりたまってるな」

一夏は指で、テーブルをなぞる。

「うん、とっととやっちゃおうか」

僕達は、エプロンに頭巾、マスク、はたきを装備して、準備万端。

「で、誰がどこを担当するの？」

「どうする？一夏」

「そうだなぁ、じゃ俺が二階をやるから、美晴と鈴は一階をやってくれ」

「「了解」」

それぞれの持ち場に散る僕達。

「よし、やるか！」

僕はリビングから始める。はたきでほこりを落として…。次はテレビや棚のほこりを拭く。

最後に、床をワイパーで拭いていく。

鈴ちゃんにはキッチンを担当してもらっている。

以前にも来ていたことがあるから、てきぱきと整理や掃除を進めている。

「ねぇ鈴ちゃん？」

「何よ美晴」

鈴ちゃんは手を止めてこっちを見てくる。

「何でこの前一夏が正解言った時に否定しちゃったの？」

「それは…」

「いざとなったら恥ずかしくなっちゃったの？」

「…うん」

真っ赤な顔で答える鈴ちゃん。

「まぁ一夏が真剣に考えて、意外にも正解にたどり着いたんだから、足踏みでは無いのかな」

「それより、あの無視って作戦、結構心苦しかったわよ？」

「でも、どっちも素直な気持ちになったでしょ？」

「…まぁ、ね。恥ずかしいこともいっちゃったけど…」

「恥ずかしいこと？何？教えてよ？」

「嫌よ！」

「いいじゃん。教えてよ～」

「嫌よ！」

じゃれ合う僕たち。

「ふぅ。ちょっと水を…。ってお前ら！俺が上で頑張ってるってのに、何ふざけてんだよ！」

二階から降りてきた一夏に怒られた。

「「すいません」」

「まったく。ある程度済んだら、美晴達も二階へ来てくれ。千冬姉

の部屋は一人じゃ無理だ」

「「はーい」」

さっさと終わらせた僕達は二階へ向かう。

「一夏〜応援に来た…よ…」

目の前の惨状に言葉を失う僕。

「うわっ！きたな！これが千冬さんの部屋？」

鈴ちゃんも驚いている。

「そう。どうやら俺達がいない間に、何回か戻ってきてたみたいだな…」

僕達の目の前には腐海が広がっていた。

「骨が折れそうだね、これ」

「あぁ。ここが今日一番の難所だ」

「やるしかないでしょ！美晴！ゴミ袋取ってきて！」
鈴ちゃんが指示を出す。
「了解！」
僕は下へゴミ袋を取りに行く。
「うわっ、ビールの空き缶がタワーになってる…」
「こっちには食べかけのさきいかがあるわよ…」
「ゴミ袋お待たせ！」
念のため、多めに持ってきた。
「よし、とにかく片っ端からゴミを入れていくぞ！」
「「了解！」」
「「やっと終わったぁ」」

二人はぐったりしてる。

「お疲れ」

僕は二人に麦茶を渡す。

「サンキュ！」

一気に飲み干す二人。

「はぁ…生き返るわね。にしてもきつかったわねこの部屋。千冬さんがここまでぐうたらとは…」

「学園ではピシッとしてるんだけどね…」

「なぁ、もしかしたら学園の寮長室もこんなことに…」

一夏が恐ろしい予想を口にする。

「「やめて！考えただけで寒気する！」」

充分に有り得るから恐いんだ。

「一夏の部屋は終わってるの？」

鈴ちゃんが一夏に聞く。

「美晴のは終わってるが俺のはまだ終わってない。こっちに時間とられ過ぎた」

「じゃあ、一夏の部屋も三人でやりましょ！」

「ダメ！絶対ダメ！」

全力で拒否する一夏。

「ベッドの下だっけ？一夏の隠し場所」

僕は一夏の秘密を暴露する。

「ベタねぇ。どれどれこの鈴ちゃんに見せてみなさい！」

鈴ちゃんは、一夏の部屋へ高速移動する。

「よせ！やめろって！」

一夏が走って後を追う。

「んーこの辺りかしら？」
鈴ちゃんはベッドの下を手で探っている。
「おい、鈴！」
慌ててる一夏。
「さて鈴ちゃん？悪乗りもそこまでね？」
といって僕は鈴ちゃんを立たせる。
「後ちょっとだったのにぃ…」
「ここからは男の子の聖域だから、女の子はダーメ」
「少しぐらいいいじゃない？」
「自分と真反対の体だった場合、ショック受けない覚悟はある？」
「無い…」

鈴ちゃんは自分の胸を見ながらいう。

「そろそろ昼だから飯でも食おうぜ？」

「どうするの？」

食材は買ってきてないし…。

「弾の所で良いんじゃない？」

「そっか、そうだね。久しぶりだし、鈴ちゃんが帰ってきたのも教えてあげないと！」

「よし。弾のところな！」

五反田食堂

「ちわーっ。弾いる？」

「いらっしゃい…ってお前らすげぇ久しぶりじゃないか！それに鈴！日本に来てたのか！」

「えぇ、今はＩＳ学園に通ってるのよ」

「そうか。お前もＩＳか…。俺もＩＳが操縦できたらなぁ」

「弾君が思ってるほど良いものじゃないよ。僕なんかほぼ毎日背後を警戒しなきゃいけないんだから…」

「美晴は大変そうだな…」

同情してくれるなんて優しいな。

「うん、いつ逆レイプされるのか毎日ビクビクしてるよ…」

「美晴、早く飯食うぞ！」

お腹が空いている一夏が急かしてくる。

「そうだね。僕しょうが焼き定食で！」

「あたしはラーメン！」

「またラーメンかよ。俺は肉野菜炒めな！」

「かしこまり！」

「へい！お待ち！」

「「「いただきます！」」」

「相変わらずうまいなここは」

「ラーメンも中々なのよね」

「しょうが焼きのお肉も良いやつ使ってるんだよね」

「誉められて爺ちゃんも喜んでるよ」

バンッ
お店と弾君ちを仕切る扉が開かれた。

「兄貴！ちゃんと片付けとけって言ったでしょ！…あれ？一夏さんに美晴さん、それに鈴さんまで！」

弾君の妹の蘭ちゃんだ。一夏に好意があるみたいだ。

「よう、久しぶりだな蘭！」

「お、お久しぶりです一夏さん！バカ兄貴！一夏さんが来てるなら教えなさいよ！」

と言いながら、弾君にローを放つ蘭ちゃん。

「いでっ！悪かったよ、蘭」

「みなさんゆっくりしていってくださいね！」

「おう！」

蘭ちゃんは、二階へと戻っていく。

「「「ごちそうさまでした」」」

「お前らこの後どうするんだ？」

弾君が聞いてくる。

「うーん、まだ家の掃除が残ってるんだよね。今日中に終わらせたいから、遊ぶのはまた今度。ごめん！」

「いいってことよ！またいつでも来てくれよな！」

「うん！」

「今日は鈴は払わなくていいからな」

会計している一夏が言う。

「いいの？」

「せっかく助っ人に来てもらったんだから、お礼させてよ」

「ごちになります！」

「じゃそろそろ行くぞ。厳さん！ごちそうさまでした！」

「「ごちそうさまでした」」

弾君のお祖父ちゃんに挨拶して、僕達は五反田食堂を出る。

「さて、続きやるぞ！」

再び家に戻ってきて、掃除の続きをする僕達。

和室やお風呂場、廊下掃除などを行う。

数時間掛けて、ようやく全ての掃除が終わった。

「やっと終わったねぇ」

「結構かかったわね」

「鈴が助っ人に来てくれて助かったよ」

「あの部屋さえなければ大丈夫だったかもしれないけど」

「「あれはねぇ…」」

みんなでぐったりする。

「そろそろ戻らないと門限ヤバイんじゃないか？」
一夏が時計を見ながら言う。
「あっそうだね。じゃ最後に二人とも僕の部屋に来て！」
「何をする気だ？」
「一夏はこれ、鈴ちゃんはこれ持って！」
「おい、美晴！なんだよこの袋は？」
「僕のゲームと本！ようやく持っていける！」
「女の子に荷物持ちさせる気？」
「いいじゃん、一人じゃ持ちきれないんだから！一夏も鈴ちゃんもゲームやりたいでしょ？」
「そうだけど…。これ全部か？」

「そう！全部持ってくの！」

「ゲーマーは恐ろしいわね…」

鈴ちゃんが言うけどお構い無し。僕にとっては最高の息抜きツールなんだから。

結局一人二袋の荷物になった。

「疲れた体にムチ打たせるか…。よっ」

「仕方ないわね…せいっ」

何だかんだで持ってくれるなんて優しいなぁ二人は。

二人はぐったり。僕はルンルン気分で学園へと帰っていく。

第２１話（後書き）

次話でようやくあの二人が出せます。

飽きかけてました…、正直。

でも頑張ります。

第２２話（前書き）

あの二人の登場です。

その前にひと悶着…。

第２２話

ＳＩＤＥ　一夏

あの後美晴の部屋に、大量の荷物を運び込んでようやく自分の部屋に戻って来れたんだが…。

「部屋の移動？」

「えぇ、ようやく手配できましたので、篠ノ之さんは移動してください」

と、待ち受けていた山田先生に言われた。

「そんないきなり！今晩中じゃなきゃいけませんか？」

箒が異議を唱えている。

「えぇ、早めにお願いします。やはり、年頃の男女が同じ部屋と言うのは学園でも問題視されてまして…。なにか間違いが起きたらどうするって言われて…」

「私たちに間違いなど！」

「まぁまぁ箒、落ち着けって。山田先生困ってるんだし。男女七歳にして同衾せず、ってことわざあるし」

「貴様がそれを言うか！いきなり私の裸を見たくせに！」

あのときのことを持ち出してくる箒。でも事実を曲げるなよ。

「誤解を招く言い方するな！あれは事故だ！それにバスタオル巻いてただろ！」

「一夏は私と離れて寂しくないのか！」

どういうことだよ。

「そりゃお前と一緒なのは楽しかったし、気がおけないから、良かったけど。でもこの決定にも織斑先生が絡んでるんでしょ？」

箒をなだめつつ、山田先生に聞く。

「はい、最終決定は織斑先生です」

「な？反論の余地がないだろ？」

「…わかりました！すぐに移動します！」
箒は怒鳴りながら荷物をまとめ出ていく。
なんなんだ一体。

「先生。俺は美晴と一緒に？」
あり得る話だろ？

「いえ、お二人は別々のままです」

「なんでですか？」

「せっかくなんだから、一夏君も一人部屋を味わってほしいって事じゃないですか？」
予想かよ。

「とにかく、これから一夏君はお一人です。あまり羽目を外さないようにしてくださいね？」

「大丈夫ですよ」

「それではお休みなさい」

「お休みなさい、先生」

山田先生は部屋を出ていく。

「わっふぅー！やっと一人だぁ！美晴を羨む必要もねぇ！」

俺は布団に大の字で寝転がる。

コンコン

誰だ？遅くに。

「一夏、いいか？」

「箒か。どうした？」

「…こ、こ」

「こ？」

「今度の学年別トーナメントに優勝したら…」

「したら？」

「私と付き合ってもらう！」

付き合う？買い物とかか？

「おう！いいぞ付き合ってやる」

「本当か！よし、一夏とも当たるかもしれんが、私は負けんぞ！」

「あぁ。お互い頑張ろうじゃないか」

「それではな」

箒は帰っていく。

俺は知らなかった。このとき柱の影から6つ、隣の部屋から2つの目が向けられていたことを。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

翌朝
おはようございます、美晴です。

今日は月曜日。また一週間が始まります。昨日は遅くまで、ゲームのデータ整理をしていたので眠いです。

女子達は相変わらずのパワーで、朝からキャッキャしています。すごいなぁ。

「やっぱり私はハヅキ社製のがいいなぁ」

「えぇ～？あそこのはデザイン以外よくないじゃない」

「そのデザインが大事なのよ！」

ハヅキ社…。確かＩＳスーツのメーカーだっけ。他にも何社か作ってたよな。

「ねぇ！一夏君と美晴君のはどこの奴なの？」

こっちに話題を振ってくる。

「え？俺は知らないなぁ」

一夏は間の抜けた返事を返す。

「僕達のはイングリッド社の特注品なんだ。みんなのと違っておへそを出さなくて良い様に改良してもらったんだ」

表向きのため、どっかの会社の名前を出して置く。実際にはウサミミ製だけど。

シュンッ

「そもそもＩＳスーツというのは…」

山田先生が説明しながら入ってきた。

要約すると、ＩＳスーツはスムーズに搭乗者の意思をＩＳに伝えるために必要であり、無くても動かすことはできるが、反応速度は鈍るらしい。また耐久性が高く、威力の弱い銃弾なら衝撃は殺せないが、貫通はしないらしい。

すらすらと説明をする山田先生に、みんながほぼ初めてであろう尊敬の眼差しを送る。

うん、機能重視だな。デザイン考えて、反応遅れたら本末転倒だ。

「それではＨＲを始めますね。今日はなんと転校生が二名います」

また転校生か。ずいぶん多いなこの学校。

千冬お姉ちゃんに連れられ、金髪と銀髪の二人が入ってきた。銀髪の人は眼帯をしている。ものもらいの時にするやつじゃなく、ガチの眼帯だ。

「それでは自己紹介をお願いします」

「それではボクから。シャルル・デュノアと言います。フランス出身です。ボクと同じ境遇の方がこちらにいると聞いて転校してきました。みなさんよろしくお願いします」

金髪の子が自己紹介をする。それにしても男の子か。きれいな顔立ちだなぁ。

「キ…」

あ、このパターン知ってる。

「「「キャアアアッ」」」

「来たわよまさかの三人目！」

「話し方丁寧だし、顔がきれい！」

「守ってあげたくなるぅ！」

自分で言うのもなんだけど、なんか僕と被ってないか？

「ねぇ一夏？」

前の席で耳を押さえている一夏を僕は呼ぶ。

「なんだ、美晴？」

「デュノア君もどちらかといえば女顔じゃんか。でもみんなには男の子ってしっかり認識されてるでしょ？」

「まぁ確かにな」

「だから僕もデュノア君みたいに、髪を後ろでまとめれば男の子って見てもらえると思ったんだけど…」

「「いや、美晴は無理だろう」」

そうか…。ん？何で声が２つ？まさか！

僕は千冬お姉ちゃんを見るが目を合わせてくれない。

「んんっ！静かにしろお前達。まだ続きがある！」

話題を変えた。

「それでは次の方」

「……」

銀髪さんは黙ったままだ。

「自己紹介だ、ボーデヴィッヒ」

「はい、教官」

教官？

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「…以上ですか？」

「以上だ」

それだけかよ。一夏よりひどい。でもなにか人を寄せ付けない雰囲気がある。というか拒絶してるのか？

「えと、それではお二人とも後ろの空いている席に座ってください」

山田先生が席を指定する。デュノア君は席へ向かうが、ボーデヴィッヒさんは一夏と僕の間で止まる。

「貴様らが織斑一夏と織斑美晴か」

「あぁ」

「そうだけど？」

パァンッ

一夏が平手ではたかれた。

「何を！」

驚いた一夏を無視し、次は僕の前に立つ。

しかし平手は来なかった。

「私は認めん。貴様らがあの人の弟などと！」

との台詞と共に去るボーデヴィッヒさんの背後に、千冬お姉ちゃんの殺気が当てられていた。

第２２話（後書き）

美晴を叩いたら殺るぞ的目線を送った千冬さん。

ラウラでもさすがに耐えられないだろうな。

て言うか一夏はいいのか。

今後もこういうスタンスを取らせます。

シャルの一人称はボクです。美晴との区別のために…。

第２３話（前書き）

波乱の移動教室と、少しのハプニングです。

第２３話

おはようございます、美晴です。

そろそろＳＨＲが終わるところです。

「今日の午前の実習は２組と合同で行う。各自着替えた上でアリーナへ集合しろ。遅刻は許さん。では、ＨＲを終了する」

千冬お姉ちゃんの一言にみんな、そそくさと準備を始める。

「あぁ。織斑一夏、織斑美晴。お前達はデュノアの面倒をみてやれ」

「「はい！」」

当然の指示だ。まだ右も左もわからないだろうから。

「えっと、織斑一夏君と織斑美晴君だっけ？シャルル・デュノアです。よろ…」

「ああ、挨拶は後回し！」

「そうそう！早くしないと遅刻しちゃう！」

デュノア君が初対面で君で読んでくれたのは嬉しいけど、ゆっくりしてたら遅れちゃう！
一夏を先頭に、僕がデュノア君の手を引いて移動する。

「えっ？手っ…。じゃない！どこにいくの？」

デュノア君が慌ててる。しかも赤い。なんかあったか？

「僕達男子は教室じゃなく、アリーナの更衣室で着替えなきゃいけないんだ！」

「そう！しかも遠いからダッシュで移動しないと遅刻しちまう！」

と、二人で行き先を説明しながら全力疾走。しかし…。

「見つけた！転校生も一緒よ！」

くっ。見つかったか。

「者共出会えい！」

さらに応援まで！

「みてみて！手ぇ繋いでる！」

「ありね！これはありよね！」

話がまた変な方向へ…。

「美晴！こっちだ！」

一夏が唯一空いている道を指示する。多少遠回りだが仕方ないか！

「デュノア君こっち！」

僕は手を引き走る。

「ねぇ、何でみんなこんなに騒いでるの？」

デュノア君が聞いてくる。状況がわかってないのか？

「僕達は世界で三人だけの男のＩＳの操縦者。この学園においても三人だけの男子。僕らは珍獣って訳！」

「なるほど…」

悠長なことを。自分が特異だって認識してないのかな。

「はーい！ここは新聞部の黛が通さないわよ！取材させて！」

厄介なのまで！もう間に合わないじゃないか…。囲まれたし…。

「うぅ…何でみんな邪魔ばっかするのさ…。授業…、授業に間に合わないよ…」

このままじゃ絶対に怒られるよ…。

「泣いた？」

泣いてないもん…。

「美晴を泣かせないでください！鬼が！千冬姉が来ます！」

一夏が慌てて説明する。…と、道が開けた。

「よかった！これで間に合う！」

僕達はようやく更衣室へと向かえた。

更衣室

「ふぅ、とっとと着替えちまおうぜ。美晴、デュノア」

「ギリギリだからね」

「あ、ボクのことはシャルルでいいよ。二人のことも名前で呼ぶね？」

「うん」

僕達は服を脱ぐ。

「わっ！」

シャルル君が変な声をあげる。

「どうしたの？」

「だって二人がいきなり脱ぐから…。ボク、他人と着替えるの慣れてないんだ」

まぁそういう人もいるか。

「じゃ、反対向いてりゃいいか」
背中を向け、着替える。
「美晴。ＩＳスーツって着替えづらいよな」
「そうだね。なんか引っ掛かるっていうか…」
「ひ、引っ掛かる！」
また変な反応してる。
「それよりシャルル君は着替え終わって…」
「終わってる…。早いんだね」
「ま、まぁコツかな？」
「へぇ。今度教えて欲しいね一夏」

「だな。毎回苦労してるもんな、俺達」

「それよりも、二人のＩＳスーツ変わってるね。どこのやつ？」

「イングリッド社の特注品なんだ。シャルル君のは？」

「ボクのはデュノア社製なんだ」

「デュノアって…」

「そう。ボクの父の会社なんだ」

「そうか。恵まれてんな」

「う、うん」

なんか、ちょっと暗くなった？

「そろそろ行くぞ。遅刻する」

「「うん」」

アリーナ
「ギリギリだな。罰は勘弁してやろう」
千冬お姉ちゃんが時計を見ながら言う。あと３０秒ぐらいでアウトだった。

「今日はまずデモンストレーションとして、専用機持ちに模擬戦をしてもらう。オルコット、凰。前へ出ろ」
二人が呼ばれる。

「なんで私が…」

「他のやつでいいじゃないの」
不満そうだ。

「おい。お前ら。……」
千冬お姉ちゃんが耳打ちする。

「やはりここは私でないとダメですわね！」

「いっくらでもやってあげようじゃないの！」

何を言ったんだろう。二人がものすごく元気になった。

一夏に良いところ見せろ、とか言ったのかな？

「ところで先生。私達の相手は誰ですの？」

「別にセシリアと決着つけても良いけど！」

「いいでしょう！」

「まぁ待て。お前達の相手はそろそろ来る」

来るってどこから…。上？

「わぁー！危ないですからどいてくださーい！」

一機のＩＳがふらつきながら落下してくる。この声は山田先生か？

「バ、バランスがとれないんですぅー！」

このままじゃ確実に地面と仲良くなるなぁ。

「一夏！」

「おうよ！」

一夏に白式を展開させ、山田先生を受け止めさせる。

ズーン…。

「なんとかなったかな…」

煙がはれた先を見ると…。

「いてて…。なんだ？この柔らかいの？」

「あんっ。…あ、あの。一夏君、教師と生徒はこのようなことは…。あぁでも織斑先生がお義姉さんになるのならいいかも…」

「へ？」

起きてましたハプニング。一夏が山田先生を押し倒した形で、胸をわしづかみ。しかもちょっと揉んでた。

山田先生も少し受け入れてるし。

シュン
「うわっ！」
一夏の目の前、５センチぐらいをスターライトから放たれたレーザーが通過する。

「あら？私としたことが外してしまいましたわ？」
当たったら、ただじゃ済まない距離感だ。

「なにを…！」
抗議しようとする一夏だが…。

「一夏ぁ！」
今度は鈴ちゃんが双天牙月を投げつける。
二人とも殺る気だ。

「一夏君危ない！」
ガウンッ　ガウンッ
二発の銃弾が牙月を弾く。
撃ったのは…。

「山田先生？」

山田先生は先程の体勢から、狙撃をし確実に当てて見せた。

「すごいですね山田先生！」

純粋に尊敬してしまう。

「山田先生は元代表候補生だ。これくらい当然出来る」

千冬お姉ちゃんが山田先生の経歴を紹介する。

そんなにすごい人だとは…。普段からは想像ができない。

「そんなぁ。候補止まりでしたからぁ」

謙遜する山田先生。

「ということで、オルコットと凰で山田先生と戦ってもらう。２対１だ」

「えぇ？いくらなんでもそれでは」

セシリアさんが驚く。

「そうですよ？さすがに勝っちゃいますよ？」

鈴ちゃんが続ける。

「大丈夫だ。今のお前達の実力では万に一つも勝てん。始めろ」

「「「お願いします」」」

挨拶と共に三人は上空へと向かった。

「よし、デュノア。山田先生が使っている機体について説明しろ」

「はい。山田先生が使っている機体は、フランスデュノア社製のラファール・リヴァイヴです。全距離において対応可能なように武装が積まれています。第２世代最後期の開発で、スペック上は第３世代には劣りますが、戦い方によっては互角に戦うことも可能です」

シャルル君の説明は続くが、上空はすごいことになっている。

避けた。セシリアさんのレーザーを完璧に。癖とか知ってないと、あそこまできれいには無理だろう。

甲龍の龍砲まで！あれ絶対弾丸見えないのに！タイミングとか狙いとか読みきらなきゃ絶対無理！何て実力なんだ！

「くっ！凰さん邪魔ですわよ！」
鈴ちゃんがセシリアさんの射線に被っていて、セシリアさんは引き金を引けない。

「うっさい！あんたこそ邪魔よ！」
おいおい。喧嘩してる暇あるのかい？
あっ！ぶつかった。そこへ山田先生が放ったグレネードが…。結構エグい攻撃するな、山田先生。

ドーン
二人は墜落した。

「あなたのせいですわよ！邪魔ばっかりして！」

「それはこっちの台詞よ！あんたさえいなければ！」

うーん、醜い。
にしても連携がしっかりしてないと、多対1がこんなにもやりづらいものだとは。まぁ兵法では基本事項として書いてあるんだけど。
「これで教員の実力がわかっただろう。以後、敬意を持って接する

ように」

「「「はい」」」

やっぱり先生って実力が無いとなれないんだな。

今度模擬戦申し込んでみよう。

第２３話（後書き）

山田先生との模擬戦は、現在書く予定ありません。

戦闘シーンが下手なので。

第２４話（前書き）

授業＆テロ！

第２４話

こんにちは、美晴です。

今は引き続き授業中です。

「それでは実習を行う。専用機持ちをリーダーとして、それぞれ好きなところに別れろ」

その結果…。

僕と一夏とシャルル君に集中。

というかセシリアさんまで一夏のところへ…。

「変更だ！出席番号順に班を組め！」

無秩序状態を見た千冬お姉ちゃんが指示を飛ばす。ちゃんと分散できた。

「よし。では、各班で使用する訓練機を取りに来い。機種は班内で相談しろ」

「だそうです。みんなはどっちがいいですか？」

班のみんなに聞いてみる。

「どっちでもいいかな」

「私も」

どっちでもって…。困ったな。

「じゃ僕が決めていい？」

「いいよ！」

うーん。

「織斑美晴。お前の班はどうする」

「ラファールにしてください」

使ったことあるから教えやすいと思うけど…。

「では、運んでください」

目の前にはラファールが載せられた台車があった。

げ。訓練機は専用機と違って、台車で運ぶんだったっけ。重そう…。

「先生！乗っていってもいいですか？」

「重いでしょうからいいですよ？」

「では」

僕はラファールに乗り、移動する。

「ははじめますか。一人目は…」

「はいはい私です！第一印象から決めてました。よろしくお願いします」

と、手を差し出してくる。

これ、握手したらそういうことになる、よね。

他のみんなも差し出してる。

「えぇと…」

周りを見渡すと、一夏達も同じ目に遭ってる。…どうしましょうか。

「織斑先生に怒られたくないので、早くやりましょう」
最高クラスの冷水をかける。
「「「…はーい」」」
通じたようだ。
一夏達も危機を脱したみたい。
「さて始めようか。乗り込んだね。最初は歩行からだね」
ぎこちなく歩き始める。
「うん、ちょっと歩き辛そうかな。コツなんだけどね…」
僕もシュッツェンを展開し、歩き方のコツを教えていく。
「うん、いい感じ！飲み込み早いね！」
見違えた感じだ。
「美晴君の教え方が上手だからだよ？」

「そ、そうかな」
ちょっと恥ずかしい。
「それじゃ降りてもらって次の人！」
「はーい」
二人目もそつなくこなしていく。優秀な人達で助かった。
「きゃーっ！」
何！何が起きた！
声は一夏の方からだ。
「なーる」
箒ちゃんが一夏にお姫さまだっこされてるのか。
原因は、箒ちゃんの前の人がしゃがんで降りなかったからだ。
訓練機は専用機と違って量子変換しないから、降りるときにはしゃがまないと乗り込めなくなるんだよな。
にしても、箒ちゃん顔真っ赤。
「さて、向こうは置いといて…」

振り替える僕が見たのは、しゃがまずに降りようとしている女子でした。

「あの、何を…。僕はやりませんよ？」

「「「えぇー」」」

「むしろ僕でいいの？」

「そこは受け入れようかなと…」

「男子であることは確かだし」

なんか言われ方が…。

「とにかくやりませんので、しゃがんで降りなさい」

「ちぇーっ」

「ふくれないの。かわいい顔がもったいない」

「美晴君には負けるもん」

「男と張り合わないの。はい次！」

そのあとはスムーズに進んでいく。

あとで一夏いじめよう。

付け加えると、ボーデヴィッヒさんの班は、終始緊張に包まれいたって静かでした。

屋上

さて今はお昼休み。いつものメンバー＋シャルル君でお弁当を食べています。

箒ちゃんは少し不機嫌そう。一夏と二人きりだと思ってたんだろうな。

「な、なんかお邪魔してごめんね？」

シャルル君が謝ってくる。

「何いってるの。転校生はみんなで歓迎しないと。まだ校内もよく

わからないだろうし」

「そうだな。みんなで飯食うのが一番だ。だから箸もそのしかめっ面やめろ」

「…すまない」

「で、一夏はなんでお弁当がないの？」

普通昼に手ぶらはないよな。

「いや、鈴が持ってくるなって…」

「言われた通りにしたのね。あんたにしては偉いわ。あんたの分はこれよ！」

といってタッパーをあけると…。

「おぉいつぞやの酢豚か」

「そうよ。食べなさい！」

「では一口…。うん。うまい。かなりのものだなこれは」

「でしょ？結構な自信作よ！」

胸を張り自慢する鈴ちゃん。

「箒のも中々うまそうだな。唐揚げもらっていいか？」

「あぁ、いいぞ」

「ん！これはかなり手間がかかってるな」

「わかるか！下味や衣はもちろん、果物で柔らかくしつつ香りを出す工夫もしてみたのだ」

「凝ってるなぁ。その割りにはお前食べてないな。自分でも食べてみろ。ほい、あーん」

「あ、あーん。ふむ。我ながらよく作ったものだ」

「ねぇ美晴？今のって恋人同士がするあーんってやつだよね？僕お

母さんから聞いたことある！」

シャルル君に何を教えたお母さん。

「さ、さぁ…」

これが精一杯。

「一夏さん！私のもいかがですか？」

セシリアさんがバスケットを差し出す。

「サンドイッチか。よしもらうぞ」

パク

…バタ。

「一夏！どうしたの！」

突然倒れた！

「とにかく保健室へ！」

箒ちゃん達が一夏を運んでいく。

「セシリアさん。ちょっとバスケット見せて？」

「どうぞ」

「ねぇ、これ卵サンド？」

「えぇ」

「じゃなんで漢方の臭いが？」

「えぇと、色が薄いかなぁと思いまして、カレー粉を。あとパンチを効かせるためにカラシを。で粘りが強かったので、オレンジジュースでのばしましたの」

新手のテロだこれは。

「セシリアさん、卵サンドにパンチはいりません。というか黄色のもの何でもぶちこめば良いわけではありません。…今度僕と料理を勉強しましょう」

「…はい」

自分でも事の重大さを理解できたかな？

一夏生き延びれるかなぁ。この中身を見ると無理そうだな。

放課後

なんとか一夏は意識を取り戻せたらしいが、そのまま部屋で休まされている。

「織斑美晴、デュノア。ちょっと来い」

「「はい」」

「今日からお前達は同室だ。一夏は一人になったばかりだから、次はお前が二人部屋だ」

「まぁ、妥当ですね」

「というわけでデュノア。貴様にそんな趣味はないとは思うが、もし美晴に手を出したら、貴様はおろか、デュノア社、フランスも私の全力で世界地図上から消してやる。わかったな！」

「は、はい！」

シャルル君の足が震えてる。

「言い過ぎですよ。シャルル君震えてるじゃないですか」

「極めて大事なことだからな。お前も何かされたらすぐに報告しろ」

「だからないですって」

「念のためだ」

そう言い僕らの前から去る千冬お姉ちゃん。

「大丈夫？シャルル君」

「な、なんとか。生まれて初めて、今ボクは死ぬんだって思った」

「ごめんね。ちょっと行きすぎな時があるんだ」

「愛されてるんだね…」

「そう受け取ってもらえると助かるよ」

「部屋に行こうか」

「そうだね。あ、シャルル君」

「なぁに？」

「明日、僕と模擬戦やらない？」

「いいよ！大歓迎だよ！」

「そう、よかった！あ、ここだよ部屋。これからよろしくね。シャルル君」

「うん、こちらこそ！」

明日楽しみだなぁ。

第２４話（後書き）

どっちが攻め？受け？
とか言う前にフランスがなくなります。
生身で乗り込むんでしょうね、あの人は。

第２５話（前書き）

今回はアリーナだけで話が終わります。

第２５話

こんにちは、美晴です。

今日は昨日約束したシャルル君との模擬戦をするために、アリーナに来ています。

「美晴。今日は一夏達は？」

「うん。一夏の訓練はこの後やるよ。今は、補講でも受けてるんじゃないかな。わからないことだらけだって言ってたし」

「そうなんだ」

「さぁ始めようか、シャルル君」

「よーし！」

それぞれのＩＳを展開させる。

「短めの時間でやろうか。でも、手は抜かないからね？」

ほぼ初めてかな。万全で誰かと戦うのは。

「じゃ、3、2、1、で開始ね」

3、2、1…。

「スタート！」

まずお互い距離を取る。

お互い牽制として、射撃武器を撃ちだす。

「ビームか。当たった時の威力がすごそうだね」

シャルル君が冷静に分析する。

互いに撃ち合うこと数回、いきなり散弾が飛んできた。

「いつ武器変更を！さっきまでライフルだったはず！」

いつのまにか、携行武器が変わっている。

慌てて回避するが、今度は連射で責められる。

「マシンガン？タイムラグが全くない！」

なかなか厄介な戦い方をしてくれるな。

「それなら！」

接近戦に持ち込むためにサーベルに持ち替え、突っ込む。

シャルル君もブレードで受け止める。

「さすがだね美晴。懐に簡単に飛び込まれたよ」

と言いつつ、マシンガンを撃ち込むシャルル君。

「また武器が変わってる！」

思わず距離を取る。

奇襲効果抜群だな。

「…ふふっ。楽しいねシャルル君」

「僕も楽しいよ！こんな実力者そうそうお目にかかれない！」

「ありがとう。じゃ本気で行くよ！」

僕はビームライフルを撃ちながら、そのまま突っ込む。

「ライフルのまま？何を考えて…。！」

僕はライフルからビーム刃を形成させ、切りつける。

「そんな武器が！」

「これだけじゃないんだよ！」

そのままの体勢から頭部のバルカンを撃つ。

「ぐっ。あぁっ！」

効いてるな。

バルカンを連射しつつ後退。

連射を止めたところで、グレネードを放つ。

シャルル君は避けようとするが、シュッツェンのグレネード弾は近距離なら追尾機能が働く。

「このままやられ続けるもんか！」

シャルル君はライフルでグレネードを破壊。

「かかったね！」
爆煙に紛れてシャルル君の後ろをとった僕は蹴りをいれ、シャルル君を吹っ飛ばす。
そしてレール砲とライフルを同時発射。命中し、シャルル君のシールドエネルギーが切れた。
「負けちゃったぁ。美晴強すぎるよぉ」
「いやいや。前半は僕が押されてたじゃないか。あれは技？」
突然武器が変わったあれについて聞いてみる。
「うん。ボクの得意技。高速切替、ラピッドスイッチ。ボクのラファール・リヴァイヴ・カスタム？は、基本武装をいくつかはずして、拡張領域を通常の倍にしてあるんだ。で、そこにたくさんの武器を入れて、ラピッドスイッチで奇襲をしつつ、弾丸の補充も収納と同時にできるようにしてあるんだ」
「なんかすごいね。弾切れも起きないなんて厄介だ。全部で何種類くらいあるの？武器」
「んーと、２０種類くらいかな」

「僕なら無理だな。使いこなせないよ」

「今で十分強いから大丈夫でしょ」

「そうかなぁ」

「あ、一夏来たよ！おーい！」

一夏がアリーナに入ってきた。

「おう！シャルル。模擬戦どうだった？」

「うん、ボクのボロ負け。美晴強かった！」

「だろうな。俺の先生だからな」

「じゃ、これから先生は一夏をしごきますか！」

「うへぇ、お手柔らかにな」

「大丈夫。僕今日機嫌良いから！」

そのあとはいつもより少しだけ緩いメニューで訓練した。

数日後。

今は土曜日。シャルル君達が転校してきて、はや五日。

他の学校は土日休みが今となっては当たり前だけど、ＩＳ学園は授業があります。半日だけどね。

なので、今日は長めに訓練できるかな。

シャルル君にも一夏の訓練に加わってもらいました。

「白式は近接タイプだよね。だけど相手は何らかの射撃武器を持ってるはず。だから戦うには射撃武器の特性を把握する必要があると思うよ？」

シャルル君が一夏に言う。

「あぁ、そういえばそうだね。なんで今まで気づかなかったんだろう。シャルル君に来てもらってよかったよ」

僕では気づかなかった点だ。

「美晴は俺をいじめることで憂さ晴らししてたから、思い付かなか

ったんだろ！」

「何を言うんだよ。一夏のためを思って…」

「顔が変に笑ってるぞ」

「あれ？」

「やっぱりそうなんだな」

「な、何を言ってるのかなぁ？さ、シャルル君の言ったようにやろうか！」

「追求しても無駄か…」

「はい、一夏。まずボクのアサルトライフルを使って！アンロックしたから白式でも使えるよ」

「おう、サンキュ。シャルル」

ガウンッ　ガウンッ。

「どう？一夏」

僕は感想を聞いてみる。

「簡潔に言うと速いな」

「そうだね。弾丸は高速で打ち出されるから、的確に避けるには相手の狙いや撃つタイミングを読まなきゃいけないね」

シャルル君が解説。

「じゃ次僕のビームライフル」

ズキューン。

「反動がない…」

「そうなんだ。実弾だときっとあるんだろうけど。でも、その分ガンコンみたいでイメージは楽だよ」

「何でもゲームに置き換えるな、美晴は」

「それが僕に合ってるから」

「それにしても、二人のＩＳって特殊だよね。一夏のは拡張領域が全部埋まってるし、美晴のはビームだし」

実を言えば、ウサミミ特製だからね。僕達からしたら何ら不思議じゃないよ。口には出さないけど。

「たぶん白式はワンオフ・アビリティーに全部使ってるんだろうね」

シャルル君が指摘する。

「ワンオフ・アビリティー？何だそれ」

一夏が僕に聞いてくる。

「日本語で言うと単一仕様能力。ＩＳに備わってる特殊能力みたいなもんだね。ＩＳとのシンクロ率が高まると発動するらしい。滅多にファーストシフトじゃ発動しないはずだよね、シャルル君」

「そう。それに零落白夜って織斑先生のＩＳのワンオフ・アビリティーだったよね。兄弟だからって同じってことは考えられないんだよなぁ」

「なんでだろうねぇ」

ん？何だか回りがざわついてる。

ザワザワ。

「ねぇ見てあれ！」

「ドイツの第三世代型！」

「まだ本国での試験段階だったはず…」

ドイツ…。あいつか。

「おい、貴様等」

ボーデヴィッヒさんが話してくる。

「貴様等も専用機持ちのようだな。丁度良い。今すぐ私と戦え！」

「俺達には戦う理由がない」

「貴様らに無くとも私にはある」

「断ったらどうする？」

一夏が聞く。

「断れるのか？この状況で」

こちらに砲口が向けられている。

「ふぅ。断りはしないよ。でも今ここには監督の先生がいるし、周りに他の生徒もいる。本気でやりたいなら別の機会の方が良いんじゃないかな」

「ふん。確かにな。今日は退いてやろう。次は逃げるなよ」

「逃げないさ。失礼だからね」

僕の言葉を聞き、ボーデヴィッヒさんは去っていく。

「シャルル君。もう行ったよ？」

シャルル君は僕達の前で怖い顔をしながらシールドを構えていた。

「ふぇっ？あぁごめん」

「謝ることはないよ。心配してくれたんでしょ？」
ナデナデ。
「な、なんか恥ずかしいよ美晴」
「あ、ごめん。よく僕も千冬お姉ちゃんにされてたから、つい」
「そう。べ、別にいいけどね」
顔真っ赤だ。大丈夫かな。
「よし。気晴らしに訓練しようぜ」
「そうだね、いい？シャルル君」
「いいよ！しごくよ～一夏！」
「美晴だけできつかったのに…」
うなだれる一夏に、僕達は銃弾の嵐を浴びせるのだった。

第２５話（後書き）

口調が難しい！

原作読んでないからイメージでやってますけどね。

第２６話（前書き）

今回から少しずつＳＩＤＥの形を入れていきます。

第２６話

こんにちは、美晴です。

さっき訓練を終わらせて、着替えているところです。

「じゃ、ボクは先に行くね？」

シャルル君はＩＳスーツに上着を羽織っただけ。シャワーを浴びずに帰るみたいだ。

「いつも部屋でシャワーだよね。面倒じゃない？」

更衣室の中にあるシャワーを使うのを見たことは一度もない。

「あ、あっちの方が落ち着くから！」

あたふたしながら返答している。

「そう…。じゃまた後で」

「うん。一夏。お先失礼」

「おう」
一夏に軽く手を振り、シャルル君は出ていった。
「なんか変だよね、シャルル君」
「まぁ人それぞれだから良いんじゃねぇのか？」
「そうだけど…」
でもいつも更衣室ではあたふたしてるんだよな。
変なの。
「よし。俺達もそろそろ行くぞ」
「あっ待ってよ一夏！」
僕達も更衣室を出ていく。
寮までの帰り道。
夕日がきれいだなぁ。

「ふぅ、今日も疲れたな…」

「でも一夏強くなってるよ？」

「そうならいいけど」

「そうだって。あ、一夏。あそこ！」

校舎の影になるところに二つの人影が。片一方は千冬お姉ちゃんだ。

「千冬姉と…ボーデヴィッヒか？」

「何か話してるみたいだね」

木の影に隠れて聞き耳をたてる。

「教官！どうか私とドイツ軍に戻ってください。こんな極東の国では、教官の能力を活かしきれません！」

やっぱりドイツにいた頃の関係者だったか。

「ほう…」

今、千冬お姉ちゃんの眉がピクッてした。…怒ってるな、あれ。

「大体ここの生徒達はＩＳの事をファッションかなにかと勘違いしています。そんな者達に教えたところで！教官！どうかもう一度我が軍に！」

「ふんっ。１５年生きただけで選ばれた人間気取りか、小娘が！」

あぁ、キレちゃった。

「そんな…私はただ教官に…」

鋭い殺気を当てられてそれ以上何も言えなくなる。

「くっ…。失礼します！」

いたたまれず、逃げるボーデヴィッヒさん。

「…さて、そこの木の影の男子生徒二人。盗み聞きとは感心せんな」

振り返りこちらを睨んでくる。

「ばれてたんですか」

まず一夏が観念。

「盗み聞きするつもりはなかったんですけど」

僕も諦めて前に出る。

「まぁいい」

「ねぇ千冬お姉ちゃん」

「織斑先生だ、と言いたいがいいだろう。何だ？」

「さっきの話ってやっぱり僕達が原因だよね。ドイツって…」

「それは違う。気にするな」

少しだけ顔が曇った。

「行動には必ず結果が伴うもんね。ごめんね…」

「ごめん千冬姉」

僕らは頭を下げた。

「違うと言っている！頼むから、そんな風に考えないでくれ。私の意思でやったことだ」

悲しそうな顔をする千冬お姉ちゃん。

「ありがとう。これからは僕達が千冬お姉ちゃんを守るよ」

「そうだ！」

守りたいと思った存在。今ならなんとかなるかも。

「ならばもっと訓練して力をつけろ」

そんな気持ちは一蹴された。

「「うっ、…精進します」」

「では、な」

千冬お姉ちゃんは去っていく。

確かにまだまだですよ。

「ふぅ。頑張るか！」

「そうだね、今まで以上に！」

僕らは寮へと帰っていく。

「ただいま、ってシャルル君は今いないのか」

部屋に着くとシャルル君がいない。

シャワーの音が聞こえる。

「ん？シャワー浴びてるのか。じゃゆっくりしよう」

ベッドに寝転がる僕。

「あ！そういえばボディーソープ昨日で切れたんだっけ。替えは確かこの棚の…あった」

洗面所の棚から替えを取り出し、中にいるシャルル君に渡す。

「シャルル君、ボディーソープの替えを…」

「わひゃっ！美晴！ノックぐらいしてよ！」
そういうシャルル君には膨らみが二つあった。

「…シャルル君、それは？」

「あっ！見ないで！出てって！」
必死に体を隠すシャルル君。

「ご、ごめん！」

慌ててバスルームを飛び出す。

何でだ？シャルル君は男の子だよな。でもあれは、普通男の子にはないはず。
僕にすらないし。何だ？どういうことだ？混乱してきた。

ＳＩＤＥ　シャルル

ふえぇ、どうしよう。多分はっきり見られたよね、明らかに動揺してたし。
せっかくバレないように頑張ってたのに、ごまかしようがないよぉ。
どうしよう。

ここで胸ペタンコにしたら余計怪しまれるよなぁ…。えぇい、こうなったらやるしかない！

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

バスルームのドアが開く音がする。

シャルル君はジャージ姿でベッドに座る。

胸は膨らんだままだ。

「……」

「……」

きっついなぁ、この沈黙。

「ねぇ美晴。見た？ボクの」

うわっ。追求してきた。上手くはぐらかさないと。

「い、いえ。見てません」

「そう。ボクの平均より小さいんだよ」

「その大きさで？」

「やっぱり見たんだね！」

やばっ！

「いや！見たと言うかなんと言うか…。はい、見ました」

おとなしく白状するしかない。

「もぅ～美晴のエッチぃ」

胸を隠しながら言ってくる。

「えぇ？事故なのに…」

「……」

「……」

より気まずくなった。

「えと、シャルル君？」

「ひゃいっ！なんでしょう！」

沈黙を突然破られ、驚く。

「あー、説明してもらってもいいかな」

「えと、…はい。…ボクはデュノア社のスパイなんだ。世界で二人しかいない男性ＩＳ操縦者、およびそのＩＳのデータ取りがその任務内容」

どこの国でもやりそうだ。

「男だと偽った理由は？」

別にハニートラップでも良いはず。

「その方が親しみから近づきやすいだろうって父が言ったんだ」

「だから男装を？それにお父さんの命令って…」

「ボクは実は愛人の子なんだ。父には三回ぐらいしか会ったことないし。生まれたときから母と二人で暮らしてたんだけど、その母が死んでボクはデュノアに迎えられた。いや、実際には嫌がられてたな。本妻の人にはさんざん罵倒されたよ。妾の子って。で、ある日僕にＩＳ適正があるってわかってからは日々試験パイロットとして使われ続けた。そして美晴達の存在が知れた後、ボクに美晴達のスパイをするよう、父に命令されたんだ」

「なんでそんな命令が…」

「フランスはね、イギリスやドイツと違って、第三世代の開発がうまくいってないんだ。そのせいで、フランスからこのままだとデュノア社のＩＳ開発権利を剥奪するって言われて…。そうなるとデュノア社は経営が持たなくなる。だから、美晴達のデータを採取して開発に活かそうって話になったんだ」

「そんな話って…」

「まぁでもバレちゃったから終わりかな」

「じゃあこのあとはどうなるの？」

「身分を偽ったし、デュノア社も関係を否定するだろうから、良くて牢屋で、処刑もあるかな…。アハハ…」

力無い笑い声。

バンッ！

「なんだよそれ！ふざけんな！」

僕は怒りのあまり、近くにあった机にあたってしまう。

「いきなりどうしたのさ。ビックリしたよ」

ちょっとビクッとするシャルル君。

「だって実の父親でしょ？それがこんなこと！ひどすぎるよ！」

拳を強く握る。

「ありがと。優しいんだね美晴は」

乾いた笑顔を僕に向ける。

「そんなんじゃない！……シャルル君には本当の事を話すよ。君も本当の事を話してくれたんだから」

「本当の事？」

「うん。僕には両親が居ない…」

「…そう。だから怒ってくれるんだ。ということは一夏にも居ないんだね」

「そうだけど、僕の場合少し違う。…僕は、…本当は一夏の弟じゃないんだ」

「えっ！だって…」

驚いたと言うか、絶句した表情。

「うん。対外的には織斑千冬、一夏の弟ということになってる。戸籍も改竄されてる。でも実はそうじゃないんだ。…僕は小さいとき、捨てられて一人ぼっちだった。そのとき一夏に出会って、そして織斑家に家族として迎えられたんだ。僕には両親の記憶がない。家族が他に居たかすら知らない。…だから！だから実の父親が自分の子供にこんなことをさせるのが許せないんだ！」

「ありがとう。こんなボクのために辛いことまで話してくれて。だ

から、涙をこらえなくていいよ？泣いていいよ。今はボクしか居ないから」

どうやら僕は涙を溜めているようだ。

「シャルル君…。う、うわぁーん。…心のどっかで、本当は僕は家族じゃないって、そう思うと不安なんだ。でも誰にも言えない。千冬お姉ちゃんにも。一夏にも。言ったらこの関係が壊れてしまいそうで…」

抱きついて泣いてしまう僕。

「辛かったんだね、もう大丈夫だよ。大丈夫だから」

優しい笑顔で僕を包んでくれる。

「ぐすん、ごめん。もう大丈夫だから」

ようやく落ち着きを取り戻せた。

シャルル君から離れて向き直る。

「そう。よかった」

聖母のように見えてきた。

「だから、これからの事を考えよう」

「これからって…。どうしようもないでしょ」

「シャルル君はそれでいいの？本当に？僕は嫌だ！だから諦めないよ！」

「そんなこと言ったって…」

何か、何かあるはずだ。対処法が。考えろ！

「あっ！あれなら！」

「なに？何か思い付いたの？」

僕は鞄をあさり、生徒手帳を出す。

「ん？それがなにか？」

「ここ読んでみて！」

僕は生徒手帳の一部を指差す。

「ＩＳ学園特記事項第２１項―本学園における生徒は、その在学中においてあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。…つまり？」

条文を読むが、いまいちその意味が伝わってないか。

「シャルル君が嫌と言えば、在学中の三年間、フランスはシャルル君に手が出せないということ！その間に別の手段を見つけよう！」

「いいのかな、本当に」

想像してなかったことを告げられたのか、少し戸惑っている。

「いいんだよ！シャルル君の居場所はここだ！僕が保証するよ！だから僕を頼って！」

「ボクの居場所…。居場所か！ありがとう美晴！ボク何とかしてみるよ！」

沈んだ表情から、笑顔へと変わる。

「それにしてもよく覚えてたね特記事項。確か全部で５５項あったはずだけど」

「僕本読むのが好きなんだ。それの延長みたいなもんだよ」

「ふーん。ＩＳ強いし、記憶力良いし美晴はすごいね」

「まだ弱いさ。でも強くなる。守りたいものがあるから！」

「ねぇボクもその守りたいものに入れてくれる？」

「何言ってるの？もう入ってるよ。友達じゃないか」

「友達…ね（今はそこからでいいか）」

ちょっとだけ声のトーンが下がってるシャルル君。

さぁて、これからどうしようかな。

第27話

こんばんは、美晴です。

今は、上手く立ち回る方法を考えてます。

「今のところは、このまま男子として押し通していこう」

「まだ美晴以外にはバレてないもんね。何とかなるかも」

コンコン

「美晴。シャルル。入るぞ」

一夏が入ってくる。

「やばい！シャルル君今は隠れて！」

「えっ！どこに？」

「とりあえずベッドに！」

無理矢理ベッドに押し込む。

「お前らどうした。まだ飯食ってないんだって？」

「あー、シャルル君が具合悪いっていうから、看病を。ね！」

「うん。ゴホゴホ」

演技下手だなぁ。

「そうか。で、大丈夫なのか？」

よかったぁ、バカで。

「う、うん。ちょっと疲れが出ただけだから」

「そうか。じゃ美晴借りていいか？俺も飯まだなんだ」

「ど、どうぞごゆっくり～」

「行くぞ美晴」

「うん」

とにかく一夏を遠ざけないと…。

「なんだ。一夏達もこれからか」

出てすぐに箒ちゃんに会う。あっぶねぇ～。

「美晴はシャルルの看病をしてたらしい」

「そうか。大丈夫なのか？デュノアは」

「うん。ほら、外国に来て疲れたんだよ、きっと。ちょっと休めば治るよ」

僕もとんだ大根みたい。

「まぁ当然と言えば当然か」

会話を交わしながら僕達は食堂へ向かう。

美晴・シャルルの部屋
ＳＩＤＥ　シャルル

「はぁ、お腹空いた。食べそびれたよ」グゥー

でもあそこで一夏にまでばれたらさすがに強制送還だったかもなぁ。そう考えれば、この空腹なんてなんともない。けど…、お腹空いたよぉ。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

「ただいまぁ、シャルル君。ご飯持ってきたよ」

「わぁ！ありがとう、みは…」

飛び起きたシャルル君は僕の持つトレイを見て固まる。だってそこにあったのは…。

「あ！焦ってたから何も考えないで焼き魚にしちゃった。箸、使えないよね。ごめん、今変えてもらってくる！」

「い、いいよ。ボク食べるよ」

プルプル手を震わせながら、食事するシャルル君。

ぽろっ
「あっ」
ご飯が落ちた。
ぽろっ
「くっ」
今度は魚を落とす。
「見てらんない！やっぱり変えてもらおう！」
「いや！」
駄々をこねている。
「いや、ってこんな状態でまともに食べられないじゃないか」
「じゃ、じゃあ美晴が食べさせて？」
「えぇ？」
その上目使いは反則！

「だってさっき僕を頼ってって言ったじゃないか」

言質を取られた。

「うーん、わかったよ。確かに言ったしね。まずどれがいい？」

「お魚！」

「はいはい。あ～ん」

「あ～ん。うん、美味しい！次はご飯ね」

幸せそうな笑顔で言うシャルル君。

「はいはい。あ～ん」

「あ～ん」

「なんか餌付けしてるみたいだよ」

「ボクはペット？それもいいかも…」

何を想像してるのか、ニヘラとした笑顔で呆けている。

「はいはい、危ないことは言わないで食べる！」

「あ～ん」

なんとかして、食事を済ませた。

「じゃあそろそろ着替えて寝ようか。あっ、僕一回外に出るね」

「待って美晴。外に出てるとかえって怪しまれるよ。だから…」

「そうだね。じゃお互い背中を向けて着替えようか」

とは言ったものの、やりづらいなぁこの状況。

「あっ、ねぇシャルル君。どうやって男装してたの？」

「あぁあれはね、ＩＳスーツが矯正して男の子の体になるようになってたんだ」

「なるほど…。ところでさっきから視線を感じるんだけど？」

「み、見てないよ！キャッ！」ドテッ

「どうしたのシャルル君」

思わず振り向く。

「イタタ…」

どうやらこけたみたいで四つん這いになってる。パジャマの下が引っ掛かったようだ。

「だいじょう、ぶっ」

ズルッ

つまづいて僕も転ぶ。

「イテテ…。おしり？」

と、緑のパンツ。

「わっ、わぁ！見ちゃダメ！」
ブンッ
シャルル君の足が僕に向かって…顎にヒット。
「キュウ…」
僕は意識を失う。
ＳＩＤＥ　シャルル
あの後気絶した美晴をベッドに寝かせた。
ちょっと心配だったけど、すやすや寝てるみたい。
「かわいい寝顔。えいっ」
ツンッ
頬をつついてみる。
プニプニしてる。
「ふにゃあ」
美晴が反応した。
ふふっ。かわいい。

「ボクの居場所かぁ。守りたいなぁ。居場所も、この寝顔も。寝てるよね、よしっ」
チュッ

「しちゃった…」
おでこだけど。

「おやすみ、美晴」
明日から頑張ろう！

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

おはようございます、美晴です。

なんか一昨日の夜の記憶が一部抜け落ちてます。何があったんだっけか？

まぁいいや。今日は月曜日。また一週間が始まる。憂鬱だ。毎日が日曜日って訳にはいかないんだろうな。

「おはよう！」

僕は教室へ入る。

「あ！おはよう、美晴君！」

挨拶を交わすとすぐ女子の輪が形成される。

さっきからざわざわしてる。なんだろう？

て言うか、鈴ちゃんやセシリアさんまで加わってる。鈴ちゃん、自分のクラスのＨＲは？

「ねぇねぇさっきから何の話をしてるの？」

思いきって聞いてみる。

「えっ！なんでもないわよ！別に！」

鈴ちゃん、変だなぁ。

「み、美晴さんは聞かなくてもよろしくてよ」

セシリアさんまで変だ。

あっちでは箒ちゃんが項垂れてる。

「ねぇ、みんな何を話してるの？まさか…」

箒ちゃんに聞いてみる。

「すまない、そのまさかだ。今度のトーナメント優勝者は、一夏と美晴のどちらかと付き合えることになっている」

「な！なんで僕まで！箒ちゃんが一夏に付き合ってもらうなんて余計なこと言うから！」

「あのとき聞いていたのか！くっ、私だってまさかこんなことになるとは…。ましてや美晴まで巻き込んで…」

「こうなったら、みんなには悪いけど身内に優勝してもらうしか…。僕には危害が及ばないようにしないと」

「一夏はいいのか？」

僕の発言に箒ちゃんが疑問を持ったようだ。

「生け贄になってもらう」

箒ちゃん達なら僕を選ばないからな。

「嬉しいのか酷いのか、なんといったらいいのか」

「まぁ頑張ってね」

「やれるだけやるさ」

応援します。僕のために。

放課後

いつものように訓練に向かってます。シャルル君もいます。

「ということで一夏。頑張ってね、僕も頑張るけど」

一夏には事情を説明した。

「まさかそんなことになってるとは。買い物ぐらい別に良いのに」

そう考えてる限り、期待できなさそうだな。はぁ、やっぱり自分の身は自分で守るか。

「ボクも頑張ろうかなぁ」ボソッ

「何か言った？シャルル君」

「な、何も！」

「そう」

ドォンッ

「今の音！」

「アリーナの方からだな！」

「急ごう！」

廊下を走りアリーナへと向かう。

アリーナ

僕達が見た光景は惨劇そのものだった。

仁王立ちの黒と、地面に倒れ込む青と赤めの黒。

「まだまだぁっ」

甲龍が突っ込むが、突然動きが止まり反撃をくらい吹っ飛ぶ。

ブルー・ティアーズの動きも停止させられ、ボコボコに殴られる。

どうやら2機ともシールドエネルギーが尽きたようだ。

「なっ！まだ攻撃を止めない！」

黒は相変わらず攻撃を続ける。このままじゃ絶対防御があるとはいえ、生命にかかわる。

「これ以上は！一夏！」

「おうよ！」

零落白夜でアリーナのシールドを切り裂き中へ侵入する。

「貴様ぁ！」

僕は黒へと突っ込む。振り下ろされるブレードをサーベルで防ぐ。

「一夏！今のうちに二人を避難させて！」

「任せとけ」

二人を遠いところへ避難させる。

「ボーデヴィッヒさん！あなたは何でこんなことを！戦いたいならいつでも受けて立ちますよ！僕の仲間に手を出して誘きだそうなんて！」

「ふんっ！別にそんなつもりはない。ただかかってきたから返り討ちにしただけだ。イギリスも中国も大したことはない。どうせ貴様も大した実力ではあるまい」

「じゃあ今試してみるか！！」

二つの剣が交わることは…なかった。

「これだからガキの相手は疲れる」

そこにはＩＳ装備を生身で使い、ボーデヴィッヒさんの剣を受け止める千冬お姉ちゃんがいた。…ってか化け物だ。

「何か失礼なことを考えなかったか？」
ギロリとこっちをにらむ。
「…いいえ」
「そうか。さて、戦うのは結構だが、シールドを破壊されては教師としては見過ごせんな。この決着は今度のトーナメントでつけろ。いいな！」
「僕はそれでいいです」
「私も」
「よし。以降学年別トーナメントまで一切の私闘を禁止する。解散！」
ムカつくが、それよりも早く二人を保健室へ運ばなきゃ。

第２８話

こんにちは、美晴です。

鈴ちゃんとセシリアさんを保健室に運びました。

「はぁ、とにかく大した怪我じゃなくて良かったよ…」

一夏が二人を見て安心する。少し休めば問題ないらしい。

「ごめん…」

「すみません…」

「さて、事情聴取でもしますか。何であんなことになったのさ」

「それは…」

「言えません」

「あのねぇ」

「ボクにはわかるかなぁ。たぶん一夏の悪口言われて許せな、ふがっ」

二人は急に起き上がり、シャルル君の口を押さえる。

「余計なことは言わないの」

「大体、なんで気づくんですの？」

「んぐーっ！」

息苦しそう。

「はい、そこまで。シャルル君窒息してるよ」

「「あっ…」」パッ

「ふーっ、ふーっ。違う世界が見えたよ…」

お花畑かな、きっと。

「怪我人なんだから大人しくしてろよ」

一夏が二人を叱る。

「別に平気よ！」

「そうですわ！今からでもリベンジに！」

「そうか？」ポンッ

二人の肩を叩く一夏。

「「〜〜〜っ！」」

「やっぱりな。しばらく寝てろ。いいな！」

「「はい…」」

これで落ち着けるかな。

ドドドドドドド…

何だ？

ドカーン

保健室のドアが開かれたというか、吹き飛ばされた。
わらわらと女子が入ってくる。

「一夏君！」

「美晴君！」

「デュノア君！」

「「「私と組んで！」」」

「「「はい？」」」

「これ読んで！」

僕達の前に一枚の紙が出される。

「なになに？」

―今回の学年別トーナメントは、生徒同士のＩＳの連携運用を確認するため、二人一組のチームを作り参加すること。ペアは自由。ペアが作れなかった者は申し出ること―

「わかった？だから私と組んで！」

「いやぁ…」

どうしようか。そうだ！

「僕はシャルル君と組むことになってるから！ね！」

これならシャルル君が女の子だってばれないし、一石二鳥！

「う、うん！」

「まぁ男子同士ならいいか…」

ふぅ。

「じゃ一夏君は！」

「俺？俺は…」

「一夏さん！私も立候補します！」

「あたしも！」

「お二人はダメです！」

山田先生の声がする。でも入ってこない。

「えと、すみませ～ん！通してくださ～い！」

あぁ通れなかったのか。

「ふぅ。お二人のＩＳはダメージレベルがＣを超えています。今起動すると、変なクセがついて誤作動を起こします。なので、しばらく修理のため使用できません！」

「「そんなぁ…」」

ガックリと肩を落とす二人。

「で、どうするの一夏君！」

「私と組んでよ！」

「えぇと…」

そろそろ助け船を出すか。

「確か一夏は箒ちゃんと組む約束してたよね？」

「あっ！そうそう、そうだった！箒と約束してたんだ。だからごめんな」

手を合わせて謝る。

「まぁ先約があったなら諦めるしか…」

「残念だけど…」

呟きながら集団は出ていく。

「サンキュ、美晴」

「別にいいよ。大体ここは保健室なんだから、騒いで欲しくないし」

「では先生はこれで…」

「あっ待ってください先生。ひとつ質問が」

「なんでしょう？」

「鈴ちゃん達がボーデヴィッヒさんと戦ってるときに、動きが変なタイミングで止まってましたが、原因を知ってますか？」

「それですか。あのボーデヴィッヒさんのＩＳ、シュヴァルツェア・レーゲンにはＡＩＣ―慣性停止結界―が搭載されています。みなさんのＩＳのＰＩＣの発展型です。選択した対象物の動きを強制的に停止させることができます」

「なるほど。厄介ですね」

「では、先生は戻りますね？」

「はい。ありがとうございます」

「いえいえ。私は先生ですから」

笑顔で帰っていく先生。

「さて、俺たちも帰るか。二人はもう少し居ろよ」

「「は～い…」」

美晴・シャルルの部屋

「あのさ、美晴。遅くなっちゃったけど、さっきはありがとね？ボクと組むって言ってくれて…」

「ん？いいんだよ別に。これなら秘密もばれないしね」

「二人だけの秘密、か…。いいかも」

「何言ってるの。もう遅いから寝よう？」

「む～。…おやすみ美晴」

「おやすみ」

箒の部屋

ＳＩＤＥ　箒

コンコン

「箒～。居るか～」

ガチャッ

「なんだ一夏。こんな時間に」

「わりぃな、遅くに。すまんが成り行きで今度のトーナメント、俺とお前でペアを組むことになった」

「私は何も聞いていないぞ！」

「あぁ。すまん。みんなにペアを誰と組むか迫られて、つい箒とって…。嫌ならいいんだ。他のやつを探すよ」

「嫌だとは言っていない！…そうか。ペアか。よし、一夏。やるからには勝つからな！」

「おう！二人で優勝しような！じゃあな」

「あぁ！おやすみ一夏」

「おやすみ箒」

一夏は自分の部屋へ戻って行った。

「ペアか。優勝して付き合うという当初の形からはずれたがペアということは、ずっと一緒なわけで。そのまま優勝したら…「俺とお前の相性はやっぱり最高だな。お前以外考えられない。付き合ってくれ、箒」とか言うかもしれない。良い。これは良いぞ！」

「篠ノ乃さん、変になった…」

ルームメイトが何か言っているが気にしない。やるぞ。私はやるぞ！

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

第２９話（前書き）

トーナメントの日です。

相変わらず戦闘は苦手です。

第２９話

こんにちは、美晴です。

アリーナにいます。今日は学年別トーナメントの日です。
一週間かけて行われるらしく、初日の今日は一回戦が行われるようです。にしても…。

「人多いなぁ」

観覧だけでアリーナが埋まってる。

「三年生にはスカウト、二年生には伸び率の調査、ボク達一年は有望株の発掘ってところじゃないかな」

「シャルル君」

「まぁ相手が誰でも頑張ろうね、美晴」

「うん。そろそろ対戦相手がわかるはずだね」

さて…。

「な！一夏と箒ちゃんが相手？」

「一回戦から強敵だね。やっぱり兄弟だから一夏と戦うのは嫌なの？」

「いや、というよりも白式の零落白夜には僕のビーム兵器が全部無効化されるんだ。相性最悪ってやつさ」

「そっか…。じゃ作戦としては零落白夜発動前に落とすか、発動されたらボクがメインを務めるってところかな？」

「ごめんね。性質上、一撃必殺の零落白夜だからそんなに使ってこないはずだけど、念のためそれで」

作戦を立て、試合開始時間を待つ。

ワァーッ

僕達はアリーナに入場する。

―それでは一回戦第一試合、織斑美晴、シャルル・デュノアペア対織斑一夏、篠ノ乃箒ペアの対戦を開始します―

箒ちゃんは打鉄に乗っている。

「一夏！」

「何だ美晴！」

「僕が勝つ！」

「負けらんねぇな！」

「「勝負！」」

―試合を開始してください―

試合開始と同時に一夏と箒ちゃんは突っ込んでくる。どっちも近接型だから当然か。

「シャルル君は箒ちゃんを！一夏は僕がやる！」

「わかった！気を付けてね美晴！」

「ということで一夏。強くなった君を見せてもらうよ！」

僕は一夏とサーベルで切り結ぶ。

「はあっ！」

一夏は勢いを利用した横薙ぎで来るが、僕はそれを斜め上に飛び回避する。体勢が崩れた一夏に一気にサーベルを叩き込む。

ブンッ　キンッ　ブンッ

やはり剣道経験者。僕のサーベルを雪片で確実に防いでいる。

やっぱり接近戦は一夏が上手か。

僕は一夏から離れ、ライフルに持ち替える。

一夏にビームを撃ちながら、シャルル君の様子を確認する。箒ちゃんとの実力差は顕著だ。機体の差も関係してるだろうけど。アサルトライフルを確実に当て、突進を止めたら近接ブレードで切りつけ、相手が反応したら近距離でショットガンを放つ。ラピッドスイッチの特殊性に箒ちゃんがついていけてない。

やるな。僕も負けてられない。

「どこ見てんだよ美晴！」

一夏が突っ込んでくる。

「直線的なんだよ一夏！」

ビームセイバーで受け流し、そのまま後方を取る。バルカンとレール砲を同時発射。ヒットした一夏が吹っ飛ぶ。そこにイグニッションブーストで加速し蹴りを食らわす。

「一夏！人類最初の武器って何だか知ってるかい！」

一夏はなんとか空中で受け身を取る。

「それは拳と足さ！」

再び加速し、一夏に連打を浴びせる。ダメージ自体は少ないが、サーベルよりも早く出せるから手数が自ずと増える。

「くそっ！これ以上は！」

一夏は零落白夜で切りかかってくる。

「あぶねっ！」

反応が早かったからか直撃は免れた。しかしかすっただけでダメージは半端ない。

「直撃だったら墜ちてたかな…」

ここで箒ちゃんが墜ちたとの情報が入る。

「シャルル君！」

「こっちは終わらせたよ！今度は美晴が頑張ってね！」

「よしっ。一夏！僕が勝つ。そしてボーデヴィッヒさんと戦う！」

「ふっ！俺だってあいつをぶん殴りてぇ。だから俺も負けねぇ！」

一気に勝負をつけるか。

最大加速で一夏に突進する。サーベルの攻撃が来ると予想した一夏が受け止めようと雪片を振るうが、空振り。

ビームサーベルは任意のタイミングで刃を出せる。雪片を通過し一夏の胴寸前で刃を出し、攻撃する。

「くっ！あぁっ！」

攻撃を食らった一夏はよろめく。そこに前蹴りを出し、距離が少し空いたところに、エネルギー消費を調節した普段よりは弱威力の背

部ビーム砲を撃つ。ギリギリエネルギーが残るように調節したから、もうこれ以上は戦えない。

「当たれぇー！」

ドウンッ

ビーッ

―織斑一夏、篠ノ乃箒、両者シールドエネルギーエンプティ。勝者、織斑美晴、シャルル・デュノアペア―

「か、勝った」

「やったね美晴！」

シャルル君が駆け寄ってくる。

「結構きつかったけどね」

「やっぱり勝てねぇなぁ、美晴には」

一夏が頭を掻きながら言う。

「いや、あの零落白夜のタイミング、完璧だったよ。本気で危なかった」

「それでも当てられなかった…。まぁいいや。とにかく俺に勝ったんだから、お前がボーデヴィッヒをぶん殴れ」

「まぁ、普通に戦うけど。頼まれたよ、一夏！」

ギュッ

固い握手を交わす。

「熱いなぁ。やっぱり美晴も男の子だったんだね」

「疑ってたの？シャルル君は」

「少しね」

「もう～。あ、箒ちゃんは…」

あ～、見事に落ち込んでるよ。フォローしておくか、今度。

「おい美晴。明日の対戦相手が出たぞ。ボーデヴィッヒだ。任せた

んだから、負けんなよ？」

一夏がニヤリとしながら言う。

「意外と早かったな…。よし、シャルル君。今から部屋で作戦会議だ！一夏、またあとでね！」

「あぁ、頑張れよ！」

僕はシャルル君の手を引き、部屋へと帰る。

美晴・シャルルの部屋

「ということで、まずボーデヴィッヒさんの今日の戦いを見てみよう」

学園内のデータベースから対戦データを引っ張り出し、分析する。

「見事に完封してるね、一人で」

ノーダメージで勝ち上がってる。

「ペアの人を全く意識しない戦い方だね」

「でもＡＩＣを使ってないんだから、本気出してないよね」

「まぁ見せるまでもないってことなんだろうね。さて、どうするの？美晴」

「うーん。まず、シャルル君にペアの人を倒してもらって、２対１に持ち込もうか」

「それしかないよね」

「ＡＩＣの攻略法は戦闘中に見つけようか」

「今日より辛いかもね」

「でもシャルル君とじゃないとできないからね。頼りにしてるよ？」

「ボクじゃないと…。頼りにしてる…。よーし、美晴！ボク頑張るよ！だから激励のチューを…」

こんなに積極的だったかな、シャルル君って…。

「はい、暴走はそこまで！」コンッ
軽く小突いて暴走を止める。
「む～っ、ノリが悪いなぁ」
「ノリでするものじゃありません」
「じゃ本気なら良いんだね。よし」
「何を企んでるのかな？」
「なにも～」
ニヤッとしてるシャルル君。ふぅ、警戒すべき人が増えたのかも。
とにかく明日だ。明日の試合に勝たなきゃ。

第２９話（後書き）

一夏とミハちゃんを戦わせて見たかったので、ラウラは次回です。

シャルロットは可愛くしたいんですが、できる自信はないです。

第３０話（前書き）

今回はラウラ戦。

多分に漏れず短く下手です。

第３０話

こんにちは、美晴です。

さて、トーナメント二日目、一回戦の残りと二回戦の一部が行われます。僕達は昨日第一試合だったから今日が二回戦。

アリーナ控え室

「ボーデヴィッヒさん…」

「美晴？美晴！」

「あぁ、ごめんシャルル君」

どうやらさっきから声をかけてくれていたみたい。

「気負うのもわかるけど、今からそんなだと疲れちゃうよ？」

「そうだね。あっ、作戦は昨日話した通りね？」

「言ってるそばからぁ」

ふくれたシャルル君も可愛いなぁ。

「ごめん。一夏達は？」

「スタンドで観戦するって」

「そっか」

―選手はピットにて待機してください―

「行くか…」

僕達はピットへと向かう。

―二回戦第一試合を開始します―

アリーナ中央にて開始の合図を待つ。

「ふんっ。一回戦は勝てたようだが、所詮私には勝てまい。まぁ一回戦の相手があいつだからな。実力ではあるまい」

挑発のつもりか？ボーデヴィッヒさんが話してくる。

「まぁ始まればわかるさ」

―試合を開始してください―

「シャルル君！任せた」

「オッケー！」

作戦通りシャルル君にはペアの方を叩いてもらう。

「ふんっ。私のペアを潰すか。まぁ貴様らなど私一人で十分だがな！」

ワイヤーブレードを６本飛ばしてくる。

変則的な動きなため、読みきることができない。なんとか隙間を縫うようにして回避していく。

「くっ。とにかく距離を！」

それを許してはくれない。ワイヤーは僕を取り囲むように動いていく。

「なら！」
包囲を突破するには前方へ突っ込むのが一番だ。
「その程度でっ！」
プラズマ手刀を展開し、至近距離から振りかぶられる。
僕はセイバーを展開し防ぐが…。
「後ろは良いのか？」
後ろ？ワイヤーブレードが後方から僕へ襲いかかる。
「今は避けるしか！」
右へ最大加速！
何とか避けきる。
やばい。強敵だ。勝てるかな…。
「お待たせ美晴！向こうは片付いた！」

「最高のタイミングだよ！」

「2対1などハンデにもならんわ！」

レールカノンを撃ってくる。僕のより口径が大きい。威力は高いだろう。だけど特性はよく知っている。連射はできない。だから一射目さえ見極めれば…。

「今だ！」

発射タイミングを予測し、急激な進路変更を行う。

「当たらなければどうということはない！」

セイバーで切りかかる。

「これでも避けられるか！」

ガクンッ

「動けない！これがＡＩＣ！」

「この距離、その体勢で同じことが言えるのか？」

やばい。ダメージ大だろうな。

「美晴大丈夫?!」
シャルル君がボーデヴィッヒさんの右からマシンガンを撃つ。
ガクンッ
硬直が解けた。
「ええぃ、邪魔だ!」
シャルル君がＡＩＣに捕まる。
「シャルル君!」
ライフルを撃ち、気を逸らせる。
「あれっ!動ける!」
シャルル君の硬直が解ける。
まさか!
「シャルル君!」

「なに！美晴！」
攻撃しながら、プライベートチャンネルで通信する。
「美晴、それ本当？」
「試してみる価値はある！」
まずは僕が今まで通り突っ込む。
「バカの一つ覚えか！」
ＡＩＣに捕まる。けど！
「２対１だってこと忘れた？」
「なにっ？」
サイドからシャルル君がマシンガンを撃つ。
やっぱり硬直が解けた。
つまりボーデヴィッヒさんがＡＩＣを使うには、対象に対して集中しなければいけない。また、その対象となる範囲は広くない。そう

いうことだ！

「もう大丈夫だ！」

一方がＡＩＣを使わせ、もう一方が攻撃を当てる。これなら！

「くっ。いいだろう。こうなっては貴様への認識を改めねばなるまい。私も本気で戦ってやろう！」

と言い、左目の眼帯を取るボーデヴィッヒさん。その左目は金色に輝いている。

「オッド・アイ！それが！」

ビームライフルを高速連射する。が。

「当たらない！さっきとは反応が桁違いだ！」

明らかに今までとは動きが変わった。僕が撃つ瞬間にはすでに回避をしている。

「美晴！どうしよう！」

シャルル君も焦ってる。

「今までのは通用しない！別の方法で！」

遠距離では当たらない。なら近距離しかない。

僕はどっちにも対応できるように、ビームライフルを。シャルル君にはラピッドスイッチがあるから問題なし。

「行くぞ！」

僕に向けられたＡＩＣはシャルル君が解除してくれる。

ボーデヴィッヒさんは回避し続けるが、僕はシュッツェンのほぼ全ての武装を使用し、その回避先を限定していく。

「そこだっ！」

シャルル君が待ち構えていた。

「この距離なら外さないよ！」

シャルル君はラファール・リヴァイヴ・カスタム？最強の武器、シールド・ピアース―盾殺し―を展開し、ボーデヴィッヒさんに突撃。威力は高いが、近接戦専用のためなかなか当てづらい。しかし零距離なら話は別。

「一発目！」

「ぐあっ！」
直撃を受け、大きくシールドエネルギーが削られる。
「二発目！」
「ぐあっ！」
シールド・ピアースはリボルバーのように回転し、最大６射することが可能。全弾命中すれば、無傷からでもエネルギーをゼロにする。
「これで！」
全部で四発を叩き込んだところで、シールドエネルギーが切れた。
―勝者、織斑美晴、シャルル・デュノアペア―
「よし！勝ったぞ！」
その瞬間…。
「アアアアアアアッ！」

ボーデヴィッヒさんの悲鳴にも似た叫びと共に、シュヴァルツェア・レーゲンが放電する。

「うわっ！」

至近距離にいたシャルル君が吹っ飛ばされ、壁に激突した。

「シャルル君！」

すぐに助けに行く。

「ごめん…。あっ、美晴。あれ…」

視線の先にはシュヴァルツェア・レーゲンがグニャグニャと形を変えていた。

その形は…。

「千冬お姉ちゃん…」

まさにあのとき助けてくれた、最強の人の姿だった。

第３０話（後書き）

みなさんのおかげで３０話まで来ました。ギュッとすれば１０話にも満たない短さで話数を稼いでしまいました。

こんな拙い、小説にもなっていない作品にお付き合いいただきありがとうございます。

一話あたり、大体ユニークが１２００前後です。
こんなにたくさんの方に読んでもらえるとは…。作者としては最初、１００も行かないと思ってました。

これからも頑張ります！よろしくお願いします！

第３１話（前書き）

ラウラ戦決着。

第３１話

ＳＩＤＥ　ラウラ

精神世界

試験体Ｃ－００３７。それが私が生まれた時の名称だった。

私は遺伝子強化の試験体として、試験管の中で作られた。

ラウラ・ボーデヴィッヒ。

それはあくまでも便宜上つけられた名前だ。特に愛着などない。

私は生まれてからずっと、敵を倒すための術を叩き込まれた。

格闘術、狙撃術、用兵学、精神もただ敵を倒すことに向くよう鍛えられた。

私はそれに何ら不満を抱くことはなかった。というよりも抱くことを知らないのだ。

ただ敵を倒す。そのために私は作られ、生まれ、育てられたのだ。

それ以外私は知りようがなかった。

どうやら、遺伝子強化は良好な結果をもたらしたらしく、私は隊で

最強の存在となっていた。

あの日、一機のＩＳによって世界の兵器バランスが崩れ、私が学んできたことも役に立たなくなってしまった。

しかし、私は女として作り出されていた。ＩＳの操縦者としての適正にも優れていた。

存在意義が保たれた。私はなんとも言えない感覚を抱いた。

ある日、私のもとに研究者がやって来た。

越界の瞳―ヴォーダン・オージェ―

ＩＳとの適合性向上を目指し、搭乗者に疑似ハイパーセンサーとなるナノマシンを移植し、動体視力や反応を著しく上げるというものだった。

理論上失敗はあり得ない。そのはずだった。

しかし私の体は適応することはできなかった。

ナノマシンは暴走。その証拠として左目は金色に変色し、制御できず常に発動した状態となった。

失敗作。私はそう周りから呼ばれた。

私は実力が著しく低下し、部隊内での立場も最下位。私は存在意義

をなくした。
そんな時あの人は現れた。あの人は言った。
「お前を一ヶ月で前以上の実力にしてやる」
何を言っているのだこの人は。最初はそう思っていた。
しかし一ヶ月後、私は見事にまた部隊内最強の座を手にしていた。
私に再び存在意義をもたらしてくれたその人に、私は心酔していた。
ある日、私はその人に一つの質問をした。何故あなたはそんなに強いのか、と。
返って来た答えは意外だった。
「私には弟達がいる。強くあらねばならない。あいつらのためには」
笑顔で遠くを見つめていた。
楽しそうに話す。
何故？何故そんなに楽しそうなんですか？私には分からない。納得できない。あなたは世界最強で、常に凛々しく、厳しく、気高いはずだ。私が知っているあなたはそんな表情をしない。
とにかくそんな顔を私は見ることはなかった。

私は許せなかった。そのような表情をさせる存在を。この人の輝かしい経歴に泥を塗った者達を。

憎い。憎い。

しかし、私はその憎い存在に負けた。何故だ。力がないからか。認めない。認めてなるものか！

―汝、力を欲するか―

あぁ。欲しい。力が欲しい。あの憎き者を倒す力が！

―授けよう。その力を―

ダメージレベルD

精神接続　完了

搭乗者の許可　クリア

VTシステム発動

「アアアアアアアッ！」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

スタンド

ＳＩＤＥ　一夏

「何だあれは！」

箒が立ち上がる。

「あれは…千冬姉だ」

俺は消え入りそうな声で言う。

「どういうことですの？」

セシリアが質問してくる。

「わからねぇ。でもあれは千冬姉そのものだ」

（美晴。無理するな。逃げろ）

俺は心の中でそう呟いていた。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

アリーナ

「美晴！あれは！」

「千冬お姉ちゃんだ。現役時代の、最強と呼ばれた頃の…」

「そんな…」

「現在を持って警戒レベルをＤに指定。速やかに観覧者を避難させろ」

千冬お姉ちゃんが指令を出している。

「鎮圧のために教師部隊を投入する。お前達もすぐにそこから避難しろ！」

僕達に対しても避難するよう指示する。

「嫌だ！僕は戦う！」

僕はその指示を拒否する。

「何を言っている。危険だ！早く避難しろ！」

「あんな、あんな偽物の千冬お姉ちゃん許せない。僕が絶対に倒すんだ！」

「美晴。無茶しないでね」

シャルル君が心配してくれる。

「しない！」

ブンッ

偽物が攻撃してくる。

千冬お姉ちゃんの剣筋そのものだ。速く、そして鋭い。正直受け止めるのがやっとだ。

でも意思の無い力はただの暴力だ。そんな力に負けられない。

「ボーデヴィッヒさん！これが、こんな力が君の求めていた強さなのか！自分の意思の無い、ただの暴力が君の欲しかったものなのか！」

返答はない。ただ攻撃するだけ。きっと意識はないのだろう。

「こうなったら！」
僕は全エネルギーをビームサーベルに集中させる。
「もうやめるんだ！」
肥大化したサーベルがシュヴァルツェア・レーゲンを切り裂く。
中からボーデヴィッヒさんが出てきた。
僕は抱きかかえる。そのときボーデヴィッヒさんの表情は、少しだけ柔らかかった。

ＳＩＤＥ　ラウラ

精神世界

「何故貴様はそんなに強いのだ」
私は奴と対峙している。
「僕？僕は弱いさ。ただ、強くなりたいとは思っている」
「何故だ」

「守りたいものがあるから。君は何のために強くなりたいの？」

「私は…私は…。何のために強くなろうとしていたのだろうか…」

「わからないか。じゃあ僕と一緒に探そうよ。君が強くなりたい意味を。君の守りたいものを。君の求める明日を」

「一緒に…」

「そう。一緒に探そう。大丈夫。道に迷ったら僕が手を引いてあげるよ」

「見つけられるのだろうか。私に…」

「二人なら大丈夫だよ！」

あぁ、こんな温もりは初めてだ。でも、悪くない。できればずっと…。

保健室

「はっ！私は…」

「目が覚めたか」

教官が隣にいた。

「教官…。ここは…」

「保健室だ。お前は美晴により救出され、ここまで運ばれた。後で礼を言っておけ。ちなみにお前のＩＳはコアは生きていた。予備パーツぐらいあるだろう。組み直すならそうしろ」

「はい…」

「さて、本題だ。ボーデヴィッヒ。貴様のＩＳにはＶＴシステムが搭載されていた」

「ヴァルキリー・トレース…」

「そうだ。歴代のモンド・グロッソ出場者の戦闘方法をそのまま再現させるシステム。研究・開発は世界的に禁止されていたが、お前のＩＳには分からないように巧妙に細工した上で組み込まれていた。

どうやらダメージや、お前の負の感情で発動するようになっていたようだ。美晴の最後の攻撃でシステム自体は全壊していた」

「そうですか…」

「ドイツから来ていた連中には、尋問がかけられている。直に口を割るだろう」

「……」

「ラウラ・ボーデヴィッヒ。お前は誰だ」

窓辺に向かい、夕日を浴びた教官が質問をする。

「私は…」

誰なのだろうか。私とは。

「ならお前は今日からラウラ・ボーデヴィッヒだ。何をしたい、どうなりたいかこれからよく考えるといい。少なくとも三年はここにいるのだ。考える時間はある。悩め、青年よ」

教官は部屋を出ていく。

何がしたい、どうなりたい、か…。

あがいてみるしかあるまい。

SIDE　OUT

第３２話（前書き）

ミハちゃんが襲われます。シャルル暴走モード。

第３２話

「みゃーっ！やめて！脱がさないでぇ！」

こんばんは、美晴です。僕の部屋です。

全エネルギーをビームサーベルに回して絶対防御がなぜか切れていたことがわかりました。

約束を破って無茶をした罰として、今僕はシャルル君と箒ちゃんの手によって女装させられかけています。箒ちゃんは憂さ晴らしでしょう。

「ふふっ。罰だからおとなしくしてなきゃダメだよ？美晴」

怖いよ、シャルル君が怖いよぉ。

「箒ちゃんもやめてよぉ！」

「無茶をしたのだ。このぐらいなんとでもあるまい」

それとこれは違うよ！

「助けて一夏ぁ！」

「すまん。逆らえない」

合掌すんな！味方は居ないのか！

「セシリアさん！」

「私も見てみたいですし…」

「鈴ちゃ～ん！」

「似合うと思うわよ？」

うぅ…。他人事だからって。

「貴様らうるさいぞ！何をやっている！」

救世主登場！みんな動きが止まっている。

「助けてぇ、千冬お姉ちゃ～ん」

涙目で懇願する。

「貴様ら何をさせた！」

「え、えー、美晴が無茶したから罰として女装をさせようかと…」

シャルル君が怯えながら説明する。

「何だとぉ！」

「「「「「ひっ」」」」」

ほら怒られた。千冬お姉ちゃんは僕の味方だよね。

「何故私を誘わなかったのだ！」

にゃに？

「私も混ぜろと言っているのだ！」

「なんですとぉ？！」

「私も以前から美晴に女装をさせてみたかったのだ。で、服は？」

「これです」

女子用の制服を差し出すシャルル君。何で持ってるの？しかも裾短めじゃない？

「ふむ。なかなかいいチョイスだ、デュノア。よし。お前達は一旦部屋の外に出ろ」

「何でですか？」

シャルル君が聞く。

「お前達に美晴の裸を見せるわけにはいかん。だから着せ替えは私がやる！」

「「「「「はいっ」」」」」

あまりの迫力に何も言えなくなる5人。

バタンッ

「出ていったな。ではやるか」

手をほぐし構えている千冬お姉ちゃん。

「やめてぇ！脱がさないでぇ！」

「おとなしくしていろ！」

「できるかぁ！」

「ほう。いつの間にこんなに筋肉質に…」

スリスリ

「や～め～ろ～！」

「敵うのか？私に」

くっ。力じゃ負けるか…。

パンパンッ

「完了っと」

うぅ。お婿にいけない…。

「よし！入っていいぞ」

「おじゃしまぁ…！かわいい！かわいいよ美晴！」

「シャルル君。嬉しくない…」

裾が短いから見えないように押さえなきゃいけない。

「最高だよ！その仕草がまたそそるね！」

興奮するなよぉ。

「似合いすぎよね、美晴…」

「なんだか負けた気がしますわ…」

そこはなんで落ち込んでるのさ。

「勝ちたくなんかないやい！早く元通りにさせてよ！」

「駄目だ！しばらくそのままでいろ！お前は私の指示を拒否したのだ。その罰でもある。さて、デュノア。これを」

「デジカメですか」

「言わなくてもわかるな。メモリーは後で私の部屋へ持ってこい。報酬としてお前にもコピーさせてやろう」

「アイアイサー！」

「あとは任せた。私は事件の後始末がある」

「いってらっしゃいませ」

最高の敬礼で千冬お姉ちゃんを見送るシャルル君。

「さぁ美晴。先生の命令だからね、逆らえないよ？ウフフフフ…」

パシャッ　パシャッ

「やめて！撮らないでぇ！下からは禁止！誰か止めろよぉ！」

「だってなぁ。千冬姉には」

「「「「逆らえないし（ませんし）」」」」

うなずく一同。

「裏切り者ぉ！」

その後、夕食の時間までこの撮影会は続けられました…。

食堂

シャルル君や一夏達と同じテーブルで食べてます。

「……」

シャルル君には正直怒ってます。

「だからごめんって。もうしないから機嫌直してよ、美晴」

「ホントにしないって約束する？」

「するする！だから、ね？」

「信じていいんだね？」

「海より深く信用してくれていいよ！」

言い方からして信用ならないが…。

「まぁ、信じてみるよ」

「（メモリーはあるからしばらくはそれで…）」

「はぁ。ところで結局トーナメント中止になったね」

シャルル君が変な目をしていたので、一夏へ話しかける。

「あぁそうだな。あれじゃ続行は不可能だろ」

「なんかみんなを巻き込んじゃったなぁ」

「美晴のせいじゃないから気にすんなよ」

「ありがと一夏」

ふと目をやると、ちょっと遠目で女子達が話している。

「トーナメント中止…」

「ということは…」

「付き合うのも無しなのぉ？」

「「「はぁ～」」」

がっくりと肩を落としている。確かにそういう結論になるか。助かったのは確かだ。でも、箒ちゃんも無し？

「私の約束も無効か…」

「ん？あぁ、あの話か。別にいいぞ？付き合っても」

お？

「本当か？」

「買い物ぐらい何時でも付き合ってやるよ？」

やっぱり…。

「こんの唐変木がぁ！」

パシィーン　ズゴーン

きれいにアゴに入ったパンチのあと、崩れ落ちる一夏へ追撃の膝。

きっつ～。Ｋ－１でもそうお目にかかれないコンビネーションだ。

ペシペシ

「お～い一夏！生きてるか～い？」

「……」

あ、ダメだなこれ。

「箒ちゃん。責任持って運んでね」

「…すまない。…ついな」

「いいから。別にいつもの事だし」

「…すまない」

いつもという言葉に反省する箒ちゃん。

ズルズル

せめて抱えていってよ。あんなだけど僕の兄なんだから…。

「さて。そろそろ戻りますか。シャルル君」

「そだね」

「あ、まだいましたか。良かったぁ」

山田先生が駆けてくる。

「どうしたんですか？山田先生」

「あ、あの今日から男子も大浴場が使えるようになりました。時間制にするとまさかがあるので、曜日別にしました。火曜、木曜の週

二回だけですけど。…ごめんなさい」

「いえいえ。使えるようになっただけでありがたいですから」

「そうですかぁ。そう言ってもらえると助かりますぅ。あれ？一夏君は？」

キョロキョロと周りを見渡す先生。

「諸事情がありまして、今は部屋にいます」

暴力事件は伝えられないからな、諸事情ということで。

「そうですか。では一夏君にも伝えておいてください」

「わかりました」

「それではぁ」

先生はまた慌ただしく駆けていった。

「さて、シャルル君。先に入っておいでよ。僕はまた今度にするよ」

学園のデータでは男同士だけど、ねぇ。真実を知った以上は一緒には入れないでしょう。

「えっ！悪いよ。美晴が入りなよ。普段部屋のしか使えてないんだから」

「でもなぁ」

「いいって。お詫びの印ということにして？」

「そういうなら…」

僕が入ることになった。

大浴場

「あああぁっ。大きいお風呂はやっぱり良いなぁ」

もう二ヶ月ぐらい大きなお風呂に入ってなかったから、気持ち良さが倍増。

「にしても広いなぁ。普段女子達はこんなに良いお風呂使ってたのか…」

仕方ないとはいえ、ちょっと羨ましく思った。

ガラッ

ドアが開いた。誰だろう。

「一夏？」

振り向いて入ってきた人を見る。

「わっ。見ないでよ。そっち向いてて！」

「ご！ごめん！」

入ってきたのはシャルル君だった。

「な、なんで入ってきたの？」

「な、なんとなくかな」

「ぼ、僕出るよ！」

「ダメ！…ちょっとだけ話させて？」

「…わかったよ」

背中合わせになり会話する。

ドキドキがばれないか不安だ。

「美晴。あのね。前に話したこと覚えてる？これからどうするかってやつ…」

「覚えてるよ？」

「ボクね、決めたんだ。ボクはここにいたい。だからここにいる！」

「そっか…」

「美晴がいたからそう決めたんだよ？」

「シャルル君…」

バシャッ　ギュッ
「シャルル君！何を！」
抱きつかれた！当たってるよ！柔らかい感触が背中に！
「二人きりの時はシャルロットって呼んで欲しいなぁ」
「シャルロット…。それが」
「うん。お母さんがつけてくれたボクの本当の名前」
「シャルロットちゃん」
「はい」
「なんか長いなぁ。ニックネームでいい？」
「ニックネームねぇ。良いやつならそれでもいいよ？」
「ん～。シャルってどう？ほら、どっちにも対応してるから、なかなか良いと思うんだけど」

「シャル…か。良いね。これからはそれで呼んで？」

「シャル」

「なぁに美晴」

「うん。馴染んだね」

「いいねぇ。二人だけの呼び方って」

「さ、さて僕はそろそろ出るね？」

「あ、うん」

さすがにこれ以上は僕の精神が持たない。そりゃ見た目は女子と間違われるけど、それでも男だから…。言わなくてもわかるでしょ？

さて、部屋に戻るか。

同時刻　寮の屋上

ＳＩＤＥ　箒

あのとき私には何も出来なかった。クラス対抗戦の時にもただ見ているしかなかった。専用機さえあれば、一夏や美晴を援護できたのに…。私も守る力が欲しい。

正直話すらしたくないが、あの姉に頼んでみようか…。

ピッ　ピッ
プルルル…

「もすもすひねもすぅ？天才篠ノ乃束さんだよぉ」

「姉さん、私です」

「箒ちゃん？おっひさ～。箒ちゃんからかけてくれるなんてお姉さん嬉しいなぁ。なになに？私の声が聞きたかったからとか？」

「ふざけるなら切ります」

「待って、待ってよぉ～。箒ちゃんがかけてきた理由はわかってるよぉ。専用機が欲しいんだね？」

「…そうです。お願いできますか？」

「もっちろん。というか、後は微調整だけなんだ。紅椿、これが箒ちゃんのＩＳの名前だよ？届けるのはもう少し後になるかも。待っててねぇ～」

「…お願いします」

ピッ

これで…。これで私も一夏達を守れる。

屋上には風が吹いていた。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

第３２話（後書き）

前話でアクセスが今までの半分に減りました。ショックです…。

それでも読んでくださる方がいるので、投稿は続けます。

きっとつまらなくなったんでしょうね。作者も書いててそう思います。でもこれが僕らしさだと割りきってます。文才が無い以上はそう思い込むしか…。

第３３話

おはようございます、美晴です。

なんか変なんです。シャルは今朝、僕より早く部屋を出たはずなのにまだ教室に来てないんです。何かあったのかな。

シュンッ

「おはようございますぅ…」

なんかやつれた感じの山田先生。昨日よく眠れなかったのかな。

「えぇ…、今日は皆さんに転校生を紹介します…。転校生と言うかなんと言うか、皆さんがよく知っている方です…」

誰だ？そんな転校生いたか？

「シャルロット・デュノアです！これからよろしくお願いします！」

女子の制服に身を包んだシャル。あぁ、クラスの全員の頭に？マークが浮かんでるなぁ。

「ということで、シャルル君はシャルロットさんでした…。はぁ、仕事が…」

増えたな。部屋割りから何から。なんかすみません。

「あれ？昨日大浴場男子が使ってたよね？」

「そういえば確かに…」

気づかなきゃ良いことに気づくんだから…。

「一夏さん！」

「俺ぇ？！」

「一夏！」

「お前までもか箒！というか俺は昨日お前に殴られてから、記憶がない！」

「そ、それは…」

ドガァーン

廊下側の壁に大きな穴が開いた。

「一夏ぁ！」

甲龍を展開した鈴ちゃんがそこには居た。

「このドスケベ！喰らえぇ！」

「やめろ！鈴！生身相手に撃ったら死ぬ！」

一夏が必死の抵抗を見せる。

「いっそ死んじゃえぇ！」

「うわぁー！」

グイッ

「ま、待ってよ一夏！僕を盾にしないで！」

「すまん、美晴。犠牲になってくれ！」

「死ぬぅぅぅぅ！！」

ドウンッ

「死んで…ない？何で？」

「大丈夫か？」

そこにはシュヴァルツェア・レーゲンを部分展開したボーデヴィッヒさんが居た。

「あ、ありがとう。助かっ…んぐっ」

唇を奪われた。僕のファーストキス…。

「んちゅっ…れろっ」

うそ！初めてがディープ！

「ぷはっ。織斑美晴！お前を私の嫁にする！異論は認めん！」

「なんですとぉ！」

「嫁か。確かにそうね…」

誰だ納得したやつ！

「ふふっ。美晴はボクの前で他の女の子とキスしちゃうんだ…」

怖い、顔が怖いよシャル…。

「ボーデヴィッヒ。貴様は私の弟に手を出したなぁ！いくぞ！シャルロット！」

「はい！先生！」

教師が私情でキレるなよ。

「美晴ぅ！」

「ボーデヴィッヒ！」

やばい。修羅と化した二人が突っ込んでくる。

「ボーデヴィッヒさん。ここは危ない！逃げよう！」

「私なら大丈夫だ！」

「僕が大丈夫じゃないから！早く」

ギュッ

手を握り僕達は走り出す。

「手まで握るなんてぇ！」

やめようよ廊下で…。

「シールド・ピアースを出すなぁ！」

死ぬ。確実に死ぬ。なんとか逃げろぉ！

この鬼ごっこ、というか死からの逃亡は、一限終了まで続きました。

お昼　食堂

なんとか僕の命は保たれました。今はお昼です。

「はい、ボーデヴィッヒさんはここ！」

シャルの隣は危険なので、三角の形で座ってます。
これから朝の事情聴取を行います。

「私達は夫婦なのだ！ラウラと呼べ！」

「夫婦って…。まぁ事情は後で。ラウラさん。これで良いかな？」

「敬称も要らん！」

「わかったよラウラ」

「美晴。そろそろ説明してもらってもいいかな？納得いかないものなら容赦しないよ？ふふふ…」

「まず、その怖い笑みをやめてくれる？」

「返答次第だよ？」

「はぁ。まぁまずはラウラの話を聞こう。何でいきなりキスしたの？それに嫁って…」
「私は美晴に惚れたのだ。日本では惚れた相手を嫁にし、誓いのキスをすると聞いた！」

「一体誰に…」

「私の隊のものだが？」

一度話す必要があるかもな、その人と。

「何でいきなり心変わりしたのかなぁ。まさか手をつけたの？」

絶対零度の笑顔を向けるシャル。

「いや！つけてないから！なにもしてないから！」

「じゃあなんで！」

「私は…。嫁に私の強くなる意味を、求める明日を一緒に探そうと言われた。今までそんな優しい言葉をかけてくれた者はいなかった。だから…」

うつむいてしまうラウラ。

「で惚れちゃったと。でもいつの間にそんなやり取りを…。昨日の夜手ごめにしたの？」

「なんでシャルがそんな言葉知ってるのさ！だから何もしてないってば！」

「じゃあいつ！」

「あ、あれかな？」

「やっぱり手を！」

「だからしてないって。あの、ラウラを助けたときになんか、心の奥辺りで会話した気がするんだ。なんだかよく分からないんだけど…」

記憶にはないんだ。ただ何となくそんな気はしてる。

「あぁなるほど。美晴。それはＩＳのせいだね。相互意識干渉、確かコア・ネットワークの影響で潜在意識で会話できるって聞いたことがある。詳しくはボクも知らないけど…」

「ふぅん。そんなことが出来るんだ…。で、これで僕の無実は証明されたでしょ？」

「う～ん、手は出してないのは分かったけど、キスはなぁ…」
なかなか許してくれない裁判長。
「あれはある意味事故だから！」
「う～ん。まぁいいか。自分からじゃないんだし。限りなく黒に近い白としましょう」
辛うじて無罪判決を勝ち取れたのか？
「はぁ。何とかなった…」
「じゃラウラ！改めて。シャルロット・デュノアです。よろしくね？」
「織斑美晴です。嫁じゃないけどよろしくね？」
「あっ、あぁ。ラウラ・ボーデヴィッヒだ。よろしく頼む」
僕たちは手を重ねる形で握手する。

「あ、ラウラ。後でセシリアさんと鈴ちゃんに謝るんだよ？」

「むぅ。嫁がそういうのなら…」

「嫁じゃないってば！」

増えたよ。悩みの種というか、もう芽が出てるよ。うぅ…。

「シャル。部屋はどうなるの？」

「うん。さすがに美晴と同じ部屋は不味いからね。移動するみたい。ラウラと同じ部屋かな？」

「そう。じゃあ、世間の常識を少しずつ教えてあげてよ。まぁシャルも不安だけど…」

「どういうことぉ？大丈夫。ちゃんと教えるから！」

「シャルロット。よろしく頼む」

「ラウラ！大船に乗ったつもりでいいよ！」

ペコリと頭を下げるラウラと、胸を叩くシャル。
泥船にならないことを祈るよ。

「ねぇ、僕すっごい気になることがあるんだけどさ、シャルと千冬お姉ちゃん協力してたよね。なんで？」

行くぞ、って連携しあってるように見えた。

「あぁ。実はメモリーを渡しに行ったとき、いつまで嘘をついているって言われたんだ。実は先生は最初から気づいてたみたい。で、美晴の見張りを任されたの」

「泳がせてたのか…。なんでだろう」

「さぁ？」

シャルの背景が関係あるのかなぁ？にしても見張らなくても特になにもしないのに。

第３３話（後書き）

ふむ…デュノアめ。良いアングルのショットが多いではないか。
おおっ！この画像は素晴らしい！チラリズムを理解しているな！あとでプリントして部屋に張ろう。

昨晩渡した小型カメラ、これから上手く活用しろよ？デュノア。

という感じでこれから後書きに裏のひとこまを書こうと思います。

第３４話

こんにちは、美晴です。

今日は以前セシリアさんに料理を教えると約束したので、二人で食堂のキッチンを借りて作ることにしました。

「さてと、今日は前に言った料理を教えるわけだけれど、まず今までどんな料理を食べていたか教えてくれるかな」

「えぇ。あちらでは専属のシェフが作った、最高の料理を毎日食べていましたわ？」

腰に手を当て、自慢のポーズ。

「最高ねぇ。その割には食堂のご飯、かなり美味しそうに食べてるよね」

たまにおかわりしてるのを僕は知っている。

「そ、それは！まぁ、私のシェフと同じくらい、と言ったところでしょうか」

明らかに動揺してるよね。

「じゃあ、向こうでその料理を他に食べていた人いる？」

「えぇ。メイドのチェルシーが一緒に。私にとって姉のような存在ですの」

「ふむ。時差があるところすみませんが、その人に連絡を取ってもらえます？今すぐ」

「え、えぇ。多分大丈夫だと…。少々お待ちください？」

携帯を取りだし、イギリスへと電話する。

「もしもし、チェルシー？いえ、困ってることはなくてよ？ちょっとクラスメイトがチェルシーに話がしたいと言うので…」

「ごめん、代わって。もしもし、私はセシリアさんのクラスメイトの織斑美晴と申します。突然すみません。一つお伺いしたいのですが、チェルシーさんは普段シェフが作られた料理、美味しいとお思いですか？」

「いえ。お世辞にも美味しいとは…」

やっぱりな。

「チェルシーさんはあまり美味しく思ってないって」

「そ、そうなんですの？」

「あ、ごめんなさい。チェルシーさん。いえね？セシリアさんが以前私の兄にお弁当をと作ってきてくれたのですが、食べた途端医務室に運び込まれましてですね？」

「お兄様とはあのお嬢様の思い人の？」

「あ、そう。その一夏です。セシリアさんが好きな」

「ちょっ！何を話してますの！チェルシー！」

携帯を奪い取ろうとして来た。

「いいからセシリアさんは黙っててて！」

「あぁすみません。で続きなんですが、このままだと私の兄がいつか殺されるかもと思いまして、これから料理を教えるのですが、やはり普段の食事を知るのが先決かと思いましてご連絡差し上げた次

第です」

「そうでしたか。今まで料理などされたことはありませんでしたので。嬉しく思う反面、申し訳なくも思います。どうか厳しく教えてあげてください」

「わかりました。きっとそちらはまだ朝でしょう。すみませんでした」

「いえ、お気になさらず」

「ありがとうございます。また今度ゆっくりお話しできると良いですね。では失礼します」

ピッ

「ふぅ。なかなかいい人だね、チェルシーさん」

「でしょう？私の自慢のメイドですわ。…ところでお二人は途中何を…」

「後でご自分で聞いてください。さぁ、始めますよ！」

「むぅ。わかりました」

「じゃ、何が作りたいですか？」

「そうですわね、やはりここは典型的な日本のお弁当を作りたいですわ」

「ふむ。じゃ、おにぎりと卵焼きと、あと何かってところかな。おにぎりは日本人にとって大事なものなんだ」

「イギリスではあまり手でこねたものをそのまま食す文化はありませんわね」

「日本では大事なんだよ。握ってくれた人の温もりが伝わるって。お袋の味の代表格かな。あとはカレーとか」

「お袋の味ですか。男性はみなさんそれに憧れますの？」

「憧れというか、落ち着く場所みたいなものかな。日本では、男の胃袋をつかめって言うし」

「つまり？」

「結婚相手が料理がうまいと男はすぐに家に帰ってきて愛してくれる、そんな感じかな」

若干違うかもしれないが、まぁいいだろ。

「私も愛されたいですわぁ」

妄想してるんだろうなぁ、この顔は。

「なら、上手くなるよう練習しましょう」

まずはご飯を炊くか。

「それでは、ご飯を炊きましょう。日本食の基本のきです。じゃ、用意したお米を洗ってくれるかな」

最近は精米技術が進歩したから、研ぐと言うよりは洗うの方がより美味しいご飯が炊ける。

「では！」

水を出して、ボトルを持って…。

ボトル？

「ストーップ！セシリアさん、左手に持ってるのは何？」

「えと、中性洗剤ですけど何か？洗うんでしょう？」

「はぁ。いいの、水洗いで。はい、洗剤はそっちに置く！」

「はい、すみません…」

最近は日本人でもこう認識してる人がいるらしい。世のお母さん方も苦労してるんだろうなぁ。

「これでいいんですの？」

「そうそう。優しく優しく。かき混ぜるだけで充分糠は落ちるから。ギュッってやると米が割れちゃうからね。よし、あとは数回水を代えれば洗いは終わり」

「できましたわ！」

「じゃ、そこの炊飯器にお米と水を入れてスイッチを押す」

「これで出来上がりますの？」

「うん。しばらく待てばいいんだ。じゃ次は鍋にお湯を沸かしておいて」

「はい」

「で、それが終わったらゴマをする。ほうれん草のゴマ和えにしよう」

「これとこれで？」

すり鉢とすりこぎを出す。

「そう。はい、すって」

ゴリゴリゴリゴリ

「もうちょっと細かくして」

「はい！」

ゴリゴリゴリゴリ

「よし、それでオッケー。ちょうどお湯が沸いたね。塩を一つまみ入れたらざく切りにしたほうれん草を入れよう」

「塩を入れると何かありますの？」

「ほうれん草の緑が鮮やかに出るんだ。ほうれん草以外でも使うからよく覚えておいて」

セシリアさんは包丁を持ち出す。

「ストップ！包丁の刃の下に手をいれないで！切っちゃうよ！手はまずニャーッてして…」

「ニャーッ、ですか」

「そう。そうしたら包丁の脇に手を置いて、刃を滑らせる。うん、良い感じだ」

「はい。それにしても結構タイトな手順ですわね」

「手際よくって言うんだよ。この感じが男には受けるんだよ」

「頑張りますわ！」

「あまり茹ですぎないでね。栄養が逃げるから。はい、今！あげたら冷水でしめる！」

「はい！」

「水を絞ってゴマと和えて、あとは砂糖と醤油を少し加えて味を調える。よし。それで完成」

「やっと一品ですわね」

汗を拭うセシリアさん。

「世のお母さんはこれを毎日毎朝やってるんだから」

「私もいつかはお母さんに…」

また妄想か。ピンク色じゃなきゃいいが…。

「そのためにも頑張ろうね。はい、次は卵焼き。卵を割って」

カシャッ

「あぁ殻が入ったか。もう少し優しく割ってね」

「すみません。次は？」

「調味料を入れてかき混ぜて。そうそう。そこでレモンの絞り汁を少し入れようか」

「なんでですの？」

「化学反応でふっくら仕上がるんだ。きっと一夏も喜ぶよ。さて焼こうか」

ふわふわ好きなんだよ。一夏は。

「卵は少しずつ入れて。ちょっと待って。はい返す！」

「えぇと、えい！」

クルッ

「お！上手いじゃない。初めてにしては上出来だ。その調子で」

「あっ、膨らみましたわ。本当になりますのね」

「うん。焦げるから早く仕上げちゃおう」

「次は、ウインナーを焼こう。ただ焼くとつまらないから、少し切れ目を入れて…と」

ジュー

「あ、開いてきましたわ？」

「タコさんウインナーって呼ばれて親しまれてる切り方なんだ」

「可愛いですわね」

「さて、ご飯もそろそろ炊けるから先におかずを盛り付けちゃおう」

「はい。こうして、これはこっちでしょうか…」

「うん。美的センスは抜群だね。美味しそうだよ」

「そんな…。あ、炊けたようですわ」

「じゃ、おにぎりを作ろう。ちょっと熱いけど手で握ろうね。具は…定番の梅干しでいいか。三角を作るには指を少し曲げて、こう手を十字にすると上手く出来るよ」

「あっ、熱い。でも…」

「頑張れセシリアさん。一夏の笑顔を浮かべれば熱さなんて」

「はい。あぁ、一夏さん…」

「よし出来たみたいだね。じゃ、あとは一夏に渡すだけだ。ここからは一人で行くんだよ。頑張ってね！」

「ついてきてくださらないのですか？」

不安そうな顔で見つめるセシリアさん。

「そこは一人でやらなきゃ意味がないでしょ。いってらっしゃい」

「頑張りますわ！」

セシリアさんは一夏のもとへ向かった。

さて。いつものごとく後をつけますか。

ソロソロ

柱の影から…。

「何やってるの美晴？」

突然後ろから声が！

ビクッ

「わっ！なんだシャルとラウラか…」

「なんだとはなんだ」

プクゥッと頬を膨らませてるラウラ。

「ごめんラウラ。いやね、セシリアさんが一夏にお弁当を作ってね、それを渡すところを見届けようかと…」

「えっ！あのテロをもう一度？」

シャルは知ってるからな。それは警戒するよね。

「いや、今回は僕が教えながら作ったから大丈夫だよ。僕だって兄をこの世から消す代物を作らせないよ」

「そうだよね」

「おい。見ろ」

ラウラが指差す。

「「あっ」」

ＳＩＤＥ　セシリア

美晴さんはついてきてくださいませんでした。

正直不安でなりませんが…。

コンコン

「一夏さんいらっしゃいますか？」

ガチャッ

「はいはい。おうセシリア。どうした？」

「あ、あの、私お弁当を作りましたの！食べてください！」

い、言えましたわ。後は食べてくれるかどうかですが…。

「ええっ？弁当？」

うぅ。やはり前回のことを気にされてますわよね…。

「やはり、ダメですよね。私のお弁当なんか…」

引き上げましょうか…。

「いや！そんなことないって！とにかく中見てもいいか？」

「えっ、えぇ。どうぞ」

カパッ

「普通に上手そうじゃん。いただきます。…うん。うまい。いい出

来だよこれ！」

「本当ですか？」

「うん、うまい」

パクパクと食べている一夏さん。

「いったいどうしたんだ？このうまさ」

「美晴さんに教えていただきましたの」

「そうか、美晴がねぇ。そりゃ旨いわな。あと、セシリアの愛情が決めてだな」

「愛…。はい。たっぷりこもってますわ！」

「料理は愛情って言うからな。ふぅ。旨かったよ。ありがとなセシリア」

ナデナデ

あぁ。夢にまで見た光景が今…。幸せですわ。

SIDE　OUT

「いいなぁセシリア。ボクも撫でて欲しいなぁ」

「私も…」

「わかったよ」

二人に上目遣いをされたらねぇ。

ナデナデ

「えへへ…」

「ふ…ん」

笑顔のシャルと、気持ち良さそうに目を細めるラウラ。

「今度は三人で作ろうか」

「うん」

「うむ」

いやぁ、今日は良いことした気がするなぁ。

第３４話（後書き）

良かった。引き出しの中の胃薬達はしばらく出番がなくて済みそうだ。

あの時は胃洗浄したもんな…。

第３５話（前書き）

三人でお出掛け。

二話に分けてしまったので今回は短いです。

第３５話

「うぅん…」

今は休日の朝です。
だからもうちょっと寝かせて…。

「うぅん」

ゴロ　フニュ

あ、なんか柔らかくて気持ちいい。こんな抱き枕あったかなぁ。まぁいいや。

フニュ　フニュ

「あっ…ん」

なんだこの声。空耳かな。

フニュ　フニュ

「あんっ」

空耳じゃない！なんだこれは！

胸？僕は胸を揉んだのか？というか誰のを！

「ラウラ！何でここに…。それに全裸だし」

シャルのより小さいなぁ…じゃない！目のやり場が…。

「う…ん。あぁおはよう美晴」

目を擦りながら挨拶をしてくるラウラ。

「おはようじゃない！何で僕のベッドに！それに全裸で！」

「夫婦は同じ布団で寝るのではないのか？それに私は寝るときは常に全裸だ」

そんな堂々と…。

コンコン　ガチャッ

「美晴起きてるぅ？ラウラがいないんだけど…。鍵開いてるよ？不用心だ…な…」

シャルだ。あ、修羅場か、これ。

「何でラウラが美晴のベッドに！しかも裸で！…どういうことかな、説明してくれるかなぁ」

また怖い笑顔だ。死ぬのかなぁ今日こそ。

「待ってよ！僕だって起きたらこんなんで混乱してるんだから！ラウラ！」

「ふむ。夫婦は同じ布団で寝ると聞いてな。今朝早くにここへ来た」

シャルによってシーツが巻かれたラウラが答える。

「誰に聞いた…って、まぁこの前の人だろうけど。それより僕は昨日の夜鍵かけて寝たよ？」

「あの程度私には楽に開けられる」

「犯罪だからやめようよ。あとシャル。ラウラは本当にいつも裸で寝てるの？」

「そういえばいつも裸で寝てた。パジャマ持ってないんだっけ？」

常識教えとけって言ったじゃないか。

「制服や軍服で寝るわけにはいかないからな」

「他の服はないの？」

シャルが聞く。

見たことないな。ラウラの私服。

「必要ないだろう？」

ラウラはさも当然のように言う。

「はぁ。よし！今日は休みだし、ラウラの服を買いに行こう。シャル。準備してあげて。まず僕はこの部屋出てるから。ロビーにいるから終わったら呼んで」

「うん。まずラウラ。服を着ようか」

「うむ」

はぁ。朝から疲れる。僕はロビーで時間を潰す。

「美晴。準備終わったよ」

「はいよ…って制服なの？」

「うん。軍服か制服しかないってラウラが言うから」

「それで充分だろう？」

「ラウラ。美晴に可愛いって言われたくない？」ボソッ

「い、言われたい…」

シャルがラウラに耳打ちしてる。何を言ったんだろう。

「じゃ僕も制服にするよ。着替えたらいくから校門の前で待ってて？」

「わかった。行こ？ラウラ」

「うむ」

手を引かれて歩くラウラ。なんか前の軍隊的な歩方と違って、小さ

い子供みたいな歩き方になってる。ちょっと可愛いかも。

校門前

「美晴とお出掛けか。楽しみだねラウラ？」

「私はまだそのお出掛けとやらをした経験がないが、楽しいのか？」

「基本楽しいけど、美晴と一緒だもん。楽しいよきっと」

「…うむ」

「お待たせ。じゃ行こっか！」

僕も制服に着替え、二人に合流。

「うん。ほらラウラ」

「うむ」

「ねぇ美晴？」

「何？」

「手、繋いでもいいかな？」

これから行くところは人も多いだろうしな。

「いいよ」

「やった！」

ギュッ

「ラウラもおいで。左手が空いてるから」

僕はラウラに左手を差し出す。

「…うむ」

トテトテと駆け寄り、手を握ってくる。同年代には見えないなぁ。

電車内

「ねぇ美晴。今日はどこにいくの？」

「レゾナンスってショッピングモールに行こうかなと思ってる。この近辺では最大級の大きさで、何でも揃ってるらしいから」

「そうなんだ。楽しみだね。ラウラなんか窓の外見て喜んでるよ？」

「美晴！シャルロット！すごいな、これ！」

椅子の上に乗り外を見ている。まぁ、ずっと軍生活だったから仕方ないか。

「すごいね。でもラウラ。靴は脱ごっか」

椅子が汚れちゃうし、周りの目が…。

「脱がしてくれ。私は外が見たい！」

キャッキャとはしゃぎながら、外を見ている。

「はいはい」

僕はラウラの靴を脱がす。

「なんか美晴お母さんみたいだね」

「せめてお父さんって言ってよ」

「ごめ～ん」

はぁ。

レゾナンス

「うわぁ大きいねぇ」

「僕も調べただけだからなぁ。まさかここまで大きいとは…」

「来たことないの？」

「普段は近所の商店街で買ってたからなぁ。ここは初めて」

「そっか。あっラウラ！勝手に行っちゃダメだよ！」

シャルがラウラを捕まえてきた。

「もうっ。広いんだからはぐれたら大変なんだから」
プンスカと怒るシャル。
「取り乱してしまった。すまない、シャルロット」
そして素直に謝るラウラ。
なんか馴染んできたなぁ、この光景。ちょっと前までは他人を拒絶してたのに、今では歳よりも幼く見える普通の女の子だ。
「二人ともそろそろ行くよ？」
「ごめん。ラウラ行くよ！」
「あっ、あぁ」
また両手を握られる。
「それでシャル。まずは何を買うの？」
「うーん、下着かなぁ。その後服だね」

「下着?!僕も行くの?」

「もちろん!」

そんな笑顔全開で…。

「男にはきついよ…」

ある意味聖域だよ、あそこは。

「見た目的には問題ないよ。ね?ラウラ」

「うむ。充分に通用する見た目だ」

「嬉しくないよ…」

「いいから!」

グイッ

「わかったから引っ張らないでよ!」

また両手を握られる。女の子のパワーはすごいなぁ。

第３５話（後書き）

クラリッサが言うには夫婦は寝所を共にするらしいな。

ふむ。やはり鍵がかかっているか。しかしこのラウラ・ボーデヴィッヒにかかれば簡単だ。

こうして針金を曲げて差し込み…、よし開いた。これでどうだ？

な！電子錠と組み合わせた二重ロックだと？私の部屋は普通の鍵だけだったが…。教官の指示か。さすが教官。

しかし！私は諦めん！この機械を繋げば…。ふ、この数字か。入力して…。よし。これで開いたぞ。

では、服を脱いでから美晴のベッドに…。

第３６話（前書き）

意外と多く書けました。

お買い物の続きです。

第３６話

こんにちは、美晴です。
ラウラの服を買うために、シャルと三人でショッピングモールに来てます…が。

「ねぇ、シャル。本当に僕も入るの？」
店の入り口の前でたたずむ僕は、隣で笑顔になっているシャルに聞いてみる。

「もちろん。なんなら美晴も買ってみる？」

「いらんわ！」
すぐさま否定する。
まさかの、女性用下着のお店に連れ込まれました。

「いらっしゃいませ。本日はどのようなものをお求めですか？」

「この子に合うのを選んであげてください。ボクは自分で選びますから」

シャルはラウラを店員さんに任せる。

「そちらの方は？」

僕に聞いてくる店員さん。

「いえ、僕は間に合ってますから」

買わないよ。必要ないもん。買ったところでつけるつもりもない。

着せたがる人は少なからず身近にいるのだが。

ＳＩＤＥ　シャル

ふふふぅ～ん。

さぁて、どんな下着にしようかなぁ。

せっかく買いに来たんだもん。美晴に気に入ってもらえるのが良いよなぁ。

あ、この白いのなかなか良さそうだな。

あ、こっちの黄色もデザイン可愛い。

どっちがいいかなぁ。美晴に聞いてみようかなぁ。

近くにいた美晴の肩を叩いた。

「美晴。どっちが好み？」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

「美晴。どっちが好み？」

シャルが二種類の下着を持ってきて、比べてる。

「ぼ、僕が選ぶの？」

他人の下着を選んだことなんて一度もないし、まさかそれが女の子の物だなんて。

何が良いとかわからないよ。

「当然。ね、どっち？」

白か黄色か。白も清楚で良いけど、黄色はシャルの活発さに合ってるかも。

…って何を真剣に考えてるんだ僕は。

「き、黄色！もう早く買ってきちゃいなよ！僕居心地悪いんだから！」

女性下着に囲まれて、平常心でいられる思春期男子がいたら僕の前につれてきてほしい。

「ふふっ。ボクも黄色かなって思ってたんだ。じゃ買ってくるね？」

レジへ向かっていくシャル。
はぁ。もうこの環境やだ。慌てるのも逆に変な目で見られるし…。
外で待ってよう。

ＳＩＤＥ　ラウラ

いったいどの下着を選べばいいのか全くわからん。
軍にいる間には常に支給品しか着用していなかった。
こんな様々な色やデザイン見たことが無い…。

「こちらなんていかがでしょうか。お客様の容姿にぴったりですよ？」

と、店員は水色の下着を見せてくる。
…良いのか悪いのかさっぱりわからない。

「それでいい」

わからないのだ。勧められたやつでいいだろう。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

「お待たせ！美晴！」

外でウィンドウに寄りかかっていたら、シャルが出てきた。

「シャル…。あ、ラウラも買えたんだ」

ラウラも紙袋を持っていた。

「うむ。初めてブラジャーとやらを買ったぞ」

初めて…。今までどうしてたんだろう。

「いいよ報告しなくても…。あとシャル？ああいうのは勘弁してよ。心臓に悪い」

「美晴に選んでほしかったんだもん。テヘッ」

舌を出しながらかわいくおどけるシャル。

「テヘッじゃないよ。まったく」

どうも僕をからかって楽しんでいる節がある。

「じゃ次は服屋さんだ。行くよ！」

シャルは駆け出していった。

「もう。シャルは自分が欲しいだけなんじゃないか？しょうがない。行くよラウラ」

走っていくシャルを二人で追いかける。

洋服屋

「じゃ、ラウラは店員さんとシャルで相談して仕立ててね。僕は自分のを選ぶよ。買ったらこのあとはそれで行動しよう」

「わかった」

「うむ」

「すみませーん」

店の奥にいた店員さんを呼ぶ。

「はーい」

「すみませんが、この子のコーディネートをお願いできますか？」
ラウラを差し出す。

「まぁ可愛らしい女の子！お任せください！必ずさらに可愛く仕立てます！」

ラウラといういい素材に興奮気味の店員さん。
二人は店員さんと女性物のコーナーへ向かっていった。

さて僕は何を買おうかな。
カジュアルなパンツルックでいいか。スカートは論外！
よし。買ったし着替えるか。
シャルとラウラはどうだろう。

「シャル～。終わったぁ？」
奥の方にいたシャルに話しかける。

「うん。終わったよ。ほらラウラ。恥ずかしがってないで！」

「い、いやだ。どうせ笑われる！」

ラウラは試着室に立てこもっているようだ。

「美晴は笑わないから大丈夫だよ。ほら！」
半ば引きずり出された形のラウラ。
「むぅ。どうだ。おかしいだろう。笑え！」
顔を背けながら、ラウラは身をよじっていた。
着ているのは白地でフリフリがついているワンピースだ。
「何言ってるの、ラウラ。すごい似合ってるし、可愛いよ！」
もしそう言わないやつがいたら、審美眼を疑うな。
恥ずかしがる仕草が殺人的な可愛さを出してる。
「でしょ？ボクが言っても信じてくれないんだから」
やれやれと手を広げ、小さくため息をついている。
「か、可愛い。私が…」
ラウラは顔を真っ赤にして下を向いていた。
「ラウラは元々可愛かったけど、より可愛くなったよ」

そんなラウラの頭に手をポンッと置く。

「ねぇ、美晴。ボクは？」

シャルのは、白のワイシャツにオレンジのスカート。

「シャルも可愛いよ」

ラウラとはまた違った可愛さだ。シャルの頭も少し撫でる。

「エへへ～」

褒められたのが嬉しいんだろうな。笑顔になっている。

「さて、そろそろお昼ご飯にしよう。上にレストランがあったからそこに行こう」

時間は十二時を過ぎていた。

「ラウラも白なんだから、ソース系のは食べない方がいいよ？」

「うむ。わかったシャルロット」

シミがついたらせっかくの白いワンピースが台無しだ。

最上階にあるレストラン街へと向かう。
最後に店員さんにお礼を。

「いい仕事してくれました。また来ますね」

「ありがとうございました！」

九十度のお辞儀をして見送ってくれた。向こうとしてもなにか収穫があったのかもしれない。

レストラン

「二人は何食べる？」

「ボクはシチューとパンでいいかな」

ふむ。らしいといえばらしいか。

「私はスパゲティだ」

シャルが言ったそばから…。

「ソース飛ばさないでよ？」

シャルが心配してる。
大体はソースと合わせたものだ。ペペロンチーノなら安心だが、にんにくの臭いをさせたラウラはちょっと…。

「大丈夫だ。ほらこれがあるぞ！」
子供用のエプロンを取り装着する。

「はぁ。気をつけてね？僕は丼でも頼むかな。すいませーん」
注文を済ませ、来るのを待つ。

「あ、ごめん美晴、ラウラ。ボクお花摘みにいってくるね？」

「あぁいってらっしゃい」
食事中に立つよりはましだろう。

「美晴。シャルロットはなぜ今から花を摘むのだ？」
シャルの言葉を疑問に思ったのか質問してくる。確かに軍隊では聞かない言い方だろう。

「あれはトイレにいってくるってこと。ストレートに言うと恥ずかしいから、そういう言い回しをするんだ」

「私は別になんともないがな」

「ラウラはね…」

少しだけ女の子らしい恥じらいを身に付けて欲しいものだ。

「ただいまぁ」

シャルがトイレから帰ってきた。

「おかえり」

「お待たせしましたぁ」

はかったようにシャルが戻ってきたと同時に料理が運ばれてきた。

「ちょうどよかったね。それじゃあ」

「「「いただきます」」」

それぞれの料理を食べ進める。

「あ、ラウラ。口の周りにソースが」

ミートソースで口の周りが汚れている。それをペーパーナプキンでふくシャル。

「ん…。すまない」

「もう。手が焼ける妹みたい」

こんな可愛い姉妹を持つお父さんは、きっと彼氏を連れてきたら殺すのかもしれない。

「シャル。シャルもソースがついてるよ」

ホワイトソースがほっぺについている。僕もナプキンで拭き取る。

「ふふっ。手がかかるお姉ちゃんだねぇ」

「ありがとお母さん！」

シャルめ、良い笑顔で…。

これは嫌味なのか？

僕のからかいに対する嫌味なのか？

「「「ごちそうさまでした」」」

「お会計はどうするの？」

「ここは僕に払わせて。代表候補の二人ほどではないけど、ちゃんとお給料が出てるんだ」

作ったのは束さんだけど、名目上は倉持技研のＩＳってことになってる。企業所属のテストパイロット扱いでそれなりに給金が出ている。それに二人は何だかんだで結構お金を使っているし。

「そう。じゃあ今日は美晴さんに」

「「ゴチになります！」」

押忍のポーズをとる二人。

「どこで覚えたのそれ？」

あれしかないだろうけど。

「この前ラウラと二人でテレビ見てたらやってた」

「やっぱり…。ラウラに変なこと教えないでよ」

「いいじゃん。文化なんでしょ？」

文化…。

シャルも無垢なんだね…。

「まぁいいや。この後はパジャマを見に行こう。どこがいいかな」

レゾナンスにもいくつかあるだろうな。

「美晴！それならボクに任せて！」

シャルがはいはい！と手をあげて主張している。

「心当たりあるの？」

「うん。今日行く前に布仏さんに聞いたんだ！」

のほほんさんか…。

いつも着ぐるみなのかパジャマなのかよくわからないやつ着てるから詳しいだろうけど、品揃えが偏ってそうだな。

「多分ここだよ？」
レゾナンスの中ではなく、普通の街中にあるお店だった。店構えはファンシーだけど。
「ここねぇ。なんとも言えないなぁ」
パジャマ売っているのか？と疑いたくなる。
「いいの。ラウラに似合うやつを探すんだもん」
僕達は店の中へ入る。
うわ。なんだこれ。
イヌとかネズミとか、あ、象だ。
着ぐるみばっかじゃないか。まともなパジャマはないのか？
まぁのほほんさん行き着けとなれば当然なんだろうけど。
この中から二人は何を選ぶのかねぇ。
「買ってきたよ美晴！」
意外と早くすんだ。
「何買ったの？」

「エへへ～。夜のお楽しみだよ。ね、ラウラ」

「ほ、本当に私もこれを着るのか？」

シャルの笑顔にラウラの顔は少しひきつっていた。

「もちろん！きっと似合うって」

ラウラが赤面してる。いったい何を選んだんだろうシャルは。

夜

部屋へ来てくれとシャルに呼ばれたので、行ってみる。

コンコン

「シャル、ラウラ。入っていい？」

「いいよ」

「お邪魔します」

そこにいたのは白猫パジャマのシャルと黒猫パジャマのラウラ。

「それ選んだの？」

「かわいいでしょ～」

どう？と一回転してみせるシャル。

「私は嫌だと言ったんだが、シャルロットが…」

ラウラは顔を真っ赤にしている。

「ほらラウラ。さっき言ったように！」

「やるのか？あれを。本当にか？」

何をやる気だろうか。

「本当に。せーの」

「「ニャーッ」」

二人ともベッドで四つん這いになりながら鳴いた。
僕は思わず抱きつく。

「可愛い…。可愛いよ二人とも！ナデナデしていい？」

ちょっと衝動を抑えられない。

「気に入られたよラウラ！」

「あ、あぁ」

「意外といい生地なんだねぇこれ。本物みたいだ。すごいや」

触り心地は本物の猫の感触と遜色なし。驚異の技術力だ。

「よし、これからはこれだねラウラ。美晴も喜んでくれてるし」

「うむ。もっと撫でてもいいぞ」

ラウラは頭を差し出してきた。

「猫好きなんだよねぇ僕」

二人の頭から背中にかけて撫でていく。

「くすぐったいよ美晴ぅ」

「なんか変な感じだ」

「猫はここが気持ちいいんだって」

今度はあごの下を優しく撫でていく。

その後も可愛い猫二匹をいじりながら夜が更けていった。

第３６話（後書き）

「どう？しっかり撮った？」

「はい店長。ぬかりありません」

「よくやったわ。次の新作のポスターはこの写真に合成して発表よ」

「良い素材でしたね。これなら新作の売り上げも期待できそうですね」

「「ふふふふふ…」」

果たしてこの場合肖像権は…。

パジャマネタはここに持ってきました。この流れの方が良いかなって思って。
あと作者も猫好きです。

第３７話（前書き）

みんなでお勉強。

第３７話

こんにちは、美晴です。

そろそろテストの日が近づいてきました。
ありますよ？定期テスト。期末だけですけどね。
ＩＳ学園のみんながみんな、卒業後もＩＳに関わるとは限りませんからね、普通の勉強もしてます。
ただその分出題範囲が広い広い。教科によっては教科書半分とかありますからね。普通にきついですよ。
その上、さすがＩＳ学園。ＩＳの理論とかのテストもあるんですから、普通の高校と比べると量が倍くらい違うんじゃないでしょうか。

まぁ普段から授業を聞いていればなんとかなるくらいしか出しませんと各教科の先生は言ってましたから、今の段階でも八割方はとれると思っていますけど。
油断じゃありませんよ？普段からの積み重ね、自信です。
とはいえちゃんと勉強しますけどね。

「美晴ぅ。ノート写させて、それと勉強教えてぇ」

教科書を読んでいると、一夏が泣きそうな声ですがりついてきた。

「普段寝てばっかでちゃんとノートとらないからこういうことになるんだよ」

どうしたら一番前の席であそこまで寝ることができるのだろうか。

「だって、テストの後にノートを提出しろなんて言われると思ってなかった…」

さっきの授業終わりに先生がそう言った。

確かに中学では言われなかったな。

「各生徒がちゃんとやってるか、ノートも判断材料にしてるんじゃない？」

テストだけではなく授業に取り組む姿勢や提出物をきっちり出せる。

社会人になって必要になるポイントだ。

「最初から言ってくれれば…」

「起きてちゃんとノートとった？」

「いや、こまめに美晴のをコピーした」

はぁ。結局楽するのかよ。

自分で努力するという選択肢はどこにも存在しないのだろうか。

「放課後僕の部屋においで。勉強教えるよ」

兄が学年下位クラスってのは、僕としても恥ずかしい。

「縛り付けないよな？叩かないよな？」

不安そうな顔をしながら尋ねてきた。

「一夏次第かな」

「くっ。俺も今度は追い込まれてるからな。ちゃんとやるよ」

普段からその意気なら僕はなにもしないよ。

「そう。頑張ろうね」

「じゃ、あとでな」

静かに勉強したかったけど人に教えるのは自分のためにもなるし、いいか。

放課後　美晴の部屋

コンコン

ん、一夏が来たか。

「空いてるから入って」

机を用意しているため、手が離せない。

ガチャ

「よろしくな美晴」

「よろしくお願いしますわ」

セシリアさん。

「ボクも」

シャル。

「あたしも」

鈴ちゃん。

「私達もだ」

箒ちゃんとラウラまで。

「なんでこんなにゾロゾロと…」

「俺が美晴の部屋でテスト勉強するって言ったら、みんなもしたいって言うから」

「で、全員来たんだ。これじゃ勉強会だなぁ」

「まぁいいじゃないか。みんなで教えあえば。な？」

一夏一人の相手で大変なのに。全部で六人か。やってやるか。

「というかみんなそんなに不安なの？セシリアさんやラウラなら大丈夫じゃない？」

セシリアさんは入試トップだし、ラウラも軍にいたんだ。この程度の知識は習得済みだろう？

「いえ、苦手なのがいくつか。特に日本語が…」

「私もだ。基本軍に関係あることしか学んで来なかったからな。こういう普通の勉強はさっぱりなのだ」

なるほどね。セシリアさんは日本語。
ラウラは英、数、理はきっとハイレベルまで学んだだろうから、あとの基礎知識か。
あ、そうそう。日本語は教科としてあるんです。

外国からの生徒がたくさんいるＩＳ学園ですが、束さんがＩＳの基本理論等を日本語でしか作らなかったから、日本語を学ぶことが大切なんです。
僕達には余裕ですけど、やっぱり留学生にはきついだろうなぁ。
日本文学とか読まないでしょうに。
その分僕達は英語がきついかなぁ。

「じゃあ、各自苦手教科の問題を解いていって解らないところがあったら、それが得意な人に聞いていこう。英語は文句なしでセシリアさん担当ね」

「それはお任せください」

さすがに母国語だからきっちり教えられるだろう。

「じゃ、始め」

……。

みんな黙々と演習問題をこなしてる。

「美晴、ここが解らないんだけど」

シャルか。数学みたいだな。

「どれどれ？あぁこれか。二次方程式は因数分解を使う解法もあるけど、面倒ならこの解の公式を使うと楽だよ」

「あ、確かにわかりやすくなった。これで解けるんだね。ありがと」

「いえいえ」

「美晴！こっちも！」

なになに、次は鈴ちゃん？

「ここの解き方なんだけど…」

化学か。

「ｍｏｌの求め方は質量を分子量で割るんだ。この場合ＣＯ２だから分子量は４４。質量をこの分子量で割ると…」

「あ、解けた。サンキュー」

「どういたしまして」

「美晴！次はこっちだ」

箒ちゃんか。

「どれどれ…。連立不等式か。この問題は－χ＋2が左右から不等になってるから両方に－χ＋2があると考えてこう式が立てられる。どう？解けるでしょ？」

「わかるぞ。で、こうなると」

「そう正解。そのまま頑張ってね！」

「美晴。ここが…」

次は一夏？

「ここの英作文なんだけど…」

始めに言ったじゃんか。

「それはセシリアさんに聞いて！セシリアさん。一夏に付きっきりになってて。良いでしょ？」

「え、えぇまあ。では一夏さん。これはですね？」

「美晴。私は何をすればいいのだ」

ラウラ…。

「あとで僕がまとめプリントを作るからそれを読んでおいて」

「うむ。待っているぞ」

はぁ。自分の勉強ができない…。

「俺にもそれくれ！」

「ボクも欲しい！」

一夏もシャルも自分なりに努力してよ…。

「わかったよ。全員に渡すよ。ラウラのを各自でコピーしてよ。コピー代はそれぞれで払うこと。いいね」

「「「「「は～い」」」」」

今日寝られるかな…。

数時間後

「ふぅ。じゃそろそろ私達はお暇するぞ」

「よく勉強したわね～」

「確かに疲れましたわ」

ゾロゾロと部屋を出ていく。

「あ、一夏。これ」

一夏に約束のノートを渡す。

「写さなきゃな、これ全部。骨折れそう…」

「いいからやりなさい。僕もこれからプリント作るんだから…」
最初はラウラの分だけだったが、一夏やみんなの分が加わったから結局全教科でやることになった。

「二人はどうするんだ？」
一夏はベッドの上で寝ているシャルとラウラを見る。
途中から僕のベッドに寝転んでいたが、そのまま意識を手放した。

「まぁ疲れてるだろうから、しばらくはあのままにしておくよ。起きたら部屋に帰すから」
たたき起こすのも可哀想だ。

「そうか。じゃな」

「おやすみ」

ふぅ。じゃプリント作るか。

カリカリカリカリ…

数十分かけてようやく一教科。はぁ、気が遠くなるなぁ。ちょっと休むか。

さて、シャル達はどうかなぁ。
気持ち良さそうに寝てるなぁ。

「ふみゅ～美晴ぅ好きぃ」

寝言か。
実際に言われたことはないんだよな。
気持ちにはさすがに気づいてるけどさ。

「僕も好きだよシャル」

「嫁ぇ。愛してるぞぉ」

嫁か。相変わらずな立場だな僕。

「僕も愛してるよラウラ」

二人の頭を優しく撫でた。

「「ニャ～」」

二人とも笑顔で鳴く。

可愛いなぁ。

さて癒されたし続きやりますか！

第37話（後書き）

うわっ、結構びっしり書きこまれてるな美晴のノート。
これ全部写せってことか？何時間かかるんだよ。…とは言え成績に直に繋がる以上、やらざるを得ないか。…ふぅ。

あ、一夏にあのノート全部写したらダメって言うの忘れた。僕独自の見解とか書いてるからなぁ。全部写すと絶対バレるよなぁ。
一夏が悪いんだからいいか。そうだ。ちゃんとやってなかった一夏が悪い。

中に出てくる問題は低レベルです。いやぁ、当時の内容を思い出せなくて…。

第３８話

「始めて下さい」

試験官の教師の言葉ののち、教室にはペンが走る音が響いていた。

あっ、こんにちは、美晴です。

今は期末テスト中です。あとはこの一教科のみ。一番きついＩＳ基礎理論なんですけどね。

とはいえ、一年のこの時期は難しい問題はそんなに出ないようです。
ＩＳの基礎の基礎の知識と言ったところでしょうか。
ＩＳの飛行原理とか、ＩＳの主な回路図とか、あとおまけでＩＳの歴史とか。
山田先生が詳しく説明してくれたことがバッチリ出てるので全然楽です。
きっと全問正解を取れるように作られてるんだろう。
例えそうじゃなくても、ＩＳ学園に入学したみんななら受験段階で覚えたことなんだろう。

前で頭をかいている奴以外にとっては。まぁ一夏と僕の場合、入学後にこの話を聞いているわけだから、若干差し引いて欲しい。
それでもまともに山田先生の授業を受けてれば、僕のようになんとかなるんだろうけど。

「はい、それまで。では後ろから回収してください」

一番後ろから回答用紙が回されてくる。

「はい、一夏」

「おう…」

一夏は回答を集めて監督の先生に渡す。
その一夏の表情が暗い。

「その様子だと…」

「空欄がいくつかな…」

肩を落としている。

「大丈夫だよ。他の教科でカバーできてるさ。何せ僕が徹夜して仕上げたプリントを使って勉強したんだから」

いやぁ、正直きつかった。気づいたら夜が明けてるんだもん。
シャルとラウラは起きなかったし。

「そうだな。努力を信じるか」

「僕のね」

「サンキューな。あ、あとノート。写し終わったよ」

以前貸したノートが返却された。提出日は今日だからね。

「これで授業態度の減点は緩和されたね」

そこまで重要視されるわけではないだろうけど。

「あぁ。こんなに大変なら次からは起きてるわ」

起きたところでしっかりやる姿は想像できない。

「最初からそうあるべきだと思うけど」

「まぁ終わったんだし、いいじゃないか」

「そうだね。ねぇ一夏。このあといつものみんなでミニパーティしない？」

「別に良いが、どういう名目で？」

「テストお疲れさまの慰労会ってことで」

せっかくみんな頑張ったんだ。少しぐらい良いだろ。

「わかった。美晴の部屋で良いな」

「うん。つまみは僕が用意するよ」

「よし。飲み物は俺達で用意するから待っててくれ」

二手に別れて準備する。

僕はこれから料理だ。多国籍だからな。簡単で色んな種類のつまみにするか。

数十分後

「美晴！みんな連れてきたぞ！」

「ちょうどこっちも準備が済んだところだよ」

テーブルに料理を並べ終わった。

「「「「「おじゃしま～す」」」」」

他の五人も部屋へ入ってくる。
それぞれ適当に座ってもらって…。

「それじゃみんな。テストお疲れさまでした。その慰労ってことで！乾杯！」

「「「乾杯」」」

僕の音頭でパーティが始まる。

「この料理、美晴が作ったのか？」

「そうだよ、ラウラ。いっぱいあるから遠慮無く食べてね」

「うむ」

カナッペをパクパク食べているラウラ。

「これが本来のタマゴサンドだよな」

一夏はサンドイッチを食べている。

「そ、その節は申し訳ありませんでした…」
セシリアさんが一夏に謝罪をし始める。
「いや、いいって。ちょっとずつ上手くなれば。な？」
セシリアさんの頭に手を置き、優しく慰める一夏。
「はい。頑張ります！」
嬉しそうに決意している。
せめて人を傷つけないものを一人で作れるようになろうね。
「「セシリアばっかり…」」
箒ちゃんと鈴ちゃんが不満を漏らしている。
「なんだ、箒、鈴。楽しめよ。せっかくのパーティなんだから。な？」
二人の表情に気づいた一夏は、二人にコーラを注ぐ。
「まぁ一夏がそういうのであれば…」

「そうね。お疲れさまのパーティだもんね」
ようやく機嫌を直したようだ。
「そうそう！楽しまなくちゃな！」
そのあとは和気あいあいとパーティが進む。
「あれ？飲み物無くなった。誰か予備持ってる？」
オレンジジュースが空いた。
「持っているぞ。ほら」
ラウラが缶ジュースを差し出してくる。
「サンキュ、ラウラ」
ゴクゴクと飲んでいく。意外に飲みやすい。
「美味しいよこれ。今まで飲んだこと無いやつだけど」
「満足してもらえたなら良かった」

うん。なんか飲みやすいオレンジジュースだ。

ＳＩＤＥ　一夏

「俺も飲んで良いか？ラウラ」

「あぁ。まだあるからな」

一口口にしてみるが、明らかにジュースにはない苦味があった。

「ん？これ酒じゃないか？そうだ。確かにカクテルだ。美晴に飲ませちまったのか。面倒になるぞ」

前に一度あったな。あのときは面倒だった。

「え？美晴お酒飲んじゃったの？」

鈴は缶を覗き込んでいる。

「大体、どうやって手に入れたんだラウラ」

箒はラウラに酒の出どころを聞いている。

「隊の者が送って来たのだが…。まさか酒とは」
なるほど。ラウラは知らなかったのか。まぁドイツでは１６歳から酒が飲めるらしいからな、送ってきたドイツの知り合いも間違ってはいないだろう。

「美晴、大丈夫？」
シャルロットが美晴に寄るが…。

「ニャ～ン！」
鳴き声と共に美晴がシャルロットに飛びかかる。

「えっ！美晴？どう…ちょっ！」

「ニャ～ン！」
シャルロットは美晴にベッドに押し倒される形になる。

「ちょっと美晴！どうしたの！」
シャルロットは上半身を拘束され、慌てている。

「やっぱりか…」

警戒してはいたがダメだったか。

「やっぱりって一夏何か知ってるの？」

鈴が俺の言葉に気づいた。

「あぁ。前にも一度美晴が酒を飲んじゃったことがあってな。ネコ化して千冬姉や俺に甘えまくったんだ。大変だったよ。酔いが覚めれば治るからそれまで待ってろ」

以前も時間経過によって治った。

「えぇ～？そんな！あ、美晴！クンクンしないで！」

シャルロットは美晴に臭いを嗅がれている。ネコは臭いや鼻先で感じた温度で物を区別するらしい。

「あの、一夏さん？助けなくていいんですの？」

「ああなった美晴は厄介だからな。どうせなら犠牲になってもらおう」

さわらぬ美晴に祟りなしだ。

「意外と酷いんですのね、一夏さん」

「じゃ代わりにクンクンされるか？セシリア」

「それは…。シャルロットさん頑張ってください！」

そうするよな。

いくら美晴が可愛くても、恥ずかしいからな。

「誰か助けてよ～」

今度はお腹をフミフミされていた。

「チッチッ」

ラウラが舌を鳴らして美晴を呼ぶ。

「ニャ～ン！」

美晴は今度はラウラの膝に飛び乗った。

「ゴロゴロゴロゴロ」

ラウラの膝で丸くなっている。

「な、なんとかなった～。これいつまで続くの？一夏」

ようやく解放されたシャルロットが残り時間を聞いてくる。

「飲んだ量からすると、あと三時間ぐらいか」

結構飲んでたからまだかかるだろう。

「そんなに？どうしよう…」

困惑の表情を浮かべるシャルロット。

「箒、鈴、セシリア。あとはシャルロットとラウラに任せて俺達は帰ろう」

俺は帰り支度を始める。

「良いのか？美晴があのままで」

「あぁ、箒。美晴はあの二人になついてるから別に良いだろ。ラウラには後始末する義務もあるし」

なんだか嬉しそうな顔をしているしな。

「それはそうだが…」

正直関わると長いんだ。この状態の美晴は。

「じゃ！任せたぞ二人とも！」

「えっ？ホントに？一夏ぁ！」

シャルロットが声をあげるが俺達は退散する。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　シャル

うーん、この状況どうしよう…。

「ラウラ。どうするの？」

「しばらくはこうしておくしかあるまい」

「ニャ～ン」

美晴はまだラウラの膝にいる。
なんか羨ましくなってきた。

「ラウラ。代わってもらってもいい？」

「嫌だ」

「えぇ～？じゃあ…」

ボクは近くにあった棒に羽をつけ、美晴の前でパタパタ振ってみる。

「ニャッ！」

どうやら興味を持ったようだ。
羽が左右に動くのに合わせて、美晴の顔も左右へ動いている。

「ウ～ニャッ！」

手を出してこようとするが、逆の方へ瞬時に動かす。その後も左右へ振る。

「ニャッ！ニャッ！ニャッ」

本物のネコみたいに、素早く手を出し続けている。可愛い。

「シャルロットに取られた…。ならば私は」

ラウラは小さいボールを転がした。

「ニャウ！」

美晴はボールを手で叩き、転がしている。

「ふむ。これだと一人遊びになってしまうな。失敗した」

ラウラは少し寂しそうだ。

「ニャ～…」

どうやら一人遊びに飽きたのか、美晴はこっちへやって来た。

「ウニュ～」

ほっぺにキスされた！初めてだ！

「ニュ～」

今度はラウラにもしてる。ラウラ赤くなってるし。

「…このままというのもありではないか？シャルロット」

「うん。こっちのほうが積極的だしね。…じゃない！何とかしないと…」

「ファ～」

「あ、寝ちゃった」

美晴は床で寝始めた。

「風邪引いちゃうからベッドに寝かせようか」

「そうだな」

起こさないように協力して、美晴をベッドに運ぶ。

「よし。これでいい…か！」

「ニュ〜」

二人とも腕を掴まれ美晴にベッドに引き込まれる。

「ちょっ…。ラウラどうする？」

「ふむ。下手に動いて起こすのも厄介だ。このままがいいだろう」

「まぁ役得だけど…。しばらくはいいか」

ベッドに川の字になって寝る。ちょっと狭い…。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

夜

うーん、なんだろう。なんだか頭がくらくらする…。
あれ？さっきまで何してたっけ…
まず水飲むか…。

起きるために布団をめくるとシャルとラウラが寝ていた。

「えっ！何でシャルとラウラが！」

「あ、美晴起きたんだ…」
僕の声でシャルが目を覚ました。
「な、何で二人とも僕のベッドに…」
「美晴がボク達を連れ込んだんだよ？覚えてないの？すごかったんだから」
すごかった…。この状況を見る限り一番可能性が高いのは…。
「え？僕まさか…やっちゃった？」
「ふふふっ」
シャルは柔らかい笑みを浮かべた。
マジか…。やばいなぁ。責任を…。
「冗談だよ。美晴はお酒飲んで酔っぱらっちゃったからボクとラウラで介抱しただけ。でも連れ込んだのは本当だよ？覚えてない？」
思い詰めていた僕に真相が告げられた。
まぁそうだよね、シャルは服着てるもんね。

「ごめん。まったく…」

「まぁいいけどね。ラウラ。美晴が起きたよ」

シャルがラウラを起こす。

「ん…、そうか。美晴はなかなかに激しかったな」

目をこすりながらラウラが追撃をしてきた。

「やっぱり僕…」

「大丈夫。酒癖の話だよ。ネコみたくなって色々大変だったけどね」

だよね、終わった後服着たとかじゃないよね。

「そっか…。ごめん、二人ともとにかくごめん！」

ベッドから降りて土下座する。

「いいから。ね？」

「そうだぞ。嫁の介抱は夫の務めだ。気にするな」
ベッドの中から言われるとなんだか…。
「ごめん、ありがと。もうこれからもお酒は飲まないよ」
知らない人に手を出したらシャレになんないし。
「まぁボク達だけの時ならいいかも、ね？ラウラ」
「そうだな」
「…気を付けます」
それはそれで本当にどこまでするかわからないから危険だな。
あ、水飲まないと。

第３８話（後書き）

「ってことで千冬姉。美晴が暴走しました。まぁ見逃してやってくれよ」

「ふむ。ボーデヴィッヒも意図的にやったのではない以上、反省文で済ませよう。お前も帰っていいぞ」

「そうか。じゃあおやすみ」

「おやすみ」

くそっ！何でもっと早く教えなかった！
あの美晴は世界で一番可愛いというのに！
デュノアにボーデヴィッヒめ…。美晴は私のものだぞ！

「壁叩いてるんだろうな。外まで聞こえてるぜ」

一夏はやれやれと呟き自分の部屋へと帰っていった。

第３９話

ＳＩＤＥ　シャル

いつもの席に美晴がいません。どうしたんだろうなぁ。

今は朝のＨＲを織斑先生がやってます。

「テスト結果が廊下に張り出されている。後で各自確認しておくように。奮ったもの、奮わなかったものそれぞれいると思うが、気を抜くことなくこれからも勉学に励め」

自分の中では頑張ったけど、どのくらいかなぁ。

「それから配布したプリントだが、来週の臨海学校についてだ。遊びに行くわけではないからな、そこに書かれている目的と概要をよく読んでおけ。今日山田先生は最終視察に行っている。だから今日の授業は全て私が担当する。いいな」

「「「はい」」」

内心、みんな嫌だなぁって思ってるんだろうな。厳しいもん。

「以上で朝のＨＲを終了する」

「あの、織斑先生！」
教室を出ていこうとする織斑先生を呼び止めた。

「なんだデュノア」

「今日美晴は？」

「あぁ、あいつは今日風邪で欠席だ。うつされるかも知れんから、見舞いには行くな。お前らもいいな」
風邪なんだ…。辛くないかな…。

「「「はい」」」

「では授業の準備をしろ」
みんなさっさと準備をしていく。
先生は行くなって言ってたけど、気になるから後でこっそり行ってみよう。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

「ごほっごほっ、くしゅん。う〜」
きっついなぁ。でも朝よりは楽かなぁ。
こんにちは、美晴です。ただいまベッドの上でございます。
暑くて少し薄着で寝たのがいけないのか、きれいに風邪を引きました。
はぁ、もう放課後になっちゃったよ。そろそろテスト結果もわかるから、見たいんだけど…。
千冬お姉ちゃんに来るなって言われたからなぁ。
おとなしくしてることにしました。
はぁ。暇だなぁ。でもしっかり治すか。

ドアがノックされた。誰だろ。千冬お姉ちゃんかな。

「空いてます。どうぞ」
ドアを開けて入ってきたのはシャルだ。
キョロキョロ外の様子を窺いながら入ってきた。

「美晴。来ちゃった」

「来ちゃったって。うつるよ？」

「大丈夫だって。ボク風邪ひいたことないもん」

えぇと…、なんとかは風邪をひかな…、失礼。

「まぁ来てくれたのは嬉しいけど。にしてもどうしてキョロキョロしてたの？」

少し体を起こした。

「本当はね、うつるから見舞いに行くなって織斑先生に釘刺されたんだ。だから誰かに見つからないように警戒してたの」

「えぇ？じゃあすぐ帰らないと。ただじゃ済まないよ？」

どんな罰があることやら。

「ばれなきゃ大丈夫だって。それに一人じゃ寂しいでしょ？」

ニッコリと笑顔で顔を近づけてきた。

「確かにこういうときは人恋しいものだけど…」

シャルはベッドの近くまで椅子を持ってきて腰かける。

「ならいいじゃん。それにテスト結果見てきたよ」
今一番知りたい情報だ。
「あ、どうだった？」
「うん。美晴は2位だったよ。1位はセシリア」
やっぱり英語が響いたか。うまくできた自信がなかったもんな。
「で、ラウラが7位で、ボクが１０位。鈴が１１位で、箒が２０位。」
「みんな高得点だったんだ。よかった。一夏は？」
「一夏は３０位だったよ」
「うーん、一夏にしては上出来か」
正直５０位くらいを予想してた。
「美晴のプリントのおかげだよ。ありがとね」

「うん」

本当に頑張ったもんな。
自分のためになったのも確かだけど。

「熱はないの？」

「うん、大分下がったよ」

後は咳がおさまるのを待つだけ。

「そっか。来週臨海学校だから早く治してね？」

「明日辺りには全快しそうかな」

「ね、ねぇ美晴？」

ちょっと顔を赤らめるシャル。

「なに？シャル」

「あ、あのさ。週末までに治ったら、一緒に水着買いにいかない？」
水着か。僕もそろそろ新しいの買うか。
「じゃ、行こうか。ラウラには話した？」
「え？いや、今回は二人きりで行きたいなぁ、なんて」
モジモジとしているシャル。
まぁ最近は二人きりにならなかったし、お見舞いのお礼もかねていいか。
「いいよ。じゃ頑張って治すね」
「うん！」
「くしゅん。う～」
「大丈夫？寒くない？」
「ちょっと寒気するかも」
朝夕に調子が悪くなるのがいつものパターン。

「ねぇ美晴。ちょっとそっち向いてて？」

「え？まぁいいけど」

何をするんだろうか。

スルッ、パサッと何かが落ちた音がした。

この音は衣擦れじゃないか？発生源はひとつしかないよな。

「な、何してるのシャル？」

振り返ってみる。

「わっわぁ。見ちゃダメ！」

「ごめん！」

黄色の上下の下着姿だった。この前のやつか？

「お邪魔します…」

ベッドの中に入ってきた！

「シャル！」
振り返るわけにもいかないので、背中越しに声をかける。
「えと、寒いときは人肌で暖めると良いって言うから…」
「言うけど、今それはまずいって！」
なにか色々と大変になってきた。
「美晴はボクのこと嫌いなの？」
「嫌いじゃない。むしろ好きだけど…、って違う！こんなの誰かに見つかったら！」
慌てて何を口走ってるんだ、僕は！
「大丈夫。みんな来ないって。ふふっ。好きって言ってくれた。僕も大好き！」
シャルが僕にギュッと抱きついてきた。
「シャル！当たってるってば！」

柔らかいよ、背中に柔らかいのがぁ！

「何が？言ってみてよ美晴」

「いじわるぅ！言えないよそんなの！」

「どう？ドキドキして体温あがったでしょ？」

「あがった！もう寒くないから！」

朝よりも高く上がっただろう。

「ダ～メ。寝るまではこのまま」

離れるどころかより強く抱きついてきた。

「くぅ。こうなったらとっとと寝る！」

「早く治してねぇ」

逃げるには寝るしかない。目をつぶり、羊を数え始める。羊が一匹、羊が二匹…。

「シャルが三匹〜」
シャルが四匹…。
「って邪魔しないでよ！」
「だって寝たらつまんないもん」
「治すの！だから寝かせて！」
早く治して欲しいって言ったのはシャルじゃないか。
「はいはい。じゃ子守唄を」
♪〜♪〜♪
「何で鼻唄？」
「フランス語わからないと思って」
「なるほど」

♪～♪～♪

お母さんってこんな感じなのかなぁ。シャルもこうして寝かしつけてもらったんだろうか…。

ＳＩＤＥ　シャル

「お…母さん…」

あ、寝たんだ。

美晴にはお母さんがいないんだもんね…。こうしてもらったこともないのかな。

「お母さぁん」

寝返りを打った美晴が抱きしめてきた。

「はいはい。いますよここに」

優しく返してあげる。

「どこにも…行かないでぇ…」

寝顔が不安でいっぱいだ。涙がスーッと伝っている。

「美晴のそばにいるからね」

「よかっ…たぁ」

優しく撫でてあげると笑顔でスヤスヤと寝だした。可愛いなぁ。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

剣道場

ＳＩＤＥ　箒

美晴が休みなので、久しぶりに剣道をすることになった。

「一夏。美晴は大丈夫なのか？」

美晴は小学生の時に休んだのを見たことはなかった。

「あぁ。朝行ったらきつそうだったけど、昼休みには大分落ち着いてるって千冬姉が言ってた」

「そうか。ところで一夏。その、週末は暇か？」

「あ？あぁ。特に用事はないな」

無いのか？この機を逃す手はない！

「ならば私と水着を買いに行かないか？」

「水着？」

「以前買い物に付き合うと言ったろ！約束を果たしてもらうぞ！」

当初は違う意味だったが、まぁこの形で納得するとしよう。

「確かに言ったしな。いいぞ。俺も新しいのが必要かなと思ってたし」

「そうか。じゃ日曜の朝に校門で待ち合わせよう」

「あぁ。それで」

よし！約束を取り付けたぞ！一夏と二人で買い物か。今から楽しみだ！

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

第３９話（後書き）

「山田先生。お粥の作り方を教えてもらえないか」

「美晴君に食べさせるんですね。いいですよ」

「すまない」

「簡単ですよ。こうしてお米を水を多くして炊けば」

「ふむ。味付けはこれでいいのか」

「織斑先生！それ砂糖です！」

「なぜここに砂糖が！」

「ここはキッチンですから…」

これは骨が折れそうです。美晴君、悪化しないといいですけど…。

この後、美晴君の部屋に行った織斑先生が、ある光景を見て怒り狂

うのを私はこの時は知りませんでした。

第４０話

おはよう、一夏だ。

今日は箒とちょっくら買い物に行くことになった。
明日の臨海学校で使う水着を買うんだと。
一日目は自由行動らしいからな。

にしても、７月の頭に校門前で待たされるのもきついな。

ふと腕時計を見る。
げっ！約束は１０時だったのに、もう１０時半じゃねえか。遅えよ。

「すまん一夏。待ったか！ハァハァ」

遅れを取り戻そうと頑張って走ってきたのか、肩で息をしている。
ここで遅いって怒ったらさすがに男が廃るな。

「別に待ってねぇよ。息が落ち着いたら行くぞ」

「あ、あぁ。すまない。ハァハァ…ふぅ。もう大丈夫だ、行こう」

「そうか。まずは駅に行くぞ」

少し言い方が強かったかもしれないな。

俺達は駅への道を歩いていく。

「しかしこうして一夏と出掛けるのも久しぶりだな。最後はいつだったか…」

「多分箒が引っ越す少し前だろうな」

あのときはまだゴタゴタする前だったからな。

どこに出掛けたかは覚えてねぇけど。

「そうか。6年ぶりになるか…」

「この歳の6年は長いな。箒も変わったし」

「変わったのか？私は」

「あぁ。綺麗になったな」

「き、綺麗！」

なんだか顔を赤らめている箒。

まぁ今日暑いからな。

「駅着いたぞ箒。大丈夫か？さっきから顔が赤いが」
ずーっと赤いまま。
最近は熱中症も多いからな。

「なんでもない！」

「そっか。ならいいけどな」
怒ってるのかどうか知らんが、まぁ大丈夫なんだろう。
でも怒られる様な事言ったかな…？
電車に乗り俺達はレゾナンスへ向かう。

レゾナンス
ＳＩＤＥ　箒

さっき一夏は私の事を綺麗と言った。
しかしそんなことを言う割には、言われた側の気持ちに気づかない鈍感さも相変わらずだ。
そんな一夏に惹かれているのだから、私も物好きなのだろうか。

「…い。おい箒！置いてくぞ！」

どうやら意識が違う方へ行ってしまっていたようだ。

「すまん一夏！待ってくれ！」

ふむ。周りを見渡すと人が多いな。期待できないが一つ聞いてみるとするか。

「一夏。手を握ってもいいか？」

あくまでも自然に切り出す。

「あぁ。周りに人が多いからな。ほれ」

手を差し出してきた。
やはり理由は予想通りか。
しかし悪くない。
むしろ良い。

「途中で離すなよ箒」

「あぁ！」

離すものか！
ようやく前進できたのだ！

私達は手を繋いだまま、ゆっくりと歩いていく。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

３０ｍ後方　自販機影

「ねぇセシリア。あれ、手繋いでるのよね…」

「えぇ、鈴さん。どう見てもそうですわよね…」

二人の目は明らかにイッていた。

「よし！殺そう！」

牙月を出す鈴。
言葉通り殺る気満々だ。

「何をしているのだ貴様ら」

「「ひっ！」」

後ろから突如現れたのはラウラ。
二人の心にはあの時の、自分達を襲ったラウラがトラウマ化していた。

「別に襲いはせん。一つ聞きたいことがある」

「何よ！」

警戒からか、語気が強い鈴。

「美晴とシャルロットを見なかったか？今朝から全く見ていないのだが…」

朝御飯を一緒にと誘いに行ったが、すでにもぬけの殻だった。

「見てないわね」

「私も存じ上げませんわ？」

二人は一夏と箒が校門前にいるのを怪しいと感じ、尾けてきた。

その場には美晴達の姿はなかった。

「そうか。ならば私は別の場所を探すか。見たら連絡してくれ」

ラウラは立ち去ろうとする。

「こういうのもなんだけど、まとまった方が良いんじゃない？多分美晴達も目的は水着を買うことだと思うわ。なら場所は限られる。あんたそれほどここ詳しくないでしょ？」

「ふむ。お前の言うことも一理ある。従うとするか」

鈴にしては冷静な分析。
特に逆らって得られるメリットもさほどないため、ラウラも行動を共にする。

「お二人とも。一夏さん達が動かれますわよ」

一夏達の動きを注視していたセシリアから報告が入った。

「尾行の基本は気配をいかに消せるかだ。気を付けろよ」

「わかってるわよ」

三人はソロソロと一夏と箒の後をつけていく。

とある店の前

「悪い、箒。少しだけ先に行っててくれ。すぐ追い付くから」

「どうした、トイレか？」

「まぁな」

「そうか。ゆっくり歩いていくからな」

箒に先に行ってもらう。
目的はこの店の中だ。

臨海学校の日の七夕は箒の誕生日だからな。
この店でプレゼントを買っておこう。
さっきリボンが見えたからな。それにしよう。

明るい赤のリボンを買う。

「すいませーん」

よし買えたぞ。急いで追い付くか。

ん？あれは弾か？

「おーい弾！」

大声でモールの反対にいる弾に駆け寄る。

「おう！一夏！」

「どうしたこんなところで」

普段は弾は商店街で買い物をしている。

「あいつの買い物に付き合わされてな」

両手が塞がってるから、アゴで前方を指す。

「蘭か。お前も蘭には甘いな」

「まぁ兄貴だからな。親も忙しいし俺が構ってやらないとな。おーい蘭！一夏が居るぞ！」

「えっ！あ、一夏さん。お久しぶりです！」

駆け寄り挨拶をしてくれる蘭。

「あぁ。蘭はなに買ったんだ？」

「女の子に聞いちゃダメですよぉ」

エへへと体をもじもじさせている。言いづらいものか？

「水着だよ。これ全部な。誰かさんに見せたいんだとよ」

弾が教えてくれた。

「兄貴！あとでオハナシするわよ」

「うっ。はぁ」

弾が落ち込んでる。なんだ？

「あ、ところで一夏さん。私来年ＩＳ学園に入ります。この前受けた適性検査でＡ判定だったので、ほぼ決まりです」

適性検査は女性なら無料で受けられる。

俺や美晴は問答無用で測られた。

「そうか。俺達の後輩か。美晴共々よろしくな」

「一夏。お前連れはいないのか？」

「あっそうだった。悪い、弾、蘭。また今度な！」
さすがに待たせ過ぎたか。少し走ろう。

「箒！待たせた」

「ずいぶんと長かったな。平気なのか？」
そうだ、トイレに行っていることになってたんだっけか。
この長さなら確かに心配するよな。

「あぁ。ちょっと迷っただけだ」
事後の問題としてごまかした。

「そうか。では行くぞ」
水着を売っている店へと歩いていった。
この辺は人が少ないから手を握らなかったが、何故か箒は不機嫌そうだった。

水着コーナー

「ここからは別々だな。俺はあっちの男物見てくる。買ったらそっ

ち行くわ」

「そうか。では後でな」

俺は箒と別れ、自分の水着を買いにいく。

ほぉ～。最近はずいぶんと種類があるんだなぁ。ま、こだわりないからこれでいいだろ。

白のトランクスタイプを選び、レジで会計を済ます。

さて、あとは箒だが…。

「ちょっとそこのあなた。これ片付けといてちょうだい」

店員かなにかと勘違いしてるのか、一人の女が片付けるよう言ってくる。

「あの、俺店員じゃないんだけど…」

「知ってるわ。あなた女の言うことに逆らうの？」

ムッカ～！知っててかよ！居るんだよな、こういう私偉いのよ的な態度をとる奴。箒や鈴やセシリアのようにＩＳに乗れる女が威張るのはいいが、そうじゃないやつがあぐらをかいているのは気にくわない。

あいつらは努力して今ああしているんだ。

「嫌だね」

もちろん断る。

「あぁそう。誰か～！ここに痴漢がいるわ～！」

痴漢？言いがかりもいいところだ！

「ちょっと来てもらおうか」

近くにいた警備員が俺を連行しようとする。こんな女に負けたままじゃ気がすまん。ここは一つ思い知らせてやるか。

「あんたさ、俺が着てる制服どこのかわかる？」

俺は今日制服で来ていた。私服のほとんどが家にあるからだ。

「どこって。ＩＳ学園のでしょ」

「正解。で、俺は男？女？」

「ふん。男よ」

ここで気づかないか。バカだなこいつ。

「ＩＳ学園の制服を来た男。これでわかんない？５ヶ月ぐらい前に俺テレビ出まくってたんだけど」

「あ、あ、まさか…」

女は顔をひきつらせ、少し足が震えていた。

さて、とどめだ。

「そう。あんたが喧嘩売ったのは世界で二人だけの男のＩＳ操縦者の片割れ。名字は織斑。さて、あんたは明日からどうなるかな。世界を敵にまわしたぜ」

ちょっと憎たらしく笑ってみる。いいお灸だ。

「知らないわよ！私は知らない！」

逃げるように女は去っていく。

あぁスッキリした。

警備員は申し訳なさそうに一瞥し、立ち去る。

あの人も大変だろうな、いつもあんな女の起こした事件に巻き込まれて。

「どうしたのだ一夏」

試着室のカーテンから箒が顔だけ出している。

「あぁちょっとな…」

とは言えちょっとやばかったか？

「一夏！こっちへ来い！」

箒は俺を試着室へと引っ張り込む。

「箒？どうした？」

「少し黙っていろ！」

なんなんだ一体？

ＳＩＤＥ　箒

居たぞ、確かに居た。明らかにあいつらの気配だ。

セシリアと鈴め。

なんだ、尾けて来たとでもいうのか。

せっかく一夏と二人きりの買い物なのに。

邪魔されてたまるか！

「なぁ箒。さすがにこれはマズくないか？」

顔を上に向けながら、気まずそうにしている。

「何が…」

今気づいた。私は水着の試着途中だったのだ。すっかり忘れていた。

密室に一夏と二人きり…。

「見るな！見るんじゃない！」

それでもこの格好はよろしくない！

「と言われてもどこを向いてれば…」

「目をつぶればいいだろう！」

「はいはい」

まさかこのような形で肌を晒すとは…。

一夏も少しは私を意識したのだろうか…。

ちらりと一夏の方を見る。

くっ。少しも赤らめていないだと！私には心動かされないとでも言うのか！

「一夏。私の水着は似合っているだろうか」

一夏を振り向かせ質問する。

「ん？あ、あぁ。なんだその、うまく言えないが、似合ってるぞ。箒にピッタリだ」

少し顔を赤くし、言葉に詰まっている。

「そうか。似合っているか」

ようやく意識したか。

よし、この赤の水着で決まりだな。

「そこで何をしている馬鹿者共！」

シャッと試着室のカーテンが突如あけられた。そこにいたのは…。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

第４０話（後書き）

（ちょっとセシリア！押さないでよ！）

（あまり騒がないでください！ばれてしまいます！）

その脇をラウラはスタスタと歩いていく。

（ちょっとあんた！何でそう平気なのよ！）

（私はシュヴァルツェア・ハーゼ隊長だ。尾行対象の意識が向いている瞬間と方向などお見通しだ）

（確か美晴の部屋ピッキングしたんでしょ）

（そうなんですの？）

（私にかかればあれすら容易だ。この尾行はそれ以下の任務だぞ）

（…そう。じゃあ今度一夏の部屋を）

（うむ）

（それには私も混ぜて…って違います！二人が動かれますわよ）

三人の尾行はまだ続く。

第４１話（前書き）

前回は一夏でしたが、今回はミハちゃんです。
えー今回後書きお休みします。出すわけにはいかないんです。

第４１話

おはようございます、美晴です。

ようやく風邪が治り、先日の約束通りシャルと水着を買いに行きます。

学校の前だと問題がありそうなので、駅前で待ち合わせです。

約束の１０時の１５分前。まぁこんなところか。

シャルはまだかな。あ、居た。先に来てたんだ。

「美晴ぅ～！おはよ～！」

ブンブンと手を振りながらシャルが駆け寄ってくる。

今回は二人とも制服で出掛けることにした。

事前調査で、この制服のまま行くと割り引いてくれる店があることがわかった。

どうやらいつも学園の生徒が買いに行っている店らしい。

「おはよシャル。早いね。もしかして結構待たせちゃった？」

「うぅん、全然！それに美晴だって早く来てくれたじゃない！」

キラキラとした顔。

そう言ってもらえると少しは心が晴れるよ。

「まぁこのぐらいかなって思ったんだけど、女の子を待たせちゃったなぁ」

「気にしなくて良いよ？ボクは美晴と二人の買い物が嬉しくて、早く着いちゃっただけだから」

「そうなの？でもなぁ」

きっとシャルの事だからずいぶん早く来てたんじゃないか？
何事にも真面目だからなぁ。下手したら一時間前から居たって全く不思議じゃない。

「じゃあ、今日は一日腕を組む。これでチャラにするね？」

「なら、それでよろしく」

恥ずかしいのはあるが、何らかの形でお詫びしないと僕の気が済まない。

「エヘヘ～。美晴と一緒～」

僕の左腕に両手を巻き付け、体を寄せてくる。

「シャル。強く抱きつかれると、あの、柔らかいのが…」

「美晴のエッチぃ」

いたずらな笑顔を見せるシャル。

「わざとだね？」

「だって美晴が慌ててるの見るの楽しいんだもん」

「もう。悪い子だな」

軽くおでこを小突く。

「エへへ～」

「さて、まだ時間あるしどこか行こうか」

「朝御飯食べた？ボクまだなんだ」

「僕もまだだな」

緊張もあったし、遅れたらまずいと思って食べてこなかった。

「じゃあさじゃあさ、
ボク立ち食いソバっていうところ行ってみたい！」

「なんでまた」

「前から行ってみたかったんだ。でもボク一人じゃなんか入りづらくて」

確かにフランスの女の子はなかなか見ないな。ましてやそれが一人となると…。

「それじゃ初めての立ち食いソバへ行ってみよう」

「オー！」

シャルが拳を突き上げた。
僕達は駅前にある立ち食いソバ屋へ向かう。

「まずここで食券を買って、中に入ったら店員さんに渡すんだ」

僕は冷やしタヌキソバ。

「うん。どれにしようかなぁ」
シャルはメニューに悩んでる。メニューのボタンの上を人差し指が何回も往復している。

「後ろがいるから早めにね」
シャルの後ろには数人が並んでいる。

「うーん、これ！」

さんざん悩んで押したボタンは冷やしかき揚げソバ。
店内に入り食券を渡すとすぐにソバが出される。

「お待ち！」
僕とシャルはソバを受け取り、空いているところへ立つ。

「それにしても早いね～。２０秒くらいじゃないかな。驚いたよ」

「まぁ、これが立ち食いソバの特徴だよ。すぐに出されたのを、すぐに食べて仕事へ向かう。そんな忙しい人たちのためにあるからね」

ソバをすすりながらシャルに解説する。うん、ワサビがいい感じ。

「フランスじゃまずない光景かな」

「早いに価値を見出ださないでしょ。文化的に」

「うん。どちらかというとのんびりコーヒーやワインを飲む文化だからね」

僕はソバを食べ終えたが、シャルはやはり箸のせいでゆっくりめ。まぁ日曜日で混んでないから許されることだな。平日だったら何を言われるか…。

「この後はどうするの？」

空の丼を持って聞いてくる。

「そこにある返却口に食器を返して終わり。ごちそうさまって言ってあげてね。ありがとうの意味になるよ」

ごちそうさまは作ってくれた人への最高の言葉だよ。あれでかなり報われる。

「わかった。ごちそうさまでした！」

「ありがとうございましたー！」

僕達は店を出て少しブラブラする。

「ふぅ。貴重な経験になったよ。ありがと美晴」

「日本の文化を知ってもらうのは僕としても嬉しいからね。遠慮無く言ってね」

「うん。フランスは今日本文化が人気だからね。いろいろ知りたいな」

某オーディション番組で日本のアニソンを熱唱する人がいるぐらいだもんね…。あの審査員の冷ややかな目。今でも焼き付いてる。

「また別の機会に文化が感じられるところに行こうか」

歴史を感じられるところとか、文化の象徴的行事とか。

「色んな所連れてってね」

「ご期待に添えるよう頑張ります」

「うん。あ、そろそろ水着買いに行こう？」

そろそろいい時間だしな。行くか。

レゾナンス
水着コーナー

「このお店だよ。学園のみんなが買いにくるところ。先に調べておいたんだ」

「いつも準備がいいね美晴は」

備えあれば憂いなし、ってね。

「じゃ僕は自分の選んでくるよ」

男物はあっちかな。

「ダメ！ボクが選んであげるの！」

強い口調。力強く腕を引っ張られ身柄を拘束された。

「えぇ？恥ずかしいじゃないか」

「だってそうしないと美晴の事だから、競泳水着みたいなの選びそうだもん」

うっ。なぜわかったんだ。
肌をあまり露出したくないから、全身タイプの選ぶつもりだった。

「だから、ボクの選んだのを着て！ボクも美晴が選んでくれたの着るから！」

「シャルのを僕が選ぶの？」

「いいじゃん！下着も水着も変わらないよ？」

腕をブンブンと振られた。
前例を持ち出されるとなぁ。

「わかったよ。お願いするよシャル」

「どれ着てもらおうかなぁ。あれと、これと、そっちもいいなぁ」

あちこちから色々と持ってきて、どっちがいいかと見比べている。

僕のを選んでるんですよね。その時折見えるビキニはなんのため？

「うーん、美晴にはねぇ、やっぱりこれ！」

そう言って渡してきたのはオレンジのトランクスタイプ。

「オレンジか。シャルが好きな色だからでしょ」

「うん！」

全力で頷いている。

「あまり上半身裸になりたくないんだけどな」

「海なんだから少しは開放的にしないと」

一度味わうといいよ。あの周囲から向けられる興奮の目線を。

興奮なんだよ？驚きじゃないんだから。

「シャルが選んでくれたからいいや、これで。じゃ買ってくるよ」

とは言え、突っぱねるのもシャルが可哀想だ。

レジに向かい会計する。

「彼氏さんへのプレゼントですか？」
店員さんが聞いてくる。
「いえ、僕が着ます」
「えっ！ビキニの方がいいのではないですか？これだと、ねぇ」
これは僕を女だと思ってるな。
確かにただの露出狂だからなこのままだと。
間違えるのも無理はないけどさ。
「僕は男ですから。これで大丈夫です」
「あ！失礼しました！」
相当驚いた顔をして、すぐに袋に入れ渡してくる。あなたの気持ち、わからなくもないけど。
「ただいま」
「お帰り美晴。なに、手間取ってたけどどうしたの？」

「久しぶりに女だと思われたよ。彼氏へのプレゼントですかって」
学園ではもう間違われなくなったから、久しぶりの経験だ。
「初対面ならまず女の子だと思うよ。ボクも予備知識がなかったら、確実に女の子だと思うもん」
「やっぱりそうなんだ。自分ではコンプレックスなんだけど」
「美晴はそのままがいいんだよ。ボクよりも可愛いし」
「シャルの方が可愛いよ」
僕はシャルの頬に手をあてる。
「美晴…」
シャルの目が閉じられ、唇が受け入れ体制完了を訴えている。
ムニュッ。
「さて、おふざけはこの程度にしてシャルのを買おう」

両手で頬をムニムニする。

「お、おふざけ…。ボク本気だったのに…。むぅ～！」

フグのようにふくれるシャル。

「あはは。ごめんごめん。シャルの真剣に選ぶから許して」

「真剣…。言ったね。全力で選んでもらうよ！」

グッと両拳を握りしめている。

うわぁ…、失言だったかも。

「はいこっち」

僕の腕を両手で思いっきり引っ張る。

「わっ。引っ張らないでよ」

「試着するから真剣に選んでよ！」

試着室のカーテンが強めに閉められた。ちょっと怒らせちゃったかな。

ＳＩＤＥ　シャル

なんだよ～、ボクとしてはあのままいくつもりだったのに～。
おふざけって。ボクの気持ちをもてあそんで。
よし。こうなったらボクも美晴で遊んでやる！

まず一着目。緑のビキニ。

「美晴。どうかな」

「ん～」

あまり良くない反応だな。これでもこの前本で読んだ胸を強調させるポーズにしたんだけど…。

「わかった。次」

早々に見切りをつけた。次は黄色のビキニ。

「これは？」

「う～ん。さっきよりはいいけど」

反応薄。案外美晴うるさいな。

「よし。次！…あれは？美晴こっち来て！」

「えっ？シャル！」

美晴を試着室のなかに引きずり込む。

「どうしたのシャル」

美晴はボクの突然の行動に驚いている。

「今セシリア達が見えた」

「来てたんだ。セシリアさん」

「来てたと言うより尾けてきた感じだったな。コソコソしてた」

物陰を少しずつ移動して、気配をできるだけ小さくしてた。尾行だな。

「目的は一夏でしょ」

そうだろうけど、見つかったら絶対邪魔される。

「でも油断はできない…」

「ところでシャルさん。僕はいつまでここにいればいいのかな？」

あ、そういえば。もう少し遊ぶか。

「あと一着あるから、見て。ボク今から着替えるから」

「じゃあ出るよ」

出ようとする美晴の腕をつかんだ。

「ダメ。目ぇつぶって少し待ってて」

「さすがにそれは理性が…」

目をつぶりながらぼやく美晴。

「吹っ飛んでもボクはいいよ？」

いっそのこと今ここで…。

「いや、僕が良くない」
こうでもしないと、真剣にボクを見てくれないじゃないか。まったく…。

「着替え終わったよ美晴」
最後はオレンジのパレオ。

「どうかな…」

「うん。やっぱりシャルにはオレンジだね」

「やった！気に入られた！」
ようやく美晴から笑顔が出た！

「シャル。その、ジャンプすると胸が…」
少し目をそらしながら指摘してくるから、

「なに？気になるの？もっと近くで見てもいいよ？」

いたずらしたくなって胸を押しあててみる。

「わっ！ダメだって！誰かに見られたら！」

ふふっ。耳まで真っ赤だ。

「誰も来ないって。大丈夫」

「そういう問題じゃ…」

美晴が小声で呟いた瞬間に…。

「貴様らもか。とっとと出ろ！」

カーテンが開けられたそこにはあの人がいた…。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

第４２話

こんにちは、美晴です。

水着を買いに来て、シャルに試着室へ引きずり込まれ、慌てていたところにあの方が…。

「全く貴様らは…。そこになおれ！」

千冬お姉ちゃんでした。仁王様に逆らうことはできず、僕らは床に正座させられました。

そして隣には一夏と箒ちゃん。二人も同じようなことをしたのか。

「いいですか？男女の交際そのものは先生は反対しません。ただし皆さんは学生なのです。このような行動は学園の風紀を乱し、秩序も乱します。特に一夏君と美晴君は男の子なのです。その自覚をしっかり持ってですね…」

山田先生が僕達と同じく、正座しながらクドクドと説教をしている。お店の床に五人が正座してて、なんか変な図だ。

「わかりましたか？」

「「「「すみません」」」」

「説教すべきはお前達だけではないようだな。そこにいる二人。出てこい」

ある棚の方を向き、出頭を命令する。

しかし出てくる気配はない。

「ほう。私に逆らうか。いい度胸だ。死ぬ覚悟はできているんだな」

殺気が出ている。

「「すみません！」」

セシリアさんと鈴ちゃんが出てきた。やっぱり居たんだ。

「なんと言いますかその…」

「出るタイミング無くしちゃって…」

「全く…。全員あとでグラウンド２０周だ」

「「「「「「はい…」」」」」」

一周５ｋｍだから、１００ｋｍ…。明日生きてられるかしら…。

「さて、山田先生」

ちょっと山田先生に目配せをする千冬お姉ちゃん。

「あ！あの、先生もまだ買いたいものがあるので、皆さんお手伝いをお願いします！」

「ちょっ！山田先生！」

文句を言うセシリアさん達だが、僕と一夏、千冬お姉ちゃんを残しみんな山田先生に連行される。

なんなんだ一体。

「さて、こんな形ですまんが私も水着を買いたくてな」

「ははぁ。久しぶりに三人で買い物がしたかったんだね。だから山田先生に…」

「言うな！しかしこうでもしないと機会が持てないではないか」

僕の指摘に少しだけ慌ててる。

「確かにこうやって買い物すんの久しぶりだな」

「大体、水着着る時間あるの？」

「一日目に少しだけな。で、お前らはどっちがいいと思う」

目の前に出されたのは白と黒の２つのビキニ。

どっち…か。

う～ん、白いビキニの千冬お姉ちゃんも見てみたいなぁ。ツインテールとかにして。

でもなぁ、イメージからするとやっぱり…。

「「黒」」

「そうか。何故だ」

「何故って、なぁ？」

ねぇ。答えは一つしかないよね、一夏。

「イメージ的に？あと白だと可愛すぎて悪い虫が…」

「可愛いか。久しく言われていないな。それにしても、私に虫が寄ることができると思っているのか？」

「「思いません」」

近寄る前に纏っている気で燃え尽きてしまうだろう。

「私としてはお前達の方が心配だ。二人とも女を囲いおって」

「別に俺は！」

「僕もだよ！別に囲ってなんか」

「ほう。一夏は篠ノ之にオルコットに凰。美晴はデュノアにボーデヴィッヒ。見事に囲っているではないか」

指折り数えていく。

「うっ」

列挙されると反論の余地がない。

「だから俺はあいつらをなんとも思ってねぇって！」

それはそれでどうなんだろうか。可哀想だよ、あの三人が。

「全く。いつのまにか弟達が女たらしになっていたとはな、姉としては哀しい限りだ。これでは私がおちおちと恋愛できないではないか」

「どうせしないだろ…」

一夏がボソッと呟く。

「聞こえているぞ！」

「ひっ！」

余計なこと言うから…。

「さてと鈍感な一夏は放っておくとしてだ。美晴。ボーデヴィッヒはお前に触れてから明らかに柔らかくなった。デュノアも真実をみなに打ち明けるようにしたし、お前としては二人にどういう気持ちで接しているのだ」

「う～ん、ラウラはちょっと常識から外れているところがあるけど、とても可愛いし、シャルはシャルでなんというか甘えられる存在な

感じかな。とにかく二人とも好きで、大切な存在なんだ」

「ほう。それなりに思っているのだな。私から言うのもなんだが、ボーデヴィッヒを頼む。かつての教え子と言う私情だがな」

「僕のできるだけの事をするつもりさ」

微力かもしれない。迷惑になることもあるかもしれない。でも僕は二人のために何かをしてあげたい。

「そうか。私は水着を買ってくる。お前達は帰ってグラウンドを走っておけ。早くしないと明日になるぞ」

「有効ですか、それ」

「当たり前だ。教師と生徒の時と、家族の時のけじめはしっかりつけんとな」

「あ、織斑先生。さっき俺、上から目線で文句言ってきた女にＩＳ学園の名前出して言い返しちゃったんですけど…」

そんなことあったんだ。ムカつくけど、ＩＳ学園の名前を出すのは軽率かも。ましてや僕らは…。

「かまわん。こちらで揉み消す。もし何か言ってきたらそいつを潰す。弟を愚弄したのだからな」

言ったそばからけじめついてないし。そんな千冬お姉ちゃんはレジで会計している。

「はぁ。だって一夏」

「あぁ。２０周か。早く終わらせて明日に備えるか…」

一夏も肩を落としている。

「疲れるよね…。あ！ごめん一夏。僕まだ買うものある！先に帰ってて！」

僕は走り出す。

「罰から逃げんなよ！」

一夏が口に両手を当て、大声で釘を刺してきた。

「ちゃんとやるって！」

手を振り返事をしながら、僕は走ってあるお店に向かう。

「ここだ、ここ。さて、何にしようか」

ＳＩＤＥ　ラウラ

まさか教官までいるとは…。完全に出るタイミングを失したではないか。

オルコット達は見つかったか。

忠告したではないか。尾行のコツは気配を消すことだと。

それにしてもこんなにも水着とは色やデザインがあるのだな。

ただ泳げればいいと思っていたのだが…。

「やっぱり水着は重要よね！」

隣で二人の女が話していた。

「そうよね。いくら綺麗でも、水着がダサいと彼氏に嫌われちゃうもんね！」

なんと！水着とはそれほどに重要なのか。知らなんだ。

おっと、対象から意識をはずしてしまった。

「ラウラは…とても可愛いし…好きで、大切にしたい存在なんだ」
可愛い…、好き…、大切にしたい…。
水着だ！ここで美晴に嫌われたくはない！
しかし私はどのような水着を買えばいいのかわからん。聞いてみるか。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ドイツ　シュヴァルツェア・ハーゼ隊基地
ＳＩＤＥ　クラリッサ

「その機材はそちらだ。資料はまだか」

ボーデヴィッヒ隊長が日本へ行かれてから私の仕事は格段に増えた。
しかし頼られるのは悪くはない。
給金が変わらないのは不満だが。
ピリリリと電話の着信音がした。有事に備え常に電源を入れ、音を最大にしている。

「受諾。クラリッサ・ハルフォーフ大尉」

「ク、クラリッサ。私だ」

「隊長殿！どうされました！」

名前と階級を先に言うのが決まりだが、その余裕もないほど逼迫されているのか。
一体どのような事態に巻き込まれているのか。
スピーカーモードにし、全員に聞かせる。

「その、な。明日臨海学校なのだが、水着をどれを選べばいいのかわからないのだ」

「水着…ですか」

…拍子抜けした。
しかしよく考えてみれば隊長がこんな話をして来た事がない。
いつも近寄りがたい雰囲気で、圧倒的な強さを誇っていたのが私の知っている隊長だ。

「あ、あぁ。どうやら水着選びを失敗するとか、彼氏に嫌われると聞いてな」

彼氏…。

「彼氏？」

「あの隊長が？」

隊員達にも動揺が走っている。

「静かにせんか！隊長。お相手はあの…」

「そうだ。織斑美晴だ」

やはり。最近の隊長の報告でよく名前が上がっていた人物だ。

「ところで今お持ちの水着はなんでしょうか」

「学校指定の水着だが」

一着だけ…と。

「ＩＳ学園の水着は確か旧スクール水着でしたね。確かに一部に受けはいいですが、それでは色物の域を出ない！」

「おぉ！さすがお姉様！」

やんややんや。

「そ、それでは私はどんな水着を着ればいいのだ」

わかりやすいぐらいに食いついてきている。

「こちらで全力で調べあげます。少々お待ちください。こちらからご連絡差し上げます」

「た、頼んだぞ」

隊長は少し揺れた声で依頼をしてきた。通話を終了し、隊員を見る。

「よし、聞いたな！我がシュヴァルツェア・ハーゼ隊の総力を駆使して隊長に合う水着を探し出せ！資料は私のものを使ってよし！」

隊長のために日本文化を知ろうとため込んだ私の本が役立つとは。

「「「「はい！」」」」

すばやく散った隊員達が様々な資料を元に案を出していく。

「これはどうでしょうか！お姉様！」

「これでは隊長の体の良さが活きん！別のを探せ！」

「それではこれは！」

む？どこかで見た覚えが…。

「まさかあの箱を開けたのか？」

あの箱には限定販売のレア物が…。

「はい。副隊長が使用を許可されましたので」

「あれに関してはしていない！あれは私の秘蔵物件だ！」

どうやってあの箱の鍵を！パスワードを入力しなければ開かない仕組みだが…。

まさか！漏洩していたというのか？私としたことが！軍人にあるまじき失態だ！

「こら！お前達も出すな！しまえ！今すぐしまえ！」

新しいパスワードを考えねば…。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

夜

な、なんとか２０周走り終えた…。
明日から臨海学校なのに…、行かせない気か？あの人は…。
さて、愚痴はここまでにしてと。
シャルとラウラの部屋へ行かなきゃ。

「シャル、ラウラ。居る？」

二人の部屋のドアをノックする。夜も遅めなので、できるだけ小さく。

「美晴か。どうした」

ラウラがドアを開けてくれた。

「こんばんはラウラ。ちょっと二人に話があってね。シャルは？」

ラウラは部屋の奥を指し示した。

「あ、美晴だぁ。やぁ。疲れたよぉ」

ベッドの上でぐったりしながらこちらに手を振っている。

「だよねぇ。２０周はねぇ」

「ところで話とはなんだ」

ラウラは走ってないから疲れてないよね。

「あぁ、ごめん。二人にプレゼントがあって。今日のお詫びというか。シャルとの買い物は中断しちゃったし、ラウラは今日一人にしちゃったからそのお詫び」

さっきお店に行ったのはこのため。

「別にボクは気にしてないのに」

とは言いながらプレゼントと聞き、飛び起きてきた。先ほどとうってかわって満面の笑みのシャル。

「私も特に気にはしていない」

ラウラは普段通り。

「僕が気になるからさ。はい。シャルにはブレスレット」

あげたのは銀色のブレスレット。

「わぁ！どう？似合う？」
早速つけて見せてくる。

「うん。似合ってる。見立てに違いはなかったね。で、ラウラにはネックレス」
ちょっとしたチャーム付きのネックレス。前から首にかけてあげる。

「このようなものを着けたことがないが、その、どう…なのだ」
少し顔を背け、恥じらっている。

「似合ってるよラウラ。可愛い」
抱きしめてあげる。

「あっ…。ふむ。これなら留守番も悪くない…な」

「美晴！ボクもボクも！」
シャルが自分もとせがんでくる。

「シャルはダメ。今日は充分可愛がったでしょ」

「えぇ〜。肩すかししか記憶にないよぉ」

「また今度。さて、明日は臨海学校だしもう寝るね。おやすみ」

「おやすみ、美晴」

「うぅ〜。おやすみ」

シャルは不服そうだ。でも公平にしないとね。

明日は早いからな。体を休めよう。

第４２話（後書き）

「ふふふ、これだと可愛すぎるのか」

あの後結局白も買ってしまった。部屋の姿見の前で試着中だ。

「可愛すぎる…。良い響きだ」

もしこれを着たのなら美晴はキュンキュンしてくれるのだろうか…。

それでもってあんなことになって、こんなことをして…。

「くぅーっ、たまらん！」

おっとこんな時間か。夢の中でまた会おう！美晴！

第４３話（前書き）

臨海学校スタート。

第４３話

おはようございます、美晴です。

時刻は７：３０。今日から臨海学校。２泊３日の予定です。

荷物はこれでＯＫかな。よし。確認も済んだ。

「一夏！準備できた？」

一夏の部屋をノックするが、ドアはなかなか開かない。中からはドタバタと音が聞こえる。

「あと少し！ちょっと待って！よしできた！」

「待たせた！美晴」

勢いよくドアを開き、一夏が飛び出してきた。

「昨日のうちにやっておかなかったの？」

校門へと向かいながら一夏と話す。

「いやぁ、そのまま寝ちまってな」

「わからなくはないけどね」
１００キロも走れば体力はゼロになるよね。
そうこうしてるうちに校門へ着いた。
一組のバスはどれだ？
「あ。美晴！一夏！ここだよ！」
シャルが手を振りながら待っていた。
「もぅ。二人とも遅いよ？」
腰に両手を当て僕達を叱るシャル。
「ごめん。一夏が手間取って」
「いやぁ、昨日は疲れてて…」
頭をかきながら一夏は言い訳をする。
「三人とも早く乗り込んでください。バスが出せません」
いつまでも車外でしゃべっていた僕らを山田先生が急かしてきた。

「「「はーい」」」

僕らはバスへ乗り込む。

二人掛け二列、一番後ろは六人掛け。真ん中にセシリアさんとシャル。箒ちゃんとラウラが端。僕と一夏はその間。

「それでは出発します。到着は９：３０の予定です。それまでは、思い思い時間を潰してください。あ、危ないことだけはしないでくださいね？」

あ、この窓簡単に開く。

「「「は～い」」」

「さてと、みんな何する？」

二時間は長いからな。

「あ、ボクトランプ持ってきた。他にも携帯ゲームとかなんでもあるよ？」

二泊三日分の荷物を入れるにしては明らかに大型のカバン。

「シャル。その中にはゲームしかないの？」

「失礼な。なぞなぞの本とかも入ってるんだよ？」

結局遊び道具か。

「まずはトランプにしようか。みんなポーカー知ってる？特にラウラ」

「私とてそのぐらいは知っている。それなりに強いと自負している」

他のみんなも問題なさそうだ。

「ならいいか。じゃ始めるよ」

それぞれにカードを配る。
僕の手は…。お、最初から6のスリーカードか。勝負してみるか。
二枚変えて奇跡にかける。
ちなみに変えるのは二回までのルール。
来たのは6。フォーカード。これで勝てるだろ。

「僕はこれでいいや」

一夏達は二回目に入る。
セシリアさんが笑みを浮かべているが、さすがに僕の手には勝てな

いだろう。

「オープン！」

一夏達はワンペアや役無し。ふっ、僕の勝ちだな。

「僕はフォーカード！」

「すげ！こりゃ美晴の勝ちかな」

だろう？一夏。

「甘いですわ！私の手札をご覧なさい！」

その手に握られていたのは…。

「えっ！ロイヤルストレートフラッシュ？まさか！」

負けた？この手なのにか？

「貴族たるもの、ギャンブルもたしなみの一つ。踏んできた場数が違いますわ」

トランプですらものにするのか、貴族は。

「絶対勝てると思ったのに」

「セシリアすげぇよ！初めて見たよロイヤル」

一夏は興奮気味だ。

「でしょう？一夏さん。このくらい朝飯前ですわ？」

ふふん、と胸を張り一夏に自慢する。

「よし！次はババ抜きだ。これは勘だからね、セシリアさんに有利には働かないよ」

「どうぞ、かかっておいでなさい」

ジャンケンで順番を決めた結果、僕はセシリアさんのを引くことになった。

「さて僕の番か。そろえばあがりだ。どれがいいかな」

セシリアさんのカードを見つめる。

一枚のカードを取ろうとすると、ニヤッとセシリアさんが表情を変えた気がした。

「こっちだ！引いたのは…ダイヤの５！よしあがり！」

「くっ、あと少しでしたのに」

歯を噛み、悔しがっている。

「顔に出てたよセシリアさん。ポーカーの時もそうだったし」

どっちも表情の分かりやすい変化があった。

ポーカーの時は油断したけど。

「私としたことが修行が足りませんでしたわね」

結果としてビリは一夏。

「次は何しようか？」

シャルがごそごそとカバンの中を漁っている。というかどれだけあるんだ？青いネコじゃあるまいし。

「あ！これやりたいな」

シャルが出したのは６本の割り箸。まさか…。

「王様ゲーム！イェイ！王様の言うことは絶対！」
シャル…。君はどこからこういう知識を仕入れてくるんだ。
「はい！みんな割り箸1本ずつひいて～」
「どういうゲームですの？」
「王様になったものが、他の者に命令できるゲームだよ」
セシリアさんとラウラのためにルール説明。
「命令ですか…。面白そうですね…」
はまるなよ。貴族なんだからいつものことでしょ？
「はい！王様だ～れだ？」
「あ、僕だ。ふふふ。何にしようかな」
せっかくだ。ちょっと恥ずかしいのにしよう。

「変なのやめろよ？美晴」

釘なんて通用しないよ、一夏。

「2番が4番の耳に息を吹き掛ける」

「「え～っ！」」

ほう、一夏と箒ちゃんか。

「王様の言うことは絶対がルールだよ。で、どっちが2番？」

「…俺」

力無く手をあげている。

「では2番の一夏君。4番の箒ちゃんに命令を実行してください」

「変なのにするなって言ったじゃ…うっ、はいはいやりますよ」

文句言ってたから睨む。

「じゃ箒、いくぞ」

「ああ」

箒ちゃんは目をつぶり、小刻みに震えていた。
一夏は優しく息を吹きかけた。かえってくすぐったいはずだ。

「あっ…」

ピクッと体が動きちょっとえっちぃ声が出た。

「箒、痛いから！叩くなって！」

バシバシと平手で一夏の背中を叩きまくっている。

「うるさい！吹き方が不健全だ！」

「こんなのに健全も何もあるか！」

箒ちゃんは顔を赤らめながら一夏を叩きまくる。
いやぁ、予想通りだ。

「楽しいねぇ日本のゲームって。さて次は…。王様だ～れだ！」

シャルはすっごく乗り気だ。

「私ですわね」

げっ、嫌な人がひいた。

「そうですわね、3番の方。全員にくすぐられていただきましょうか」

「俺は1番だ」

「ボクは5番だよ」

「僕です…」

よりによってセシリアさんの時にあたるとは…。

「美晴か。覚悟しろ。私に恥ずかしい思いをさせた罰だ」

両手をワキワキとほぐす箒ちゃん。

「そんな…罰だなんて物騒な言い方…」

「俺も美晴のせいでさんざん叩かれたからな。思いきりやらせてもらうぞ」

一夏は手首をプラプラさせ、準備運動。

「一夏まで…ねぇセシリアさん。命令変えてもらえない？」

わずかな望みにかけ聞いてみるが…、

「あら。王様の命令は絶対なのでしょ？従っていただかないと」

あっけなく却下。

「ボクもラウラも賛成だよ」

つまりは全員敵ですか。

「くっ。来るなら来い！耐えてやる！」

腹決めた！耐えれば勝ちだ！

「いい覚悟だ。それではいくぞ」

箒ちゃんの合図で一斉にくすぐってくる。

「あはははは！はっははは！やめ、わき腹ダメ！シャル、足の裏ばっかりやらないで！はははは！ひっひっ。腹筋崩壊する！ラ、ラウラ、僕背中弱いの！」

シャルとラウラは僕の弱点を的確に突いてきた。

「ふふふ。リサーチ済みだ」

情報はどこから漏れたんだ。

「あはははは！もうダメ！笑い死ぬぅ！」

「そろそろ着くぞ！そのへんにしといてやれ！」

「「「は～い」」」

た、助かった…。千冬お姉ちゃんありがとう…。

第４３話（後書き）

「にゃあぁぁぁ！」

美晴がくすぐられて叫んでいる。
あぁ、私もあの中に加わって、美晴をくすぐりたい！

「織斑先生？」

しかし私は引率だ。生徒達と共にふざけるわけにはいかない。
出来ることなら私もあの歳に戻って美晴と…。

「あ、あの。織斑先生？」

「ん？あぁ、すまない」

どうやら妄想に浸りすぎていたようだ。まぁ二組だからと、このバスに居られないあいつを考えれば、幾分私はマシか。

「そろそろ着くぞ！」

いつまでも私の美晴に触るな。

第４４話

こんにちは、美晴です。

旅館につきました。
なかなか良い旅館です。ホテルほど豪勢ではなく、かと言って質素というほどでもなく、落ち着いて過ごせるよさげなところです。

「さて、ここが今日からお世話になる旅館だ。従業員の皆さんに迷惑をかけないよう節度を持った行動を心がけるように」

「「「はい！」」」

とは言えみんな楽しみなので、ワイワイガヤガヤとおしゃべりをし続ける。

「みなさんようこそおいでくださいました。女将でございます」

和服が似合うきれいな女性が挨拶をしてきた。千冬お姉ちゃんほどではないが、充分に美人と呼べる女性だ。

「女将さん。今年もお世話になります。騒がしい生徒ばかり毎年連れてきてすみません」

千冬お姉ちゃんが詫びている。毎年ここなんだな。

「いえいえ。このぐらい元気でないと、かえって行く末が心配になりますから。あら、あちらのお二人が話題の？」

僕達に気づいたようだ。

「あ、はい。私の弟です。織斑一夏、織斑美晴、こちらに来て女将さんに挨拶しろ」

千冬お姉ちゃんに呼ばれ、僕達はクラスの列を離れる。

「ほら、挨拶しろ。今年はお前達のせいで、女将さんには色々配慮してもらったからな」

「織斑一夏です」

「織斑美晴です」

僕達は丁寧に挨拶をする。

「この旅館の女将です。ようこそ。先生、素晴らしい弟さん達じゃないですか」

改めて丁寧に挨拶される。

「いやいや。こいつらのお陰で毎日書類を書かされていますから。特にこの一夏の方はとんだ問題児でして」

一夏を指差して言う。

僕も色々書かせてたんだな。

「な、千冬姉！美晴だって同じくらい！」

一夏が間髪いれず反論する。

「織斑先生だ！まったく…。３ヶ月経って先生と呼ばない辺りからしてお前のほうが上だ！」

確かに。僕はそんなに間違えてないからな。

「と言う具合なので女将さん、よろしくお願いします」

深々と頭を下げる千冬お姉ちゃん。

「こちらこそです。では生徒さんを各お部屋にご案内いたしますね」

女将さんも一礼した後、仲居さん方に目配せをした。

「お願いします。よし、お前達。仲居さんがそれぞれの部屋に案内してくれるから指示に従うように。荷物を置いたらそこからは自由行動だ」

みんな仲居さんの後について部屋へ向かっていく。だが、僕達は取り残された。

「あの、織斑先生。僕達の部屋は…」

「こちらだ。着いてこい」

どうやら僕達はみんなとは違う部屋の配置のようだ。当然と言えば当然だが。

「ここだ」

連れてこられた部屋は…。

「「教員室？」」

一夏と同時に声をあげる。

「個室を与えると部屋に女子が押し掛ける可能性がある。だからこう配置した。他の部屋よりは幾分広いぞ」

襖を明け、中に入りながら説明される。他の部屋がどうなのかはわからないが、一般的な旅館の部屋よりは明らかに広い。

「「なるほど…」」

さすがに狼の住みかに自ら飛び込んでくる羊はいないな。

「俺達と一緒に寝たいってことはないんですか？」

一夏がにやけながら聞いてみる。多分からかうつもりなのだろう。

「無い！…訳ではない」

否定した後、すぐ表情を崩した。後半はわずかに聞こえるぐらいの小さい声だ。

「ふふ。織斑先生も素直じゃないですね」

「この部屋にいる間は姉弟だ。先生と呼ばなくていい」

なるほど。ここにいる限りは家族旅行のテンションでいいんだ。

「そういえば千冬姉。俺達風呂はどうするんだ？」

「あぁ。それなんだが、お前達は夜、女子が使う前の３０分だけ使える。他の時間はここについている内風呂を使え。さすがにお前達のために一学年すべてを後回しにするわけにはいかないからな。これでも女将さんがなんとかしてくれたのだ」

苦肉の策と言ったところか。ご迷惑お掛けしました。

「了解、千冬姉。このあと俺達は海行くけど千冬姉は？」

「私は明日の打ち合わせがあるからな。そのあと少し時間がある。せっかく二人に選んでもらった水着だ。着ないとな」

「そう。じゃ待ってるね千冬お姉ちゃん」

千冬お姉ちゃんの水着か。最後に見たのはいつだったか。

「楽しむと良い。久しぶりの海だからな」

ここ数年、なんだかんだで海には来ていなかった。プールが関の山だ。

「行こっか一夏」

「ああ。じゃ行ってくる」
僕達は水着を持って更衣室へ向かう。

中庭

更衣室へ向かって歩いていると、中庭に見覚えがあるウサ耳があった。
あった…というか生えてる?優しく抜いてとか後ろの板に書いてあるし。

「ねぇ一夏。あれ…」

「気づいたか。あれって…だよなぁ」

二人とも直視せず、横目で見ている。

「一夏抜いてよ」

「美晴が抜けよ」

「あまり関わりたくないし…」

「俺だって…」

「一夏、美晴。どうしたのだこんなところ…っ！」

僕達が譲り合ってると、後ろから箒ちゃんがやってきた。

ウサ耳を見た瞬間、明らかに表情が曇った。

「ねぇ箒ちゃん。あれって…」

チラリと生えているアレを見る。

「知らない！私は何も見ていない！」

そう言い、そそくさと箒ちゃんはその場を立ち去る。

相変わらず苦手なのか、あの人が。仲悪いらしいし。まぁ、僕もどちらかと言えば苦手だけど。

「で、どうするよ美晴」

「うーん…」

問題は全く解決されていない。

「あら、お二人ともどうしたんですの？」

今度はセシリアさんか。

「セシリアか…。いや、あれがな」

一夏が中庭を指差す。

「ウサギの耳…ですか。異様ですわね」

セシリアさんもそう思うか。

「もういいや、一夏。抜いてみるよ」

意を決してウサ耳に手をかける。

「あれっ？」

ほとんど手応え無くあっさり抜けた。しかも何か付いてきたわけではなく、僕が手に持ってるのはウサ耳だけ。

「ひっかけか？」

「いや、美晴。耳すませろ」

ん？
上からキィーンと何かが高速で落ちてくる音がする。あまり見たくはないが、見上げてみる。
逆光のため、何が落ちてきているかはわからないが、一直線に僕の脳天に向かってきている。

「あぶねっ！」
空から落ちてきた物体をかろうじてよけた。轟音と共に着地したその物体は…。

「ニンジン？」
だよ。セシリアさん。てことは中に居るのは…。
ハッチだろうか。開いた場所から人影が。

「はろはろ～。愛しのお姉さん、篠ノ之束さんだよ～」
やっぱり…。
出てきたのはメイド服にウサ耳の、一見すれば美人なお姉さん。ただ頭がちょっとぶっ飛んでる人。

「やぁ！久しぶりだね！いっくん、ミハちゃん！」
超ハイテンションの束さん。

「「お久しぶりです、束さん…」」

一方ローテンションの僕達。

「なんだなんだ〜？テンション低いぞ〜。せっかく二人の愛しのお姉さんが会いに来たっていうのに〜」

僕達の顔を見比べ、むぅ〜っと頬を膨らませている。

「今は愛しとまではいきません。だってそのニンジンで死にかけたんですよ！テンション高い方がおかしいでしょ！」

僕を殺しかけたニンジンを指差した。

「えぇ〜？ちゃんと避けるのを計算した着地だよ〜？」

あのギリギリが計算だと。どこまでがこの人の安全圏にあたるのだろうか。

「はぁ。にしてもなぜニンジンなんですか」

「え？ウサギさんだし、それに空飛ぶニンジン面白くない？」

そんなニッコリとした顔で訳のわからないことを言うのは相変わら

ず。

「はぁ、まぁ」

「でもねぇ、大変だったよ。未確認物体だって、ここに来るまで四回ぐらい空軍に狙われたよぉ」

一度撃墜されるべきだ。

「あ、そうだ。二人とも箒ちゃんがどこにいるか知らないかなぁ」

「どこかは…」

さっき逃げ出したから場所は不明。

「まぁいいや。こんなときのための箒ちゃんレーダー！」

ウサ耳がピクピクと動き、ある方向を示す。

また変なものを作った…。

「あっちだねぇ！じゃいっくん、ミハちゃん！またあとでね～」

ピュ～ッとこの場からいなくなる。

「なんなんですの一体？」

終始頭に？マークしか浮かばなかっただろうセシリアさん。

「セシリア、気にするな。気にしたら負けだ…」

一夏がセシリアさんの肩に手をおきながら、首を横に振る。

「はぁ…。わかりましたわ」

「一夏。気を取り直して海行こ。海」

「そうすっか。俺達は何も見なかった。そうしよう」

「うん」

無かったことにしよう。今はそれが心の健康に最も良い。

「よくわかりませんけど…。あ、一夏さん。あとでサンオイル塗っていただけます？」

「オ、オイル？い、いいぞ」

何の事かわからずに引き受けたなこれは。

「ありがとうございます。では私は先に」

ウキウキとした足取りでセシリアさんは更衣室へ向かっていく。

僕達も行かないとな。

第４４話（後書き）

後書きお休み…。最近本文より苦労してます…。

第４５話

こんにちは、美晴です。

水着に着替えるために更衣室へ向かっているんですが…。

「またアンタ胸大きくなったんじゃない？」

「そうかなぁ？」

「どれどれ、触って測ってみよう」

「あっ、ちょっと！触り方が変よ！やっ、あん！」

何で女子更衣室の前を通らなければ行けない位置にあるのでしょうか…。

「美晴。耳塞ごう」

「うん。刺激が強い…」

二人とも両耳を塞ぎながら、静かに通りすぎる。

更衣室

「はぁ。大変だったね…」

なんとかたどり着いて僕達は着替えをする。

「肩身狭いな、俺達」

一夏もため息をついている。

「去年まで女子高みたいなものだからね。こっちがある意味異常な存在だし」

実質女性しか入る資格を得られない以上、必然的。

「だからきついんだよな色々と…」

「うん。わかるよその気持ち」

鎮めるのが大変なんだよ。何かは言わないけど。

「おっ、美晴。今回は普通のなんだな水着」

取り出した水着に一夏が気づいた。

「うん。シャルがこれ以外認めないって」
昨日の夜、再交渉したがあっけなく拒否された。
「そうか。普段はウェットスーツだからな、お前。たまにはいいだろ」
「僕は裸イヤなんだけどなぁ」
仕方ないからこれで行くけどさ。

海水浴場
うわっ、まぶしい！砂あっつい！海に来たって感じするなぁ。
「あ！見て！一夏君と美晴君よ！」
僕達の姿を見て女子が騒ぎ始めた。
「えっ！うそ！私の水着変じゃない？」
自分の水着を何度も確認してる。

大丈夫。変じゃないから。

「美晴君…、エロい…」

誰だ！危ない発言をしたのは！そういう目で見るな！

「それにしても…二人とも意外と筋肉あるのね」

「ね。一夏君はともかく、美晴君は意外ね。普段は見せてくれないから」

鍛えてはいるけど、あえて見せたいとは思わない。

「あぁ、ギュってされたいなぁ」

したら殺されるだろうなぁ、あの二人に。

シャルと千冬お姉ちゃんの顔を想像していると、一人の女子が来た。

「ねぇねぇ、二人の部屋ってどこなの？」

来た！この質問！

「うん、織斑先生と同じ部屋」

「そうなの…。ちぇ。夜になったら行こうと思ってたのに…。織斑先生と一緒じゃねぇ…」

計画実行が不可能と悟り、肩を落としながら去っていく。

「いやっほー！」

直後、いきなり鈴ちゃんが一夏の肩に飛び乗った。水着は水色に縁が黄色のタンキニ。

「やっぱり眺めいいわねぇ」

一夏の上で辺りを見回している。

「おい！危ないだろ！」

「あたしは大丈夫」

「いや俺が…」

はっきりと言う鈴ちゃんに一夏があきれている。

「まぁまぁ。久しぶりなんだから許してあげたら？」

鈴ちゃんと海なんて小六の時以来だ。

「そうよ！だからおとなしくしなさい！」

「わかったよ。あっ、そうださっきセシリアに…。居た居た」

鈴ちゃんを肩車しながら一夏はセシリアさんのもとへ。セシリアさんはパラソルをすでに設置し、待ち構えていた。水着は青のパレオ。

「やっと来てくださいましたのね。それでは…オイルを塗ってくださる？」

「あ、あぁ。これを塗るのか？え、セシリアの体に？」

鈴ちゃんを肩から下ろし、サンオイルを受け取る。

やっぱりわかってないまま約束したのか。

「はい。サンオイルですから」

「そ、そうか。じゃ…いくぞ」

一夏はオイルを出し、そのままセシリアさんに塗る。

「ひゃんっ！い、一夏さん。まず手で暖めてから塗ってください」
ビクッとはねたセシリアさん。冷たいんだよね、あれ。
「あ、そうなのか？すまん。初めてだから勝手がわからなくて」
「は、初めてでしたら仕方ありませんわね！つ、続きをお願いしますわ」
一夏の初めてになったことに少し嬉しそうだ。
「あ、あぁ」
ゆっくりと背中全体にオイルを塗っていく一夏。
「ふ…ん」
気持ち良さそうな笑顔のセシリアさん。
「これでいいか？」
塗り終わったみたいだ。

「どうせならこちらもしていただいて…」
と、お尻の方を指す。
「え？それはさすがに…」
たじろいでいる。
セシリアさんもかなり調子に乗ってきたな。
「はいはいセシリア。そこはあたしが塗ってあげるわ！」
鈴ちゃんが一夏からオイルを奪い取り、セシリアさんに塗りたくる。
「ちょっと鈴さん！私は一夏さんに！」
「問答無用！」
「一夏さ～ん！」
こっちはほっとこう。
「一夏も塗る？サンオイル。僕の自作のがあるんだ」

「へぇ。作れるのか。じゃ塗ってもらおうかな」
かかりましたな一夏殿。
一夏を寝かし、僕がオイルを塗っていく。
「どう？」
「なんか不思議な感じだな」
しばらくして…。
「なぁセシリア」
一夏は隣に寝ていたセシリアさんに質問する。
「なんですの？」
「なぁオイルって結構ヒリヒリするのか？」
「え？日焼けしますから、多少そのような感覚はあるかも知れませんが、結構とは…」
「美晴！何塗った！」

ガバッと飛び起き僕を振り返る。

「ひ・み・つ！」

唇に指を当てて、シーッのポーズ。

「可愛く言うなよ！」

「美晴。これラー油じゃないの？」

鈴ちゃんに見つかった。

「ばれちゃったか」

「この野郎〜。日焼けじゃなくて本当に焼いてんじゃないか！」

一夏が追いかけてきたので、僕は海に逃げる。

「待ちやがれ〜！」

追いかけてきたか。

「いいの？一夏。そのまま海に入ったら…」

「え？い、いってぇ～！」

海水はしみるよ～。

「はぁ、はぁ。死ぬかと思った…」

浜に戻り、休憩している。

「美晴～！」

シャルが来た。

「やぁシャル。遅かったね。ところで隣のバスタオルお化け何？」

ミイラみたいにバスタオルをぐるぐる巻きにしている。こいつ暑くないのか？

「あぁ、これ？実はね…」

横目でお化けを見ている。

「もしかしてラウラ？」

「そう。なんかね、美晴に見せるのが恥ずかしいんだって。ね？」

シャルがミイララウラに話しかけた。

「だって…。笑わないか？」

声は確かにラウラだ。

「笑わないよ」

「早くしないと、ボクが美晴連れてっちゃうよ？」

「うぅ、えぇい！」

バサッと意を決してバスタオルを剥いだ。

黒地にフリルがついた、ローレグ気味の水着だ。それにいつものロングヘアーをイチゴがついたヘアゴムでツインテールに結んでる。

「どうなのだ、やっぱりおかしいだろう…。笑え！」

もじもじしながらラウラは自分を卑下している。

「何言ってるのさ。可愛いよ、ラウラ」

「か、可愛い…のか」

ボッとラウラの顔が赤くなる。
あぁ、そのしぐさで可愛さがまた増した。

「うん。改めてラウラが好きになったよ。で、その水着どうしたの？」

「た、隊の者に相談して選んだのだ」

いつもは変な知識吹き込んでばかりだけど、今回はいい仕事したな。

「ねぇ美晴、ボクはぁ？」

昨日一緒に選んだオレンジのパレオだ。

「シャルのも似合ってるよ。うん、好き」

「えへへ～。ありがと！」

その笑顔にぴったりだね。

「いっちー！ミー君！ビーチバレーやろうよ～」

のほほんさん達が呼んでいる。

「おう！今行く！」

どうやら一夏は復活したようだ。

「僕達も行こうか。ラウラ、大丈夫？」

「可愛い…好き…」

上の方を見ながらぶつぶつと独り言をいっている。

あ、シャルにはこの前言ったけど、ラウラに好きって言ったの初めてだったっけ。それにしてもそこまでなるのか？

「しょうがない。ほらいくよ？」

ラウラの手を引き、のほほんさん達のもとへ行く。

のほほんさんは、水中仕様なのかどうかわからないが、いつものような着ぐるみを来ていた。

のほほんさんと谷本さん鷹月さんがいて、全部で7人なので、3対3で、1人が審判と言うチーム分け。審判はローテーション。まずは僕が審判。専用機チーム対のほほんチーム。

「いっくよ～いっちー。うぇ～い」

のほほんさんのサーブで試合がスタート。

ラウラがボーッとしてレシーブせず失点。

「はい、のほほんチームに1点」

「ちょっとラウラ。レシーブしてよ」

シャルがラウラを注意する。

「好き…私が…」

ラウラはボーッとしたままだ。

「ダメだ…。一夏。ボク達だけで頑張ろう」

シャルは諦めたようだ。

「しかねぇようだな」
一夏も前を向いて真剣な表情。
「はい、もう一度のほほんさんから」
「いくよ〜」
山なりのサーブから、
「よっ」
シャルがレシーブ。
「シャルロット！」
一夏がトスをあげ、
「任せて！」
シャルが鋭いスパイクを放つ。きれいに決まった。
「専用機チームに1点。ただし遊びなので、あんまり鋭いのは禁止ね」

怪我したり、ワンサイドになったりすると楽しめない。

「「はーい」」

普通に考えれば一夏がいる方が有利なのは間違いないからな。

その後はなかなか意識が帰ってこないラウラを審判にさせ、僕がのほほんチームに入り、谷本さんにチームを移ってもらった。

「行くよ美晴！」

シャルが本気のサーブを打ってきた。

「はやっ！」

なんとかレシーブ。

「鷹月さん！高く上げて！」

「はいっ！」

指示通り高いトス。僕はネットを背にし、手を組む。

「跳んで！のほほんさん」

「おっけ～い」

手を足場にし、のほほんさんにジャンプさせる。

「え～い」

「逆光で見えねぇ！」

スパイクの瞬間が見えないみたい。

見事にスパイクが決まる。僕は落ちてくるのほほんさんをキャッチ。

「鋭いの無しって美晴が言ったんじゃんかぁ」

口を尖らせながらシャルがブーイングしてくる。

「ごめんねシャル。試しにやってみたくて。のほほんさん大丈夫？」

腕の中ののほほんさんを見る。

「だいじょぶ～。でもミー君におっぱい触られた～」

うん、意外と大きかったなぁ。じゃなくて、爆弾発言！

「美晴ぅ？どういうことかなぁ…」

ゆらりとシャルの体が揺れる。

「事故だって！着ぐるみ越しだし！」

「ふーん、否定しないんだぁ」

「ちょっ！シャル！ボール全力で投げないで！」

全力でボールをぶつけてきた。僕達が使ってたのはビーチじゃない、普通の公式球。

「この浮気者〜！」

「わざとじゃないんだってばー！」

海に来てまでシャルとの追いかけっこかよ〜。

「好き…」

ラウラさーん！

第４５話（後書き）

「では各先生の配置はプリントにまとめてあるので、読んでおいてください」

さて、私は美晴達と泳ぎに…。

「ダメです！織斑先生！ちゃんと打ち合わせをしましょう！」

腕を掴まれた。

「山田先生…。しかし私には！」

「ちゃんとお仕事しないと美晴君に嫌われちゃいますよ？」

「うっ、それは…嫌だな。仕方ない」

まぁ美晴は私から逃げることはないだろう。

格好良く仕事して、姉としての尊敬も得ねばな。

第４６話

こんにちは、美晴です。

お昼を済ませて、午後も遊ぶか。

「美晴、泳ごうぜ」

一夏が声を掛けてきた。

「せっかくの海だからね。よし」

僕達は少し遠めのところまで泳いでいく。

「ぷはっ。やっぱり海は良いなぁ。な！」

５００メートルほど泳いだところで、二人とも顔を出し少しとどまる。

「うん。プールじゃこの感覚は味わえないよね。まず波が立たないし」

「そうだな。人工じゃなく自然の波がいいよな」

以前波のあるプールで泳いだこともあるが、やっぱり自然にはかなわない。この不規則さがまた面白いんだから。

その後もしばらく泳ぐ。

「そろそろ戻ろうか」

ちょっとはしゃいで体力使いすぎた。午前中に全力疾走したし。

「一回休憩だな」

僕達は浜に戻る。

「ふぅ。疲れたぁ」

「なんだ、遊び疲れたのか」

千冬お姉ちゃんが来ていた。

「あっ織斑先生よ！」

「やっぱりスタイルいいわねぇ…」

「それはお姉様ですもの、当然よ」
女子達が千冬お姉ちゃんの登場に色めき立つ。
「千冬お姉ちゃん！打ち合わせ終わったの？」
「あぁ、大方な。これから少しは時間がある」
「そう。やっぱり水着似合ってるね。綺麗だよ」
「ふっ、身内自慢か」
とか言いながら照れ笑いをしている。
「自慢だな。それだけ綺麗なんだよ、千冬姉は」
一夏も素直に誉める。
「どれ、私も少し泳いでくるか。お前達は休んでろ」
千冬お姉ちゃんは海へと歩いていく。

「いいよ。僕達も千冬お姉ちゃんと泳ぎたいよ。ね？一夏」

せっかく水入らずになれそうなんだから、多少の疲れなんて。

「あぁ。休憩は終わりだ」

久しぶりに姉弟で海を満喫する。

競争したり、砂山を作ったり、一夏を砂浜に縦に埋めてみたり。

時間はあっという間に過ぎ、千冬お姉ちゃんの自由時間は終わってしまった。

「もう行っちゃうの？」

「詰めがあるからな。これも教師の務めだ。わかってくれ」

駄々はこねないけどさ、なんか寂しいよ。

「わかった。お仕事頑張ってね。いってらっしゃい」

見送りは笑顔。これは約束事。

「いってきます」

千冬お姉ちゃんは旅館へ帰っていった。

「そうしょんぼりするなって。夜に会えるだろ」

一夏が僕を慰めてくる。

「そうだね。今はたっぷり遊ぼう」

次は何しようかなぁ。

夕方

みんなはスイカ割りをしている。誰が持ってきたのか…。

「美晴！美晴もやろうよ！」

シャルが僕を呼ぶが、僕は座りながらただ手を振るだけ。

「おいどうしたんだ美晴。熱でも出たか？みんなも心配してたぞ。ほい、スイカ」

一夏が僕の様子を心配したのかスイカを持って見に来た。

「ありがと。いや、別に熱はないよ。ただ…今幸せだなぁって」

「そうか。幸せか」

「あと、昔のこと思い出してたんだ。一夏とあった日の事」

「あぁ。あの日も夕焼けがきれいだったな」

二人で夕日を見つめる。

「あれからもう何年も経って、こうして周りにみんながいて笑ってられて。本当に幸せなんだ。ありがとう一夏。あのとき僕に声を掛けてくれて」

笑顔で軽く頭を下げて感謝する。

「まぁ、泣いてる奴を放ってはおけない性格だからな」

「ふふ、今もそうよだね。でもね、一夏。幸せだからこそ不安になるんだ。僕は本来ここにいる存在じゃない、本当は二人の家族じゃないのにいいのかなって…」

夢の中に出てくるぐらい、僕は不安でたまらない。

その夢では笑顔で食卓を囲んでいる二人を、僕が窓の外から眺めて

いるのがいつもの内容。

「そんなことか」

なんだ、と言わんばかりに軽く返してきた。

「そんなことって言い方！」

あっさり言う一夏に思わず大声になった。
今まで何回枕が濡れていたことか。

「まぁ怒るなって。美晴。お前が思う家族の定義ってなんだ。血の繋がりがあれば家族なのか？」

一夏が真剣な顔で聞いてくる。

「それは…」

答えに詰まってしまう。血だと僕が答えてしまうと、僕は僕を否定することになる。

「俺はそうじゃないって思ってる。互いに思い合って、支え合って、一緒に笑って幸せを分かち合って。それが家族なんだと思う。血の繋がりとかどうでもいい。だから、例え世界中の誰もが、例え美晴自身が俺達の家族じゃないって思っても、俺と千冬姉はそれを認め

ねぇ」

「一夏…」

力強い一夏の言葉に思わず泣きそうになってしまう。

「だからそんな考えはもう捨てろ。お前の考えだとラウラは一人ぼっちになっちまう」

そっか…。ラウラには肉親が存在しないんだもんね。一夏の考えならラウラはもう僕の家族だ。

「ありがとう。打ち明けてよかったよ。すっきりできた」

長年引っ掛かっていた何かがとれた気がした。

「よし。じゃみんなのところに行くぞ」

一夏が手を差し出してくる。

「うん」

一夏の手を取り、歩き出す。

久しぶりに一夏と手を繋いで歩いた。あの日と同じとても暖かい手だった。

「美晴！大丈夫なの？」

シャルが心配そうな顔で聞いてきた。

「うん、大丈夫。ごめんね、心配かけたね」

うまく笑えているかな。

「いいよ。それで一夏となに話してたの？」

「それは…」

説明しづらいな。僕の素だし。

「シャルロットとラウラのことが大好きでどうしようって相談されたよ」

一夏が嘘をつく。ありがたいけど内容が！

「ちょっ！一夏！何言うのさ！」

「ねぇ美晴本当？」

「本当なのか？」

二人に純粋に嬉しいという目で見つめられると、

「うん…」

としか言いようがないじゃないか。

「そっかぁ。悩んでくれるぐらいかぁ。嬉しいねぇ」

うんうんと頷いている。

「で、結論は出たのか」

ラウラが一夏に聞いている。

「自分に正直になれってアドバイスしたよ」

ラウラの質問をうまくごまかす一夏。

「うん、一夏にしてはまともだったんだよ。一夏にしてはね」

小声でシャルに話す。

「う～ん、人にそういう割には一夏って気づかないんだよね」

「そうなんだよ、昔から」

シャルが話を信じてくれたから、僕もそれに乗っかった。

「なんの話してんだよ」

僕達の会話に気づいたようだ。

「「ひみつ」」

いつか自分で気づく気持ちが一番大切だと思うから…。

「みなさん、そろそろ旅館に帰りませんと夕飯が」

たたんだパラソルを持ってセシリアさんがやって来た。

「あ！僕達お風呂の時間が少ししかないんだった！」

「やばい！急がないと間に合わないぞ！」

全力で旅館へと戻る。うぅ、不便だなぁこの扱い。

第47話

こんばんは、美晴です。

今は浴衣に着替えて、大広間でみんなで夕食です。畳で正座席と、テーブルで椅子席の二種類が用意されてました。

僕と一夏と箒ちゃんはもちろん畳。セシリアさんとシャルもそれぞれ僕達の隣で畳。

「シャルは正座平気？」

普通西洋の人は嫌いなはずだけど、痛がるそぶりを見せない。

「うん。向こうで仕込まれたから」

「そう」

仕込まれたって言葉が哀しい。

それにしても夕飯は海の幸満載か。さすがに新鮮なものばかりだ。

アジやタイにカンパチ。コチの刺し身まであるなんて珍しい。

「うーん、おいしい。この本ワサがさらに味を引き立ててるなぁ」

かなりいいものを使ってるなぁ。辛みもいい感じだ。

「ねぇ美晴。本ワサって何？」

「あぁ、本ワサっていうのは本物のワサビってことさ。普段学校にあるのは練りワサビで、ワサビ以外にも発色や辛味を良くするために色々入ってる。西洋ワサビ使ってたりするしね。でもこれはワサビだけ。しかもこの辺りでとれたものじゃないかな。お刺身には重要な薬味だよ」

「へぇ。ボクも食べてみよう」

と、シャルは盛ってあるワサビを丸々口にする。

「そんなに食べると！」

「んっ！ぐふっ！～～っ」

涙を流してるシャル。いわんこっちゃない。

「ほ、ほいひいよ、本はは」

あまりの刺激に発音できてない。

「こんなときまで優等生発言しなくても…。しばらく待てばおさま

るから、我慢して？」
シャルの鼻を左手でつまんであげる。
「ふぁい」
「こうして少しずつのせて食べるのが正しいの。まぁ高めの授業料だと思えば、ね？」
空いている右手で手本を見せる。
「うん、やっとおさまった…」
こっちが片付いたと思ったら、
「どうしたセシリア。顔色悪いぞ。やっぱりテーブルの方がいいんじゃないか？」
こっちがあった。正座が限界なのかプルプルしている。
「だ、大丈夫ですわ」
弱さを見せないように取り繕っているが、どうみても空元気だ。
強がるセシリアさんを疑い、

「本当にか？」

ツンッと一夏が指で足を刺激する。

「ひゃぁっ！」

変な声を出してビクッとしている。

「ほらやっぱり。移った方がいいんじゃないか？」

「いえ！（この席を手に入れるために払った代価を考えれば…）」

一夏が心配した顔をしているが、セシリアさんは拒否をしている。

「一夏！女の子には色々あるの！」

シャルがセシリアさんをフォローする。きっと感じる部分があったのだろう。

「そうなのか。でも全然食べ進めてないし。よし。俺が食わせてやるよ」

一夏が箸が進んでいないのを見かねて提案するが、その行為が招く影響を考えていない。

「本当ですの？ではお願いしますわ！」
嬉しさで一杯な顔。こちらもおそらく想像していない。
「よしワサビは少なめで。セシリア、あ～ん」
「あ～ん」
一夏がお刺身を口に入れようとする。
「あ～ずるいセシリア！私も一夏君にしてほしい！」
僕としては予想通りの声が聞こえてくる。
「えっ！」
一夏の動きが止まる。
「私も！」
一人、また一人と一夏にせがむ。

「ボクは美晴に…」

小さな声で僕の浴衣の袖を掴んできた。

「シャルは帰ったらね」

「やった！」

みんなにばれないようにささやくと、シャルは小さくガッツポーズをしていた。

その間もギャーギャーと騒ぎは続く。

バンッときわめて大きな音と共にふすまが突然開いた。

「うるさいぞ！飯も静かに食えんのか貴様らは！」

千冬お姉ちゃんの怒声に、大広間は水を打ったように静まり返った。

「織斑一夏。貴様も余計なことをして騒動を起こすな！」

一夏を睨み付けた。

「すいません」

「まったく…」

千冬お姉ちゃんは戻っていった。

今日一のイベントを中止させられたセシリアさんは…、

「むぅ～っ」

ふくれながら一夏を睨んでいた。

「ごめんセシリア。埋め合わせと言っちゃなんだが、あとで部屋に来てくれ」

「ホントですの？」

パァッと笑顔に戻った。

「あぁ。あ、鈴と箒にも声かけてくれ」

「二人きりではありませんのね」

続けられた言葉にがっくりと肩を落としていた。

「一夏。シャルとラウラも呼んでいい？」
あれに混ぜないのはもったいない。
「あぁ。もちろんだ」
「だって」
「うん！行く！」
そのあとは静かに時間が過ぎていく。

セシリア達の部屋
ＳＩＤＥ　セシリア
まぁなんであれ、部屋に呼ばれたということは、それなりに期待しても良いということですわよね。
何かあるかもと期待してこの下着を持ってきてよかったですわ。これで一夏さんを…うふふふ。
「あ～っ、セッシーえっちぃ下着つけてるぅ」
着替えているところにのほほんさんが来られました。下着を見まし

たのね。

「ちょっとのほほんさん。覗かないでくださいませんか？」

「あっ本当だ。もしかしてこれ勝負下着？」

「黒のレース付きなんて何する気なの？」

谷本さんや鷹月さんまで…。

「答えないなら体に聞くまで！」

三人に飛び付かれました。

「ひゃっ！くすぐらないで！あはは、は、やめて、あはははは。ひゃうっ、もう、や、めて…」

廊下

な、なんとか逃げおおせましたが、ひどい目に遭いましたわ…。でもこれでようやく一夏さんの部屋に行けますわね。

あら、部屋の前にいつものみなさんが…。

「どうされましたの？みなさんふすまに耳など当てて」

「シーッ。静かに」

「はぁ」

シャルロットさんに静かにするよう指示されました。いったい何を聞いているんでしょうか。
私も聞いてみましょうか。

「なんだよ千冬姉。久し振りだから緊張してるのか？」

「何を言うか。緊張などするか。いいから早くやれ」

「はいはい。じゃいくぞ」

「んっ、気持ち、いい！そこ、そこだ！もっと強く！」

「千冬姉はここがいいんだよな」

「あっ、いい！あぁっ！そこ！も、もっと！」

ふすまの向こうのこの声ってまさか…。

「これって、ですわよね」

「そう、よね」

鈴さんも動揺してますわね。

「ふぅ。次は美晴だな。来いよ」

「え？僕はいいよ」

あ、続きが。

「いいから。ＩＳ学園に来てからやってなかったからな」

「…わかったよ。それじゃよろしく」

美晴さんまで…。これは先程よりもまずいのでは…。

「あっ、一夏！久し振りだから気持ち良すぎる！もうちょっと優しく！」

「何言ってんだよ。こんなに固くしておいて。そのままにしておけるか」

「…箒さん、鈴さん。お二人はまさか昔からそのような…」

幼馴染みでしたら少しは知っているのでしょうか。

「知らん！私は知らんぞ！」

「あたしだって全然！」

お二人とも強く、かつ小声で否定しています。

「しかし日本では昔から男色があるとクラリッサから教わったぞ」

ふすまから耳を離し、ラウラさんが真剣な目で語りだしました。

「本当ですの？ラウラさん」

「あぁ。有名な武将もやっていたらしい。証拠となる文献もあるそうだ」

となると、これが日本の伝統文化？

「イヤ、イヤだよ、美晴がそんなの…。ボクには全然手を出してくれないのに…。まさか一夏となんて…。我慢ならない！」

わなわなと拳を震わせていたシャルロットさんはふすまに突撃しました。その先には…。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

「あはははっ。それでみんなは僕と一夏がいかがわしい関係だと思ったの？んなわけないじゃん」

みんなして危機迫った顔でふすまを開けていたから何事かと思ったら、そんなことを想像してたんだ。あぁ、おかしい。

「だって、まさかただのマッサージだと思わなかったんだもん…」

シャルが恥ずかしそうにへこんでいる。

「誰だってあんな声を聞けばそう思うだろ！」

「そうよそうよ！」

箒ちゃんと鈴ちゃんにも責められる。

「いやぁ、僕も千冬お姉ちゃんも一夏のマッサージには弱くてね。ついああいう声になっちゃうんだ。ごめんね」

顔の前で小さく手を合わせる。

「私としては構わないがな。ある意味貴重だった。声はしっかり記憶したぞ」

ラウラめ、記憶力を無駄に利用するなよ。

「それじゃみんなにもマッサージするか。そのために呼んだんだからな。まずはセシリアからだ。ここに寝てくれ」

一夏は敷いてある布団をたたく。

「はい！よろしくお願いしますわ」

さっと布団に寝転ぶ。

「よし。じゃいくぞ」

一夏が腰の辺りを押し込む。

「あっ痛い！」

ちょっと強すぎたようだ。

「ごめん、少し弱めるよ。これで、どうだ」

今度は優しくゆっくりと押していく。

「あっ、気持ちいいですわ。んっ、あっ、とろけそう…」

顔はもうとろけている。

「セシリアもあんな声を出してる…」

シャルが小さな声で話しかけてくる。

「やっぱりゴッドハンドなんだよ一夏は」

「そうみたいだね」

「ん、ああっ、ふぅ、なんだか眠くなってきましたわ…」

睡魔ね、来るんだよね気持ちよすぎて。

「ひゃう！」

千冬お姉ちゃんがいきなりセシリアさんのお尻をわしづかみにした。

「ほう、黒のレースか。背伸びした下着をつけてるではないか」

千冬お姉ちゃんがセシリアさんの浴衣の裾をめくってる。

「見ちゃダメ！美晴！」

シャルに手で目を塞がれる。

「これで一夏を誘惑する気だったか。淫行を期待するなよ？１５才」

「い、淫行！」

姿は見えないけど、声でセシリアさんが慌ててるのがわかるなぁ。

「ふむ。よし。一夏、美晴。何か飲み物を買ってこい」

「「はいはい」」

なにかありそうだから素直に従うか。

第４８話

ＳＩＤＥ　千冬

「さて、一杯やるとするか」

部屋に備え付けの冷蔵庫からビールを取り出す。

「ぷはぁっ！うまい！」

やはり旅館と言えば酒だ。

「良いんですか先生。お酒なんか飲んでも」

デュノアか。相変わらず真面目だな。

「教師とはいえ飲みたくなる。それに口止め料は貴様らの手に」

「あっ」

事前にジュースを与えてある。飲んだ以上契約成立だ。

「さて、男共がいなくなったところで、ガールズトークといくか」

「ガールズねぇ…」
凰がチラリとこちらを見てくる。
「死ぬか？凰」
指の骨をならしていく。
「失礼しました！」
すぐに土下座をして来た。
「ふん。貴様らに比べれば幾分年は重ねているが、これでも乙女だ。まぁいい。ここにいる5人はいずれも私の弟に惚れているな。端からその理由を言え。篠ノ之」
「私はあいつがただ弱くなっているのが腹立たしいだけです」
「いまさら本音を隠す必要などない。本音を言え。もう一度！」
「…私は、あいつの真っ直ぐさに…」
こうと決めたらとことんそう進むやつだ。

「ふむ。馬鹿がつくほど真っ直ぐだな。凰」

「あたしは、優しさですかね。あたしがいじめられた時守ってくれたし」

その話は以前美晴から聞いた記憶がある。

「ふむ。確かに優しい。ただし誰彼構わずだがな。オルコット」

「私は一夏さんの強さです。今まで会った男性には無い意思の強さを持ってましたわ」

こいつの背景を考えれば一夏に惚れるのは当然か。

「ふむ。芯はとても強い奴だからな。よし、デュノア、ボーデヴィッヒ。お前達は美晴のどこに惚れた。」

「私は、美晴の優しさと時折見せる弱さに…」

ちっ。デュノアに甘えたことがあったのか。そのポジションは私だけのものだったのに。

美晴も階段を上っているのか。姉としては嬉しくもあり寂しくもあるな。

「ふむ。なるほどな。ボーデヴィッヒはどうだ」

「美晴は、私の明日を一緒に探してくれると言いました。だから、そばに居たいのです」

あのトーナメント以降変わったからな、あの時に言ったのか。

「そうか。あいつがな。ふむ。さて、それぞれの話を聞いたわけだが、確かに2人は優しく、気立てもよく、料理もできるし、一夏はマッサージができる。美晴は居るだけで癒され…んんっ。とにかくだ。これほどの優良物件はそう無い。どうだ、欲しいか」

「「「「「「くれるんですか？」」」」」」

五人とも乗り出してきた。

「やらん！」

きっぱりと言い切ってやった。当たり前だ。あいつらは私のものだ。

「「「「「「え～っ…」」」」」」

分かりやすいぐらいに顔が曇ったな。

「誰が可愛い弟を簡単に手放すか。私から奪い取るぐらいの気概を見せろ！自分を磨けよ？ガキ共」

「「「「「はい…」」」」」

ま、くれてやる気はさらさら無いがな。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

「どう？お話は終わった？」

こんばんは、美晴です。

一夏と一緒に自販機まで飲み物を買いに行ってました。

「ああ。意義深い話ができたぞ」

少し機嫌が良いみたいだ。

「そう。はいこれ。ビールは買えなかったけど」

みんなにジュースを手渡す。

「未成年が買える方が問題だからな。別に構わん。さて、そろそろお前達も部屋へ戻れ」

「「「「「はい」」」」」

5人はそれぞれの部屋へと帰っていく。

シャルとラウラを捕まえて、

「あとで話したいことがあるから、外に居て」

と、小声で伝える。

「わかった」

「うむ」

一夏も箒ちゃんに何か言ってる。今日誕生日だしな。

SIDE　一夏

さて浜辺に呼び出したはいいが、どうしたもんか。

「待たせたな一夏。用とはなんだ」

箒がやって来た。

「あ、あのさ、箒今日誕生日だろ。だからプレゼントをと思って…」

「覚えていたのか！」

ずいぶん驚いてるな。そんなに意外か？

「当たり前だろ。忘れねぇよ。七夕だからな、忘れようがない」

笹の葉を見るたび、頭をよぎっていた。

「そうか。覚えていたか…」

髪をいじりながら頬が赤く染まっていく。

「でな？これを渡そうかと」

前に買ったリボンを出す。

「ほら、そのリボンさ、俺が前にあげたやつだろ？だからそろそろ

新しいやつをな」

今でも大事につけていてくれるのはそれなりに嬉しい。

「ふむ。一夏。付けてもらってもいいか？」

「あぁ。いいぞ」

箒の後ろにまわり、リボンをつける。

「ありがとう。その、どうだ新しいのは。似合っているか？」

チラチラこちらをうかがいながら聞いてくる箒が可愛く思える。

「あぁ。すごく似合ってるぞ」

「そうか。大切にするからな！」

顔を近づけてきて、大声で言ってきた。

「そうしてくれると嬉しいな」

「…なぁ箒。俺剣道やめただろ？あれは箒が居なくなったからなん

だ」

せっかくだから、以前箒に話さなかった剣道をやめた理由を話す。

「そ、そうなのか？私のせいなのか？」

かえって動揺させちまったか。

「いや、箒のせいじゃない。俺の心の問題だ。箒がいなくなったら、なんか剣道する気になれなかったんだ。心に穴が開いたっていうか、喪失感っていうか、とにかくそれでやめた。今考えると俺は箒との練習が楽しくて剣道してたんだな」

剣道自体が好きだったんじゃない。それは確かだ。

「すまない。あのときは姉のせいでそうせざるを得なかったんだ」

要人保護プログラムが存在していることは今は知っているが、当時は何が何だかわからなかった。

「あぁ。事情はわかってる。だけど、せっかく再会できたんだ。今度は何も言わずにいなくなるなよ？」

また友達がいなくなるのは嫌だからな。

「約束しよう」

「よし。じゃそろそろ戻ろう」

俺達は旅館へ戻る道をたどる。

「そういえば箒。今日昼何してたんだ？あまり見かけなかったが」

歩きながら聞いてみる。浜辺では一度も見なかった。

「面倒な人に追いかけられていた。そのせいで…、一夏に、選んでもらった水着を見せられなかった…。はぁ」

束さんから逃げ回っていたのか。

「そうか、大変だったな。俺はちゃんと見てみたかったなぁ、箒の水着姿。今度見せてくれ」

箒が落ち込んでいるから、慰めがわりにそう言ってみる。

「あぁ！必ず見せてやる！」

箒は真っ赤になりながら答えた。

「そ、そうか。さてそろそろ戻るか」
箒が手を握ってきたので、そのままにして帰った。誕生日だ。恥ずかしいけどいつもみたいにあしらうのも…な。
ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

さて、シャルとラウラはいるかな…。居た。
旅館から少し離れた角で待っていた。

「お待たせ。ちょっと歩こうか」
二人を連れて海岸沿いを歩く。

「ごめん、そこに座ってもらえる？」
二人に防波堤に座ってもらう。その間に僕は座る。

「で、話とはなんなのだ」

「うん。シャルには前に話したけど、ラウラは僕の出生知ってる？」

「一夏や教官と血が、というやつだろう」

「知ってたか」

「我が隊は情報収集にも長けている。まぁ隊以外には極秘事項だがな」

それはありがたい。もし外に漏れていたら、僕の今は存在しなかった。

「そう。でね？そのことで僕ずっと不安だったんだ。血が繋がってない僕が居て良いのかなって。で、あのとき一夏と話したんだ。二人には嘘ついちゃったね、ごめんね？でも素を話すのって怖かったんだよ」

「ボクは美晴の全部を受け入れるよ？美晴はボクの全部を受け入れてくれたじゃない」

「私もだ」

二人とも優しい眼差しを向けてくれる。

「ありがとう。そこで一夏が言ったんだ。家族って、血の繋がりじゃなくて思い合って、支え合って、幸せを分かち合って。それが家族だ。だから誰がなんと言おうとお前は家族だって」

「ふむ。深いな」

「でね？僕思ったんだ。なら二人も僕の家族じゃないかって。ねぇ、どうかな」

二人の顔を交互に見る。

「嬉しいな。実際お母さんも死んで一人みたいなものだったし」

「私は今までそういう存在がいなかったからな、しかし美晴なら良いな」

「ありがとう」

二人を抱き寄せる。

「「美晴…」」

「ごめん。しばらくこうさせて」

今は少しだけ温もりが欲しい。

「「……」」

寂しさがスーッと引いていく気がした。

「うん、ありがとう。ところで二人は今日が何の日か知ってる？」

抱くのをやめて、質問してみる。

「あれだよね、七夕」

シャルが答える。日本の行事なのによく知ってたな。

「なんなのだそれは」

ラウラは知らないか。まぁ当然だな。

「うん。昔の伝説でね、思い合ってた神様がね、結婚したら相手のことが好きすぎて仕事をしなくなって、罰として1年に1回しか会えなくなっちゃったんだ」

確かこんな内容だ。

「哀しい話なのだな」
そう取ることもできるし、ダメな恋人と取ることもできるだろう。
「うん。で、後付けだけど、会えた二人は笹の葉に吊るされた短冊の願いを叶えてくれるんだって」
「でもここに笹無いよ？」
確かにそうだけど。
「だからそれぞれの願いを口で言おう」
このぐらい大目に見てくれないかな。
「ボクは美晴とラウラと一緒にいたい」
「私もだ。美晴とシャルロット、どちらも大切だ」
願いはみんな一緒か。
「僕も二人と一緒に居たい。あと守りたいな、みんなを。欲張りかな二つは」

でも二つとも僕は叶えたいんだ。

「きっと叶えてくれるよ」

「それほど厳しくはしないだろう」

「かな？だといいな。…今僕は二人に誓うよ。僕は二人の前からいなくならない。絶対に！二人が嫌と言えば別だけど」

「「言わない！」」

そろって言ってくる。

「これで成立か。色々あるだろうけど、よろしくね？」

「うん！」

「うむ！」

「じゃ戻ろっか」

僕達は寄り添いながら旅館へと帰る。

第４８話（後書き）

まだか。まだ美晴は戻ってこないのか。
久しぶりに美晴と一緒に寝られるというのに。
わざわざ布団をくっつけたのに。

「落ち着けよ千冬姉」

「落ち着いてられるか！美晴が私と寝るんだぞ！」

「一方的な期待だろ」

そうはさせるか。絶対に実現させてやる。

「ふふふ…。早く来い、愛しの弟よ」

「ダメだこれは。俺寝るわ。おやすみ」

一夏は布団を被った。

「あぁ、おやすみ。邪魔はするなよ」

「しねぇよ。ただ、明日は早いんだ。美晴に迷惑かけんなよ。嫌われるぞ」

うっ、仕方ない。今日は一緒の布団で寝るだけにとどめるか。

第４９話（前書き）

説明文で文字数稼いでます。

そこは飛ばしてください。

第４９話

おはようございます、美晴です。

２日目の朝なんですが、まさか僕が寝坊するなんて。

今急いで授業が行われる場所に向かってますけど、一夏達も起こしてくれれば良いのに！やばいよ、遅刻するなんてどうなることやら…。

「美晴、おはよう！」

シャルとラウラも廊下を走っていた。

「おはよう！もしかして二人も？」

「うん、寝坊しちゃって」

「昨日遅くなっちゃったからなぁ、あれが原因だね」

何だかんだで着いたら０時過ぎてたし。あのあとかなり叱られた。

「たぶん、ね。ラウラなんかさっきから震えて焦点が定まってないんだよ」

ふとラウラを見ると、

「15年で死ぬのか…」

一心不乱に走りながら、自らの命の残りの少なさを嘆いていた。
ドイツ時代のことでも思い出したのだろうか。

浜辺

ここはＩＳ学園所有のビーチらしい。
これからやることは非限定空間での飛行及び武装実験。つまりは広いところでやってみようよ、というわけ。
色々危険が伴うから、先生達は周囲の警戒を怠ってはいけない。
昨日はそのための打ち合わせをしていたようだ。

「遅刻者！前へ出ろ！」

僕達三人は一糸乱れぬ隊列で出頭する。
ええ、遅刻しましたよ。わかりきってましたけど。

「昨日遅くまで起きているからだ！馬鹿者共が！」

「「「すみません」」」

「罰が必要だな」

こちらへ近づいてくる。ゆっくり歩いてくるから余計怖さを感じる。

「ひっ！」

ラウラが極度に怯えた表情をしている。

「取って食いはしない。そうだな、ＩＳのコア・ネットワークについて説明しろ、ボーデヴィッヒ」

今回は腕力に訴えたりしないようだ。千冬お姉ちゃんにしては平和的な罰だ。

「は、はい！ＩＳのコアはそれぞれが相互情報交換のための通信ネットワークを持っています。元々は広大な宇宙空間における、相互位置情報交換のために設けられました。今では、オープン・チャンネル、プライベート・チャンネルによる操縦者同士の会話など通信以外にも用いられています。また、『非限定情報交換―シェアリング―』をコア同士が各自に行うことで、様々な情報を自己進化の糧にしていることが近年の研究で判明しました。これらは制作者である篠ノ之束博士がＩＳの自己発展の一環として無制限展開を許可し、コアはいまだ進化の途中であると見られており、その全容は未だつかめていません」

「よし、さすがに優秀だな。ボーデヴィッヒはこれで済まそう」
ラウラは胸を撫で下ろしていた。

「デュノアはコア・ネットワークの他の特徴と、ＰＩＣの解説をしろ」

「はい。互いの位置を恒星間距離においても正確に把握する必要から、それぞれのお互いの位置を認識しあえる特徴を持っています。ただし、正確な座標を割り出すにはお互いの許可登録が必要です。ＰＩＣですが、物体の慣性を無くしたかのような現象を起こす装置です。これと肩部にある推進翼と、任意装備の小型推進翼を使って、姿勢制御、加速および停止などの３次元的動勢を行うことができます」

「よし、的確だ。最後に織斑美晴。お前はＩＳ運用条約の操縦者育成機関についての項を暗唱しろ。授業で教えた抜粋部分だけでいい」

「はい。ＩＳの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営及び資金調達は原則として日本国が行う義務を負う。ただし、当機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産として公開する義務があり、また黙秘、秘匿する権利は日本国にはない。また当機関内におけるいかなる問題にも日本国は公正に介入し、協定参加国全体が理解できる解決とすることを義務付ける。また入学に際しては協定参加国の国籍を持つ者には無条件に門戸を開き、また日本国での生活を保障すること」

あぁ長い。

「よく覚えていたな。これで3人への罰は終了だ。列に戻れ」

「「「はい」」」

手で払うように指示をする。なんとか生き残ることができた。

「諸君も遅刻はしないように。それでは本日の内容だが、各班ごとにＩＳの装備テストを行え。専用機持ちはそれぞれの追加パーツのデータ取りを実施しろ。篠ノ之もこっちへこい」

今日の概要を説明されるが、二点不思議なことがある。

「あの…僕達にはパーツはないはずですが…。それに箒ちゃんは」

一点目はシュッツェンと白式は束さんが作ったものだから、基本的にパーツは存在しない。もし追加パーツがあるとしたら事前に連絡がある…とは思えないな。束さんだし。

二点目は箒ちゃんは専用機持ちではない。呼ばれたところで出来ることがないはずだ。

「それか。それについては…」

千冬お姉ちゃんが説明しようとすると、どこからかドドド…と地面を揺らす音がした。なんの音だろうか？
千冬お姉ちゃんが近くにあった崖を見ていた。

「ち～ちゃ～ん！」

崖をかけ降りてきたのは束さんだった。そしてこちらへ駆けてくる。
走って土煙巻き起こすのなんて、本当にあり得るんだ…。

「あいつは…」

千冬お姉ちゃんは頭に手を当て深いため息をついた。

「ち～ちゃ～ん！会いたかったよ～！さぁ久しぶりの再会を祝ってハグしよう！」

束さんは千冬お姉ちゃんに飛び付くが…。

「痛い痛い！ちーちゃん、愛が痛いってば！」

千冬お姉ちゃんはアイアンクローで束さんを引き剥がし、そのまま空中に吊るし上げる。

「何が愛だ！毎度毎度貴様は！」

ミシッと何かがきしむやばい音がした。

「ミャーッ！割れる割れる！頭が割れちゃうよー！」

必死にもがき手をはずそうとするが、化け物じみたその右手は全くといっていいほど緩まない。

「一度割ってしまえ！４つになった脳でさらに効率が良いぞ」

さらに力を強めたのか、頭部に指が食い込み始めていた。

「あぁ確かに、って力を強めないで！ニャーッ！天才の頭脳がー！」

「うるさい！黙れ！」

ボキッという音がした。…折れたのだろうか。

「ニャッ！」

「……」

束さんは悲鳴の後、ダラリと腕を下にたらして動かなくなった。

死んだか？

「隙あり！とうっ！」

束さんは死んだ振りをしていただけみたいだ。千冬お姉ちゃんの手から逃れ、後方３回転宙返りで着地。

「篠ノ之束、１０て～ん！」

ブイッ！とピースしている。というかあの状況でよく生き延びて、また後方宙返りなんて高度な技ができますね。この人を常識で測ろうとすること自体が無駄なのだが。

「あの…、ここには関係者以外立ち入りをご遠慮願っているんですが…」

山田先生が目の前にいる不審人物に声をかける。

「何を言ってるのかな？このおっぱいおばけは。ＩＳの関係者っていったら私が一番だよ？」

冷徹な目できっぱりと言い放つ。

「確かにそうですけど…。おっぱいおばけ…うぅ」

言い負かされた上に変なあだ名をつけられてへこんでいる。

「束。生徒が混乱している。自己紹介ぐらい知ろ」

周りを見れば、あまりにハイスピードで、訳のわからない展開に他のみんなはついてこれてない。まぁ無理もないけど。

「え～っ？めんどくさい。しょうがないなぁ。はろはろ～。天才篠ノ之束さんだよ～。以上」

それだけか。

篠ノ之束の名に周りはざわめくが、そんなのはお構いなしに進める束さん。他人嫌いは相変わらずだ。

「やぁ、いっくん、ミハちゃん。うんうん。相変わらず可愛い女の子だね、ミハちゃん」

近寄ってきて会心の笑顔で言われる。

「これですか？この口が言ったんですか？」

笑顔がムカついたので束さんの口を手で思いっきりわしづかむ。

「むーっ、いはいいはい！」

手をバタバタとさせ抵抗の姿勢を見せる。こちらも束さんも半分遊びだが。

ただこのまま遊んでいるのも面倒なので手を離す。

「痛いよミハちゃん。最近ちーちゃんに似てきたんじゃない？」

両頬を手でさすっている。

「そうですかね、きっと東さんへの対処法を学んだんですよ、お姉ちゃんから」

まともに取り合うな、向こうから来たらカウンター。

「もう。優しくしないと東さん拗ねちゃうぞ？」

「えぇ。地面にのの字でも書いててください」

「がびーん！いっくんいっくん！ミハちゃんが冷たいよぉ！」

今度は一夏に泣きついた。

「はいはい」

一夏はよしよしと頭を撫でている。そうして甘やかすからあとあと大変なんだよ。

「さぁてと。お久し振りだね箒ちゃん。愛しのお姉さんだよ～！」
一夏と遊び終えた束さんは、今度は箒ちゃんに向かっていく。
「…ひ、久しぶりです姉さん」
ん～ぎこちない。無理もないか。
「しばらく見ないうちに大きくなったね～。特におっぱいが」
言った直後に鈍い音と共に、束さんの頭から煙が出てきた。
「そういうことを言うと殴りますよ？」
「殴った～。殴ってから言った～。う～」
頭を抱えながら、箒ちゃんをちらちら見ている。
「束さん。今日は何か目的があるんでしょ？」
もうこれ以上この人を野放しにできない。この場がぐっちゃぐちゃになる。

「そうそう！まずはね～」

と言いながら、束さんは色々な機器を取り出す。

今日は一波乱ありそうだ。

第５０話

おはようございます、美晴です。

束さんが大量の機械を出し終えたようです。

「んじゃね、まずいっくんとミハちゃんのＩＳのデータを取りたいから展開してもらえるかな？」

僕達はＩＳを展開する。そうすると束さんがケーブルを繋ぎ、超高速でタイピングをし始めた。

「ふーん、二人のはフラグメントマップが他のとはやっぱり違うんだね。男の子だからかな？」

フラグメントマップは人間で言うところの遺伝子配列。といっても決まった形はなく、コアがパーソナライズされ、進化する過程でそれぞれの形に発展していくようだ。

「束さん。僕達がＩＳ動かせるのは何でですか？血が関係するなら僕は…」

一夏にはその可能性があったとしても、血がつながっていない僕にはその仮説は適用できない。

「うーん、それが私にもわからないんだよね。だけど動かせる以上、私は協力するよ」

大量のスクリーンが現れては消え、また現れて。それを容易く処理していく束さん。そんな束さんにもわからないんだ、ＩＳの制作者にも…。ＩＳは深いなぁ。

「ふむふむ。なるほどねぇ。ねぇ、ミハちゃん。ちょっと設定いじってもいいかな？」

スクリーンの山から顔を出し、束さんが聞いてくる。

「何をするんですか？」

「うん、最近のミハちゃんの戦闘を見てるとね、技量も上がってきたしそろそろ機動を速くしても良いかなって思って」

いつ見てたんだ？やっぱり監視されてるのか？この人なら…。

「今までかけてたリミッターをカットするだけだから、それほど操縦性に変化はないはずだよ？」

「じゃあお願いします」

変化がなくて能力向上なら、何ら問題ない。

「は～い」
またも大量のスクリーン。
「終わったよ～。あとで試してみてね～」
しかし五秒ですべての処理が終わったようだ。
「じゃあ次は箒ちゃん！」
「できたんですか！」
大声でそう叫ぶ。
何ができたのだろうか。
「もっちろ～ん！お姉さんに不可能はない！それじゃあ出すよ～」
空中からコンテナが出現し、中から紅いＩＳが出てくる。
「これが箒ちゃんのＩＳ紅椿だよ～。現行の全てのＩＳのスペックを凌駕する、お姉さんの自信作！箒ちゃんの基本データは入れてあるから、あとは微調整だけだよ。体を紅椿に預けてくれるかな？」

「はい…」

箒ちゃんが紅椿に体を預け、束さんが高速タイピングで紅椿の調整をしていく。

「何よ、篠ノ之博士の妹だから専用機なの？」

「不公平よね」

何人かが不満を漏らす。わからなくはないが、箒ちゃんもそれ故に苦労してきたのだ。

「な～にを言ってるのかな？人類が有史以来平等だったことなんてないんだよ？」

タイピングを続けながらその不満を真っ向から論破。すごいなこの人は。

「は、博士に私のブルー・ティアーズを…」

セシリアさんが束さんに話しかけようとしている。

「ダメだセシリアさん」

僕はセシリアさんの肩をつかみ制止する。

「なんでですの？」

声から少し不満が見える。

「束さんは僕達姉弟と、箒ちゃん以外は存在を認識する気がない。自分の親ですらギリギリだ。話しかけたところで人間扱いされずにあしらわれるだけだ。止めておいた方がいい」

今までそうして何人が痛い目を見てきたことか。それをセシリアさんには味わわせたくない。

「そうなんですか…天才って難しいんですのね」

諦めてはくれたみたいだ。

「うん。でもあの人はどちらかというと孤独なんだ。色々あったからね」

「そう…ですか」

理解しづらいだろうな。でもＩＳによって束さん含め周りの人も大変な目に遭ったんだ。箒ちゃんが束さんを嫌ってるのもそこら辺が原因だ。

「よし終わった。箒ちゃん、少し飛んでみようか。箒ちゃんの思いに確実に答えてくれるよ」

所要時間3分でフィッティングとファーストシフトが終了。この人にかかれば造作もないんだろう。

「はい」

箒ちゃんが目を閉じ念じると、一瞬にして上空へ飛び立った。

「速い…」

誰かが呟いているが、速すぎるが正しいんじゃないか？
そのまま空中を様々な姿勢を取りながら飛んでいるが、極めてスムーズ。意思のラグはまったく無いようだ。

「それじゃ箒ちゃん。次は武装のテストをしよう。これを全弾落としてね？」

と言うと同時に量子変換され出現したミサイルポッドから２０発以上のミサイルが放たれる。
何て危ないものを持ち歩いているんだ。常識が通用しないのはイヤと言うほど知ってはいるが。

「まずは雨月を出して。突きに反応するよ～」
突きをするとそこからエネルギーが放たれ、ミサイルが数発撃破される。どちらかというと射撃兵器みたいな攻撃だ。

「次は空裂で攻撃してみよう。斬撃に反応するよ～」
今度は横薙ぎの斬撃を放つ。薙いだ範囲と同じだけのエネルギー波が放たれ、全てのミサイルが撃破された。

「どうかな箒ちゃん。お姉さんが作った紅椿は」

「すごいですよ姉さん！これがあれば私は存分に戦える！ありがとう姉さん！」

「喜んでもらえたなら私も嬉しいよ」
束さんは笑顔で返事をしている。
しかし、周りはその強大な力に半ば恐怖している。誰も声をあげていない。

そんな状況が一変したのは、山田先生が走って持ってきた一通のメールだった。

「お、織斑先生！大変ですー！」
いつものようにわたわたとした走りで、千冬お姉ちゃんに端末を見せる。

「特Ａランク任務…」
しばし端末を見ていたが…。

「授業は現時点をもって中止する。生徒は旅館へ帰り、各自の部屋から一歩も出るな。専用機持ちは私のもとへ集合しろ。山田先生、何人いるのだ」
表情が変わり、矢継ぎ早に指示を飛ばしている。専用機持ちが残されるということは、何らかの事件だろうか。

「一人欠席していますので、全部で七人です」

「そうか。各自速やかに行動しろ！」
生徒達は突然の事態に困惑しながらも、指示通りに各自の部屋へと戻っていった。

旅館の一室

「先程アメリカとイスラエルの共同開発された軍用ＩＳ、銀の福音―シルバリオ・ゴスペル―通称福音が実験中に暴走、実験空域を離脱しこちらへ向かっているとのことだ。ネットワークは遮断され、外部からの連絡をすべて受け付けていない。国際ＩＳ委員会から命令が下り、ＩＳ学園の専用機持ちで対処に当たれとのことだ。危険は確実に伴う。お前達は軍人ではない。拒否権がある。嫌なら出ていっても咎めない。どうだ」

「「「……」」」

誰も出ていかない。

「そうか。であれば作戦説明に入る。福音は現在マッハ２の超音速で移動している。今から９０分後にこの海上の空域に到達すると見られる。お前達にはここで迎撃してもらう。海上と空域は教師陣によって封鎖する。航空機や船舶は侵入させない」

「先生。撃墜対象である福音のデータの開示を求めます」

セシリアさんが発言する。

「要求はもっともだ。ただし今から開示する情報は極秘事項だ。お前達には守秘義務が発生する。もし口外した場合、お前達は裁判にかけられ、最低３年は監視がつく。それを自覚した上で見ろ」

データが僕達の端末へ送られてくる。

「何だこのスペック！なんという機動力！」

データ上の数値ではシュッツェンの機動性は遠く及ばない。

「それよりも美晴。この攻撃力見なさい」

鈴ちゃんが指摘してきた部分を見る。

「３６門同時展開の砲撃可能！何だこれ！広域殲滅なんてもんじゃないぞ！」

攻撃手段はエネルギー弾。それを最大３６門。ＩＳ一機の装備と呼べるものではない。

「そうだね、正直ボクのじゃきついかも」

シャルが本音を言う。いくら専用機とは言え、シャルのラファールは第二世代。このスペックの相手と戦うのは無茶と言える。

「もしやるとするならさ、高速機動できる機体と」

「一撃で仕留められる攻撃力を持った武器、ということだな」
ラウラが僕の言葉に続ける。やはり共通の認識か。

「一夏。また一夏にやってもらうことになる。僕もやれるだけやるけど」

「それはかまわねぇが、どうやってこの空域まで移動するんだ？白式のエネルギーは温存しておいた方が良いんだろ？」

「確かに…」
零落白夜に賭けなきゃいけない以上、エネルギーを温存して何度も仕掛けられるようにしたい。

「それなら私の追加パーツが適任ですわ！高速機動用のパッケージです」

「それはすでに量子変換が済んでいるのか？」
千冬お姉ちゃんが質問する。パーツはインストールした上で、量子変換させないと使用することはできない。

「いえ、まだです…」

インストールするには時間が短すぎた。あと数時間遅ければ何とかなっていたかもしれない。

「ならばダメだ。どうしたものか…」

部屋に重い空気が漂っている。

「今こそ紅椿の出番だよ～！」

天井の板をはずし、その穴から飛び降りてきた束さん。忍者か。

「山田先生、こいつを外につまみ出せ」

クイッとアゴで山田先生に指示を出した。

「ちょっと待ってよちーちゃん。白式を運ぶのは紅椿にお任せあれ！紅椿なら高速で白式を運んでいけるよ。もともと共同での運用を考慮して設計したからね」

「本当か？紅椿のパッケージの調整はいつ終わるのだ」

「私の手にかかれば5分もあれば充分！それにこの紅椿はパッケージの換装を必要としない、第４世代ＩＳだから！」

その発言に部屋が凍りつく。各国が死に物狂いでようやく開発した第3世代。フランスなんか開発できなくてシャルを送り込んだくらいだ。その努力をこの人は一瞬にして凌駕した。意味のないものにしてしまった。

「…今の発言も口外は禁止する」

正解だと思うよ。

「ちなみに白式にも技術が一部使われてるからね、第4世代試作機といったところかな。シュッツェンはビーム兵器を実現させるために作った機体だから、ある意味第5世代に近いかもね」

シュッツェンが一番危ない存在なのか。

「もう言うな。それよりも頼むぞ束」

「おまかせあれ～。あ、ちなみにシュッツェンもリミッターカットしたから紅椿と同じスピードが出せるよ。その分、シールドエネルギーが低下してるから出撃は気を付けてね」

それならなんとか機動力の差は埋められるか。ただシールドエネルギーが少ないってことは、当たったらほぼ終わりだ。気を付けなきゃ。

「ということでだ、今から３０分後に織斑一夏と織斑美晴と篠ノ之に出撃してもらう。時間になったら浜へ行き、出撃だ」

「「「了解」」」

「以上、解散！各自準備を整えろ！」

箒ちゃんは束さんのもとへ。他は待機する。

「美晴。大丈夫だよね？」

シャルが心配してくる。不安そうな顔をしていた。

「大丈夫、シャル。必ず倒してくるから」

シャルの頭に手を置いて、安心させるように優しく言い聞かせる。

「倒してちゃんと私達のところへ帰ってこい」

ラウラが横から僕の言葉を修正させる。

帰って…か。倒すだけじゃダメだよね。帰ってこないと。

「ラウラ…。そうだね。うん、必ずちゃんと帰ってくるよ。だから、

いってきます」

僕は二人を抱き締め、そして浜へ向かう。

やってやりますか！

第５１話（前書き）

５０話行ってたんですね。いつの間に…。

今回は福音と戦います。福音の攻撃は想像かつ創造ですのでよろしくお願いします。

第５１話

こんにちは、美晴です。

出撃のために浜へ来ています。それぞれＩＳを展開して、作戦開始時刻を待っています。

「相手は強敵だ。二人とも油断するなよ」

一夏が油断しないよう、釘を刺してくる。

「そうだね一夏。スペックを見る限り油断できない」

一瞬の隙や、ほんのわずかな油断で状況は一変させられてしまうだろう。

「二人とも不安に思う必要がどこにある。私とこの紅椿が作戦に参加するんだぞ。負けるはずがないだろう」

箒ちゃんがどことなく浮かれている。紅椿を手に入れたことで、自らの力を過信しているのか？

「福音は予想進路上を飛行している。予定通りに作戦を行う。三人ともいいな？」

千冬お姉ちゃんから通信で作戦指示を与えられる。予想進路通り…、作戦も予定通り進んでくれるとありがたいが。

「「「はい」」」

「なお、本作戦の現場における指揮権を織斑美晴に預ける。危険と判断したら即時撤退しろ」

「「了解」」

責任が重いが、信頼された以上答えなければな。

「大丈夫ですよ千冬さん！」

自信満々に大丈夫と口にしている。

「…そうだな」

「一夏、美晴」

僕達にしか聞こえないように通信を切り替えて千冬お姉ちゃんが話しかけてくる。

「わかってるよ千冬姉」

一夏も言いたいことに気づいているようだ。

「うん、明らかに箒ちゃんは自分の力を過信している。気を付けるよ」

突出した行動をとられたら多対一の意味がなくなってしまう。

「そうか。頼んだぞ」

「「了解！」」

作戦が開始され一夏は紅椿に抱えられて、僕はシュッツェン単独で移動する。

紅椿は先程通り高速で飛行していく。シュッツェンもそのすぐ隣を飛行していく。

「すごいなリミッターカットって…」

思わず独り言を言ってしまうぐらい今までとは比べ物にならない飛行速度だ。

「そろそろ作戦空域に着くぞ」

一夏の言葉に緊張感を取り戻した。しばらく進んだところでセンサーが福音を捉えた。

「福音を確認した。一夏。どうやら向こうはこっちを確認していないようだよ。今がチャンスだ。零落白夜で仕掛けて！」

「了解！仕掛ける！」

一夏は紅椿を離れ、一気に加速した状態から福音に零落白夜で攻撃を仕掛けた。

「喰らえ！」

一夏が雪片を振るが…。

「なんだと！」

福音は、一夏の攻撃を寸前で高速で移動し回避した。一撃で決まる可能性は低いとは思ってはいたが、まさかここまできれいに回避されるとは予想していなかった。

『敵性反応を確認。迎撃モードに移行します』

電子音で作られた人の声でそう言った途端、福音からウイングスラスターが出てきて砲門、銀の鐘―シルバー・ベル―を展開した。

一気に殲滅する気なのか、３６門もの砲門から一斉にエネルギー性の弾が発射される。

「くっ、何て量の攻撃だ！弾幕張られたなんて言ってられるレベルじゃない！一夏！箒ちゃん！当たるな、全弾を回避して！」

機動性が持ち味のこの三機ですら、飛び込むのは不可能。距離をとりつつ、生まれた隙間を見つけて回避し続けるしか今は選択肢がない。

「箒ちゃんは少し離れてて！」

逆三角形のような布陣をとる。

「私も前線に出る！」

箒ちゃんは自身も戦闘に参加したいと主張する。だが、

「まだ箒ちゃんは紅椿を慣熟しきっていない！高速戦闘は無茶だ！」

僕はつっぱねる。今の状況では箒ちゃんはまだ技量が不十分だ。

「どうするんだ美晴！近寄らなきゃ俺は攻撃できないぞ！」

一夏が雪片を持ったまま、僕に文句を言ってくる。近接型の一夏に

は広域型は厄介な相手だ。

「わかってる！僕が突破口を開く！」

意を決して福音に接近。福音は砲撃を続けて放ってくる。

「やるしかないだろー！」

弾と弾の間を縫うように移動しながら、福音にビームライフルを放つ。

「これでもダメか！」

ビームライフルもすんでのところで避けられた。本当に中に人間が乗っているのか？いるとしても意識はないんじゃないか？そう疑いたくなるほど、操縦者の生命が明らかに危険だろうと思われるほどの回避速度だ。イグニッション・ブーストと同程度の急加減速を常に行っている。

「くっ、これが避けられるとなると…」

「美晴！なんとか飛び込めないか？」

一夏が聞いてくるが、

「格闘性能に関しての情報は載ってなかった。どんな武器があるかわからない以上、極度には近寄れない！」

接近した瞬間、思いもよらない武器で攻撃をされるかもしれない。全容がつかめない今は、距離をとって射撃をするしかない。

「これならどうだ！」

レールガンを発射し、回避するだろうと思われる左右に、グレネードをそれぞれ放つ。これなら逃げ場は無いはずだ！

「なんだよこれも避けるのかよ！」

回避地点の予想は当たっていたが、グレネードの着弾寸前にもと居た位置へ戻っていた。

「だろうと思ったぜ！」

その行動をなぜか読んでいた一夏が雪片で攻撃を仕掛ける。

「行けー！」

ガキンッ！

福音は右腕の装甲で一夏の攻撃を防ぐ。

「まだまだー！」

一夏はそのまま雪片を押し込む。

鈍い金属音が聞こえ、福音の装甲が破壊された。やっとダメージを与えられた！

『％♪！？※％』

言葉になっていない音と共に福音が後退する。

「今がチャンス！」

僕はライフルを連射。最後に撃った一発が福音のウイングスラスターにヒット。スラスターの一部にダメージを与え、何門か潰したようだ。

「さっきの読みナイスだ！一夏！」

「おうよ！美晴もよく潰したな！」

親指を立て、互いの判断を誉めた。

「うん。でも次が来る！気を付けて！」

福音はそれでも大量のエネルギー弾を撃って来る。
でもさっきとは違う。ダメージは与える事ができた。このまま耐えれば、またダメージを与えることができるかもしれない。
今は待つんだ！

―海域内に船舶を確認―
センサーが船を確認したと報告してきた。

「船？確か先生達が海上封鎖したんじゃないの？」
船籍のデータを照合するためにネットワークにアクセスする。

「データ無し？密漁船か！」
くっ、計画が狂った。ここで民間人を巻き込む訳にはいかない。

「一夏！箒ちゃん！撤退する！あの船を巻き込む訳にはいかない！今度は七人で来よう！」
正直僕や一夏のエネルギーも長期戦に耐えられるほどもう量は残っていない。

「わかった！美晴に従う！」

「私は納得がいかない！ここまで来ておいて犯罪者をかばって撤退だと？」

箒ちゃんは僕の指示を拒否した。犯罪者をかばって…。明らかに周りが見えていない発言だ。

「犯罪者なら死んでいいって言うの？今ここで彼らが死んだら原因は僕達だ！人殺しの遠因になりたくはない！」

福音や僕達の攻撃の流れ弾に当たったのなら、僕達が直接手を下したようなものだ。

「それでも納得いかない！もういい！私だけで仕留めて見せる！」

箒ちゃんは福音にまっすぐ突っ込む。

「箒ちゃん！」

「箒！」

僕達の制止を振りきり、箒ちゃんは攻撃を仕掛けていく。

雨月と空裂を使い、エネルギー攻撃を仕掛けている。しかし福音はそれを回避し、シルバー・ベルで反撃する。紅椿はその高い機動力で回避し、再び攻撃している。

「どうするんだ美晴！」

一夏は慌てている。

「一人で戦わせるわけにはいかない！やるしかないだろ！」

僕と一夏も再び福音へ攻撃を仕掛ける。さっきのダメージがあるのかほんのわずかだが、回避が遅くなっている。

「やはり倒せるのだ！このまま！」

箒ちゃんは一気呵成に攻撃している。ただ、エネルギー攻撃と高速機動を繰り返した紅椿は、

「エネルギー切れだと？！」

エネルギーを使い果たしていた。

何も考えずにエネルギーを使っていれば、いずれこうなる。一夏ですら今は配分を考えて動いている。

だから箒ちゃんは技量不足だと判断したんだ。機体性能を過信し、それに伴うデメリットを見ようとしなかった。

『Ｌａ♪…』

エネルギー切れで動きが急激に止まった箒ちゃんに福音は狙いを定め、シルバー・ベル全弾を撃った。

「やばい！」

僕はイグニッション・ブーストで箒ちゃんの前へ移動しシールドを構える。

「美晴！何を！」

箒ちゃんが驚いている。

「僕はね箒ちゃん。昨日みんなを守らせてくださいって願ったんだよ。ふふっ、意外に早く叶えてくれるんだね、織姫と彦星は…」

眼前には大量のエネルギー弾。あぁ、シールドもどうせもたないんだろうなぁ。

「「美晴ぅぅぅ！」」

二人の叫びが聞こえる。目の前の閃光に包まれて、僕の記憶は途切れた。

ＳＩＤＥ　一夏

信じたくない。美晴が墜ちたなんて…。でも確かに美晴が今俺の目の前で撃墜されて、海に落ちた…。
福音は…逃げていった。
今やるべきことはひとつだ。
俺は海から美晴を引き上げ、千冬姉に通信を入れる。

「…千冬姉。美晴が…墜ちた」

「あぁ。こちらでも確認した。…帰投しろ」

レーダーで確認できたか。普段は強い声ばかりな千冬姉の声もさすがに弱い。

「了解…」

「私のせいで美晴が…」

箒は震える手を見つめながら、ただそう呟いた。

「帰投命令だ、戻るぞ」

美晴と、焦点が定まっていない箒を連れて俺は帰投した。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

第５２話

ＳＩＤＥ　一夏

連れ帰った美晴を千冬姉に引き渡した。一命は取り止めたとのことだ。
話によるとＩＳの救命領域対応により生命は保護されたが、全エネルギーをそれに費やしたために、エネルギー回復まで昏睡状態に陥っているようだ。
今はシャルロットとラウラが付き添っている。
帰って来た直後は大変だった。シャルロットの取り乱し様がすごかった。

「美晴！美晴！起きてよ！目ぇ覚ましてよ！うぅ、何でこんなことになったのさ！」

美晴にすがり付きながら、わんわん泣いていた。やっぱり何故こんなことになったのか知りたいよな。

「すまない、私のせいだ。私が力を過信したせいで美晴が…すまない」

箒がシャルロットに頭を下げていた。箒も涙を何とかこらえているようだった。

「返してよ！美晴は…ボクの居場所なんだ！返して！ボクの居場所を返してよ！」

箒に掴みかかり、激しく揺さぶる。箒は一切の抵抗を見せない。

「よせ！シャルロット！」

羽交い締めのようにしてシャルロットを箒から引きはがす。

「何で止めるの？！美晴がこうなったのは箒のせいなんでしょ！一夏は美晴が心配じゃないの？！」

シャルロットは泣きながらこちらを睨み激しい怒りの表情を見せていた。

「心配だよ！心配だけど、箒を責めたところで解決しないだろ！」

箒を責めて美晴が目を覚ますんだったら俺だってそうしたかもしれない。でもそんなことはない以上、責めたってただ相手を傷つけるだけだ。

「だって、だってぇ…」

泣いているシャルロットのほほをラウラがひっぱたいた。きれいに振り抜かれた平手にシャルロットは呆然としていた。

「落ち着けシャルロット！美晴は昨日私達に誓っただろう！絶対に私達の前からいなくならないと！お前は美晴のことが信じられないのか！」

ラウラもそう言いながら、涙目で拳を震わせていた。自分にそう言い聞かせることで、何とか保っているのだろう。

「ぐすっ。うぅ…ラウラ…。そう…だよね。美晴はボク達と誓ったんだもんね…、美晴、誓いを破らないよね」

「あぁ。織姫と彦星の前で誓ったのだ。美晴が破るなんてことはない。だから今はそばにいよう」

「…うん」

ラウラに肩を支えられ、シャルロットは美晴が運びこまれた部屋へと向かった。

「……」

それを見ていた箒は、どこかへフラフラと歩いて行った。

そして今に至る。箒の後を追いかけたかったが、今、俺は千冬姉に

報告をしているからそれができない。

「…というやり取りの後、美晴が箒の盾になったというわけです」

何故美晴が箒をかばうことになったのか、経緯を説明していく。

「そうか。敵の攻撃をほぼ全て受けたのだな。あの状況も頷ける。よし。報告はもういいぞ」

「な、なぁ千冬姉。美晴大丈夫だよな」

大丈夫だと思ってるさ。だけど、もう一人から、いつも一緒にいた姉からその言葉を聞きたかった。

「疲れたから寝ているだけだ。きっとそうだ。…一夏。私達が不安な顔をしていたらあの連中はさらに混乱する。辛いだろうが、できるだけ平静を装ってくれ」

千冬姉の声は普段より少し落ちていた。顔には出さないようにしているみたいだ。

「あぁ。何せ美晴は俺達の弟だ。何食わぬ顔で起きてくるさ」

あれ？みんなどうしたの？なんて気の抜けるような言葉と顔できっと起きてくる。いつものように。

「そうだな」

あいつは強い。そう、いつだって。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

砂浜

ＳＩＤＥ　箒

美晴が墜ちた…あれは私のせいだ。私が力を過信したせいで美晴があんな目に…。

紅椿を手に入れたとき、私はあの力に心を奪われた。この力さえあれば何でもできる。どんな敵にも負けることはない、そう思っていた。確かにあの力はすごい。すごいが、それに追い付く精神が私に無かった。美晴の指示は的確に私の慢心を見抜いていたのだろう。私が欲したのは一夏達を守る力であって、傷つける力ではないはずだ。暴力ではない、意思を持った力だ。

六年前、姉さんがＩＳを作り出したことにより、私は一夏達と離れざるを得なくなった。正直姉さんを恨んだ。ＩＳさえ無ければ、私達家族はバラバラになることもなく、一夏達と離れる必要も無かったからだ。

それも転校を繰り返していくうちに諦めにも似た気持ちで受け入れ始めていた。

ただ、剣道だけはやめることはしなかった。一夏との繋がりを無く

したくなかったからだ。練習を重ねた結果、全国優勝を果たした。ただ、その頃私が振っていたのは、一夏と共に振った純粋な剣ではなかった。目の前の敵を徹底的に打ちのめす、ただの暴力のための道具だったのだ。それに気づいたとき、私を激しい自己嫌悪が襲った。剣を置くことを本気で考えていた。

高校は自分の意思とは関係なく、ＩＳ学園にされた。姉さんの作ったものになど関わりたくは無かった。ただそんなとき一夏がＩＳを動かしたとのニュースを聞き、再び会えると希望を抱き、そして再会した一夏に恥ずかしくないようまた鍛え始めた。

二度とあんな剣は振らない。人を、一夏を守るために剣を振るうのだ。一夏に会ったとき、私はそう強く決意した。そのはずだったが…。

「なによ、そんな私落ちこんでますみたいな顔しちゃって」

正面から声をかけられたので顔をあげると、鈴が私を見下ろし、その隣にセシリアが居た。

「鈴。それにセシリアか…。美晴は私のせいであんなことに…」

「そうね。あんたのせいよ。あんたは明らかにあの力に浮かれていた。だからこうなったのよ。…で、これからどうするのよ」

やはり周りには伝わっていたのか。私の過信は。

「どうするか、か。多分もう二度とＩＳには乗らないだろうな」
あんなことになってしまった以上、私にはもう乗る資格がない。

「私達が聞いてるのはそういうことじゃありません！箒さん！あなたはこのままでいいのですか？あの福音に負けたままでいいのですか？あなたと鈴さんは私と一夏さんを取り合うライバルのような存在だと思っていましたが、あなたに関してはどうやら私の見込み違いのようでしたのね」

セシリアは深くため息をついた。
負けたままでいいのかだと？そんな訳あるはずない！

「私だって、私だって出来ることならこの手で！」
この手でリベンジしたい。だが…もうその手段はない。

「オッケー。あたし達が聞きたかったのはそれよ。みんなで美晴の敵取りにいくわよ」
敵を取る？

「しかし福音は逃げたのだぞ」
私のせいで取り逃がしたのだ…。

「それなら問題ない。ここから２０ｋｍほどいった小島の上空で静止していたのが確認された。レーダーにはかからなかったが、衛星で確認できた」

携帯端末を持ったラウラがあらわれた。

「調べていたというのか」

「我が隊の情報収集力は軍内一だ。このぐらい他愛もない。それに私としても美晴を傷つけた相手をこの手で倒したい。シャルロットも同意見だった」

「で、どう？あんたは加わるの？後はあんただけよ」

ふ、考えるまでもない。

「もちろんだ。私もやるぞ！」

この手で敵がとれる。今やらんでいつやる！

「それでこそです。ちなみにこれは先生には内緒で行います。私達専用機持ちだけでやりますわよ」

「わかった」

だろうな。千冬さんがこういう復讐じみた作戦を許可するはずはない。

今度こそ、今度こそだ！

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

夜　　砂浜

ＳＩＤＥ　一夏

今美晴以外の全員が福音を倒すために集合している。

千冬姉には黙ってこの作戦が行われる。命令違反だ。それはわかってる。だけど俺もみんなも、ただあいつを見ているだけなんてできないんだ。

「よし。みんな準備はいいか？それぞれの追加パーツは？」

作戦開始までの間に、みんなにはパーツの装備を済ませてもらった。

「私は装備完了しています」

「あたしも」

「私もだ」

「ボクも。一夏。ボクはやるよ。絶対に福音を落とすんだ！」
シャルロットの目には強い意思の炎が見えた。
「シャルロット…。よし。でも気を付けてくれよ。箒。覚悟はできてるか」
「あぁ。迷惑をかけた。もう大丈夫だ。油断はしない」
どうやら吹っ切れたようだな。これならさっきのような暴走はしなさそうだ。
「じゃあ配置を説明するわよ」
鈴がそれぞれの戦闘時の配置を指示していく。
「パーツの特性を見たんだけど、セシリアは高機動型よね。だから一夏、箒と一緒に前線で戦って。ラウラは砲門が大きい分、無防備になりやすい。接近せず、遠距離から砲撃して。防御忘れんじゃないわよ」
「うむ。まかせろ」

「シャルロット。あんたは武装に関しては特に変更はないようね。追加装備のシールドを活かしながら接近しすぎずに戦って」

「わかった」

「あたしの追加パーツは機動性を犠牲にするから、中距離から攻撃するわ。弾丸が可視性のものになってるから同士討ちにはならないわ。ただ威力は格段に上がってるから、間違ってもあたらないでね」

「おう。それぞれ配置を確認したな。それじゃ作戦スタートだ！」

「「「「「了解！」」」」」

俺達は福音のもとへと向かう。

小島

「福音を視認した。それぞれ配置についてくれ」

先程の打ち合わせ通りに展開する。

『敵機確認。迎撃開始します』

福音はこちらを確認したのか、シルバー・ベルを展開し攻撃してきた。

「避けろ！セシリア！」

昼間この攻撃を見ていた俺と箒は距離をとる形で回避をするが、初見のセシリアはより近い距離に居た。

「くっ！思ってたより密度が濃いですわね」

セシリアもなんとか攻撃を避け、そのまま反撃。ブルー・ティアーズはスラスターとして使用しているため、スターライトよりも大型のレーザーライフルで攻撃。

しかし、福音はこれを避ける。

「やみくもに攻撃してもこいつは回避する！連携して攻撃するんだ！」

「はいっ！」

連射のきくシャルロットが牽制で射撃し、箒と俺が接近を試みる。反撃が来てなかなか近づけないが、

「喰らいなさいよ！」
鈴の炎弾が拡散した攻撃を加え、福音を足止めする。
一瞬生まれた隙をついて放ったラウラのレールカノンが福音に当たる。
『キャアアアア』
電子音の悲鳴が聞こえる。
「今だ！たたみかけろ！」
セシリア、箒、鈴が一斉に攻撃を仕掛ける。
しかし福音はそれを避け、怯むことなく反撃をする。全方位にシルバー・ベルを撃った。
いくらなんでもエネルギーが続き過ぎだ。これを続けられたらこっちの方が先にダウンする。
「やばい！避けろ！」
「くっ、あああ！」
箒に何発か当たった。着弾した瞬間にエネルギーが弾け、大きく箒

のシールドエネルギーが削られる。

「箒！」

「だ、大丈夫だ。まだ行ける」

吹き飛びかけたが、なんとかなったみたいだ。

「やっぱり機動性が低いときついかも」

鈴にも当たっていたようだ。腕の装甲が少し持っていかれていた。

「シャルロット！ラウラ！大丈夫か！」

「シールドで防げた。大丈夫だよ」

「こちらもだ。私は気にしなくていい。攻撃を続けろ」

「わかった。セシリア、箒。攻撃をしてくれ。隙をついて俺が飛び込む」

「「了解！」」

セシリアはレーザーライフルを、箒は空裂で攻撃を仕掛ける。そこへ鈴が炎弾を撃つ。
三方向からの攻撃に福音の動きが少し鈍った。

「当たれ！」

俺はイグニッション・ブーストで接近し、零落白夜を打ち込む。

『キャアアアア』

当たった！これで大ダメージだ！
直後に福音は腕を振り俺に攻撃。

「くっ、接近しすぎた！」

腹部に当たり、吹っ飛ばされた。白式のエネルギーはもうそんなに無い。

福音はまたシルバー・ベルを展開。ダメージでつぶれたのか、さっきより数が少ない。

「ダメージは確かだ！反撃してくれ！」

全員が一斉に攻撃をし、福音は徐々に反撃の手段を奪われていく。

あと少しで倒せる、そう思った瞬間、福音が光に包まれた。

「まさか…」

「セカンドシフト?!」

驚きの声をみんながあげる。

美晴。ヤバイかもしれないぞ。

第５３話

美晴の精神世界

う～ん、ここは…。どうやら寝ちゃったのか。波の音が聞こえる。海…なのか。

そういえば臨海学校に来てたんだよな。当然か。また泳ぐか。でもみんなはどこに行ったんだろう。

ん？海に人がいる。どうやら３０代くらいの夫婦とおぼしき人達だ。こっちに近づいてきた。

「あの…あなた達は誰ですか？ここはＩＳ学園が使ってるはずですが」

「「……」」

黙って何も答えてくれない。

「誰なんですか？」

再び問いかけると、

「久し振りだな、美晴」

男性の方がそう声を発した。

「僕はあなた達に会ったことは無いかと…」

「記憶に無いか。当然だな。それでもいい。一言詫びさせてくれ。すまなかった」

「ごめんなさい」

二人は僕に頭を下げてきた。

「そんな！見ず知らずの人に謝っていただくことなんて！」

「ごめんなさい、美晴。あの日、私達にはあなたを連れていくことができなかった」

女性が顔を上げ、話をし始めた。

「あのとき、私達には他に選択肢が無かったの。もしあなたを連れていたなら、きっとあなたの命が危険にさらされていた。だからやむをえず、あなたを置いて姿を消すしかなかったの。ごめんなさい」

「一体なんの話を…」

「美晴。お前を一人にしてすまなかった。だがあの日、新しい家族を得て大きくなってくれていて私達は嬉しいよ」

どういうことだ？この人達は僕の過去を知っている？

「美晴。あなたにもどうやら守りたい人がいるみたいね」

「え、えぇ。僕のとっても大事な人達です。僕の家族と呼べる存在です」

何でそんなことまで知っているんだ。少し怪しくも見えてきた。

「家族か…。なぁ美晴。力が欲しいか？」

突然力について質問された。力は欲しいことは欲しい。だけど。

「過剰なのは要らないです。ただみんなを守ることができればいい」

必要以上に大きな力はそれが騒動の種へと変わっていってしまう。そんなのは望んでいない。ただ僕の目に写る人を、景色を守りたいだけだ。

「そうか…。私達は美晴をあんな無責任な形でしか守ってやること

ができなかった。だからお前に力を渡そう。私達のせめてもの詫びの印だ。受け取ってほしい」

一つの水晶のようなものを取りだし、差し出してきた。

「受け取れませんよ。あなた達が誰かすら知らないのに…」

知らない人から物をもらうな、って千冬お姉ちゃんがよく言ってた。

「いいから受け取って。あなたの大切な家族が今危険な目に遭っているの。その子達を守るための力よ。どうか受け取って。あなたを守りきることができなかった私達と同じ思いをあなたにはしてほしくないわ」

「みんなが危険に…。みんなを守る力…。わかりました。受けとります」

シャルやラウラ達に何か起きているのなら、みんなを守るための力なら受けとろう。

「そうか、ありがとう。それではそろそろ行きなさい。手遅れになる前に」

「いってらっしゃい。気を付けてね…」

女の人は僕を優しく抱き締めた。

あれっ。僕はこの温もりを知っている。懐かしい、いつも感じていたはずの温もりだ。一夏と会う前に、最後に感じた温もりは確かこれだ…。

「まさか、あなた達は僕の…」

二人の笑顔が見えた瞬間、僕は意識が途切れた。

「う…ん。ここは…旅館？布団…、そうか夢だったのか。でも本当に夢だったのかな。温かさを僕は覚えてる…。やっぱりあの人達は僕の…。っ！そうだ！みんなが危ないんだ！」

僕は布団から飛び起き、千冬お姉ちゃんがいる部屋へと向かって走った。

「千冬お姉ちゃん！みんなは！」

ドアを勢いよく開け、中へと入っていく。

「美晴！もう大丈夫なのか？」

僕の姿に驚いているようだ。さっきまで意識不明だったんだ、当然

の反応だ。

「大丈夫。それよりもみんなは？」

「あ、あぁ。先ほど無断で福音に攻撃をしかけていることを確認した。待機を命令していたんだが。通信も切っていてこちらから呼び掛けても全く返事がない」

モニターを見て、現在の一夏達の状況を教えられた。

「わかった！」

僕は部屋を出ようとするが千冬お姉ちゃんに腕を掴まれる。

「待て！危険だ！ただでさえ相手は強い。それにお前は重傷を負っていたんだぞ！」

「離してよ！僕はみんなを守るって決めたんだ！」

僕は腕を振りほどき、みんなのもとへ向かう。

「美晴…。無事に帰ってきてくれ…」

ＳＩＤＥ　シャル

福音はセカンドシフトを済ませた。

シルバー・ベルがなくなった代わりに、八枚の翼が生えていた。その翼そのものを弾丸として攻撃してくる。収束、拡散と攻撃方法も多様化した。

反撃を試みても、先ほどとは比べ物にならない機動力ですべて回避される。

「強い！このままじゃまずいよ！」

福音の翼は形を変えボク達を取り囲む。

そのまま零距離で攻撃してくる。

「うわあぁぁぁっ！」

避ける手段がなく、ボク達はただ攻撃を喰らうしかなかった。

「どうしよう。美晴…、ごめん、倒せないよ…。美晴ぅ」

一夏達ももうボロボロ。このまま全滅するのか…。

「みんな！お待たせ！」

その声は大好きな人の声だった。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

あれから僕は一夏達の位置を把握し、一気に移動した。移動中に確認したが、武装が増えていた。ラファールを使ったときのデータを入れていたのが原因のようだ。それに、エネルギー消費も抑えられている。

「みんな！お待たせ！」

「美晴！大丈夫なのか？」

一夏が聞いてくる。やっぱりこちらも驚いた顔だ。

「心配かけた！もう大丈夫」

「美晴さん、機体が先ほどとは少し…、まさか美晴さんも？」

今までと比べるとより細く、流線型に近くなっている。空気抵抗はほぼなくなっている。

「どうやらセカンドシフトしたみたいだ。さぁて！やるよみんな！」

「美晴！」

シャルが泣きそうな顔で叫んでいる。

「シャル。話は後だ。今は福音だ」

僕は高速で移動し福音の後ろを取りビームマシンガンを連射。広範囲かつ物量で押す。これで内容はほぼ互角。
それでもエネルギー弾によって、一部が相殺された。

「速い！今までよりもさらに！」

ラウラが驚いている。推力自体はそのままだが、今までより早く僕の意思が伝わっているからだろう。

僕は福音と一騎討ちの形になる。他のみんなはついてこれないスピードだ。

エネルギー弾を避け、反撃でライフルを撃つ。
福音もそれを避け、また反撃してくる。
マシンガンを混ぜながらそれを繰り返すこと数回、福音は僕を包囲し全方向から同時攻撃を仕掛けようとしてくる。

くっ、このままじゃ逃げ場がない。なんとかできないか！

「美晴！」

一夏が僕の前に飛び込み盾になった。これじゃあさっきの箒ちゃんと同じじゃないか！

「このままお前だけにいい格好させられねぇ！」

「一夏！」

僕達はまた、閃光に包まれた。

「あれ？」

なんともない。なんで？

「どうやら俺もセカンドシフトしたみたいだ。この左腕が防いでくれたみたいだぜ」

そういう一夏の左腕は今までと違い、シールドがあった。

「このシールドも零落白夜みたいだ」

だから無効化されたってこと？

「とにかく、二人で戦うぞ！」

「わかった！」

どうやら一夏の左腕は展開装甲により多用途で、格闘、砲撃、防御すべてに対応するようだ。

「仕掛ける！」

僕はサーベルを両手に持ち、近接戦をする。
福音に避けられるが、それでも追いかけ、攻撃し続ける。
一夏も荷電粒子砲による援護射撃をしてくれたり、近接戦を仕掛けたりしてくれる。
一進一退の攻防が数分続く。

「このままじゃ埒が明かない！エネルギーだって持たなくなる！シュッツェン！お父さんとお母さんが僕に力をくれたんだ！僕の気持ちに答えてくれ！頼む！」

歯がゆい展開に我慢できなくなって、思わず大声で叫んでいた。

―『ハイマット・モード』使用可能―

「ハイマット・モード？これが僕のワンオフ・アビリティー！」
背中のスラスターが開き、翼のようになった。より複雑な機動が高速で出来るようになるようだ。
翼対翼。

「ありがとうシュッツェン！これで戦える！」
僕は福音に突撃。
今までの倍以上の機動性だ。一瞬にして福音を間合いにとらえる。

「コア・ネットワークを遮断して、みんなが敵だと思い込んで辛かったろう。今僕が救いだしてあげるよ！」
サーベルで一太刀浴びせる。二撃目はかわされたが、回避先にすぐ回り込み追撃！

『％@★＃☆§！』
ヒットした。
福音は僕のスピードについてこれてない。これなら！

「すごい…何て速さなの」

「紅椿でもあの速さは出せるのかどうか…」

「センサーで追うのが精一杯ですわ」

福音が翼で取り囲み攻撃してくるが、僕はその攻撃のわずかな隙間を縫うように移動し避けきる。全方位攻撃すらかわせるほど、僕の意思に的確に答えてくれる。

よし！このままトドメを刺す！

福音の攻撃を避けながらライフルを撃ちつつそのまま接近。セイバーで攻撃して体勢を崩させたところに背部ビーム砲をお見舞いする。

「もう、終わりにしよう…」

福音のど真ん中をとらえ、エネルギーがゼロになった。福音はそのまま海に落ちる。

無人機ではないらしいから、海中から機体を回収し、連れ帰る。

ふぅ。怒られるんだろうな。たっぷりと…。

僕達は旅館へ帰りつくと、福音を山田先生に預けた。

さて、行きたくはないが、そういうわけにはいかない。これから行われるであろうお説教という名の死出の旅はみんな覚悟している。

「…織斑美晴、以下六名。帰還しました」
作戦指揮室の扉を開き、僕は報告する。
千冬お姉ちゃんは部屋の中央で仁王立ちしていた。

「貴様ら。私の命令を無視しての出撃。及び許可を得ないＩＳの使用。裁判にかけられて当然の行為をお前達はしたのだ。わかっているのか！」

「「「はいぃっ！」」」

覚悟はしていたとはいえ、そのプレッシャーにみんな声が上ずる。

「貴様ら…」

一歩ずつゆっくりと千冬お姉ちゃんがこっちに近づいてきた。
みんな足が震えている。僕も例外ではない。死を覚悟しているのだ。

「へっ？」

強く全員を抱き締めた千冬お姉ちゃん。驚きのあまり間の抜けた声が出てしまった。

「よく、よく全員無事で帰ってきた…。心配させおってこの馬鹿共が…」

顔を上げ涙声でそういう千冬お姉ちゃん。
そして僕を抱き締め泣きながら、

「美晴。私はお前が撃墜されたと聞いた瞬間、死にそうになった。なんとか保っていたが、起きたお前が出撃すると私の腕を振りほどいたあのとき、心配どころではない感情でいっぱいだったんだぞ」
そう弱々しく言った。あのドイツの時以来だろうか…。

「ごめんね…」
千冬お姉ちゃんはしばらく涙をこらえるように深呼吸していた。

「…んんっ。今のやり取りはそれぞれの心に秘めておけ。口外したらどうなるかわかるな。福音についても口外禁止だ。明日は学園へ帰る日だ。今晩は休め。解散」
みんなに見られていることを気にしてか、突如取り繕ったようにして命令した。
僕達はそれぞれの部屋へと戻る。

「意外だったわね。あの千冬さんが泣くなんて」
廊下を歩きながら先程のやりとりを思いだしている。

「私達の事を心配して泣いてくださったんですね…」

「そうだな。千冬さんは本当はとても優しく涙脆い人だ。学園ではその弱さを生徒に見せないようにしているだけだろう」

セシリアさん達はあの涙にいささか驚いたようだ。まぁ普段は全く見せないからな。

「ねぇ美晴…」

シャルとラウラに呼び止められた。

「ごめんみんな。先行ってて」

一夏達には先に行ってもらった。

「今日の事だよね」

「うん…。美晴が…美晴がボク達の前から居なくなっちゃうんじゃないかって！ボクの居場所が無くなっちゃうんじゃないかって…、そう思ったら…」

シャルの目からボロボロと涙が落ちている。

「私も…美晴の約束を信じてはいたが、不安はぬぐい…きれなかった…」

ラウラの頬にも涙が伝っている。
僕は二人を抱き締めた。

「ごめんね、もう大丈夫だよ。僕はこれからもずーっと二人のそばに居るから」

「「うわあぁぁぁぁ」」

二人は大きな声で泣いていた。優しく頭を撫でる。言葉はいらない。
これで十分だ。

そのあと三十分ほど二人は泣き続けていた。

深夜　崖の上
ＳＩＤＥ　千冬

今私は奴を待っている。

「やぁちぃちゃん。こんな時間に呼び出してなにかな？」

草むらから束が現れ、横に並んだ。

「束。お前は今回の事件に関わっていないのか？」

「何を言ってるのかな？私は関わってないよ？」

ピクリとウサ耳が動いたのを見逃しはしなかった。

「そうか。福音はコア・ネットワークを遮断され、すべてを敵と認識するようにハッキングされていた。一体犯人は何がしたかったんだろうな」

「さぁねぇ。私にはわからないなぁ」

「一つ例え話をしようか。本来なら女にしか動かすことのできないＩＳをあの日、一夏と美晴があそこにいくように仕向けた上で、あのタイミングにだけ起動させた。そうしたら彼らは世界で初の男性操縦者になった。お前にならできるんじゃないか？」

「どうだろうねぇ。でも私にも何で白式とシュッツェンが今動いているかはわからないんだ」

「そうか。ではもう一つ例え話をしよう。突然軍用のＩＳが暴走。ネットワークを遮断され、すべてを敵と認識するようにコアがハッキングされていた。そこに姉が開発した世界最高性能のＩＳを手に入れた開発者の妹がそのＩＳを撃退する。見事にＩＳの性能を見せつけられるだろうな。まるであのときの私のようだ。束。紅椿はどうだった」

「う～ん、稼働率は４２％だったねぇ。思ったよりも低かったかなぁ」

「いいテストになっただろう」

「まぁねぇ～。……ねぇちーちゃん。ちーちゃんは今の世界楽しい？」

「それなりに…な」

「そっか～」

「束」

振り返ると奴はすでにいなかった。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

「みなさ～ん、乗り込みましたか～？」

今山田先生が点呼を取っています。

おはようございます、美晴です。臨海学校はもう終わり。休憩に立ち寄ったパーキングエリアを離れてこれから学園に帰ります。

「ねぇ昨日何があったの？」

さんざん聞かれたが、その度、

「何も無かったよ」

そう答えた。少しでも話すわけにはいかない。

「…あ、はい。わかりました。運転手さん少しだけ出発を待ってください」

電話をしていた山田先生が、出発を送らせた。なんだろう？

金髪の女性が乗ってきた。

「昨日はどうも。あなたが美晴君？」

その人は僕を探しているようだ。

「え？あなたは誰ですか？」

「私は銀の福音のパイロットのナターシャ・ファイルス。昨日は助けてくれてありがとね。あなたがあの子へかけてくれた優しい言葉、聞こえたわよ」

「あの子？あぁ、あのＩＳのことですか」

「そう。だからお礼をさせて？」

不意に頬にキスをされた。

「じゃあまた機会があったら会いましょ？美晴君」

手を振りながらナターシャさんはバスから降りていった。ナターシャさんか…。ああやってＩＳを心から愛している人もいるんだなぁ。

ん？何か寒気が…。

「みーはーるー！」

うっ、これはいつものパターンか。

「昨日あれだけ私達を泣かせておいてお前は！」

違う！ラウラも加わった！

「ちょっと待ってって！今のは挨拶のだから！」

顔の前でブンブンと手を振り、必死の言い訳をする。

「それで許すと思っているのか！」

「いくよラウラ！」

「うむ！」

えぇー！この2対1は死んじゃうよー！

いっぱい思い出ができた臨海学校はこんな形で終わった。

なお、帰りのバスでも王様ゲームが行われ、何番が僕をくすぐるというただのいじめになりました。

第５３話（後書き）

「あれ？千冬ちゃんお久し振りね。モンド・グロッソ以来かしら」

「あぁ。久し振りだなナターシャ。さて、さっき私の弟に何をしてくれたかな？」

「何って…、挨拶のキスだけど？」

「…貴様なんぞが美晴にキスなどと！」

「えっ？千冬ちゃん！いたたたた！！なんなのよ！」

織斑先生を待つために出発が遅れました。副担任なんて損なお仕事です…。

シュッツェンについては設定に追加しておきました。

第５４話（前書き）

今回から夏休み。デート話連発です。

第５４話

「えー、明日から夏休みに入るわけだが、こういう時期ほど犯罪に巻き込まれることが多いので…」

こんにちは、美晴です。

明日から夏休みです。今はその前の全校集会が行われています。夏休みの諸注意を生活指導として千冬お姉ちゃんがしています。…どれだけ兼任しているのでしょうか。

「……以上の事に気を付けて過ごすように。いいな」

「「「はい！」」」

うーん、何百人もの生徒の一糸乱れぬ返事。やっぱり軍だ、ここは。

教室

「ねぇ、美晴はどう過ごすの？」

席についてしばしどう過ごそうか考えていると、シャルに肩を叩かれた。

「う～ん、どうしようかなぁ。帰ったところで一夏と二人だけになるしなぁ。そうするとつまらないし…。大半はこっちで過ごすよ。シャルは？」

「ボク達候補生は時折整備やらデータ採取やらで本国に帰ってやらなきゃいけないことがあるからね。それ以外は学園に居るよ。ボクとしては帰りたくないんだけど…」

シャルの場合、デュノアに戻る必要があるもんね。きっと嫌だよね。

「そっか。じゃ、いる間は楽しもうね」

せめてこっちにいる間は僕が楽しませてあげたいな。色々な場所に行こうって約束したし。

「うん！」

ある日
美晴の部屋

夜です。シャルとラウラと一緒にベッドに座りながらテレビを見ています。

なぜかラウラは僕のヒザの上に…。そしてシャルは…。

「ねぇラウラ！かわってよぉ！僕も美晴の膝がいい！」

ラウラに交渉を持ちかけていた。

「ダメだ。早い者勝ちだ」

「ずるい～」

ぷくぅっと頬を膨らませ、不機嫌そう。確かにラウラが先に来たんだけど。というか画面が見えない。みんな身長は近いんだ、重なれば前が見えない。

「む！美晴。これは何なのだ」

ラウラはあるＣＭが気になったようだ。

「あぁ、これは遊園地だよ。色々楽しめるアトラクションがあるんだ。この近辺では有名かな」

横から顔を出して確認すると、遊園地のＣＭだった。

「行きたい…」

「え？」

「行きたい！明日連れていけ！」

「いや、いきなり」

「行〜き〜た〜い〜！」

「わかった！わかったからヒザの上で跳ねないで！」

ゆさゆさ揺れて目線がぶれる…。

「しょうがないなぁ。じゃあ明日ここに行こう。シャルも来る？」

いきなりの決定だから一応シャルにも確認をとる。

「ボクを置いていく気なの？絶対行く！」

僕がシャルを置いていくと勘違いしたのか勢いよく顔を近づけてそう言った。

「そ、そう。じゃあ明日はみんなで遊園地ね。ちょっとここからは遠いから早めに学園を出るよ」

「うむ。早起きは問題ない」

「ボクも！」

ということで突然ですが、明日遊園地に行くことが決まりました。

翌朝　学園前

「ふぁ～あ、眠い…。実は僕が一番朝が苦手なのかも」

「おっはよ～！」

シャルが駆けてきた。ラウラはゆっくりと歩いている。

「おはよ…。朝からテンション高いね、シャル」

「うん！楽しみだもん！」

「そう…。おはよ、ラウラ」

「うむ！」

あぁ、ラウラの顔から今日は思いっきり楽しむって伝わってくるなぁ…。

「じゃあ行くよ。まずは駅に行って、何回か電車を乗り継ぐから。全部で二時間ぐらいかかるのかな…」

近場ならいいんだけどなぁ…、あそこに行きたいって言ってたしなぁ…。眠い…。

車内

今は電車に乗って移動中。朝ごはんを食べてないので駅で買った駅弁を食べようとしています。

「はい、それじゃあいただきます」

「「いただきます！」」

食べてる間くらい静かだろう。

「む？箸だけか。フォークはないのか？」

ラウラがフォークはどこかと袋の中を探している。

「あぁ、駅弁には付いてないだろうねぇ」

基本日本人が食べるからな、フォークは付属しないだろう。

「これでは私は食べられない。嫁！食べさせろ！」

弁当を僕に突きだし、口を開けている。静かにならない…。

「まだその話生きてたんだ…。はいはい。あ～ん」

「あ～ん。うむ。美味いな。嫁の手でというのがまた」

「美晴！ボクも！」

「シャルはもうちゃんとお箸使えるでしょ？」

さんざん練習して上手くなってたはず。

「だってぇ～」

「今はラウラで手一杯。今度ね」

「ぶぅ～。臨海学校の時言ったじゃないか～」

以前した約束を持ち出し、ブーイングをしてきた。

「だから今度」

「嫁！次だ次」

ほら。目の前でヒナが待ってるんだもん。エサよこせー！って。

「はいはい。あ～ん」

結局まったく静かじゃありませんでした。

遊園地前

「「遊園地！遊園地！」」

シャルにはお昼に食べさせてあげると約束してなんとか機嫌を治してくれましたが、その分テンションＭＡＸ。ラウラと一緒になって遊園地コール。

「美晴！何やってるの！早く入ろう！」
入り口の前で大声で叫んでいる。
「はいはい。今行くよ。え～と高校生三枚」
チケット買わないと入れないんだから…。
園内
「色々あるのだな」
案内図を見ながらラウラが悩んでいる。
「定番と言えば何なのだ」
「うーん、ジェットコースターかな。ここのはすごいって評判なんだ。ギネスにも載ったことあるし」
「へぇ～そうなんだ。じゃまずそれだね。楽しみだね、ラウラ！」
「うむ！」

ワクワク、って感じか。背中がそう言ってる。

「へぇ～、なかなかすごそうだね」

シャルが高速で走っているジェットコースターを見ている。

「正直僕は苦手だけど」

絶叫系はどうも好きになれない。ＩＳは任意で加速するが、あれは急加速するから意識が追い付かない。

「義務だ。拒否は許さん」

義務、なのね。嫁のか。

「はいはい。一緒に乗りますよ旦那様」

「それでは二人一列で乗ってください」

「だって」

係員の指示には従わないと。どうしたらいいか二人を見る。

「シャルロットが後ろだな」

「えぇ？無条件？」

「仕方なかろう、一列には二人しか座れないのだ」

シャルに選ぶ間を与えさせず、きっぱりと言い切った。

「うぅ。美晴、恨んでやるぅ」

「僕？何で！」

決めたのラウラじゃないか！

仕方なく、といった表情で、シャルは座席についた。

「はいそれではいってらっしゃーい！」

係員の元気のいい声でコースターが動き出す。

初速が今までのジェットコースターとは全然違う。

速い！普通最初はゆっくりじゃないの？

でそのまま…

「わあぁぁぁっ！」

落ちたぁ！速っ！しゃれにならない！く、首痛い！カーブで持ってかれる！

「わぁい！楽しい！」

シャルは楽しんでる。

「嫁！叫べばいいのか！」

「自由にして！わあぁっ！」

答えてる余裕無い！

「よし！わあぁぁっ！」

シャルを見習って両手を上げているラウラ。

その後も一回転あり、ひねりあり、上ったり下りたり。途中で…

「え？先がない？違う！垂直以上の落下だ！ひゃあぁぁぁ！」

一回えぐるようにして落ちた。もういや…。

「はーいお疲れ様でした！ゆっくり降りてください」

や、やっと終わった…。

「楽しかったね！ラウラ！美晴！」

「うむ！ＩＳの機動とはまた違った感じで面白かったぞ！」

「僕はきつい…」

何であんなに元気でいられるんだ。

「もうだらしないなぁ。あ、次はあれ乗ろう！」

「うむ！」

コーヒーカップ…。どうせ…。

「やっぱりぃぃぃ！シャル！速い！回しすぎ！」

「そお？もっと速くしよ！」

グングンと速度を上げていくカップ。

「やめてぇ！」

「はぁはぁ。次はゆっくりめなのにして…」

「ではあれはどうだ」

メリーゴーランドか。

「うん、あれならよし。というかその前に少し休ませて」

ベンチにへたりこむ。

「では私とシャルロットで乗るか」

「そうしようか」

いってらっしゃ～い…。

「美晴ー！」

メリーゴーランドに乗りながらシャルとラウラが手を振ってきた。
僕も手を振り返す。
元気だなぁ。僕としてはあれは恥ずかしいんだよね…。

「楽しかったよ？」

ベンチでぐったりしていると、二人が感想を教えてくれた。

「そう、それはよかった」

一応少し回復できた。

「次はあれだ」

ラウラが指差したのはフリーフォールか…。せっかく回復したのに。
そんなのばっかではないですか、ラウラさん。

「おぉ！あがっていくぞ！」

ゆっくりと上へと上がっていって、一旦止まる。

「む？止まってしまった」

「大丈夫…。そろそろ落ちるから…」

ガチャッと音がして、落ちていく。

「ほらねぇ！わあぁぁ！」

「お～！すごいぞ～！」

「わ～い！」

何でこんなに楽しめるんだ、この二人は。

「そ、そろそろお昼にしようよ」

ぐったり…。マイナスまで体力が落ちた。少し間を開けないと…。

「うむ。お腹が空いてきた」

「いっぱい叫んだもんね～。あ！焼きそばだ！」

シャルとラウラは走って焼きそばを買いにいった。

「はい！美晴の分。今度はボクにあ～んだよ？」

「はいはい。あ～ん」
周りの目がすごく気になる…。
「あ～ん！うん、おいしい！」
笑顔になったシャル。ラウラにも食べさせて、自分の分を食べる頃には冷めきっていた。
「次はどこを回ろっか！」
空腹を満たし、さらに元気なシャル。
「あれが気になる。なんなのだあれは」
ラウラが指差したのは…。
「お化け屋敷か。お化けが出てきてみんなを驚かす建物だよ」
僕平気なんだよな。だからあまり入らない。本物は怖いけど、あくまでも遊園地だからな。
「ふむ。入ってみたい」

「え！」

あれ？シャルが変だ。

「シャル。もしかしてこういうの苦手？」

「正直…苦手」

ちょっと顔が青くなっている。

「そうか。ならばシャルロットは待っているといい。美晴と二人でいってくる」

「ボ、ボクも行くよ！」

シャルは僕の右腕にしがみついた。ちょっと震えてる。

僕達はお化け屋敷の中へと入った。

「どう？ラウラ。怖い？」

「何とも言えんな」

まだそんなに進んでないしな。一方シャルは…。

「絶対離さないでよ！一人にしないでね！」

必死に僕の腕をつかんで涙目だった。

「ウァァァ」

お化けが襲ってきた。

「ひゃあぁぁ！」

シャルが大声で驚いていた。ラウラは無言。怖くないのかな。

と思っていたらラウラが僕の服の裾を握ってきた。

「ラウラ？」

「見るな！美晴には見られたくない…」

手が少し震えていた。なんだ。怖いんじゃないか。

そのあとも後ろから出てきたお化けのせいで急激に二人に引っ張られたり、明らかにいそうな雰囲気の場所では盾にされたり。

というか長い！このお化け屋敷！

「ね、ねぇまだあるの？」

震えながらシャルが聞いてきた。

「あと二十分はかかるんじゃないかな。全部で一時間ぐらいかかるって看板に書いてあったし」

世界最長が売りなんだっけ。

「そ、そんなにか。いや！別に怖くはないぞ！」

とかいいながら裾を握るのがより強くなった。

「強がらないで。ほら」

ラウラの肩を抱く。

「う、うむ。も、もう少し強く」

「はいよ」

なんだかんだで二人はずいぶん楽しめてるみたいだ。

「はぁ…怖かったぁ」

「…うむ。…意外にすごいのだな」

お化け屋敷から出た二人は肩で息をしていた。
さっきまでの僕はそんな心境だったんだよ。

「ふぅ。次は何にしようか」

息が落ち着いたシャルが周りを見渡している。

「む？あの機械はなんだ」

近くにあったハートマークがついてる機械をラウラが見つけた。

「あぁ、たぶん恋人同士の相性がわかります的な機械じゃないかな」

たまに見かけるカップルが楽しむやつだ。

「「やりたい！」」

ハモるぐらいにやりたいのか。

「じゃあやろう。ここに二人が手を置くんだ。まずラウラから」
僕とラウラは機械のハートマークに手を置いた。機械が数値を出す。
『相性は１００％！最高のカップルです！』
「だってラウラ」
「うむ。やはり美晴は私の嫁だな」
ラウラは深く頷いた。
「違うけど、まぁいいや。次シャル」
「ど、どうかな…」
オドオドしながらシャルは手を置いた。
『相性は１００％！最高のカップルです！』
「やったぁ！」

シャルが僕に飛び付いた。

「シャル！ちょっと！」

「私もさせろ！」

ラウラも飛び付いた。まったく…。必ず１００％なんじゃないの？
これ。
疑いを持ったが、次の人達は９０％だった。どうやらただのご機嫌
取りではないようだ。

「じゃあすごい数値が出たところで、最後にカップルの定番、観覧
車に乗ろう」

「カップル…」

「いい響きだ…」

二人の目は少し遠くへ行っていた。

「ほぅ。周りが良く見渡せるな」

そろそろ頂上に着く頃だ。

「高いね～。ねぇ、普通のカップルはこの中で何するの？」
隣に座るシャルが聞いてきた。向かい合わせにはならず、三人とも同じ椅子に座っていた。これゴンドラのバランスとれているのか？

「う～ん、話に聞くのは告白だったりキスだったり」
ドラマとかだとそういう展開になることが多い。

「じゃあしよう！」

「えぇ？告白を？キスを？」

「どっちも！」
えぇ～。…本当にやるの？

「ラウラもほら！」

「うむ。それでは」
二人は僕に顔を向け、

「「美晴！好きです！」」
ストレートに告白してきた。
「ぼ、僕も好きです」
答えると二人が同時に頬にキスをしてきた。
「は、恥ずかしいな、改めてこうされると」
顔から火が出るってこんなことを言うのかも。
「これからも時々しようか」
「うむ。美晴は浮気性だからな」
二人は僕に腕を絡ませ、顔を見ながらそう言った。
「一度もしてないよ！」
「忘れたとは言わせんぞ。私達以外のものにキスをされおって」

「まぁ、ボクにしたらラウラも最初はその一人だったけど。もう今はいいや。さて美晴。臨海学校の時のこと忘れたとは言わせないよ」

じりじりと距離を詰めてくる。

「あれは挨拶だから！シャルだってするでしょ？」

よく見る光景だ。別れの時にはするのが普通じゃない？

「好きな人にしかしないもん。フランス人がみんながみんなそうだと思わないでよね」

「キスとは大事なのだ。誓いだからな」

あぁ、あの日が思い出される…。

「わかったよ。これからは気を付けます」

「「よろしい」」

ちょうど一周して下に着いた。タイミング良いね。

帰りの車内

「むにゅ〜」

「く〜」

二人とも疲れたのか、電車に乗ったらすぐに寝てしまった。僕の膝で気持ち良さそうに。

浮気か。自分ではしてるつもり無いけど、二人を不安にさせないように気を付けよう。悲しませたくないからな。

はぁ。これだと僕動けないんだなぁ。

あと一時間ぐらいか…。

第５５話

こんばんは、美晴です。

ラウラが部屋に乗り込んできて、おかしなことを言い始めました。

「美晴。この近辺に海洋生物を集め、生物兵器として役立つよう飼育している施設があると聞いた。軍に携わるものとして興味がある。明日連れていけ」

ね？意味わかんないこと言ってるでしょ？

「ラウラ。悪いけど僕はそんな施設知らないよ」

「そうか。この近辺にあるとテレビで流れていたのだが…」

ショボンとして部屋を出ていこうとしている。

テレビで流れてたってことは、たぶんラウラの勘違いかも知れないな。

「ちょっと待ってラウラ」

「む？何だ。こちらとしてはもう…」

「ちょっと違うけど心当たりがあるんだ」

「何！それは本当か！」

ドアの前から僕の顔まで一瞬で近づいてきた。
かなりの食い付きだなぁ。そんなに行きたいのか。

「まずラウラの見た情報を確認したいんだ。テレビで紹介されてたんだよね」

「うむ。レポーターがいたぞ」

「大きな水槽無かった？」

「あったぞ。そこに多数の生物がいた」

「で、プールの周りに子供とかいなかった？」

「…いたな。よく考えれば軍事施設に似つかわしくない光景だった」

「結論、それは水族館だよ」

「水族館。なんだそれは？」

「水の生き物を集めて、観賞する施設だよ。珍しい生き物がいたりしてなかなかに面白いよ」

「そうか…、軍事施設ではなかったか…」

「ってことで僕は寝てもいいかな」

そろそろ２３時なんだけど。眠い…。

「…それでもいい。連れていってくれ！」

「行くの？明日？」

「そうだ！明日だ！」

押し問答しても寝るのが遅くなりそうだ。従っておくか。

「じゃあ行こう。ってことでおやすみ」

ベッドに入り寝る準備を整える。

「うむ。遅くにすまなかった。おやすみ」

ラウラは静かに出ていった。

翌朝　学園前

で結局水族館に行くことになりました。今回はシャルが帰国中なので、ラウラと二人で行きます。

「さて、ラウラは来てるかな」

辺りを見回すと、なんだか警戒しながら素早く動き回るラウラがいた。

「何やってるの？ラウラ」

後ろから声をかけられたラウラはビクッとしてこちらを振り返る。

僕の顔を見て安堵した表情を浮かべていた。

「なんだ美晴か。おはよう」

「おはよう。で、何してたの？」

「うむ。待ち合わせ場所に何か危険物や罠が仕掛けられていないか確認していたのだ」

「そんなことしなくても…」

「美晴は自分の特殊性を認識していない。何があるかわからんぞ」

もしそうならもっと早くそうなってただろうよ。

「で、結果は？」

「うむ。特に異常はなかった」

「やっぱり…。もう出発してもいいかな」

「うむ。行こう」

手を繋ぎ、バス停へと向かう。

バス内

今回はバス移動。さほど遠くはないからな。
ラウラは…。

「ふむ…。ふむ…。」

外を見て時々うなずいている。あの顔は何か考えているな。どれ。

「「あのビルは狙撃にはもってこいだな。あそこは遮蔽物が多いから、拠点に出来るかもしれん。あのスーパーは食料確保のために優先的に制圧すべきだな。」」

ぶつぶつと言っているラウラに合わせて言ってみた。見事に一致。

「な！なぜわかった！」

心を読まれて慌ててるな。

「まぁラウラは軍人だし、見ているものを見比べれば大方予想は着いたよ。にしても市街地戦なんか日本じゃそうそう起きないよ」

「すまん。つい癖でな。作戦立案するのも隊長の一つの務めなのでな、色々考えてしまうのだ」

「いいけどさ、せっかくの僕とのデートなのにな」
グイッと顔を近づけてみる。
「デ、デート！そ、そうだな。すまん」
お、冗談半分で言ったのに、結構効いたな。
顔真っ赤にしちゃって可愛いなぁ。
あ、そろそろ着くかな。

水族館

「おぉ、ここがその水族館か。水槽がここからも見えるぞ」
周りを見渡しながら、感嘆の声をあげている。
「水族館はそういう場所だからね。さて、中に入るよ」
「うむ」
中に入り、色々見ていく。

「クラゲか。ふむ。なかなか興味深い動きを見せるな」
まずはクラゲコーナー。数十種類のクラゲが展示されている。
「海で遇うと毒針で刺されたりするから種類によっては危ないんだ」
以前刺された人を見たが、傷は直視できたもんじゃなかった。
「ほう。武器があるのだな。海で生きていくための術か」
ラウラはクラゲを見ながらうんうんと感心している。
「人間視点で考えれば厄介だけどね」
次へと向かう。
「ここはなんだ」
「海の生物とのふれあいコーナーって書いてあるね。ほら、ヒトデとかウミウシとかに触れるんだよ」
「こ、これを触るのか？な、なんだか変な色をしているぞ」

「害は特にはないから触ってみなよ」

「う、うむ」

ラウラは近くにいたアメフラシに手を出す。

「ひっ、ブニブニしてるぞ」

独特の感触に少し引いているようだ。

「軟体だからね、彼らは」

「こ、今度は紫の液体が！」

ラウラの手の刺激にアメフラシが反応した。

「あぁそれは防衛用の煙幕みたいなもんだよ。捕食者が怯むようになってる」

確かただの煙幕じゃなくて、攻撃的な意味もあるんだっけか？

「感触以外は面白いな…。感触以外は」

アメフラシから手を離した。お気に入りとまではいかなかったよう

だ。

「色々いるんだよ海には」

「ふむ。む！今度は何かが巻き付いてきたぞ！」

「タコだね、小型の」

ラウラの指に巻き付いている。

「な、なんだか吸い付いているぞ。えぇい離れろ！」

ラウラは激しく手を振っている。
しかしなかなか離れない。

「どうすればいいのだ！助けろ美晴！」

慌てた顔でこちらに助けを求めてきた。

「はいはい」

ラウラの手を止め、しばしじっとする。動かなくなって餌ではないと判断したのか、タコは離れていった。

「痕になっている。中々に危険だな、海は」
指に吸盤の痕がついていた。
「それぞれ生きるために大変なんだよ。次は大水槽に向かおうか」
「おぉ！大きいなこの水槽は！ふむ。これはアクリルか。大きさといい強度といい、素晴らしい…」
何しに来たんだかよくわからなくなってきた。だってラウラは水槽に使われている大きなアクリルガラスに心奪われてるんだもん。
「水槽の中を見ようよ、ラウラ。ほらサメだよ」
「ふむ。フカヒレが泳いでるな」
サメだよ…。フカヒレは別の種類のからとれるんだよ…。
「ほ、ほら。マグロが泳いでるよ」
気を取り直して回遊しているマグロを指差す。
「あれなら何人前握れるのだろうか…」

方向性が違う！

「ま、マンボウがきたよ…」

「味はあまりないが脂がたっぷりのっていて、中々にうまいらしいぞ」

うぅ、次だ！

「ほ、ほら。カメさんが泳いでるよぉ」

「スッポンは美味だと聞いたが、ウミガメはどうなのだろうな」

うぅ、負けた…。

ダメだ。全部食べ物になってしまう…。

『まもなくショーが始まります』

館内放送でショーの案内が入った。

そうだ！水族館のアイドルのあいつ達ならきっと！

「ラウラ！ショーを見に行こう！」

「ショー？まぁいいが」

ラウラの手を引き、プールへと向かう。

「みなさ～ん！まずはアシカのライト君で～す！」

アシカが出てきて、輪投げや、ボールを操っている。

「おぉ、すごいな！賢い！」

よかった。正しい目線に戻ってくれた。

「次はイルカのアレックス君で～す！まずはみなさんにご挨拶～！」

イルカは胸ビレをフリフリしている。

「可愛い…」

「はい次は背面で移動しま～す」

イルカが水面を尾びれをつかって、バックで移動している。

「ジャンプしてボールをキック！」

高くジャンプし、吊るしてあるボールを蹴る。

「おぉ！すごいぞ」

その時イルカの着水で水が大きく跳ね、こちらへやって来た。

「濡れる！」

ラウラは慌てて顔をかばうが、僕は座席のビニールシートを出す。

「濡れ…ない。準備がいいのだな」

「この席には元々あるんだ。これが醍醐味だからね」

しばらくイルカのアレックスのショーを見ていた。

「それではショーは終わりで～す！はい、アレックス。バイバイして」

アレックスはヒレを振っている。

「バイバ～イ！アレックス！」

ラウラもブンブンと手を振っていた。

「楽しめた？」

「うむ！ふぅ。なんだかお腹が空いたぞ」

イルカショーは存分に楽しんでくれたようだ。
散々騒いでたからねぇ。お腹も空くだろう。

「レストランに行こうか。中にあるんだ」

水族館の中にあるレストランで昼食をとることにした。

「ふむ。このスパゲッティは上手いな」

ラウラはフォークに巻き付けて頬張っている。

「魚介が美味しいね」

「ふむ。あの生け簀にはいくらでもいるからな」

ちらりと大水槽を見ている。

「いや！あれ生け簀じゃないから！ちゃんと仕入れてるから！」
ラウラが見た瞬間に、アジの群れが二つに割れた。まさか…な。
「さて一周したことだし、別の場所に行こうか」
食後に残りを回り、全ての水槽を見終わった。
「うむ。美晴が連れていってくれるならどこへでも行こう」
「そんな大層な所じゃないよ」
移動し、着いたのはゲームセンター。
「ここは何なのだ？」
入り口で中から聞こえる音の大きさに耳を塞いでいるラウラ。質問する声も自然と大きくなる。
「ゲームセンターっていって、色々なゲームを楽しめるんだよ」
「この騒音は何とかならないのか？」

「こういう場所なの」

「仕方ない。で、何をするのだ」

「腕慣らしにガンシューティングでもしよう」

ガンコントローラーを使った、迫り来るゾンビを撃ちまくるゲームを選択。

「ゲームで負ける気はないからね」

「ふむ。なるほどな」

コントローラーの感触を確かめ、見事な構えで画面に向かっている。

「始まるよ」

ゲーム開始。迫り来るゾンビの群れを次々と撃ち抜いていく。ラウラの方はどうだろう。

「ひっ。くっ、そこだ！」

突然飛び出てくるゾンビに驚きながらも、ヘッドショット連発で驚

異的なペースでスコアを重ねていく。
結果は…、わずかな差でラウラが勝利した。
「はぁ、はぁ」
人とゾンビの差に驚き続けたラウラは息があがっている。
「何だかんだでラウラすごいね」
「黒ウサギの腕をなめてもらっては困るな。私は隊長だぞ？」
って膝が笑った状態で言われてもねぇ。
「次はこれにしよう。リズムに合わせてステップを踏むゲームだよ」
「ふむ。体を使ったものなら問題ないだろう」
「そう？じゃ、やってみよう」
曲を選択し、ゲームスタート。ラウラが初心者だから難しい曲じゃなく、初歩的な曲。
僕にとっては何てこと無い曲。

「ぬっ、くっ、はっ！」
ラウラは矢印にタイミングを合わせるのにかなり苦労している。
「ラウラって意外とリズム感無いんだね」
「うるさい！」
唇を噛み締めながら頑張ってるラウラが、ものすごく可愛く見えた。
公園
しばらく過ごしたゲームセンターを後にし、どうしようかと相談すると、着いてこいととある公園に連れてこられた。
「へぇ。僕の家の近くにこんな公園がねぇ。知らなかったよ」
家からは２０分圏内だろうか。
「うむ。この前シャルロットが教えてくれた」
緑が多くて、風が心地いい。小さな川もあるみたいだ。

「あ、ラウラ。あそこにクレープ屋さんがあるよ。食べる？」
移動販売のクレープ屋さんが公園の隅に止まっていた。

「う、うむ！」
何を顔を赤らめてるんだろう。おやつ食べたいのがバレたとでも思ってるのかな。

「何食べる？」
メニュー表を見渡して、注文を考える。

「ブルーベリーだ」

「じゃあ僕は…」

「ストロベリーにしろ」
選ぶ暇なく決定されてしまった。

「決定事項なの？まぁいいや。じゃ一つずつください」

おじさんが一枚ずつ丁寧に焼いていく。結構慣れている人だな。

「女の子同士か。おじさんは反対しないぞ。好き好きだからな」

渡しながらおじさんが言ってきた。意味がわからないし、間違ってるし。

「僕は男です！」

「そうか。悪かった。頑張れよ！」

おじさんはそう言って親指をたててていた。さっきから何言ってるんだ？この人。

「はい、ラウラ」

ベンチに座りそれぞれ一口。

「み、美晴。ブルーベリーもうまいぞ？」

そう言って差し出してきた。

「一口ちょうだい？」

「うむ」

食べさせてくれるのかクレープを口に近づけてきた。だが…。

「何してるのかな？」

ベチャッとクレープがあたり、ほっぺたにブルーベリーがついた。

「すまん。つい手が滑った」

棒読みか。嘘だな。

「まったく…」

ハンカチで拭こうとするが…。

「わ、私が拭いてやろう！」

とハンカチで拭いてくれるのかと思ったら…。

「な！何をするのラウラ！今舌で舐めとったよね！」

頬のクリームを舌で舐めとられた。突然すぎて訳がわからない。

「あう…。すまない。この公園には伝説があって、ミックスベリーを食べたカップルには幸せが訪れるらしい…」

僕の語気に驚いたのか、ラウラがうろたえていた。

さっき見たけどメニューにミックスベリーはなかった。なるほど。こうやって作って食べれば自然と仲良くなる訳だ。

「はぁ…。事情はわかったよ。じゃあ僕も食べるよ」

ブルーベリーをラウラの頬に塗り、ストロベリーを口に入れながらラウラを舐める。

「ひゃうっ！くすぐったい…」

ラウラは少し身をよじった。

「ラウラ。幸せ？」

「うぅ、し、幸せだ」

僕が顔を覗きこむと真っ赤な顔で答えた。

「僕も幸せだよ」

満面の笑みを向ける。

「あう…。さ、さっさと食べて帰るぞ」

パクパクと一気に頬張り、ラウラは食べ終えて先に歩いていってしまった。

ふふ。からかいすぎたかな。

「ラウラ！待ってよぉ！」

夏だから日はまだ高い。夕日のせいではなく顔を赤くしているラウラと腕を組んで学園へと帰った。

第５６話

こんにちは、美晴です。

ラウラも本国に帰っちゃってやることが夏休みの課題ぐらいしかありません。もう終わっちゃうし。……暇です。一夏とは訓練ぐらいしかすること無いし。

「なんか面白いこと無いかなぁ」

のびをしながら呟いてみる。

「部屋にいてもつまらないから歩いてみるか」

寮内を適当にブラブラ。

ありそうで意外と転がってないもんだなぁ。

「あ～ミー君だ～」

のほほんさんが腕に飛び付いてきた。

腕に柔らかい感触。彼女は無意識でやってるのかな。

「うーん、やっぱりのほほんさんいいもの持ってるよね」

シャルよりも大きいとみた。って最近エロ路線だなぁ、僕。思春期

だから真っ当ということにして。

「あ～ミー君えっちぃぞ～」

少しだけ距離をとられた。

「ごめんごめん。でもそういう意思はないから」

伝わった時点で死刑執行。

「あやしいぞ～。ところで何してたの～？」

笑って流してくれたみたい。

「いやぁ今日は暇でね。何か面白いことでも無いかなって」

「シャルルンとラウにゃんが居なくてさみしいんでしょ～」

からかうような笑顔で言ってくる。僕達の仲の良さはクラス公認。

「まぁね」

シャルルンは音の響きからしてわかるけどラウにゃんはどこから…。

まさかあのパジャマで出歩いたのか？

「そういえば今日セッシーが帰ってくるって言ってたよ？」
セシリアさんか。ふむ。あの人なら何か起こすかも。
「ありがと、のほほんさん。面白いこと見つかったかも」
「そう？お役に立ててなにより～。いってら～」
休日のため制服ではなく着ぐるみののほほんさん。トラの腕が振られていた。
「いってき～」
見送るのほほんさんと同じ口調で別れた。
校門
「この辺で大丈夫ですわ。ありがとう、チェルシー」
「いえ、お気を付けて。お嬢様」

「あ、セシリアさん。お帰り！」

いたいた。本当に帰ってたんだ。セシリアさんは大きいカバンをたくさん受け取っていた。

「あら美晴さん。ただいま帰りました」

貴族のお嬢様らしくスカートの裾を小さく広げ、会釈する。

「そちらの方はこの前電話でお話しした…」

セシリアさんの隣にいる女性を見る。姿からしてそんな気がした。

「そうです。私のメイドのチェルシーです」

やはり。セシリアさんが挨拶を促す。

「チェルシー・ブランケットです。いつもお嬢様がお世話になっております」

深々とお辞儀をして丁寧に挨拶をしてくれるチェルシーさん。

「織斑美晴と申します。いつもお世話してます」

こちらも丁寧に挨拶を返す。

「美晴さん！そこは普通こちらこそお世話になっておりますとか言うのでなくて？」

セシリアさんが噛みついてきた。

「いや、だって、ねぇ？」

チラリとチェルシーさんを見る。

「はい。事実でしょうから問題ないでしょう」

頷いてくれていた。前にも一度話したことがあるから、どういう状況なのか察してくれたようだ。

「う、裏切りますの？チェルシー！」

「そういうわけではございませんが」

セシリアさんを軽くあしらうチェルシーさん。大人だ…。落ち着いた雰囲気がいいな…。

「ところでチェルシーさん、もう帰ってしまうんですか？」

「はい、その予定です。お嬢様を学園までお送りするのが今回の役目ですから」

「すぐですか？」

「いえ、帰りの飛行機までは時間がありますが」

「よかったらお話ししませんか？セシリアさんのこともありますし」

前からちゃんと話してみたい人だと思っていた。今回は良い機会だと思う。

「わかりました」

「じゃあ僕の部屋で話しましょう。お茶は出せますから」

「それではお言葉に甘えて。お嬢様はいかがなさいますか？」

セシリアさんを見てみる。少し悩んでいたが、

「…私のいないところで私のことを話されるのも嫌ですし、お邪魔しますわ」

ということで、三人でお茶会をします。チェルシーさんの身分照会等々の面倒な手続きは山田先生にお願いしました。ごめんなさい。

美晴の部屋

「あ、どうぞそちらにかけてください」

使ってないベッドをどかして設置した椅子にかけてもらう。テーブルと合わせてこの前運び込んだ。許可はもらってます。あの人に頼み込めば一発です。

「ウバでいいですか？」

部屋に備え付けのコンロで湯を沸かし、棚から紅茶の葉を取り出した。

「はい」

「私はキャッスルトンが飲みたいですわ」

お嬢様はわがままだな。高級銘柄じゃないか。まぁあるけどさ、少しチェルシーさんを見習えよ。

「はいはい。どうぞ」

ティーカップセットも特別仕様。イギリスの名家の人がうるさいから。

「いただきます」

とりあえず三人とも紅茶を飲む。落ち着いたところで本題に入ろう。

「さてと、お話ですが、チェルシーさんは最近のセシリアさんをどう思われていますか？」

「そうですね、以前と比べるとまず笑うことが増えました」

「なるほど」

「そして、ある男性のことをよく話すようになりました」

「ほほぉ？」

「チェルシー！」

身内からの暴露に慌てているセシリアさん。

「今日はこんな顔をしていた、こんなことをしていた、気に入られるにはどうしよう、そんな感じですかね」

「ふむ。まぁ誰のことを言っているのかは予想がつきますね」

チラリとセシリアさんを見る。

「……」

恥ずかしさのあまり無言ですか。

「僕としては兄は超がつくほどの鈍感なので、できるだけセシリアさんの方からアピールするべきだと思うのですが」

「はい。私としてもそう思うのですが、いかんせん、お嬢様は胃袋をつかめない。日本では結婚相手を決める際の重要なポイントになると聞きましたが」

日本をよく知っているようだ。勉強したのかな。

「みんながみんな、そうとは限りませんが、確かに重要視されています。朝、妻の料理する小気味よい音で起こされると言うのが憧れでもありますね」

「しかし以前ご報告いただいたように、お嬢様の料理の腕は壊滅的です。料理とすら呼べるかどうか…」

結構言うときはズバッと言う人なんだな。

「チェルシー…。なにもそこまで言わなくてもいいではないですか…」

へこんでるなぁ。

「まぁそこは練習あるのみだと僕は思いますが」

まずレシピとは何のためにあるか、それを教えなければならないが。

「確かに。その次の問題として、お嬢様はチョロい。少し優しくされるとすぐなびきます」

「そんなことありませんわ！」

「ふむ。一夏に誉められたりするとすぐ有頂天になり、ホイホイとついていく様は僕もかなりの数確認しています」

「無視しないでくださいまし！」

「そこは改善していただかないと。駆け引きができないのは恋においては致命的です」

駆け引き。うん。押してダメなら…、いや、引いたら一夏はなんとも思わないかも。

「うぅ…。無視しないでください」

全く話に入れてもらえないセシリアさんは小さく呟いていた。

「まぁ一夏も駆け引きができるほど器用ではありませんからね」

「しかしライバルも多いと聞いております」

そこまで情報収集をしているんですか。

「う～ん、今のところは二人でしょうか。来年にはもう一人増えますね」

蘭ちゃんが入学した場合、確実に鞘当てになるだろう。

「やはり…。油断はなりませんね」

「ただ、みなさん直情的な方ばかりですから、そこで貴族ゆえの淑やかさがしっかり出せれば印象付けることは可能だと思います」

他の人には無い何かでアピールするのは良い手段。

「備わってはいるのですが、どうやら一夏さんの前だと恥ずかしくて発揮できないようで…」

恥ずかしいからなのかどうかは何とも言えないが、一夏の前では箒ちゃんや鈴ちゃんと一緒になってギャーギャー騒いでたりするから、淑やかさが発揮できている場面は皆無に等しい。

「やむを得ませんね。セシリアさんは純情ですから。…それにしてもチェルシーさんは本当にセシリアさんのことを考えていらっしゃる」

純情だから一喜一憂してしまう、ということにして、チェルシーさんの話を聞いてみる。

「お嬢様は主従関係になった今も子供の頃と同じく、私を姉のように慕ってくださいます。そのお気持ちにお答えしたい、それゆえでしょう」

なるほど。慕ってきてくれるセシリアさんの信頼に答えたい一心での行動ですか。メイドの鑑と言うべきなのか。でもここまで思わせ

るセシリアさんの人柄も考慮すべきかも。

「ところでずいぶん落ち着いた雰囲気をお持ちですね。女性に聞くのは失礼ですがおいくつですか？」

「１８です」

「二つだけでこんなにも違うとは…。僕、綺麗なお姉さん好きですよ」

ニッコリと笑いかける。シャル達にもこうなってほしいものだ。

「な、何をおっしゃるんですか。美晴さんに誉めていただくほどの器量ではありませんよ」

ん？落ち着きが崩れたぞ？どうしたんだろう。

「んんっ！チェルシー。そろそろ時間ですわよ」

セシリアさんの咳払いで周りの状況に気付いた。窓の外を見たら夕方になっていた。

「そ、そうですね。ではこれで失礼いたします」

席を立ち、帰り支度をしている。

「では下までお送りしますよ」

「は、はい」

校門の前までチェルシーさんを送った。

「では、またいつか会いましょう」

「そうですね。では美晴さん。お嬢様をよろしくお願いします」

「はい」

チェルシーさんは帰っていく。振り返り一礼してきたので、僕もお辞儀する。

チェルシーさんか。僕の周りにはいないタイプだったな。

「美晴〜！ただいまぁ！」

ん？後ろからシャルの声が…。

「ただいま！今帰ってきたんだ！美晴に早く会いたかったから走っ

てきちゃった！」

走り幅跳びのように思いっきりジャンプしてきた。

「お、おかえりシャル」

少しよろけながらも何とかして受け止めた。

「ところでさ、ボクがいない間浮気しなかった？」

「してないよ？」

「じゃあさっきの綺麗な人は誰？なんだか仲が良さそうだったけど」

あぁ、あのやり取りを見てたんだ。どうせだから話しておこう。

「あの人はセシリアさんのメイドで、チェルシーさんっていうんだ。落ち着いた雰囲気の綺麗なお姉さんだったよ。でも１８才なんだって。すごいよね」

純粋にチェルシーさんの話をしただけなんだけど、

「ふぅん、ずいぶんと詳しく説明してくれてありがとう。歳まで聞いたんだ…」

どうやら勘違いされたみたい。

「シャ、シャル？なんだか後ろに炎みたいなのが見えるんだけど…」

「気のせいじゃないかな？」

久しぶりの絶対零度の微笑み！

「ふふふ…」

素直に謝るしかないか。

「ごめんシャル！」

謝りながらシャルに抱きついた。

「美晴！…うぅ、ずるいよ。怒れなくなっちゃったじゃないか」

抵抗もほとんどされず、シャルはおとなしくなった。

「積もる話は部屋で聞くよ。おいで？シャル」

「…うんとしか言えないじゃないか」

文句を言いながら、繋いだ手は全く離さなかった。

「あ、そうだ。セシリアさん宛の手紙預かってたんだ。届けていい？」

「それは仕方ないなぁ。ボクも着いていくね？」

何が書いてあるかわからないけど、チェルシーさんから託されたものだしな。

ＳＩＤＥ　セシリア

まったくチェルシーったら。私のまるで悪口のようなことをペラペラと。美晴さんとかなり盛り上がって、私のことを無視までして。それに美晴さんの笑顔に赤面してましたし。恥ずかしいのはどっちですか。

「セシリアさん。ちょっといい？」

美晴さんが私の部屋へ？何の用でしょうか。

「チェルシーさんがこれ渡してって」

差し出されたのは封筒。中身を確認するとどうやら手紙のようですわね。

「ありがとうございました。わざわざ申し訳ありません」

まるで美晴さんを小間使いのようにしてしまいましたわね。

「さ、美晴。行くよ！」

美晴さんはシャルロットさんに引きずられるようにしてお部屋へお帰りになられました。

それでも嫌な顔一つしていないのが美晴さんらしいですわ。

さて、手紙というのは？

「なっ！」

『カバンの二重底に入っているお嬢様の下着。あれはいささか派手すぎると思います。おしゃれとしては良いのですが、殿方の気を引くにはもう少しシンプルなデザインの方が良いと思われます』

なぜ知っているのです…。チェルシーの前ではまったく二重底は意識しないよう振る舞っていたはずなのに。

……さすが私のメイドですわ。少し侮っていましたわ。

でも、そんなに派手なのかしら。勉強し直しましょう。

SIDE OUT

第５６話（後書き）

ふぇ～ん。美晴君のせいで余計な仕事が加わりましたよぉ！
せっかく夏休みの宿直でいつもより楽ができるなんて思っていたのに…。

美晴君のせいで関係各所に連絡や確認をたくさんする羽目になっちゃいましたよ。イギリス政府や、日本政府、学園の上層部などなど。

「はい！山田です！」

この電話は政府の偉い方からのものです。どうやら身分が確認できたので、問題ないとのことです。
ではこれを学園の上層部に連絡して…。

「山田です。先程の件ですが…、えっ？もう帰ったからいい？でも身分とかは、その…。オルコット家から直で確認が？は、はぁ、わかりました」

私の苦労は一体何の意味があったのでしょう…。

第57話

ＳＩＤＥ　シャル

美晴の部屋で二人でテレビを見ていた。昔日本で流行ったらしいドラマだって。

「シャル。キス、してもいいかな」

振り向いた美晴が突然そう言ってきた。まっすぐにボクを見つめて、その顔は真剣だった。

「ふぇ？い、いいよ？」

いきなり言われたから驚いた。美晴がそんなこと言ってくれたことなんて一度もなかったし。でも嬉しかった。

「じゃあ…」

美晴の顔がどんどん近づいてきた。そして唇が重なる。

「ん…ちゅ…あ…」

思わず呼吸を忘れてしまうようなかなり激しいキスだった。

「ぷはっ。大好きだよシャルロット…。いいかな…」

美晴はそう言い、ボクをベッドに押し倒した。恥ずかしいけど、でも…。

「…うん。美晴になら…いいよ」

美晴は一度ボクの肩に手を置いたあと、ゆっくりとボタンを外していく。

「きれいだよ。シャルロット」

優しい笑顔で耳元で囁かれる。あぁ、ボクはいつかこんな日が来ることを期待してたんだ…。

「美晴…」

全てを捧げる前にもう一度キスをしようと…

したところで目が覚めた。

「なんだ、夢か…。内容が過激だった…」

心臓がドキドキいってるのがよくわかる。

「ん～それでもいいからもう少し続きが見たかったなぁ。せっかく美晴が積極的だったのになぁ」

時計は朝の5時を指していた。

う～ん、なんだか美晴に今すぐ会いたくなっちゃったな。えい！忍び込んじゃえ！

「鍵開いてる…。不用心だな。でもこれはチャンス。お邪魔しまーす」

美晴を起こさないように慎重に歩き、ゆっくりとベッドに侵入。ラウラも一度やってるからいいよね。

ふふ。かわいい寝顔だな。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

「ふぅ、今日も疲れたな」

僕は自分の部屋のドアを閉める。

「あ、美晴お帰り！お仕事お疲れさま！」

シャルが振り返ってニッコリと微笑んでいた。

「うん、ただいま…って何その格好！」
それに何でここにいるんだ？
シャルはフリフリエプロンで僕を迎えている。
「何って…奥さんの定番じゃない？」
そう言ってひらりと一周してみせる。
「まぁそうだけど…」
ん？奥さん？それにさっきお仕事お疲れさまって言ってたな。
僕は自分の格好を確認する。スーツに革のカバン、革靴…。サラリーマン…か？あ、あれだ。きっとこれは夢なんだ。うん。きっとそうだ。スーツがレディースなのもきっとそうだ。
「何やってるの？美晴」
いつまでも考え込んでいる僕が気になったのか覗き込んできた。
「い、いや。何でもないよ」
「そう。で、ご飯にする？お風呂にする？」

ベタな質問だ。

「うーん、今日はご飯かな。お腹空いてるし」

夢の中でも空腹って感じるものなんだな。

「も、もう？仕方ないなぁ」

顔を赤らめながらシャルがテーブルに座った。

「さ、さぁ。召し上がれ？」

手を広げ、僕を迎え入れようとしている。

「え？どういう事？」

「ボ、ボクが今日の晩ご飯です」

顔を真っ赤にしながらうつむいているシャル。…夢、だよね。だったらいいか。

「じゃあいただきます」

シャルに手をかけようとすると…。

「壊れないように優しくしてね？」

頬を赤くしながら甘い声で、でも僕の目を見つめている。

ん～、そんなこと言われたら逆をやりたくなるじゃない！

「シャル！」

シャルに飛び付いた。あぁ、シャルってやわらかい…。

「美晴！何するの！」

シャルが何だか叫んでる。

「だって～シャルがボクを食べてって言ったんじゃないか～」

おかまいなしにシャルを揉む。

「言ってないよ！」

え？まさか…。ちらりと目を開けると…。

「シャル！」

シャルがいた。エプロン姿じゃない。…夢じゃなかった！いや、さっきまでは夢だったけど、今は違う！てことは僕が揉んでたのは…。

「もう！美晴のえっちぃ！」

やっぱり本物…。

「というか何でシャルがここにいるのさ！」

いなけりゃこんな夢見なかったんじゃないか？

「え？いや、なんとなく美晴に会いたくなって…。ラウラも一度してるからいいかなって。そしたら美晴がいきなり、その、ボクのおっぱいを…」

胸を押さえてもじもじしながら、こちらをチラチラ見てくる。

「いや、それはごめん、謝る。ホントごめん。今日何でも言うこと聞いてあげるから」

「ホント？じゃあねじゃあね」

パァッと顔がほころび、はしゃぎ始めた。許してもらえるならある程度はわがままを聞こう。

「本当にこれでいいの？」

「うん！いつも美晴一人でやってるから、ボクもやりたいなぁって」

えー色々ありましてご挨拶が遅れました。
おはようございます、美晴です。

現在は１０時。
お願いされたのは一緒にゲームをしてほしい、ってことでした。
意外なお願い。一緒にどこかに出掛けて、とかそんなことだと思ってた。

「くっ、強いね美晴」

「まぁいつもやってるからね」

今は対戦型の格闘ゲームをしています。普段は一人でアーケードモードを楽しんでます。

「ねぇ、そのコマンド教えて？」

僕が出した技を出したいみたい。

「えーっと、左方向に半回転させて、そのあと右に押し込んで…」

「あ、できた。わぁ～い！」

いつもよりはしゃいでるなぁ。

「次サッカーゲームやりたい！」

「はいはい」

「いぇ～い！ゴール！」

そのあともしばらくゲームをしました。

「次のお願いはねぇ…」

たくさんあるのか指折り数えている。

「続くの？」

「もちろん！え～と、次はお昼を食べさせあいっこしたい！」

「えー？」

今まで何度もやって来たじゃない。別に今さら…。

「や～る～の～！」

ジタバタと駄々をこねている。泣く子となんとかには…。仕方ない。

「わかったよ。じゃあ部屋で食べられるように食堂から持ってこよう」

「わーい！」

食堂だと周りの目があるからな…。いくら公認とはいえ、わざわざ人前でやる勇気はない。

「はい美晴。あ～ん」

シャルがお箸で魚を食べさせてくる。箸の使い方がすごく上手くなっているし、魚の食べ方も上手。身が綺麗にほぐれている。

「あ～ん」

「次ボクにして？」

口を開けて待っている。

「はいはい。あ～ん」

「あ～ん！やっぱり美味しいなぁ。はい、あ～ん」

そんなこんなでお昼御飯を食べました。甘いぞ、この空間。

「ふぅ。結構時間かかるなぁ」

食事だけで一時間半かかってしまいました。

「次は？」

まだお昼過ぎだし、さっきの指が往復してたのをみると、あと五個以上ありそうだ。

「うーん、眠くなっちゃったからお昼寝したい…。朝早かったんだもん」

目を擦りながら、あくびをしている。

「そう。ベッド好きに使っていいよ」
僕は本でも読んでいようかな。
「何言ってるの？一緒に寝るんだよ？」
シャルはポンポンと自分の隣を叩いている。さすがにそれはまずいのでは…。
「なんだか朝のこと意識しちゃうしなぁ」
夢の中に出てきたシャル、可愛かったなぁ。
「べ、別に美晴が続きしたいならボクはいいよ？」
ボタンに手をかけて外そうとしていた。
「いや、いいです」
ベッドの上に寝転がる。
「むぅ。まぁいいや。ね、腕枕して？」

「いいけど、あれいつのまにか腕の感覚持ってかれるんだよね…」
朝起きたら全く指が動かないことがしばしば。相手は千冬お姉ちゃんです。

「お願い聞くって言ったじゃん！」
毎度のごとくほっぺたをふくらませて抗議の姿勢を見せる。

「やらないとは言ってないよ。だから怒らないで？ほら、ここに頭おいて」
右腕を出す。シャルはゆっくりと頭をのせる。

「うん。あぁなんか良い気持ち…」
目を細めているシャル。

「ゆっくり寝なさい」
頭を撫でながら寝かしつける。

「う…ん」
もう寝た！本当に眠かったんだな…。

「ふぁあぁ」

僕も変な形で起こされたから眠いや。おやすみなさーい。

うん？もう夕方か。シャルはまだ寝てるみたいだな。

「美晴ぅ…」

寝言で僕の名前呼んでる。どんな夢かな。

「もっと、激しくしてもいいよ…」

ホントに何の夢を見てるんだ…。

「むにゅ…ん？」

目が覚めたようだ。

「あ、起きた？」

「うん。うわっ、結構寝ちゃったなぁ。やりたいこといっぱいあったのに…」

夕日を見て驚いている。僕としては助かったのかも。

「何の夢見てたの？僕の名前呼んでたけど」

「い、言えないよ！じゃない！覚えてない！」

ブンブンと顔の前で手を振り必死に否定してる。

「あやしいなぁ。何見てたの？」

「覚えてないってば！」

あくまでもシラを切り通そうとしている。

「いいけどさ。そろそろ起きる？」

ずいぶん寝たし、やりたいこともまだあるだろう。

「もう少しこうしてたいな」

と、僕に体を近づけてきた。

「わかったよ」

とはいえもう腕感覚ないんだよね。

「ねぇ美晴。ギュッとして？」

「いいよ」

感覚が生きている左腕で、少し強めに抱き締める。

「今日だけはボクだけの美晴でいてほしいなぁ」

顔を近づけて、いつになく甘い声を発している。

「ねぇシャル？」

「今はシャルロットがいい」

「シャルロット。今日はなんかいつにも増して甘えんぼさんじゃない？」

いつもの倍くらい甘えてきてる感じがする。

「だって…。久しぶりに二人きりなんだもん」

「あぁそういえば」

大体ラウラがいるなぁ。それ以外にも色々あってなかなかシャルと二人きりって時間はない。

「だってさ？最初はボクが独占できたのに、ラウラがああなってからいつも三人でさ？全然ゆっくり話もできなくなって…。しかも最近美晴はラウラのことかまってばっかだし。聞いたよ？ラウラとミックスベリー食べたんでしょ？」

「いつ聞いたの？」

あの後二人は会うことはなかったはずだけど。

「ラウラがドイツから通信してきたの。こんなことがあったって報告して来たんだよ？」

「そうなんだ」

きっとただの報告だろうな。ラウラだから自慢とかそういった他意は一切無さそうだ。

「だからつい羨ましくってさ。甘えたくなっちゃったの」
キュッと僕の服をつかんでいる。

「ごめんね。ミックスベリー、今度食べに行こうね」
あの公園は覚えたし、いつでも行ける距離。

「うん。ねぇ美晴。キスして？」

「しょうがないなぁ」

今日のシャルを見たら、しなきゃいけない気がする。
ほっぺにキス。

「こっちが良かったなぁ。ラウラにはしたのに…」
唇に人差し指をあてて不満がってる。

「あれは事故だけどね。…わかったよ」
僕達の唇が重なろうとした瞬間。

「美晴！帰ってきたぞ！」

ラウラがドア越しに帰国のご報告。

「もう。タイミング悪いなぁ。いいや！」

「……」

された。唇に。

「お帰りラウラ」

シャルは何食わぬ顔でラウラを出迎えた。

「うむ。ただいまシャルロット。二人で何をしていたのだ？」

「うん、映画見てたんだ」

「そうか。美晴。ただいま」

「あ、あぁ、お帰りラウラ」

まだ衝撃から立ち直れていない。言葉にも動揺が出てるかも。

「今度は私も映画が見たい」

「じゃあ今度は映画館に三人で見に行こう。ね？」

シャルが提案した。

「うむ！」

二人きりの時間か…。やっぱりあったほうが二人は嬉しいんだろうな。

第５８話（前書き）

今回はプール。全員で行きます。

第５８話

一夏の部屋

全員集合が鈴ちゃんによってかけられました。

「みんな揃ったわね！じゃーん！これを見なさい！」

出された手には七枚のチケットが握られていた。

「なんだ？これ」

「何かのチケットなの？鈴ちゃん」

「ふふふ。これは今月オープンしたウォーターワールドの招待チケットよ！」

どこなんだ？それ。

「あの人気殺到と言われる大型プールのですか？」

あ、セシリアさんは知ってるんだ。僕知らないなぁ。

「そうよ！この間オープン前に招待チケットを配ってたからたんまりもらったわ！で、一夏と二人きりってのも考えたけど、どうせ七枚あるし、久しぶりに全員揃ってるんだしみんなで行きましょ？」

「鈴にしては珍しく配慮したな」

一夏がうんうんと頷いている。独り占めしようとしないとは。少し大人になったのかな。

「うっさい一夏！あたしだってそういうときもあるのよ！」

と、噛みつく辺り成長してないみたいだ。

「だとさ。じゃあ明日みんなで行くか」

「明日はダメよ」

「何でだ？」

「何でもよ。あんた達もそうでしょ？」

鈴ちゃんは女子陣に質問。

「「「はい（うん）（うむ）」」」

箒ちゃんはそうでもないみたい。

「ってことで行くのは明後日ね」

「何でなんだ？」

いつものように一夏は僕に聞く。大方、新しい水着を買いたいんだろ。

「色々あるんだよきっと」

「どういうことだ？」

わからなくていいよ別に。

当日　ウォーターワールド

こんにちは、美晴です。

一昨日のやり取りの通り、今日がプールの日です。

「うわっ！すごい人の数だな」

一夏が言うように入り口の前にはすでに行列。入場制限がないところをみると、これが全部入るのだろう。

「ねぇ鈴？これ本当にボク達入れるの？」

この行列を見ればシャルが疑問を持つのももっともだ。ゆっくり進んではいるが、並んでたら何十分待たされるかわかったもんじゃない。

「言ったでしょ？招待チケットだって。あたし達は優先的に入ることができんのよ」

「ならば早く入ろう」

箒ちゃんが急かす。

「うむ。このままここにいる意味がない」

ラウラもこの人混みは嫌なようだ。

「わかったわよ。こっちよ」

行列が並んでいる場所とは違う入り口に向かう。

「招待チケットのお客様ですね。こちらからどうぞ」
係員に誘導され、中へ入る。
「じゃ、僕達はこっちだから」
みんなとわかれて一夏と僕は男子更衣室へ。
「あの女の子何でこっちに来てるんだ？」
予想通りの反応が周りから来る。
「きっとあの連れの趣味なんじゃねえか？」
そう捉えますか。一夏が変態扱いされてる。
「なんだっていいじゃねぇか。あんなかわいい子の裸見られるんだぜ？」
うぅ、早く着替えないと…。
「おぉ！脱いだぞ！」

残念。僕はあらかじめ着込んでいたウェットスーツ姿になる。

「なんだよウェットスーツか」

「ビキニかなんかだと思ってたのによ」

着ないよそんなの！

「今日はそれか」

横で服を脱いでいた一夏が聞いてきた。

「うん。今日は学園の子以外もいるしね。それに…」

僕は周りに目を向ける。

「まぁそうだな。早く着替えるか」

僕に向けられた異様な目線に気づいてくれたみたいだ。一夏にも最速で着替えてもらって、プールサイドへ向かう。

「でっかいなぁ！何個プールがあるんだろうな？」

一夏もあまりの広さに多少興奮気味だ。

「見たところ５０ｍプール２５ｍプール。それと流れるプールに、波のプールと飛び込み台に、あとウォータースライダー。そんなところかな」

他にも飲食スペースやサウナとか、ホントに広い。だから人が入るんだな。

「ね？面白そうでしょ？」

辺りを見渡していると後ろから声をかけられた。

「鈴か」

「お待たせ！どうよ今回のは」

臨海学校の時とは色違いのオレンジだった。昨日はこれ買いに行ってたんだろうなぁ。

「どう違うんだ？」

「もういいわよ！」

あ～あ、怒らせちゃった。形が大きく変わらないと気付かないんだろうな。

「あらあら。一夏さんは私のには気付きますわよ？」

前回は青のパレオだったが、今回はエメラルドのパレオ。

「前と同じじゃないのか？」

やっぱり形で全てを判断してるんだな。

「お！箒！やっぱり似合ってるな、それ！」

二人の影に隠れていた箒ちゃんに気付いた一夏。臨海学校で見ていない分、新鮮に写るようだ。

「そ、そうか。約束は果たしたぞ」

なんの約束なんだろうか。とにかく箒ちゃんの顔は湯気が出そうなくらい赤い。

「……」

恥じらう箒ちゃんをよそに、一夏は箒ちゃんの胸をじっと見ていた。確かに生徒一とも言えるほどのものだろうけど。学園一は山田先生。

「一夏。目がいやらしいよ」

「な！何を言うんだ美晴。別にいやらしくなんか無いぞ！」

ワハハと笑うが、どう見たってごまかしきれていないだろう。

「「むむむ…」」

箒ちゃんがさらに顔を真っ赤にし、他の二人は自らのものと比較し悔しがっていた。鈴ちゃんはどだい無理と言うものだろう。

「ん？みんな何やってるの？」

シャルとラウラも着替え終えて合流した。

「な、なんでもないぞー！」

だからごまかしきれてないって。

「ふ～ん、よくわかんないや。で、美晴。ボクのはどうかな」

今回はピンクのビキニ。

「ピンクか。シャルにしては珍しい色だね。でも女の子らしさが出てて良いと思うよ？」

「そう？よかった！」

シャルと話していると後ろから肩を叩かれた。
ラウラだ。

「わ、私のはどうだ」

前回とは真反対の白のビキニ。

「へぇ、白も似合うね。可愛いよ。ラウラ」

文句無しの可愛さ。天使みたいだ。

「そ、そうか。ならばよかった…」

ホッとした笑みを浮かべていた。

「でもなんで美晴はウェットスーツなの？」

うっ。指摘されると思ってたよ。

「だってここには学園の人以外もいるでしょ？そんな人達の前で上半身裸になんかなりたくないし。本当は一夏以外に見られるのは耐性がないから恥ずかしいんだよ。臨海学校だって最初はこれにするつもりだったんだから」

シャルやラウラにですら恥ずかしさは出てくる。

「つまんないの。まぁさっきから美晴に向けられてる目線が、女子に対しての目線だから気持ちはわかるけどね」

シャルが周りを見渡し牽制する。

「どうか汲んでください」

楽しみにしていたであろう二人に頭を下げた。

「さて、美晴のいつもの話が済んだところで遊ぶぞ！」

一夏め。確かに毎回だけどいつものでまとめるなよ。

「まずは２５ｍ２往復で勝負しようぜ。美晴と…鈴でいいか」

５０ｍの方は今何かの準備らしく、使用不可だった。

「ふ。あたしに勝てるとでも思ってるの？」

ストレッチして、準備万端。

「確かに鈴さんは私や箒さんと違って水の抵抗が少なそうですから泳ぎが速そうですわね」

ふふんと鼻で笑うセシリアさん。触れてはならないことを…。

「なにセシリア。喧嘩売ってんの？」

「いいえ？」

ガルルとうなり今にも噛みつきそうな両者。

「にらみあってないで早くやろうよ」

ほっといたらずっとやってそう。

「ふん！」

にらみあいを止め、鈴ちゃんは僕達の間のコースへと入った。

「じゃあ２５ｍの２往復で。審判はボクがやるね？位置についてよ

～い」

僕達はスタートのために構える。飛び込みはプールのルールで禁止。

「ドン！」

一斉にスタート。クロールで泳いでいく。

５０ｍまではみんな同時。ここから徐々に僕と鈴ちゃんが加速。

残り３５ｍ。一夏が少し遅れ始めた。最後のターン！思いっきり壁を蹴り、全力で泳ぐ。鈴ちゃんも全く譲る気配はない。くっ、負けられない！より大きく水をかく。あと７ｍ。もう少しだ！

ほぼ同時にタッチ。

「「結果は？」」

二人でシャルを見上げる。

「ギリで美晴の勝ち！」

「よっしゃあぁぁ！」

「ちっ。あと少しだったわ」

鈴ちゃんが水面を叩く。

「ふぅ。速いなお前ら」
ようやく一夏がゴールした。
「あんたが遅いのよ」
「そうか？これで人並みだと思うが」
「人並みじゃつまらないじゃない」
「うん。頑張って人より上手くなるのが楽しいんだよ」
努力の結果、人を上回るのは健全。
「熱いねぇ。いや、良いことだと思うよ？」
シャルも感心していた。
「しかし私達がおいてけぼりなのはどうなんだ」
全く加われていなかった箒ちゃん達が不満そうな顔を浮かべていた。

「あ、ごめん箒。じゃあ次はウォータースライダーに行くか」

「複数の場合は二人から三人一組でお願いしまーす」

ということで僕はシャルとラウラとすべります。一方…。

「私とだろ！」

「あたしよ！」

「私ですわ！」

予想通り大揉め。みんな一夏と二人ですべりたいんだろう。

「じゃんけんで決めなよ」

一夏には決める度胸無さそうだし、決めたら禍根が残りそうだし。

「よし。それでは」

じゃんけんの結果は…。

「よし！私だ！」

箒ちゃんになりました。

「「むむむ…」」

「はいはい、セシリアさん鈴ちゃん。じゃんけんなんだから文句は言わないの」

あくまでも平等で、平和的な手段なんだから。

「「はぁ…」」

肩を落とすセシリアさんと鈴ちゃん。

「じゃあ箒。すべるぞ」

「ああ」

一夏が前で箒ちゃんが後ろ。

「お、おい箒。抱きつくと、その」

箒ちゃんの胸が押し付けられていた。今日はなかなか積極的じゃないか。

「すまん！き、気になるのか？」

とか言いながら離さないんだね。

「なるよ、そりゃ！」

あれを意識しない方がどうかと思う。

「「むむむ…」」

こっちに関わるのも面倒だなもう。

「とっとと行ってきなさい！」

一夏達の背中を押す。

「うわっ！」

一夏達はパイプの中へと消えていった。

「あたし達はどうするのよ」

いがみ合う二人がペア。

「とにかく行ってよ。僕達が行けないじゃないか」

「あたしが前ね」

「一夏さんはいないですし、どうでもいいですわ」

半ば諦め気味のセシリアさんを後ろにして二人はすべっていった。

「やっと僕達の番だね。行こう？」

ラウラが前で真ん中に僕。シャルが後ろ。

「いぇーい！」

シャルは相変わらず元気。僕は苦手だ。

左右に素早くカーブしてすべる。途中で一回外に出るみたいで、日光が差してきた。そのあとは何回転も螺旋状になったり、大きくカーブしたり。意外と長くてもう3分ぐらいすべっている。あ、終わりが見えた。

ドボーンと大きな水しぶきがあがった。

「ぷはっ！楽しかったね美晴！ラウラ！」

「そうだね」

「うむ」

ん？ラウラの後ろ姿に違和感がある。

「あれ？ラウラ。水着流されてるよ！」

シャルが指摘した。そうだ。上が無いんだ。

「そうか」

隠すそぶりを全く見せない。

「そうかじゃない！シャル！探してきて！」

「オッケー！」

「ラウラ！こっち来て！」

水着はシャルに頼んで僕はラウラを引き寄せ、向かい合わせに抱く。

ウェットスーツだから感触はあんまり無い。

「別に私は恥ずかしくはないが」
表情を全く変えていない。羞恥心が欠如しているのだろうか。
「僕は嫌なの。ラウラの裸を他人に見せたくない！」
「ふむ。美晴になら良いと。意外に独占欲が強いのだな」
「そうだよ。ラウラは僕の嫁なんだから」
「私は夫だろう？」
「日本でも男が夫で女が嫁なの。それに僕が嫁ならラウラをお嫁さんに出来ないでしょ？」
「そうか。私は嫁か」
ラウラがギュッと抱きしめ返してきた。こんな可愛いラウラを誰かに見せてたまるか。
「やっと見つけたよ～！」

シャルがラウラのビキニを見つけてきた。

「じゃあシャルが着けてあげて」

僕は後ろを向く。

「終わったよ」

「じゃあ一夏達と合流しよう」

「ねぇねぇ君達。俺達と遊ばない？」

途中チャラい奴にナンパされた。僕も女の子だと思ってるみたいだ。

「いいえ。連れがいますので」

かまってる暇は無いので突っぱねる。

「そんな事言わないでさぁ」

一人がラウラに手を置いた。バカだなぁ。知らないとはいえ不用意に軍人に近づくなんて。

「痛ぇ！」

ラウラは腕の関節を取り、見事にキメていた。少しは懲りたか。

「はいラウラ。その辺にしてあげて」

ラウラは手を離した。

「ちっ。別のに行こうぜ」

男達はこちらをチラ見しながら逃げていった。

「ちなみに僕、男ですからぁ！」

最後に真実を告げる。驚いた顔が面白かった。

「遅かったな美晴」

「ごめん一夏、色々あってね」

「なんか５０ｍプールでイベントがあるらしいから行ってみようぜ」

『ペア対抗！賞品争奪浮き島レース！』

「ルールは特になし！怪我さえさせなければ妨害自由！優勝賞品は…食事券１０万円！さぁ参加者はいるか！」

なるほど。これのために閉鎖していたのか。

「「「ウォー！」」」

結構盛り上がってるな。確かに１０万円は高額だ。

「一夏。どうするの？」

「試しに出てみようぜ？１０万はかなりのもんだからな」

「そうだね。ペアは？」

「う～ん、また揉めそうだな。よし！女性陣に頑張ってもらおうぜ！」

彼女に頑張らせて、自分はその成果をかっさらう。悪い男だ。

「それはまた…。で僕達は？」

「応援だ。誰がやる？」

当然全員が手をあげる。

「できれば優勝を狙いたいからな、身体能力に優れたやつがいい。

箒と鈴とラウラは確定だな。あとは…」

本気なのか、能力に基づいた的確な選抜を行っている。

「シャル。セシリアさんに譲ってあげて？」

セシリアさんにも少し見せ場を作ってあげないと。

「うーん、ボクも美晴に応援してほしいけど…。いいよ！」

「よし。じゃあ箒とラウラ。セシリアと鈴で組んでくれ」

そのチョイスは何とも…。

「何でセシリアと！」

「私だって嫌ですわ！」

毎度のガルルル…って感じ。

「だからその攻撃性を敵にぶつけろよ。きっと勝てるぞ。お前らに期待してるんだからな？」

二人の肩に手をおき、はっぱをかける。今日の一夏は悪だ。

「な、なら仕方ないわね」

「一夏さんのご期待に添わなくては。鈴さん、一時休戦です」

「いいわよ！」

一夏も扱い方を心得てきたか？

「私達は期待されていないのか？」

箒ちゃんとラウラは少し残念そうだ。

「何言ってるの。本命はこっち。一夏はなだめるためにああ言った

のさ」
箒ちゃんに小声でフォローをする。
「本命！」
意味を少し勘違いしているが、やる気が出るならまぁいいか。
「私は頑張るぞ美晴」
「うん。頑張ってラウラ。勝ったらナデナデしてあげる」
「本当か？よし。我が隊の誇りにかけて優勝しよう！」
フンッと気合いを十分に入れている。
最強だろうな、今日のお客さんの中では。何せ現役のドイツ軍人だ。
「それでは位置について、よーい」
参加者は他にも数組。カップルだったり友達同士だったり。
「スタート！」

参加者は一斉に走り出す。
レース内容としては、浮き島のイカダを走り、真ん中に設置された大きな島の木に吊るされた賞品をとったら優勝。
隣のイカダとの隙間は約３０ｃｍ。妨害はいくらでもあり。それをいかに掻い潜るかがミソ。道具は水鉄砲やら、ボールやら。

とあるペアが落ちた。どうやら鈴ちゃんがそのペアのイカダを蹴って思いっきり揺らしたようだ。
落ちたらそこから再スタート。ただし簡単には登れない。

「鈴さん！ナイスですわ！」

鈴ちゃんを誉めながら、セシリアさんは水鉄砲で他のペアを攻撃している。さすがにセシリアさん。確実に相手に当て続けている。
そのペアも根負けしプールに落下。
ラウラ達も妨害しながら、そのバランス感覚で素早く前へ進んでいる。こんなのは簡単なのか。

「鈴さん！箒さん達を落とさないと優勝が！」

「わかってるわよ！」

鈴ちゃんは箒ちゃん達に向かって水面蹴り。ラウラは確実に避け、箒ちゃんも何とか落ちないよう耐えた。ただその足元を狙って水鉄砲。足元が滑った二人はプールの中へ。

「ナイス！セシリア！これで私達が優勝よ！」

二人は独走状態で真ん中の島へ。ただ賞品は協力しないと取ることができない、高い位置にあった。どちらかが台になる必要がある。

「あんたが下になりなさいよ！」

「この私を台にしようなんて！させませんわ！」

今まで抜群のチームワークだったのに、賞品を前にして大喧嘩。

「今だラウラ！飛べ！」

箒ちゃんを台にしてラウラが跳んだ。漁夫の利で、猛チャージをかけていたラウラ達が賞品をゲット。

「おめでとうございまーす！」

大会終了後、係員から賞品が贈呈された。

「ラウラ！やったね！はい約束通り！」

ラウラをナデナデしてあげた。

「うむ。頑張った甲斐があるものだ」

頭を差し出し嬉しそうにしている。

「箒！よくやったな！すごいぞ！」

一夏も箒ちゃんをなでていた。

「あっ、あぁ。一夏のために頑張ったぞ」

「偉い偉い」

「「むーっ」」

その光景を恨めしそうに見ている敗者の二人。

「セシリアのせいよ！」

「鈴さんのせいですわ！」

こちらは戦犯をめぐってまた喧嘩。

「今日一日あんたのせいで！」

「それはこっちの台詞ですわ！」

とうとうＩＳを部分展開。

「「二人ともそれまずいって！」」

僕とシャルが全力で止めようとするが…。

時すでに遅し。ＩＳから放たれた攻撃がプールサイドを破壊。

「「あぁ～あ…」」

そのあとはこっぴどく怒られた。弁償費用は鈴ちゃんとセシリアさんがそれぞれ支払うことで落着。

「あと、学校の方にも連絡しましたから。そろそろ引き取りに来てくださるとの事です」

「「「「えっ！」」」」

しちゃったよ…。迎えか…。山田先生ならいいけど…。

「このバカ者共が！」

やっぱりこっちだー！

「貴様ら！校外でＩＳを使用するな！条約違反で夏休みの諸注意どころではないわ！」

「使ったのはあの二人…」

一夏がセシリアさん達を指差す。

「うるさい！連帯責任だ！帰ったら反省文３００枚と罰走４０周だ！」

「「「「そんな～」」」」

「千冬姉、この食事券で何とか！」

賞品の食事券を献上し、自分一人だけ減刑をしてもらおうとする一夏。

「ほう、一夏。貴様は教師を買収しようというのか。よかろう。お前だけ…」

「よし！」

「ずるいよ一夏！」

「６０周にしてやろう」

「増えたー！」

「行くぞ！すみませんうちのバカ生徒がご迷惑をお掛けしました」

千冬お姉ちゃんはプールの管理者に頭を下げていた。

罰走が終わったのは翌日の夕方でした…。

第５９話（前書き）

ミハちゃんが少しだけ女装します。

第５９話

おはようございます、美晴です。

現在激しい筋肉痛に悩まされています。原因は先日の２００ｋｍ走です。頭おかしいんじゃない？って、面と向かって言いたくなるくらいきつかったです。でも言えない。一夏みたく３００ｋｍは走れないから。一夏は４０時間かかったそうでまだ意識がはっきりしていません。容赦無いよな。

「美晴。入っていい？」

シャルがドアをノックしている。

「いいよシャル」

「お邪魔します」

「するぞ」

ラウラもついてきた。

「おはよう。今日は何の用？」

「うん、今日はラウラの秋服を買おうかと思うんだ」

「そう。ラウラもオシャレに目覚めたの？」

「シャルロットがうるさくてな。やむなくだ」

自発的ではないか。

「やっぱりね。じゃあ僕もついていくよ」

「うん、そうして欲しくて来たんだ」

「また前みたく、校門で待ってて。僕も支度するから」

「うん」

「うむ」

二人は部屋を出ていった。

秋服か。僕もオシャレには詳しくないからな。何が良いか全然わかんないや。店員さんに任せようかな。

「お待たせ。行こっか」
校門で待っていた二人と合流した。いつも通り腕を組んで歩く。服装は三人とも制服。前みたく、買ったらそれに着替える予定だ。
「この前のお店で良いかな？」
シャルが提案した。
「良いんじゃないかな、それで。僕達のことを知ってくれてるのは大きいよ」
センスもなかなかよかったしな。
「私は服は着られればそれで良いがな」
「相変わらずだねラウラ。でも僕としては可愛い服を来た嫁が見たいなぁ」
「む、夫の望みを叶えるのも嫁の務めだ。そうしよう」
ラウラは少し顔を赤らめていた。

「あれ？いつ嫁になったの？」

立場がいつのまにか入れ替わっていたことにシャルが驚いていた。

「この前のプールの時に教えたの。日本でも女の子が嫁なんだって」

「そうなんだ」

色々話ながら、レゾナンスに向かった。

レゾナンス　洋服店

「こんにちはー」

「いらっしゃいませ！ようこそお越しくださいました！」

前来たことを覚えていたのか、ずいぶんとテンションが高い。

「今日もこの子をお願いします」

「お任せください！」

今回は僕も見学。
店員さんはあれこれと服を持ってきて、ラウラに着せていく。さすがに店員さんの服のセンスはよく、どれも甲乙つけがたい。全部ラウラが可愛く見える。元々可愛いけど。

「これにしましょう！」

店員さんが選んだのはグレーがベースで、胸の辺りが白いワンピース。前回のは膝まであったが、今回はミニ気味。全然印象が違う。

「ふむ。どうだ」

「正直、可愛いとしか言えないくらい可愛いよラウラ」

ラウラの銀色の髪をうまく引き立たせるコーディネート。

「気に入ったか？」

「それはもう！」

「そうか。ならばこれを買おう」

ラウラはこのワンピースを購入。

「ボクはこれかな」

シャルは今回は水色のシャツにチェック柄のスカート。淡い緑のセーターを上に着るようだ。今日はセーターは手荷物へ。

「似合ってるよシャル」

相変わらずどれを着ても似合う。

「良かったぁ」

ニパッと笑うシャル。

「じゃあ次は美晴だね」

「うん。じゃあメンズの方へ」

一歩踏み出そうとするが、

「ダメ！今日は美晴も…」

大声で呼び止められた。あぁ、この笑顔は危険だと僕の第六感が告げている。

「まさか僕にスカートをはかせようなんて…」
自分で口にするのもおぞましい予想を聞いてみる。
「思ってるよ？」
当たり前じゃないという顔をしている。やっぱりそうか…。
「逃げさせてもらいます！」
ダッシュでこの場を後にしようとする。
「そうはさせないよ！ラウラ！」
「うむ！」
ガクンと体の動きが制限された。
「ラ…ウラ。ＡＩＣ使ってない？」
「使っている」
部分的な使用でも違法なのに…。

「そうまでして僕に…」

「「はかせたい！」」

もう逃げ場なし。

「わかったよ。煮るなり焼くなり好きにして！」

こうなりゃヤケだ！

「では…」

ＡＩＣが解かれた。シャルはどんどん服を持ってきて、僕にあてがう。最終的に…。

「うん！これ！」

黒のフリルのついたシャツに赤のミニスカート、縞の入った黒ベースのニーハイに決まった。

何が悲しくて男が絶対領域を作らなければならないのか…。

「ふむ。やはり似合うな」

「店員さんもそう思うでしょ？」

「そうですね、かなりいい線だと思います」

三人とも感心しながら深く頷いていた。店員さんまで敵か…。

「本当に僕はこれで今日を過ごすの？」

二人に改めて確認する。

「決定事項だ」

「異論は認めない！だっけ」

わざわざラウラの真似までして、ノリが良いねシャルは。今は嬉しくないよ。

「はいはい。覚悟しました。にしてもスースーする…」

何だか落ち着かない。よくみんなはこれをはけるな。

「スカートはそういうもんだよ。ねぇ、足触っても良い？」

ゆっくりと腿に手を近づけてきた。

「ダメ！変態シャル！」

「こんなに魅力的なのに…」

勿体無さそうに指を引っ込め、落ち込んでいた。でも。

「落ち込んだふりしても無駄だよ！」

「ちっ、落ちないか」

やっぱり振りだったか。

「もうこれ買うから次行こ次！」

さっさと会計を済まして、店を出る。

「またいらしてください！」

今後については検討させてください…。

「美晴。次はどこへ行くのだ？」

「前に約束したから映画を見に行こう」

「そういえばしたね」

とっさの嘘から生まれたやつだけどね。
レゾナンスの中にはシネコンもある。

「今日の上映は…恋愛ものばっかだ」

「いいじゃん恋愛もの！見ようよ！」

「恥ずかしくない？」

「そんなこと無いよ？好きな人と見る恋愛映画、最高じゃない？ね、ラウラ」

「うむ。どういうものか知らないが、美晴と一緒なら良い」

賛成二票。決定か。

「わかったよ。一番早く始まるやつにしよう。すみません、高校生

三枚」

チケットを買って映画を見た。
内容は、妻が記憶を病気で徐々に無くしていき、精神の死がまもなく訪れるだろう。夫はそれに葛藤しながらも妻を献身的な愛で支えていくというものだった。

涙無しでは見られない素晴らしい映画だった。

「うぅ、ひっく、良い映画だったね…」

シャルは号泣。

「うむ、ぐすっ、愛の素晴らしさを教えてくれたな。うっ」

ラウラも号泣。僕も結構泣いた。

「良かったよね…、うん」

「美晴はボク達の事忘れたりしないよね、ね？」

涙を流しながらすがり付いてきた。

「うん。大丈夫。僕は二人の事忘れないよ。ほら、映画でも愛が奇跡を起こしたでしょ？」

「…うむ。例え忘れても私達の愛で思い出させてやる！」

「うん。その時はよろしくね？」

「うん！」

「うむ！」

「じゃあそろそろお昼にしよう」

レゾナンスではなく、オープンテラスの店で食事をとる。

食後のお茶をみんなで飲んでいた。

「ふぅ。結構食べてたねシャル」

「う。女の子にそういうこと言わないの！」

「ふふ。ごめん」

「はぁ〜」

隣の席からすさまじく大きいため息が聞こえた。一人の女性が机に突っ伏していた。

「はぁ〜」

もう一度深いため息。何だか気になるじゃないか。

「あのーなにかお困りですか？」

思わず声をかけてしまった。

「いやぁね？ん！君達バイトしない？」

ガバッと飛び起きた。

話を聞くと喫茶店の店長さんでどうやらバイトが突然辞めて困っているらしい。しかもそんなときに限って本社からの視察があって下手できないとのこと。

「わかりました。今日だけならやりましょう」

「いいの？美晴。校則ではバイトは禁止だよ？」

本来は外部から干渉を受ける可能性のある行為すべてが厳禁。バイトなんてもっての外。

「人助けだって。それなら大丈夫だよ」

「でも…」

「困ってる人を見捨てる方が教官は怒るだろう」

うん。困ってる人は助けなさいって小さい頃から教わっていた。

「ラウラもそう思うよね。よし決定！お願いします」

僕達は店長さんの店で一日バイトをすることになりました。後悔先に立たず。その言葉が浮かぶのは少し後のことです。

「あのー僕は本当にこれを着るんでしょうか…」

お店の更衣室から外にいる店長さんに聞いた。

「だってそれがうちの制服だもの。しょうがないじゃない？」

そうですか…。覚悟を決めますか…。

「どうでしょうか」
更衣室のドアを開け感想を聞いてみる。
「似合ってるじゃない！これで今日は大丈夫ね！」
メイド服が似合う…ほめられた気がしない。
そう、僕が声をかけたのはメイド喫茶の店長さんでした。かけなきゃよかった…。
「美晴。ボク達も着替え終わったよ？」
「何でシャルは執事服なんですか！」
ちなみにラウラはメイド服。
「だって中性的な顔だし？女性のお客様にも喜んでいただきたいし」
「男なんですから僕だって執事服が着たいです！」
「「「却下」」」

ダメか…。

「さ！三人ともお店に出てちょうだい！」

仕方ない。やるか。

「おかえりなさいませご主人様！」

「可愛いね！君新人？」

「美晴と申します。こちらのお席へどうぞ。ご用はなんなりとお申し付けください。では失礼いたします」

メイド服を着て男の人に可愛いって言われている。僕は一体…。あぁ、胃が痛い…。

「美晴ちゃん！これ四番に！」

紅茶セットか。

「はい！」

「次これを八番に！」
今度はケーキ。
「はい！」
かなり盛況で、さっきから走り回っている。この忙しさが僕達のせいでないことを願いたい。
さて、二人はどうだ？
「お待たせいたしましたお嬢様。ケーキセットでございます」
落ち着いた雰囲気で給仕していた。様になってる。
「この子かっこいい！」
「王子さまみたい！」
やはり女性客にかなり受けていた。僕がその立場になりたかった…。
ラウラはどうだろう。苦手そうだからな。
「水だ！」
ダンッとテーブルにコップを強く置いた。少しこぼれてる。

「注文はなんだ。早く決めろ。こちらも暇でないのでな。…そうか。よし。待っていろ」

うーん、あれは接客と呼べるのか？

「あの子のつれない態度。何だか良いよな」

「あぁ。あそこまでしっかりツンを演じられるのはすごいな」

演じてはないけどね。とにかく一部の人にうけていた。

しばらくしてようやく店は落ち着いてきた。

「三人ともありがとう！おかげで本社の人にも良いところを見せられたわ！」

「それは何よりです…」

僕は精神的にぐったり…。

「おい！お前ら全員手をあげろ！」

ぐったりしてたらいきなり黒い覆面の人達が入ってきた。銃で武装している。

「「「キャアァァァ」」」

店内は一瞬にして大パニック。

「うるせぇ！」

犯人達は銃を威嚇目的で発砲。店内は静寂に包まれた。

「兄貴。どうしましょう。警察が囲んでますよ」

「大丈夫だ。こっちには人質がいる。それより金はどうした」

「確保してます。それにしても3億か。かなりの額いきましたね」

「あの銀行は警備は甘いからな」

なるほど、銀行強盗の一味か。警察に囲まれるとはバカだな。

（さてと、どうしようかシャル、ラウラ）

僕達はあるテーブルを盾にして状況を観察。小声で話し合う。

（ふむ。見たところ素人だな）

構えや所作で実力を見極めたみたいだ。

（持っている銃はどうやら正規品じゃないね）

レプリカ品か。どんなレベルかは推して測れる。

（なるほど。よし。ラウラが陽動を仕掛けて、その間に後ろから僕達が鎮圧。これでどう？）

陽動は危険が伴うが、場馴れしているラウラに任せるのが一番だろう。

（うむ。それでいい）

（じゃあ作戦スタート）

「お帰りなさいませご主人様。お飲み物をどうぞ」

まずはラウラが犯人達にメイド姿のまま近寄る。少なからず油断が生まれるはずだ。

「なんだテメェは！」

犯人の一人がラウラに迫る。

「まぁ落ち着け。ここはそういう店だからな。どれ、ひとつもらおうか」

リーダーとおぼしき奴がラウラに気を向けた隙を付き、裏から雑魚を片付ける。

「ぐあっ！」

回し蹴りで一人。

「何だ！うわっ！」

シャルが足を絡めとり床に叩きつけた。

「何が起きた！うっ」

ラウラが頸動脈を絞め、一瞬で気絶させた。

「こっちには銃がある！あれ？」

リーダーは懐を漁っているが、

「これのことかな？」

目的の物はシャルが指でプラプラさせていた。

「貴様！」

奪い取ろうとするが…。

「チェックメイトだね」

別の奴から奪い取った銃をリーダーの後頭部に突きつけた。

「ラウラ。捕縛して」

「了解」

あっという間に全員を縛りあげた。

「美晴。これヤバイよね」

店の中は暴れたせいで色々な物が壊れ、店長達は気絶してた。

「…今の内に逃げよう」
混乱の隙をついて、何とかして店から脱出。警察に感付かれないようにするのに苦労した。

「いやぁやり過ぎちゃったなぁ」
店長さん達大丈夫だったかなぁ。

「いいんじゃないかな。最終的に解決だし。ね？ラウラ」

「うむ。しかしあいつらは3億を盗んで喜んでいたのか。私の口座には２０００万ユーロあるから穏便に渡せたのだが」
えぇとレートが大体1ユーロ１１０円ぐらいか？ということは…。

「２２億円？！ラウラそんなに持ってるの？なんで？」

「ふむ。候補生の給料と軍の少佐としての給料があるのだ。何に使えばいいのかわからなくてな。気付けばそんな額になっていた」
すごい…。いくら二つのお給料があるからってそんな額…。

「シャルもそんなにある？」

「ボクは全然。普通の額だよ」

やっぱりラウラが異常なんだ…。僕のお財布も分厚くならないかなぁ。

「ねぇ美晴。パジャマ買おうよ」

気付けばあの店の前。

「え？もうあるでしょ？」

白ネコのパジャマが。

「違うよ。美晴のをだよ」

「いや、いいです」

「いいから！ラウラ。美晴を逃がさないでね。ボク買ってくるから」

「了解した」

ラウラは僕の関節を巧みにとり、身動きをとれなくさせた。

「放してー！」

「ダメだ」

抵抗すればするほど、より関節がきしむ。

「はい！買ってきた！」

わずか数分。たぶん最初からそのつもりだったな。

シャル・ラウラの部屋

「これ僕が着るの？」

「もち！」

手渡されたのは三毛猫パジャマ。

「もう。じゃあ着るからちょっと待っててね」

脱衣所を借りて着替えた。

「にゃーん」

一切のポーズをとらず、ただ鳴いただけ。毛並みの良さは相変わらずだが、いかんともしがたい恥ずかしさ。

「似合ってるよ！美晴！」

「うむ。眼福だ」

とか言ってる二人も例のパジャマ。はぁ。

「美晴はこっちか？」

部屋の外から一夏の声が聞こえる。

「ここにいるよ一夏」

シャルが廊下に出て一夏を呼ぶ。

「おっいたいた」

部屋に入ってきた。

「ほお。猫三匹か。なかなか面白い光景だな」

僕達をじろじろと見ている。

「僕は乗り気じゃない…」

「そう言うなって。ほれ差し入れ！」

一夏がケーキの入った袋を渡してきた。

「今日鈴と街に行ったら人だかりができててな。強盗にあったんだが、何とかなったらしい。その店が配ってたケーキだ」

…心当たりがありまくりだ。袋にはあのお店の名前が書かれていた。

「ん？どうした三人とも。表情が変だぞ？」

「いや！なんでもないよ！ねぇ？シャル、ラウラ！」

「そうだよ！なんでもない！」

「うむ！何でもないぞなんでも」

三人とも何とかして取り繕う。

「そうか？ならいいが。お茶入れようか」

一夏が紅茶を入れてくれたが、肉球が邪魔してすごい飲みづらかった。

さて、後で鈴ちゃんに具合を聞くか。

第６０話

ＳＩＤＥ　一夏

さっき意識取り戻せた。あぁきっつぅ。まだ腰から下の感覚がはっきりしてねぇ。なんだよ３００ｋｍマラソンって。某チャリティー番組でも三年分ぐらいだぞ。
我が姉の思考はどこか飛んでいるときがある。
昼飯食ったし今日はこのまま部屋でゆっくりしようか…。

「一夏！買い物に付き合いなさい！」
乱暴にドアを開けて鈴が入ってきた。…無視。

「一夏！」

「……」

「…ねぇ一夏ってば。…無視しないでよ。こっち向いてよぉ。ぐすっ。一夏ぁ」

「わかったよ！だから泣くのやめろ！」

「よかった！じゃあ今日買い物付き合いなさい！」

泣いたり命令したりうるさい奴だ。

「俺は疲れてんの！知ってんだろ俺がグラウンド６０周したの！」

おまえらの１．５倍だぞ！

「知ってるわよ！でも買い物行くの！」

「答えになってねぇ！いいから寝かせろ」

ちっとは俺の事情を考えろよ。布団を被る。

「…じゃああたしも一緒に寝る」

何故そうなる。

「よし買い物行こう」

「変わり身はやっ！」

「大体何買いに行くんだよ」
街に向かいながら鈴に今日の目的を聞いてみる。鈴は今日キャミソールにショートパンツだ。
「色々よ色々」
「特に決めてねぇだけとかじゃないよな」
「そ、そんなことないわよ」
「嘘だろ」
「うっ。…こうして一夏と出掛けるの久しぶりね」
話題変えやがった。
「…あぁそうだな。中学の時は結構あったけどな」
よく週末になると美晴や弾達と出掛けたもんだ。
「ねぇ一夏。あたしがいなくなって寂しかった？」

前にもあったなこの質問。

「あぁ。寂しかったよ」

面倒だから端的に返す。

「あたしね。最初はＩＳ学園になんて来たくなかったんだ」

「ほう？」

初めて聞くな。

「中国に帰ってさ、一夏と離れて寂しくて。その気持ちを埋めるためにやったのがＩＳだった。で、実力をつけたら政府の人がＩＳ学園に行けって言うのよ。正直嫌だった。何の興味もなかったわ。どうせ一夏に会えないってわかってたから。でもニュースを見て驚いた。あんたがＩＳ学園に入るってなった瞬間に入学を申請したわ。手続きのせいで少し遅くなったけどね」

そうだったのか…。だから入学式に間に合わなかったのか。

「今は楽しいか？」

「そうね、セシリア達がいてこの前みたくケンカもするけど、基本楽しいわね」
そのケンカが減ると俺に平穏な生活が訪れるんだが…まぁでも。
「そうか。やっぱり鈴は元気ではしゃいでる方が可愛いぞ？」
「な、何言ってんのよ一夏。あ、あたしはいつでも可愛いわよ」
自分で言うか。
「お？ゲーセンあるぜ。少し遊んでこうぜ」
「…まぁいいわよ」
なにふくれてんだ？
ＳＩＤＥ　ＯＵＴ
ＳＩＤＥ　鈴
何でよ。恥ずかしい過去を聞いて、それで可愛いとか言っといて。
何でゲーセンに心持ってかれるのよ。
もうちょっと良い雰囲気になるのが普通じゃないの？

「鈴！エアホッケーやろうぜ！」
はしゃいでるのはどっちよ。
「よし。俺からな！それ！」
はぁ付き合ってやるか。
「負けないわよ！くらえ！」
壁にバウンドさせ、一夏の右を突いた。
「ぬおっ！くっ、もう一回！」
「ふん！何度やっても同じよ！」
「ま、当然の結果よね」
結果はあたしの圧勝。
「相変わらずすごい反射神経だな、鈴」

ポリポリと頭をかいている。

「まぁね。で、一夏はフェイントに弱すぎなのよ」

「そうかもしれないな。気を付けるよ。次はあれやろうぜ」

ＵＦＯキャッチャーか。

「あのぬいぐるみ良さそうね」

かわいげなクマのぬいぐるみが一番奥にあった。

「よし。俺が取ってやるよ」

一夏があたしのために？珍しいじゃない。どれどれ。

「あっ。次だ次。くっ。あと少しなんだけどなぁ。よし、もう一度！」

もう四回も失敗してる。あぁじれったい。手を出したくなる！でも一夏があたしのために頑張ってるんだし、ここは我慢しないと。

「よぉし取れた！どうだ鈴！」

「一夏にしてはよくやった方ね」

憎まれ口がつい出てしまう。本当は素直に喜びたいんだけどついね…。

「ほれ！大事にしろよ？」

約束通りあたしにくれた。少しは素直な反応してみようかしら。

「…する。絶対にする！ありがと一夏！」

ギュウッとぬいぐるみを抱き締め微笑む。

「お、おう。喜んでくれて良かったよ」

一夏からのプレゼントか…。ふふふ。今晩から抱いて寝ようっと。

「ふう。遊んだら喉乾いたな。近くに喫茶店あったかな」

「あれそうじゃない？」

オープンテラスの喫茶店を見つけた。

「炭酸がいいな。よしすいませーんメロンソーダ！」

「ひとつでいいです！」

「かしこまりました」

「なんだ、鈴は飲まないのか？」

「飲むわよ」

「だってひとつじゃ…」

お楽しみがあるのよ。こういう時は。

「お待たせしました」

メロンソーダにストローが二つ。配慮が行き届いてるわね。

「どうやって飲むんだ？」

「いいから一夏は普通に飲んで」

「あぁ」

一夏は首をかしげながらストローに口をつけた。

「じゃ、じゃああたしも」

もう一本のストローで飲んでみる。ちょっと上目遣いにして…。

「り、鈴！顔が近いぞ！」

顔を真っ赤にしてのけぞり手で隠してる。作戦成功ね。でもそのリアクションは女子がするのよ普通は。

「ひとつだもの。こう飲むしかないでしょ？」

「う。こ、交互に飲もう交互に」

怖じ気づいたか。まぁ期待してなかったけどね。

そのあとは交互に飲み、軽く食事した。

「ふぅ。でさ、結局何を買いに来たんだ？」

「あ、忘れちゃった」
もともとでまかせだし。
「何だよ。だったら寝てたかったぜ」
「あ、そうだ。服が買いたいんだったわ」
今思い付いて言ってみただけ。
「服か…。俺つまらなさそうだな」
「どうせなら一夏が選んでよ」
「俺がか？センスには自信無いぜ？」
知ってるわよそんなの。今日だって正直何とも言えない感じだし。
「一夏に選んで欲しいの！」
「…仕方ない。文句は言うなよ？」
一夏に選んでもらった、それに価値があるのよ。

近場にあった洋服屋へ移動。

「うーん、これか？いや、でもなぁ」

こいつでも一応悩むときがあるのね。意外だわ。適当に選ぶだろうと思ってたのに。

一夏が真剣な顔で私の服を選んでる、そう思うとにやけちゃう…。

「鈴はどれ着ても可愛いからなぁ」

「へっ？」

完全な不意打ちだわ。まさかそんな言葉が一夏から聞けるなんて。

何？これは夢？

「うーん、よし。これだ」

へぇ。意外と良いセンスしてるじゃない。ノースリーブのシャツにスカートね。

…スカートか。一夏、パンツルックよりもこういうのが好きなのかしら。

「あんたにしてはまぁまぁね。じゃ、これにするわ」

「そうか。俺外で待ってるな」

嬉しいのに。心の中は躍りまくってるのに、なんで素直になれないんだろう。

「そろそろ帰ろうぜ？暑いし」

「そうね。帰ろっか」

実際これ以上は何をしようか浮かばない。

「ん？鈴。あそこなんだか人だかりできてるぞ？行ってみようぜ！」

ある場所に人が集まってザワザワと穏やかじゃない感じがした。

「野次馬根性丸出しね一夏」

行ってみるとパトカーが何台も止まっていた。

「何があったんです？」

近くにいた人に聞いてみた。

「いやぁ銀行強盗が籠城してたらしいんだけど、警察が踏み込んだら全員縛り上げられてたんだと」

「はぁ。変ですね」

ん？何だかあの辺に見知った顔が…。気のせいかな。

「鈴！この店ケーキ配ってたからもらってきたぞ！営業しようがないからただで配るんだとよ。リピート狙ってるのかな」

こいつは…。どうも人とは全然違う着眼点を持ってるようね。普通この状況を見たらもらいに行かないわよ。

「美晴に良い土産ができたな。うんうん」

笑顔で頷いてる。

「相変わらず仲が良いわねあんた達兄弟は」

いつもお互いの名前が出てくる。そのぐらいの存在にあたしもしてくれないかな。

「まぁな。さて帰ろうぜ」

一夏はスタスタと歩いていった。

「歩くの速い！」

「お、悪い。よし鈴。手ぇ出せ」

「いいけど？」

何するつもりなのかしら。

「ほれ」

一夏が手を握ってきた！

「いいい一夏？」

「ほら、なんだその…、デートみたいなものだったしな」

「えっ！」

一夏もそう意識してたの？ならもっと色々やるべきだったかも。

「あれ？冗談だったんだけど」

「バカ！」

人をその気にさせといて！こうなったら！

「り、鈴！指絡ませるなよ！」

いわゆる恋人繋ぎ。

「ふん！当然の報いよ！」

とは言いながら、ウキウキ気分で学園まで手を繋ぎながら帰った。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

「…というわけよ」

今日あったことを鈴ちゃんから聴取。

「ふむ。鈴ちゃんにしては思いきった方だね。楽しかった？」

「それはもう！」

今もクマのぬいぐるみを抱き締めている。

「そう。憎まれ口が減れば鈴ちゃんは勝てそうなんだけどね」

「…素直になりたいんだけど、なんだかね」

「今みたいにぬいぐるみを抱き締めてる鈴ちゃんなら一夏も落ちるかもね」

抱き締めながら幸せそうな顔で、時折顔を埋めてたりする。
普段とのギャップで例え一夏でもキュンキュンしそうだ。

「…キャラじゃないわよ」

「そこ大事なんだ…」

クマに埋まりながら言われても…。

「もう遅いし寝るわね」

「それ抱きながら？」

「もちろん！」

素直…か。先が思いやられるよ。

「あ、今日その事件があった店の近くで美晴らしき人を見たんだけど…」

げっ。目撃されてた。

「ひ、人違いじゃないかなぁ。僕は今日そっちには行ってないし」

「ふぅん、そう。ま、あたしもあんた達を見習って少しは頑張るわ」

「う、うん。頑張ってね。おやすみ」

「おやすみ」

ふぅ。なんとかごまかせただろうか。ばれたらただじゃ済まないからな。

さて、僕も寝るか。

第６１話（前書き）

夏祭り。
自分が子供の頃はどんな屋台があったかあまり印象にありません。

第６１話

こんにちは、美晴です。

時期はお盆。各地でお祭りが開かれているんでしょうね。箒ちゃんの親戚が神主さんの篠ノ之神社も例年この時期にお祭りが開かれている。今晩あたり覗いてみようかな。

「よう、美晴」

廊下を歩いていると一夏にあった。

「やあ一夏。どう？今夜お祭り行かない？」

「あぁそういえば篠ノ之神社は毎年このぐらいの時期だな。よし、行くか。でもなぁ、最近お前と動くと…」

一夏が僕の背後を見つめている。

「ん？何？」

「美晴！遊ぼ！」

振り返るとシャルが抱きついてきた。ラウラも一緒だ。

「もれなくこの二人が付いてくる気がして」
確かに最近そうかもしれない。
「なんだよ人を応募者全員プレゼントの景品みたいな言い方して」
プクッとほっぺたを膨らましているシャル。
「いや。ただお前らは仲が良いなぁって思ってな」
「夫婦は常に一緒だ」
ラウラは胸を張る。
「はいはい、そうだな。で、美晴。今晩どうするんだ？シャルロットとラウラも連れていくのか？」
「そうしようかな」
一年に一度しかないし、見せてみたいな。
「ん？何の話？楽しい話？」

右側からグイッと顔を出すシャル。…近い。

「今晩篠ノ之神社の夏祭りに行こうかと思ってね。二人もどう？」

「行く！」

「ふむ。よくわからないが興味がある」

「だって。じゃあ僕は二人の面倒見るから。一夏、神社で待ち合わせよう」

「そうだな。遅かったら勝手に動くからな」

そうならないよう努力します。

「うん。じゃまた夜に」

一夏と別れて僕達は学園を出る。

「さて、まず二人の浴衣を買いに行こうか」

夏祭りと言えば浴衣でしょう。

「浴衣？」

知らないか。

「元々は湯上がり用の衣装だったんだけど、外でも着るようになったんだ。生地が風をよく通すから涼しく感じるんだ」

「ふむ。確かに日本の夏は蒸し暑い印象がある」

「色々可愛いデザインもあってね。選ぶのも楽しいんだよ」

「へぇ～。美晴が選んでくれるんでしょ？」

「いいよ。似合うのを選んであげるよ」

「楽しみだねラウラ！」

「うむ！」

僕達は僕の家の近くの和服店へ向かった。昔馴染みで一夏とよく行ったお店だ。

「さてと、二人とも着替え終わった？」

試着室の中にいる二人に声をかけた。

「うん。どうかな」

シャルに選んであげたのは金魚が描かれた白い浴衣。髪をまとめていてうなじが出ている。

このうなじが大事なんだよ。浴衣にうなじは夏の女の子の最高の武器。

「うん、可愛いよシャル。ラウラは？」

「ふむ。帯が決まらないのだが」

中でモゾモゾしている。

「しょうがないな。ちょっと失礼」

試着室の中へ入り、ラウラの帯を締めてあげた。

「あぁ！ボクも失敗すればよかった…」
緩めようとするなよ。シャルはそれでいいの。二人もやるのはさすがに面倒だ。
「さて、出てきてラウラ」
「うむ。どうだ？」
ラウラのは白地の生地に、鮮やかな朝顔が描かれた浴衣。海の時みたいにツインテールにしてある。
「可愛いよラウラ」
「そうか。ならばよかった」
「さて僕も着替えようかな」
おばちゃんから渡されたのを着てみる。
あれ？
「おばちゃん！これ女の子用じゃない！甚兵衛ないの？」

渡されたのは黄色の浴衣。いかにも女の子ですみたいなやつ。帯も赤だし。

「美晴ちゃんはそれで良いのよ！甚兵衛なんてもったいないわよ」

おばちゃん昔から浴衣を渡してくるんだよね。イヤだって毎年言ってる気がする…。

「わかったよ。浴衣は我慢するからもう少ししっとりめのにしてよ」

「しょうがないわね。これならどう？」

やれやれといった顔で渡されたのは、紺の生地にあやめが描かれたもの。

「んーこれならいいか。じゃあ二人とも着替えるから少し待っててね」

さっさと着替えた。

「美晴ちゃんはやっぱり浴衣ね。似合ってるわよ」

嬉しくないけどなぁ。

「そろそろお祭り行こうか」
夕方になったし、いい時間だな。
「ちゃんとやるのよ！」
何をだ。
僕達は篠ノ之神社へ歩いていった。
「ねぇ、お祭りって何の為にするの？」
シャルが質問してきた。
「んー、時期や地方によって色々意味は違ってくるけど、このぐらいの時期にやるのは先祖の魂をお迎えするのが主な目的かな。ま、現代じゃただ楽しむだけのものになってるけどね」
お盆だからって玄関にナスやキュウリが出てる家はあまり見かけなくなってきた。
「へぇ～。あ、もしかしてあそこ？」
提灯がぶら下がっているのを見つけた。

「あぁそうだよ。あそこが篠ノ之神社だよ」
すでに屋台は賑わっていた。
「わー！色々あるよ！」
「うむ！」
ラウラは目がキラキラしている。
「あんまりはしゃいではぐれないでよ？」
「うん！」
聞いてないなこれは。さて一夏は…。
「美晴！」
境内の中ほどで待っていた。
「あ、一夏。お待たせ」

「なんだ浴衣か。甚兵衛は？」

「売ってくれなかった…」

一夏は甚兵衛だ。

「ははは っ。おばちゃんらしいや。ま、諦めるこったな」

「うん、もう諦めてるよ…」

毎年のやり取りだからね…。今年はこっちが折れることにしたよ。

「それよりあの二人どうにかしろよ」

一夏が指した先には…。

「次あっちいこうよ！」

「シャルロット！これを買おう！」

焼きそばやらたこ焼きやら色々抱えながら屋台をはしごしている二人がいた。

「あぁもうあの二人は！ごめん一夏！ちょっと行ってくる！」

「気を付けてな」

「もう！あまりはしゃぐなって言ったでしょ！」

境内のはずれで二人にお説教。

「ごめん…」

「すまない…」

「ラウラ！謝りながらたこ焼きを食べるな！」

熱いのかハフハフと口から湯気が出ている。

「美味しいぞ？」

それが謝る態度か！

「そうじゃなくて！あぁもう！」

「楽しくてつい…。だからあまり怒らないで？」
シャルが頭を下げていた。僕も言いすぎたかな。

「…わかったよ。じゃあはぐれないように僕と手を繋いだ上ではしゃいで」

「うん！」

「うむ。では早速あそこへ行こう」
ラウラに射的へと引っ張られた。

「おじさん、二人分一回ね」
シャルとラウラは射的用のライフルを持つ。

「えいっえいっ！」
シャルも腕前はさすが。全弾を的に当てていた。しかし射的の景品とはそういうもので、当てただけで必ず落ちる訳ではない。

「あれ～？落ちないなぁ」
首をかしげてる。ラウラはどうだろう。
的確に的の重心を崩して、全ての弾で景品を落としていた。おじさんにはいい迷惑だろうな。

「ふむ。なかなかに楽しかったな」
景品を抱えているラウラ。おじさんは少し涙目だった。

「美晴。あれはなんだ？」

「あぁ、わたあめだよ。ザラメを溶かしてふわふわにしたお菓子だよ」

「食べてみたい」
こちらを見つめてくる。

「はいはい。これも祭りの代表的なお菓子だからね。どうぞ」
二人に一つずつ買ってあげた。

「柔らかくて美味しいね」

「うむ。口の中で消えていく感覚が好きだな」

「みんなが好きなお菓子だからね」

「次はあれだ」

「チョコバナナか。いいよ？」

「あむ…。ふむ。合うのだな、バナナとチョコは」

バナナを頬張っている。

「ラウラ。口にチョコついてる」

口の周りがチョコだらけ。ハンカチで拭ってあげる。

「む…。すまない」

本当、子供みたい。

「ねぇ美晴。あれは何なの？」
食べながらシャルが聞いてきた。
「金魚すくいだよ。やってみる？」
「やりたい！」
バナナを食べ終えさせて、屋台へ向かう。
「おじさん、三人分ちょうだい」
おじさんからポイを受け取る。
「えいっ！」
シャルはポイを水に入れるが、勢いが強くすぐ破れてしまった。
「あぁ、破けちゃった」
「こうやって水に水平に動かすんだよ」
僕が手本を見せる。

「上手だね美晴」

「毎年来てやってたから。どうラウラ。出来てる？」

「…ふ。私には止まって見えるぞ」

何故か素早く動く金魚をものともせず何匹も捕らえていた。それもそのはず。ラウラは眼帯を外していた。

「ヴォーダン・オージェってそういう使い方するものじゃないと思う…」

擬似ハイパーセンサーだから動体視力やら反応速度がアップ。でも本来はＩＳ運用時に使うはず…。
平和利用の一つの形なのかもしれないが。

「捕れたのはどうするのだ」

ラウラだけで二十匹超。

「基本もらえるんだけど、寮では飼えないからね。戻そうね」

「残念だが仕方ないな」

おじさんはホッとした表情を浮かべていた。

「さて、そろそろ舞いの時間だから本殿に行こう」

境内を歩いていく。

「舞いって何？」

「うん。神楽舞って言って、神様に奉納するための踊りなんだ。日本の伝統的な踊りだからぜひ二人には見てもらいたいな」

「そうなんだ。誰が踊るの？」

「巫女さんが踊るのが基本かな」

「へぇ～。面白いの？」

「綺麗の方が正しいかな。型によっては荒々しいのもあるみたいだけど。そろそろ始まるよ」

舞台に踊り手が出てきた。

「あれ？箒じゃない？」
舞台上の巫女さんに見覚えがある。
「あ、本当だ。箒ちゃんだ」
「何でなの？」
「よくはわからないけど…。篠ノ之神社は箒ちゃんの親戚筋だからじゃないかな。でも僕も初めて見たかも」
箒ちゃんは舞いを披露していく。練習したんだろう、滑らかな舞いだ。
「美晴の言うように綺麗だな」
「でしょ？ってラウラ。いつの間にかき氷を…」
ラウラを見れば、手にイチゴのかき氷を持っていた。
「さっき勧められたのでな、買ってみたが冷たくて美味いな」
次々に口に入れていく。

「ちゃんと見ようよ…。あ、そんな一気に口に入れると」
スプーン山盛りを口に入れていた。
「く、頭が痛い」
「痛覚に刺激が行くんだよ。ゆっくり食べなさい」
効果があるかどうか定かではないが、首の後ろをトントンする。
「…痛みが落ち着いてきた」
「そう。じゃあちゃんと箒ちゃんの舞いを見ようね」
「うむ」
ラウラを構っている間にもう舞いは終わりの方になっていた。
その後も失敗した様子もなく、見事に舞い終えた。
「すごかったね。何だか神秘的な雰囲気だったよ」
何か感じてくれたみたいだ。

「そう思えたらシャルも日本人だよ」

「えへへ、そうかな」

「箒ちゃんと雪子さんに挨拶しようかな」

「雪子さん？誰？」

もしかして昔の彼女？みたいな目を向けられる。わざわざ昔の彼女に今の彼女を紹介するやついるかよ。

「雪子さんは箒ちゃんのおばさんなんだ。この神社の管理者でね、毎年挨拶してるんだ」

「なんだ。じゃ挨拶しに行こ？」

僕って信用ないのかな。目がさっきと違うもん。本当にあの目の通りなら、挨拶の意味が変わってたかも。

そしてラウラはやっとかき氷を食べ終えた。

「雪子さん、こんばんは。お久しぶりです」

社務所にいる雪子さんに挨拶に行った。

「あら美晴ちゃん。今年も来てくれたのね。ありがとう。隣の女の子は？」

「あぁ二人は僕の」

彼女と言おうとしたが、

「「嫁です！」」

遮られた。

「ちょっと！」

「ふふ。若いっていいわねぇ」

「おばさんまで…。まぁいつかはそうするつもりですけど」

法律上重婚は許されないから色々大変だけど。

「だって。良かったわね」

二人に向かって雪子さんがウインクする。

「「はい！」」

「そうだ。今年は舞い手は箒ちゃんだったんですね」

事情がわからないので聞いてみたかった。

「そうなのよ。去年まではほら、何かあるといけないからなかなかお願いできなかったんだけど、今年からこっちにいられるようになったじゃない？だからお願いしようかなって。箒ちゃんは可愛いから一度やってもらいたかったのよねぇ」

「なるほどねぇ。で、当の本人は？」

どうやら周りに姿が見えない。

「さっき一夏くんが挨拶に来てね。どうせだから二人きりにしてみようかとね」

「おばさんもなかなかやりますねぇ」

うりうりと肘でつつく。

「楽しいでしょ？あの二人見るの」

いたずら好きなのか、おせっかいを焼きたいのか、どちらにしろニヤッとして楽しそうだ。

「じれったくもなりますがね」

全然発展しないし。

「それが青春ってものよ。おばさんには遠い昔だけどね」

「まだまだ雪子さんはお若いですよ」

篠ノ之家の遺伝なのかもと思うぐらいきれいな顔立ち。箒ちゃんも束さんもみんな美人だし、やはりそうなのか？

歳もまだ４０ぐらいだから全然通用する。

「お世辞でも嬉しいわ。さ、あなた達ももう少し遊んで来たら？」

「そうですね。じゃあ行こうかシャル、ラウラ」

もう少し見てまわろう。

ＳＩＤＥ　箒

何故か私は今一夏と境内を歩いている。いや、嬉しいのは確かなのだが。一夏が来るなんて思っていなかった。
期待はしていたがどうせ一夏のことだ、学園でぐうたらしているだろう。そんな風に考えていたら、一夏が私の目の前で舞いを見ていた。
一瞬頭が真っ白になったが、失敗するわけにはいかない。何とかしてミスなくこなした。

「何ボーッとしてるんだ箒」

「いや、少し考え事をな」

「そうか。にしても人多いな。はぐれるなよ？」

「な、ならば手を…」

最後まで言えず、ひっこめてしまう。

「なにやってんだ。ほら」

一夏に手を掴まれた。

「な！何をいきなり！」

「せっかくの祭りなのにはぐれたら楽しめないだろ？」

ニコッと優しく微笑みかけてきた。

「そ、そうだな。楽しまないとな」

この笑顔が罪作りなのだ。

「箒。たこ焼き食おうぜ」

一夏が一舟買ってきた。

「やっぱアツアツはうめぇな。箒も食えよ」

「あぁ。…ぐ、熱いな」

「大丈夫か？あ、箒。口に青のりついてるぞ？」

「ど、どこだ！」

恥ずかしい！一夏の前で青のりを付けた姿をさらすなんて！

「ほら、とってやるからおとなしくしろ」

あ、一夏の顔が近い…。改めてみても一夏はかっこいいな…。

「取れたぞ。どうした箒。顔真っ赤だぞ？」

一夏を意識したからなんて口が裂けても言えん。

「たこ焼きが熱くて体温が上がっただけだ！」

「そうか。次金魚すくいやろうぜ」

楽しそうに一夏はポイを受け取り金魚をすくっていく。

「箒もやれよ」

「あぁ。では」

慎重に金魚の動きを見極めてすくう。

…一夏から目線が来ている気がする。

「一夏。なにか妙な目線を感じるんだが？」

「いや！別に！箒の浴衣がはだけてるのなんて見てないから！」

確認すると胸の辺りがはだけ、少しブラが見えていた。

「な！見るな！」

立ち上がり、着付けを直す。

「だから見てないから！」

一夏は顔をそらしている。

「シラを切ろうとしても無駄だ！」

追求すると、

「許してくれ！」

と一夏は平謝り。

しかし一夏は大きい胸が好きなのか？プールの時も見てきていたな。

今まではうっとうしいだけだと思っていたが、武器になるやもしれん。

「あれ？一夏さん？」

前から一人の女が近づいてきた。む、誰だこの女は。

「蘭か。久しぶりだな」

「久しぶりです一夏さん」

ずいぶん一夏と親しそうではないか。誰なのだ。

「あ、箒。紹介するよ。五反田蘭、中学の時の同級生の妹だ」

「五反田蘭です。よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げてきた。なるほど、礼儀はできているな。

「で、こっちは篠ノ之箒。ＩＳ学園の同級生で、幼馴染みだ」

「篠ノ之箒だ。よろしく」

握手をするが、目には敵意が見えた。そうか、こいつも一夏の事が…。

「一夏さん！私も一緒にまわっていいですか？」

いきなり積極的に攻めるな。しかし一夏なら私と…。

「おお、いいぜ！大人数の方が楽しいからな！」

「やった！」

…そうだ。私はこういうやつを好きになったんだった。

「一夏さん！あれ食べましょうよ！」

蘭はどんどんと一夏を引っ張っていく。私はただ後ろからついていくだけだ。…ふう。こんなことになるなら、やはりおばさんのところに残るべきだったか。

「箒。お前も食えよ」

一夏がりんご飴を渡してきた。

「あ、あぁ。ありがとう」

「一夏さん！次はあっち行きましょう！」

「ちょっと待てって！」

何故だろう。甘いはずのりんご飴が、苦く感じる。このままでいいはずがないな。私も攻めよう。

まず一夏の腕をとる。

「一夏！イカ焼きが食べたくはないか？ほら、あっちにあるぞ！」

「箒まで引っ張るなって！」

「そうですよ！一夏さんが困ってるじゃないですか」

「ならそっちが離せばいいだろう？」

「嫌です！」

「一夏は私とまわっているのだ」

「私ともです！」

「「うーっ！」」

「二人とも落ち着けって！」

一夏は困惑しているようだ。

「おい蘭！いつまで遊んでるんだ！母さんが呼んでるぞ！」

「弾か！助かった！」

また誰かが来た。一夏の知り合いか？

「よう一夏。偶然だな。あ、どうも」

頭を下げ私に挨拶をしてきた。

「弾。こいつは幼馴染みの篠ノ之箒だ。箒。こっちはこの蘭の兄で、俺の中学の時の友人の五反田弾だ」

それぞれにそれぞれを紹介している。

「「どうも」」

互いに挨拶を交わした。

「っと蘭！ほら早く帰るぞ！じゃあ一夏、また今度な！」

「あぁ！今度ゆっくりと話そうな！」

あいつは兄に連れられ、不満そうな顔をしながらもようやく一夏から離れ、帰っていった。

「はぁ。箒も張り合うなよ」

一夏は二人を見送りながらため息をついた。

「すまない。大人げなかった」

仲が良さそうにしていたからつい嫉妬してしまった。

「まったく。ところで今日は花火上がるのか？」

「確かそろそろのはずだったが」

花火師のみなさんがおばさんに挨拶しているのは見た。

ドーンと一つ二つ花火が上がり始めた。

「やっぱり夏祭りは花火だな」

一夏は空を見上げている。

「そうだな」

「きれいだよな」

「あぁ」

箒も綺麗だ、なんて気の効いたことはまず言わないだろうな、一夏は。

「今年は箒と見られたから楽しかったよ」

「な！そ、そうか…。楽しかったか…」

意表を突かれた。

「去年までは美晴と二人だけで見てたからな。今年はまた箒に会えて、こうして見られてよかったよ」

「そうか…。ならば来年も…」

「そうだな。また見ような」

花火が私達が離れていた時間を少しずつ埋めてくれている気がした。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

「なんだ！敵襲か！」

花火の音にラウラがナイフを構えている。

「ラウラ、ここは日本だから大丈夫。花火だよ花火」

空を指し、ラウラを安心させる。

「ん？あぁ、花火か。条件反射でつい」

「ラウラは真面目だね。花火か。フランスでもイベントの時には上がってたなぁ」

「映像でエッフェル塔のまわりで上がるのを見たことあるよ」
三人で空を見上げる。
「日本の花火は綺麗だよね」
「シャルも綺麗だよ」
「ふぇ？もう。恥ずかしいよ。美晴はそういうの臆面もなく言うよね」
「気持ちは正直に伝えないと」
「美晴。私はどうなのだ」
「ラウラは可愛い。可愛いよ」
花火を見たままラウラの頭をナデナデする。
「扱いの違いにいささか不満があるが、まぁ良しとしよう」
「来年もこうして三人で見ようね」

僕は二人の顔を見ながら言う。

「うん！」

「うむ！」

来年だけじゃなく、これからもずっと…。

第６２話

こんにちは、美晴です。

夏休みもそろそろ終わります。
この機会に一度家に帰り、掃除やら風通しをしようということで一夏と一緒に帰宅です。

「ふぅ。五月に一度帰ってきたが、三ヶ月空けると汚れがひどいな」
玄関からリビングへ向かって歩く一夏が所々指で撫で、呟く。

「梅雨の間帰ってなかったから、お風呂場とか大丈夫かな」
荷物を置きながら一番ヤバイだろう場所を気にする。

「そうだな。一度見ておくか」
僕達はお風呂の扉を開ける。

「うっ…」
予想はしていた。カビが生えてはいるだろうと。
ただしばらく使ってない以上、そこまで湿気はこもってないはず。
なんとかなる。そういう甘い考えを持っていた。

「これは…、重点的にやらざるを得ないね」

「よくよく考えれば、千冬姉は時々帰ってたんだよな」

あぁ、だからこうなったと。忘れてたよ。

「今日は徹底的に掃除しよう」

「そうだな」

今回の予定は二泊。だから初日の今日は掃除にすべてを費やそう。いつものように掃除用の服と装備を身に付け、いざ戦闘開始。

「風呂は後回しで部屋を片付けるぞ」

「了解！」

リビングとキッチンを二人で済ませる。幾分散らかっていたが、手間はさほどかからない。

そのままそれぞれの部屋へと移動。

使っていないから荷物は全然散らばっていない。ほこりを落とすだけで済みそうだ。

「美晴！第一の難関に取りかかるぞ！」
毎度のごとくあの部屋は難関。
「はぁ。またぐっちゃぐちゃだねこの部屋」
「千冬姉も片付けられないなら使うなっつうの」
またこの前みたくゴミが散乱していた。よくこんな部屋に帰ってくる気になるよな。
「愚痴っても仕方ないからやろうか」
「鈴呼ぶべきだったかなぁ」
確かに人手はほしいけど、
「今回は泊まりだし、仕方ないよ」
うちに泊まらせるわけにもいかないし。
「そうか…。じゃあ頑張るか」

やる気が最低の状態でスタート。

「えぇと、ビールの缶はこっちで、おつまみの袋はプラか。んで、紙くずがどっさり。一夏。袋取って」

「ほいよ。全くごみだけでどれだけ時間とられなきゃいけないんだよ」

もう四十分はここのゴミと格闘している。

「今日出るゴミの九割はこの部屋からだね」

キッチンのゴミは少しだった。ほとんどをこの部屋で食い散らかしていたんだろう。

「いつかゴミで床が抜けるぞ」

一夏の顔はさっきから暗いままだ。

「あはは、そうかもね」

そのあともゴミと格闘し、ほこりを取ったり、物の配置を直したら全部で一時間半かかっていた。

「ようやく風呂に取りかかれるな」
昼過ぎに始めてから、もうすでに時刻は四時。このままじゃ今晩お風呂に入れるかどうか…。

「ちゃっちゃとやろう」
カビ取りの洗剤を全面に吹き付け、その間にブラシを用意。
数分置いてからシャワーで流し、そのあとは一夏がブラシで磨きつつ、僕は各所のヌメリを取っていく。

「しかし蒸し暑いな。汗が止まらないぞ」
お風呂場は湿気がこもっていて、汗がだらだらと出てくる。

「あと少しで終わるから、そしたら冷凍庫のアイス食べようよ」

「ご褒美があると思えば多少やる気が出るな」
あらかじめ買い込んでおいたが、ここまで食べたくなるとは思わなかった。多めにしといてよかった。

「終わったぁ！アイスだアイス！」

一夏は冷凍庫へと一目散にダッシュ。バニラバーを出してソファーに寝転がっていた。

「一夏。気持ちはわかるけど行儀悪いよ」

「別に良いだろ。美晴しかいないし」

アイスを頬張りながら文句を言っている。

「いざというときにそういう普段の動きが出ちゃうんだよ」

人前でこんなことしたら笑われちゃうぞ。

「千冬姉に比べりゃましだ」

それを引き合いに出されると…。

「でも、千冬お姉ちゃんは切り替えが上手いからなんとかなってるんだよ」

「表現が合ってるかどうかわからねぇけど、猫被ってるよな」

「誰が何を被っているって？」

千冬お姉ちゃんがご帰宅。今日はみんなで泊まることにしていた。

「げ、千冬姉」

一夏の顔がひきつった。

「おかえり。千冬お姉ちゃん」

笑顔でお出迎え。

「ただいま、美晴。で、一夏。何を被っているって？」

僕には笑顔。一夏にはジト目。

「いや、なんにも言ってないぞ」

必死に抵抗を見せる。

「まぁ追求したところで時間の無駄だからな。今日は二人ともゆっくりしろよ？」

「千冬姉の部屋の掃除で体力のほとんどを使ったけどな」

仕返しとばかりに一夏が痛いところを突く。

「うっ！…すまないな。片付けようとは思うのだが…」

頭をかきながら謝ってきた。

「片付けなくてもいいから、ゴミを捨てる習慣をつけようよ」

「…努力する」

「いいから風呂入ってこいよ。きれいにしてあるから」

「すまないな。色々と。一緒に入るか？美晴」

「さっさと入ってきなさい！」

この歳ではもう無理だろ。

「さて一夏。ご飯作ろうよ」

「面倒だが仕方ないな。やるか」

冷蔵庫に入れていた食材を取りだし、夕飯を作る。
作っている間少し目をはずした隙に千冬お姉ちゃんはもうお風呂から上がっていた。

「ビールでも飲んでて」

一本渡そうとすると…。

「ん？もうやっているが」

ソファーに寝転びテレビを見ながら、すでに二本目に手をかけていた。
言った僕がバカだったよ。

「向こうはほっといて仕上げるぞ」

一夏は手早く下ごしらえを済ませていた。

「はいよ」

今日もメニューは和食。夏だから比較的さっぱりと、かつ栄養バランスを考えたメニュー。

「はい。できました。それでは」

お皿をテーブルに並べ終えた。

「「「いただきます」」」

「ふむ。梅はさっぱりしていてビールに合うな」

ヒョイヒョイと豚肉の梅肉ソースがけをつまんでいく。

「あんまり飲みすぎないでよ？」

「飲み方ぐらい心得ている」

と一気に一缶空ける。絶対今夜はつぶれるぞ。

「千冬姉。野菜もちゃんと食えよ？」

一夏がサラダを取り分け、千冬お姉ちゃんの前に置いてあげた。

「わかっている。食べているからこの体なのだ」

自らのスタイルのよさをアピールしてくる。これは酔ってるよ。

「はいはい。さっさと食べてね」
構うと長くなりそうなので流す。
「ふん。まぁいい」
そのあとはスムーズに食事が進む。そしてお酒も進む。
「むふふ～美晴ぅ」
予想通り酔いつぶれた千冬お姉ちゃん。僕の体を撫で回す。
「やめてってば！ほら！自分の部屋に行って！」
「むー。連れていってくれぇ」
足が完全にふらついている。
「美晴。連れていってやってくれ。皿は俺が洗っておくから」
「うーん、襲われたら呼ぶから助けてよ？」

「気分でな」

お皿を片付けながら耳を疑う一言。

「絶対来い！」

まったく。何が起きるかわからないんだぞ。

「行くぞぉ。美晴ぅ」

この酔っぱらい、どうにかしてくれよー。

階段を踏み外さないように後ろから支えながらなんとか昇らせ、部屋のベッドにぶん投げる。

「姉の扱いが荒いぞー」

今はただの酔っぱらいだ。

「一人で寝られるでしょ」

まだ片付けがあるんだから。

「うーん、寝かしつけろ」

もう。わがままな酔っぱらいだ。

「寝るまでだからね」

ベッドに座り、しばらく横にいるだけだと思ったが、

「抱き枕ぁ」

グイッとベッドに引きこまれた。

「いい心地だ…」

徐々に目を閉じていった。若干毛色の違うシャルみたいだ。

「美晴を小娘なんぞにやらんぞ…。こいつは私のもの…だぁ」

ギュウッと腕がより強くまわされた。そのまま寝たようだ。

助けは…呼ばなくてもいいか。

（どうだ美晴。寝たか？）

ドアの隙間から小声で一夏が話しかけてきた。

（うん。寝たけど今この有り様だし、一夏先にお風呂入ってきて）

（わかった）

もうしばらくしたら腕の力も抜けるだろう。
そのときに出ればいい。

（よっと）

ようやく力が緩んだ。起こさないようにゆっくりとベッドを抜け、
お風呂に向かう。

「お、抜けられたか」

ちょうど一夏が脱衣所から出てきたところだった。

「なんとかね。僕もお風呂入ってくるよ」

「少し温いかもしれないぞ」

「いいよ、別に」

ゆっくり浸かるにはちょうどいいだろう。

「ふぅ。やっと落ち着けたなぁ」

大きく息を吐いて、湯船に浸かる。
あんなに酔った千冬お姉ちゃん、久しぶりに見たなぁ。
さっき言ってた小娘って、きっとシャルとラウラの事を言ってるんだろう。最近の仲の良さが目に余るくらいだから、あんな事を言ってるんだろうな。将来的には認めてほしいんだよなぁ。家族が増えるんだし。でもその場合、書類は出せないんだよなぁ。どうしようか…。ま、その時考えればいいか。

のぼせる前に上がろう。

第６３話

こんにちは、美晴です。

そろそろお昼なんだけど、まだ千冬お姉ちゃんが起きてきません。部屋を覗いてみると、布団をはいで、だらしなーく寝ていた。

「千冬お姉ちゃん。起きてよ。もうお昼になるよ」

ゆさゆさ揺すりながら起こす。寝起きの悪さは昔から。お酒飲んでなくても大体このぐらいの時間まで寝ている。

「うーん、大声を出すなぁ。頭に響く…」

布団をより深くかぶった。

「飲みすぎなんだよ！ほら起きて顔洗ってきて！」

布団を無理矢理はがし、強制的に起こす。

「うー」

頭を叩きながらゆっくりと階段を降りて洗面所へ向かった。

僕は布団を直して着替えを持っていく。

「やっと起きたか千冬姉」

「あぁ…。あんまり大声を出さんでくれ」

「頭痛薬と水だ。顔洗ったら飲めよ」

棚から薬を出し、テーブルに置いてあげた。昔から恒例なので、ここまでは一連の流れ。

「迎え酒が効くんだが…」

世間ではそういうらしいが。

「もうダメ！昼から飲むなんて絶対ダメ！」

教師の意識の欠片もない。

「ふぅ。少しさっぱりした」

ようやく目が覚めたみたいだ。

「じゃあご飯食べちゃってよ。朝昼兼用になっちゃったね」

本来なら朝に食べてもらう予定だった食事を並べる。アジの開きに大根の味噌汁に卵焼き、納豆。純和風の朝御飯。

「今日はどうしようか」

一夏と予定を協議。

「掃除は昨日終わってるし、まったりでいいんじゃないか？」

「それもいいか。千冬お姉ちゃんは？」

「私もそうしようか」

ご飯を食べ終えてゆっくりテレビを見ていると、玄関の呼び鈴がなった。

「はーい。今いきまーす」

ドアを開けると、

「こんにちは美晴さん」

セシリアさんが居た。

「こんにちはセシリアさん。どうぞ上がってください」
お客さん用のスリッパを出し、リビングへ案内する。

「む、オルコットか。よく来たな」
床に寝転びながら迎えている。お客さんの前でだらしない…。

「お、織斑先生！いらしたんですか？」
千冬お姉ちゃんが居るとは思っていなかったようだ。

「ここは私の家だ。居て何が悪い」

「そ、そうですわね。こんにちは織斑先生」

「うむ。ゆっくりしていくと良い」

（美晴さん、なんだか織斑先生変ではありませんか？）

（久しぶりの家でくつろいで、気分が良いんでしょ。普段よりはおとなしいはずだよ）

（そうですか）

「ん？セシリア来てたのか」

洗濯物を干し終えた一夏が戻ってきた。

「こんにちは一夏さん。今日はお邪魔します」

「あぁ。大したもてなしも出来ないけどな」

「いえ、お気遣いなく」

僕の時にはあれが良いこれが良いって言ったくせに…。

セシリアさんは一夏の隣でまったりしていた。

するとまた呼び鈴がなった。

「今日は多いなぁ。はーい」

今度は…。

「やっほ！美晴」

「すまんな突然」

鈴ちゃんと箒ちゃんだ。一緒に来るなんて珍しい。

「どうぞどうぞ。あがって」

千冬お姉ちゃんとセシリアさんが居るけど…。

「セシリア！あんたなんでここに！」

「抜け駆けは卑怯だぞ！」

「あら、あなたたちもどうせ同じような考えだったのでしょう？」

やっぱりいがみ合うか。

「お前達は他人の家に来て挨拶もしないのか。ん？」

二人の後ろに回り込む千冬お姉ちゃん。折角良くなってた機嫌が…。

「「うっ…」」

おそるおそる後ろを振り返った二人。

「「こ、こんにちは織斑先生」」

ぎこちない笑顔で挨拶をしている。

「よし。礼儀をわきまえないやつは私は大嫌いだからな。お前達もゆっくりしていけ」

再び床に寝転ぶ。

（ねぇ、美晴。なんか千冬さん変じゃない？）

（鈴もそう思うか。私もそう思ったが）

（まったりして機嫌が良いのか、それとも二日酔いの影響か、そんなところでしょ）

（そうなの…）

（そうか）

「ん？お前らも来たのか。お茶飲むか？」

一夏は今度はお茶を沸かしていた。騒動の中心を避ける能力を身に付けたのか。

「最初は紅茶以外ダメでしたが、最近はこの緑茶の良さがわかるようになってきましたわ」

ズズッとみんなお茶を口にする。

「そうか。あのセシリアが日本に慣れてきたか。良いことだ」

「最初の一夏達への態度はひどいものだった。な？」

箒ちゃんがセシリアさんを見る。

「うぅ。あのときの私とはもう違う私です！」

顔が真っ赤。

「ほらほら。あまりからかわないの」

「なに？セシリアがどうだったの？」

「そうか。鈴は知らないな。実は一夏にだな…」

「もう！箒さん！」

笑いに包まれたリビング。

と、また呼び鈴がなった。今度はなんだ。宅配便かなんかか？

「はーい」

「美晴！遊びに来たよ！」

「シャル！ラウラ！」

これで全員集合か。

「あがってもいいか」

答える前にラウラはスリッパをはいていた。

「あ、うん。どうぞ」

二人もリビングへ通す。

「うわぁ。みんな居るねぇ。先生こんにちは」

「お義姉さま。こんにちは」

「挨拶はいいが、ボーデヴィッヒ。その呼び方はなんだ」

「美晴が私達を嫁にすると約束をしてくれたので。教官は私の義理の姉ということに」

「ほう。どういう事だ美晴」

返答によってはただでは済まさんぞ、二つの眼光がそう語りながら睨んできた。

「い、いやぁそのぉ」

何この緊張感。

「男ならはっきりしろ！」

「うっ。わかったよ。うーんと、将来的には二人を僕のお嫁さんにしたいと思ってます。だから認めてください」

お嬢さんを僕にくださいって言ってるみたいな内容だな。

「後々揺らぐことはないか？」

少し思案した後、先程と同じ視線を向けられる。

「無いです！」

これはきっぱりと言える。

「わかった。美晴の意思は認めよう。ただし、あくまでも美晴の保護者は私だ。二人は美晴と結婚したければ、私を納得させるだけの女になれ。いいな」

条件付きの形だが、認めてもらえた。

「「はい！」」

これで婚約みたいなものか。

「それまでは美晴は私のものだ。いいな」

「「はい！」」

あれ？それも了承するんだ。ということは今後も昨日の夜みたいに抱きついてくるのだろうか。

「さて、私は用事があるからな。少し出てくる」

身支度を整えて、外出しようとする。

「あれ？今日は特に用事は無いって言ってなかったか？」

「いや、急用でな。行ってくる」

シャル達がリラックスできるように気を使ってくれたんだろうか。

「いってらっしゃい」

静かに玄関のドアがしまった。

「どうしたんだろうね織斑先生」

シャルが首をかしげていた。

「さぁ…」

真意はわからないなぁ。

「美晴。お前何俺達の前でプロポーズしてるんだよ」

振り返ると一夏がニヤニヤしている。プロポーズどころか、保護者の許可までもらっちゃったよ…。

「お二人が羨ましいですわ。私も…」

セシリアさん達は一夏を見るが…。

「ん？俺の顔に何かついてるか？」

ほっぺたを触って何もついていない手を見て、不思議そうに首をかしげていた。どこまで鈍感なんだろう。

「「「はぁ…」」」

ため息が綺麗に重なる。ごめんね。もう少し成長を待ってください。

「この後は何するの？」

いち早く暗い世界から帰ってきた鈴ちゃんが一夏に聞いた。

「うーん、何がしたいんだ？」
みんなを見渡して意見を募る。
「ボクは美晴の部屋が見てみたいなぁ」
え？何を言い出すんだいシャル。
「ならば私達は一夏の部屋が見てみたい」
箒ちゃんも乗っかった。
「シャルさん。何でそんなことを…」
「だって将来の旦那様の部屋だよ？チェックしたいじゃない」
「ふむ。寮の部屋とは違って、普段の生活が見えるからな。結婚生活において相手の好きな物や趣味を把握するのは大事だとクラリッサが言っていたぞ」
折れるしかないのか…。
「わかったよ。一夏。僕達は部屋に行くよ」

階段を昇っていくと、

「私達もいきますわよ一夏さん！」

一夏は引きずられて上へ連行されてきた。

「一夏の部屋はこっちよ」

鈴ちゃんが指差していた。

こんな時の三人の連携は大したもので、一夏に一切の抵抗を許さず

そのまま部屋へ…。

頑張ってねぇ。

「さて、僕の部屋はここだよ」

二人を案内する。

「「お邪魔します」」

「片付いてるね。物もそんなに無いし」

部屋を見渡して、シャルが言う。

「昨日片付けたし、必要なものは寮に持ち込んでるからね」
「なぁんだつまんない。面白そうなもの見つかると思ったのに」
「例えば？」
「エッチな本とか？」
何を期待していたんだ、全く。
「僕はそういうの持ってないよ」
「ふむ。ベッドの下にあると…聞くが」
ごそごそと漁っている。
「だから無いってば」
「ふむ。本当に無いな。つまらん」
ちょっと残念そうな顔をしている。

「二人は僕がそういうの読んでて欲しいの？」

「嫌…だけど、やっぱり趣味は知りたいし」

そういうのじゃない普通の趣味ならためらいなく教えてあげるけどね。

「じゃあ、強いて言うなら金髪のフランスの女の子と銀髪のドイツの女の子かな」

試しに二人の顔を見て、からかって言ってみる。

「「えっち…」」

二人とも体を防御する。まさかのラウラまで。シャルと同じ様なポーズを取っちゃって。そんなに意識させちゃったかな。

「二人が大好きってことだからいいじゃない」

「うーん、だってエッチな目でボクとラウラを見てるんでしょ？」

こっちをチラチラ見るな。一度も見たことがないと言えば、確かに嘘だけど。

「冗談だから。気にしないでよ」
そこまで引かれたら弁解しないわけにはいかない。
「…それもいささか不満だ」
どうしろと言うのだ。
端から見ればバカップルな会話を繰り広げていると、部屋がノックされた。
「今日の晩飯どうする？」
一夏がドアの隙間から聞いてきた。
そこまで変な気が回せるなら、別の方向に向けてあげればいいのに。
「うん、作るよ」
もう箒ちゃん達は下に居るみたいだ。
キッチンに行きエプロンをしめる。
「ボクも手伝って良いかな」

「私も手伝いたい」

「うん。じゃあみんなよろしくね」

箒ちゃんと鈴ちゃんにもそれぞれの得意な料理を作ってもらおう。

「私も手伝いたいですわ！」

うーん、死にたくないしな…。今日はご遠慮願おう。

「セシリアさんは一夏とそっちで遊んでていいよ」

「は、はい！」

一夏と二人きりにしておけば事件は起きないだろう。二人きりな分嬉しそうだ。

（いいよね、箒ちゃん、鈴ちゃん）

（普段なら認めないが…）

（今回はいい判断よ。残り少ない夏休み…）

（（病院のベッドで過ごしたくない））

二人の許可も下りたので一夏を生け贄にしてテロを回避しました。

「さて僕は定番の肉じゃがでも作るか」

「あたしは酢豚作るわ」

それ以外レパートリーなかったりしないよね。

「私は前に一夏に褒められた唐揚げにしよう」

「お肉が多いね。じゃあボクはサラド・ニソワーズを」

ニース風サラダか。美味しそうかも。

「私は何をすれば良い。料理は隊でローテーションで作ってはいたが、みんなのようなものは作れない…」

うーん、かといってあっちにもう一人放り込むのも気が引けるなぁ。

「じゃあラウラ。野菜を切ってよ。ナイフ捌きはピカイチでしょ」

役割を与えれば手伝ったことになるだろう。

「よし、美晴。野菜を投げろ」

ナイフを二本構えている。…投げろってどういう事だろう。まぁいいや。投げてみよう。

「じゃあこのニンジンを…」

ラウラに向かって投げてみると…。

「ふんふんふん」

シュバババッとナイフが素早く動き、下に置かれたボールを見るとニンジンが綺麗に乱切りになっていた。あっという間だ。なるほど。大した腕だ。じゃあ次は…。

「ラウラ。薄切りにして」

玉ねぎを投げる。目が痛くなるから嫌いなんだよ。

「任せろ！」

またもナイフが素早く動き、見事に薄切りの玉ねぎが落ちてきた。便利だ。

「すごいねラウラ。時間短縮できたよ。ありがと」
お礼に頭を撫でる。
「ふむ。役に立てたのなら何よりだ」
目を細め気持ち良さそう。
「あとは僕達が作ってるのを見学しててね」
ラウラなら見ながらしっかり作り方を覚えてくれそうだ。
「うむ」
ジーッと僕たちの動きを観察している。
さて、取りかかるか。
野菜とお肉を軽く炒めてから、お水を入れて、煮立ったら調味料を…。あっという間に味が染み込む。これには秘訣があるが、ここでは言わないよ。
盛り付けて、最後にきぬさやを上に添えて、できあがり！
「どう？みんなは出来た？」

「あとは盛り付けだけよ」
鍋を持ち、大皿によそっていく。
「今油を切っているからあと少しだ」
しっかり切らないと、気持ち悪くなるからな。
「ボクはもう出来たよ」
うん、野菜の彩りがきれいだね。
それぞれの料理がテーブルに並べられた。
「では、いただきます」
「「「「「「いただきます」」」」」」
みんな思い思いに料理を取っていく。
「あら、美味しいですわね」
酢豚を一口食べたセシリアさん。中華を見直したようだな。

「うん、やっぱり箒の唐揚げは旨いな。鈴の酢豚も一級品だな」

「そうか。よかったぞ」

「当たり前よ！あたしが作ったんだから！」

どちらも安定した美味しさだ。

「美晴の肉じゃが美味しいね。野菜に味が染みてるね」

シャルがよく味わってくれている。

「うん、よく染み込ませる秘密があるんだ。シャルのサラダも美味しいよ。僕のお嫁さんは料理が上手なんだなぁ」

「えへへ」

「うーむ」

笑顔のシャルとは対照的に、ラウラは考え込んでいた。

「ラウラはゆっくり上手になっていってくれればいいよ。みんなで作って上手くなっていこうね」

慰めるために撫でる。

「わかった。ところで美晴。みんなでこう、美味しいご飯を食べているのだが、これをなんと表現したらいいのだろうか。私では言葉に言い表せられないんだ」

それに悩んでいたのか。

「幸せ、で良いんじゃないかな」

「幸せ、か。こんな時はどんな顔をするべきなのだろうか」

「笑えばいいんじゃないかな」

「そうか」

ニコッとラウラが満面の笑みを見せた。初めて見たが、とっても可愛い笑顔だった。

「じゃあ僕達はお風呂に入ってくるから」

夕食が済み、食器の片付けも終わったのでみんなをリビングに残し

お風呂に入る。

「この家であんなに大人数で食べたこと無かったね」

頭を洗いながら一夏に話しかける。一夏も頭を洗っている。

「そうだな。たまに千冬姉が帰って来るぐらいで、いつもは二人だけだったもんなぁ」

「大勢で食べると美味しいね」

「そうだな」

シャワーで流し終えて、体を洗おうとすると脱衣所から何やら声が。

「あ、あの一夏さん。お背中をお流ししますわ」

は？何をいきなり。

「失礼します」

お風呂場のドアが開いた。

「ちょっと待ってセシリアさん！」

必死に前を隠す。

「ボク達も入るよぉ」

結局全員が入ってきた。みんな水着着用だった。用意がいいな。多少広いから全員入るものの。

「みんな何考えてるの？こんなのダメだよ」

千冬お姉ちゃんに見つかったらシャレにならない。

「旦那様の背中を流すのが奥さんの務めでしょ」

それを持ち出せば大概の事が出来ると思ってるなこいつは。

「まぁおとなしくしろ。洗い方を勉強したのだぞ」

と、ラウラは体にボディーソープをたらし、手で広げ、そのままボクの背中にダイブ。体を密着させている。あ、柔らかい…じゃなくて！

「「「「なるほど」」」」

何を頷いている！これが正しい洗い方な訳無いだろう！

「じゃああたし達も」

鈴ちゃん達も同じように一夏へ。

「ラウラ！これをどこで勉強した！」

「クラリッサが送ってくれた本に書いてあったぞ」

またか。

「今度その人日本に連れてこい！命令だ！」

本気で話し合う必要がある。ラウラが無知だからって変なことばっかり教えすぎだ！

「ふむ。ならば仕方ない。連れてこよう」

「ボクもやるぅ！」

シャルも飛びかかってきそうだ。

「あー！もう！全員出ていけー！」

一夏と協力して無理矢理お風呂場の外に出す。

「いいかい！あんなことはもう絶対にやっちゃダメ！」

お風呂から上がり、五人にお説教タイム。もちろん全員正座。

セシリアさんとラウラがプルプルしているがそんなこと知ったことか。

「嫁入り前の女の子がする行為ではありません！いいですか！」

「「「「「はい…」」」」」

「声が小さい！もう一度！」

「「「「「はい！」」」」」

「ね、ねぇ。ボク達は美晴のお嫁さんじゃないの？」

シャルが少し怯えながら聞いてきた。

「確かにそうだけど、だからといってああいうことはいきなりして良いわけではありません」

嬉しいことは嬉しいけど、精神衛生上宜しくない。

「は、はい…」

「まったく。一夏からは何かある？」

椅子に座りこの光景を見ていた一夏に話を振る。

「いや、特には。でも一つ。いいか。美晴はキレると千冬姉並みに恐い。あまり余計なことはしない方がいい」

「「「「「はい…」」」」」

「あと三十分そのままね」

「「「「「えぇ～？」」」」」

「文句ある？」

五人を睨み付ける。

「「「「「無いです…」」」」」

三十分後、ふらふらになった五人を、寮の門限が近いのでとっとと返した。二人ほどまっすぐ歩けていなかったが、自業自得だ。今日は疲れた。さっさと寝よう。

ＳＩＤＥ　山田

あ、初めての出番ですね。

今日は私もお休みでして、色々やろうかななんて思っていたら、午後になって突然織斑先生がうちに来て、「飲むぞ！」って言ってお酒をどんどんテーブルの上に広げていきました。できれば違う場所でやって欲しかったなぁ。

「山田先生。聞いているのか」

ぐでんぐでんに酔っている織斑先生。原因は美晴君のようで。

「はいはい聞いてます織斑先生」

「あの可愛かった美晴が、今でも可愛いが、結婚の許しを私にもら

おうとしたんだぞ。あの美晴が」

ぐいっとウイスキーをストレートで飲む織斑先生。今夜は思いっきり酔いたいようです。

「まぁあの三人の仲の良さは目立ってましたからねぇ。遅かれ早かれこうなってたでしょうねぇ」

「うぅ…。あの美晴が私のもとを離れてあやつらのもとへ…。仕方ないと言えば仕方ないが、…寂しいな」

「お姉さんですからね、織斑先生は」

「その立場がいまいましいのだ。…山田先生。もっと飲め。ほら。なんだ。私の酒は飲めないのか？」

「い、いえ！飲みますよ？」

酔っぱらいめんどくさいですねぇ。しかも勧めてくるのがどれもアルコール度数が高いものばかり。

私そんなにお酒強くないんですよ。

「でも、織斑先生としてはこのまま諦めるんですか？」

あ、私も酔ってるかも。発言が若干変な感じに…。

「諦め…ないぞ！私は！例え世間に罵られようと私は美晴への愛を貫く！」

立ち上がり高々と手を突き上げて宣誓する。

「ぬふふ。覚悟しておけ美晴。いつか姉ではなく一人の女として意識させてやる！よし山田先生。景気付けにもう一杯」

ごめんね美晴君。焚き付けちゃいました。

頑張ってくださいねぇ。

う、このお酒強すぎ。

テキーラ…。

意識が…。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

第６３話（後書き）

む、山田先生の反応がない…。

「起きろ山田。まだ寝かせんぞ。私の酒に付き合え」

頬を叩くが反応なし。

ちっ、どうせ私は一人だよ。一人寂しく手酌酒さ。

…つまみが欲しいな。山田なら冷蔵庫にそれなりのものが置いてありそうだ。

「ふむ。これはまた」

普段私がつまんでいるあたりめとはまた違う、つまみになりそうなものが豊富だ。

「酔いつぶれた罰として没収だな」

片っ端から回収し、私の胃袋へ酒と共に消えていった。

第６４話（前書き）

生徒会が出てきます。
性格等はこんな感じかなぁってスタンスです。

第６４話

おはようございます、美晴です。

今日から新学期。講堂で集会が行われるので、一夏と一緒に向かっています。

「終わっちまったな、夏休み」

「楽しい日はずっとは続かないもんだよ」

「そうだよなぁ。でも短いよ。もっと色々したかったけど…」

一夏はため息をついていた。

ん？なんだか気配がする。

胸ポケットのボールペンを取り出す。

「ん？どうした美晴」

一夏が僕の行動に疑問を持ったようだが、答えない。それよりも先程から向けられている気の方が重要だ。

「そこか！」

右後方の柱へボールペンを投げる。
キンッと柱ではない反響音がする。

「おい美晴！突然何を…」

「黙って一夏！…さて、誰かわかりませんが出てきていただきましょうか」

「……」

抵抗する気か。

「居るのはもうわかっています。素直に出てきたらどうですか」

「んー、ばれちゃったか」

出てきたのは水色の髪をした綺麗な女性。うちの制服を着ているし、リボンを見る限り二年生か。
手に持った扇子が広がると、尾行失敗と達筆な字で書かれていた。

「これでも気配を消したつもりなんだけどなぁ。よく気付いたね」

あははと笑っている。

「過去に一度誘拐されたことがありましてね。それ以来自分に向けられる気配には敏感になったんですよ」

「あぁ、ドイツの時ね」

「っ！」

何でそれを知っているんだ！この人…敵か？

「あなた、一体誰なんです！何故僕達の事を知っているんですか！」

「まぁ後々わかるわよ。それよりもそろそろ時間よ。行きなさい」

時計を見ると、もう整列五分前。くっ、背中を見せるのは危険な気がするが仕方ないか。

「行くよ一夏」

「お、おう」

一夏を引っ張り、講堂へと向かった。

講堂

今は先生方が挨拶をしている。長いのは相変わらずだが、さっきの事について考えるにはちょうどいい。

制服は確かに学園の物だった。二年生だということも推測できた。ただ、下手したら侵入者かもしれないし、僕達の存在を知ってどこかから送り込まれた人間である可能性も否定できない。どちらにしろ警戒は怠るべきではないか。

『続いて生徒会長の挨拶です』

生徒会長か。そういえばどんな人だったか覚えてないな。入学式の時は緊張もしてたし。

「みなさんおはよう。生徒会長の更識楯無です。一年生のみなさん覚えてくれているかしら」

壇上で挨拶しているのはさっきの女性。生徒会長…。内部の人間だったのか。

「キャァァァ！お姉様ぁ！」

「今日もお美しいですぅ！」

会場から歓声と言うか悲鳴にも似た声が聞こえてくる。
千冬お姉ちゃんに勝るとも劣らない人気のようだ。まぁ確かに綺麗な人だけど。
ん？こっちにウインクで合図を送ってきた。どういう意味かはわからないが、あの行動からは敵意は感じられないな。

「さて、私からは今月行われる文化祭について説明します」
文化祭か。秋は確かにそういう季節だ。

「例年は部活動には人気投票の順位によって部毎に助成金を支給していましたが、今年はその制度を採用しません」
ザワザワと、部費を心配する声が聞こえて来た。

「そ・の・か・わ・り！今年は特別な存在がいるので、それを利用して…」
特別…。まさか。

「人気投票一位を獲得した部活に織斑兄弟を入部させます！」
やっぱりいいい！

「さっすがお姉様！」

「むしろこっちの方が良いわ！」

「秋季大会を犠牲にしてでも一位をとるわよ！」

それでいいのか。とにかく反対の生徒はいないみたいだ。僕達を除いて。

「どうやらみんな歓迎してくれるみたいね。文化祭、頑張ってねぇ」

会長は袖へとはけた。

やばいだろ、この展開。一夏は…。

「……」

気絶してる。

熱狂の渦に包まれたまま、集会は終了した。

廊下

「面倒なことになったなぁ」

「だね。どうなることやら」
僕としてはあの人が明確な敵ではないことがわかったから、まぁいいけど。
二人でため息をついていると、突然グイッと腕を掴まれある部屋へ押し込まれた。
油断していた。まさか学園内でやられるとは。
椅子に座らされ、ゆっくりと目を開けると、誰かが見えた。
「いっちー、ミー君」
あれ？この呼び方は…。
「のほほんさん？えっとここは…」
周りを見渡したが、見覚えのない造りだ。
「ここは生徒会室よ。いきなりごめんね」
会長が視界に入ってきた。
ここがそうなんだ…。表からばれにくい構造なのは何でだ。
「いきなり何するんですか会長」

「たっちゃんって呼んで？楯無でもいいけど」

「じゃあたっちゃんさん」

最低限の敬意を持たせた呼び方でないと…。

「んー、まぁそれでもいいわ」

「さて、聞きたいことは色々ありますが、まずは朝のことです。何故あんな尾行なんて真似を」

敵意がない相手にあんなことされる覚えは全くない。

「んー、あなた達の動きを見てみたかったから、かな？あっさり返されたけどね」

はっきりとは言わないか。

とはいえ一夏は全く感じ取れていなかったし、あの気配の消し方は常人ではできない。

「一体あなたは誰なんです」

「生徒会長よ？」

全く動じることなく答えた。しかし僕が聞きたいのはそれではない。

「誤魔化さないでください。あなたの気配は普通の女の子のものでは無かった」

「しょうがないわねぇ。私は対暗部用暗部、更識家当主、更識楯無。ちなみにロシア代表」

対暗部用暗部…。それに代表って。かなりの実力者だ。

「…カウンターの存在ですか」

「理解が早いのね。その通りよ。世界の裏で暗躍する暗部に対して、秘密裏に制圧を行う存在よ」

「そんな人が何でここに」

「お嬢様にも普通の学園生活を送ってほしいとの前当主のご意向で」

うわっ。横から新しい人が来た。

「えっと…」

「私は更識家に代々仕えております、布仏家の布仏虚と申します。生徒会では会計を担当しております。そこにいる本音の姉です」

丁寧に挨拶をされた。

スラッとした背で、のほほんさんのお姉さんとは思えないほど落ち着いた雰囲気の持ち主。かけた眼鏡と三つ編みがいかにも出来る女って感じ。

デスクとコーヒーが似合いそう。

「あ、どうも。織斑美晴です」

「一夏です」

二人とも挨拶をする。

「虚ちゃん。お嬢様はやめてよ」

「そうでした。失礼しました会長」

頭を少し下げて謝っていた。学園では一生徒で居たいのだろうか。

「あの、のほほんさんは何でここにいるのかな」

さっきから気になっていた。

「私も役員なんだよぉ。ちなみに書記なんだぁ」

知らなかった。確かに部活に入っている、という話は聞いたことは無かったな。

「そのわりにはいつも教室に居ない？」

たいがい、鷹月さんや谷本さんと教室でしゃべっている印象が強い。

「うーん、私がやるとかえって仕事が増えるんだよぉ。だからやらないのぉ」

何それ…。まぁ性格を考えるとてきぱきと仕事をこなすとは到底思えない…。

「会ちょ、いえ、たっちゃんさん。何でこの子が役員になってるんですか」

全然役に立ってないじゃないですか。

「会長以外は会長権限で自由に決めていいって話だからね。布仏の人間だから近くに置いておこうと思ってね。あ、会長は学園最強が

なるってルールよ」

なるほどねぇ。会長は最強か。

「んで、最後に。あの文化祭の件ですが」

今一番聞きたいのはこれ。

「あぁあれ？本来はすべての生徒はどこかの部活に所属する決まりなのよ。二人がどこに入るかというと取り合いになりそうだし、それに文化祭も毎年同じじゃつまらないじゃない？だから今年は二人を利用させてもらったの」

はっきり利用って言いやがった。

「さて、そろそろ教室に行きなさい。授業が始まるわよ」

「わかりました。失礼します」

生徒会室をあとにして、教室へ戻る。授業開始ギリギリだ。

のほほんさんは…？

「間に合ったか！」

「遅い！」

ダメでしたか。

「遅いよぉ？」

のほほんさん？いつの間に！
抜けていると思っていたが、意外と侮れないのか？

「何故遅れた！」

「えぇと」

一夏が言い澱んでいたので、代わりに。

「監禁されました」

「誰にだ！」

あ、顔色変わった。恐い顔してる。
ちゃんと説明するべきだったか。

「更識楯無さんに」

「あぁ、あいつか…。そうか。座れ」

あれ？お咎め無しか。千冬お姉ちゃんも諦めるくらいの存在なのか。

まぁいいや。罰がないのは楽だし。

また授業の日々か始まった。

第６５話（前書き）

最近話が出来ても、投稿をするのが面倒になってきました。

間が空くかもしれませんが、気長に待ってください。

第６５話

こんにちは、美晴です。

あの後お咎めはなく、そのまま授業が始まります。

「えぇ、さっき話していた文化祭だが、外部の人間は基本は入れないが、一人一枚だけ招待チケットを配る。こういう機会には業者や研究者が出入りする。不審者を入れないための措置だ。いいな」

「「「「はい」」」」

僕達が変なのに狙われる可能性も高くなるって訳か。

「それと、クラス別にも出し物がある。何か案は無いか」

「「「……」」」

みんな何が良いか真剣に考えている。

ラウラが手を挙げた。何か良い案があるのか？

「ボーデヴィッヒ。言ってみろ」

「はい。喫茶店を提案します」

なるほど。飲食店なら経費の回収も可能だ。儲けが出る可能性もある。

「して、内容は」

「メイド喫茶です。一夏には執事を」

「ちょっと待ったぁ！」

僕は机を叩き勢いよく立ち上がる。

「なんだ織斑美晴」

「その場合僕は着ることになるんですよね？そんなの断固拒否します！」

「ふむ。これを見てもそう言えるか」

僕の席に近づき、ある写真を見せる。

「こ、これは！」

あのときメイド喫茶でバイトしたときの写真…。しかも更衣室から出た直後の写真だ。犯人はどちらかだな。

ゆっくりと顔を見るとシャルがサッと目線をそらした。お前か。

「どうだ。すでに前例がある以上、拒否できるのか。ちなみにこれでも拒否する場合、この写真をばらまくぞ」

くっ、姉が弟を脅迫するというのか。

「…わかりましたよ。でも衣装はどうするんですか」

無ければできないだろう。これでどうだ。

「私演劇部の衣装担当だから縫えるよ？」

「じゃあ私も協力するわ」

続々と賛同者が…。

「私には当てがあるぞ」

まさかラウラ、あそこから借りる気か。

「ちなみにお前の分は心配いらないぞ。春に届いたやつがあるだろう」

春…、あの時の！

「あれは僕がすぐ焼却炉に持って行ったはず！」

「直後に拾ってきた」

この人は…。

「もう折れちゃいなよ美晴」

シャルがポンと肩を叩く。重要証拠を渡しておきながらよく言うよ。

「…わかりましたよ。受け入れます」

「では、このクラスの出し物はメイド喫茶に決定だ」

キャッキャ女子は喜んでいる。そりゃ君達は良いだろうよ。一夏は執事服だし。でも僕はあれをまたやらなければいけないんだぞ！

はぁ…。

休み時間

「ラウラ。何であんなのを提案したの？」

発端であるラウラに尋問。

「楽しかったのだ、あの時間が。あんな結末にはなったが、生まれて初めて接客をして、人に喜んでもらえる事があんなに嬉しいとは思わなかった。美晴には迷惑をかけるが、もう一度あの感情を味わわせて欲しい」

そう言って頭を下げられた。そこまで言われたらもうなんとも言えない。

せっかくラウラが前向きな感情を抱いてくれたんだ。それを無碍にするのも可哀想だ。

「わかった。ならラウラは楽しんでよ？つまらない顔してたら許さないからね」

「うむ」

好きな人が喜ぶなら、このくらいの犠牲は我慢しよう。

放課後

ふぅ。訓練もまぁなかなかな感じで出来たし部屋でゆっくりするか。
ドアを開けると…。

「あらお帰り美晴君」

すぐさまドアを閉める。１０２６号室。うん、ここは僕の部屋だ。
間違いないな。きっと幻覚だな。まさかエプロン姿のたっちゃんさんがいるはずが…。もう一度ゆっくりドアを開ける。

「おかえ…へぶっ」

飛びかかってきたので勢いよくドアを閉めた。ビタンと言う音がした。多分ぶつかったんだろう。うーん、ここまで来ると幻覚じゃないか。向き合おう、現実と。
再びゆっくりドアを開けた。

「うぅ、ひどいじゃない美晴君。鼻打っちゃったわよ」

赤くなった鼻をさすりながらこちらを見ている。

「誰だって自分の部屋にそんな格好の女性がいれば慌てますよ。それより早く服着てくださいよ」

いわゆる裸エプロンの格好。出るところが出ている素晴らしいスタイルな分、刺激が強い。

「何、私が裸だと思ってたの？着てるわよ一応」

クルリと回るとビキニが見えた。

「似たようなものじゃないですか。早く服着てくださいよ」

「何？意識した？おねーさんのこと襲っちゃう？」

じりじり近寄ってくる。むしろこっちが襲われそうだ。

「もう、何が目的ですか。早くご自分の部屋に戻ってください！」

「やぁよ。今日からしばらくここに泊まるわ」

は？何を言ってるんだ。

「そんなことどうやって」

「生徒会長権限で」

濫用じゃないか。

「本気ですか？」

「本気よ」

目は少し笑ってる。逆らうだけ無駄なのか。

「美晴。ご飯食べに…。な、何この光景」

シャルとラウラがやって来た。今僕は、水着エプロンのたっちゃんさんに迫っているように見えるんだろう。

「いや、これは、その、僕は被害者と言うか…」

「「美晴から離れろぉ！」」

シャルとラウラがたっちゃんさんに飛びかかる。しかし、それを一瞬にして移動し受け流し、反撃に転じた。
まずシャルの足を払い、床に寝かせる。次いでラウラがナイフで攻撃をしてくるが見切っているのかギリギリでかわし、そのまま後ろに回り込む。ラウラもすぐ反応するが、それを遥かに上回る速度で腕をとり、ラウラの首にそのナイフを突きつける。
あっという間の出来事。ラウラですら一方的に押さえつけた。学園最強がなるという会長の立場は伊達じゃないってことだ。

「ナイフなんて危ないじゃない。はい、返すわ」
首に当てていたナイフをラウラに返し、シャルを起こす。
「ふ、二人とも大丈夫？」
「「強い…」」
二人とも怪我は無いようだが、驚いている。
「大丈夫よ。二人が心配するようなことはしないわ。私だって人の旦那を寝取る真似はしない。美晴君の実力に興味を持ったの。少しの間だけ楽しませて？」
文句を言っても、力ずくでも敵わないと知った二人は、
「「少しだけなら…」」
仕方なく屈した。
「はい、美晴君。許可も取れたしおねーさんと少しの間付き合って？」
たっちゃんさんは僕の腕を取り食堂へ連れていった。

食堂

シャルとラウラは遠巻きに僕のことを監視している。

「美晴君、あーん」

「あ、あーん」

たっちゃんが食べさせてくるが、向こうから突き刺さる二つの殺意に味がよくわからなくなってる。

「うぅ、たっちゃんさん。恥ずかしいですよ」

思いの外、顔が近い。美人さんだから余計…。

「私は楽しいわよ？」

こっちのことはお構いなしか。

時折聞こえるテーブルを強く叩く音に怯えながら何とか夕食を取り終えた。

美晴の部屋

「あの、本当に泊まるんですか？」

普通に僕の部屋でくつろいでいる。色々収納をあさりながら。

「えぇ、泊まるわよ。シャワー借りるわね」

なんだかあの人のペースに巻き込まれてしまってる気がする。
でもなんか、憎めないって言うかなんと言うか、とにかく、帰れ！
って強く出るのも出来ないかなぁ。

「あ、覗きたかったら覗いても良いわよ？」

ヒョコッと脱衣所のドアから顔を出す。

「覗きません！早くしてください！」

「んぅもぅ。つれないわねぇ」

パタンとドアが閉まり、シャワーの音がし始めた。
僕はベッドに寝転ぶ。

はぁ、これ絶対後でシャルとラウラに殺されるよ。さっきのご飯、
完全に針のむしろだったもんなぁ。何かのお詫びで許してもらうこ
とできるかなぁ。最悪望むままのことをしないと…。

キィッと音がしてたっちゃんさんが出てきた。

「ふぅ、さっぱりしたわぁ」

「な、何て格好してるんですか！」

バスローブ一枚で出てきた。替えの服はどうしたんだ。

「裸じゃないわよ？」

ちらりとめくり、黄緑のブラジャーを見せてきた。

「み、見せないでください！」

「興味あるでしょ？ほらほらぁ」

少しずつバスローブのひもを緩めていく。

「無いですよ！いいからおとなしくしててください！」

「ちぇーっ。つまんないの」

ベッドにぼすっと座り込む。

「たっちゃんさん。い、今自分がどういう姿勢で座ってるか自覚してます？」

いわゆるM字開脚。下着をバッチリこっちに向けている。

「え？あ、見ちゃダメ！」

顔を真っ赤にして必死に枕で隠している。

あの場所は自分の中ではアウトなんだ。アウトゾーン狭いなぁ。でもあの恥ずかしがり方。意外に押せばなんとかなるんじゃないかな。しないけど。

「自分がいけないんですよ。まったく」

「…ね、美晴君、お風呂上がりのマッサージして？」

もう恥ずかしさは収まったのか、可愛くおねだり。抵抗したってどうせ無駄だし。

「体触りますが良いんですか？」

「別に良いわよ」

どこからがセーフなのかよくわかんないやこの人。

「一夏ほど上手くないですが」

バスローブを脱ごうとするたっちゃんさんを何とか思い止まらせて、マッサージをしていく。

「うぅん、なかなかに上手じゃない。気持ちいいわよ」

「一夏だと変な声が出るぐらい気持ちが良いですがね。にしても何で僕の方に来たんです？一夏の方でもいいじゃないですか」

次は腰の辺りを…。

「んっ。いや、あなたは私の尾行を見破るだけの能力があったからちょっと興味がね」

「そうですかっと」

グイッと押し込む。

「効くぅ～。ふぅ、満足満足。さ、寝ましょうか」

スルスルとベッドに入り込んでいった。

「やっぱり…一緒にですか？」

ベッドは撤去したから一台しかないし…。

「もちろんよ。変な気を起こしてもおねーさんは怒らないから安心して？」

「起こしません！」

（へぇ。簡単には落ちないか。一途なんだ…）

何か言ってるような気がしたが、目の前の危機を乗り越える方が大事。

ベッドでは背中合わせで寝ました。ちょっと夜中に襲われかけましたけど。

翌日　屋上

「美晴。何が起きてんだ？」

一夏が首をかしげている。

ただいま、たっちゃんさんにお弁当をあーんさせられてます。
誰だってこれを見れば不思議に思うよね。

「まぁ、昨日あの後色々あってね。あ、美味しい」

この煮物味付けが抜群だ。

「でしょ？結構腕には自信あるのよ」

「で、あの後ろの二人はどうするんだ？」

相変わらずの殺意を含んだ目線を向けられる。

「今度土下座でもするよ。許してもらえるかわからないけどね。あ、あーん」

このあとも目線はいつまでも刺さっていました。

第６６話（前書き）

武装や戦い方、設定はアレンジしてます。

第６６話

「どう？模擬戦しない？」

こんにちは、美晴です。

強制的な共同生活三日目。昼。毎度のごとくいきなり言われました。

「はぁ、別にいいですけど。何で突然に？」

「そうねぇ、美晴君が弱いから、かな？」

弱い…。確かに今の僕は弱い。体も、ＩＳも。みんなを守るにはもう少ししっかりと基礎をつけなきゃ。

「その目を見る限り、いつものおふざけではようですね。では稽古をつけてください」

「…罰ゲームありにしない？」

やっぱりふざけてた。

「僕にメリットが無さそうなのでやめましょう」

僕が負けたら襲われそうだ。

「美晴君が勝ったら今晩私を好きにしていいわよ？」

「いいです。罰ゲームは無しで」

なんであれ僕の貞操は奪われるならいらない。

「いけずぅ。ノリが悪いわねぇ。ま、いいわ。放課後にアリーナに来てね」

そう言って自分の教室へ帰っていった。

模擬戦か。そういえば最近あまりやってなかったな。なんかそれどころじゃない日々が続いてるような…。

まぁ色々な人とやれば、その分上達も早くなるかもしれないな。

放課後　アリーナ

「さて、始めましょうか」

事前に調べた情報だと、たっちゃんさんのＩＳ、ミステリアス・レイディは水が重要なポイントになる機体のようだ。

装甲は他のＩＳに比べると圧倒的に少ないが、両脇に浮かぶアクア・

クリスタルと呼ばれる部分から、ナノマシンが生成した水を、ドレスのように装甲に使用したり、攻撃手段として使用するようだ。ただ、実際にどのように攻撃がなされるのかは、調べきれなかった。

戦闘が開始された。

試しに牽制。マシンガンを連射してみる。

予想通り避けられた。ただ、スラスターをふかして移動したのではなく、その場でわずかに体を動かしひねるだけで、避けていた。

この避け方をマスターできれば、エネルギー節約に繋がるかもしれない。

「さぁて、こっちからも行こうかしら？」

「えぇ。学園最強の腕、見せてくださいよ！」

ランスを構え、突撃してきた。単純な直線的な動きではなく、こちらの対応をしっかり見極めているのか、意識の死角の方へ移動し攻めてくる。

「さすがです！たっちゃんさん！」

そのままむざむざやられるわけにもいかない。次の移動先を予測し、ライフルを撃つ。

「ちっ！」
思わず舌打ちをしてしまった。
一応被弾はさせた。ただ、防御用に展開されたマント上の水に防がれ、大きなダメージを与えられてはいない。

「やるじゃない、美晴君。少し侮ってたわ」
またランスを構え突っ込んできた。同じことを！
たっちゃんさんの目線を見て移動先を予測。ライフルを構える。

「油断してるわね」
ランスから弾丸が発射された。
隠し武器か！
ガトリングガンが装備されているようで、多数の弾丸が近距離から発射された。

「くっ、結構きついなぁ！」
数発被弾しながらも、なんとかスラスターをふかして残りを避ける。
反撃としてレール砲を撃つ。音速で発射された弾丸を避けきるたっちゃんさん。
通用しないか。相手の技量はやっぱり高い。手の内を隠して勝てる相手じゃないな。

「とっとと終わらせて、美晴君をいただこうかしら」
霧が僕の周りを包み込んだ。
何だこれは。たっちゃんさんの姿が見えない。目眩ましの目的か？
すると突然、目の前が白くなり、熱と衝撃波が襲って来た。

「うわぁっ！」
衝撃の強さに機体が大きく揺さぶられる。装甲も吹っ飛んで、シールドエネルギーもかなり削られた。

「何なんですか？今の！」
前方にいるであろうたっちゃんさんに聞く。
くっ、頭がくらくらしている。

「あとで教えてあげるわ」
後ろから優しい声で話しかけられた。いつの間に僕の後ろに周りこんでいたんだ。
このままじゃヤバい。
僕はすぐに距離を取る。
仕組みがわからない以上、あの霧に取り込まれるのは危険だ。相手も視認できなくなるしな。

「もう一度いきましょうか」
再び霧が僕を包む。対処法としてすぐ思い付いたのはこれだ。
「何?!霧が晴れてる!」
たっちゃんさんが驚いてる。
僕がやったのはビームサーベルを繋ぎ、バトンの要領で高速回転させた。風圧とエネルギーの両方で水分をはらっていく。
「こうするしか僕にはわかりませんでしたから」
ハイマット・モードに移行したシュッツェンで、突撃。
「速い!」
たっちゃんさんも驚いてる。ビームサーベルを二刀の形で持ち、攻撃を加える。
「くっ、やるわね!」
ガトリングを撃ってくるが、当たりはしない。
霧を広げても、包まれる前に高速で抜け出した。
こっちはかなり有利な状況だ。このまま押し込もう!

「すみません！終わりにします！」
僕はイグニッション・ブーストで一気に距離を詰めて斬撃を与える。
そして勢いのまますぐ離れた。ヒットアンドアウェイでいくつもりだ。
もう一度！
そう思って再突撃をすると、今度はたっちゃんさんが霧に包まれた。
目の前が霧のカーテンで遮られていた。

「自分に？」

霧を攻撃ではなく防御に活用したのか。
たっちゃんさんの姿が見えなくなった。さっきは自分の周りだから
払うことができたが、今回は相手側だ。
どこに相手が居るかわからない以上、突っ込んで払うなんてことは
できない。
どうしようか。
そう考えていると、目の前からいきなりランスがスッと出てきた。

「ヤバい！」

あまりにいきなりだったので直撃してしまった。

「くそっ！」

ランスはまた霧の中へ。

どうするよ。このままじゃ奇襲されまくりだ。
集中しろ。目ではどうせ確認できない。五感をフル活用して気配を感じとるんだ。
明鏡止水の心で…。

「ここだ！」
出てくる瞬間にライフルを狙い撃ち。読みが当たって見事にヒット。

「やるじゃない！ますます興味が深まるわよ！」
たっちゃんさんは悔しがるどころか、さらに楽しくなったと笑顔を浮かべていた。

「僕も楽しいですけど、終わりにしましょう！」
霧に逃げ込まれる前にライフルを連射。
動きを封じておいて接近し、セイバーで斬る。
ガトリングは避けた。警戒すべきは霧のみ！

「いきますよぉ！」
加速して突撃。

「一直線じゃ当たるわよ！」
たっちゃんさんもランスを構え、突っ込んできた。正面衝突だ。だが、その攻撃は僕には届かなかった。

「残像！」
シュッツェンの高機動が残像を生み出していた。たっちゃんさんの攻撃は空を切った。
その間に僕は後ろを取っていた。
ライフルとレール砲、マシンガンも斉射。
十分なダメージを与えて、ミステリアス・レイディのシールドエネルギーが尽きた。

「やられたわね…」
試合後、たっちゃんさんが起き上がろうとしたので、ゆっくり抱え起こす。

「いいえ。僕が勝てたのは機体性能のおかげです。僕自身は全然弱いんです。だから、これからも時々色々教えてくださいね」
体術を教わるのもいいだろうし、操縦技術もシャル達に無いものがあった。ただ、夜の事については教わらないけど。

「自分の弱さを自覚できる人は強いのよね」
更衣室へと戻るたっちゃんさんが呟いた。

美晴の部屋

先程の霧について説明を受けていた。
ナノマシンが生み出した水を霧として広げ、急速に加熱させて熱や衝撃波によって相手にダメージを与える仕組みのようだ。

「大体、たっちゃんさんも手の内隠してたでしょ」

「あ、ばれてたんだ」

「えぇ。何かまだある雰囲気がありましたよ」

「実は最高の威力の武器があるにはあるんだけど、自分にも危険が及ぶ武器なのよ。防御用に回してるナノマシンも利用して作り出す槍で、威力自体は小型気化爆弾四個に匹敵するわ」
気化爆弾って…、戦略兵器に成りうる…。でも自身の防御も薄くしているから、自分の身に危険が及ぶ諸刃の剣ってわけか。

「アリーナでは使えませんね、その武器」
さすがに大事件になりそうだ。
「そう判断して使わなかったのよ。でも負けるなんてなぁ。さ、罰ゲームをどうぞ？」
何ベッドの上で半脱ぎになってるんだ。
「無しって言いましたよね。さぁ、寝ますよ」
「寝るの？今日の下着気に入ってもらえるかしら…」
「意味が違いますから。上着脱がなくていいです」
「つまんないのぉ。まぁいいわ。寝ましょうか。ふふふ」
何でこう僕の周りには危ない人しかよってこないんだろう…。
「ごめん、許して」
一週間して、ようやくたっちゃんさんから解放されましたが、問題

は全く解決していません。
自分の部屋の床に頭をこすり付けるぐらいの土下座をする僕に向けられる鋭い目線。
突き刺さるぐらいに痛いです。

「許せないなぁ。ねぇラウラ」

「うむ。私達の目の前でのあのような行為、認めるわけにはいかないな」

「ボク達も許可しちゃったけど、力ずくだったし、美晴が拒否してればそもそも起きない問題だったし」

確かに途中から流されるままになってたけど…。

「じゃ、じゃあ何をすれば許してくれるかなぁ」

機嫌をうかがうように二人を見上げる。

「「キス」」

「キス…」

「口限定ね」

「それ以外認めん。愛を証明しろ」

はぁ。仕方ないか。

「それでは失礼して」

二人にキスをする。短いと文句を言いそうなので、五秒ずつ。

「か、完全に許した訳じゃないからね」

「う、うむ。これ以降も定期的にすることを命ずる」

顔真っ赤にして。

「ごめんね。でも僕は二人しか見てないからね」

もう一度キス。

「うん…」

「うむ…」

何とか許してもらえたみたいだ。良かった。

第６７話（前書き）

今回と次話は文化祭。
ミハちゃんの女装がお好きな方、上手いこと想像してください。

第67話

おはようございます、美晴です。

今日は文化祭当日。
僕達のクラスはメイド喫茶シュムックです。

ラウラは本当にあのお店から服を調達してきました。どうやら二つ返事で協力してくれたようです。
店の中を破壊するぐらい暴れた僕達に快く貸してくれた店長さんに心から感謝です。

ちなみに僕はと言うと…。

「本当にとってたんだ…」

千冬お姉ちゃんによってあのメイド服があのときの箱のまま、目の前に出された。

「クリーニングもしっかりしてあるぞ」

そんなどうだと言わんばかりに胸を張られても。行き届いたサービスが嬉しくなかったことは人生で初めてだよ…。

「さぁ着替えろ。なんなら私が着替えさせてやってもいいぞ」

両手をワキワキと動かしゆっくりと迫ってくる。

「遠慮します」

「そうか。残念だ」

きっぱりと断った。学年別トーナメントの時のことが思い出される。教室の隅に机や椅子のバリケードを張った上で着替える。

げっ、サイズぴったり。それなりに成長しているはずなのに、ぴったりなんて。すべてお見通しだったとでも言うのか。恐ろしいぞ、あの人。

「着替え終わりました…」

恥ずかしいけど、出ないわけには…。ゆっくりと出ていく。

「美晴君可愛い！」

「お人形さんみたい！」

女子が騒いでいるが、男の僕としては何ら嬉しくない。

「ぶっ！」

千冬お姉ちゃんが鼻血を吹き出した。

「うわぁ鼻血出てる！」

慌てて近寄る。

「だ、大丈夫だ。に、似合ってるぞ美晴」

ポタポタと血をたらしながら言うことか。

「ほら、ティッシュ」

ポケットティッシュを渡した。

「…すまない。ただこれで終わるわけにはいかん。まだ任務がある」

鼻にティッシュを詰めると、また一つの箱を出す。さっきのとは違って今回のは小さめ。

「これは…ネコ耳カチューシャ？」

箱の中身は白いネコの耳がついたカチューシャだった。

「昨日の夜、束から届けられた。調べたが怪しい装置は特に無い。ただのカチューシャだ」

やっぱり調べたか。あの人が普通を贈ってくるのは珍しいな。

「これを着けろと」

「後生だ」

「そんな重い言い方…。わかったよ」

カチューシャを装着。

「ぶっ！」

またポタポタと血が垂れる。

「ちょっと保健室行こうよ」

このまま放っておいたらさすがにまずいことになりそうだ。

「その前に、にゃんって言ってくれ。こう、ポーズをつけて」

連れていこうとする僕の腕をつかんで引き留めてきた。

細かい要望が続くな。仕方ない。やればおとなしく保健室へ行ってくれるだろう。

「じゃあ、えーと、ご奉仕しますにゃんっ」

手を顔の横で丸め、少し首をかしげたポーズ。

「きたぁーっ！」

噴水レベルの血が吹き出した。これの処理が今日最初の仕事になりそうだ。

「誰か保健室に連れていって！すぐ！すぐに！」

担架にのせられ保健室へ搬送されて行きました。

というやり取りを終え、血を処理して今に至ると。

「一夏やっと来たんだ」

執事服に着替えた一夏がようやく来た。

「あぁ、ごめんな。着替えに手間取ってな。初めて着たから勝手がよくわからなくて」

服に変なところがないかチェックしている。特に違和感はないから大丈夫だろう。

「やぁ、ボクもこれだって」

シャルも執事服だ。いいなぁ、うらやましいなぁ。

「わ！美晴がネコ耳メイドだ！これは収めないと！」

僕の姿を見て、パシャパシャとデジカメのシャッターを連打。もう抵抗する気はありません。下から撮られたら別だけど、今日はロング気味だし問題ないだろう。

それにしてもいつも持ち歩いているのか、そのカメラ。

「後で私にも少しくれ」

後ろからラウラが現れた。うん、メイド服似合ってるなぁ。

で、くれとは今撮った画像のこと？

「もちろん！みんなにもあげるよ！」

全員に配る気か？

「きゃあ！本当？」

「あたし五枚！五枚ね！」

それぞれ欲しい枚数を言っていく。

「後で番号書き出すから希望者はメモしてボクに提出してね」

遠足の記念写真みたいな扱いするな！

「一夏のも売れそうだから…」

一夏は普通に撮られていく。いいよなぁ。僕も執事服なら恥ずかしくなく撮られてあげるのに…。

「さて十分撮れたし、開店しようか」

何？それ待ちだったの？

「メイド喫茶シュムック開店でーす！」

開店と同時に多数のお客さんがやってきた。ずいぶん並んでいるみたいだ。

「きゃあ！美晴君可愛い！」

「こっちにも来てよぉ！」

「一夏君！こっちこっち！」

あっちこっちのテーブルから指名がかかる。

「おかえりだにゃん、お嬢様。ご注文はなにかにゃん？」

「可愛い！もう一回言って？」

じゃあサービスで。

「ご奉仕するにゃんっ」

「きゃあぁぁ！じゃあじゃあこのケーキセット！」

「私も！」

毎度〜。単価が高いの選んでくれて助かります。

「ありがとうだにゃん。持ってくるから少し待ってほしいにゃん」
結構ノリノリな自分が嫌いになりそう。
さてラウラはどうだろう。

「おかえりなさいませお嬢様。ご注文をどうぞ」
うん、前よりは改善されてるし、何より楽しそうにやってる。よかったよかった。
シャルは…。

「お待たせ致しました、お嬢様。ごゆっくりお過ごしください」
うん。人気みたいだし、ちゃんと仕事してるな。
その後も僕はにゃんにゃん言いながら多数のお客さんを捌いていった。

校門
ＳＩＤＥ　蘭

はぁ、ここがＩＳ学園か。大きいなぁ。
一夏さんからチケットが送られてきたときはもう、天にも昇る気持ちだった。隣にこいつがいなければ純粋に楽しめたのに…。

「兄貴なんでここにいるのよ」

「なんでって、俺も美晴からチケットが来たからだよ」

美晴さん、余計なことを。送るならもっと別の人にすればいいのに。こいつも居るとなんだかなぁ。

「招待チケットを拝見します」

綺麗な人が私達のチケットを確認し、半券を渡される。

「ご協力感謝します。ん？ほう、織斑兄弟の招待ですか」

「知ってるんですか？」

「えぇ。彼らは一年一組ですよ」

「ありがとうございます」

急いで行かなきゃ。

「あ、あの。俺五反田弾って言います。あなたのお名前を…」

兄貴は何だか必死な顔でナンパしてる。人の学校に来てまで何してるの。もしかして一目惚れ？

「私は布仏虚です」

「よ、よかったら一緒に回りませんか？」

うわっ。本当に一目惚れ。

「私は生徒会の仕事がありますので」

やーい、ふられてやんの。兄貴のくせに生意気なのよ。

「じゃ、じゃあ、もしも中でもう一度逢えたなら！」

手を握って食らいついてる。キモいわよ。

「そ、そうですね。もし逢えたなら回りましょうか」

あれ？意外に上手くいったの？くそっ。私は全然意識してもらえてないってのに。

「はいっ！」

にやにやして。ムカつくのよ！
ローキックを喰らわせた。

「いでっ！何すんだよ」

「ふんっ」

とにかく一年一組ね。

「ふふっ。面白い方達でした」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

相変わらずの盛況ぶり。箒ちゃんやセシリアさんも動いてくれていて、今のところ特に問題なくお店は回っている。
お嬢様だからこんなメイドなんて断固としてやらないだろうと思ってたけど、意外や意外。あちこち動き回り献身的に仕事をしている。
チェルシーさんに色々教わったのかな。

「うわー、こっちはすごいわねぇ」

鈴ちゃんが来た。二組は点心のお店なんだっけ。
それの衣装なのか、スリットが際どく入って、背中も開いたセクシーなチャイナドレスを着ていた。
さすが本場の人。見事に着こなしていて、いつもよりも艶っぽい。

「鈴ちゃん、すごい格好だねぇ」
テーブルに案内して少しお話。
「そう？美晴の方がすごいじゃない。耳までつけて」
「あはは、まぁね。で、何にする？」
「そうね、チーズケーキにするわ」
「ありがとうだにゃん」
「ぷっ。なにそれ」
吹き出して笑われた。
「何となくこうじゃなきゃいけない気がしたからさ。じゃあケーキは一夏に持ってこさせるから」
「ありがと」

注文を通して、他のお客さんを対応。

「ねぇ美晴君。私とツーショット撮ってくれない？」

一人の女子がお願いしてきた。

ツーショットか。別にいいけど、うーん、これ上手く利用できないかな。

無料でやるのももったいない。払うかどうかわからないけど、試しに言ってみるか。

「追加料金５００円ですがいいですか？」

「払う払う！じゃお願い！」

お？食いついた。これはいい収入源になるかもしれないぞ？

「はいチーズ！」

近くにいたクラスメイトに撮ってもらった。毎度ありぃ。

「美晴！それは一夏でも良いの？」

鈴ちゃんも食いついてきた。もちろんやらせます。

「いいよ。ちゃんと５００円もらうよ？」

「安いもんよ。一夏！撮って！」

「はいはい。美晴は意外とがめついなぁ」

一夏は文句を言いながら撮っている。がめついんじゃない。恥ずかしさの対価だよ。

「次こっち！」

「一夏君こっち！」

「デュノアさんこっち来て！」

お、シャルもいけるのか。元々は男子として入ってきたぐらい、良い顔してるしなぁ。嫁を褒めるのも変な気がするけど。

「一夏さぁん！」

「一夏。美晴。来たぞ」

「あ、弾君、蘭ちゃん。来てくれたんだ」
蘭ちゃんはいきなり一夏に飛び付いていた。箒ちゃん達の目が怖い。
「いやぁ、よく来てくれたね」
そんなあっちは放っておいて弾君に挨拶。
「ＩＳ学園に男が入れるなんて滅多にないからな。来ないわけねぇよ。にしてもお前すごい格好だな」
僕を上から下まで眺め、ネコ耳を見て言う。
「千冬お姉ちゃんの命令でね」
「そうか。美晴が大好きだもんな千冬さん」
「でも鼻血吹き出して保健室行きだよ」
愛情が行き過ぎて自分の命を縮めてる。今頃血を増やそうとしてるのかな。
「ははは っ。そりゃ傑作だ。で、前言ってたお前の彼女ってのは？」

このチケットを送るために電話するときに根掘り葉掘り聞かれた。

「あぁ、ちょっと待って。シャル、ラウラ」

「なぁに美晴」

「結構忙しいのだが」

お店は依然賑わっていて、二人も走り回っているところだった。

「うん、彼は五反田弾君っていって僕と一夏の中学の時からの友達なんだ」

「「どうも」」

「どうも。ふぅん。二人とも良い娘そうだな。お二人さん。こいつ時々怖いときあるけどさ、よろしくな」

二人をじっと見て弾君は笑顔で言った。

「もう婚約してますから。もちろんです」

「婚約？それは聞いてねぇぞ。お前すげぇな」
シャルから聞いて弾君の顔がいかにもびっくりと表情。
この歳だし、出会ってからも短いしね。普通驚くよね。

「まぁ色々あってね」

「そうか。頑張れよ。さて仕事あるだろ。俺は蘭待ってるからさ」
別に反対もせず、いつも通りの弾君。

「うん。じゃゆっくりしていってね」

僕達はまたそれぞれ動き出した。

ちなみに一夏の周りには竜や虎が舞っていた。

第６８話（前書き）

受難は続く…。

第６８話

こんにちは、美晴です。

ツーショットを別料金にしたところ、現段階でかなりの売り上げを記録しています。ほとんどの人が希望していますので、客単価が単純に５００円上がるようなもんです。これは結構大きいですよ。

いやぁ忙しい忙しい。このままじゃ休憩取れないかも。

「美晴くぅん。おねーさんが遊びに来たわよぉ」

「たっちゃんさん！」

メイド服を着てたっちゃんさんが登場。手伝いに来てくれたのか？

「手伝ってくれるんですか？」

「遊びに来ただけよぉ」

ちっ。でも売り上げには貢献してもらいますよ。

「今から会長とのツーショットを解禁します！さぁどうぞどうぞ！」

たっちゃんさんの周りにもお客さんが殺到。
そのままなし崩し的にお手伝いへ。
一部がたっちゃんさんに向かい、忙しさが分散された。上手い具合に息抜きの暇が出来たぞ。

「美晴君。会長も来たし、休憩とってきて良いよ。デュノアさんとボーデヴィッヒさんも連れてっていいから」
少し落ち着いたのを確認し、谷本さんが休憩を取るよう言ってくれた。

「いいの？」
落ち着いたとはいえ、三人も抜けたらまた大変になってしまうんじゃ…。

「売り上げは十分確保できたしね。少しぐらい大丈夫よ」
ここまで言ってくれているんだから、少しは好意に甘えるか。

「ごめんね。じゃあ行ってくるよ」
さすがにこのままの格好で外を出歩くのは嫌だから、着替えた上で回ろう。

「シャル、ラウラ。お待たせ。どこ行きたい？」
廊下でシャルとラウラに合流。二人も制服に着替え終えていた。
「うーん、部活の出し物見てみたいなぁ」
部活か。色々あるみたいだしなぁ。面白いかもしれないな。
文化祭の案内のパンフレットを見ながら動いていく。
「料理部なんてどう？」
「料理部か。いい？ラウラ」
「うむ。とにかくどこかへいってみよう」
よし。料理部は家庭科室か。
「こんにちはぁ」
家庭科室のドアを開けると、色々な料理の良い匂いがした。
「あら、美晴君じゃない。よく来てくれました。どうぞ食べてって

？美晴君達は無料でいいわ。そのかわり投票してくれないかなぁ」
部長さんが元気に出迎えてくれた。
ただあまりよろしくないことを言ってきた。

「ちゃんと代金は払いますよ。買収で会長に言いつけちゃいますよ？」

「それはやめて！お願い！」
僕の言葉に慌てて必死に頼み込んで来た。

「冗談ですよ。ではいただきます」

目の前には煮物や、炒め物が大皿にのせられていた。また、外国の料理もいくつかあった。
まずは肉じゃがに手を出した。

「ふむ。これは美味しいですね。ジャガイモの角もしっかり残っていて、で、この味の染み具合。工夫が十分凝らされているのが見てとれますね」

「気付いてもらえて何より！で、その最大の工夫はなんだかわかる？」

ふむ。鍋であまり煮すぎると角がとれてしまうし…。
僕は辺りを見回して、答えを探していく。あ、あれかなぁ。

「んー、もしかして炊飯器使いました？」

家庭科室には必ず置いてある。最新型になっているのがうらやましい。家のも新しいのに買い換えたいんだよなぁ。

「正解！わぁよく分かったね。これ当てられた人美晴君が初めてよ？」

あ、やっぱり。部長さんがかなり驚いた顔をしている。

「そうですか。いや、炊飯器を使うと熱が上手く循環して、角が取れずにしっかり煮上がると聞いたことがありましてね」

「そっかぁ。美晴君には分かっちゃったかぁ」

感心しながら頭をポリポリ。自信があったのかもしれないな。

「ふむ。この前美晴の家で食べたやつの方が旨いな」

ジャガイモを食べながらぽつりとラウラが言った。

「ラウラ！失礼だよ！」

せっかく部長さんがクイズにするぐらいの自信作なんだから、そんな僕のと比べるなんて。

「うーん、でも正直ボクもそう思うよ」

シャルまで。部長さんの力作なのに可哀想じゃないか。

「何て言うかな、美晴のは味が芯まで染みてるんだけど、食感はしっかりしてるっていうか…」

「しかし長時間煮込んでいなかったな。すぐ出来ていたぞ」

ちゃんと味わって、僕が作るところもちゃんと見てくれてたんだ。

「へぇ。それは私としても興味があるわね。なにか秘訣があるの？」

「まぁあるにはあります。でも簡単に教えるのもつまらないのでヒントだけ。水にポイントがあります。もしわかったら僕は料理部に入りますよ。会長に申請します」

「魅力的な申し出だけど…うーん、わからないわねぇ」

首を左右にかしげて、色々考えているようだ。その間に僕達は他の料理も食べてみた。全部旨いな。

「さて、僕達は他のところ回りますので、答えがわかったら今度教室に来てください。じゃ」

家庭科室を離れ、次を物色。

「美晴は肉じゃがが作れる子好き？」

「ん、まぁね」

さっきの部長さんのまでとはいかなくても、普通の味で作れれば文句ないかな。

「じゃあボク料理部に入ろうっと。いっぱい勉強するね？」

「うん。頑張ってね」

というか今まで入ってなかったことに驚きだよ。転校生だから入りそびれてたのかな。

「次、あそこはどうだ？」

ラウラが指差したのは茶道部室。

「正座だけど大丈夫？」

「だ、大丈夫だ」

あはは。よく知らないで言ってみたんだね。

「お邪魔しまぁす」

綺麗な造りの和室だ。さすがＩＳ学園。お金のかけ方が違う。

「なんだ美晴か」

「千冬お姉ちゃん？なんでここに？」

いつものスーツ姿。着物じゃないのが残念だが仕方ないか。正座で部屋の隅に座っていた。

もう保健室で寝てなくていいんだ。

「私はこの茶道部の顧問だ」

「知らなかった。そうなんだ」

意外だなぁ。ちゃんとできるのかなぁ。

「なんだ。私には茶が点てられないとでも思ったか」

「滅相もない！」

久しぶりに心を読まれた。

「どれ、お前達には私が点ててやろう」

部員の人ではなく千冬お姉ちゃんがお茶を点て始める。

うーん、変なところが全く無い。茶せんの使い方も上手いし、泡もきれいにたってる。こんな綺麗な所作できるんだ。

学校ではほんとスーパーだな。

「お手前頂戴します」

うん、極め細かい泡が素晴らしい。

「結構なお手前でした」

ラウラ達はどうだろう？

「「うー」」

飲み終えてはいたが、やっぱり苦いか。

「はい二人とも。結構なお手前でしたって言って」

「「結構なお手前でした」」

顔はまだ苦いと言っている。

「千冬お姉ちゃんすごいね。まさかこれだけの腕前とは」

「私は織斑千冬だからな」

その言葉、重みあるなぁ。世界の頂点に立った人だから、意味合いが違う。

「さて行こうか。ラウラ立てる？」

「大丈夫だ。心配ない」

今回はスッと立ち上がれていた。時間がさほど長くなかったから足へのダメージがそこまでではないようだ。

茶道部室をあとにした。

「ふむ。教官が顧問の部活か。それに美晴は茶を点てる教官に少し見とれていたな」

「え？そうかな」

無駄の無い動きが綺麗だなぁとは思っていたけど。

「確かにそうだった。よし。私は茶道部に入ろう。正座も克服してみせるぞ！」

「そう。頑張ってね。さて、一回戻ってみようか」

教室がどんな風になっているか気になったので、一度戻ることにした。

「どんな感じか…うわぁ」

一夏とたっちゃんさんがお客さんにぐいぐい引っ張られ、その間を箒ちゃんやセシリアさん達が走り回っていた。……カオスだ。

「美晴！何とかしてくれ！」

一夏が助けを求めている。

「すぐ戻るから！」

すぐにメイド服に着替え、店に立つ。

「おかえりにゃさいませお嬢様」

一夏達を休憩に回し、その間必死に動きまわった。たっちゃんさんもフル稼働。ごめんなさい。

「はぁはぁはぁ。こんなになるとは思ってなかったわよ。このお礼はしてもらうわよ」

たっちゃんさんは肩で息をしている。

あれから二時間ほど。ようやくお客さんも落ち着いてきた。一夏達も帰ってきている。

「ありがとうございました、たっちゃんさん。お礼はしますよ。で、何すればいいですか？」

「生徒会の出し物を手伝ってもらうわよ。あ、シャルロットちゃん達にも来てもらおうかしら」

（美晴君が可愛いって言ってくれるような洋服を着せてあげるわ）

「行きます！」

何を呟いたのか知らないが、大体何をやるんだよ。
いつもの七人が生徒会の出し物に連れていかれた。

「会長、これは一体…」

僕は無線を渡されて、学園の中庭、特設ステージの裏へ連れてこられた。

『生徒会の出し物はミスコンなの。私は審査員だから、裏方よろしくね』

イヤホンからたっちゃんさんのふざけ半分の声が聞こえた。

「ちょっ…。切られた」

詳細を聞こうとしたが、その前に切られてしまった。
たくさんの衣装が並べられた倉庫に配置されても…。って言うか僕がやって問題ないのか？下手すりゃ女子の着替えを見ることになりかねないぞ。

「一夏。一夏の担当は？」

一夏も一緒に連れてこられ、どこかに配置されたようだ。

『会場の整理誘導だってさ』

そっちの方がまだよさそうじゃないか。観客は確かに多いから必要なポジションだけど。

「では今から生徒会主催、第一回ＩＳ学園ミスコンを行いまぁす。司会は黛薫子でぇす！ではまず審査員の紹介です！まず一人目。我らが生徒会長、更識楯無！」

ハイテンションで黛さんが会場を盛り上げていく。

「みなさん楽しんでくださいねぇ」

たっちゃんさんは扇子を優雅に扇ぎ、歓声に答えている。

「続いて二人目。初代ブリュンヒルデ！織斑千冬先生！」

「小娘どもに興味はないが、まぁいいだろう」

腕を組んだまま表情を変えていない。こちらにもすごい歓声。

「そして審査員長は、用務員のおじさんで、学園の良心と言われている轡木十蔵さんでぇす！」

みんなで備品を壊しまくってはこの方にお世話になってます。だけどいつも優しくいいよいいよ、と言ってくれるんだ。

この人の奥さんが学園長だっけ。でも、たっちゃんさん曰くこの人が真の学園長らしい。

「さて出場者ですが、今回は一年生の五人が務めてくれることになりました。どれも粒揃い。期待してください！着替えが済み次第、スタートしますので暫しお待ちください」

『ってことで美晴君の出番よ。出場者をスムーズにステージ上に送り出してねぇ』

「…了解しました」

出場者はいつもの五人みたいだし、なんとかなるだろ。

「はーいみんな集合」

とりあえずみんなを集める。

「えーこれからそれぞれ好きな衣装に着替えてもらうから。で、そ

のあとナンバー順に出てもらいます。いいですか？」

「「「「「はい」」」」」

「それじゃあこの中から好きなのを選んで、そこの更衣室で着替えてきて」

簡易型だが設置されていた。助かった。みんなは思い思いの衣装を取り、それぞれ更衣室へ。

「美晴。みんな着替え終わったよ」

構成を確認していると、シャルが報告してくれた。よし。それじゃあ一人ずつ…。

「お待たせしました！それではまず一人目！イギリス代表候補生、セシリア・オルコットさんです！どうぞ！」

黛先輩の合図でミスコンがスタート。

「はい行って！」

セシリアさんをステージ上へ送り出す。

「さてオルコットさんの衣装は青いドレス！貴族の彼女にとっては普段着か？さて、審査員のみなさんいかがでしょうか」

「そうですね、やはり貴族の方にはふさわしい着こなし。似合ってるわよ」

「舞踏会での華麗な足捌きが見えるようじゃな」

「ふむ。まぁ普通だな」

それぞれが得点の書かれた札をあげていく。

「得点は八点、七点、八点。織斑先生が少し低いか。合計二十三点」

一番最初だからなぁ。どうしても基準にされちゃうんだよな。悪くないとは思うんだけど残念だな。

「続いて中国代表候補凰鈴音さん！」

「いってらっしゃい鈴ちゃん！」

「さぁて、凰さんの衣装は体操服にブルマだ！日本の失われし風景の一つ！」

その紹介はどうなんだろうか。確かに最近ブルマは採用されなくなってるけど。

「胸が自己主張していない分、健康的な足の肉付きが高ポイントね」

「そうじゃな。彼女の活発な雰囲気が伝わる良い選択じゃな」

「まぁまぁだな」

「得点は三人とも八点！わずかに上回った！」

あまり伸びないなぁ。鈴ちゃんも悪くないはずだけど…。

「次はフランス代表候補、シャルロット・デュノアさん！」

「頑張ってねシャル！」

「うん！」

グッと拳を突き出してる。

「さてデュノアさんの衣装はカジュアルなスカートスタイル。あえての普段着で攻めてきた！」

「普段着っていうところが他の出場者と違って面白いわね」

「よりセンスが問われるチョイスじゃのぉ」

「まぁまぁだ」

「得点は九点、八点、八点。会長の一点が大きいぞ！」

シャルはセンスあるもんなぁ。納得。

「次は篠ノ之箒さん！」

「いってらっしゃい！」

「さて篠ノ之さんは着物だ！淡い水色の生地が爽やかさを演出！」

「大和撫子という言葉がぴったりじゃのぉ」

「そうですね。歩き方からもそれが伝わってきますね」

「ふむ。しっかり着付けが出来ているな。まぁやつなら当然だがな」

「得点は九点、八点、八点。現状でトップタイだ！」

同点が出たか。うーん、面白くなってきたかも。

「さぁ最後はドイツ代表候補、ラウラ・ボーデヴィッヒさんだ！」

「ラウラ！いってらっしゃい！」

「う、うむ」

うわぁ、緊張してるなぁ。

「ボーデヴィッヒさんの衣装は女子用の制服だ！普段は改造したパンツ型の制服を着用しているとの情報。果たしてスカートはどう映る！」

「恥ずかしがる姿が容姿とあいまってかなり可愛いですね」

うん。普段着慣れてないせいか、もじもじしてすごい恥ずかしがっ

てる。

「普段は見せない姿を見せるというのはポイントじゃな」

「ふむ。ボーデヴィッヒにしては良い方だな」

「おっと織斑先生が初めて褒めたか？得点はオール九点！トップに躍り出た！」

うん、これは僕も好きだ。

「ということで、優勝は…、え？あと一人いる？誰？」

黛先輩が慌てている。こっちも聞いてないぞ？

「たっちゃんさん！あと一人って誰ですか？こっちには誰も来てないですよ？」

五人の予定じゃなかったのか？連絡ミスだとしたら大問題だぞ。今から探せなんて間に合わない。

『あなたよ、美晴君』

え？僕？そんな、まさかぁ。

『虚ちゃん。お願いね』

「かしこまりました会長」

すぐ後ろから声が…。さっきまで誰もいなかったはずなのに…。

「それでは美晴さん。着替えてください」

無理矢理更衣室へ押し込まれた。

「やらなきゃダメですか？」

「お嬢様のご指示ですので」

そうですか。また会長権限とか言いそうだなぁ。…やるか。

「最後の出場者が判明しました！なんと織斑美晴君です！」

「何だと！」

「織斑先生落ち着いて！座ってください。ではどうぞ！」

やるの？本当に？この衣装で？
えぇいままよ！
僕はステージへ出ていく。

「なんと美晴君の衣装は白のセーラー服だ！」

恥ずかしいよ。何この公開処刑。メイド服より女の子な感じがしてすっごい変な感じ。
観客のみなさんめっちゃこっち見てるし。というか何人集めたんだ、このイベント。

「ぶっ」

「織斑先生は鼻血が出ているぅ！」

またか。お願いだから死なないでよ？

「えー、美晴君には男の子なのでアピールタイムが設けられているそうです」

え？聞いてないよそんなの。たっちゃんさん！…ウインクで返してきた。やっぱりあんたが仕組んだんだな。

何をしようか。んー。
考えながら辺りを見回していると一夏が見えた。手にはカンぺらし

き物。
なになに？
会長からの指示。クルっと回って私と付き合ってくださいと言え。
なんじゃそりゃあ！言えない！無理！絶対言えない！
たっちゃんさんはにっこりしてるだけだし、一夏は“指示”の部分を指で叩きまくってるし。
今日災難ばっかり…。
でもやらなきゃいつまでもこのままだし…。やるか…。

「私と、付き合ってください！」

背中を向けた状態からクルッと観客の方を向いて告白。
恥ずかしい…。

「決まったぁ！天使な笑顔と甘い告白！織斑先生は血と共に意識が飛んだ！」

「千冬お姉ちゃん！」

駆け寄り意識を確認。

「美晴…ナイスだ」

親指を立てていた右手がダランと下へ。

「お姉ちゃぁん！」

「意識を失いながらも織斑先生は１０点札をあげている！得点は全員満点！優勝は美晴君だ！」

それよりも早く保健室へ連れて行かないと！
千冬お姉ちゃんを背負ってダッシュする。

頑張って！あと少しだから！

保健室

「先生！織斑先生が！」

背負っている千冬お姉ちゃんを下ろす。

「またですか。今日二回目でしょう？私が医師免許を持っているから輸血できるものの。無かったら死んでますよ？」

保健の先生じゃなく医師ですか。何で病院に勤めないんだろう。
まぁいいや。とにかく助かった。

「はい。これでしばらくすれば大丈夫ですよ」

ベッドに寝かされ、輸血を受けている。まだ意識は戻ってない。

「ありがとうございます」

先生にお礼を言うと、私は少し用事があると言って席を外してくれた。

「う、うぅ…」

意識を取り戻したみたいだ。

「大丈夫？千冬お姉ちゃん」

「あぁ、すまない。迷惑をかけた」

起き上がれず、寝たまま会話している。

「もう。体は丈夫だろうけど、血は別だよ。あの量じゃいくらなんでも命に関わるよ？」

パッと見、リットル単位の量だったぞ。一気に危険なレベルに到達しそうだ。

「あぁ。これは今日二回目か…」

輸血用のパックを見ながらつぶやいた。

「そうだよ全く」

「美晴が可愛すぎてな…」

「嬉しいけど、死んじゃ嫌だからね？千冬お姉ちゃんは僕にとって大切な人なんだから」

頭を撫でてあげる。大事な大事な家族なんだから。

「美晴！」

「おふっ！」

ガバッと抱きつかれ、お腹に顔をこすり付けられる。なんだ元気じゃないか。

「私とも結婚しよう！」

突然顔をあげ、とんでもないことを口にしてきた。

「遺伝子的には問題ない！」
僕がそれに触れてほしくないって知ってるくせに。わざわざ出してまで正当化したいのか。
「倫理的にはあるでしょ」
「そんなもの愛さえあれば！」
「ていっ！」
額にチョップ。
「あうっ！」
「何を口走ってるの。少し寝て頭を冷やしなさい」
「うぅ、私は本気だからな」
すねて向こうむいちゃったよ。何この人。弟に求婚って。
「じゃあ僕は戻るからね」

教室の片付けとかあるし。

翌日

再び講堂に集められました。昨日の投票の結果が発表されるそうです。

「はーいお待たせしました。昨日の結果発表よぉ」

ワァーッと歓声に包まれている。僕達はどこに生け贄に差し出されるのでしょうか…。

「集計の結果一位は…」

ゴクリとつばを飲む音があちこちから。

「生徒会のミスコンでーす！」

あれが一位？ってことは…。

「えーっ？そんなのずるい！」

「生徒会は部活じゃない！」

各所からブーイングが上がる。まぁ確かに部活じゃないし。

「はいはい文句言わない！これはちゃんとした結果なのよ！観覧者には投票をしてもらう旨をあらかじめ伝えて、そのうえでみんな見たんでしょう？美晴君のセーラー服姿、見たでしょ？」

シーンと静まり返った。反論のしようがないみたいだ。

「というわけで織斑兄弟には生徒会に所属してもらいます。ただし、このままじゃみんな納得しきれないでしょう？だから二人には各部活に臨時部員として順番に貸し出します。大会には出られないだろうけど、好きに使ってくれて良いわよ？」

「会長ナイス！」

「それなら文句無いわ！」

一転賛成の声があがった。無事解決できたようだ。僕達の心以外は。

生徒会室

「ってことで二人ともこれからよろしくね？」

「はぁ、受け入れますよ」

一夏は深いため息をつき、うなだれていた。

「何でこんなことに？」

「あのままどこかの部活に入れても必ず不満の声が上がるでしょ？だからこうすればみんな公平って訳よ」

妙案と言えばそうかもしれないが、好きに使って良いわよの一言が余計だった気がする…。

「まぁ本音は…」

扇子が開かれると、好奇心と書かれていた。

もうやだこの人。僕達で遊ぶ気満々じゃん。

これからも受難の日々が続きそうだ。

第69話

「ねぇ一夏。今年はどうしようか。もうこの歳だからやらなくてもいい気がするんだけど」

「そうだなぁ。でも今年は箒や鈴にも再会したしやってもいいんじゃないか？場所はいつも通り家でやろうぜ」

「そうだね。あ、何が欲しい？」

「それ教えたらつまんないだろ」

「それもそうだね」

こんにちは、美晴です。

今は昼休み。僕達は食堂でご飯を食べながら、来る日の予定を立てています。

「あ、みんなも来たみたいだね」

いつもの面子がいつもの席に座りそれぞれのご飯を食べていく。

「ふぁ、ふぉうひへは」

一夏はご飯を口に入れたまま、急に喋り出した。

「一夏。飲んでからしゃべろうね」

お茶でご飯を流し込み、再び話し出す。

「すまん。急に思い出したからな。で、箒、鈴。今年来るか？」

それが言いたかったのか。

「あぁ。お邪魔しよう」

「もち行くわよ！」

「そうか。じゃ待ってるな」

今のやり取りを見て、シャル達はポカーン。

「あの、一夏さん。先程から何のお話をされてますの？」

話の内容が全く見えていなかったセシリアさんが、いったい何を約束しているのか気になったみたいだ。

「ん？誕生日会の話だが？」

「誰のですの？」

「俺と美晴の。９月２７日が俺達の誕生日なんだ」

「な！私も参加いたします！お二人も何で隠してたんですの？抜け駆けもいいところですわ！」

テーブルを叩き立ち上がったセシリアさんは、箒ちゃんと鈴ちゃんを問いただしている。

「いや、隠してたわけでは…」

「言う機会がなかっただけよ」

そらされた二人の目が嘘だと物語っている。

「ねぇ、美晴の誕生日っていつ？」

「！？」

普通の表情のまま何を言い出すんだシャル！ほら、箒ちゃん達が首かしげてるじゃないか！

「な、何を言ってるのかなシャルは。僕と一夏は双子だよ？同じ日に決まってるじゃないか。今言ったばかりだよ？ははは…」

「そうよシャルロット。あんたも意外と抜けてるのね」

「？」

気付いてないか。それよりよかった。無理矢理取り繕った感があったけど、鈴ちゃんの発言でただシャルがボケただけって感じになったぞ。

（シャル。覚悟を決めた上で放課後に僕の部屋に来なさい）

耳打ちする。さて、しっかりお話しないとな。

放課後
美晴の部屋

「さてシャル。なぜ君はこの部屋に呼ばれたのでしょうか」

今シャルとベッド上で座って話し合っています。

「えぇと、結ばれるため？覚悟は決めたよ？」

ゆっくり上着に手をかけている。何をする気なのかは察しがついたよ。

「君はバカか！そこに正座しなさい！」

床に座るよう命令。

「あのねシャル。僕が一夏と血が繋がっていないことはみんなには隠していることなの。元々戸籍を改竄して今のこの状態だし。シャルにはあの時特別に話したんだよ？ラウラは自分で調べをつけちゃったけど。ここまで言えばわかってもらえるかな？」

「…ボクがした不用意な発言で、他のみんなにもそれがばれそうだった、と」

はっとした表情のあと、申し訳なさそうな顔で正解を呟いた。

「僕には公にできない事情があるんだ。お嫁さんになるなら覚えていてほしいな」

箒ちゃん達は知っても態度を変えないかもしれない。でも他の人も

そうとは限らない。だから隠し続けてきたんだ。
まして今の僕の立場は世界に二つだけのレアケース。どんな動きが出るか全く想像できない。

「ごめんなさい」

深々と頭を下げた。土下座寸前だ。

「まぁわかってくれたならいいよ。さ、顔あげてよ」

「もう怒ってない？」

ちらっと下から僕の表情を確認してる。

「うん。もういいよ」

もう恐い表情はしていない。普段見せる笑顔だ。
これ以上くどくど言うのも男らしくない。

「ごめんね美晴。…ところでさ、今度プレゼント買いに一緒に行かない？美晴も一夏の分買いに行くんでしょ？」

ペコリと頭を下げたシャルが、気を取り直し質問してきた。

「うん。じゃあラウラも連れていくからね」

「うん！」

なんやかやでシャル達とお出掛け。自動的に誕生日会にもご招待になるかな。

休日

先日の約束通り、プレゼントを買いに行ってきます。

「シャル達は何を贈るか決めてるの？」

「ううん。決めてない」

「私もだ」

「そう。じゃあ適当に街を歩きながら気になったお店に入ろうか」

レゾナンスだと小物屋さんもたくさんあるだろうけど、一ヶ所で済ませてしまうのもなんだし、短時間で終わっちゃう。どうせなら今日一日ゆっくり選んでほしいなと思って。

僕はもう決めてあるから最後でいいかな。

「あ、あそこ見てみようよ」

シャルが見つけたのはインテリアショップ。一夏が気に入りそうなのあるかな。

「ねぇねぇ美晴！これよくない？」

シャルが持ってきたのはウサギの可愛い置物。これを一夏が？…なんか気持ち悪い。

「これはシャルが欲しいんじゃないの？」

「えへへ。ばれちゃった」

「ちゃんと選んであげてよ。ほら、ラウラはすごく色々見比べてるじゃない」

うーん、とうなりながら様々なものを手に取りそしてまた戻している。

「それは僕がシャルにプレゼントするから、シャルもちゃんと選んであげてね？」

「本当？よし。ちゃんと選ぶぞー！」
足取り軽くまたお店の棚へ。
こうしてエサをぶら下げればシャルは簡単に操れる。

「美晴。これではダメか？」
ラウラが持ってきたのはハート型の置時計。ラウラにしては女の子らしい物を選んできたな。

「それは一夏の部屋にはちょっと…。僕がラウラにプレゼントするよ」

「そうか。すまない。いっそのことスローイングナイフでいいんじゃないかとも思うのだが」
と、一本のナイフを取り出した。いつも持ってるんだ…。

「いや、誕生日プレゼントにそれは…。ラウラは嬉しいかもしれないけど」
銃刀法的にも問題がありそうだし。

「人に物を贈るなんて初めてでな。何を選んだら良いのかわからんのだ」

「相手の事を思って選んであげればいいんだよ」

贈る人の喜ぶ顔を思い浮かべれば、大概外れることはない。

「そうか。ふむ」

「美晴。別のところにも行ってみようよ」

シャルが戻ってきた。めぼしいものはあまりなかったようだ。

「ここで見つける必要はないからね。そうしようか」

時間とお店はたっぷりあるし。

インテリアショップをあとにして再び街をブラブラ。

「一夏って何を喜ぶのかなぁ」

「うーん、基本的にはどれでも喜ぶだろうね。嫌な顔はまずしないでしょ」

「優しいもんね一夏」

「だからナイフで良いではないか」

「諦めないでよ。少しは探してあげて？」

「仕方ない。ではあそこはどうだ？」

アクセサリーショップか。一夏の白式はガントレットが待機状態だからな。あれは防具の部類だ。アクセサリーもありかもしれないな。

「入ってみようか」

中に並んでいるのはネックレスや指輪が多数。どれも手頃な値段で手を出しやすいものだ。

「ん？あれはなんだろう」

そんな中ひとつのコーナーに目を引かれた。オリジナルのネックレスやブレスレットが作れるみたいだ。

「石を選んでいただいて、それをネックレスやブレスレットに仕上げます。石にはそれぞれ意味があります。世界で一つだけの物を作

れますよ」
店員さんが詳しく説明してくれた。へぇ、面白いなぁ。
「これにしようよラウラ！楽しそうだよ？」
シャルは熱心に石を選んでいる。石の値段はピンキリで、数百円から数千円まで。組み合わせによってはすごい値段になりそうだな。
「んー」
あれとこれとそれと、と石を十数個手にしているシャル。
ラウラも石の意味がかかれた札をよく読みながら一つ一つ選んでいる。
相手が一夏とはいえ、なんだか羨ましくなってきたな。僕には何をくれるんだろう。
「出来た！」
「私もだ」
選び終わった石を糸に通してもらって、ブレスレットが完成した。
結局一万円以内で済んだ。

「いやー良いのが買えたよ」
お店を出て再び街へ。
あれは中々面白い形の企画だったなぁ。色々考えるもんだ。
「次は美晴のを買わねばな」
「そうだね。あ、あそこにしよう」
今度はセレクトショップみたいなところへ入っていく。
嬉しいなぁ。何を選んでくれるんだろう。
「美晴は外で待っていろ」
「そうそう。当日までは秘密だからね？」
と言われたので、お店の外で待っている。すでに三十分経ってる。
まだかな…。
「お待たせ！」
二人が出てきた。その手には小さめの紙袋があった。
「何を買ったの？って聞いちゃダメだよね」

「うむ。お楽しみがなくなってしまうからな」
気になるけどしょうがない。当日を待つか。

「さて、予定よりも早く終わっちゃったけど、どうする？」
予想では買い物だけで一日終わるかなって思っていたけど、実際には昼過ぎには終わってしまった。少し遊ぶのもいいけど、食事をどうしようか。

「ボクはお腹空いてないけど、ラウラは？」

「昼食をとるほどではないな」
僕もそれほどではない。さて、どうしようか。

「美晴。あそこで売っているのはなんだ」
一台ののぼりがたった自転車を指差した。

「あれはアイスキャンディーだよ。今日は少し暑いし、食べようか」

「うむ」

「三本ください」

「はい、どうぞ」

自転車を引いていたのは優しそうなおばちゃんだった。受け取って近くにあったベンチに座り、それぞれ食べていく。

「うん、冷たくて美味しいね！」

シャルも喜んでくれているみたいだ。よかったよ。

「あ！…ふむ、美晴。んー」

食べてる途中で棒が外れたようで、アイスを口に加えたままの状態になった。そしてそのまま僕の方へ迫ってきた。

「な！何をしてるのラウラ！」

「ふむ。恋人同士はこうして食べるものだと本に書いてあった。どうせならと思ってな」

聞くとラウラはアイスを口から外し、そう言った。

またそれか…。

「ダメか？」

「人目がすごい気になるんだけど…」

「ダメか？」

うっ、そうやってうるうるした目で迫られると…。

「わかったよ」

「美晴。そのあとボクね」

シャルは無理矢理棒を外そうとしている。二回もやるのか。恥ずかしい。

「んー」

仕方なく、アイスを食べ進める。その間周りの人がチラチラこちらを見てくる。気になる…。

半ばまでいくとラウラの唇に触れた。

「んっ。ふむ。この食べ方は良いな」

精神の強さが必須だけど。

「はい次ボクね」

振り返ればシャルはすでに口にくわえて待機。こんなに食べたらお腹壊しそう。

「んー」

また半ばで唇が触れた。

「えへへ。キスしちゃった」

もじもじしながら照れている。

「あんまり人の目があるところでこういうの要求しないでよ」

なにあの子達、みたいな目線が気になってしょうがない。

「じゃあ今度はボク達の部屋でやろうよ」

「うむ。人目がなければいくらでもしてあげるという意味だろう」

「いや、そういうわけでは…」

失言だったかもしれない。かえって付け入る隙を与えてしまった。

「「決定事項！」」

声を揃え、両方から腕を掴まれた。抵抗は許さないとの意味なんだろうな。

「わ、わかったよ。さて、アイスも食べたし帰るよ」

この先どれだけ恥ずかしいことを要求されるんだろうなぁ。想像しただけで顔が熱くなってきた。

帰りにちゃんと一夏へのプレゼントを買って帰りました。

第７０話（前書き）

部活ネタ。
ミハちゃんと一夏はあまり目立ちません。
なお、用語については間違いがあるかもしれません。

第７０話

「あなた達の第一回の派遣先はここよ」

こんにちは、美晴です。

生徒会役員となり、一夏と僕は副会長の任を受けました。
放課後生徒会室で書類の山と格闘しながら決済判を押し続けていると、会長が僕達の机に紙を置いた。

「あの話ですか。えー、テニス部、ですか」

概要が書かれた書類を確認する。確かセシリアさんがテニス部に所属してたな。

「えぇ。まずは明日ここに行ってもらうわ。部長への伝達はもう済んでいるから、あなた達は放課後そのまま部室に向かってちょうだい」

「「わかりました」」

さぁ、僕達の生け贄生活が本格的に始まるぞ。

「あああああの、一夏さん！今日、その、テニス部に…」

「あぁ。行くぞ。よろしくな、セシリア」

「はいっ！」

翌日の休み時間、セシリアさんはド緊張の表情で、一夏の机に向かった。
よろしくな、と一夏が肩を叩くと、はにゃーと表情を崩し、るんたったと自らの席へ戻っていった。
何を想像しているのかは知らないが、そのとろけた表情は授業中も続き、案の定千冬お姉ちゃんの出席簿アタックを放課後までに四回くらっていた。

「さてそろそろテニス部に行くか」

放課後、僕達はジャージに着替えた。
生け贄の儀式が行われる場所へ、いざ。

「ここだな、テニス部部室。お邪魔しまーす」

一夏がガチャリと部室のドアを開いた。

「ちょっと一夏！最低でもノックを…」

「あ…」

眼前に広がるのは秘密の花園、女子更衣室。
部室を着替えに使うのは多々あることであり、そこにノックをせずに入れば、今目の前で起きている状況があって当然なわけで…。

「「「きゃあー！」」」

そこにいたのは何人もの下着姿の女子生徒。
この学校は９９．９％が女子。僕達以外の生徒はみんな女子。
物を色々投げられて退散する羽目になると思いきや…。

「「「チャーンス！」」」

飛びかかられた。

「この際すぐにでも！」

「既成事実さえ作っちゃえば！」

「ふふふ、その気なんでしょう？」

やめろ！頬を優しく撫でるな！僕にはシャルとラウラが！

「一夏！逃げるよ！」

素早く包囲網を抜け、部室の外に出て、扉を閉めた。中から舌打ちする音がかなり聞こえた。
野獣がたくさんいるぞ、テニス部。

「不用意に開けるなよ一夏」

「ごめん。まさかこんなことになるとは…」

まだ慣れてないの？こんなの簡単に予想できるよ。

「あれ？二人とも言われてた時間より早いね。そこで何やってるの？」

誰だろう、この人。

「部長！一夏さん達が来る前に着替えてしまわな…いと…って一夏さん美晴さん！」

セシリアさんがやって来た。
僕達を見て慌ててるなぁ。そんなに早く来ちゃったかな。
で、この前の方は部長さん、と。

「部長さん、こんにちは。今回はよろしくお願いします。で、何やってたかと言うと、一夏がノックしないでドアを開けたので、まぁ花園が広がっていたというわけで…」

挨拶をしたあと、経緯を説明。

普段ならただの不審者だからな。それに僕にそんな趣味があると誤解してほしくないし。

「どう？うちの花はみんな食欲旺盛でしょ？」

中を指差し、にっこり。

「あはは…はい」

ホント、半分ぐらい食べかけられましたよ。食虫植物みたいだ。

「さて、私達も着替えてくるから、二人はコートで待っててね」

「「はい」」

部長さんとセシリアさんは部室へ入っていった。

数分後。

コートにテニス部全員が集合。

ザワザワとした声と、ギラギラとした目が混じりあっていた。
何この部活。

「さて、私達はまずストレッチと基本動作の練習をします。で、二人には練習試合のお手伝いをして欲しいから、それまではお洗濯とかをお願い」

うわぁ、完全に雑用だ。好きに使って良い、とは言ってたけどマネージャー扱いですか。

「「はい」」

まぁもう一度野獣の群れに放たれるよりはましだから、仕事しよう。

僕達がまずやったのは部室の掃除。
いやぁ汚い。
普段どんなことをして過ごしているのやら。もう少し整理整頓すればいいのに。

「汚いな意外と」

「だね。僕達が掃除得意で良かったんじゃない？」

「そうだな」

ちゃっちゃと済ませ、次の作業へ。
次はお洗濯。タオルやらなんやらある中で…。

「美晴。これ、下着…か？」

一夏が一枚の洗濯物を恥ずかしがりながら見せてきた。

「いや。アンダースコートだよ。その下に下着をはくんだ」

何でこんなのも一緒に洗わせるんだよ。恥ずかしくないのか？むしろこっちが恥ずかしいじゃないか。

「…そうか。とにかく早く洗おう。理性が…」

「そうだね…」

そのあとは終始無言。干すために一枚一枚手に取るのが辛くてしょうがなかった。

「そろそろ試合やるから来てもらえる？」

「「はーい！」」

ようやくまともなテニス部が見れるのか。

「で、僕達は何をすれば？」

コートでみんな整列している。部長さんの後ろで僕達は待機させられていた。

「ちょっと待ってね。今みんなに今日の内容を伝えるから」

そう言って振り返りみんなの方を向いた。

今日重点的に鍛えるポイントでも伝えるのかな。目的を持って練習するのは成長に繋がるからな。

「練習試合と言いましたが、せっかくのこの機会、普段と同じじゃみんなもつまらないでしょ。だから今日は…」

なんだか嫌な予感がするぞ？

「一夏君と美晴君によるおもてなし権争奪トーナメントを開催します！」

うわぁやっぱりこうなるか。生け贄になる運命は避けられないのか。

「「「きゃあぁぁぁ！」」」

「さすが我らが部長！わかってる！」

「絶対優勝しなきゃ！」

「一年生も参加してよろしいですか？！」

あ、セシリアさんが居た。そうか。彼女なら…。

「もちろん。全員参加にします。下克上ありよ。さぁ！みんな優勝目指して頑張って！」

「「「オー！」」」

かくして、僕達によるおもてなし争奪のトーナメントが始まりました。

試合は四つのコートを使って行われました。
みんなかなり気合いが入っていて、ボールへの執念が半端ない。
追い付くかどうかギリギリのボールに滑り込んで拾う人も居た。
部長が最初言った通り、下級生が上級生を倒す試合もいくつか。

そんな中、セシリアさんは着々と駒を進めていた。どうやら実力者のようで、時折追い詰められながらも、スピード感のあるテニスで相手を翻弄していた。
貴族だし、専用テニスコートで休日にやっててもおかしくないな。

ついに決勝。
セシリアさんの相手は部長さん。まぁ部長だし、ここまで勝ち上がるのは当然と言えば当然。
むしろここまで並みいる強敵を押し退けて来たセシリアさんがすごい。

二人はコート上で対峙している。

「部長。申し訳ありませんが、優勝をお譲りするわけにはいきませんわ！」

「ふふ。あなたがここまでやるとはね。新たな発見があって私としては嬉しいわよ」

やはり何か賭けるものがあると、人は実力以上の物を発揮するのだろう。
ましてやセシリアさんにとっては自分の大好きな人を独占する権利が与えられるというのだから、他の人とは熱の入れ方がひと味違う。

ついに試合開始。

「はぁっ！」

部長さんの強烈なサーブでスタート。どうやらパワー型のテニスをするようだ。

「はっ！」

それをセシリアさんは確実にとらえ、リターン。
部長さんは対角線に強烈なショットを重ねていく。セシリアさんも持ち前のスピードで追い付き、点をとらせない。
その後それぞれがポイントを取り合い、一進一退が続く。
しかし試合終盤。
足を使い続けたセシリアさんが少しへばってきた。リターンのボールが甘くなっている。
このままだと押し切られるかもしれない。

「ま、まだまだっ！」

必死にボールに食らいつくが、ついによろけてしまう。
これで部長さんのマッチポイント。

「私相手によくやった方よ。そろそろ終わりにしましょうか」
部長さんは決めにいくつもりだ。セシリアさん、ここで終わるのか…。

「頑張れセシリア！負けるな！」
一夏が大声でセシリアさんを応援し始めた。

「一夏さん…。えぇ！勝って見せますわ！」

ゆっくりと立ち上がり、ラケットを構えた。その目には力が戻っていた。

「いいねぇ、青春って感じで。でも手加減はしないからね」

あくまでも全力で行くようだ。

「はぁっ！」

コートの右隅へ速いサーブ。

「はっ！」

それに追い付いたセシリアさん。さっきまではなんとか返しているという感じだったが、今度はストレートに綺麗に返した。

「くっ、やるぅ！」

部長さんのギリギリを通過して行った。これでデュース。

「まだ同点！これで！」

今度はコントロールよりもパワー重視のサーブ。

「お、重い！」
なんとか返す。
部長さんはそのリターンボールを全力で真ん中へと打ち返した。

「負けませんっ！」
セシリアさんが打ったボールはロブになり、ベースラインへ。

「アウトよ！」

「入っています！」

二人は審判を見る。

「イン！」

判定はイン。これでセシリアさんのマッチポイントだ。

「…連取されるなんて。でもまだ終わってない！」

どうやら部長さんは純粋に試合を楽しんでいるようだ。
ご褒美とかそんなの関係なく、ただただハイレベルなこのゲームが楽しいんだ。

果たして最後になるのか。
放たれたサーブは鋭い。セシリアさんも拾い、すさまじいラリーが続く。
勝負を分けたのはただの偶然。セシリアさんのバックハンドショットがネットに当たった。

「コードボール！」

部長さんは必死に前進する。
ギリギリ届かない！

「くそっ！」

ラケットを投げる。

「ゲームセット、アンドマッチ！ウォンバイ、セシリア・オルコット！」

投げたラケットにボールは当たらなかった。
優勝はセシリアさん。二人は握手している。

「ナイスゲーム、オルコットさん。優勝おめでとう」

「ありがとうございます部長。ナイスゲームでした」

「愛の力ってすごいわねぇ。私も誰か見つけようかしら」
ふふふと一夏を見ながらセシリアさんをからかっている。

「部長！」
顔を真っ赤にして慌てるセシリアさん。

「まぁ何であれ、オルコットさん。これからも頑張ってね？期待してるわよ！」
パンッと肩を叩いた。
これでトーナメントは終了。しかし僕達の本当の出番はここから…。

一夏の部屋

「さぁて、始めるか！」
一夏の部屋でマッサージをすることに。
一夏はすぐに始めたかったようだが、セシリアさんが猛反対し、四十分ぐらい待たされた。

その間に僕はお茶の準備を済ませていた。
汗臭いのを嫌ったのだろう。セシリアさんはしっかりおめかしした上でやって来た。

「お願いします、一夏さん」

ベッドに寝転がる。

「足をかなり使ってたからな。まず足をほぐそう」

ふくらはぎや腿をゆっくりと揉んでいく。

「ふぁっ！あっ、いい…。んっ！」

ピクッと上半身が動く。相変わらず声がえっちぃ。僕が言えた義理ではないけど。

「あんまり動くなよ。とにかくほぐして熱を取らないと」

グイグイと今度は上半身へ。

「ひゃうっ、やぁっ！」

肩回りの筋肉をほぐしているようだ。

「も、もう少しやさしく…やんっ！」

「あ、わりぃ。強かったか。じゃもう少し弱めに」

「はぁっはぁっ」

その後もよく使ったであろう筋肉を徹底的にほぐされたセシリアさんは、息が荒れていた。

「よし、これで終わり！」

「じゃあ僕の番だね」

僕が用意したのはシンプルに、緑茶と梅干し。疲労回復に効果の高い二つ。

シンプルとはいえ、それなりに高級なものだけど。

「んー、酸っぱいですわ！」

口をとがらせている。

「それは二十年物の梅干しだよ。結構高いんだよそれ。梅干しのク

エン酸は疲労回復に高い効果があるんだ。緑茶にも疲労回復に効く成分があるんだよ」

「日本の疲労回復法は食からというわけですわね。ありがとうございます、美晴さん」

うん、どうやら喜んでもらえたようだ。

そのあとはゆっくりお茶を楽しんだ。

今回はまぁ、楽しめた方かな。次回もあるんだろうか…。

第７１話（前書き）

諸事情のため、投稿が遅くなりました。

今回は誕生会です。

第71話

「ねぇ一夏」

「何だ美晴」

「毎年思うんだけど、自分達で飾り付けして、自分達でおめでとうって描いたケーキ作るのって…」

「悲しいよな…」

こんにちは、美晴です。

今日が僕達の誕生日。僕の場合はごまかすために決めたやつですけど。

毎年自分達で飾り付けしてます。千冬お姉ちゃんに任せると、地獄絵図になるので…。

ただ悲しいのです。自分達で飾り用のあの輪っかを吊るして、ケーキにロウソクを立てて…。おめでとうって描いたチョコの板を乗せて…。

やらなきゃいいじゃないかとお思いでしょうが、その辺には千冬お姉ちゃんはうるさいのです。華やかな雰囲気でやった方が、誕生日らしいと。

「どうだ。終わったか？」
階段を下りて、僕達の悲しみを産み出した人が来た。
「終わったよ…」
「ふむ。今年も綺麗な飾りだ。祝い事はこうでなくては」
うんうんと周りを見渡し、一人で納得している。
玄関のチャイムが鳴った。
「はーい」
ドアを開けると、弾君と蘭ちゃんが居た。
「おめでとさん。美晴」
「おめでとうございます」
「ありがとう。さ、上がって？」
二人をリビングへとあげた。

「一夏。おめでとさん。相変わらずこの飾り付け、お前達でやったのか？」
弾君が周りを見渡して聞いてきた。

「あぁ」

「うん。毎度のごとくね…」

「そうか…。辛いな」
僕達の気持ちをわかってくれる大事な存在だよ君は…。

「一夏さん、おめでとうございます！」
蘭ちゃんは一夏と挨拶しながらニヤニヤしてるし…。
らしいと言えばらしいけど。

「少し待っててね。まだ来る予定だから」

「おう。じゃテレビ見てるわ」

このくだけた感じが男友達の良さだよな。なんにも気を使わなくて

いいと言うか。
人によっては行儀が悪いと言うかもしれないが、こんなものだ、友達なんて。
それに行儀の悪さは弾君のとなりで寝転んでる人に比べれば…。
なんて思ってると、またチャイムが鳴った。ドアを開けるといつもの五人。

「美晴！おめでとう！」
シャルとラウラに抱きつかれた。
「ちょっと二人とも。危ないよ」
玄関の段差につまづきそうになった。
「あ、ごめん。改めて、おめでとう！」
「ありがとう。さ、あがって？」
五人分のスリッパを用意して、みんなをリビングへ。
「「一夏。おめでとう」」

「おめでとうございます、一夏さん」
一夏に挨拶した箒ちゃん達だが…。
「あんた！一夏から離れなさいよ！」
「そうだ！一夏が迷惑そうだぞ！」
「一夏さんは私のものです！」
蘭ちゃんが一夏のそばにいるのを見て、三人とも牙を剥いた。
「嫌です！」
蘭ちゃんは屈せず、真っ向勝負。めでたい雰囲気はどこへやら…。
「どうするの？あの集団」
シャルが聞いてきたが、
「しばらく放っておけば、鎮圧されるよ」
この家で騒ぐことがどれだけ危険なことか、改めて思い知るがいい。

「うるさいわ！貴様ら！人の祝い事の席で下らないことでギャーギャーと！そこで大人しくしていろ！」

鎮圧部隊出動。暴徒と化していた四人は正座。一夏も連帯責任。

だから危険なんだ。この家は。弾君のようにおとなしくテレビを見ているのが正解だ。

僕はそんなみんなを横目に、着々と準備を進める。シャルやラウラも手伝ってくれたから、結構はかどった。

「それでは、一夏と美晴の誕生日を祝って乾杯！」

弾君が音頭をとってくれて、パーティが始まる。

一夏は四人に囲まれて大変そうだ。それぞれ全く譲ることなく一夏を取り合っている。

僕はといえば…。

「はい美晴。あーん」

「次はこちらもだぞ。あーんだ」

シャルとラウラに食べさせられていた。

弾君が一人なのが可哀想だ。

「美晴。私に注げ」

千冬お姉ちゃんはお酒を注ぐよう言ってくるし。一応主役は僕達なんだけど。

一夏も、四人にあーんを強要されていた。全然僕達のパーティと呼べる状況じゃない…。

またチャイムが鳴った。これ以上呼んでたっけかな？

「はいはい。ちょっと待ってくださいね」

ドアを開けた。

「美晴君、おめでとう」

「たっちゃんさん！」

そこにいたのはたっちゃんさん。まさか来るとは。

「私達も居るよぉ？ミー君」

その後ろからのほほんさんがヒョコッと顔を出してきた。

「のほほんさん、虚さんまで！ありがとうございます！さ、どうぞ！」

いやぁ今年はたくさんの人に祝ってもらえて嬉しいなぁ。

「織斑先生、お邪魔しますね」

たっちゃんさんは千冬お姉ちゃんに挨拶。

「あぁ。私よりも主役に挨拶をしてやってくれ」

と、ビールの入ったコップを一気に飲み干す。

また酔い潰れるよー。

「一夏君。おめでとう」

「あ、ありがとうございます、会長。すみません、今手が離せなくて…」

騒ぐ四人の対応で手一杯の一夏は、まともな挨拶ができないでいた。

「あ！あなたは！」

虚さんを見て突然弾君が椅子から立ち上がった。

「あら、また会えましたね。お久しぶりです」

互いに見知っているようだ。
文化祭の時にでも知り合ったのかな。

「さ、どうぞ。こちらの席へ！」

弾君は自らの隣を促した。１３人となるとさすがに少し窮屈だ。一人一人の距離が近くなる。

弾君と虚さんは顔を赤くし、言葉に詰まりながらも会話をしていた。
これはひょっとしてひょっとするかもなぁ。

「たっちゃんさん。虚さんって恋に関しては…」

「う～ん。美人だからねぇ、言い寄られてたのは何回も見てるけど、その都度断ってたみたいね。だからああやって誰かを意識してるのは初めて見たわね」

やっぱりそうか。あのクールな虚さんが弾君と…。

「ソースを…」

「あ、俺が取ります！」
と、二人の手が触れた。
「「あっ！」」
手を引っ込め、真っ赤になりながらギュッと自分の手を握ってる。
甘酸っぱいなぁ。弾君も恋をねぇ…。
「のほほんさんはお相手いないの？」
お姉さんの初恋を見た妹の心境はどうなのかなぁ。
「ミー君は失礼だなぁ。私はいいんだもん！それともミー君がもらってくれるのかなぁ？」
ニヤッとしている。
「ダメ！」
「渡さんぞ！」
シャルとラウラに引っ張られ、両腕にしがみつかれた。

「美晴はボク達の旦那様になるんだから！」

「愛されてるねぇ、ミー君」

「あはは。うん。僕も愛してるし」

「なによぉ。私達の前で見せつけてくれるじゃないの」

たっちゃんさんがブーイング。

「ごめんなさい、たっちゃんさん。さ、パーティ続けましょうよ」

その後もワイワイとパーティは続いた。

パーティ終盤。

「プレゼント持ってきたんだ。はい美晴！」

シャルが袋を差し出した。

「この前買ったやつ？」

「うん！」

どれどれ？あ、デジタル式のフォトフレームだ。

「それにカメラで撮った思い出をどんどん入れていくんだ！」

「なるほどね。ありがとうシャル。思い出いっぱい作ろうね」

お礼に撫でてあげた。

「うん！」

「私からはこれだ」

ラウラが渡してきてくれたのは万年筆。

「美晴はよく勉強しているしな。何か役立ててもらえればと思ってな」

「ありがとう。ラブレターでも書こうかな」

「う、うむ。是非そうしてくれ！」

「おねーさんからはこれよ？」

たっちゃんさんが取り出したのは、目覚まし時計。

声が録音できるタイプのようだ。

「毎日おねーさんの声で起きられるわよ？本当は生声で起こしたいんだけどね」

「それは禁止だ。見つけ次第殺す。さて私からはこれだ」

抱き枕。しかも千冬お姉ちゃんのプリント及び匂いつき。どこに発注したんだ。

「いや、これは…」

「受けとれ」

「はい…」

仕方ない。部屋に置いておくだけでいいや。

その後みんなにも色々もらった。

「次は一夏の分だね」
一夏もみんなからそれぞれもらってる。
中にはどうすればいいのそれ、みたいなへんてこなものまで。
贈ったのはのほほんさんだけど。要はパジャマですよ。

「じゃあ僕から一夏へのプレゼント。はい！」
僕が渡すのは数冊の本。

「えぇと。数学、英語、化学…。美晴さん。これは参考書と言うやつですよね？」

「そうだよ一夏。テストで困らないように今から勉強しないとね？」

「うぅ。なかなかジョークの効いたものを…。嬉しくねぇよ」
目に見えて落ち込んでいる。
にゃはは。その顔が見たかったんだよ。予想通り。

「よし。最後は俺からだ。ほいよ」
弾君から渡された袋には四角い箱が入っていた。

「いずれ必要になるだろ。ただし、ここでその中身を確認することは絶対にダメだ。頼む。この通りだ」

テーブルに頭を擦り付けて頼み込んで来た。
来るのは知らなかったんだろうけど、そんなに虚さんに知られたら困るものを元々チョイスしなけりゃいいのに。

中身は…、後で見たらそういう類いのものでした。
使う機会はそう来ないと思うよ。
まぁ確かに惚れている人の前で自分がこんなものを友人に贈ったなんて知られたら、死にたくなっちゃうよね。

「うん、あ、ありがとうね」

「さて、ケーキも食べたし遊ぶのもいいよね。ってことで、あれを…」

シャルが出したのは割り箸。
嫌な予感が…。

「大人数で王様ゲームいってみよう！」

またか…。
ただの合コンになり下がってないか？
タチの悪い人が多いから、何を命令されるか…。

「王様だーれだ！」

「私ね」

たっちゃんさんか。

「そうねぇ…」

周りを見渡す。主に虚さんの方を。そして…。

「四番と…、九番」

ピクッと弾君と虚さんが反応した。

どう見破ったの？観察の結果？それとも何らかの不正が…。

「恋人繋ぎしなさい」

わぁ。反応を見て楽しむ気だ。性悪だなぁ。

と思ってたらニコッとこっちを見てきた。読んだなやっぱり。

「や、やるんですかお嬢様？」

虚さんが少し震えてる。

「今は王様よ。さ、やりなさい」

「で、では失礼して…」

弾君が虚さんの手に触れた。

「ひゃっ！」

思わず手を引っ込めてしまった虚さん。

わぁ、意外と可愛い。

「す、すみません。つい…。では…」

ギュッと手を繋いだ二人。もう、赤と言う色を実際に示せと言われたらこれを真っ先にサンプルに出すぐらい赤い。たっちゃんさんはずーっとニヤニヤ。十分楽しんだみたいだな。

「はいじゃあ次！王様だーれだ！」

「ふむ。私か」

千冬お姉ちゃん…。確信犯的行為が出来る人が連発か。

「よし。美晴。私に大好きと言え」

「いや番号じゃないと意味ないし」

「そうか。では五番の美晴。私に大好きと言え」

…番号当たってるし。本末転倒なんじゃないのか？これ。

「えー、大好き！千冬お姉ちゃん！」

「私もだ！」

ガバッと抱き締められた。

「ルールが違う！ちょっと！」

「ルールなんて関係ない！所詮他人が決めたものだ！」

違うことへの意味も含まれてそうだけど。

「それじゃあゲームの意味が…無いでしょう！」

ググッと押して無理矢理引き剥がす。

「はぁっ、はぁっ。後一回にしよう。これ以上続けると危険だ」

「うーん、まぁいいか。ラスト一回！王様だーれだ！」

「あ、僕だ」

ラストにツキがきたか。

「じゃあみなさんにお返しをしますか。一番の人はみんなにおもちゃにされてください」

一番は誰か？そんなのもちろん。

「俺かよ！」

さっき取る瞬間に少し見えた。僕には心を読む能力はないから、半ば不正行為で。

「それじゃあ箒ちゃん、鈴ちゃん、セシリアさん、蘭ちゃん。楽しんでねぇ」

「ひでぇぞ！美晴ぅ！」

隣の和室から一夏の叫び声が聞こえてきたが、僕達はリビングでゆっくりとお茶をすすっていた。

祝ってもらったんだから、少しはお返ししないとね。

第７２話

ＳＩＤＥ　シャル

「美晴！おはよう！」

今日もボクとラウラは朝の挨拶として美晴に抱きついた。

「うん、おはよう。シャル、ラウラ」

美晴はいつも優しく抱き返してナデナデしてくれる。この一瞬で今日も頑張ろうって元気をもらえる。

「じゃあ朝御飯食べに行こうか」

「うん！」

「うむ」

腕に抱きついたまま、ボク達は食堂へ。

朝食を済ませ、教室へ向かっていると美晴が突然空を見て言った。

「天高く馬肥ゆる秋…か」

ん？何だろうそれ。天高く？

「ねぇ、美晴？今何言ったの？」

「あれ？今僕何か言ってた？気のせいじゃない？」

美晴は首をかしげて不思議そうな顔をしている。

そうかな？でも美晴は嘘をついているようには見えないし…。気のせいなのかな。

教室にて。

今は休み時間。

さっきの美晴の言葉がどうも気になるなぁ。ラウラに聞いてみようかな。

「ねぇ、ラウラ。さっき美晴が言ってたと思うんだけど、天高く…って何だか知ってる？」

「うーむ。あのとき美晴は言ってないと言ったが、確かに言っていたんだが…。しかし残念ながら私もよく知らない。箒や鈴ならわか

るかもしれんぞ」
ラウラも首を捻る。
日本の言葉はよくわからないよね。
その点、箒や鈴は詳しいから何かわかるかも。

「そうだね。あとで聞いてみようか」

「ねぇ箒、鈴。ちょっといい？」
次の休み時間、ちょうどいた箒と鈴に聞いてみた。

「天高く馬肥ゆる秋って何？美晴が今朝言ってたんだ。どうやら無意識みたいだったんだけど」

「あぁそれは元々は中国の故事でね、秋には北方民族が馬を盗りに来るから警戒しなさいってものだったのよ。でもたしか今日本では…」
鈴は箒の顔を見る。
すると箒は頷いたあと、話し出す。

「あぁ。秋になると空が高く見えて、馬も食欲が増えてよく太る、食べ物が美味しい時期だという感じで使われているな。ただ、最近

では雑誌などでは、秋には女子も太りやすいから気を付けろ、みたいな使われ方をされて、ダイエット特集の見出しで見かけることもあるな」

そんな意味が含まれてたんだ…。でも美晴がそんなことを？

「それは美晴が遠回しに私達が太ったと言っているのだろうか」

ラウラも疑問を口にした。

「美晴がそんなことを言うとは思えないが、無意識ならあるのかもしれんな」

そんな…。美晴が…。

「そうね。あり得るかもね。確かにあんた達、転校してきたときから比べると、丸くなったわよ。性格的な意味じゃなくて」

「え？ほ、本当に？」

「あぁ。少しこう、頬がプニプニし始めているな」

箒がボクとラウラの頬をつまんだ。

確かに昔と比べると、しっかりつままれている。

「うーむ。ここの食堂の食事はうまくてな。つい食べてしまうのだ。軍の食事とは比べ物にならない」

「ボ、ボクもつい量が多くなっちゃって…」

美晴と食べるとご飯が美味しく感じられて、つい一品多くとかおかわりとかしてしまう。

「いくら美晴と婚約したからって、ブクブクだと嫌われちゃうわよ？」

「「そんな！」」

嫌われたくないよぉ。美晴に好きって言われたいよぉ。

「よし！ラウラ！ダイエットしよう！」

「うむ！作戦開始だ！」

まずは食事の量を減らそう。

食堂

「よし。この量なら大丈夫」

昼食はいつもと比べると半分以下の量。見た目からして少ないけど我慢。

「あれ？シャル、ラウラ。いつもと全然違うじゃない。そんな量で足りるの？」

美晴が自分のご飯を持って隣に座った。

「うむ。今日は私もシャルロットもさほど食欲がなくてな」

「う、うん」

ナイス、ラウラ。

「そう？病気とかじゃない？熱はないの？」

「ふわぁ…」

美晴がおでこをくっつけて熱を測ってきた。近すぎてかえって熱が上がっちゃうよ。

ラウラも耳が真っ赤だ。

「うーん、熱はないみたいだけど…。ちゃんと食べないと元気出ないよ？」

「うん。心配してくれてありがと」

本当は太ったからダイエット、なんて口が裂けても言えないよ。

いつもより量が少ないから、あっという間に食べ終わってしまった。

「むぅ。なんかこう、物足りない感じが…」

ラウラがお腹をさすっている。いつもより少ないから、満足感がない。

「ね。でも頑張らないと」

ボクもまだ物足りない感がある。

「食事制限も良いが、みんなにもどうやってスタイルを保っているか聞いてみるのはどうだ？」

「良い手だね！それ！よし、聞いてみよう！」

箒もセシリアも太ったところ見たこと無いよな。それなりに食べてるのに。
有効な方法が聞けるかもしれない。

「ってことでセシリア。教えて欲しいな」

「はぁ、スタイルを保つ秘訣…ですか」

「早く教えてくれ。こちらとしては切実なのだ」

「まぁ、好きな人の前で綺麗でいたい気持ちには共感いたしますわ。
では、私はですね…」

ボク達はトボトボと廊下を歩いていた。

「無理だよ…。一回何十万するエステと、一本何万もするクリームを使えなんて…」

「うむ…。私は買えなくもないが、私には向いていない気がするぞ

…」

「「はぁ…」」

綺麗になるにはお金がかかるのかなぁ。

「何よあんた達。まだ悩んでるの？」

後ろから声がかけられた。

「鈴…」

そこには両腰に手を当てた鈴。

「しょうがないわねぇ。これをあげるわよ」

やれやれといった表情をしながら鈴が取り出したのは一本の小瓶。

中には乾燥させた葉っぱのようなものが入っていた。

「中国四千年の中で培われた、痩せるための漢方よ。これ飲みなさい！」

「ありがとう鈴！試してみるよ！」

ボク達は部屋に戻り、お茶としてすぐに飲んでみた。

「「不味い…」」

感想は不味いの一言。なんだか変な臭いするし、苦いし、とにかく不味い…。

「中国四千年おそるべしだな」

「だね。これ、無しにしよう」

「うむ…」

こんなのずっと続けられるわけが無い。味覚がおかしくなっちゃいそうだ。
それでご飯が食べられなくなって痩せるのかもしれないけど。

「お願い！後は箒が頼りなんだ！」

今度は最後の砦であろう箒に頼み込む。

「仕方ない。ではついてこい」

箒はどこかへボク達を連れていった。

「ここでトレーニングをしろ」

箒が連れてきたのは学園のトレーニングルーム。
様々な器材が並んでいる。美晴もたまにここでやっているらしい。

「痩せるには運動が一番だ。しっかりとした筋肉をつければ自然に痩せていく」

基礎代謝が上がれば痩せられる、か。

「うむ。その意見には賛成だな」

ラウラは早速トレーニング器具を使って、腹筋やランニングをしている。

ボクもやってみよう。

「んー！はぁっ、んー！はぁっ」

背筋を鍛える器具に挑戦。

うー、結構きついよぉ。
ラウラは軍でこれよりきついのやってきただろうから、楽勝だろうなぁ。今も高速でバイクをこいでるし…。

と言うか、これ続けるとムキムキになっちゃう気がするんだけど…。
それは望んでないんだよなぁ。

「ほ、箒。ありがとう。そろそろ戻るよ」

別の方法を探ろう。ムキムキじゃない方法を。

「そうか。では頑張れよ」

ラウラも連れて、トレーニングルームを出た。

「なぜだ？私としては有効だと思ったんだが？」

ラウラはまだ続けたかったようで、ちょっと不満そうだ。

「筋肉がバッチリついた嫁ってなんだか変な気がして…」

「ふぅむ。まぁ良い。それで、これからどうするのだ？」

「うっ…」

どうしよう、特に何も考えてなかったよ…。

「あら？シャルロットちゃんにラウラちゃん。どうしたの？暗い顔して」

楯無会長…。この人も良いスタイルしてるよなぁ。

「？」

思わずじっくり見てしまった。

「えぇ。実は…」

事情を話してみた。

「なるほどねぇ。美晴君がそんなことをねぇ。良いわよ。おねーさんが協力してあげるわ」

「ありがとうございます！」

あれだけ人気がある会長だし、まともに教えてくれそうだ。

「はい右！左！そこでひねって！ラウラちゃん動きが鈍いわよ？」

会長が教えてくれたのはエアロビ。健康的に体を動かして、脂肪が

ちゃんと燃えそう。
これなら汗もかいて、無駄なものも出せるな。
綺麗になって美晴に褒めてもらうんだ！

それから数日、会長にお世話になりながら、着実にお腹回りが減っていった。このままいけば…。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

教室

最近、シャルとラウラが放課後スゴい汗をかいているのを見かける。
何かしてるのかな。
ご飯の量は相変わらずだし。あれで大丈夫なのか？

さて、何はともあれ、授業も終わったし今日も訓練しようかな。

あれ？シャルとラウラが寝てる。

「おーい。シャル、ラウラ。ＨＲ終わったよー」

あれ？起きないな。

「おーい」

二人の頬をピタピタと叩く。

「んぁ？あ、美晴。ごめんごめん」

シャルとラウラは立ち上がろうとするが、そのまま僕に向かって倒れて来た。

「む？何だ。力が…入らない」

「あれ？何でだろ…。上手く立てないや」

二人とも足がふらついている。

「今日はこのまま部屋に戻ろうね」

これは危険と判断し、二人を肩に担いで部屋へと連れていく。

部屋に着き、二人をベッドに寝かせた。

「たぶん、最近あまりご飯を食べてなかったのが原因じゃないかな。いきなり量を減らしたりするからだよ。何があったの？」

「「……」」

二人とも布団から少しだけ顔を出して、何も言わない。

「ほら、何があったの？心配になるじゃないか。やっぱり病気なの？」

「笑わないな？絶対に」

布団を全部かぶってラウラがおどおどした声を出した。

「笑わないよ」

むしろ心配でそれどころじゃない。

「実は…、ダイエットしようと思って…」

さっきよりは少しだけ顔を出したシャルが、恥ずかしそうに言った。

ダイエット？何で急に？

「何かあったの？」

水着になる機会はないし…。もしかしてクラスの女子の間で流行っ

てるのかな。

「…美晴はボク達の事太ったって思ってるんでしょ？」

「え？思ってないよ？」

全然普通の体型。
プニプニは魅力だし。

「しかし美晴は天高く、と太ったことを暗に示したではないか」

あぁなるほど。確かに最近雑誌とかだとそういう風にとらえて、ダイエット特集組んでたりするな。

「きっと単にご飯がおいしい季節だなぁと思って、呟いただけだと思うよ。今度何食べようかなぁって」

「な、何だぁ。ボク達が太ったって言ってたんじゃなかったんだ」

「そんなこと言わないよ。それに太ったって僕は二人が大好きだよ。安心してね」

「…うん。でも太らないようにはするよ」

女の子は色々大変なんだなぁ。

「とにかく今日はゆっくり寝てね」

二人のおでこにキスをしたあと、ベッドから出された手を握り、寝かしつけた。

第７３話（前書き）

新たな女の子登場。

ちなみにキャノンボールはやりません。束さん製作機がぶっちぎりそうですし。

あとファントム・タスク出す気無いですし。

第７３話

こんにちは、美晴です。

今、生徒会室で各委員会から上がってきた書類を処理しています。

「にゃっ！」

真剣に仕事をしているといきなり脇腹をくすぐられた。

「可愛い声出すのね、美晴君」

振り返ると口に手を当てて、笑いをこらえているたっちゃんさんがいた。

「たっちゃんさん！仕事してくださいよ！」

ったくこの人は。すぐ「暇ぁ」とか言い出して僕にちょっかいを出してくるんだから。

一夏だってちゃんと仕事してるんだぞ。会長がそんなんでどうするんだ。

「襲いたくなる背中してるんだもん！」

「もん！じゃなくて、見てくださいよこの書類の山！早く片付けないと今日終われませんよ！」

ただでさえのほほんさんが仕事しないんだ。
増やすから行きたくないって言うのを無理矢理引っ張ってきてこの状況だというのに。
ましてや秋になって、行事もあるし、各部活からも、あれが欲しいだの、これをして欲しいだの、陳情も上がってくるんだ。
これでもかというほどの書類の山なんだぞ。
長たるたっちゃんさんが遊んでて良いわけがない。

「はいはい、わかったわよ。虚ちゃん。お茶入れて」

「はい、会長」

虚さんも甘いよ。幼馴染みみたいなもので、気心が知れているのもあるんだろうけど。

「ねぇ、美晴君」

「はい？」

何ださっきから僕にばっかり。

「今度専用機限定のタッグトーナメントあるでしょ？あれ、うちの

妹とペア組んでくれないかしら」

「…はい？」

「だから、今度のトーナメント、私の妹と組んで欲しいの」

えーと、ちょっと状況を飲み込めていないんですが…。

「会長には簪様という妹がいらっしゃいまして。しかし仲があまり良くないのですよ」

「私はすっごく仲良くしたいんだけどね。ずいぶんと拒絶されてて。それに多少性格に難ありで、端的に言うと暗いのよ。だから美晴君の明るさを見込んでお願いするわ。私の妹と組んでちょうだい」

手を合わせてお願いされた。

「一夏じゃダメなんですか？僕はシャルかラウラと組もうと思ってたんですが…」

隣にいる一夏を指差した。

「それも良いかもと思ったんだけど、美晴君はほら、色々あるでしょ？だからよりあの子の心に近づけそうかなって、ね」

色々、か。まぁ確かにありますよ。闇は。

「はぁ…」

シャル達に断りを入れるの怖いなぁ。
でも専用機持ちならもうすでに知り合っててもおかしくないんだけど、見た事無いな。

あ、四組に一人居るって前に聞いたことがあるな。もしかしてその人かな。

「簪さん、ですか。四組に居ます？」

「そう。四組よ。よろしくね」

「わかりました。尽力します」

とにかく明日から接触してみるか。
でも何で今まで会わなかったんだろう？体弱いのかな。
その辺含め色々聞いてみるか。

というわけで翌日。
試しに四組に言って、直撃してみよう。

「すいませーん」
とにかく誰が簪さんかわからない以上、誰かを呼んで教えてもらわないと。

「美晴君じゃない。四組は初めてよね」
一人の女子が僕に気づいて近寄ってきた。

「うん。ところで、更識さんってどこにいるかわかる？」

「あぁ、あの子ならあそこよ」
窓際中程の席を指差した。

「ありがとう」
僕は簪さんの元へ歩いた。
たっちゃんさんと同じ水色の髪の眼鏡をかけている少女。
暗い…との話だったが、今僕の目の前に居るのは、すさまじいスピードでキーボードを叩いている。
あれぇ？意外に活発なのか？

「更識簪さんだよね。織斑美晴と言います」

「……」

あれ、返答がない。

「おーい」

「…知ってる」

声ちっさ！暗いなら当然か…。注意しないと聞き逃しちゃいそうだ。

「そう。で、突然なんだけど、今度のトーナメント、僕とペア組んでくれない？」

「…帰って、迷惑…。…私、トーナメント出ないし…。…それに、あなたなら…ペアに困らない…でしょ」

んー、そう言われると太刀打ちできないなぁ。

「何で出ないの？」

そう聞くとわずかに簪さんが動いた。

「…関係無い、でしょ。…いいから帰って…」

「えぇ？いや困るよ。組むって言ってもらわないと…」

「大体…なんで、私と組みたいの」

あー考えてなかった…。理由か。何にしよう…。

「簪さんの専用機が見たいから？…ぐふっ」

鳩尾…。綺麗に入れられたよ…。

「ふんっ…」

簪さんは教室を出ていってしまった。

うーん、なんか間違った。

「拒否されてしまいました…」

「あらら、あの子がねぇ…」

たっちゃんさんが部屋に来たので、今日の経緯を説明している。

「女の子に殴られるなんて、いきなりおっぱい触った？それともお尻？」

手でもみもみする動作をしている。

「そんなのシャル達にもしませんよ！発想がすぐそっちに行くんですから！」

「冗談よ。でもあの子がそんなことするなんて、一応進展してるんじゃない？」

「そうですかぁ？」

平手ならまだしも鳩尾だぞ。明らかに嫌われてるだろ。

「あの子は押しに弱いのよ。だから諦めないで頑張ってよ」

「はぁ…」

女心はよくわからないよ。姿は女の子みたいだけど。

「だから、おねーさんのここも押して？」
ベッドに寝転び、お尻を指している。
「…そこ以外は押しますよ」
「つまんないのぉ。少しは勇気出してよ」
「勇気はありますが、理性が上回りました」
「飛ばしてよそんなのぉ」
「ダメです。殺されます」
「仕方ないわねぇ。とにかくよろしく」
「はいはい」
ゆっくりとマッサージをしていった。

さてと、今日はどうしようかなぁ。
整備室にいるって聞いたし、行ってみるか。
飲み物飲むかなぁ。

僕が整備室の前につくと、ドアが開き、目の前には簪さん。

「やぁ、お疲れ簪さん」

「……」

僕をスルーし、そのまま立ち去る簪さん。

「ねぇ！」

「……」

追いかけて声をかけたが、すたすたと歩いていかれた。

「簪さん！」

「……」

「更識さん！」

「それで、呼ばないで…」

顔を覗き込んで反応をうかがうと少しだけ嫌な顔をされた。
うーん、どうしよう。

「少女Ａ！」

「……」

すべった…。

「かんちゃん！」

「……」

ピクッとしたぞ？

「かんちゃん？」

「…それも、やだ」

「じゃあ簪さん」

「……」

こくりと頷いた。
これで行くか。

僕達は休憩スペースの椅子に座った。

「ぶどうとりんご、どっちが良い？」

二つのジュースを出す。

「…ぶどう」

「はいどうぞ」

僕達はジュースを飲んだ。

「僕にもぶどう飲ませて？はい、交換」

「え…っ」

缶を交換する。

「うん。ぶどうもおいしい。ね？」

「……うん」

顔赤いけど、なんだろう。回し飲みなんて普通じゃないかな。

「…私のところに来たのは、…あの人の、差し金でしょ」

「違うよ？もう一人の専用機持ちの子と話してみたかったから。ダメかな」

「…正直、迷惑」

うわぉ。綺麗に拒絶。

「簪さんはお姉さん嫌いなの？」

「…嫌いというか…」

何と言おうか、適切な言葉を探そうとしているようだ。

「まぁ出来るお姉さんを持つと下は辛いよね」

たっちゃんさんも色々すごいから、何となく簪さんもそんな気持ちなのかな。

「……」

否定も肯定もせず、か。

「でもうらやましいな。簪さんは本当のお姉さんが居るんだもんね」

「…どういうこと？」

おっと失言。シャルのこと言えないな。

「いや、気にしないで。それにしても、専用機見たことないけど、どうしたの？」

「？…未完成なの。…一人で、組んでるから」

「え？何で？」

「……」

キッとこちらを睨み、走っていなくなってしまった。
うーん、なにか感にさわること言ったかな。

「で、今日はこんな感じでした」

また今日も僕の部屋に乗り込んでいるたっちゃんさん。

「そう。また少し進展したんじゃない？」

「ですかねぇ。あ、ひとつ質問なんですけど、何で簪さんの専用機、未完成なんですか？」

「あなた達の専用機配備が決まってから、みんなそっちにかかりきりで、あの子の専用機は後回しにされちゃったのよ」

なるほど。僕達のせいか…。

「でも何で一人で組んでるんです？」

別に企業の手も今は空いてるんじゃ…。

「あー、多分それは私がそうしたからじゃないかしら」

「たっちゃんさんが？」

あれを？

「私も一から組み上げたのよ。まぁ私は虚ちゃんや薫子にアドバイスもらったんだけどね」

「黛先輩が…。二人はそんなにすごいんですか？」

「三年の主席と、整備科二年のエースよ」

ふぇー、虚さんはわかるけど、黛先輩がねぇ。

ちなみに整備科とは、二年になると整備に特化した一クラスが作られる。主にＩＳの整備や開発などを学んでいる。

ここの出身者は企業などでＩＳの研究、および技術者になるのが大抵の路線。

二年以上になると、専用機持ちはこの整備科の生徒とチームを組んで行動する。たっちゃんさんの場合にも、チームが組まれてるのかな。

ん？整備科の人に協力してもらえば…。

「協力取り付けようと考えてる？」

「あはは。わかります？」

「大体ね。それも良いけど、まずあの子からペアの許可をもらわないとね」

うぅ。難題だなぁ。

砕けたくないけど、当たって砕けろ！

翌日、僕はまた四組へ。

仲良くなるにはご飯が一番！一緒に食べればきっと仲良くなれる！

あ、簪さん居た。

「かーんざしさーん！」

「……」

相変わらず…。

「食堂にご飯食べに行こう。ちなみに反論は無し」

逃げられないように簪さんを抱っこ。

身長的には彼女に負けてるけど、筋肉あるもん。重くない、重くない。

「……っ！下ろして…」

聞く耳持ちませーん！

食堂へダーッシュ。

「着いたぁ！」

「お、…下ろして！」

「あ、ごめん」

すぐに下ろしてあげる。

「今日は何がいい？ご飯？麺？」

「…うどん」

「いいね。ここトッピング選べるしね。たまご要る？かき揚げは？」

「…たまごは要らない。かき揚げは、要る」

「はいはーい。じゃこうして、と。席はどうしようか」

「…あそこ、空いてる」

奥のテーブルを指差している。

「あ、本当だ。よく見えるね。目、悪いんじゃないの？」

「…これは、携帯ディスプレイ」

あぁなるほど。投影型は高いって聞いたな。

「あ、かき揚げ浸ける派なんだ。僕サクサク派」

「…合わないね」

「うーん、でもこの多様性が楽しいじゃない」

「…確かに」

僕達はうどんを食べ進んでいく。

「…ねぇ、やっぱり僕と組むの嫌？」

「…嫌」

「何で？」

「…わからない、けど嫌。それに…専用機、出来てないし」

「組み上げは僕も手伝うから。ねぇ簪さん。わからないならやろうよ。やらなかったことを後悔するよりも、やって反省した方がきっと成長できる。やらなかったらずーっとわからないままだよ。その時何が正しかったのか。それに人の心もね」

「…何が、言いたいの」

「さぁねぇ。何が言いたいか、よくわかんなくなっちゃった」

「…私は、私は…一人で、しなきゃいけないの…」
簪さんはそのまま食堂を出ていってしまった。
うーん、失敗。

「何やってるの？美晴」
寒い…。背中が寒い。

「や、やぁシャル」
シャルの顔は明らかに不機嫌。

「これには事情がありまして…」

「ふーん。じっくり聞かせてもらおうかな」
シャルに説明すること十数分。

「…つまりは、浮気で口説いていたわけではないと」

「そうです」

シャルが僕の目を真っ直ぐ見ている。

「…目は嘘をついてないね。わかったよ。ボクはラウラと組むよ」

「わかっていただけて何より…」

心臓が止まったよ。何回かに分けて。

「んー、共通の何かがあると早く仲良くなれるんじゃないかな」

シャルがアドバイスまでくれた。良くできた子だ。

「共通ねぇ…」

あれならどうかな…。

第７４話

ＳＩＤＥ　簪

あれからしばらく彼に付きまとわれている。

「簪さん！」

教室で。

「簪さん！」

曲がり角で。

その度に逃げ出した。関わらないでほしいのに。それでも追ってくるのがここ最近。

「あ、それ重そうだね。僕も持つよ」

ある日、一人の女子が授業の資料を抱えていた。それを美晴君が助けていた。

私は追われてる内に、気配を察知して柱の影に隠れるようになっていた。

「ごめんね？美晴君」

「いいのいいの。僕だって男の子。少しは頼ってよ」

「ありがと美晴君」

二人とも笑顔で歩いていった。

彼が優しいのは評判通り…か。

…私はなぜ彼を追っているのだろう。

鬱陶しいはずなのに。

「あ、簪さんだ！」

見つかった！逃げなきゃ！

「簪さん！今度の日曜日、１３時に駅前の噴水に来て！じゃっ！」

「ちょっ…」

反対する前にすぐに目の前から居なくなられた。一人で居たいのに。

構わないで欲しいのに。

…行かなきゃいいんだ。そうだ。

…でも、もし本当に待ってたら、どうしよう…。雨でも降って風邪引いたら…。

結局来てしまった。居るかどうか遠くから確認するだけ。そう、確認だけ。

居た。本当に居た。時計見ながらそわそわしてるし。

行くべき？どうしようかな。

歩き出そうとすると、誰かとぶつかってしまった。見たところ年上の、少し目付きが怖い女の人。

「…ご、ごめんな…さい」

「聞こえないんだけど？」

「ご、ごめんなさい」

「だーかーらー、聞こえないって言ってんの！」

うぅ。どうしよう。完全にからまれてる。

「あ！ごめんなさい。私の友達が失礼をしたようですね。すみません」

いつのまにか私の隣に来ていた美晴君が、頭を下げていた。私が友達？

「ふん。しっかり言い聞かせておきなさいよ！」

女の人は去っていった。

「ごめんね、すぐ気づいてあげられなくて」

私に謝ってきた。そんなことしなくていいのに。

「助けて…くれたの？」

「助けただなんてとんでもない。謝っただけだし。それにしても、私って言って信じられちゃうんだね、僕」

いつもの笑顔で語りかけてきた。なんだか…。

「ふふっ」

おかしい。

「笑わないでよぉ。気にしてるんだから」

その落ち込む素振りがまた面白い。

「むぅ。それより行こうよ」

美晴君は私の手を引っ張りながら、あるお店に連れていった。ここって…。

「僕のお気に入りのお店なんだ。アニメグッズが充実してるから、結構来るんだよ」

私もよく来てるから品揃えの良さは知っている。まさか美晴君も…。

「アニメ好きって嫌い？この前簪さんのキーホルダーを見て、同志かもって思ったんだけど…」

見られてた！あれ、数量限定だったから、思わず買っちゃったけど…。

「…私、アニメは好き。…特撮も、好き」

「本当？よかった。趣味が合うね。僕も特撮好きなんだ。戦隊ものとかね。やっぱり変身シーンの真似とかした？」

すごく嬉しそうな顔をしている。

「…した」

あの人に見つからないように、静かにだけど。

「だよねー、格好良いよねー。僕もヒーローになってみたいなぁ」

「…美晴君は、もうヒーローだよ…。さっき、私を助けてくれたし…」

「そう？よかった」

その後美晴君と私は、他のお店にも行き、あらゆる物について、あれがいいとか、この部分はこうして欲しかった、とか様々なことを話していった。

…なんでだろう、美晴君には色々話してる気がする。こんなに誰かと喋ったのは久しぶりだ。

「ごめんね、アニメショップ行脚で」

帰り道、美晴君が今日を振り返り、すまなそうな顔をしていた。

「…いい。楽しかったから」

誰かと行くのは初めてだったけど、でも、すごく楽しめた。

「よかった。ねぇ、明日僕も整備室行ってもいい？」

「…何で」

「だって簪さんのＩＳが未完成なのは僕と一夏のせいなんでしょ？そんなの申し訳無さすぎて…。ごめん！」

本当はそう。でも今、私の前で真剣に謝っている彼に、今日私を助けてくれた彼にそのままそうだと言っていいのだろうか。

「…来てもいいから、もう…謝らないで」

「わかった！じゃあ明日ね！」

校門まで来たところで美晴君と別れた。

…断りたかったのに、なぜ…。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

こんにちは、美晴です。

作戦は相変わらず続行中。
今日からは簪さんのＩＳ整備手伝おう。
僕は整備室へ向かった。

「こんにちはぁ」
簪さんは…居た。
「やぁ簪さん」
「……」
不機嫌か。
「手伝うとは言わないよ。あ、僕のＩＳ最近調子が今一つなんだけど、見られる？」
「…ちょっと見せて」
データを提供する。
「…二番と、四番のスラスターが、…不具合。あと、エネルギー消費のプログラムが、…美晴君に合ってないみたい」

問題点があげられた。

「なるほど。じゃあ僕はこっちで自分のＩＳ見てるよ」

とにかく空間を共有しよう。

黙々と作業を続けている。

その集中をぶち壊す声が…。

「ミーくーん。かーんちゃーん」

この間延びした声はのほほんさんだ。

なるほど。かんちゃんって呼び方はのほほんさんにされてたんだ。

「手伝いに来たよー」

「…本音」

一瞬嫌そうな顔をした。

「何すれば良い？何でも言ってよ。私はかんちゃんの専属メイドだからねぇ？」

あちこち触ろうとしている。

「…やめて。一人で、やる」

「じゃあ手伝いじゃなく、遊ぶー」

今度は工具で遊び始めた。

「…もっと、ダメ」

「じゃあ手伝う！」

「…ふぅ。本音。…火気管制とかはあなたには無理。…シールドエネルギー関連を見て」

ついに折れた。簪さんはのほほんさんには弱いのか。

「おっけーい。じゃ装甲を…」

「のほほんさん、壊さないでよ？」

あー、とか言って全部ひっくり返しちゃいそう。

「むぅ。おじょうさま。この失礼な人を叩く許可を」

「……」

こくり。

「ていっ！」

「痛い！」

軽くグーでとかじゃない。工具で殴ってきた。下手すりゃ血が出るぞ。

「うぅ。ひどいなのほほんさんは…」

叩かれた場所を触ってみるが、そんなに違和感は無い。

「普段のミー君の行いがいけないんだよー」

「…ふっ」

「あ、笑った！簪さん笑った！」

「…笑って、ない」

顔を見られないように背けている。

「笑ったよ！」

「…やるよ。本音」

そのままＩＳに向かってしまった。

しばらくそのまま時が経った。

「ねぇ、簪さん。僕と組もうよ」

「……」

「ねぇ…」

「…い、いよ」

ようやく承諾を得られた。

「よし！今すぐ職員室行こう！気が変わらない内にペアを申請しよう！」

もうほぼ拉致！職員室まで抱っこ。

「…ちょっと！下ろして！」

しーりませーん。

さっさと登録を済ませて、続き続き。

再び整備室。

「…飛行テスト、手伝ってくれる？」

「いいよ？どこでやるの？」

「…第六アリーナ」

なるほど。あそこは開放式で、ほぼ無制限に飛行可能だからな。テストには向いてるかも。

「オッケー。僕先に行くね？」

僕は一足先にアリーナへ。

「まぁだかなぁ」

今は空中で待機中。

「…お待たせ」

簪さんが来た。でもまだ少し、ふらついてる。

「…ん、これがいけないんだ」

ウィンドウがいくつも現れて、修正をしていく。

「…できた」

「じゃあ行こうか」

一通りぐるぐる回り、急加速と急制動を繰り返し、問題点を修正していく。

「…最後に、降下訓練」

そう言い、地面に向かって急加速。
…でもスラスターから火が出てません？これはヤバめでは。

「簪さーん！」

ハイマットで最大加速し、簪さんの着地点に回り込む。

ドーンと僕の全身に衝撃が来る。

「くっ…」

な、なんとか受け止められた…。お姫様抱っこは選択間違えたかな。
衝撃が殺しきれない。

「大丈夫？簪さん」

腕の中で目をつむっていた簪さんに話しかけると、簪さんが目をゆっくりと開けた。

「…美晴君こそ、痛くない？」

「実は痛い…。けど、無事で良かったよ」

足がちょっと震え始めた。

「…ごめん…」

「いいのいいの。でも、今日は休ませて…」

「…ごめん。ありが、とう」

今日はこのまま保健室へ…。

ＳＩＤＥ　簪

今私は自分の部屋でシャワーを浴びている。

はぁ、なんでだろう。彼のペースに巻き込まれてしまう…。

人懐こいあの笑顔。

多少強引で、力強い手。

『簪さーん！』

『かーんざーしさーん』

『僕と組もうよ』

『わからないままだよ。人の心も』

…彼は、私に何か伝えようとしているのかな。

『無事で良かった』

…彼は私を助けてくれた。こんな私を…。
…私のヒーロー、なのかな。
今はっきりとわかるのは、美晴君はそっと人の心に寄り添う、そんな存在だ。
…あれ？でもそれも人を守る一つのヒーローの形、なのかも…。

「美晴君…か」

…ダメだ。こんなこと考えてちゃ。私には、やらなきゃいけないことがある。

…更識楯無。あの人は完璧だ。強い、賢い、優しい、綺麗。
私はいつからか、あの人が重石になった。
いつからか、あの人を追いかけることをやめた。
決して追い付けないと悟ったからだ。
あの人と話すことが苦痛で、あの人と同じ名字であることすら苦痛

になった。
すべてを拒絶したくなった。

『人の心も』

わかるのかな…。私のこの気持ち、晴れるかな…。

「美晴君…」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

昨日はひどい目に遭った。
でも今日からははかどるぞ。のほほんさんは確定として、整備科のみなさんや、黛先輩にも頼んだし。

「やぁ美晴君」

黛先輩が整備室へ入り、僕達の方へ。噂をすればなんとやらだ。

「あ、先輩！来てくれたんですね」

「うん。お礼はデートでいいよ」

「あー、なら私もー」

のほほんさんまで。悪ノリが過ぎるよ。

「で、出来ません！」

「冗談よ。ただ私達が手伝う間、これ着けてね」

あるカチューシャが目の前に。

「これは…」

「ネコ耳よ。これ着けて、ニャを語尾に付けるのが条件ね」

くっ、人の足元を見やがった。

「…背に腹はかえられません。やりましょう」

僕はネコ耳を着けた。

「で、ではよろしくニャ」

「オッケー。じゃ、みんな取りかかりましょう」

整備科の皆さんがぞろぞろ。

「美晴君！ケーブル持ってきて！」

「こっちにはカッター！」

「予備のディスプレイ持ってきて！」

はいはいはいはい。忙しい忙しい。みなさん人使いが荒い。

「美晴君！汗拭いて！」

「次お茶！」

「図書室に本返してきて！」

「耳元でニャって言って！」

何だかずれ始めてませんか？特に最後の二つ。

簪さんは…。

手と足、目、音声、反応するものを分けて、同時に何個ものプログラムを構築していた。
すごい…。
みんなの手伝いがあるからだろうけど、それにしてもすごい。
僕には裏方しか出来ないからな…。

「ニャ」

「か～わ～い～い～」

例えこんなことでも。

それから一週間かけて、ようやく簪さんのＩＳ、打鉄弐式が完成した。僕のシュッツェンの稼働データも入ってる。そしてあの人のも。
特徴的なのは、４８発のミサイルを、別の敵に当てる事が出来るマルチ・ロックオン。
ただその肝心要のプログラムが…。

「マルチ・ロックオンシステムは…」

「…完成しなかったので、今回は単一式で…いきます」

構造が複雑で時間が足りなかった
。

「そう。じゃあこれで一応の終わりが見えたのね」

「…はい。ありが、とうございました！」

簪さんはみんなに頭を下げた。

「…美晴君も、ありがとう！…あなたがいなければ私、今でも…一人で苦しんでたはず」

「ううん。僕は大して役に立てて無かったし。それよりも本番よろしくね」

手を差し出した。

「…よろしく」

握手。

これで明日の本番はちゃんとできるな。

「何とかなりましたよ。それとデータありがとうございました」

「いいのよ。私としても何か役に立ちたかったし」
部屋でたっちゃんさんにご報告。
「みんなと協力して出来たんです、きっと何か感じてますよ」
「美晴君に頼んで良かったわよ」
バサッ…。
ドアの向こうで何かが落ちる音がした。
念のため確認しよう。
「何だろう。あれ？誰もいない。ん、これはケーキのスポンジの破片か？」
でも本体も無いしな。気のせいだったのかな。
「誰か居た？」
「いや、居ませんでしたよ」
「で、美晴君。簪ちゃんと一緒にいたけど、気持ちはどうなのよ」

痛い所ついてくるなぁ。ずっと一緒にいて、色々喋って、デートもどきまでして、それで何も思わないのは僕の周りでは一夏ぐらいだよ。

「何て言えば良いのかわからないですけど、放っては置けないですよね」

シャルやラウラに聞かれたら何て言われるかわからないけど、でも何となく、助けてあげたい、そんな気持ちが芽生えてた。

「好きになっちゃった？」

「うーん、恋愛の好きなんですかねぇ。僕にはよくわかりません。何であれ、シャルとラウラを裏切る真似は絶対にしませんよ」

例え何があろうとも、僕はあの二人のそばにいる。それは揺るぎない決意。人生をかけた誓いだ。

「ふーん。幸せなのね、シャルロットちゃん達は」

ＳＩＤＥ　簪

嘘…。嘘だと言ってよ…。

あれはあの人のデータがあったから出来たの？
私、結局あの人がいなければ、何も出来ないの？
やっぱり私は…。

『あなたは何もしなくていいの。何も出来なくていいの。そのまま無能でいなさい』

うわあああああっ！
やめて！そんなこと言わないで！
私は！私は！

『あなたは所詮私の引き立て役でしかないのよ』

やめろ！来るな！それ以上言うな！

私は、幻だとわかっていてもその言葉に苦しめられた。

「美晴君…、助けてよ…。助け出してよ…」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

第７５話

こんにちは、美晴です。

今日はトーナメント当日。
今は試合に向けて休憩室で体力温存中です。
第一試合で僕達と、たっちゃんさん、箒ちゃんペアが戦うことに。
そういえばペアについて聞いてなかったな。

それにしても簪さんどこに行ってるんだろう。今朝もまともに会話できなかったし、今はアリーナに居るかどうかすらわからない。
何かあったのかなぁ。

「ちゃお！」

「たっちゃんさん…」

相変わらずテンションが高いなこの人は。

「はい、今日の組み合わせとオッズよ」

賭けやってたのかよ。
で？やっぱりたっちゃんさんが一位か。

一夏は誰と組むんだろう。
特別ルールで山田先生とか。

一人あぶれるんだよな。まさかそれが一夏とは…。
セシリアさん達は出し抜けなかったのか。それか一夏がバカだからか。

「今日は勝つわよ」

「はは。僕も全力を尽くします。それより簪さん知らないですか？姿が全然見えなくて心配なんですが」

「え？私も知らないわよ？」

知らないのか。一体どうしたんだろう。

ドーン…。

二人で首をかしげていると、大きな衝撃がアリーナ全体を襲った。

「何ですか！今の！」

「これ、あの時と似てるわね」

「まさか、また！」

アリーナの遮断レベルは最高。そして漂うこの緊張感。
来たのか、また。

予想通り、学園に再びあの無人機とおぼしきＩＳが襲撃してきたようだ。
しかも複数。

休憩室からアリーナへは遮断されていなかった。もともと休憩したらすぐ出られるように設計されているからかな。
まずは周辺の状態を確認する。観客はセーフ。操縦者は？

「簪さん！」

周りを見渡すと、ピット近くでふらふらと歩いている簪さんに敵が迫っていた。
何であんなところに！
何でＩＳ展開しないんだ！

「間に合え！」

僕はスラスターをふかして接近。簪さんに触れようとしたそいつを蹴り飛ばした。

「お助けに上がりました、姫。…なんて言ってる暇無いから早く展開して！」

「…う、うん」
かっこつけようと思ってたけど、無理。
前と少し形が違う敵。
むくりと起き上がり、僕達を捉えた。
イグニッション・ブーストで僕達に接近。
そのままエネルギー攻撃。
散開し、避ける。

「待たせた！美晴！」

「箒ちゃん！たっちゃんさん！」

二人も合流。四対一。これで安心できる戦力に、なんてならない。
相手はきっと前より強い。
あの人なら話にならないくらいに強化してるはず。

再び接近。速い。
ブレードを叩き下ろしてくる。
セイバーで受け止めるが、向こうの威力はすごい。押し込まれる。

「美晴！」

箒ちゃんが雨月を放ち攻撃する。

避けるために鍔迫り合いが解消される。
僕達の攻撃は確実にかわされる。
そして急加速からの攻撃を仕掛けられる。
箒ちゃんや、簪さんは少しずつダメージが蓄積していく。
なんて分析してる僕も、結構食らってるんだよね。

「美晴君！援護して！あれを使うわ！」

あれとはきっとこの前話していた気化爆弾うんぬんのあれだろう。
ミストルティンの槍。
それは全身の装甲を攻撃に回す。そのために少しの間敵に無防備な状態をさらさなければならない。
僕が援護して、成功させなきゃ。

「くっ」

手数が多い！防ぎきれない！
いくつかたっちゃんさんに通ってしまい、肌が少しずつ血に染まる。

「お待たせ！出来た！」

たっちゃんさんが渾身の一撃を放つ。
威力からすれば、何とかなるはず。こっちも衝撃に備えて…。

ズドーン…。
大規模の爆発。煙が晴れると…、奴が、多少の傷はあるもののそこには居た。

「何で？」

全方向に攻撃。僕が受け止めたものの、勢いは殺しきれず、僕とたっちゃんさんは壁へ叩きつけられる。
瞬間的にたっちゃんさんをかばうようにしたが、ほぼ生身の状態だ。
大ダメージは即、死に繋がる。

「がはっ…」

僕も血を吐いた。
でも、やらないわけにはいかない！

「箒ちゃん！一緒に！」

「応！」

同時に接近戦を仕掛け、切り結ぶ。
敵の攻撃は一撃一撃が重く、そして的確。
二刀で二人を同時に相手している。

「くらえよ！」

サーベルで切りかかるが受け止められた。
出力高いはずなのに！

このまま鍔迫り合いになるかと思いきや、箒ちゃんを弾き飛ばして空いたもう一つの腕から粒子砲。

「避けられない！」

至近距離から放たれた粒子砲をもろにくらい、僕は地面へ叩きつけられた。

う、うぅ…、僕が、僕がみんなを守る、んだ…。

ＳＩＤＥ　簪

何も出来なかった。横たわるあの人と、美晴君。篠ノ之さんも一人は無理なようだ…。

敵は、私に狙いを定めたのか、こっちへやって来た。

「来ないで！来ないで！」

粒子砲を連射して敵を遠ざけようとする。しかし近づいてくるのを

やめない。

「あ、あぁ…」

粒子砲がエネルギー切れに…。どうしよう…。
敵が剣を振り下ろす。
動けない…、やられる！

ザシュウッ…。

目の前に飛び散る鮮血。それは私のものではなかった。私に剣は届いていない。

「ぐっ…」

「な、何で！」

私の目の前には私をかばうようにして背中を切られたあの人がいた。

「お姉ちゃんが妹を守るのに、理由がいる？」

「で、でも…」

ふらつきながらもニコッとした笑顔を保ったまま、あの人は倒れた。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！こんなの嫌だ！こんなのを望んだんじゃない！でも、どうしよう。動けないよ…。目の前に敵がいるのに、動けないよ…。

「うぉあああ！」

美晴君が敵に斬りかかった。

「美晴君…」

「簪さん。僕はやっぱりヒーローにはなれないや。泣き虫だし、弱いし。…でも！みんなを守るって決めたんだ！立ち止まっているだけじゃ何も出来ない！何も守れない！一歩踏み出さないと、何も変わらないんだ！」

踏み出す…。

私には出来ないよ。こんなに汚くて、臆病で、いつも悔やんでばっかりで…。そんな私に…。

『いいじゃない！汚くて、臆病で、後悔ばっかりしたって！』

あの人の声！…でも、今私の前にいるこの人は気絶してるはず。

「いいじゃない。弱くたって。自分は自分。誰でもない。それを受

け入れなさい。そうすれば前に進めるわよ。人間ってそういうものよ？」

ダメージを受け、意識を保つのもやっとなはずなのに、私を励まそうとしている。

受け入れる…。

……うん。私は逃げない。自分は自分だ。私にだって何か出来るはず！

ミサイル誘導は…、ジャミングがあって使えない…。

マニュアルでやるしか…。やってやる！必ず！

「大気の状態、弾道計算…。…ふぅ。…行こう！」

必要な計算を済ませ、八連装ミサイルポッドをを六枚展開。全部で四十八発。

「美晴君！離れて！」

敵は爆炎に包まれた。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ダメージで動きが鈍くなってもこちらを狙い続けているのは変わら

ない。
あれでもダメか。どうすれば…。
「美晴君…、これを」
地面に倒れ込みながらもかろうじて喋っているたっちゃんさんから、
あるものを渡される。
「これは、アクア・クリスタル…。形見ですか」
「あとで覚えておきなさい…」
眉がピクリと動き、目がこちらを睨む。
「いやん。冗談ですよ。これを…、なるほど」
何を言わんとしているかはわかった。
「いってきます」
僕は敵へ急接近。
敵は僕の胴を狙い、斬りかかる。
「やらせるかぁ！」

最大出力でサーベルを振り下ろす。敵の剣は折れた。そのまま突き。出来た隙間にアクア・クリスタルを差し込む。

アクア・クリスタルはナノマシンによる水の生成装置。霧を爆発させてダメージを与えることが出来るんだ。それを埋めこんじゃえば！

ドンッ…。

内側から爆発が起き、そのまま爆散。

ぐっ。

ぐっ。

たっちゃんさんと親指で合図。

そして意識がなくなった。

うーん、ここは保健室か。久しぶり…。

「む、起きたようだね。君の症状は出血多数、骨折もあばら含め数ヵ所。それなりに重傷だよ。まぁ処置は十分施しておいたから、さしあたり入院は必要ない。しばらく安静にしていなさい」

保健の先生が僕の状態を説明してくれる。
正直この先生がいなかったら死んでたかも知れないレベルだ。

「はは。姉弟でご迷惑をお掛けします」

「本当に、学校の保健室がこうも大変とはね」
頭をポリポリと掻く先生。やらせたことは病院並みだ。

「すいません…」

「美晴！」

「千冬お姉ちゃん！」
勢いよくドアを開けて入ってきた。壊れちゃうよ。

「私は外すよ」
また気を使わせてしまったか。

「美晴！」

ガバッと抱きつかれた。

「痛い痛い！あばら折れてるの！」

「あ、すまない」

パッと離れ、少ししょぼんとしている。

「手、握ってて」

「あぁ！」

こうすれば少しは元気になるでしょ。向こうが。

「ごめんね、また心配掛けて」

「別にいい。美晴が無事なら。それが何よりだ」

「そう。ありがとう。さて、顛末は？」

「あぁ。他のは一夏達と教師部隊が鎮圧した」

「そっか。コアは？」

「六個のうち二個だけ回収出来た」

「やっぱり…だよね」

「無人機だ」

束さんか。何がしたいんだろうなぁ。下手したらただの暇潰しかもしれないけど。
今度会うか。
頼みたいこともあるし。
さて、部屋に帰ろう。

「歩けるか？大丈夫か？」

少し起き上がると千冬お姉ちゃんがあたふたしだした。

「大丈夫。歩けるから。仕事に戻って？まだ色々あるでしょ？うっ」

少し胸が痛い。

「やっぱり部屋まではついていくぞ」

「…うん、ごめん」

背中を支えられながら部屋まで戻った。

SIDE　簪

「…あり、がとね」

「いいのよ、別に」

姉の部屋で二人で話している。

姉の怪我は命に別状はないようだ。傷も残らないと先生は説明していた。

でも…。

「…ごめん、なさい。私のせいで…。…弱くて、ダメな妹で…ごめんなさい」

私が情けないばかりに怪我を負わせてしまった。私のせいで…。

スッと姉の指が私の涙をすくった。

「何言ってるのよ。あなたは踏み出せたじゃない。強いわ。私の自

慢の可愛い妹よ」

「…おねぇ…ちゃん」

「久しぶりね、そう呼んでくれるの。簪ちゃん」

「…おねぇちゃん…。うわぁぁん」

目の前にある温もりに私はすがり付いた。

こんなに私を思ってくれていたのに…。それを私は…。知らなかった…。

美晴君。やっぱりやらなきゃわからないんだね。人の心も。ありがとう…。

美晴君…か。

「…おねぇちゃん。私、好きな人が出来たかも…」

「美晴君ね？」

笑顔で明るく私の心を見抜く。

「…わかるの？」

「おねーさんにはわかるのよ。告白しちゃいなさいよ」

「…でも、美晴君には…」

「踏み出す勇気。ね？」

「う、うん」

よ、よし。頑張ってみよう。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

美晴の部屋

いったー。手が折れてないだけましか。
折れてたらご飯食べられないもんな。

「…み、美晴君。いいかな」

簪さんの声だ。

「いいよ？入ってきて？」

「う、うん」

ベッドの脇の椅子に座った。

「で？何？」

「…まずは、ありがとう。…で、…あ、あのね？…私、美晴君の事が…好き！」

「えっ？」

好き…。これｌｉｋｅの方じゃないよな、きっと。
どう答えるべきなのだろう。
簪さんは心の中にいて、大切な存在になり始めてるのは確かだ。
でもシャルとラウラは僕にとって本当に特別な存在だ。
断るべき、だよな…。申し訳ないけど…。

「美晴！大丈夫？」

タイミングが良いのか悪いのか、シャルとラウラが部屋へ突入してきた。

「…ん？なんだか空気が重くない？何かあったの？」

そして妙なときに働く勘の良さ。

「あ、あの実はね？」

「…わ、私美晴君が、…好きって告白！…したの…」

僕が説明しようとすると、それを遮って簪さんが声を振り絞るように説明した。

「えっ？」

「何？」

二人はほぼ同時に驚きの声をあげた。

「…美晴君にとって二人が大切な、存在なのも知ってる。…で、でも、この気持ちに嘘はつけない。…美晴君はやらなきゃわからないって、やって反省するべきだって。…だから、断られるのを前提で告白したの！」

そう、なんだ。シャルとラウラのことを知った上で、それでも勇気を振り絞って告白してくれたんだ。

「でもね簪さん。僕にとって二人は…」

断ろうとすると、その声に重ねてシャルが簪さんに話し出した。

「簪さん。美晴のことが好きなんだよね？心の底から」

「うん。大好き」

シャルの質問に、いつものような消え入りそうな声ではなく、しっかりとした声で答えた。

「そう。…美晴。簪さんの気持ち、受け入れてあげて欲しいな」

シャルからまさかの提案。絶対許さないと思ってた。

「えっ？でも、良いの？」

「ボクは構わないよ。ボクは美晴が大好きだし、美晴もボクを好きでいてくれる。その事実は変わらないんでしょ？」

「うん。それは決して変わらないよ」

「ならボクはいいよ。ラウラは？」

ラウラにも意見を求める。ラウラ次第ではやはり断るかもしれない。

「私も構わない。美晴のことが心から好き。それが嘘偽りの無い真実であるならば、私達は同志だ。中途半端であるならば決して許さないが、どうやら並々ならぬ決意のもと告白している。疑う余地はないだろう。それに、美晴にとって家族が増える。美晴が欲しがっていた心の繋がりによる家族がだ。ならば私達は拒否するべきではない。愛する人の幸せ、それが私達の幸せなのだから」

まっすぐに僕を見ながら、一切の動揺もなく答えを出した。

ラウラ。そんなに僕のこと思ってくれていたんだね。

「そう、か。わかった、ありがとう。二人がそう言ってくれるなら。簪さん」

簪さんと向き合った。

「こんな僕だ。きっと泣かせてしまうこともたくさんあるかもしれない。それでも一緒にいてくれるかな」

「…はい！」

涙を流しながら、強く頷いた。
これで想い人が三人になっちゃったな。

「美晴はこれから大変だな。何せ三人に愛を注がなければならないのだからな」

「見ものだね？簪さん」

「…ふふ。頑張ってね、美晴君」

「あはは…」

険しい道のりになりそうだけど、自分で決めたんだ。やりきってみせるさ。

第７５話（後書き）

悩みました。簪をどうするか。
でも今後の話を考えると、居た方が書きやすいかもと判断しました。
バランスが難しくなりますが、頑張ってみます。

第７６話

「さぁて今回の派遣先はぁ？」

こんにちは、美晴です。

たっちゃんさんは今、日曜夜のアニメの次回予告のような言い方で、僕達の派遣先を紹介している。

「あの、いいから早くしてくれません？」

「えぇ～？ちょっとはリアクションしてよ～」

体を左右に振って、不満だと表しているらしい。

正直めんどくさいこの人。

「…この前簪ちゃん泣かせたのよね」

ボソッと耳元でささやかれた。

「っ！そ、それは…」

僕は悪くないというか、そもそもあの涙は。

「嬉し泣きだもんね。姉としても嬉しい限りよ。…おねーさんもどう？」

「どうって言われましても…。三人で手一杯っていうか…」

「さほど変わらないじゃない？三人も四人も」

結構辛いんだよ？一人増えるって。平等になるように色々気使ってるんだから。

「おふざけはここまでにして、今回はここよ」

おふざけなんだ。さてと今回は。料理部…。シャルがいる部活か。

「シャルロットがいたな確か」

「うん。シャルは料理部だよ」

そう言えば部長さん答え出せたのかな。

「俺達料理好きだから、比較的役に立てそうだな」

「そうだね」

「あ、ちなみに今申請が立て込んでるから、明後日も別の部活に行ってもらうから」

げ…。忙しそうだな。

とにかく明日の料理部を。

「美晴！明日来るって本当？」

夜、シャルが上機嫌になって僕の部屋に乗り込んできた。

「うん。お世話になるよ」

「美晴と部活かぁ。ふふ。いいなぁ。エプロンどれにしようかなぁ。ねぇ、どんなのが好み？」

何枚も持ってるのか。別にどれでもいいと思うんだけどなぁ。それにこだわるようでは…。

翌日の放課後、僕と一夏は家庭科室へ来ていた。

「やぁやぁ！よく来てくれたね！歓迎するよ！」

バシバシと背中を叩いて歓迎された。元気いいなぁ。

「お久しぶりです部長さん」

「どうも。俺もいます」

「いやぁ、文化系は後回しにされると思ってたけど、良かった良かった」

たっちゃんさんだからな、そこらのバランスはしっかりとるだろう。

「で、今回の俺達はなにを？」

「普通に一緒に料理を作ってくれればいいよ」

まぁ、洗濯とかはないよな。

「はーい、始めますよー」

顧問、山田先生だったんだ。怪我とかしてないといいけど。

「今日は、定番の肉じゃがを作りましょう。二人のハートをがっちりキャッチしちゃいましょう」

「「「はーい！」」」

気合い入ってるなぁ。

「では、まずは肉じゃがのことについて勉強しましょう。えー、肉じゃがは元々…」

肉じゃがの成り立ちや、入れる具の違い。栄養成分とかを学んでいく。

ただ作るだけじゃないなんて、しっかりした部活だ。

「主にジャガイモは男爵とメークインのどちらかが使われています。男爵はホクホク、メークインはねっとりとした食感が特徴です。美晴君と一夏君はどっちが好みですか？」

「そうですねぇ。どう？一夏」

「いつもうちで作るときはキタアカリだからな。たまにインカも混ぜるし。ま、男爵かな」

「なかなかにこだわりますね。では今日は男爵でいきましょう。煮

崩れしやすいので気を付けて煮ていきましょう」

「「「はーい」」」

みんな慣れた手つきで料理を作っていく。

「美晴と料理！美晴と料理！」

シャルは鼻唄混じりに野菜を切っている。

「一夏くーん」

一夏はいろんな班に引っ張られている。

さてと、僕は部長さんのところへ…。

「部長さん。文化祭の時の答え出ました？」

「ううん。出なかった…」

やっぱりな。

「だと思って正解持ってきました」

一升瓶に入った水を取り出す。

「これが正解なの？」

「えぇ。試しにやればわかります。大根あります？」

「はい、どうぞ」

「見ててくださいね」

鍋に水と調味料を入れしばらく煮る。すると、あっという間に大根に味が染み込んだ。

「あれ？もう染み込んでる！全然早い！何で？」

「煮崩れもしませんよ？短時間ですから。持ってみてください」

箸で持ち上げてもらう。

「何？この感触。崩れないのに、でも固くもない！味は…、十分染みてる！なんで？」

大根を食べた部長さんは首をかしげている。

「あぁ、それは湯冷ましですね？」

山田先生が鍋を覗いた。

「さすが山田先生。よくわかりましたね。良いお嫁さんになれそうです」

「あ、あの、美晴君のにはちょっと…。織斑先生怖いですし…」

何を口走ってるんだ。

「それより先生。どういうことなんです？この水」

部長さんが仕組みを聞いている。

「あぁ、それはですね？」

味が染み込む際に一番邪魔をしているのは気泡。
食材の周りを包み、調味料の浸透を遅くしている。
それを一度煮立たせ冷ました水を使うと、煮立たせた分気泡が邪魔をしにくくなる。その分味と熱が早く染み、煮崩れせず仕上がる。

「…というわけです」

「美晴君よく知ってたねぇ」

「マンガの知識ですよ。自分で見つけたわけではないです」

たまたま読んでいたやつに載っていた。

「それだけ料理マンガも読んでるってことでしょ？見習わないと…」

そう誉められると恥ずかしいなぁ。

「はいはい。それではみなさん出来ましたか？」

「出来ましたぁ！」

「盛り付け中でぇす」

滞りなく完成。

「よーし。せっかく美晴君と一夏君が来てるんだし、二人にどれが美味しいか決めてもらおう」

「いいですねそれ！」

「部長たまにはいいこと言う！」

「たまにはは余計だ！」

「「「あははは」」」

元気のある部活だ。

「はい、あーん」

「いや、自分達で食べますから」

「せっかく男の子が来たのよ？楽しませてよ」

いつもこんなんだ。

「あーん」

一夏と二人で食べ進める。

どれも美味しいな。良く出来てる。

「美晴！最後はボクのだよ！」
シャルか。上手くなったのかな。

「あーん」
ふむ。これは…。

「シャルロット。これさぁ」
一夏も味に気づいた。

「うん。少し味のバランスが良くないかな。調味料の量を間違えたのかな？」
煮汁の甘味が濃すぎる。これはどうやら砂糖を入れたようだ。
入れなくても、少量のみりんと野菜本来の甘味だけで十分甘くなる。
素材の味の活かし方をもう少し学ぶべきかな。

「うぅ、そっかぁ…。ボクのだけ…」
シャルが落ち込んだ表情を見せている。

「まぁシャルは日本料理はまだ詳しくないでしょ？だからここでどんどん勉強して、今度美味しいの食べさせてね？」

シャルの頭をナデナデ。こうするとシャルは笑顔に戻る。

「えへへ、頑張るね？」

うん、いつものシャルの笑顔だ。

「私もナデナデしてよぉ」

「一夏くんもしてよ」

「私もしてほしいなぁ」

うわ、やっちゃったよ。地雷踏んじゃった。

「せ、先生もしてほしいなぁ、なんて…」

山田先生も生徒達に混じっている。

「山田先生」

「ひゃいっ！」

声の主は千冬お姉ちゃん。家庭科室のドアをわずかに開け、その視線が山田先生の背中を射抜く。

自分の部活はどうした。

「ちょっとこっちへ」

「は、はは、はい」

廊下へ出ていった山田先生。

「いだだだだっ！」

あぁ、多分ヘッドロックとかをかけられているんだろうなぁ。

「ふにゅ〜…」

ふらつきながら山田先生が帰ってきた。

「えぇ…、後片付けを頼みます…。私はもう、ダメです」

バタリ…。

結構なダメージもらったんだな…。ご愁傷さまです。

後片付けを色々。
お皿を洗ってます。

「んー、お皿を洗う美晴君。…可愛い」

背後から先輩達の声が聞こえる。

「お持ち帰りしてもいいのかな」

「いっそのことここで食べれば？」

「店内で！って？」

「バカなこと言ってないで、手を動かしてください」

振り返り注意する。発言が危険だし、片付けしてないし。

「「はーい」」

「ボクが持ち帰るんだもん」

隣で洗っているシャルが呟いた。

「はいはい。お早めに召し上がりください」

「いいの？」

「冗談です」

「ちぇっ…」

学園内でそんなこと出来るわけないでしょ。今でも監視されてるんだから…。

第７６話（後書き）

湯冷ましは本当にマンガから学びました。
マンガでは白魚をゆでるときに使ってました。
肉じゃがでも通用する、かも。

第７７話（前書き）

今回も部活巡り。

一夏が…。

第77話

「今日は二つね。よろしく！」

「「はぁ…」」

こんにちは、美晴です。

予告通り今日も部活。しかも二ヶ所。

「えーと、場所は…」

漫研と剣道部、か。剣道部は箒ちゃんが居るからいいにしても、漫研…。嫌な予感がする…。拘束されなきゃいいが…。

「漫研は短くて良いらしいから、その後剣道部に行ってちょうだい」

短いの？なら平気なのかな。

「お邪魔しまーす」

漫研の部室にやって来た。雰囲気はなんだか暗く、空気は澱んでいた。

「あぁ…、来てくれた…。我が部の救世主達が…」

ゾンビのごとく、僕と一夏にすがって来た。

「うわぁ！は、早く離れてください！」

迫られるのは慣れてきたけど、これはまた違う迫られ方だ。純粋に怖い。

「ごめんなさい。つい、ね」

みんな頭を下げた。

「あ、私部長ね。でね？二人にはあることをやって欲しくて…」

それぞれに冊子が手渡された。

「これは？」

「実はね、今度のコミケに出品する作品が行き詰まっててねぇ…。いまいち絵が浮かばないのよ。だから、二人にはその絵を浮かばせるお手伝いをしてほしいのよ」

この冊子がその手伝いになるんだ。

「それを二人で朗読してくれるだけで良いから」

「「はぁ。わかりました」」

僕達は冊子を開いた。

「やっと二人きりになれたね一夏」

「み、美晴。ダメだろこんなの」

「別にいいじゃない」

「だ、だって俺達、男の子だし、そ、それに兄弟だし…」

「それがなんだよ。一夏が可愛すぎるからいけないんだ。ほら」

「あ、美晴…」

「相変わらず、大きな背中だね一夏。思わず…」

「美晴？」

「抱きしめたくなっちゃう」

「美晴！やめろよ！」

「一夏は僕のこと嫌い？」

「嫌いじゃないけど…」

「じゃあキスして？」

「あ、あぁ」

「んっ…。しちゃった…」

「美晴…」

「一夏…」

せーの！

バリバリバリッ！

二人同時に冊子を真っ二つに引き裂いた。

「な！何するのよぉ！」

引き裂かれ、紙くずとなったものを拾い集めている。

「それはこっちのセリフだ！」

「そうですよ！これはいわゆる、その、ＢＬじゃないですか！しかも僕が攻めだし！」

何ていうものを朗読させたんだ。この変態！

「美晴君が攻めの方が前よりも売れるって判断したのよ！」

前よりって…。一度逆の形で売ったのか。恐ろしい。

「一夏君だってドキッとしたでしょ？」

みんなが一夏を見つめる。全員期待。

僕一人だけ違う答えを求めている。

「…つ、つい」

小さく答えた。

「うわぁ、引くわぁ。一夏が僕にそんな感情を…。無いわぁ…」

一方部長さんはめちゃくちゃ笑顔。

「この腐女子どもが！」

「うぅ。いいじゃない。趣味なのよ…」

それに人を巻き込むなよ。

「まぁ、部長！今のは最高です！絵がバッチリ浮かんできましたよ！」

「この余韻があるうちに描き上げちゃいましょう！」

部員が部長さんの肩を叩いた。

「そ、そうね！描き上げましょう！」

立ち直ってるし。てか余韻て。
それからはこっちが眼中に無いのか黙々と紙に向き合っている。

「えーと、次行こうか美晴」

どうやら出番は済んだようだ。

「うん。でも少しだけ離れて歩いてね」

「いや、だからあれは！」

近寄ろうとして来たから飛び退く。

「来るな変態！箒ちゃんに言いつけてやる！」

「それは勘弁！」

何であれ、これからは一夏にも警戒せねば。

「お待たせしましたぁ」

僕達は剣道場に到着。部員のみなさんはすでに基本練習中。

「一夏。美晴」

箒ちゃんが出迎えてくれた。

「部長はこっちにいる」

箒ちゃんに連れられ、部長さんのもとへ。

「部長。二人が来ました」

「あぁ、こんにちは」

武人らしい、ピシッとした挨拶。

「「こんにちは」」

僕達もしっかりと挨拶。昔が懐かしくなってきたな。

「二人も着替えてきてください」

僕達も道着に着替える。僕は実際に着るのは初めてだ。

「なんだか、篠ノ之道場を思い出すぜ」

「そうだね。一夏も箒ちゃん以外とやるのは久しぶりだろうし」

箒ちゃんは一学期は部活に参加していなくて一夏とばっか稽古していて、幽霊と化していたらしい。

部長さんとしては全国優勝の腕に期待していたんだろう。

でも今はちゃんと参加してるみたいだし、大会もあるし、気合い入ってるだろうな。

「美晴はやるのか？」

「うーん、剣道って嫌い」

「痛いからか？」

「それもあるけど、ルールが細かいし。剣術ならやりたいけど」

声とか、有効打突とかめんどくさい。

「着替え終わりましたか？」

ドアの向こうから部長さんの声。

「はい。今行きます」

身なりを整え部屋を出て整列する。

「さて。今日は織斑兄弟が来てくれました。客人の前で気の抜いた動きを取ることの無いように。いいですね」

「「「はい！」」」

今までの部活には無い緊張感。悪くないな。

「では、稽古をしましょう。一夏君は経験者ですね。そのままみんなと一緒にやってください。美晴君はまず竹刀に慣れましょうか。私がつきます」

僕は基礎か。

「では面打ちから」

「はい」

面打ちの練習をする。…地味だ。

「…美晴君。どこかでやってたの？」

僕の動きが少し変なことに気づいたようだ。

「一夏がやってたのを見てたのと、独学で剣術を」

一夏がやめてから、僕は興味が出て本を読み、独学で練習してた。

でもあくまで個人練習。実戦はやったこと無い。

「そう。だからか。ちょっと変なクセがあるけど、まぁいいわ。経験があるなら基礎よりも稽古に参加しましょう」

「はい」

痛いんだろうなぁ。嫌だなぁ。

「では試合をします。一夏君。前へ」

一夏と部員さん達が対戦していく。

「胴！」

一夏が勝ち抜く。流石にブランクがあるとはいえ、元々は箒ちゃんと互角かそれ以上のの腕だったんだ。何もさせず勝ったこともある。最近まで箒ちゃんに稽古つけてもらってたし、それなりの実力だよな。

「次、美晴君。篠ノ之さんとやりましょう」

え、勝つつもりはないけど、強いじゃないか。

「あの…」

「何ですか？」

「僕は剣術しか知らないので、有効打突については外していただけませんか？」

一夏のを見てはいたけど、よくはわかっていない。

部長さんはしばらく考えたが、

「いいでしょう。ただし、足を狙うなどの行為は無しです。防具が無いところを攻撃するのも禁止します」

受け入れてくれた。制限については当然だな。

「ありがとうございます。じゃ箒ちゃん、よろしく」

「あぁ」

礼を済ませ、向き合う。

「平晴眼！」

部長さんが僕の構えを指摘。

そのとおり。平晴眼。理心流の構えだ。読んだ本に載ってたからこれを練習してた。

「いくよ！」

突き！

「遅い！」

箒ちゃんにかわされるが、この後が真髄。

「はぁっ！」

そのまま竹刀を返し、横薙ぎ。面の横をとらえる。

「なぁっ！」
横から入った面に箒ちゃんは驚いていた。
剣道ならこうやって頸動脈を狙うなんて存在しない攻撃だからだ。
「一本！」
「部長！今のは！」
箒ちゃんが食いついた。
「剣術のルールを適用した以上、今のは有効よ。諦めなさい」
「くっ…」
歯を食い縛っている。ある意味反則技だからな。
「もう一回やりましょう。このままじゃ箒ちゃんも納得しないでしょ？」
「あぁ」

「仕方ないわね。もう一試合ね」
次の試合。
箒ちゃんは最初から全開。
「はあぁぁぁっ！」
高速の連打。面や胴を竹刀が素早く狙ってくる。
「くっ」
防ぐのに精一杯。何も出来ない。
鍔迫り合いになった。
「や、やるね！さすが日本一！」
「美晴も本気を出せ！」
かなり本気ですけど。
鍔迫り合いを解く。
再び高速で打ち込まれた面。
それを体を傾け左下方向に受け流し、空いた胴を打つ！

「一本！」

勝っちゃったよ。

「…強いな美晴」

面を脱ぎ、こちらを見ている。

「剣道なら弱いよ」

あくまでルール外の試合だからな。まともにやったら絶対無理。

「さて、今日はここまでにしましょう。篠ノ之さん。惜しかったですよ。ルール内なら勝ってました。ま、剣には色々な形があるって事ですね。では解散」

今日は疲れたぁ。

「美晴。お前すごいな」

一夏と箒ちゃんと寮へ。

「さっきのはゲームから学んだんだ。あったでしょ？幕末のやつ」

「あぁ、あれか。なるほどな。確かにあったな」

「ふぅ。ゲームの技に負けた私は…」

実際にあった技だから、別にゲームに負けたって訳では。

「じゃあ僕は先に行くから。箒ちゃん。一夏をよろしく」

「な！」

どんなトークをするのかなぁ。

ＳＩＤＥ　箒

「美晴は以前と比べて変わったな」

色々な面が強くなっている。笑顔だけは昔のままだが。

「そうだな。ここに来てからは顕著だ。箒の知ってる美晴は大体泣いてたろ」

「どうだろうな。笑顔と半々か。…やはり守りたいものがあると違うのだろうな」

シャルロット達への思いの強さは羨ましいぐらいだ。一人増えたらしいし。

「俺も守りたいんだぜ？あいつも千冬姉も、お前もな」

「んな！何を言っている！」

「おかしいか？」

そ、そんなさらっとお前を守りたいだなんて、こ、告白じみたことを…。

「友達は守らないとな！」

「…この朴念仁！」

「いてぇ！」

こやつには一太刀では足らん！

「一夏ぁ！」

「やめろ！箒！」

やはり天下一の唐変木だ、こいつは。

そのおかげで、鈴やセシリアも食い止められているのだがな。

しかし…。

「納得できん！」

「何の話だぁ！」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

第７８話

「ねぇ美晴くーん」

横からほっぺたをつつかれる。誰にか。学園最強の鬱陶しさを持つあの人です。

「あぁ気が散る！さっきからつんつんつんつんほっぺたつつきまくって！何がしたいんです！」

「だーってぇ。暇なんだものぉ」

「仕事は今目の前にあるでしょ！やってください！」

こんにちは、美晴です。

今は体育祭のことで会議中です。競技は大方決まっています。僕達の扱いと、生徒会主催のプログラムをどうするかを話し合っています。

「えぇ～？」

「終わったら遊んであげますから」

「楽しみねぇ」

ってな具合で、会長が全く仕事をしてくれません。疲れるよこの人。

「ミー君。私とも遊んでぇ？」

もう一人いるし。

「…おねぇちゃん、本音。…美晴君を困らせないで」

その声で二人の動きが止まる。

「簪さん…。君は生徒会のオアシスだ」

簪さんにはたっちゃんさんとの仲直りを機に、生徒会に加入してもらった。使えるメンバーが一人でも多くほしいからだ。

仕事は真面目だし、落ち着いて話せる人だ。虚さんはどちらかというとたっちゃんさんを甘やかすし。

「…なんか、言い回しが気持ち悪い」

「えっ？」

気持ち悪い？意外な毒。

「わぁ美晴君。簪ちゃんに嫌われちゃったね」

本心なのになぁ。

「美晴。やらないなら俺帰っていいか？」

一夏が眠たそうに目をこすっている。

「あぁ、ごめん。真剣にやるよ。では、議題は体育祭における僕達の参加と、生徒会主催プログラムを何にするかです」

僕だって男だ。生身での身体能力なら、普通の女子より全然上。一夏も含め二人がいる僕達のクラスは、幾分有利になるはず。

「別に良いんじゃない？普通に参加して。３０人ぐらい学年にいれば話は別だけど、二人ならそこまで大きな影響出ないわよ」

今年から共学になった元女子高とかなら、そんな感じになるのかな。所詮僕達二人だけだもんな。

「ですかね」

「…同意見」

「私もです」

「私もぉ。みんなで楽しもうよぉ」

「みなさん賛成ですか。じゃあ一夏。僕達もやろう」

「どうせならやりたいからな。よし。決定だな」

一夏がホワイトボードに決定事項を書き込む。
なぜ一夏が、って？
だって書記のあの人が仕事しないんだもん。

「じゃあ次は生徒会主催プログラムです。何か意見ある人」

「はーい！」

「嫌な予感するけど、たっちゃんさん」

「チアリーディングとかどう？」

「さんせーい！」

のほほんさん。あんたは余計なことしかしない。

「却下します」

たっちゃんさんを見ずに答える。一夏。書かなくていいよ。

「早いー。少しは考えてよぉ」

「僕にああいう服を着せたいからでしょ」

「当たり」

「だから却下します」

「簪ちゃんや虚ちゃんも着るのよ？」

簪さんか…。ポンポンを持って短い衣装でフレフレ！か。良いな…。見てみたい気もするが、同時に僕が辱しめられることには変わり無いよな。

「…却下です」

「脈あり？ねぇ、二人からも言ってよ」

簪さん達に同意を求めようとするが、

「「私達も嫌です」」

あっけなく敗北。

「はい。では別のを考えましょう」

「借り物競争とかでいいんじゃねぇか？」

一夏が提案する。

「ベタだねぇ。ま、平和的だよね。採用します」

「よし。借り物競争、と」

ホワイトボードの採用欄に記入。

「他に意見がなければ決定しますが」

「私はそれでいいです」

「…私も」

虚さんと簪さんは賛成か。

「仕方ないわね。本音ちゃん。諦めましょう」

「あーあ。お楽しみが減っちゃった」

僕にはお楽しみじゃないんでね。
これで決定か。

「じゃあ、借り物の内容を考えましょう。それぞれ何枚か書いて、内容は当日のお楽しみで」

これを採用、却下って選んでいくと面白味が失われるからな。
変なことは書かないだろう、と信じたい。

体育祭当日を迎えた。

グラウンドで各種競技が行われる。
チームは学年対抗。成長に伴い基礎体力の差はあるだろうけど、ここに入学した以上、平均以上の身体能力の持ち主なはずなので、ハンデ等は無し。
短距離、中距離、長距離。幅跳びや高跳びなどなど。それぞれにエントリーした選手が競い合う。
…がっつり陸上競技大会になってる。
綱引きとか玉入れはどうしたんだろう…。

「さすがにラウラはすごいなぁ」

あらゆる競技で上位入賞している。僕もそれなりの活躍をしている。
でもラウラとの直接対決に負けちゃった。

「ドイツ軍の隊長だもん。あれぐらいやるよ」

シャルが答えた。
グラウンドに持ち出した自分の椅子に座りながら、シャルと簪さんも一緒にラウラの活躍を見ている。
あ、こっちに帰ってきた。

「ラウラはすごいね」

ごほうびにナデナデ。

「ふ…ん。このために頑張ったようなものだ」

「次はシャルの番だね。いってらっしゃい」

シャルが出るのは幅跳び。

「苦手だけどなぁ。仕方無い。頑張って美晴に撫でてもらうんだ！」

張り切ってグラウンドへ。

「……」

簪さんが何か物欲しそうな顔をしている。

「ん？簪さんもナデナデして欲しいの？」

「…べ、別に」

ぶっきらぼうな言い方。恥ずかしさからかな？

「そう？ならしないけど」

「…意地悪」

あとで機会があったらやってあげるよ。

「美晴さん。一夏さんはどちらかご存知ですか？」

セシリアさんがやって来た。一夏を探しているみたい。

「一夏は…、トイレじゃない？しばらく待ってれば帰ってくるよ」

さっきまで近くに居たはずだけど…。水いっぱい飲んでたし多分あってるだろう。

「では、私も見ながら待たせていただきますわ」

シャルが使っていた椅子に座る。たまにはセシリアさんの口から状況を聞いてみるか。

「最近一夏と進展あるの？」

「うぅ。残念ながら一夏さんには気づいていただけませんの」

どれだけ鈍感なんだろう。

鈴ちゃんや箒ちゃんも一夏へのアタックを強めているが、誰一人として成功したという話を聞かない。

付き合って、が、買い物に付き合ってって意味にとらえるからなぁ。
好きって言っても、俺も友達として好きだよ、とか言っちゃいそうだし。

「ごめんね、バカな兄で」

「美晴さんは悪くないですわ。一夏さんがいけないのです」

そんな一夏が大好きなくせに。

「でもさっきの射撃競技の時ずーっと、セシリアはきれいだなぁ、って言ってたよ？」

ポケーッと眺めながら口にしてた。
でも正直グラウンドでクレー射撃するのはどうかと思うんですけど。
誰だ、競技に加えたやつ。

「本当ですか？頑張った甲斐がありましたわ！」

「ん？セシリアか。さっきの射撃、優勝おめでとさん」

一夏が帰ってきた。やっぱりトイレ行ってたみたいだ。ハンカチが少しポケットから出てる。

「一夏さん！はい！頑張りましたわ！だから、その、…いい子いい子してくださいませんか？」

「おお、いいぞ。セシリアはいい子だ」

一夏に頭を撫でられたセシリアさんの顔は見事にとろけていた。

「あぁ！何抜け駆けしてるのよセシリア！」

鈴ちゃんが来た。相変わらずこの二人が揃うと騒がしい。

「あら、二組の鈴さん。これは私が先程一位をとったので、一夏さんに誉めていただいているのですわ」

まだ撫でられながらも、きっちりとした口調で説明している。

鈴ちゃんの前では毅然としてるんだな。

「それならあたしだってさっき２００ｍで一位とったもん！」

「何だ？鈴もいい子いい子して欲しいのか？」

「あたしは別に！…でもまぁ、一夏がしたいっていうならされてもいいけど…」

素直じゃないなぁ。

「したいってわけじゃないからいいや。セシリア。まだやるか？」

「お願いします！」

ほら、素直じゃないから独り占めされてる。

「うぅ…。わかったわよ。お願い！あたしも誉めてよ！」

「よし。鈴。こっち来い」

一夏は鈴ちゃんの頭をわしゃわしゃする。

「い、一夏！なんか違う！」

優しく撫でてもらうはずだったのにねぇ。

「いいじゃねえか。鈴はこうするのが一番だ」

「ま、まぁいいわよ」

撫でられているという事実に変わりはないので受け入れている。

「美晴ただいまぁ。負けちゃったよぉ」
シャルが帰ってきた。一位にはなれかったようだ。
「…で、何この変な空間」
甘いのか、トゲトゲしいのかよくわからない空間。
いがみあってるのに、一夏に撫でられると二人ともとろけてる。
「ん、まぁいろいろあるんだよ」
「な、何をやっているんだ一夏！」
箒ちゃんが来た。この光景を見て、拳を握り、わなわなしている。
「ほ、箒…。いや、これは頑張った二人を誉めてるだけで…」
「不埒な！成敗してくれる！」
竹刀を取り出し、すさまじい剣気を放つ。
自分もして欲しいと言えれば、平和が訪れるのに。

「我が刀の錆となれ！」
竹刀錆びないし。斬りかかる前に止めないと。

「はいはい。いつまで遊んでいるの。そろそろ騎馬戦が始まるよ」
ここに居る全員がエントリーしている騎馬戦まであと少し。
その有り余ってる元気をぶつけてくださいな。

「美晴が上になるんだよね」

「うん…」

シャルが話しかけてきた。
そう。僕が一番体重が軽いとのことで、上にされてしまいました。
その事実に、僕を含めた一夏以外の全員がショックを受けていました。
誰よりも軽い僕って…。

「それじゃあ三人ともよろしくね」
僕の騎馬はシャル、ラウラ、簪さん。

「…落ちないように、頑張ってね」

「うん」

ただ、僕の目の前に居る、敵である上級生の目が怖い。

「ふふふ…。合法的に美晴君を触り放題…」

「あんなことをして…、こんなことも…」

「私が回り込むから、前から襲っちゃって」

「その後こっちにもまわしてね」

物騒な話し合いが行われているのが聞こえる。
まわすって…、どうされるの僕…。

「三人とも。本気で僕を守ってね。多分、身の危険が…かなり…」

「「「了解」」」

競技開始。各学年入り乱れての三つ巴のはずなのに、

「二年生はそっちに回り込んで！私達三年生はこっちよ！」

「はい！」
見事な連携で僕を取り囲んでいく。
僕だけ敵多くない？

「来たよ美晴！右！」
シャルが司令塔となり、攻撃をかわしていく。

「せいや！」
一つ取った！

「シャルロット！後ろから来たぞ！」
三人が急旋回。正面から迎え撃ち、見事に撃破。

「美晴君強いわ…。一気に取り囲め！」
完全に袋のネズミ。
打開策は…、あれをやるか。

「かかれー！」

一斉に連合軍が襲いかかってきた。今だ！

「…みんな、僕をいじめるの？僕のこと、嫌い？」

「「「うっ…」」」

秘技泣き落とし。うるうるした目で、上目使い。中学の時もこれで勝ち抜いた。

「もらい！」

隙をつき、多数撃破。戦場では止まったら死ぬのさ！

「…むごい」

簪さん。作戦なんだ。頭が良いと言っていただきたい。

「鈴ちゃん！そっちは？」

もう一騎の騎馬は一夏達のチーム。鈴ちゃんが上。

「あらかたやったわ！」

鈴ちゃんは正々堂々。僕だってそうしたかったけど、いっぺんに囲まれたりすれば、正当な手段なんか取ってられないよ。

「美晴君。おねーさんが残ってるわよ？」

くっ。最強の騎馬だ。今この場では彼女は呂布。僕達に勝ち目はあるか？

「挟め！鈴ちゃん！」

人間の騎馬は旋回性能に限界がある。素早く動いて挟み込めば！

「あまーい！」

何？逃げるどころか体当たりで騎馬を崩しにかかっただと！

「きゃあっ！」

鈴ちゃんが脱落。

「ふふふ。おねーさんは強いわよ？」

呂布め…。どうしたものか。

「三人とも。こうしてこうして…」

小声で作戦を伝える。

「「「了解」」」

連携が要だ。頼むよ。

「よーし突っ込め！」

まずは突っ込む。

「来なさい！」

たっちゃんさんは待ち受けている。ふふふ…。それでは行きましょう！

「はぁっ！」

騎馬からジャンプ。

「上から！」

空中で体を捻りながら、たっちゃんさんの帽子を奪い取る。

「美晴！」

騎馬を解体し素早く敵を抜いた三人が着地点に待っていた。
そのまま騎馬に戻る。
落ちさえしなければ、ありなんです。

『優勝は一年生！』

「三人ともありがとね」

見事に作戦通りに動いてくれた。やっぱり意思疎通は完璧だね。

「ごほうびは？」

シャルが可愛く要求している。

「はい、いい子いい子。簪さんもいい子いい子」

三人を撫でる。

「……嫌じゃないかも」

目をほそめ、少しだけ頬が赤く染まっていた。

「そう？良かった」

この後はお昼休み。
そして借り物競争。僕達の出番です。
どんなのが入っていることやら。

第７８話（後書き）

最近は春先にやる学校も多いようで。

クラスメートと仲良くなる前にやられても…って気がします。

第７９話（前書き）

体育祭午後の部。
午前よりも大変な目に遭うミハちゃん…。

第７９話

こんにちは、美晴です。
現在は体育祭のお昼休み。
こういうのお昼休みと言えば！

「じゃーん！今日は三段重でーす！」
みんなでお弁当ターイム！今日は朝早起きして作っちゃいました！

「おぉー。美晴気合い入ってんなぁ」
一夏が覗き込んでいる。

「もちろん！シャル達にも日本の、こういう時のお弁当を見て欲しかったし！」
カロリーは高めに設定。
おかずは甘めの卵焼きに、唐揚げ（ハーブのも）に、アスパラベーコンでしょ、ポテトサラダでしょ、それからそれから…。おにぎりは塩分補給を考えて梅干しとおかかの。変わり種もある。

「はいいただきます」

一夏がひょいと唐揚げをつまむ。

「ちょっと一夏！まだ千冬お姉ちゃん来てないのに！」

みんなで一緒にいただきますしたかったのにー。

「動き回ったから腹減ってんだよ」

それにしたって…。

「ほお。姉が来るのも待てんのか。いやしい奴め」

はい登場。

「ぐっ！」

背後から突然現れたから、一夏が唐揚げを喉に詰まらせた。

「はい一夏お茶だよ」

すぐに麦茶を差し出す。

「ぷはっ。すまん美晴。助かった」

よし。みんなそろったし。

「それではちゃんと、いただきます」

「「「いただきます」」」

みんなどんどん食べてくれる。作った甲斐があるなぁ。

「うん。美味しいよ美晴」

「ありがとシャル」

「酢豚で負けたらあたしは…」

あれ？鈴ちゃんが静かになっちゃった。
美味しくなかった？酢豚。鈴ちゃんが食べるかなと思って作ってみたんだけど。

「美晴。卵焼きをくれ」

「はいラウラ。あーん」

「うむ。うまいぞ」

「簪さんにも。あーん」

「えっ？…その、あ、あーん」

真っ赤な顔で食べてくれた。

「…美味しい」

どうやら気に入ってくれたみたいだ。

「む。美晴！姉にはないのか！」

別に張り合わなくてもいいじゃない。

「じゃあ千冬お姉ちゃんには生姜焼きを。あーん」

「あーん。ふむ。濃いめの味付けがまた体育祭らしいな」

気に入ってもらえて良かったよ。

「ミー君」

口を開けたまま待っているのほほんさん。

「はいはい」

食べさせたのはお新香。

「ぶー。何で私だけこれなのぉ？」

一応手作りなんだけどなぁ。

「おふざけだよ。はい、卵焼き」

「んー、おいしー」

「これはなんですの？」

いなりを持ちながら色々な方向から観察しているセシリアさん。

「いなり寿司って言うんだよ。食べてみて？」

「んぐ。…この油揚げに染みたおつゆとお酢の効いたご飯が何とも言えない美味しさですわぁ」

うん、着々とセシリアさんの味覚は日本人に近づいているな。

「これは、ペンギンか？」

「そうだよ箒ちゃん。分かってくれて嬉しいよ」

タコさんだけじゃつまらないから、別の切り方を試してみました。分かるかどうか不安だったけど、一応成功みたいだ。

「おねーさんは美晴君にあーんしてあげるね？」

と、指でポテトサラダを口の中に突っ込んできた。

「んぐっ！」

奥の方まで突っ込まれて、一瞬呼吸が…。

「やん、美晴君。指舐めないでよ。変な気分になっちゃう」

って、あなたが舌に擦り付けてきてるんでしょうが。

「…おねぇちゃん。怒るよ」

さすがに見かねたのか、簪さんが注意する。

「その前に千冬姉が…」

見れば噴火寸前の千冬お姉ちゃん。

「あら、やり過ぎちゃったわね」

「次やったら殺すぞ」

今回はなんとか許してくれたようだ。体育祭で死人が出るのは勘弁だな。

それにしても簪さんとたっちゃんさんが一緒にお弁当を食べるなんて少し前まではまずあり得なかった光景だろう。

そう考えると、簪さんとの仲直りのきっかけになれて良かったよ。

「食った食った。ごちそうさま」

「食べてすぐ横になると体に悪いよ一夏」

「あれ嘘らしいぞ？」

そうなんだ。
まぁ、残ったの全部食べてくれたし感謝感謝。
「でも胃酸が逆流してガンになりやすいとか聞いたわよ」
「さぁ起きようか！」
鈴ちゃんが言うとすぐ起き上がって元気に体操をする一夏。
それも消化に悪いと思うけど。
さて、ここからは午後の部だ。頑張るぞっと。
『はい、では午後の部最初のプログラムは借り物競争です。司会は僕、織斑美晴が務めます』
借り物競争は自由参加。人数制限はしますけどね。予定では五回戦ほど。
意外とこの競技も成績に関わるので、余興でもあり、マジでもあり。
『はい、では第一組。よーい、ドン！』
障害物は多少用意。ネットとか平均台とか。
さて、何が書かれているのかな。
「眼鏡の先生。山田せんせーい！」

なるほど。定番の先生ネタか。

「美晴君！来て！」

「えっ？僕？」

司会が離れていいのか知らないが貸し出される。

そのままゴール。

「何が書いてあったんです？」

「今欲しいもの」

……。逃げろと第六感が告げている。

「し、司会がありますので」

すぐさま司会マイクへ避難。よくある札だけど、それを人間に適用するなんて。

『えー、では第二組です。よーい、ドン！』

「美晴！来い！」
千冬お姉ちゃんに拉致られた。
何で教師が参加してるんですか。いや確かに自由参加だけど。

「よし！一位だ！」
生徒のためにあるのに…。

「で、何て書いてあったの」

「今夜食べたいものだ」

誰だ入れた奴。普通に考えて持っていくの困難じゃないか。
しかもこれを千冬お姉ちゃんが引くとか最初から僕狙いになるだろ。
容疑者は二人。後でとっちめてやる。
千冬お姉ちゃんも拡大解釈しすぎなんだよ。

『では第三組。よーい、ドン！』
今度こそ全部まともなものであって欲しいんだが…。

「美晴！来い」

今度は一夏か。参加していいのかなぁ。まぁ、みんな見てる方が面白いって言って、なかなか参加者が集まらなかったからいいか。スムーズにゴールへ。

「一夏君。何引いたのかな？」

たっちゃんさんが一夏の札を確認する。確かにそのまま連れてこられたが何を？

「越えてはいけない壁、でした。物じゃないんでどうしようかと思いましたが…」

抽象的。一体どうしろと言うのだ。

「審議しまーす。一夏君は美晴君を連れてきたようだけどその意味は？」

「はい。見ててくださいね。…美晴」

一夏が僕の肩をつかみ、真剣な顔をしている。

「俺は美晴とキスがしたい！」

そうしてゆっくり顔を近づけてきた。

「ぶっ！な、何を言い出すんだバカ一夏！やっぱりそうなのか！そっちなのか！」

「違うわ！ほら、会長！この辺に見えません？壁！」

一夏が自分の後ろを指差す。

「んー、見えた気がする。一夏君は一位ね」

認めちゃったよ。てかそこに見えるってことは越えたってことだよね！越えてはいけないがお題だよね！そうだよね？これ以上はないよね？

『気を取り直して第四組。よーい、ドン！』

今度は誰も来ませんように。心が傷ついていく…。

「おねーさんについて来てもらうわよ」

えぇ。あなたが並んでいた時点で覚悟はしていましたよ。こうなるだろうと。

「何引いたんです？」

「ペット」

「…逃げます」

脱兎のごとく逃げ出す。

「ちょっとー、一位になれないじゃないのー！」

嫌だ。そんなので一位の称号は絶対欲しくない。

「ビリになってくださーい！」

走り回ること数分、結局引きずられてゴールへ…。僕はペットなんかじゃない…。

『はぁはぁはぁはぁ。だ、第五組。よーい、ドン…』

疲れた…。少し休憩をください…。

みんな色々悩んでるみたいだけど、今のところ僕には来ないか。出来ればこのまま終わってくれ…。

「美晴ぅー！」

シャルか。また出番なのか…。司会が毎回貸し出されるってどうなのよ。実況とかしなくていいの？

「美晴！来て！ボクの札はこれなんだ！」

大好きな人。…シャル。喜んでついていきます！これ書いた奴偉い！

「行くよシャル！」

シャルの手を引き、ゴールへ向かって一直線。ゴール前の障害ももう五回目だから余裕。

大好きな人として貸し出されて、負けるわけにはいかないぞ！

「よっし！一位！」

「やったよ美晴！ありがとう！」

シャルも喜んでる。

「シャルこそ僕を選んでくれてありがとう」

「ボクの大好きな人は美晴だもん。迷わないよ」

「シャル…」

「美晴…」

「お楽しみのところ悪いが、早く締めてくれないか。お前司会だろ」

「あ、ごめん一夏」

甘い空気になってしまった。みんなの前ではまずいな。

『お楽しみいただけましたでしょうか。ポイントはしっかり加算されましたので、逃げ切り、逆転目指してこの後も頑張ってください』

これで僕の仕事は終わり。また競技に参加する。

最後にはリレーが待っている。

バラエティ的ノリなのか、勝った学年には今までの競技のポイントをなかったことにしてしまうぐらいのポイント、一万ポイントが入ることになった。

雛壇がまず突っ込みたくなるような措置。

今までのはなんやねん！

リレーねぇ。参加するのはいいんだけどさ、普通一人１００ｍぐらいが基本でしょ。何だよ５００×２０人リレーって。

全部で１０キロ走るリレーって聞いたことないし。何から何まで常識が通じないよ、この学校。

僕はなぜかアンカー。ラウラや一夏の方が速いんじゃないか？
そう思ったけど、たぶん一夏達は二年のアンカーを見てそう決めたんだろうな。

「美晴君。おねーさんから逃げられるかしら？」
この人が後ろから迫ってきたら全力で逃げますよ、そりゃ。ま、二年が先にバトンを受けとれば問題ないんですがね。

リレースタート。アンカーの出番はかなり先。何せ最後ですから。
距離もあるから後１５分はまず何もなし。
今のところ、さほど大きな差はなく、ほぼ同時にバトンが繋がっていく。一周した辺りから、三年が少しリード。それに食いつこうと、ラウラと鈴ちゃんの頑張りが目立っている。
そろそろ位置に着くか。

「美晴君！頼んだ！」
二位でバトンを受けとる。ということはもちろん…。

「さぁ美晴君！おねーさんとの鬼ごっこよ！」
こうなるわけです。

「追い付いたら色々しちゃうからねぇ！」
全力で逃げろ！勝つとか勝たないとか、それよりも早くゴールして保護してもらわないと！
５００を全力って結構辛い！呼吸がもたない…。
でも逃げないと！
いつのまにか三年生を抜き、トップでゴール。
「助けて千冬お姉ちゃん！」
一目散に駆け寄る。ここにいれば誰も手出ししない。寄らば大樹の影。
「よしよし。よく頑張ったな」
あまり長くいるとこの人も敵になるんだけどね。
この一位の結果、今年の体育祭は一年生が優勝。一万ポイント差だからな…。
「さて、ペットとか、越えてはいけない壁とか、誰が書いたんです？」
終了後、問題の件を聴取。

「「はーい」」

たっちゃんさんとのほほんさん。見事に二人ともですか。

「あんなことは書かないだろうと思って、検閲しなかったのに…。裏切られましたよ」

「いいじゃない。あの瞬間が一番盛り上がったってみんな言ってたわよ？」

僕が引きずられるあの瞬間がか。みんな薄情だ。

「まぁうまくいったから許してやれよ。なぁ？美晴」

大体お前のせいで大変だったんだぞ！

あの後ヒソヒソ話があちこちから聞こえてきたし、千冬お姉ちゃんもなだめなきゃいけなかったし…。

それに一夏も襲われる恐怖を知ってるはずなのに。

どうせ一夏はこの学園入ってからだもんね。僕なんか小さい頃からずーっとだ。

「…今後は僕を危険にさらさないでくださいよ」

「「はーい」」

ダメだ。絶対反省してないぞ、この二人。

ブレーキ焼ききれなきゃ良いけど…。

第８０話

「着きましたよー！」

僕が今一人で立っているのは、郊外の空き地。

なぜここにいるのか。それは…。

「だーれだ！」

後ろから目を塞がれた。

「…声でわかりますよ。束さん」

「つまんないなぁ。少しは悩んで欲しかったな」

手が外され、振り返ればいつものウサギさん。

「小さい頃からお世話になってるんです。忘れるわけにはいきませんよ。愛しのお姉さん」

迷惑をかけられたこともたくさんあるが、僕をこの場にいられるようにしてくれたのもこの人。恩人みたいな人だ。

「それでお話しした件ですが」

「ここにいると色々面倒だから、私の研究所に行こう。はい、これつけて」

アイマスクを出された。

束さんは逃亡中の身。例え僕にでも研究所の位置を知られるのは嫌なんだろう。

僕がばらしたりしないのは当然だけど、ふとしたきっかけでもれる可能性もあるだろうからな。

「でも移動手段はニンジンなんですね。ばれますよ？」

前に臨海学校に来たあのニンジン。目立つんだから追尾されたらおしまいだぞ。

「大丈夫。周りからは何もないように認識されるように改造したから」

ステルスを遥かに越えて、インビジブル。応用すれば簡単に暗殺とか出来そう。

僕はアイマスクをつけて、ニンジンに乗り込む。

狭いという感じはしない。空間は広めなようだ。

「快適な空の旅をお楽しみくださーい！」

何エンジンなのか知らないが、意外と静かな発進音。
どのくらい飛んだんだろうか。長いような短いような。
着地したようだ。

「着いたよー」

ニンジンを出てアイマスクを外すと、目の前には機械が大量におかれた部屋。外部とどんな風に繋がっているのかは全く持って想像つかない。
この人のことだから、侵入者防止用の迎撃装置とかも置いてるんだろうなぁ。

「これがこの研究所の制服だから、着替えてきてね？」
どこかで見たことのある箱が…。やっぱりメイド服が入っていた。

「あとこの耳もねぇ」
ウサ耳も加えられた。束さんとおそろいですか。

「着替えてきます。カメラ切っといてくださいよ」

「ばれてた？仕方ないなぁ」

適当に言っただけだったけど、やっぱりつけてたか。
モニターに監視カメラの画像的なものが写ってたから、もしかしたらなんて考えたけど。

さて、この部屋でいいかな。
最近これを着るのに抵抗が薄れてきている自分が居る。どんどん毒されているのかも。

…にしてもこの研究所、全体的に汚い。機械油は仕方ないとして、生活臭漂いまくっているよ。千冬お姉ちゃんほどではないにしろ、これは…。

「着替え終わりましたよ。束さん」

「うーん、やっぱりミハちゃんは女の…むぅっ！」

この前と同様わしづかみ。

「そろそろ僕のNGワードを覚えていただけませんかねぇ」

果たして僕の目は笑っているのだろうか。

「わはっは！わはっははら！」

わかったから…か。

仕方ない。

「うぅ…。口がタコさんになっちゃうよ」

「ストローで飲み物吸いやすくなりますよ」

「ご飯食べにくそう…」

さてバカなやり取りはこの辺にして。

「束さん。今日の本題は後回しにして、まずは掃除をします。しばらくうるさいですが、我慢してくださいね」

久々に大掃除クラスのことをしなければ。

「…束お姉ちゃんって呼んでくれないかなぁ。今日だけでいいから。それがミハちゃんのお願いの交換条件ね」

「なぜ」

「ちーちゃんだけミハちゃんにお姉ちゃんって呼ばれるのはずるいよー。私だってそう呼ばれたいんだよー」

ずるいって…。千冬お姉ちゃんはお姉ちゃんなんだから当然じゃない。

「ミハちゃん」

「わかりましたよ。東お姉ちゃん」

「んー、可愛い！んちゅー」

抱きついた上で唇をとんがらせている。

「またつかみますか」

「…ごめんなさい」

「じゃあ掃除してきますから」

意外とこの研究所には部屋が多い。倉庫だけではないようだ。

さて、まずはこのリビングと思われる場所のゴミを。

拾い集めた上で、掃除機を…。

ヴォー…。

モーター音がなんだか変。形状は普通だけど、透けて見える中身が明らかに別の機械のものだ。パックがないし、かといってサイクロ

ンでもない。どうしてるんだ？
通常の掃除機じゃないな、これ。なんだか嫌な予感がするからホウキでいいや。
様々な部屋をそのままお掃除。

「ここは束さんの部屋か」
服脱ぎ散らかしてるし。メイド服も何着あることやら。
…下着まで。…片付けるべきか？仕方あるまい。

「意識しないでやれば…」
ひょいとつまみ上げた下着はピンクのにリボンがちょこん。
へぇ…、なかなか可愛いものを…。

「ミハちゃん」

「束お姉ちゃん…」
ドアを開けて、束さんがこっちを見ていた。

「いや、これは…」

一番見られたくない醜態だ。

「欲しかったらあげるよ？」
ロングスカートのすそをつまみ、上げていく。脱ぎたてをですか。
「い、いいです」
「それとも中身の方がいいのかな？」
にじり寄るな！
「もう。ここはいいからこっちのお手伝いをしてよ」
「すみません…」
千冬お姉ちゃんの部屋とはまた違った大変さだった…。
「この辺の書類を整理しておいて」
「はい」
束さんの製作室の片付けをしていく。
色々難しい計算が行われた設計図らしきものが散らばっている。

世界中の研究者が泣いて喜ぶようなものがたくさんあるんだろうなぁ。

「うーん、ミハちゃん」

何かを取ってもらいたそうだ。

「これですか？」

一つの部品を手渡す。

「よくわかったね、私が欲しいの」

勘と言うか何と言うか。

「さっきから束お姉ちゃんがやってるのを見るとこれかな？って思って」

「ふーん。中々見込みがあるかもね。どう？このまま住み込みで修行しないかい？」

「遠慮します」

シャル達がいる学園に帰りたいし。

「そういえば、学園を襲った無人機ってさ…だよね？」

「うん。そうだよ？」

やっぱりか…。

「何で？」

「ミハちゃんやいっくん、箒ちゃんには強くなって欲しいし、暇つぶしでもあるかな」

暇つぶし…。予想通りの返答だな。にしても…。

「そう…。束お姉ちゃん。ここにいて寂しくない？」

「んー、もう一人に慣れちゃってるしねぇ」

空中に投影された画面に向かい、タイピングしながら束さんは答えた。

慣れている。つまりは好きだからではない。仕方なくやっている内に、当たり前になってしまったんだ。

一人でいて寂しくないわけがないだろう。

箒ちゃんや千冬お姉ちゃんとかと笑ったりしてたいんじゃないかな。

「束お姉ちゃん」

「ミハちゃん？」

束さんを後ろから抱き締めた。

「一人が寂しくなったら、いつでもおいでね。僕は束お姉ちゃんをいつでもこうやって抱き締めてあげるから」

「…うん。ありがとう」

温もりが欲しくない人なんていないはず。束さんだって…。だからこの背中も震えてるんだろう。

「さて、束お姉ちゃん。ご飯作ったら食べてくれる？」

「うん。出来たら呼んでね」

キッチン自体設置してるのか？

…あった。でも使ってる形跡がない。冷蔵庫もあるにはある。中身は…。期限切れ寸前が多数。

中身を使いきるにはチャーハンが適してるかな。

「ふんふんふ～ん」

使われてない器具ばっかりだからピカピカ。こんなに気持ちよく料理できるのも久しぶりだなぁ。

「束お姉ちゃん。出来ましたよ～」

「今行くね～」

このやり取りってなんだか…。

「夫婦みたいだねぇ。ねぇミハちゃん？」

「ね」

「私いつでもプロポーズを受けるよ？」

「すでにいますのでしませんよ」

「ちぇっ」

「それより早く食べてください。冷めちゃいますよ」
せっかく色々やりくりして作ったんだから、美味しいうちに食べてもらいたいよ。

「うん。誰かに作ってもらうご飯は美味しいね」
普段は何を食べているのか…。さっきのゴミの中身はお菓子ばっかりだったけど。

「健康にも気を使ってくださいよ？倒れたら研究どころじゃないんですから」

「大丈夫。束さんはちーちゃん並みに体が強いんだから」
あのアイアンクローから生きて帰ってこれるんだから、間違ってはいないんだろうけどさ。

「ごちそうさまでした」
見事に完食してくれた。これで冷蔵庫もスッキリだ。

「はい。これからは期限が迫る前に使いきってくださいね」

「自炊はしたら負けだと思ってるんだ」

「はぁ。じゃあ時折、僕が作ったのを千冬お姉ちゃんに預けますから受け取ってくださいね」

少しでもまともなものを食べてもらわないと。

食後、製作室に戻り、束さんのお手伝いをしていく。
といっても指示されたパーツや、書類を取るぐらいしか僕には出来ないけど。
手を出したところでこの人の頭脳の前では僕はただの凡才だからな。

「今日はこれぐらいにしようっと」

一日のペースは自分次第。僕もそんなことしてみたいな。

「お疲れさまです」

冷やした飲み物を渡す。ジュースとお菓子はかなりの数ストックされていた。

「ありがと」

飲み物を飲んで一息つく。

「さて、ミハちゃん。お願いの件を詳しく聞こうか」

「はい。実は…」

お願いすることと、どうしたいかを伝える。

「なるほどねぇ。気は進まないけど、ミハちゃんのお願いだから聞いてあげよう」

だろうね。進むはずはないと予想はしていたよ。

「聞き入れてもらえて嬉しいです。よろしくお願いします」

「ちーちゃんからもお願いされてたしね。仕方ないよ。報酬はもらってるし」

「何をもらったんです？」

「文化祭。ミスコン。セーラー服」

キーワードを連ねていく。

「まさかあのときの画像！」

「音声データも込みだよ。こっちでもデータは取ってたけど、ちーちゃんのアングル最高だよ」

どこからどう撮っていたんだ。気絶していたはずなのに。

「ミハちゃん意外と可愛いデザインの下着着けてるんだね」

「にゃあーっ！」

まさか中身まで撮られていたとは！

「消してください！お願いします！」

土下座。

「ダーメ。報酬だもん」

「くっ。ばらまかないでくださいよ」

「しないよ。一人でゆーっくり眺めるんだもん！」

それですら恥ずかしくて…。

「と、とにかくお願いしますね」

「整い次第連絡入れるよ」

「それじゃあ、僕はこれで」

丸一日この研究所で過ごした。約束も取り付けたし、今日の目標自体は達成だ。

「帰りもこれ着けてね。あとそのメイド服はプレゼントするから」

いらないけど…。

行きと同じく、アイマスクを着けてニンジンへ。帰りは何故か学園の裏側へ着いた。

警戒甘くなってません？この人楽々侵入してますよ！

第８１話（前書き）

あけましておめでとうございます。
今年も読んでいたたければ幸いです。

第８１話

ＳＩＤＥ　シャル

さぁて、今日は美晴と何をしようかなぁ。

あ、居た！

「美晴！」

廊下を歩いている美晴に抱きついた。

「ごめんシャル。今忙しくて」

いつものような柔らかい顔ではなく、少し真剣な表情で断られた。

「あ、ごめん…。また今度にするよ」

嘘じゃなくて本当に忙しそうだから、ボクはちょっと寂しかったが美晴から離れた。

すると美晴はすぐにどこかへ行ってしまった。

最近何だか美晴が変なんだ。いつも忙しそうにしてるし、時々悩んで考え込んでいるし。

あのとき誰かと電話で話してから、そうなったんだよね。

「ん？電話だ。ごめんねシャル」

少し前の昼休み、そう言って席を外した美晴は階段で電話をしていた。

あまり美晴に電話がかかってくることはない。用事は大体ここの中だけで済むからだ。

美晴のお友達と電話する時はいつも寮の部屋で話している。こんなお昼休みになんてしてたのをボクは見たことはない。

「整いましたか。ありがとうございます。助かります。では僕も動き出します」

電話を切った後、美晴は一つため息をついて、よし、と拳を握り戻ってきた。

「美晴。何話してたの？」

気になったので遠目から見ていたが、電話の内容は聞こえなかった。

「ん、シャルには関係ないよ」

そう言って席につき、何やら考え始めた。

美晴が、関係ない、なんて言うの初めてだ。ボクには何でも言って

くれてたのに。
例え他愛ない内容でも、こんなことだったんだ、なんて笑顔で話してくれてた。
そんな美晴が…。

それからは美晴はまるでボクのことを避けるように動いてた。
いつものように話しかけても、

「美晴！遊ぼ？」

「ごめん。ちょっとやることあって」
そう言って部屋に閉じこもってたり、

「ねぇ美晴？」

「ん？ごめん。聞いてなかった。もう一度いいかな？」
上の空でボクの話を聞いてくれてなかったり。
久々に部屋に来てくれたと思ったら、

「ごめん。ラウラに用があるんだ。ラウラ、ちょっと来てくれる？」

「うむ。なんだ」

ラウラだけを呼び出して、部屋の外で何か話してる。

「美晴と何を話してたの？」

ってラウラに聞いても、

「他愛のないことだ。言うまでもない」

そう言って全く教えてくれない。

そして今度は、

「美晴！」

「簪さん！ちょっといいかな」

「……」

何かに夢中なのかこっちに気づいてすらくれない。

一体ボクの知らないところで、美晴は何をしようとしているの？

ボクだけ頼ってくれないなんて、美晴にとってボクはそんなに信用ならない存在なのかな。

「はぁ。最近なんだか美晴に避けられてるよ」

お風呂場で体を洗いながら一人呟く。

最近はお風呂でも、一人きりで入ることが多くなった。
ラウラと居ても、ボクが教えてもらえない美晴をラウラは知ってるんだって思って、何だかかえって不安になってしまうんだ。

「うまく笑えないなぁ」

目の前にある鏡に向かって、指で無理矢理口角を上げてみる。

「不自然だなぁ」

目が笑えてないし、口もピクピクしてる。

心が楽しくないのに表情だけ無理矢理作っても、全然笑顔に見えない。
今までこんな気持ちになったこと無かったなぁ。
好きな人に見てもらえないって、こんなにも辛いことだったんだ。

「美晴…」

好きになんてならなければよかったのかな。

その後も美晴は毎日忙しそうにしていた。
電話をする回数も増えていた。
それでもボクには話しかけてくれない。
いつもラウラや簪さんと話している。
段々と美晴自身の笑顔も消えていった。

何があったの美晴。ボクにも話してよ。
いつものように笑ってよ…。シャルって呼んでよ…。

「大丈夫か？シャルロット」

廊下で一人で窓の外を眺めていると、一夏が話しかけてきた。

「一夏…。一夏は美晴が何してるか知らないの？」

「あぁ。俺も知らないな」

「そっか…」

一夏にすら話してないなんて、美晴どうしたんだろう…。

「シャルロット。美晴はお前のことが嫌いになったんじゃないと思うぞ」

一夏…。でも本当にそうなのかな…。

「だって全然構ってくれないし、この前は無視もされたし…」

とうとうあの笑顔も消えたし…。

「確かにそんなことされたのかも知れない。だから不安になるのかも知れない。だけど美晴はシャルロットのことをいつも、誰よりも気にしてたんだ。そんな美晴がお前を嫌ったりしないよ。何か訳があるんだ。信じて待ってやってくれないか」

一夏は優しい顔でそう言った。

「……うん」

一夏はどんなときでも、何があっても美晴のことを信じてるんだね…。

ボクもお嫁さんなんだから、誰よりも美晴のことを信じてあげなきゃいけないな。

それからも美晴は忙しそう。

あの電話からもう三週間ぐらい経っている。

ボクはあれ以来、美晴に見てもらえなくて時々心がチクチクする時もあるけど、気に病まないように努力し続けた。
いつか美晴が優しくボクのことを呼んでくれる日を信じて。
でも、また不安になることが起きた。

１２月中旬。
クリスマスのことを考えて世間が浮き足立っている頃、美晴は大きな荷物を抱えて学園からいなくなった。
ボクには何も告げずに。
織斑先生は知っているようだった。
お姉さんには言って、お嫁さんには言わないの？
それともボクは美晴にとってもうお嫁さんですら無いのかな。
そうだよね、ラウラと簪さんには話してるんだもんね…。

「シャルロットさん。クリスマスはいかがなさいますの？」
美晴がいなくなって数日。部屋に戻ろうとするボクにセシリアが話しかけてきた。
クリスマス…か。

「セシリア…。ボクは寂しく一人で過ごすよ」
ラウラと、なんて言うのも今は考えられない。

「シャルロットさん、大丈夫ですの？何だかお疲れのように見えますが…」

心配そうな表情でボクの顔を覗き込んでくる。

「うん、大丈夫だよ…。いつも通り元気だよ？」

頑張っていつものように振る舞ってみる。そんな風に見えないかもしれないけど…。

「そう…ですか。お体いたわってくださいね」

やっぱり通用しないか。セシリアの顔が曇ってる。そう言われるぐらいになっちゃってるのか…。

「あはは…。はぁ…」

いいや。寝よう。

冬休みにも突入し、今日はクリスマスイブ。みんなはパーティをやるって言っている。

でも美晴はまだ帰ってきてない。

「シャルロット！パーティやるわよ！」
鈴が元気良く部屋へやって来た。でもボクには今そんな元気なんてないんだよ。

「ボクはいいよ…。部屋で寝てるよ」
美晴がいないクリスマスなんて、祝ったって何の意味もないよ。美晴が一緒にいてくれるからボクは祝いたいと思えるんだ。

「サンタさんも来ているから来い」
サンタ…。そんな子供じみたこと…。
箒と鈴の二人がかりで抱えられて、美晴の部屋に連れていかれた。

「嫌だ！美晴の部屋で美晴がいないのにパーティなんてやりたくない！」
ジタバタと暴れて抵抗する。
今のボクにはただのいじめにすら感じられるよ。

それでも部屋に連れ込まれた。
美晴の匂いがする。…この匂いを嗅ぐと寂しくて、寂しくて涙が出そうになっちゃうんだよ…。美晴…。

「じゃあ！メリークリスマース！」

みんなは乾杯して、料理をつまんでいく。
…何かこれ、美晴の盛り付け方に似てるなぁ。こうやって木の芽とかを飾りに使うのとか一夏はあまりやらないはずだよな…。
…でも気のせいか。だって美晴はいないんだから。
みんなが盛り上がる中、ボクはただつまらなさそうにジュースをチビチビと飲んでいた。

「いやぁメリークリスマース！サンタさんだよぉ！」
突然ドアが勢いよく開き、赤い服を着てヒゲをつけたサンタの衣装で登場したのは…。

「美晴！」

「やぁシャル。ただいま」
白いヒゲの向こうに柔らかい美晴の笑顔が見える。
あぁ、ボクが見たかったのはこの笑顔だよ…。

「美晴のバカバカバカバカ！ボクがどんなに寂しい思いをしてたか！」
今までの思いが噴き出してきて、ボクは美晴の胸を何度も叩いた。

すると美晴がギュッと抱き締めてくれた。

「ごめんねシャル。寂しい思いさせて。でも、待っててくれてよかったよ」

優しく耳元でささやかれた。

「う…、ぐすっ…」

もう悲しくないのに、涙が止まらないよ…。

「シャルにプレゼントがあるんだ。物じゃないけどね」

「ひっく…、プレゼント？」

美晴はボクに向き合い、ゆっくりと話し出した。

「シャル。君はもう自由だ。もうデュノアに縛られなくていいんだ」

「…どういうこと？」

「デュノア社から君はスパイの任を解かれたよ」

「本当に？」

「うん。これがその念書。デュノア社社長のサインになってるでしょ？」

一枚の紙を目の前に出された。

本当だ…。確かにこれはあの人のサインだ…。ボクへの命令書もこの字でサインされてた。

これで、これでもう負い目を感じなくていいんだ！

「で、テストパイロットについては継続という形で候補生は最終的には解除の方針だよ。その先の身分はデュノア社所属のパイロットになるね。今色々取引してるから待っててね」

何をしたんだろう。何にせよ、またあそこに行かなきゃいけないんだ…。

「あ、安心してね？少しでもシャルが嫌な思いしたら、フランスそのものが大打撃をくらうように仕組んであるから。場合によっては世界地図から消えるかも」

…何だか話が物騒な感じだなぁ。

「あと、シャルに一つお知らせがあります。シャルにとっては嫌な

お知らせかもしれないけど」

何だろう。本国に送還されちゃうとかじゃないよね。

「えーと、シャルは卒業後も、ずっと僕といることになりました。向こうに送還されなくなったよ。僕とずっと一緒。悪いお知らせでしょ？」

なんて、からかうような顔して。美晴だって悪いなんて思ってないでしょ。

「何言ってるんだよ！最高の良い知らせだよ！」

「ありがとう。ずっと僕のそばにいてね」

「うん！」

これからもずっと美晴と一緒か。…ふふ。この嬉しさ抑えられないや。

「それとラウラ、簪さん。協力してくれてありがとう。上手くいったよ」

美晴は二人に頭を下げている。二人は全部知ってたの？

「うむ。役に立てて良かった」

「…良かった」

「どういうこと？美晴」

全くよくわからない。

「実はね？」

美晴は順を追って説明し始めた。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

第８２話（前書き）

シャルが悩んでいる間のミハちゃんの行動です。

第８２話

「助かります。では僕も動き出します」

時期は１１月の下旬。
電話の相手は束さん。あの時お願いしていたことの準備ができたようだ。

「美晴。何話してたの？」

「ん、シャルには関係ないよ」

シャルが聞いてきたが、内容は伝えなかった。
少し寂しそうな表情をしているが、これからすることはシャルにはばれたくない。
シャルにばれたら、間違いなく嫌がられるからだ。ボクの為にそんな危ないこと！って。

実は僕が画策しているのは、第三世代を開発する為のデータをデュノア社に渡し、それと引き換えにシャルの身分を保証させること。
束さんに頼んでいたのは、シュッツェンのデータの中から、危険度が少なく、かつ第三世代開発に役立ちそうなデータをまとめてもらうこと。

現在セカンドシフトしているシュッツェンのデータは、それ一つで世界のパワーバランスを覆しかねないから、あくまでも初期状態の、最初のファーストシフト前後の頃のデータを抽出し、秘匿すべきデ

ータを選別。その上で最低限開発に役立つ程度の情報を、交渉の材料とする。

ただ、断られて僕自体が危険にさらされる可能性があるため、いかにして乗り込むか、またバックアップの体制も整えておく必要がある。

相手は国家から開発権限を与えられている大企業。追い詰められているからこそ、下手したら…、なんて。

「あ、ごめん。聞いてなかった」

シャルの話もまともに聞いてられないくらい、僕の頭の中はどうすれば安全に事が運ぶかを考えていた。

「ラウラ。ちょっと来てくれる？」

ラウラを呼び出したのは、作戦についてアドバイスをもらうため。

「ふむ。これだと逃走経路の確保に難があるな。万が一を考えれば、もう一つ別の経路を考えておくべきだ」

「なるほど」

さすがラウラ。懸念していたことをしっかり見抜いている。

「このままだと緊急手段としてＩＳで反撃することができない。だから…、このルートが良いのではないか？」

ラウラがデュノア社の内部見取り図を指差し、逃走経路をたどっていく。

そんなものをどこからって？

あのウサギさんに出来ないことが存在するとでも思ってるの？しないからあんなことを頼めるんだ。

「しかしこれは…。美晴は一体何を考えているのだ？」

ラウラは僕を探るように訊ねてきた。

普通に見て、今の僕がしていることは何だか変だと気づくよね。どこかの建物の見取り図を出して、逃走するには、なんて聞いているんだから。

ラウラには全部を話しておくか。

「実はね…」

ラウラに計画の全てを話す。

「ふむ。なるほどな」

だからか、合点がいった。そんな顔をする。

「あ、でもシャルには内緒ね。反対しそうだからさ」

「……。まぁいいだろう」

うん、そのシャルを信じられないのか、みたいな顔をされるのは予想済みだよ。

でもね、あの子は誰かが自分のために傷つくのを何よりも嫌うんだよ。

だから、少しでも心配かけたくないんだ。下手すれば殺されかねないからね。

正直な話、相手が飲まない場合、実力行使に出るつもりだ。そのためにはこうして逃走も考えなきゃいけないんだよ。

「簪さん！」

彼女に頼むのは交渉の内容を一緒に考えてもらうこと。交渉は順番がとても大切。

ラウラとやるのは緊急回避的措置が主だから、心理戦的なことは簪さんと。ラウラだと少しずれてる答えが返ってくるからな。

「…これを、こう言うと効果的かも…。気持ち的に、追い込まれるから…」

簪さんが交渉材料から台本的なものを作ってくれた。

「ふむふむ。なるほどねぇ」

まずは心理的に揺さぶり、相手の出方を見る。そのあとは自分が有利になるように、と。

「ありがとう。検討してみるから、また相談に乗ってね？」

一度持ち帰って、自分なりに整理していく。

机の上にあるディスクを手に取り、パソコンに入れてみる。
束さんからのデータはこれか。何が書いてあるのかはよくわからないけど、どうやら大丈夫のようだ。
このあとはフランス行きの予定と、デュノア社長について調べないとな。

「ふーむ。仕事熱心、家族思い…か」

ネットで調べてみると、否定的な意見はあまり見られなかった。周りからの評価はなかなかに高いようだ。
でもシャルだってあんたの家族なんだぞ。そう評されているのなら、もう少し別の形があったんじゃないか？

「織斑先生。しばらく学園を出ます。渡航許可をください」

計画は最終段階。実際にフランスに行き、社長と直に話をする。

「…期間は」

千冬お姉ちゃんは一瞬すごく驚いた顔を見せたが、真剣な表情で聞き返してきた。

「わかりませんが、終業式には間に合わないかもしれません」

向こうについてからも動向を探るなど、少し時間が必要。

「何をしに行く」

まっすぐ見据えられた目は僕の思いの強さをはかろうとしている。

「僕の大切な人を守るために、です」

僕も目をそらさず千冬お姉ちゃんの問いに答えた。

「…そうか。許可しよう」

少し考えたあと、僕から自分の机に向きを変えて小さく呟く。

心配ばっかりかけてごめんね。

「ありがとうございます」

これで準備は出来た。いざ敵陣へ！

十二月中旬。
シャルには何も告げずに、飛行機に乗りフランスへ。
千冬お姉ちゃんには一人で行くと言ったらかなり反対されたが、束さんが私がついてるから絶対に大丈夫、と千冬お姉ちゃんを散々説得してくれてようやく折れてくれた。

『いよいよだねミハちゃん』

今でもこうして回線を通じて見ていてくれている。

「えぇ。少し緊張しますけどね」

ここ数日間はデュノア社の動きを探り、必ず社長がいる日を調査していた。
今日社長は必ずいる。
僕はデュノア社に向かった。

「社長さんに面会を願います」

大企業相応のとても広い一階ロビー。
受付の女性に話しかけた。

「アポイントメントはありますか？」

手元の紙を確認しながら僕を見る。普通に考えてこんな子供が来るはずがない。警備員もこちらを見ている。

「ありません」

突撃ですから。

「では…」

お帰りくださいと口を開こうとするのを遮り、

「息子さんのことで話がある、と伝えてください」

相手が一番反応するであろう単語を持ち出す。

「はぁ。少々お待ちください」

怪訝な顔をしながらどこかへ電話を掛け始めた。おそらく内線で関係する場所に連絡をしているんだろう。

しばらくかかりそうなので、近くの椅子に座り待っていた。

「お待たせしました。社長は面会するとのことです」

椅子で待つこと数分。秘書の人がやってきて社長室へと案内された。

「失礼します」
広い部屋で革張りの椅子に座っている一人の男性。きっとシャルのお父さんだ。
「ようこそ。私はデュノア社社長、ミシェル・デュノアです」
「初めまして。織斑美晴と言います」
まずは挨拶。警戒されてる感じはあるな。
「そちらでお話を聞きましょう」
来客用のソファーに案内される。
「で、お話というのは」
座るとすぐ本題に入ろうとしてくる。やっぱりシャルはキーのようだ。
「その前に人払いを。そちらの為でもあります」
社長は秘書の人に外に出るよう指示した。

「ではお話ししましょう。今日うかがったのは、息子さんのシャルル・デュノア君についてです」

「だそうですな」

「彼を自由にしてあげてくれませんか？」

「何のことでしょう」

とぼけるか。

「なぜ彼はあの学園に来たんでしょうねぇ」

「息子もＩＳの操縦が出来ますからな。学ばせたいという親心からですよ」

顔色一つ変えずに言う。

親心、ね。

「ふざけるな！親心だと？そんなもの本当にあんたにあるのかよ！シャルロットが！あんたの娘がどれだけ傷ついているのかあんたは考えたことがあるのかよ！」

社長の態度にカチンときて、立ち上がりかなりの大声で怒鳴った。外には聞こえてはいないだろうか。

「！」

取り乱してしまったが、わかりやすいぐらいに驚いてくれたな。

「ふぅ、失礼しました」

少し落ち着いて再び座る。

「な、なぜそれを…」

驚きのあまり少し震えている。

「僕は全て知っていますよ」

「全てだと？」

「えぇ。彼女の出生。あなたの目論み。彼女の苦しみ。全てを」

「……」

ショックで言葉も出ないか。

「もう一度お願いします。シャルル・デュノア、いえ、シャルロット・デュノアを自由にしてあげてください」

「私だってあの子を自由にしてやりたい…。しかし…」

改めてお願いすると、社長は拳を強く握り歯を食い縛った。まだ第三世代開発に苦労しているからな。

……いや、実はこの人もシャルを思っているのかもしれない。

「でしょうね。僕もただでそうしてくれと言うつもりはありませんよ。これを」

束さんが用意してくれたディスクを取り出す。

「これは…」

興味を示してきた。ただ手に取りはしない。罠なんかじゃないのに。

「あなたが、デュノア社が欲しがっているものです。娘をスパイに仕立てあげてでも欲しかったものですよ」

「つまり…」

「第三世代の開発用データです。出所は教えられませんが。どうでしょう」

篠ノ之束がシュッツェンから抽出した、なんて絶対に言えるはずがない。知られたら最後、デュノア社は国際的に狙われることになる。僕は断られて襲われたときのことを考えて、シュッツェンに手を掛けた。

「…わかった。飲もう」

少しだけ考えて社長は一つ深くうなずき答えた。最悪の事態には発展しないようだ。
これで目的達成。

「私だって本当はこんなことをしたくは無かった。しかし、仕方なかったのだ」

膝を叩きながら首を振っている。

「仕方ない…ですか。便利な言葉です。そのためにあの子は必要以上に心を痛めていた。泣きながら、居場所がほしいと叫んでいたんですよ」

「…すまない、すまないシャルロット…」

涙を流し、膝に置かれた拳が震えている。

「お話を聞かせてください」

社長が真実を語り出した。

「このデュノア社は昔は小さな下請けの会社だった。今から比べれば天と地ほどの差がある。それがここまで成長できたのは単にＩＳに関われたからだけではない。実は経営に苦しんでいたとき、結婚を条件に資金提供を申し出る人がいたのだ。その時すでにシャルロットの母親とは特別な関係になっていた。しかし、私は我が身可愛さにその話を受けてしまったのだ。今思えば愚かだったよ。私は自らの保身のために裏切ったのだ。小さな命が彼女に宿っているのを知ったのは結婚してしまってからだった」

「それがシャル…」

「そうか。そう呼びあう仲なのか。そうか…。その後彼女は一人で子供を育てると言い、私の前から姿を消した。接触することはほとんどなかった。十数年後か。あの子の母親が亡くなったと聞いた。生まれたときに認知自体はしていたが、かつて不義理をした償いとして、シャルロットを正式にデュノアに迎えよう。そう私は考えていた。しかし、妻がそれを許さなかったのだ。妻は妾の子とシャル

ロットを罵り、手を出すようになった。きっと自分のおかげで大きくなったこの会社をシャルロットに盗られる、そう思ったんだろう。私が接触することも拒まれたよ。日に日にエスカレートしていき、このままではシャルロットの命も危ないかもしれない。そう思えてきた。彼女への償いとして、なんとかシャルロットだけは守らなければならない。シャルロットは中性的だ。ＩＳ適正が高いこともわかった。女性としてならば転入には様々な審査や諸問題が関わる。しかし男性としてならば、スムーズにＩＳ学園に入れられる。レアケースだからな。これなら妻の手から逃れられる。そう考えて、妻の目をごまかすためにシャルロットにはスパイという、もっともらしい任務を与えて送り込んだのだ。辛い思いをさせてしまったようだがな…」

大粒の涙を流していた。この人がいかにシャルを大事に思っていたのかがわかった。

「先程あなたを怒鳴ったことをお詫びします。あなたはシャルのことを考えた上で行動をとったようだ」

立ち上がり頭を下げ、先程の非礼を詫びた。

「そうか…」

僕は顔を上げ、彼をまっすぐに見て言い放つ。

「しかし、僕は男としてあなたを許せません。愛する人をなぜ最後まで守り通さなかったんですか。なぜ全てを投げうってでも、愛す

る人を選ばなかったんですか。…何も背負ったことの無い子供の意見だと思うかもしれませんが、僕は何があってもシャルを選びます。彼女を、愛する人を絶対に大切にします。それが僕の覚悟です。僕の誓いです」

「そう、だな…。その通りだ。私は間違っていたんだ。…すまない」

頭を下げている。

「謝るのは僕にではなく、シャルにお願いします。彼女は、自分は誰からも愛されていない、そう考えて苦しんでいたんです。今のあなたからなら、あの子は愛を感じ取れるでしょう」

今のこの姿を見れば、必ず何かを感じてくれるはずだ。

「ありがとう…。美晴君、だったね。あの子を頼む。私と同じ過ちを繰り返さないでくれよ」

「えぇ。一生かけて幸せにします」

結婚の許可まで取り付けてしまったな。

「強い目だ。あの時の私にその目があれば良かったのかもしれないな」

僕の目を見ながら小さく息を吐いた。

「まぁそのおかげで僕とシャルは知り合えましたからね。その点は感謝ですよ。あと、聞きたいことが一つあります」

「あぁ。何でも言ってくれ、息子よ」

そんな存在にしてもらえましたか。公認ですね。

「代表候補を辞めさせる方法はありますか？」

候補生の立場のままだと卒業後にはこちらに帰ってくる必要がある。それだとまた辛い思いをするかもしれない。なら何とかして候補生を下ろして、安心して僕のそばで笑っていて欲しい。

「難しいことを聞くね。あれは政府が指定するものだ。代表も、辞退も政府が決める」

「介入できますか？」

「うーん、難しいがやってみよう。私とて娘の幸せを望んでいる。このデータの提供者が、開示のための条件がシャルロットについてだ、それが開示のための鍵である、と言っていたとすれば候補生一

人ぐらいは無視するだろう。所詮国が欲しいのは技術だからな。適正の高いパイロットは他にもいる。まずは技術というのが国の考えだ」

悩んでいるのか何度も首をかしげ、案を絞り出した。
急に考え付いたわりには結構有効そうな案だ。

「お願いします。僕があなたに渡したということについては秘匿を貫いてください。あくまでも匿名で来たことにしてください。ちなみにデータには本当にロックがかかっています。解除コードは追ってお教えします」

実際にはならなかったが、もし僕を消してディスクだけを奪われた場合でも機能しないように保険を掛けておいた。

「あと、テストパイロットだけは続けさせてあげてください。せっかく仲直りできそうなんだ。あなたとの関係を切るのは好ましくない。いつかここに帰ってきて、あなたと話す機会を奪って欲しくないんです。図々しいですが、お願いします」

もしだが、もし仲直りすることが出来たなら帰る場所があって欲しい。

「もちろんだ。全て約束しよう」

僕達は固い握手を交わした。

「私もあの子も、君に会えて変われたな。ありがとう」
僕の帰り、空港までわざわざリムジンで送ってくれた。

「いやいや。微力ですよ僕は。それにしてもあなたが受け入れてくれて良かった。反対されたら力ずくで認めさせる気でしたから」
フルバーストしてでも。

「ははは。織斑千冬の弟なら、デュノア社を吹き飛ばすなど容易いだろうな」
苦笑いをするミシェルさん。

「えぇ。それと、お渡ししたデータには少し細工がしてあります。シャルがそちらで酷い目に遭ったら発動しますので、奥さんには十分に気をつけてください。フランスを地図から消したくなかったらね」
ロックを解除したと同時に起動するトラップ。釘を刺す分には十分な位の威力。
そして今僕がしている笑顔は黒いやつ。

「…君は怖いねぇ」

やれやれといった顔か。

「愛する人を守るためには全力を尽くすのが僕の主義ですから。では」

「あぁ。元気でな」

『かっこいいねぇミハちゃん』

ミシェルさんと別れて搭乗口へ向かおうと歩いていると、束さんがからかうように言ってきた。

「やめてくださいよ、恥ずかしい。…ありがとうございました、束さん。あなたのおかげです」

『束お姉ちゃん』

「そうですね。束お姉ちゃん」

「というやり取りがあったわけ。いやぁ、戦争にならなくて良かったよ」

「…あの人がそんなことを」

シャルは今まで抱いていた父親のイメージとの違いにかなり驚いたようだ。

「うん。悪い人じゃないよ。今度話してみると良い。怖かったら僕もついていくよ」

「…うん」

まだすぐには決意しきれないようだ。

「さて、シャル。こっち向いて？」

「何？」

「心配かけたお詫び」

優しくキス。一夏達の前でやるのは少し恥ずかしいけど。

「…バカ」

口ではそう言いながら、表情は柔らかい。

「うん。こんなバカな僕だけど、シャルが大好きなんだ。だから、一緒に居てください」

「仕方ないなぁ」

涙が混じった笑顔。

「さ、パーティの続きしようよ」

「うん！」

何があっても僕は守る。愛する人を。その決意は絶対に揺るがない。

シャル、ラウラ、簪さん。大好きだよ。

第８２話（後書き）

こんな形でシャルを自由にしました。

変なところや矛盾もあるでしょう。あまりに不自然だったらご指摘ください。

第８３話

「シャル～、ミカン取ってぇ」

「はい。少しは自分で取ったら？」

「動くのやだ～。ね？ラウラ」

「うむ～。なんだか全てがどうでもよくなるのだ～」

「冬休みだからってだらけすぎだよ」

「シャル。もう一つ」

「はいはい」

こんにちは、美晴です。

今僕達が居るのは家のリビング。そしてこたつで寝ています。こたつの魔力はすごいです。全く動きたくなくなります。

シャル達が居るのには訳があります。

遡ること数時間前。

「「ただいま」」

「「お邪魔します」」

年越しは家で、という千冬お姉ちゃんの命令もとい当家の決まりにより、僕達は帰ってきました。
そしてあと二名。
シャルとラウラも今回は母国に帰らないと言うので、この際だから二人も家で過ごしてもらうことにしました。

ラウラは軍に休暇願いを出して。
シャルについては、第三世代試作機の開発真っ最中なので出来次第テストしてくれ、それまではのんびりしててていいから、と言うお父さんの指示によるものです。

簪さんも誘ったんだけど、お家の都合で今回は参加できないそうです。しょぼんとしたあの別れ際の顔が可愛かったなぁ。でも年明けにデートすることになってます。

「二人とも荷物はちゃんと持ってきた？」

「ばっちり」

「うむ」

二人はバッグを持ち上げアピール。
今回は年明けまでお泊まり。パジャマやら歯ブラシやら、その他の着替えなどを持ってきてもらいました。

「一夏と軽く掃除するから、そこで座ってテレビでも見ててね」
二人をソファーに座らせ、僕と一夏は最低限の掃除を済ませる。しっかりやるのは今度の大掃除でいいかなと判断しました。

「美晴。雑巾」

「ほいよ」

手分けしてやったから３０分ぐらいで終了。

「俺お茶入れるわ」

一夏がやかんを火にかけて茶葉を用意する。

「ねぇ一夏。今日寒いからこたつ出さない？」

季節は１２月末。かなり気温は低い。

「確か結構奥にしまったよな。手伝うよ」
火を消して、一夏と一緒にこたつの用意。
こたつがあるのは普段使っていない部屋。物置がわりになっている。
去年の冬以来だからほこりもかぶってる。

「スイッチどこやった？」
こたつのスイッチがついたコードを探している一夏。

「えーとねぇ、確かこの近辺に…」
色々なコードをまとめて入れた段ボールの中をあさっていく。

「あ。あった」
底の方に入っていたから見つからなかったんだ。

「よし。美晴は天板な」

「ほい来た」
一夏が台を持ち、僕が天板を持ってリビングへ移動していく。

「それ何なの？」
部屋のど真ん中に置かれた大きな物にシャルが首をかしげている。
「これはこたつっていって、日本の暖房器具なんだ。この中は暖かくて気持ち良いんだよ？」
「へぇー」
「あと少しで済むから、もう少し待ってろ」
一夏が天板との間に布団を噛ませて、僕がコードを繋ぐ。
「はい、出来た。さ、中に入ってみて？」
「うん。あ、暖かい」
シャルがゆっくりと中に入り座る。
「うむ。なかなかいいぞこれは」
ラウラは躊躇せず中で寝転ぶ。初めての物に対してすぐに飛び込む

とは…。

「ね？いいでしょ？」

僕もこたつに入り一休み。一夏はお茶とミカンを用意している。

「こたつに入ってお茶とミカン。これが日本の冬だよな」

お茶をみんなの前に置き、一夏もこたつに入る。

「へぇー、日本の文化かぁ」

お茶をフーフーしながらシャルは文化の違いをかみしめている。

「ふむ。ドイツにもこれがあればいいのだがな」

ラウラはすっかりお気に入りの様子。すでにこたつむりになっていた。

で、今。

僕もすっかりこたつむり。シャルはそうでもないみたい。この魔力に屈しないとは…、すごいなシャル。

一夏は今トイレに行っている。

「おい、外雪降ってるぞ！」
トイレから一夏が少し興奮ぎみに帰ってきた。
「だから？」
僕はこたつの中から顔だけ出して答える。
「いや、珍しいだろ？この辺で降るのは」
「まぁそうだね」
確かに珍しいけど、余計寒く感じるから別に嬉しくもなんともない。
「ドイツでは珍しくもなんともないがな」
ドイツ北部じゃかなりの量が降ると聞いたことがある。
「ねぇ。ネコはこたつで丸くなる、だっけ」
シャルが一夏に聞いている。
「それで合ってる。典型的なネコだな。美晴とラウラは」

寒い中外走り回らなきゃいけないならイヌじゃなくてネコでいいもん。

「シャル。ミカン」

「はいはい」

手渡さないで目の前に転がしてきた。さすがに面倒になっちゃったか。

「夕飯どうすっか」

一夏が冷蔵庫を見ながら僕に話しかけた。

「一夏作って。こたつから出たくない」

「あのなぁ、少しは働け！働かざる者食うべからず！」

一夏が僕に怒り出した。

「えぇ～？」

「大体シャルロットとラウラの前でどれだけだらけてるんだよ」
それを言われるとなぁ。
「よし。買い物三人で行ってこい」
アゴで外に出るよう指示をする。
「え？だって雪が」
降ってるなら寒すぎるでしょ。
「飯食えねぇぞ」
帰り際に買ってくればよかったなぁ。今からか…。
「仕方ない。行こうか。ラウラもこたつから出てよ」
抵抗はいつまでも通用しない。
意を決して天国から出る。
「寒いが…、美晴も行くのなら仕方ない」
渋々了承。第五匍匐で這い出して来た。
……ホラーだ。

雪はもう止んでいて、少し白くなった道を三人で歩く。
めちゃくちゃ寒い。

「寒いねー」

かじかむ手を息で温めているシャル。

「手をつなげば温かいんじゃないかな」

二人の手を取り、つなぐ。両手に花、と僕は思うが、さっきから通りすぎる人達は仲の良い綺麗な女の子達と思っているようだ。

「男らしくなりたいなぁ」

いい加減世間の評価が嫌になってくる。

「ダメだよ！美晴はそのままが良いの！スカートが似合わなくなっちゃうでしょ！」

そういうことを言う人が近くにいるからこそ、余計にそう思うんでしょ。

「他人は他人。美晴は美晴だ」

「ラウラ…」

意外なタイミングで深いことを言うんだから。でもラウラの言う通りだな。これが僕である以上、あんまり気にするべきじゃないかも知れないな。

「うん。自分を受け入れるよ」

「そうそう。だからスカートも…」

僕が頷くとシャルが嬉しそうにはしゃぐ。

「それは全く別問題」

「ちぇっ」

せっかく良い話してたのに。そんなに僕の女装が見たいかね。

買い物先は商店街。

小さい頃からよく使っていて気心が知れている。たまにおまけしてくれる気前の良さもこういう場所の魅力。

スーパーは確かにそこだけで大体が揃うけど、細かな注文を聞いてくれたり、なかなか見かけない食材を手に入れたりしてはくれない。

だから昔から商店街でお買い物。

「よっ！美晴ちゃん！久し振りだねぇ」

まずは八百屋。商店街の人達はみんな美晴ちゃんと呼んでくる。正直嫌だけど、昔からの仲であるおじさん達だから受け入れてる。

「お久し振りです。今日は玉ねぎとニンジンと、あと緑は何が良いかな」

「今日はほうれん草が良いの入ってるよ」

かごに入った新鮮そうなほうれん草を目の前に出された。

「うん。確かに美味しそうですね。じゃあそれで。あと…、トマトとレタスもください」

サラダに使おう。季節的には外れているが、ここはいつも良いやつを仕入れているから大丈夫。

「毎度！ところで美晴ちゃん」

耳元で小さな声で話すおじさん。

「後ろの二人はこれかい？」
小指を立てている。
「まぁそうです」
「二人とはやるねぇ。おじさんはうらやましいよ」
うんうんと頷くおじさん。
「実はあと一人いるんですがね。それにおばさんだって十分綺麗な人でしょ」
「いやぁあれはダメだ。もうただのババ…」
「私がなんだって？」
全て言いきる前に店の中からおばさんが現れ、おじさんの襟を掴み尋問している。
「い、いや、その」
あまりの迫力におじさんは返す言葉が無いようだ。

「ふん！美晴ちゃん。バカなおじさんでごめんね」
襟をつかんだまま、おほほと笑い謝ってくる。

「いいえ。仲が良さそうで何よりです」

「美晴ちゃんは尻に敷かれないように頑張れよ。ほれ野菜」
おじさんは余計なことを言わないようにした方が良いと思います。

「どうも。じゃあまた今度来ますから」

「毎度ありぃ」
さて、次は肉屋か。

「おじさん。こんにちは」

「おぉ美晴ちゃん。今日は何にするよ」
ハンバーグにするつもりだから挽き肉かな。

「卵と、合挽きをそうだなぁ」

五人分、使うお肉は一人頭１５０ｇずつとして、千冬お姉ちゃんと一夏は少し多めで…。

「９００ｇください」

「よし。サービスで１００ｇまけた値段で良いぞ」

「ありがとう、おじさん！」

「良いってことよ。美晴ちゃんの彼女さん達が可愛いからサービスだ。もちろん美晴ちゃんも可愛いけどね」

「いいですよ僕は」

そんなウインクされてもねぇ。シャルとラウラを褒められるのは悪い気はしないが、僕は全く嬉しくない。

「そうかい？ま、仲良くやれや」

お肉と卵を受け取る。

「はい。じゃあ」
さてあとはパン粉と…。
色々買って家へと帰る。

「美晴はいろんな人から愛されてるんだねぇ」
帰り道を歩いているとシャルが先程のやり取りを感心していた。

「単純に昔からの顔馴染みってだけさ」

「美晴の魅力がそうさせているのだろう。美晴の笑顔は全てを癒す」

「ラウラはそう思うんだ。そう言われるとちょっと照れるな」

「そんな美晴を大好きになったボク達は良い目を持ってるね」
二人は僕から荷物を取り、手をつなぐ。
こんな風に言ってもらえるなら、寒い日の買い物も行った甲斐があるな。

「ただいまぁ」
家に着き、荷物を冷蔵庫へ。

「お帰り美晴」

リビングのソファーには、仕事を終え帰宅した千冬お姉ちゃん。

「ただいま」

「先生」

「教官」

「「お世話になります」」

二人は深々と頭を下げた。

「あぁ。自分の家のように過ごしていいぞ。どうせお前達を世話するのは美晴だ」

「「はい」」

確かに千冬お姉ちゃんは家じゃ何もしてくれないもんね。僕が頑張るよ。

「美晴。今日の夕飯は何だ」
ソファーに寝転びながら顔をこちらに向けている千冬お姉ちゃん。
「千冬お姉ちゃんの好きなハンバーグにするつもりだよ」
「そうか！」
少し喜んだような表情を見せながら、テレビを見始めた。
「さて、やるか。一夏。玉ねぎ」
シャルとラウラをリビングに座らせて僕と一夏は夕飯の準備。
一夏のまな板に玉ねぎを置く。
「俺か？じゃんけんで決めないか？」
「僕買い物したもん。次は一夏が苦労しないと」
僕も一夏も玉ねぎをみじん切りにするのは嫌い。目が痛くなってしまうからだ。
理由をつけて一夏に任せたが、じゃんけんをしたところで一夏が負けるのは目に見えている。

「仕方ねぇな。えーと、ゴーグルは」
料理用具が入った棚をあさっている。
僕はその間にボールを冷やし、付け合わせの野菜の下ごしらえをしていく。

「お、あったあった。これ着けて手早く切れば問題ないだろ」
今回は二人分多く作るから、いつもよりは少し手間をかける。一夏は二個の玉ねぎをできるだけ手早く切っていく。
う、僕の方がやられてきたかも。涙が結構出てきた。

「嫌なことを人に回すと損するんだぜ？」
一夏がどや顔でこちらを見てくる。

「ふん。なんとか耐えてやるもんね」
結局一夏が早く切り終えたため、辛くなる前に次の作業に移れた。

「さてと、混ぜますか」
挽き肉を冷たくしたボールに入れ、玉ねぎとつなぎを入れてこねていく。こねるのはヘラを使って。
手を使ってこねると体温で脂が溶け、焼き上がりの際の肉汁が減っ

てしまう。
ボールを冷やすのも出来るだけ脂を流出させないための工夫。
千冬お姉ちゃんは昔から美晴エキスが欲しいから手でこねろと要求して来るのだが、美味しいものを食べてもらうために我慢してもらっている。
……エキスって何？
タネの中の空気を抜く際も手を使わず、ボールにヘラで叩きつけて抜いていく。

「一夏。焼いといて」

「了解」

焼くのは一夏に任せ、付け合わせのニンジンとほうれん草を調理。
ほうれん草は茹でるだけだが、ニンジンはハート型に切って甘く煮る。型は今まで色々やってみたが、今日は一番受けが良かったハートを選択。

「うん、こんな感じ」

甘すぎない良い感じ。

「こっちも焼き上がったぞ」

フライパンに残された脂を使ってソースを作り、あとは盛り付けだ

け。

「次はサラダだな」

「僕はスープを作るよ」

「二人とも手際良いんだねぇ」

チームワークの良さにシャルが驚いている。

「昔からやってるから」

料理に関しては必要に迫られて始めた。
千冬お姉ちゃんの料理を食べさせてもらったことがあるが、衝撃的だった。
セシリアさんほどではないのだが、毎日食べていたら必ず体を壊すことになるだろう。
天は二物も三物も与えたと世間は千冬お姉ちゃんを評しているが、僕としては何であと一つ与えてあげなかったんだ、と言いたい。それぐらい惜しいのだ。

「はい、では」

料理をテーブルに並べ終え、みんなで手を合わせる。

「「「「「いただきます」」」」」

「今日も旨いぞ」

千冬お姉ちゃんはパクパクと食べ進めている。

「うん。これは素直に美味しいね。肉汁すごいし」

「うむ。このニンジンも形が可愛いし、甘いこの味付けは好きだ」

二人も気に入ってくれたみたいだ。

「作った甲斐があるよ」

「だな。やっぱり美味しいの一言は魔法だな。誰もが笑顔になる」

毎日作るというのは正直辛いときもある。でも、美味しいと笑顔で言ってもらえるだけで苦労なんてどこかに行ってしまうものだ。

色々他愛のない話をしながら、楽しい夕食の時間は過ぎた。

「千冬お姉ちゃん。お風呂どうぞ」

夕食の片付けをしながら、千冬お姉ちゃんをお風呂へ。

「あぁ。行ってくる。美晴。前のように一緒に入るか？」

ニヤリとしながらこちらをうかがっている。

「な、何を言ってるの！早く入ってきてよ！」

「冗談だ。ふっ」

たまに冗談に聞こえないから厄介なんだよ。

着替えを持ってお風呂へ向かっていった。

「ねぇ、美晴は先生とお風呂入ってたの？」

何その危ないものを見るような目は。

「入ってたけど九歳の時までの話だよ」

最初は寂しさから一緒に入っていたが、いつからか強制に。九歳以降はなんとか抵抗して一夏と入る形に落ち着いた。

「なんだ。てっきりつい最近まで入ってたものとばっかり」

少しは信用してください。
それにこの歳になって一緒に入ったら色々まずかったりする部分があるんだよ。ほら、千冬お姉ちゃんスタイル良いし、美人だし。

「入ったら美晴はたぶん襲われるもんな」

「その通り。どうせ誰も僕のこと助けられないでしょ？」
最近は千冬お姉ちゃんの僕への接し方が激しくなっているから、入ったら確実にアウトだ。

「教官にはさすがに勝てんな」

ラウラは無理だと首を振る。

「やっぱりね」

ラウラで無理なら一夏やシャルになんて到底無理だろう。

片付けを終え、テレビを見ていた。

「あがったぞ」

お風呂から出てきた。ただ髪が濡れたまま。

「もう。ちゃんと乾かさないと風邪ひくよ？」
タオルとドライヤーでしっかりと乾かしてあげる。世話が焼けるよ。
「ありがとう。さて、お前らも入ってこい」
乾かされながら、シャル達に入るように言う。
「じゃあいただきます」
「美晴。私達とは入らないのか？」
ラウラが聞いてきたが、
「一時間正座する？」
「……すまない」
この一言で諦めた。茶道部なのに。
「いってらっしゃい」
二人はお風呂へ。

「小娘共が色気付きおって。私を差し置いて入るなど…」
そんな唸らなくても今は大丈夫だよ。
学生じゃなくなったらわからないけど。

「二人を寝かせるのは客間でいいよね」

「そうだな。それでいいだろう」

「じゃあ布団敷いてくるよ」

客間の押し入れから布団を取り出す。
ベッドの方が良いのかもしれないが、さすがに用意できないし。ラウラはどこでも寝られるだろうけど、シャルは…。
まぁ我慢してもらおう。ダメなら僕のベッドで寝てもらうか。

「お風呂ありがとうございました」

二人がネコパジャマで現れた。それ持ってきたんだ。

「あぁ。美晴が客間に布団を敷いた。布団がダメなら美晴に言えよ？」

「シャルは大丈夫？」

「うん。臨海学校の時もぐっすり眠れたから大丈夫」

確かに寝坊するぐらいだったからな。平気か。

「じゃあ僕と一夏もお風呂入ってくるから、好きなときに寝てね」

「うん。いってらっしゃい」

着替えを持ってお風呂へ。

「どうだ？シャルロット達が自分の家に泊まるっていうのは」

湯船に浸かりながら一夏が聞いてきた。

「んー、なんか変な感じ。嬉しいけど恥ずかしいみたいな。簪さんがいないのは残念だけどね」

シャンプーをシャワーで流しながら答える。

家に泊まってもらう。それ自体は嬉しいが、一夏や千冬お姉ちゃんがいてその中で、っていうのは何だか恥ずかしくてもじもじしちゃう。

湯船に浸かって、と。いいお湯だ。

「更識か。家の都合なら仕方ないだろ。それとな、あまり俺達のことは意識しなくていいぞ。二人も遠慮してるみたいだからな」

確かにあまりお願いとかしてこなかったな。いつもならこれでもかというぐらい甘えてくるのに。

「うん。出来るだけ二人がくつろげる環境を作るように頑張るよ。ところで一夏。変な気は起こしてないよね」

一夏には前科がある。

「起こさないって！あれはノリで言っただけだから！」

どうだかね…。

「疑うなよ！俺はこっちじゃない！」

右手の甲を左頬に当てる。

「じゃあこっち？」

僕は左手の甲を右頬へ。

「一緒じゃねえか」
お決まりの流れ。見事に伝わってたみたい。
「ふふっ」
「ははは っ」
「さて、あがろうか」
「だな。のぼせる前に」
脱衣所でパジャマに着替えようとカゴの中を見ると、一度だけ着たことのあるものが…。
「これは…、誰が…」
僕がここに持ってきたのは普通のパジャマだったはず。でも今僕の目の前にあるのは、あの三毛猫…。あえて寮に置いてきたのになぜここに…。
とりあえず着て、そのあと犯人探しだ。
「誰！僕のパジャマすり替えたの！」

ダッシュでリビングに戻り、自首を促す。

「美晴！」

千冬お姉ちゃんが抱きつき、頭をわしゃわしゃと撫で回す。

「可愛いぞ！美晴！見事に似合ってる！」

「はーなーれーろー！」

引き剥がそうにも力が強い。

「一夏！」

「無理！」

即答か！

「それ以上やると口聞かないよ」

「すまん」

ピタリと止め離れた。

「僕はこれを寮に置いてきたはずだけど、誰が持ってきたの？そしてすりかえたの？」

三人を見る。シャル達は当然容疑者。そして散々人の頭を撫で回したあの人も。

「えーと、持ってきたのはボク達で…」

「私がすり替えろと二人に命じた」

結果、組織的犯行…と。

「三人とも刑として今晩僕と会話することを禁止します」

「「「そんな！」」」

「控訴はさせません。僕は寝ます。おやすみ」

後ろからすすり泣く声が聞こえてきたが、構うことなく僕の部屋へ。どうせうそ泣きだし。あ、ノブが握りにくい…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0692u/

インフィニット・ストラトス-もう一人の織斑-

2012年1月10日08時45分発行